

科學の粹を集めた

チヨコレートの製造に就て

皆樣のお好きなチヨコレートは何から作るか御存じですか「學問上の名前をテオブロマカカオと云ふ樹の種子カカオビンスから作るのであります。テオブロマカカオと云ふ名前は伊太利の或る學者がつけたのでテオブロマとは希臘語で「神の糧」と云ふ意味で御座います

カカオ樹は赤道の南北に位する僅かな國々にのみ繁茂するもので主としてメキシコ中央アメリカ西印度諸島等であります。この樹の實を碎いて中から取り出されたカカオビンズは丁度日本に產するゑんどう豆位の大きさでありますこのカカオビンズを集め或る方法にて醱酵し更に太陽に依つて乾燥し嚢に納れ需要地に運ばれるのでありますカカオビンズが工場に運ばれますと弊社森永製菓鶴見工場の如きは獨特の滅菌装置によつて先づこれを消毒し粒の大小或は芥や砂を取り去り選擇分類し馥郁たる香氣を發露させる爲適當の温度に瓦斯の爐にかけてこれを炒り不消化な莢を除きこれを臼にかけて挽き潰しますと液狀態になります。これをカカオリカーと申します。これに砂糖カカオバター粉牛乳等を入れ混台機にかけて充分混ぜ更に瑞西で發明された他の特殊な機械で立派になる樣準備されてスチール・ローラにかけて摺潰して非常に滑かな練物にされた物を



高價な磨きたてられた型に詰込んで平板を拵へ冷却室を通じて冷却凝固された後錫箔で包み更に包裝紙で包み始めて皆さんの召上るミルクチヨコレートが出來上るのであります。この行程の際濕氣はチヨコレートの品質を害する虞がありますので弊社の如きは製造並に包裝作業には Air Conditioning and Washign Apparatus（空氣淨化並に濕度調整装置）の大規模なる設備により製造室内の空氣の洗滌と濕度を一定に調整し四季を通じ一定不變の優良品を製造致して居ります。この設備は我國に於て最初の計劃です。而も森永のみの持つ最大の誇であります。一方チヨコレートの營養價の高き事は今更喋々を要せざる事最近屢々行はれし無着陸飛行に飛行家が一樣にチヨコレートを携帶食料としてゐました事や先年英國のドーバー海峽横斷遠泳に見事成功したアデール孃又ロスアンゼルスから沿岸カタリナ島へ海峽横斷に成功した十七才の子供トロント市のヤング君等何れもこの不斷の愛用家でこれにより如何に價値ある食料品たるか御判りの事と思ひます。

前述の如く本品が最も衛生的なるは勿論更に年と共に技術の奥妙を究め品質に於ても日毎に改繕を重ね今や東洋一の弊社鶴見工場の大量生產と相俟ちて良品廉價の理想を着々實現致して居ります　どうぞ一層皆樣の御愛用を賜らん事を御願ひ申します。

（寫眞はココアビーズの採集狀況）

森永
ミルクチヨコレート



一個五錢　十錢



改造十月號目次

政友民政黨首後繼者問題



創作

既成政黨の分解作用

最近民政黨が床次君一派を失ひ、田中、小寺君等を失ひ、黨の節制頓に弛緩し、濱口君の統制力に危惧の念を抱かしむるに至つた。もとより濱口君は經綸の才に於て、手腕力量の點に於て超群といふほどのことはないが、風格の重さに於て信用するに足るべき政黨の首領である。この點は朝令暮改の田中君に比して格段の差を認めることはできる。ただ、一、病弱の結果、情熱、意氣を以つて黨を率ゆることの出來ぬこと、二、時代に適合する新經綸を構成して新鋭を糾合する能力の缺乏せること、三、官僚臭多くして廣く黨員外と積極的に接渉することのできぬこと、(身邊官僚出と、保守的色彩濃厚の領袖多き結果)四、思はしく軍資調達のできぬこと等が禍因をなして崩解過程に這入つたものである。一、四の問題に對しては同情すべき點も多いが、二、三に擧げた缺陷に對しては充分なる注意と配慮を以つて當面すべきである。殊に第二の問題は、濱口君が思想的に縱橫と天才がなく、今後第二の國家を成さねばならぬ青年大衆の間に漲る思潮を想察し得ぬ點にある。政友會といひ、民政黨といひたいした主張の隔離はないのであるから、いづれは近く合流してブルジョアの鐵壁たるを期せねばならぬ運命にありながら、過渡期の暫定的な落ちつきとして同じ資本黨にありながら一は都市、一は農村によりて支持さるるが如き姿にある。彼等の分解が、そして崩壞が、なにごとにあれ利權、政權を中心としてさるるのは自明であるが、しかし今回の床次君の分離、小寺、田中の脫黨などあまりにもその醜惡なる現れである。こう云ふ崩壞作用が繼續しつつ既成政黨は全然國民より怒りを買ひ、遂に埋葬さるる運命に立ち至るのだ。

鬪志乏しき民政黨にはまだこうした分解作用が持續するだろう、そして此議會が田中内閣の手で曲りなりにも突破さるれば、それだけ民政黨の禍亂は澎大して拾收がつかなくなるかも知れない。之と同じ理由で田中内閣が瓦解したらその分解作用が政友會に轉じて行く。多數國民を率ゐて行く政綱と情熱と、信用とを有たない政黨はいづれはこの轍を履まねばならぬのだ。両政黨政綱の總瓦解。この一事が何を語り、そして何を示す、次に國民大衆は何を強く求めている。

海外特稿

ゴーリキイを訪ふ

アンリ・バルビュス



彼と親しく會つたのはこれが初めてである。むろん、時折、遠方からともに協力し合ふことのなかつたでもないが、それにしても私的の接觸はいはゞ文通の上にすぎなかつた。

その彼が眞正面に立ち現はれたのだ。余らはともに手を握りしめる。それから接吻もし合つた。ここは莊園の踏段である。幾つかの眞白い圓柱が聳だつてゐる。そして、そこをなだらかな黄昏のうす光りと、大庭園の碧色の反影とが滑らかな線を交叉させてゐるのだ。

彼は暫しの間ここに滯在することになつてゐる。在りし日の貴族屋敷も今は保養の家に更へられてゐる。ここはモスクワからその道程（みちのり）、大凡四十キロメートルもあらうか。莊園はこんもりと綠したたる丘の上にさながら紅い小島のやうに浮き出てゐる。だがその、無用な程のだだつ廣さはどこもかしこも俗趣味でいつぱいで、それが舊持主のかなりの丹誠を想はせるに充分である。そして、またそのことは近代的スタイルの愛好者の氣持を到るところ如實に曝け出してゐることでよく窺はれる。

そこにゴーリキイが、サウイエト聯邦全民衆の歡迎をうけての後の

ゴーリキイが呼吸をしてゐるのだ。ここ數年この方ゴーリキイはこの國の民衆の遙か遠くに生活をつづけたのであるが、その入國當初の歡迎の催しの多種多樣さ、その大規模と統一、それら熱狂の度合はとうてい身を現場におかずして想像だにすることが出來ないことだつた。新らしい仕事のために歸國したロシア文壇巨匠の周圍（あたり）に湧き起つたあの天を衝くやうな歡呼の叫び、モスクワは今だにそれを耳にして動感してゐるのだ。モスクワの窓飾といふ窓飾に輝いてゐる彼の肖像、がつしりとした巨大な偉風、飾框高く揭げられた生彩な姿はまるで芝居の背景といつた風である。そして、繰返し繰返し人眼をひく吹流の歡迎文句は風のまにまに大道に棚びいてゐる。



（最近のゴーリキイ）

我ら二三の友人一行は連れだつてゴーリキイを訪問したのである。國立出版所長のハラトフは（この世界きつての出版所は今年になつて八千萬部の刊行物を印刷してゐる）元サウイエト聯邦の鐵道やその他種々なものを再建した人物であるが、赤銅ばんだ血色の聖書の中にでもありさうな素晴らしい顏容の持主だが、その美髯の飽くまで黑いことかのアルメニア人の漆黑の瞳の如く、加ふるに、その冠りつけのアストラカン帽と皮の上衣はいつも見うけの彼なのだ。イスヴエスチヤ紙主筆ステパノフ・スクウオルツオフはがつしりとした姿勢の正しい、擲彈兵の身長の軍隊式の詰襟をしてゐる。ぐるぐる坊主の、青い瞳と、美しい厚い口髯と、太いしかも激情的な美音の持主だ。ガニエツキーは中央執行委員會（チエッカ）の柱石である。一體これらの人物と來ては揃ひも揃つて無鐵砲な活動家であるが、その統轄してゐるところの樞要な機關もこれ亦實に驚く可き數で、ここにその一つ一つを間違ひなしに列擧することはなかなか以ての冒險であらねばならない。デミアン

ペドヌイ君は著述家として、また、人氣詩人として（然り、實にポピユレールである）いかにも物やさしい眸の、モニユマンタルな人物、まことに機智に富んだ人間だ。『彼の話を直接お解りでしたら、』とある同志がうがつた言ひ方を余にしたのである、貴下はロシヤ語の知らないのをさらに痛切に殘念がられるでせう。』それから、他のいろんな人たちは戸口の上り段のところに集つてゐたが、起つてゐる者は脚で、腰をかけてゐる者は腕をふりながら、この邊の人たち誰れものするやうに、手ぶり足ぶり、諤々としてがうがうと仰言り散らしてゐるのである。

そこにゴーリキイがゐるのだ。余の眞正面（まとも）に腰おろしてゐるゴーリキイ、余の子供らしい印象はかうだつた。『あまりに似てゐぬわい！』アレキシイ・マキシモウイッチの風貌は、少くもその場の印象では、可なり畫家の筆で手を入れられてゐるし、寫眞屋連と來ては勝手におじくつてゐる。だから、かの際限のない肖像は辛らうじて彼の面影を想ひ浮かべるにすぎないのだ。世界の隅々の紙上に撒き散らされてゐる似顏などとは似もつかぬ氣品を備へてゐる彼なのである。肱掛か、安樂椅子に凭れてゐる時の彼の痩軀は大きな折目を見せてゐる。兩肩は眼立つて突起し、小さな顏にふさふさするブロンドの髪毛にはちよんびりと胡麻白髪が交つてゐる。ゴーロワ風の口髯はブロンド色をして下に垂れのびてゐる。そこが言ひ知れぬ彼の肖像畫の特徴のあるところ、が、その他の顏面は總じて、やつれ痩こけひきしまつてゐる。顏の光澤は香ばしくないが明るく、あの澄切つた青い瞳には形容の出來ない眼孔がさへてゐる。

ゴーリキイはフランス語を話さない。フランス語の余の問ひに對してやつと『否（ノン）』と答へる位の程度だ。だが、少しはそれを讀めないわけではない。今しも彼は談話の前に『モンド』誌の（譯者註、バルビユスの主宰の下に、インターナショナルを基準とする文化雜誌）新刊にあの纖弱い神經質な手を觸れさせながら眼鏡をかけまるで燐光のやうな見事な眼で標題や、中の文句や、記事に眼を注いでゐるのだ。人の話だと、ゴーリキイはイタリア語を學んださうだが、これとても、とても、お話にならぬ程度だといふ。といふことから推せば、彼の獨自的な權威であるロシア語の領分は語學をその方だけに占有してしまつて少くもこの方面での分割を許さぬのかも知れない。

それから、彼はいろいろの問ひに答へる。ここで何をしてゐますか？　暫くの間の幕間（アントラクト）である。保養してゐるのである。資料を蒐集してゐるのである。これからウクライナを旅行し、コーカサスに到り、それから故郷のニジ・ノブゴロドに行くのだ。ペンをとるだらうか？　然り、だが今のところ本は書かうとは思つてゐない。感想と記事を書

いて見たいつもりだ。ソレントに再び歸るでせうか？　然り、その後サウエイト本國に決定的に引あげるでせうか？　さうなることかも知れない。

彼の精神作用は？　入露の第一印象は？　すつかり驚天してしまつたことである！

イタリアに最近數ケ年に亘つて、居住した彼は、本國ロシアからの豐富な通信を常にかかすことはなかつた。新聞紙に眼を透しもしたし故國のあらゆる消息にも通じてゐたのである。が、彼の知り得たことは結局知つた積りのことにすぎなかつた。知つた積りで知らなかつた證據に、彼の入國した當座は何にもかにも目新らしいこと許りだつたのである。そのくせ、彼は眼を大きくみひらくことを敢てしもしたし、何ごとに不拘ず眼をふれもしたし、周圍の誰れかれなしに質ねて見もした。彼は皆の前で、皆に話かけたのである。そこで、サウイエトの諸新聞は彼のさうした活動、ささいなことにつけ、一切の出來ごとにつけ、出來ごとの斷片につけ、一切の注意、一切の輿論につけ彼の疲勞を知らない感興をもつたそれら一切合切をていねいに記載してゐるのである。ボリス・ヴオリヌはこの祖國に歸つた觀察者に捧げるに水際立つた綿密な記事をもつてしてゐる。『彼は眼を大きくして凝視したのである。』と。

かるが故に、彼にとつてのロシア現下の特質はその大變化である。甚大にして深刻なその變化なのである。しかもそれが彼ゴーリキイにとつて不變なるべき最大なるものまでその背景ともども今やその舊態を認め得ないことのそれである。余はモスクワからここに到る道すがらの、おつとりと落つついた村落を賞讃した。かの原野を貫ぬく大堤の兩側には綠の茂みがつらなつてゐる。そこから數百メートルには葉叢をへだてて街道の兩際に、園地と木造の家屋とがつづいてゐる。それはスヰス風の農家である。側面が丸木造りの、窓の切口が木細工で飾りとられてゐるが、すべては白、青、綠、赤、に塗り立てられてゐる。さて、その色彩の潑溂なことはまるでここらの裸足女連の頭被にもまた、長靴履いた男らの前掛を思はせるのだ。ときどき教會が眼につく。その多くは北方の小屋風に塗られてゐるが、そこに烏の群が行列してゐるのを見る。その黒く切れ切れの翼は天空に點々とおされた黒手の鋏木細工のやうである。

ゴーリキイは徐々口を切つた。

——わしはあんなに知つてゐた筈の畠も烏もすつかり見ちが

と、いふ具合に、彼はこれもあんなに知り悉してゐたモスクワちがへたのだ。事實また、モスクワの影像はすつかり一新してゐるのである。ここ數年以來、荒廢の上に再建されたものの他に今では幾

學的正面と、機械の統一と壯觀を凝らした幾多の新建物が立ならんでゐる。例へば、中央郵便局の如き、トラストの家の如き、さてはモセルプロム消費組合事務所、レーニン研究所、イスヴェスチヤ社、その他の立體的の宏壯たる鐵筋と硝子張の新建築が堂々聳えてゐるのである。

だが、彼のいふところの變化とはそれ等を指すのではないのだ。彼れにしたところで、これ等だだつ廣い正面をもつた建築物を透して昔のモスクワを思ひ出さぬわけではないのだが、そこに漂ふ雰圍氣、往來する人々こそが、すなはち、生活が彼の見出し兼ねたものなのだ。つまるところ、變化が若返りといふ形を取つて現はれたのだ。そしてその言葉を彼はひきつきりなしに、入國した亡黨の情感のライト・モチフとして繰返していふのである。ゴーリキイはつづける。

——わしのロシアに入りたては、今かうしてゐるよりはもつと疲勞もし、老衰もしてゐた。ところが、その後わしの眼に觸れたところのすべてが、このわしを若返らしたのだ。

彼は新らしい建設者たちを（これも彼の常套語であるが）『若くして勇敢な顔貌』『奔放にして確信ある凝視』と呼んでゐる。彼はまた『精力と神聖にして智的な創造の空氣』に包まれてゐることを説明してくれる。

この若さが彼の上に逆しつたのだ。然り、精力は感染する。そして、時な[illegible]さこそが彼にとつて熱情となり、感激とはなつた。だから、彼にして見れば語るより聽く方がの感激が彼の言葉を遮る。なぜつて、彼は適切な言葉を思ひ出せない都合がいゝかも知れない。なぜつて、彼は適切な言葉を思ひ出せないからだ。そして、彼の手こそ最も忠實な反譯家であり、口先よりは遙かに價値ある發明家であるからである。彼にとつて彼の愛し、彼の賞讃する群衆、しかして彼に吹込むところのその呼吸は本人たち、即ちこの國の民衆がどういふ現狀にあるか、なにを爲したか判つてゐないやうに考へらる。そして、彼には彼のやうに遠方にあつた者の方が突然實現された一切のただ中に飛び込み、その征服と進展と、勞働の鐵則の眞中に身をおくことによつて、むしろ日常身をその渦中におく人たちよりも、より深刻に、より公平な刺戟をうけるものと信せられるのである。

實にかうしたロシア人及びロシアの、而してまた、人間といふものを悉知する精神と意識のレアクションこそは一概に齢の功から左右されるものではなくて、幾年かの不在がもたらすところの結果であるので、これこそ重大且つ衝動的な意義をもつものといつていい。そはまた根強い指針となるべきものである。しかるに、世にはおうおうサウイエト・ロシア入りを小さな文學的ビヂネエスか何かに心がけ、著述

の目的のため無暗やたらと材料を積み重ねてこれを珍らしく商品化せんとする輩が之なしとしないその中に、彼ゴーリキイの主眼とするところは、その國の原動力であるところの主義主張、傾向、全般の洞察力であつて、それ以外は問ふところでないのだ。されば、彼はそこにある幾多の缺點にも、また、不滿にもこれ等一切に眼をくれる。が、その眼は大人物の大問題に對する凝視である。かくして、彼は結ぶのである。『サウイエト大衆の運動こそは地上に於ける最も重大且つ壯觀な事變である』と。實にかかる評價こそは歴史的意義を有するものといはなければならない。

彼はありし日の舊人として話をすすめる。多少古くさい處なきにしもあらずだ。が、同時に新らしい人間である。かのルナチャルスキイによれば、今日のロシアに於ける最も輝ける、最も明晰な意識の持主、最良の勞働者であるところの『新人』なのである。

新人とは、とわがゴーリキイはそれの定義を下してゐる。『內的に若返つた人間なのである。その昔、人はロシア人を『ぐうたらな國籍』と呼びつけたものだが、無理からぬことでもあつた。すなはち、その場合の古諺のやうな表現は、怠惰と、先天的なあきらめ主義と、奴隷的ロシア民族を意味したものだつた。ところが、この種のタイプの人間は現に消滅してゐる。而して、新人は鬪爭的である。『智的全能力を蓄積してゐるし、吾人に何事をも[illegible]、彼れには獲得してゐるのである。かくて社會意識を獲得した[illegible]に對する個の役割をも認識するのである。彼らは頭腦を活躍させることに[illegible]よりなれども、革命遂行のため、彼らの精神も亦人後におちるものではない。革命は、、、、である。と、同時に、、、、、、である。而して、それらは思考と情熱によつて培養されるものである。切つても離れぬこの二つである。何故なら、それは潑溂たる力である。しかして、唯一つしか存在しない生活は頭と心で二分されるものではないのだ。

もとより、この二つの個人的なモビイルは大なるコントラストを現はしてゐるかも知れない。事實、しばしば理性家と感情家の間に融合することの出來ない反駁が介在する。それどころの反目か、永久にとけ難い誤解がこの二つのカテゴリーの人間のなかに存續するのである。しかるにこれ等の人間は時々同じことを考へてゐるかの風である。といふのは、彼らはともに同じ表現を用ひるからである。何から何まで一切合切解決しなければならぬ我れの時代において、大問題を上下左右究明しなければならぬ各時代において、吾人は到るところに、理性と感情の衝突の痕跡に出逢ふのであるが、この種の思想と行動の古典的に著名な衝突は、かつて、、、

の法廷の前に提出された類にすぎない。そはまた、理論と實踐と、抽象性と具體性の、更らにまた、個人主義と規律との爭鬪なのである。

然るに、さう見える實際は必ずしも兩者の鬪爭ではないのである。それは單に生活の兩面を現はしてゐるので、二つの根本的に相反した原則の前にはおかれてはないのである。しかも、もし、この二つながらのそのいづれもが互に絶對性を過信することのあるならば、そは空想に成り果てるのである。ものも分量次第である。そこにはまた秩序も必要である。何よりも先づ合理を、しかる後の感覺であり、プランであり、而して最後に熱情だ。故に、新社會を建設せんと欲せば、試意のみでも、好感のみでも、熱意のみでも、更らにまた、犠牲的精神ばかりでも之をもつてこと足れりとすることが出來ないのだ。何ごともこれを建設せんと欲せば、勞働の技術こそ肝腎なのである。だが、しかし、明確なる理論によつて組織せられざる原動力の とかく濫費にすぎざるところの情熱と雖も、目的の遂行の上においては時にとつて、有効かつ缺くべからざるものであることを知つておかねばならない。

革命の建設事業は、、、、によつて初まり、建設的努力と鬪爭によつて經驗せられるものであるが、そこには嚴正な理論と彈力性に富む現實主義を併用しなければならぬことを明快に見究めた人はいたつて少ない。しかるに、レーニンはそれの先覺の一人だつた。レーニンは理論と實踐を同體にし、抽象性を具體性のなかに注入したとさへるのである。しかるに、ゴーリキイは一時このレーニンの巨大さの前に若干よろめいた感のなきにしも非らずだつた。と、いふのは、ゴーリキイはその採るべき道を端的に見わけがつかなかつた。彼の心は一倍革命とともに燃えてた。だが、彼は革命を全的に理解しなかつたのである。革命家といはんより反逆的だつた彼は、搾取とどん底生活の痛苦と疾病を天才的にものしたことによつて、彼の怒氣を衝くの激昂のあまり時として資本主義の奴隷たちによる政權の奪取は彼をして、、、、、である如くに見做さしたのだつた。しかるに、かかる見解は十月革命の主導者たちの全然認容のなし能はざるところのものだつたのである。革命とは、これ等の人たちによれば平衡の狀態の謂ひで從來の人工的手段によつて支配されたものが、、、、、によつて、いやが應でもその常道の位置並に形體に復したことの謂ひであつた……

世に二つの眞理は存在せぬ。現實に即した眞理しかないのだ。、、に生活が即するそれの如くに。されど、吾人はその眞理に輕々しく名稱を附することを躊躇するものである。それは言葉の抽象的偶像化を恐る所以からなのだ。眞理はそれ自體生活であり、自然であるのだ。剛直な感覺は眞理を純正な推理の如く、また、科學的なペルスペクテイブとしてこれを表示してくれるのである。それは所詮到來させなければ

ならないところの二つの力の合化である。それはまた共存しなければならぬ力である許りでなく、ともに密接な關係であらねばならない。而して、この二つの必要が、内的要求によつて合致せざる限り、吾人は螺盤にさしはさまれたも同樣なのである。世のトルストイアン達は彼らのセンチメンタルな無政府主義と、御經文を以つてして、また、彼らの道德屋ぶつた苦味きつた高慢面をもつてしても、現代的混亂の堰を止め切るには今やあまりに無力であり、加ふるに、廢物扱ひにされる彼らは痛恨にふるひながら地團太を踏んだり、さては悲觀主義に陷沒したり、中にはまた現實に何ら根柢ない彼らの理想主義に具體的基調を見出さうと人間界を離れて靈光術に奉仕せんとする者すらある。かくて、これらの人たちは常に進みゆく歷史の餘白にふり落されてゆくのである。

ここで余は老アナトル・フランスの混迷を想起する（かく云ふ余も亦そのクリーズに無關心であつたわけではなかつたが）アナトル・フランスのすぐれた藝術家としての直觀は、ロシア革命の、、た輪廓を明かにしたのだつた。されど彼は彼の驚愕的賞讃の眼をみはつたそのロシアに身も心も打込むにはあまりに無氣力だつたのである。といふ彼は古代風の慣習にすつかり麻痺し、その上、彼の中世紀の間の復誦して來たらいはべ倒しの自由主義の教典に凝り固つてしまつて、彼の感受性を彼の先見の方へ突進させる根氣はすこしも留めなかつたのだつた。

しかるに、わがゴーリキイはこの段階を見事飛び越えたのだ。彼の人間としての放蕩さ、藝術家としての天分の豊かさ、寛大さ、情熱は必然彼を救つたのである。それに彼は常づね、、、、にあつた。そして彼は今レーニンの精神を到るところの生活にみなぎつてゐるのを見るのだ。

——ロシアの大衆か、、の役割を成就し、今尚はそれに終始する所以のものは、レーニンの精神を護つてゐるからである。つまるところ今やレーニンは集團の中に更生したのである。個人的に彼を知つたものは何人もそれを認め得ないだらう。

マキシム・ゴーリキイは新制度に於ける個人の役割に言及するのである。コミュニズムは個性を鵜呑みしたのではなくて、むしろ個人を樹悄さしたのだといふのだ。

——コミュニズムの敵手たちは社會主義の極致は人間を機械化するのだ、つまり、個性の無力化だと主張するのであるか、否、それどころか、ここでは一切が、、、血の氣が多い。わしの何より悦ばしく思ふのは、サウイエト國家にあつて、この國の人々が極度の個性を守什てゐることである。つまり、個人の權能が擴大されてゐるこ

る。その昔、搾取され、利用された人間たちは口々にがやがや怒號したものであるが、今日ではその皆が朗らかに、聲高々と語り合つてゐるのである。

今ロシアでは誰れも彼れも獨裁主義といふことを口にするのであるが、これに對するゴーリキイの意見は興味のあることだつた。このことはこの國の指導者たちの決議によつて、その方面のより大きな發達を目論むやうにその日程にまでなつてゐるのであるから。

ゴーリキイはサウイエトの指導者並に闘士たちのとかく自分たちの仕事の批判僻はこれを留保してゐる。尤もここでいふ留保とはその根本に觸れたものではなくて、批判の形式を指しての謂ひなんであるが……他の國には政治の分權といふものがあつて、つまり實行と批判とは同一機能に屬さない。ゴーリキイはこれらの機能が有機的に結成されてゐることに異論がない。ただ彼の認むることの出來ない點は、この國にあつての理論と實踐の評價の時にとつてアグレシイフな性質を帶ぶるそのことである。と、同時にまた、批判者の[illegible]一點張からこれ等の問題に對するあまりに露骨な個人攻撃も[illegible]るといふのである。すでにゴーリキイはソレント滯留中も、これ等の[illegible]化した討論を耳にして難じてゐた位であつた。[illegible]見は今も變りがないといふのである。もとより、彼として[illegible]險な傾向、例へば我われを動もすれば舊い世界に引づり込もうとする官僚主義とか、逆戻り主義の前には倒くまで武裝を解いてはならぬとする。けれども、彼は附け加へるのだ。「といつて、われわれは我らの缺點や誤謬やにおびけてはいけない。これもいはば研究を要すべき仕事の一部なのだから。だが、だからといつて、お互に怒號し合つたり引掻きむしつたりする法があるまい。それに第一、言葉尻の尖端は人の氣を損ねる許りでなく、人間を退化させるものなのだ。」で、彼は斯ふ云ふ風にも考へるのである。かくては、ロシアの民衆は切角の共生した社會主義的實現の眞價もこれを理解せざるにいたるべく、獨裁主義の挑梁と内部闘爭の峻烈さは一種の誹謗に終るだらう。加之、對外に於てはロシアの實現に對しては、その方法に於てもリズムに於ても野蠻人そのままの盲目さを持つてゐるのだから、決してそれにいい印象を與へるとは思へぬ。

マキシム・ゴーリキイは近く實現されるだらうところの大きな立案をもつてゐる。月刊の創刊である。題して「我等の實現」といふ。この月刊は資料本位の雜誌である。目的とするところは無智と反[illegible]論の暴露と、それからとくに全ロシアの勞働者に對して自側を[illegible]われわれの勞働のあらゆる方面を[illegible]

は、わしに取つて缺く可からざることである。缺くべからざることである！　と、いふ意味は、我われはサウイエト聯邦でなしたわれわれの事業をはつきりと充分に見てないやうた氣がするからである。それに、人間からいつても、今日モスクワを歩いてゐる人間ひとり一人は過去十年前のそれとは趣を異にしてゐるのである。

余らは話題を轉じた。新らしい藝術、つまりプロレタリア藝術を論じたのである。この問題は大きい。何しろ、これから先き全く新らしい天地にひらかれた社會生活と藝術に關するものだけ、これは大きい問題だ。余はゴーリキイに余の主宰するところの『モンド』誌の趣旨の一つについて、すなはち、この新らしい世界から新らしい人間の表現が生み出されなければならぬことを語つた。彼のいふところの『よし小さなことにたづさわつてゐるにしても、大きな事業のために従事してゐる』ところの新人について言及したのである。藝術は土そのものの中から發生するであらう。集團の中から生れるだらう。畠の土塊の上に生れるもの、都會の舗道の上に生れるもの、それらの藝術一切は何よりも先づ巨大な健康體と、剛直さと、活動力とをもつて人類の藝術的生活を甦生するであらう。この大きな息吹きの前に、いはゆるかの洗練された文學、廢頽的にして無定見、没落過程にある富者社會の流行品たるブルジョア文學はどうなるだらうか？　骨董品である。最近余はモスクワの市民の先頭に立ちて、その驛頭にハンガリ政府の監獄から脫走して来たベラ・クンを迎へたのであるが、その際、余はプロレタリア作家國際事務局の名の下に彼に敬意を表したのだつた。というのはかつてベラ・クンが政權を掌握した頃彼は下層階級から到來した藝術に對して特別な保護を與へた許りでなく、常時、恰も今日のやうに大もてだつたブルジョア文學、すなはち、あらゆる奢侈と、廢頽のあらゆる汚毒を代表するところの惡德文學に徹底的戰ひを挑んだのだつた。我らの進もうとする道は要するに、この明るい體制を表現せんとするものと人類の新らしいヴイジョンを表現せんとするものの間に於ける爭鬪を目標とすることとなのである。

ゴーリキイはこのプログラムに完全に賛成し、尚ほかつよろこびを以て寄稿することを約した。だが、かうした大がかりの事業を成就するには教育方面、知的方面、資料、及び新らしい思想の兵士を得るための並大抵ならぬ努力がこれに伴はねばならないのである。而して、これが戰ひにも、またその他にも常によき武裝を必要とするのである。彼は余に目下フランス文壇を賑はしてゐる自叙傳小說をどう思ふかとの問ひである。

――それらの作品も作家次第であるけれど、とにかく、これらの出版の續出は一面その貧弱さを示してゐるものといへる。ブル

學の陷落はわかりきつた話なので、それらの無主義、無理想は同一の古くさいことを各自各樣に、その技巧の巧拙はこれを別として、その焼直を繰返してゐるにすぎない。理想を求めやうとしても何ら未來のない、いはば過去を追つてゐる文學なのである。

——それは本當だ、とゴーリキイは答へる。だが、それらの作品も資料としての見地からは有用なわけである。何しろ教養が差迫つてゐるのだから。それにしても、新らしい國民は新作家をつくらねばならない。そして、それを創るだらう。

それには、ゴーリキイは來るべき日の戰鬪の文學を豫想するのである。

——來るべき文學はますます、、、であらねばならぬ。その文學はまづ新人の特性を採反するものであらねばならぬ。そして、それの藝術批判は常にアクチユアリテに卽したものであらねばならぬのだ。しかして、現在のプチ・ブルジョア作家、この唾棄すべき徒輩には（わしはそれらを考へるだけで腹か立つ！）斷乎として容捨の手をゆるめてはならない。彼らは小才子であり、危險人物である。この新らしいブルジョアの小人共は穴といふ穴、どんな小さな穴へでも巧みにもぐり込むのだ。彼らは從來より以上に組織化してゐる、そして、わしらの若い頃よりはずつと有害な化物なのである。

彼はいかにも藝術家らしい觸感をもつて、かの革命の組織家たち、レーニン張りの分析方法によつて先見したところのものをそのまま感得するのである。、、の屑である小作農家たちの執拗に固守する慣習と安逸の空氣、今やこの障害が文藝上のプランとなつて描き出されやうとしてゐるのである。

——で、貴下はそれと闘ふおつもりですか？

彼の返答ははつきりとしない。或は謙遜のせいかも知れんのだが。

——わしの仕事はわしらの時代の作家としての役割を果すだけのことです。わしらは今後永久に消滅するだらうところの階級の歴史に御題目を唱へ、そして、その幕を閉じたのである。わし等は畢竟清算主義の文學に從事したのである。と、思つてゐる矢先へこん度またプチ・ブルジョアと闘はねばならぬ厄介ごとが出來したのである。それにまた、今日から明日にかけてどつしりと歩むところの人間を創造しなければならぬことになつてゐる。かうした反面、新らしい屍がまちまち擴大して行くのである。しかるに、今やまたプロレタリアの大新聞紙は『勞働通信』欄を設け、讀者にそれらの寄稿を慫慂してゐるが、わづかの間に數百人の優秀な記者と作家を文壇におくつてゐるのである。ゴーリキイがいつたのである。

——今後五年後には完全にロシア文學は、これら勞働通信員諸君に

よつて立派に牛耳られることだらう。

それにつけて、彼はこれらの新來者に最上限の教化と文學的技術を吹き込むことを主張してゐるのである。言葉を文學の規則に從つておく可き個所に置かせること、インクの中にさし込む用具の使ひわけ、それらのためには鍵屋が鐵で仕事すると同じやうな見習が必要となるのである。

——わしが勞働通信者から受取る手紙のうちには（イタリアにゐた頃には毎日十通は必ずあつた）テニヲハこそちがつてはゐたが、仲々才能のあるのがあつた。さうしたのを二年も放つておくがいい。これらの手紙の署名者にはその後誤字を繰返す者が無くなつて、殘るものは彼らの才能ばかりにきつとなる。そして、かうした人たちこそは立派な作家の天分を備へてゐるのだ。

ゴーリキイは今後何をするだらうか？　目下のところはつきりしないが、彼の爲すだらうことは十年この方帝政ロシアの崩壞のあとに生活をつづけてゐるところの勞働大衆のために一身を捧げることにはきまつてゐる。

かつてレーニンはゴーリキイを紹介していつたことがあつた。『勞働者のためあれだけ盡したプロレタリア藝術の最高代表』は『來る可き日、更らにより以上の奉仕を約するにきまつてゐる。』

ファシズムと其財政策

阿部賢一

一

沒落のカイゼルは腐つても鯛だ。今春であつたか、米國の一雜誌記者を迎へてカイゼルは昔ながらの帝王神權說を高調した。鬱蒼とした森の小徑、そゞろ歩きに一記者を相手の政治漫談にすぎないが、そこらあたりの政客を慚死せしむるだけの皮肉さを持つてゐるのが面白い。

『議會政治は到るところで不信用だ。議會政治と腐敗とは一つだ。

君主は人間だから、良心を持つてゐる。が、群衆には良心がない。君主國では一人が責任を持つ。しかし議會的共和國では政治は分割されてゐるから、結局は誰の上にも責任は落ちない。

デモクラシーなんて云ふ言葉は色々の酒をつぎ込む德利のやうなもので、中味は混酒だ。飮めば人を醉はす、醉はすから、人が之を熱望する。が、あまり飮んだら必度二日醉にかゝる……』

カイゼルの愚痴と思ふてもよし、絕望の捨獨白と云つてもよいが、それにしてはあまりに穿つてゐるではないか。議會政治に幾分の未練を持つてゐる者にも納得の出來る言葉ではある。

十九世紀から今世紀の世界大戰爭に至るまで、世界はたしかにデモクラシーの甘味に陶醉した。が、醒めての後の苦悶は二日醉の故でなかつたとは云へない。世界大戰爭は曠古の大事件であるに相違ないが、大戰から戰後にかけて、謂ゆるデモクラシーがその腸を慘めにも露出して社會的苦悶にまで人類文化を窮迫せしめ、民衆をして新らしく人類更生の光明を何處にか求めんとするに至らしめたことは、最も注意すべき文化的現象であると云はなければならぬ。

善きにつけ惡きにつけ、獨裁の形式に於ける政治が、卽ち生一本の政治が、混酒の政治に對立して、今、世界の表に試錬せられつゝある。一度び獨裁政治が確立すると、一切の社會的統制の本質が、その影響を被つて變化するから、之に對する批判は大體に於て敵味方の二陣營に別れて終ふことゝなるのである。無論、嚴密に云ふならば、如何なる政治でも何人かの若くは何階級かの獨裁的性質を有しないものはなからうから、

防水設備がある譯のものではない。しかし殺戮武力が露骨に出るのと露骨に出ずに妥協本位で行くのとの間ぐらゐの開きはある。この點は政治現象の批判に當つて相當重きを置くべきところであると思ふ。

さて、獨裁政治と云つても勞農露國式のものもあれば伊太利ファシスチ流のものもある。なほスペインにギリシヤに色様々の様式があり、なほ同じ獨裁でもその狙ひ所が異るから、一つには論じられない。だが、こゝでは獨裁政治の一般について論じようと云ふのではなく、たゞ獨裁政治が一國の財政上に如何んな仕事をなして來たかを、主として伊太利ファシズムについて觀察し評論して見たいと思ふのである。

二

シニオームッソリーニは果して救世主であるのか、さては成功せる市井の一無頼漢にすぎないのか。或者は彼を神視し、或者は彼を正義の敵であるとなす。その何れの評が正しいか、それは或ひは棺を蔽ふて後もなほ定まらないかも知れない。

吾々は夏日の雷鳴を痛快がる。その痛快さに於てムッソリーニは無二の史的俳優だ。その無茶な——若くはそう見えるやり方が時として觀客を無上の劒戟氣分に誘ふ。そして觀者は往々にしてその痛快味に陶醉して批判力を失ふに至るのであつて、混酒の二日醉に較べて云へばウイスキーの若くは濁酒の魔醉にかゝるとも云へよう。

ファシズムの財政を觀るためには、之等の點を注意してかゝらめといけない。而してその[illegible]思想の核心に少しでも觸れて[illegible]必要である。但しこれ等の皆に[illegible]の人々の既によく知らるゝことゝは思ふが、前の階程としてでなか。ら許められないことを希望する。

何人も知る通り、今春五月、ムッソリーニは選擧法改正を企て、伊太利全國を一選擧區として、その候補者の指名をファシスチの黨大評議會に一任することとしようとする甚だ亂暴と云へば亂暴な議案を提出した。下院は家の子郎黨のクラブのやうなものであるので、進んで之を鵜呑みにしたが、何がさて餘りひどいので上院は反對した。その節の彼の高調子の演説の一節。

『人民主權説は眞實なりや。余は之を否定する。何となれば人民の行ふ直接間接の選擧に於ても、黨幹部及び選擧委員會が勝手の擁立をするではないか。普通選擧の如きは全く一つの誤魔化しにすぎない……』

流石の上院も驚いたらしい。結局は該案は成立したが一應は反對した。四十六票對百六十一票で否決した。その反對論の大要に上れば

『文明國の憲法は國民の生活と自由とを保障すべきに拘はらず、現政府は國民の權利たる言論の自由、出版の自由、集會の自由を禁除し、完全なるべき所有權は侵されてゐる。獨裁も時によつて不可はないが、それは短期たるべき過渡のもので、長期に亘るべきものでは決してない。更にファシスチ黨大評議會は憲法上の組織ではないのに、選擧法によつて下院議員候補者の選擇をなさしめんとするは許し難い。

理論では勝つても腕力では敵はない。遂に該案は法となつて發布せられたのである。

ムッソリーニはファシスチ黨に據つて國家に權臨してゐるが、その國家を重しとするか、ファシスチ黨を重しとするか、何れをより重しとするかは私は知らない。恐らくそこに觀念的に不可分的關係を立てゝゐると思ひもするし、又氏自身かく宣傳はしてゐるが、果して眞實に如何であるかは知らない。氏の公認書と稱せらるゝものによれば『吾人の天下となつて既に四ヶ年の歷史は、ムッソリーニとファシズムは同一根幹より生ずる二本の枝葉にして、換言すれば二體同心とも二心同體とも稱すべきものだと云ふ事を明かに示したのである。……ファシスチ黨は力の政黨である。そして一切の政黨政治を破壞し、併存して仕舞つたが、其理想とする處はファシズム即ち國家なりと云ふ事を實現し樣と努めてゐる』と見るべし。ムッソリーニとファシスチ黨は單一不可分の一體であり、ファシズムは即ち國家なりと云ふ理想を持つてゐる。三段論法の初心のものにも、ムッソリーニ即國家と云ふ連絡が出て來る。ルイ十四世の『朕は國家より』と云ふ自負と異曲同巧でないと云へようか。自稱ファシストは、各國にはびこつてゐるが、ゝの夫れも餘程聰明でなければならぬ。バーナード・ショウはボルセヴィズムを評して一つの宗教なり、と評して『教會に代ふるに第三インタナショナル、神に代へるにマルクス』と皮肉つたが、ムッソリーニは、吾々の眼には、自からを神にし、ファシズムを教會とする一個の宗教の如くにも觀えるではないか。今年八月伊太利のファシスチ學生が伊太利國境のアルプスの一峯モン・ブランをベニト・ムッソリーニ山と命名したといふ事を聞いたが、氏に對する畏敬はある點から見れば宗教化してゐるやうである。

文献によればファシズムも進化の段階を經たのである。最初は「その活動の資源を主として罷業破りに依つて、資本家から得てゐたのであるから、口には國民全體のための協調を叫んで居たけれども、結局は資本家の傍に立つて勞働階級と爭つて居たのであり、其狀態を維持する事はファシストにとつては自己の存在を維持するためには缺くべからざる方法だつたのである。」それが王侯を凌駕するの權勢を貯へてからは君王を僭し、刑法に於ても、總理大臣たる自己を國王や皇太子と同列に列べて危害者を死刑に處することを規定してゐる。彼が共和主義を革命際になつて捨てゝサヴオイ王朝の保存を決心したこと、王位を實權から全然切り離したことを思へば、彼もなか〱彈力性に富んだ漢であると云はねばならぬ。正に武裝せるマキアヴェリでもあらう。而して彼は佛國の大革命を生んだ自由思想を否認し、一切の自由を否定し、社會に異論を許さず、議會に於ては少數派の存在を極端にまで排擊する。民衆に自由なきことは無論だが、資本階級さへも自由がない。一切はファシスチ官僚の干渉强制のみらしい。併し無論社會主義的思想家は極度に壓迫せられる。さきにマテオッチ事件あり、また昨年九月にはフヰリッポ・テュラチ／伊太利[illegible]

さ英國で云へばラムゼー・マクドナルドの地位にある政治家――なさきに官憲の壓迫に堪へず、七十餘才の老軀を以てある暴風雨の夜亡命を企てゝ捕はれ、同伴の二青年と共に十ヶ月の刑に處せられた事件がある。

ファシズムのみが、聖であり眞であり善であり美であるとなす伊太利獨裁者の經濟思想、進んでは財政々策を少しく考察してみたいと思ふ。

三

國家は權力である、と云ふマキアヴェリの言葉がファシズムの信條であつて、そこに最高の倫理道理を盛らうと云ふのである。そして國家を經濟的に如何に觀察するかと云ふに、獨逸の學者ロバート・ミヶルスによればからである。『ファシズムはフリードリッヒ・リストのやうに國家を解釋して一つの生産力となし、國民を目して純粹なる經濟的發達の最良の一手段となしてゐる。それでまだファシズムに取つては國民は、マーカンチリズムの考のやうに、一定の政治的法律的領域に住んでゐる一つの經濟的有機體に外ならない……』即ち國家を以て一つの經濟的生産資本であると考へるのであつて、十九世紀獨逸學者の多くの思想に通ずるものがある。而してファシスチが國家の諸制度を變革したのもこの思想に出でたことは此處に論ずるまでもない。例へば議會を以て諸々の組合の代表者の機關にしようと云ふ、即ちファシスト・サンディカリズムの思想の如きもそれであつて、これはムッソリーニ自身が曾てソレルの下にサンディカリズムの洗禮を十分に受けたことに依るであらうとは氏の傳記者の多く傳ふるところである。

無論これ等の觀念はファシズムの進化するにつれて漸次定型のものとなつたのであらうが、國家を一つの經濟的有機體であるとなすことから、國家經濟と私人經濟との關係についても、從來多くの論者の主張とは違つた見解から觀察するようになる。即ち全部の發達のためには、一部は當然犧牲となるべきものとなすのであつて、全體の福祉はその結果として、個々人の幸福を伴ふものであり、決してその逆ではない。併しながらすべて事經濟に關しての創意はその本質から云つて唯だ個々人から發するもので、その效果がやがて全體の幸福に化するのである、と。この點に於てはムッソリーニは純粹にして單調なる一個の自由主義者を出でないのであるが、氏が財政經濟事項を處理するに當つてはその決定の標準を財政の收支や私經濟的立場に置かずに、國家的見地から割り出したとなしてゐる。それで日頃から理論と政策の一致を考へてゐた氏は、公經濟と私經濟との間の關係を、大體自由主義者の立場から之を判定した。電信業を拂下げ、保險業を私營に復歸し、燐寸官營を廢止したが如きはそれであり、又鐵道國有が一個の經營としては問題となるが、他の觀點からすれば、收支以上の國家的意味あるものとして國營として保存したのもそ

ッソリーニの國家至上主義の主張から出たものであると觀察する學者もあるのである。

國家を資本と觀じながら、然もこの種の大資本の運用效果を最大ならしむるために國家の經濟的事業の擴張を實行せず、却つて個人主義的思想に走つて私人經濟の範圍を廣くしたファシストの經濟思想は、果して何を標準としてそれ獨自の政策を立てんとするのであるか。ファシスト政府の一商官グランデの如きは、中流社會階級を主眼とすべき事を論じて『伊太利は何よりも中流階級の國民であるから、政府はこの階級を第一に考へねばならぬ。よし、その爲に國家有事の日に當つて、富者と無産者が苦しむとも……』と主張した。又英國あたりではムッソリーニ首相は中流階級の代表であるとさへ考へられたこともあつた。併しながら、一切の經濟政策、引いては財政々策は、何物よりも、資本の蓄積を基調とせることは疑を容れないところであると思ふ。この點はファシスチ政府自から表白するところである。さきに揭げたムッソリーニ公認の書に於ても「ファシスチ政府の實現した經濟財政の政策につき、時としては、資本主義の政策だと解せられたことがあるが、かくの如き判斷は本制度の初期に於て行はれた、(一)有價證券の記名式を廢止すること。(二)直接税の累進課税の廢止。(三)同一家族内の相續税廢止。(四)伊太利國内に投ぜられた外國資本に對する財産税廢止等から生じたものであらうが、實際は右の如き新法令を制度した原因は、伊太利の特殊の財政的事情及び人口増加等に鑑み、國民の貯金と資本との増加は、國家の一般的利益に有用だと

である。』

等しく獨裁政治であるが、その財政思想はファショサンディカリズム的自由主義のものであつて、勞農露國の財政々策思想とは根本的に異なるものがある。勞働者本位でないことは無論だが、さりとて資本蓄積本位ではあるが、必ずしも資本家本位だけでもなく、そこがファシズムの特色であつて、最も世話好きの、資本蓄積を目標とする官僚經濟思想とも云へる點であらうと思ふ。

四

伊太利の財政内容の批判についても、世上の批判者の中には、極端に意見が別れてゐる。今、暫らく之等の論者、主として伊太利學者の中から著しい對立にある所論を取つてみることも、事によれば、財政の眞相を知る一手段であるかも知れない。

まづ最初にファシズムを謳歌する側から觀た意見は、ルイギ・ヴィラリの最近の一文が最も簡單にして要を得てゐる。要領次の如くである。

『ファシズム治下になつてから、財政狀態は疑もなく大に利するに至つた。ムッソリーニ氏が政權を掌つた際は伊太利の財政は最も悲境の底にあつた。歲計不足は六十億リラに達して、救ふべき術もないやらであつた。その上英米に對する外債問題が未だ確定せずその儘になつ

てゐて、通貨の安定は危機の境を動搖し、巨額の流動公債の存在は之を更に惡化した。然るに今日は歳計は餘裕を生じ、國際間の公債は双方の利を以て決定し、通貨は國際的基礎の上に安定するに至り、流動公債は確定化せられ、國債額は著しく減少した。更に經濟狀態について云へば、これまた著しい進歩がある。ファシスチ政府以前は失業者は六十萬を數へ、移民は五十萬であつた。ところがファシスチが政治を取るに至つてから、失業は頓に減少し一度は十萬にまで下つた。が、其後通貨が安定に歩を進めた際、その後の形勢が常外不確であつたので、失業は本年一月には四十三萬九千にまで上つたが、一旦通貨が安定するや失業は漸次下りつゝある。次に農業は今世紀に入つてから、進歩を續けて來たが、最近その著しいものがあり、電氣事業の發達も目ざましい。特に電氣事業に投ぜられた外國資本が巨額に達しつゝあることは國際信用上に伊太利の狀態が鞏固なる地位を占めつゝある證據である。なほ其の他、賃貸賃銀は騰貴してゐる。だが、昨年に於てそれが一割乃至二割下つたのは、通貨安定の結果、物價の下落を伴ふてゐるものであるが、今日その下落の率が之に伴はないが、漸次之に近づきつゝある。……」

以上の如くにファシスチ政府の財政を禮讃する者がある他方には、又ファシスム政府の財政を一から十まで信用しない學者もある。その最も著しいのは前の藏相であり、又總理大臣であつた、ニッチであるが、氏は伊太利の豫算についてから云つてゐる。

「現今伊太利政府の豫算の眞相を確めることは不可能である、余自身は、伊太利の財政について久しい經驗を持つてゐるが、今日は之を理解することが出來ないのだ。例へば魔可不思議な命令が一九二六年六月五日に發布された。それは人爲的に豫算を創作したもので、其の後軍事費、其の他財政狀態の何れについても何等の眞相を吾々に與へないのである、又二月十八日の命令で以て、ファシスチ政府は伊太利に於ける企業家が外資輸入で得た金を總て處分してゐる……」

ニッチはまたその名著財政學原理の佛譯最近訂正版の序文に於て、現今の伊太利は中世紀的暗黑時代に遭遇せること、かゝる處では、思想に自由なく、又社會經濟に關する批判的研究は許されないから、社會の發達を望めないこと、等について悲痛なる意思を吐露してゐる。ニッチは學者として又政治家として、また思想上に於ては自由主義者として、久しく名聲を馳せてゐたのであるが、ファシズムの勃興と共に沒落し他國に亡命してゐる。從つてその日常の論點は擧げてファシズム攻撃に向けられてゐるので、伊太利の財政に對する痛評が果して當つてゐるのか如何か。果して政府は財政の眞相を蔽ふて世界を瞞着してゐるのか如何か、は吾々としては的確なる判斷を下し難いのである。特に宣傳上手の政府であり、又反對者であるから、何れの方をもウカ〳〵と信じ切れないのである。

今一つ伊太利政府が公表する財政内容の眞僞について、痛烈なる批判を下した士にマッテオッチがある。氏は社會黨書記長として、又眞率敢爲の新代議士として議會に重きをなしてゐた一青年であるが、一九二四年六月十日何者にか——ファシスチ黨々員の仕業だと一般に……せられた——攫はれローマ郊外

オッチ事件の人物であるが、殺害せられる一ヶ月半前の四月二十六日付で以て、英國のスタチスト誌に一論文を投稿した。無産派として反政府論であるばかりでなく比較的に公平なる評論であつて、ファシスチ政府が樹立せられた前後の伊太利財政の狀態を觀るに肯綮に當るものがあると思ふから、煩を厭はずしてその意味を傳へてみたいと思ふ。

『伊太利政府は財政に關して種々の統計を公表してゐる。併しそれは正確なものでなく、又批判に堪へるものでもない。

政府の云ふところによると一九二一――二二年の豫算の上の不足は七十億リラであるが、ファシスチ政府財政の第一年（一九二二――二三年）に於ては僅か三十億リラに下つた、と云つてゐる。併しながら實際は、一九二一――二二年の不足は百五十七億六十萬リラであるが、その中百二十五億リラ以上の金額は臨時の大戰費や陸海軍大藏省の購買費等で一九二二年まで支拂後れとなつて殘つてゐたものであるから、眞實の不足は三十二億五千五百萬リラを越へなかつたのである。それでファシスチ政權の前後に於ての開きは僅かに二億一千四萬リラに過ぎない。然もその時代に於ては軍費はもうないのである……。政府は伊太利の國情は漸次發達して來た、と云つてゐるが、このことは事實である。併しながら實はその傾向はファシスチ政府以前の傾向でもあつた。例へばムッソリーニ政府は國家の經費に大節減を加へたと揚言してゐるが、それは誤りの甚しいものだ。一九二一――二二年度の歳出は二百四十八億五千一百萬リラであつて、一九二二――三年度は二百十億リラ、翌一九二三――四年には二百億である。併しながら最初の一九二一――二二年度は前に示したやうに非常臨時の戰費が計上せられてゐたことを無視してはいけない。

次に軍事及び一般行政方面に（鐵道を除いて）十一萬乃至十一萬千人の人員を減少したと云ふが、それで實は舊狀に復する譯なのであつて、ムッソリーニ氏の外務及び内務省は一千人を増員した位である。たゞ鐵道省の方面に人員の縮少は大に行はれたが、それはファシストに屬しない使用者が解雇せられたにすぎない。又鐵道會計に於ての不足は一九二一――二二年度の十二億五千八百萬リラから、翌年度には七億〇六百萬リラに減じたと云ふが、しかしそれは炭價の下落によるので前任ギオリッチ内閣當時の炭價を以てせば不足は恐らく十億リラを越えたであらう。

若しそれファシスチ政府の唯一の財政上の「大改革」があつたとすれば、それは相續稅の廢止迄のことであらう。然しそれは大なる過誤をなしたにすぎない。又所得稅納稅者の増加五萬人を自負するあらばそは五分乃至一割の賃銀低下に苦しんでゐる政府方面の最下級勞働者を納稅者心得に加へたからに外ならぬ。

思ふに伊太利の財政狀態が絶えず改善に向ひつゝあることは本當の事ではあるが、それは決してファシスチ政府でなければ出來なかつた經費節減の結果であると觀ることは出來ないのである。それは單にファシスチ政府以前の政府が租稅制度の改革によつて既に豫期して來たことである。即ち戰前一九一三――一四年度の歳入は二十億五千萬リラが一九一九――二〇年度には七十四億リラに上り、更に一九二〇――二一年には百二十七億リラに上つてゐたのであつて、ファシスチ政府第一執政に際して増加はしなかつた。勿論この租稅負擔は伊太利の國情から割出して過重にすぎるのであつて、然もその其の負擔は國民の食糧品にかゝるものゝものであつてよろしくない。然し物價は騰貴し、賃銀は低下し、その生活はます〳〵窮迫してゐるのだが、外國の觀察者

には伊太利の内情極めて不利で前途暗澹であると思ふ者もあらうが、實は社會經濟上の最重問題は何等解決せられてゐない。……」

ファシスチ政府を擁護する側のものと、反對派に立つて其の政策を批判し攻撃する側のものとの間に、甚い開きがある。双方に宣傳心理や事物認識の過誤や不用意もなきを保しまい。政府の公表資料や擁護者の言論やの必要なことは云ふに及ばないが、反對者や批判者の所論却つて事の眞僞を傳ふるものもあらうから、注意しなければならぬ。

伊太利財政上の資料について云へば、ファシスチ黨が政權を掌握した一九二二年前後の事情最も不鮮明であり、異論最も喧ましい。然し政府の基礎が鞏固を加へ、種々の政治上の資料を公表するも又漏洩しても、自からを守るの確信が出來、資料も整理せられるに及んでは比較的に眞相を發表して恐れなくなる。革命直後の財政が比較的に明瞭を缺くは各國の例である、政權安定の後はその明瞭を加へることも當である。露國の財政内容の如きもその例を洩れないのである。而して伊太利財政の眞相についても同樣のことが云へるやうである。

五

伊太利の財政の憂は年毎の歳出超過であつた。若くは歳入不足であり、收支の均衡が保たれた年とては稀にもなかつた。而してこれは一八六一年伊太利統一の年から最近まで大體例外なく引續いて來た常例であつたのである。それが政府の公表するところによればファシスチ政府の下に至つてから一變して年々多少の歳計剩餘を生ずるやうになつた。その數字を揭げて參考に供しよう。（單位は百萬リラ）

年度	公表豫算			實行豫算		
	歳入	歳出	歳出超過	歳入	歳出	歳出超過
一九一八—一九	九、九一四	三三、三三七	二三、四二三	五、九二一	二五、八四六	一九、九二五
一九一九—二〇	一五、五一三	二七、八八二	一二、三六九	八、六四九	二〇、五一五	一一、八六六
一九二〇—二一	一九、二八八	三七、四九三	一八、二〇五	一一、二八一	二四、九三九	一三、六五八
一九二一—二二	二〇、四四二	三七、五九九	一七、一五七	一四、二三三	二〇、四二八	六、一九五
一九二二—二三	一九、五五六	二四、四七〇	四、九一四	一六、〇〇九	一八、〇五四	二、〇四五
一九二三—二四	二〇、一五六	六二三	一八、六六四	一八、六五四	一六、〇〇七	二、六四七
一九二四—二五	二〇、四四〇	二〇、〇二三	四一七	二〇、五六六	一八、四九〇	二、〇七六
一九二五—二六	二〇、三九〇	一八、九〇一	一、四八九	二一、四九九	一八、六九七	二、八〇二

（以上の中傍線は歳入剩餘の印である。）

以上の數計によつて觀るやうに、公表豫算では一九二四年度から、實際上の收入支出の上からは一九二三年度から、多少の歳入剩餘は表はれ出したのである。そしてファシスチ黨が政權を取つたのは一九二二年十月廿八日であつた。であるから大體に於て、一九二二——二三年度豫算を境として觀察するを至當とするであらう。すると以上の統計によつて尠なくとも次の諸點に誰しも氣付くであらうと思ふ。一は伊太利の財政は大戰後多少の起伏はあるが、大體に於ては收支の勘定が近づきつゝあつたこと之である。この事は他の點から云へば伊太利の國情もやゝ落付き、政局もやゝ安定しかけたことを示すものであつた。例へば一九二〇年頃からさしもに一時伊太利全國を事實的に席捲

した共產主義的運動も一九二一年——二二年に至つてからは餘程下火となり、ストライキの回數も員數も頓に減少を示して來てゐたのであつた。產業方面に就ては一九二一年の關稅改正が機械工業者等の保護に傾重して、織物、農產物等の生產者との間に利害の衝突を招いてゐたが、謂ゆる社會主義的たらしめられた自由思想家たるニッチやギオリッチ達の政策が一歩その政策を進めた時期であつた。またそれまで頻々として發行せられた流動公債も、もう頂を越して發行額を減少しかけた時であつた。それで時のニッチやギオリッチやの內閣やは優柔不斷の譏は大に免れないが、その財政方面に於ては少しづゝ進境を示してゐたことは掛引なしに之を認めねばなるまい。次に認めねばならぬのはファシスチ治政になつてから歲入が著しく增加し出したことである。それは新藏相デ・ステファニが年來の意見として、一國の租稅收入は、たとへ稅率は低くとも、稅法が經濟の實情に適し而して又嚴格なる方法によつて之を實施する事によつて收入を增加せしむることができると信じたのであつて、新政府財政の根本策として先づ之を實行したことにも因り、又鐵道經營の一新にも因るものと云はれてゐる。而して事實三親等內の相續稅は廢止せられ、又外資に對しては一定年限の間之を免稅したのであつた。吾々はたゞ表面の計數によつて之を判斷するだけであつて其の眞相を穿ち得ない怨はあるが、兎に角租稅收入だけでも著しい增加を示してゐるのである。而してその結果は伊太利國民の租稅負擔は累年その重さを加ふるやうになつた。例へば戰前一九一四年には國民所得二百億リラで[illegible]て二十六億リラでありその割合は一割三分に當つてゐたものが、一九二五年に於ては國民所得は一千億リラに達し租稅金收入は二百〇六億リラで、その割合は二割に上つたと云はれてゐる。卽ち戰前に比較して云へば租稅負擔の國民所得に對する比は五割增加したものと示されてゐるのである。

伊太利の有名な財政學者エイノーディ教授が一九二二年春執筆した論文によれば、世界大戰後に於ける伊太利財政の憂とするところは三點であつた。卽ち一は政黨政派の壓迫などと云ふ政治的關係から不急無用の經費が膨脹することである。卽ち政府の微力なるに原因するものである。次は紙幣の價値平價の速急な回復運動の危險と、最後には不公平な租稅負擔である。それで若し政府が、その歲出を緊縮し、リラ價値の急速な回復を戒め、更に稅制を改正して負擔の公正を計らば、伊太利の財政は容易に解決せらるるであらう。而して伊太利の英米に對する外債はその性質上、各國貸借の相殺に參加すべきものであつてかくて伊太利の財政は容易に立直るものと、同教授は樂觀主義を高調してゐたのであつた。

かやうに一九二二年ファシストのローマ進入に先んじて政治上經濟上に於ける形勢はやゝ安定に着かんとし、經濟財政の問題もやゝ目鼻がついてゐたのであつた。而してそこへ最初は無策の武力で進入して來たファシスチ黨に、以上の如くやゝ基礎工事の出來上りかけてゐた

經濟財政上の事業を促進せしむるだけの仕事を最も迅速に敢行したのである。

ファシズムは意思と實行を以て、思ふがまゝに社會とその生活を鑄造し得るものと自負し、且つ宣傳するのであるが、要するにそは最も露骨なる武力統制によるものに外ならない。而してボルシェヴィズムと違つて、最初は資本家階級の用心棒として擡頭したものであるが、一旦權力を握るや、自己の權力を自覺し、後にその思想を整理して形體を與へ、而して獨自の政策を案出するに至つたのである。而してその政策の基調とするところは謂ゆるファシスト・サンヂカリズムを經とし、資本の蓄積を緯とする一種の武力的資本主義の妥協政行であるが、その強味と弱味はまたこゝに潜むものと云はねばならない。

六

伊太利最近の財政の最も重要な問題は、國債の膨脹と、從つて租稅負擔の重きこと、而してリラの價値の不安定等であつた。これ等について一應觀察して置かうと思ふ。

世界大戰に參加した列國の財政策は、色々その國情と經濟思想によつて異なつたが、伊太利は佛蘭西以上に戰費の殆んど全部を國債によつて充當したのであつた。戰後に至つても國債は種々の原因によつて膨脹の勢を續けて來たが、ファシストが政權に上る前に於てはその勢は一先づ止まつてゐた。後を受けたファシスチ政府はこの國債整理に意を注いだ。一九二三年六月末には内債は九百五十五億リラであつて短期流動公債は三百六十四億リラと傳へられた。それが一年經つて一九二四年六月末には内債九百三十一億リラとなり、流動公債は二百三十億リラとなつた。その翌年はそれ〴〵九百〇八億リラと二百七十五億リラとなり、次年はやゝ增加して九百十三億リラと二百七十八億リラとなつた。而して概してファシスチ政府の努力は流動公債の長期公債への借換であり、この事業は各國の等しく實行した政策であるが、ファシスチ政府が募債を愼み、資本蓄積を容易ならしむる稅法その他一般の政策を取り、外資の輸入を便ならしめたことは公債の借換を容易ならしめたことは認めねばならぬ。とにかくその結果一九二二年には内債の三割九分を占めてゐた流動公債は、一九二六年度に於てはその三割の割合に下つたのである。

外債については、世界大戰に伊太利が參加してから一九一五年から一九一九年までに、物資購入の資として、英米から巨額の融通を受けた。しかも國内の政情安定を缺いたので利子も不拂のまゝに過ぎた。それで一九二五年六月に至つては、英國に對しては元利合せて五億九千四百五十萬磅、米國に對しては外債元本十六億四千七百八十萬弗であり利子は大體五分であり、合計伊太利貨幣に換算すれば約二百五十六十億リラに達した。而して獨逸の賠償問題は未だ決定せず、外債償還の見當はつかず、リラの價値變動は常であつて一般の經濟に安住かない。從つて豫算の收支に於ても

一九二五年秋に至つて伊太利の英米外債關係は決定した。これによると伊太利の米國に對する外債は二十億四千二百萬弗として、爾後六十二ヶ年間に三億六千五百萬リラの利子額を支拂ふことゝした。而して利子の支拂は五ヶ年後から始めて一分の八分の一の割合で支拂ふこととした。たゞし元本償還は直ぐ實行する事となつて最初の五ヶ年には年々五百萬弗を、次では一千二百萬弗、最後に至つて更に償還額を增加する方法によつた。米國との協定の後直ぐに英國との協定が始まつた。而してその内容の大略によれば米國との協定とは反對で、近い將來に於ての償還額を比較的に重くした。これによると一九二五――二六年度の後半期に於て二百萬磅を支拂はしめ、その後は一九二八年度までは年々四百萬磅を、一九三二年三月末日までに年々四百二十五萬磅づゝを、而してその後五十五ヶ年間は年々四百五十萬磅づゝを支拂はしめる。そして最後に一九八七――八八年度の前半期に於ては、二百二十五萬磅を支拂ふて全部を償還し盡す譯であるが、償還總額は二億七千六百七十萬磅と云ふことになつてゐる。

以上の英米外債の協定によつて、伊太利は年々輕からざる負擔を負ふことゝなるのであるが、これ等の協定の行はれた前に於て伊太利の學者の中には、或ひは外債の一時モラトリウムを論ずる者も出で、或ひは世界大戰に參加せし協同犠牲の精神に訴へて外債の廢棄を英米に要求すべしと云ふ說も出でた。併しながら戰爭が終れば伊太利は伊太利、英米は英米だ。英米方面の識者の中にも戰時外債の破棄道德を是認する士もあつたが、利害關係を有するものはもう債權者の心である。もと〳〵最初から有利な投資物件として資本を融通したに外ならない。また伊太利ファシスチ政府は國内の第三インターナショナル鎮壓を一標目としたのであるから、勞農露國に倣ふて外債（内債も）破棄を宣言することは出來ない。否、伊太利の地勢、國力は之を許さない。尤も當時藏相のデ・ステファニが言明したやうに英米外債の現在價値―大體四分二厘五毛にて還元すれば―は約四十二億五千萬金リラ（米貨にして約八億五千萬弗）であるが、他方に豫期し得べき收入がある。それは一九二四年のロンドン會議に基くところの獨逸の伊太利に對する賠償金である。その總金額を現在價値に引直して云へば約四十三億金リラ（米貨で約八億六千萬弗）である。故に理論的には獨逸の賠償金を以て伊太利の外債償還に當て得て、なほ餘りある位である。かやうに考へれば、伊太利國民は獨逸國民を搾取することによつて自からは英米資本家の搾取から免れる譯であるが、世界大戰と戰後に於ける苦難に對して何等報ひられるものがないばかりでなく、計算上から云へば、獨逸の賠償金は如何あらうと、やはり自からの膏血を割いて永く英米資本家の搾取に委さねばならぬ立場にあつた。かくて外債の協定は出來上つたのである。而して外債に對する伊太利政府の負擔は將來六十ヶ年と云ふ長期のものであるが、それだけではなしにその負擔額は年と共に增加する計畫である。因に近い將來に對する伊太利政府の英米に對する償還額――金百萬リラ單位で――を政府公表の報告

によつて示せば次の如くである。

	米國	英國	合計
一九二六―二七	二五・九	五〇・四	七六・三
一九二七―二八	〃	一〇〇・八	一二六・七
一九二八―二九	〃	〃	〃
一九二九―三〇	〃	一〇七・一	一三三・〇
一九三〇―三一	〃	〃	〃
一九三一―三二	六二・二	〃	一六九・一
一九三二　三三	〃	〃	〃
一九三三―三四	六三・七	一一三・五	一七七・二

之等の重き負擔を果すためには、リラの價値の不安定は最も恐るべき事である。そのためには米國との外債協定に先つて早く五千萬弗を更に協定日に先だつ四日前――一九二五年十一月十八日――政府は米國資本團から通貨安定にのみ使用する誓約の下に一億弗を借換した。また一九二六年には民間の水力電氣會社及び瓦斯會社等をして二千萬弗を借換せしめた。かくて一時リラの安定を得ることに努力し、兼ねて輸入を抑制し輸出を奬勵した。これ等の政策に先だつて政府は又從來ナポリ銀行及びシ、リー銀行の持つてゐた紙幣發行權を解いて、伊太利銀行に集中統一せしめ、なほ爲替銀行は一億リラ以上の資本に限るなど、手を盡し品を盡して斷行した。それ等の政府の方針によることが多かつたと思ふが、昨年十二月二十一日には金爲替本位を斷行して爲替の安定を計つた。この事は世人の耳になほ事新らしいが、これによつて伊太利の對外貿易の基礎は一先づ安定したと云つてよからう。而してこの問題はファシスチ政府が政權を奪取する以前に於て、多くの學者が十分の注意を拂ふてゐたことであつて、リラ切下による安定法は既に輿論化してゐたのであつた。その理論的方面に於ての政府の效績の有無は異見はあらうが、之を斷行した事は一つの功績と認めてよからう。これも注意深く、然も時を見て斷行して出來た事であつて、この點は謂ゆるデモクラシーの二日醉に醒めやらぬ我國の政治家群とは多少異るやうである。

ファシスチ政府は、以上記したやうな方法によつて外債償還の途を立てた。無論この外債はリラ安定の爲の借換を除いては、ファシスチ政府以外の政府者の責任に歸すべきものであることは云ふを俟たない。

その後伊太利の財政經濟は、大體に於て安定したが、なほ注意すべき諸點を含んでゐる。昨一九二七年を通じて云へば、輸入超過はこの二三年來の勢を續けて正に十二億余リラに及び、再び一九二二年頃の有樣となつてゐる。然しこれに對して貿易外の諸收入がどれ程あるか手元に資料を持たないから判らないのは遺憾である。賃銀はファシスチ政府樹立の年低下して以來高騰しつゝあるが、その勢は一般の物價の騰貴の割合に及ばない有樣である。又失業者數は增加しつゝある。例へば一九二六年には七萬九千六百乃至十八萬一千五百であつたが、一九二七年には年初から二十二萬五千に上り、中頃少しく減じたが、十月には二十三萬二千となつてゐた。

政府の財政に於ては、年によつて多少の差はあるが歳入剰餘を示してゐる。歳入剰餘を示すと云ふことは、政府にとつて非常に喜ぶべきことであり、又第三者に對しては財政の豐富にして健實なるを物語るものとも取れるであらうが、その內實について考へればかやうな樂觀的想像は許さないであらうと思ふ。何故ならばその歳出方面に於て、民衆の福利と向上が、どれだけ政府の名譽と權力維持の爲に犧牲とせられてゐるか。その點は審かに檢討せらるべきものでなくてはならぬ。また歳入方面に於て、政府の方針が資本の蓄積を第一義とする餘り資本家階級の擁護に偏いてゐるばかりでない。なほその租稅政策の方針は、他の資本主義的經濟組織の諸國に於て、謂ゆる擔稅力とか經濟的能力を査定して各人の間に公平なる負擔を企てゝゐるに比較して云へば、甚だしく非民衆的のものであると云はねばならぬ。三親等內ではあるが相續稅を免じて、生活必要品に課稅するが如きはその財政思想の一曝露ではなからうか。

かやうに觀察すれば、財政上に於ける歳入剰餘、必ずしも財政の自體の健全を示すものか如何か。また一時の剰餘が國民の萬全なる向上を犧牲としてのものでないか、如何か。これ等の問題は、今、直ぐに此處で速斷しなくとも、財政上の深い疑問として殘して置いてもよからう。

七

伊太利の財政はファシスチ黨が政權を確保してから、漸次その安定を增すに至つたことは吾々も認むべきであらうと思ふ。併しながらそれが果してファシストの手を俟たねば望み得ないものであつたか如何かは、なほ大に疑問の存するところである。ファシスチ財政策はその根本基調たる社會經濟的思想の一反映であり、而してそれは性質的には何等驚天動地のものでは決してない。而して財政內容の眞相はなほ不明なる點があるとしても、政府の公表する報告の關する限りに於て、その方針、その政策は多く前任內閣者の後塵を拜するものと云つて誤りではなく、決して伊太利財政を根本的、又は本質的に立替へたものと讃美することは出來ない。よしその責任でないにしても國債の累加によつて年々莫大の租稅負擔が伊太利國民を壓迫してゐることは既に論じたところである。然も租稅の負擔が、徵收の易きに從ひ、たゞさへ生活に苦惱せる民衆に生活必要品が消費稅として課せられてゐることは、反面に於て現代財政の社會的倫理的要求が無視せられ、第一義的に資本の蓄積を目標とせることを物語るものでなければならぬ。即ち一般民衆は、そして多衆の勞働者はその人格を認められず、その生活が顧みられず、たゞ默々として光明なくして生息するものゝ如くである。人間よりも物質を重しとする政治思想は常にかくなるのである。

かくして吾々は今一歩深く立入つて伊太利そのものを考察するの必要を感ずる。所謂何れの國であるかを問はず必ずや現代經濟組織の發

達を一様に紹介するものであるが、他面に於て各國にまた各々の特殊性を有してゐる。而してその特色に從つてその政權者を生じ且つ特殊的の政策を取らしめるものと云つてよいのである。

伊太利と我國とは、面積の比較的に狹いことや、物質が貧弱であることや、その代りに人口が多いことや、農業がなほ産業の樞要地位を占めてゐることや、生絲等の纖細産業が特に輸出品の大宗であることやその他諸々の點に於て相似る點甚だ多い。伊太利を觀るは、時として我國自らを鏡に照して見るの感さへあるのである。それでファシズム革命の發生や本義やを理解すると共に、それが何處へ行きつゝあるかを考究することは殊更に興味の深いものがある。

伊太利を云へば、吾々は直ぐに伊太利移民を連想する。それほど人間の輸出者として特色を發揮してゐるが、移民の多いその事は、伊太利國內の生活窮迫と生活不安とを傳統的に示すものと云はねばならぬ。伊太利は人口三千萬であるが海外住民は一千萬に達する。新移民の大部分は北米を指して出るか、また南米にも尠なからざる數が行つてゐる。そしてその故國への送金は年々五億リラに上ると云はれ、それによつて辛ふじて連年の輸入超過が補はれてゐる事はこゝに說くを要しない。かく伊太利國內の生活は民衆にとつて歷史的に苦しいのであるが、その民衆の教育程度はまた甚だ低いのである。而して今日に於ても伊太利全體を取つて云へば讀み書きの出來ない者は人口の三割七分を占めるのであつて、ロシヤ、スペイン及びギリシヤを除いては歐洲に於ける最大の文盲國である。文盲の民衆多きところは、權力者の資本家階級にその搾取の目的を達するに最も恰好の場所である。伊太利の農業に於て然りであつて、近世資本主義産業の發達につれて、無産無組織の民衆の搾取を、ますく甚しからしめ伊太利を擧げて困憊に沈湎せしめたことはこゝに論するまでもないのである。

かやうに、伊太利國民多數を救ふべからざる窮境に陷らしめた經濟的壓迫から果してファシスチ政府は何をなし得たのであるか。諸々の法律を改正したことはある。また謂ゆるサンディカリズム的な組織を提唱して、苟も職を有するあらゆる人間を組合に加入せしめ、強制的に一異色ある勞働組織を創設しようとしてゐることも深き注意に價すると思ふ。併しながら、階級超越を旗印とし、國家總動員的な目標を以て、その權力本能を滿足しようと云ふことから、國民多衆は果して眞の自由と生活の安定を得たか如何か。この問題は、無論、今後ファシスチ政府の治政によつて判斷しなければならぬが、今日までのところでは、國家多衆はパンを求めて蛇を得てゐないと保證できるであらうか、如何か、甚だ疑はしい。今日に於て、多くの商工業は依然として大企業家の手に握られてゐる。ファシズムはストライキを死を以て禁止し、勞働時間の延長を強行するが、賃銀は概して物價の騰貴に伴はず生活は苦しくなりつゞけるの有樣である。租税は廢止せられたが、砂糖せ[illegible]贅澤品や酒類に付

農業についても諸種の生產奬勵法や組合や金融の便宜を講じたと稱せられてゐるが、從來のやうな比較的少數地主の農地專斷や留主地主の弊風から、果して解放せられたであらうか、如何であらう。伊太利の土地分配の狀態の惡いことは有名であり、特に南部地方に於ては甚しく、更にシ、リーに於ては耕地の六分一は人口四百萬の中僅かに百七十三名によつて割取せられてゐた。そして農業制度は搾取の便宜によつて決せられて農民の窮狀は甚しく、播種期には耕地を襲ふて種子を食することさへあるので、番人を置いて之を防いだと云ふことである。而してファシスチ政府の下に於て今日まで農民の窮狀が緩和せられたと云ふことを聞かない。

伊太利國民は、その生活苦とその民族性から、久しく思想的に動搖し、眞の解放の爲に藻搔いて來た。宗教專制時代の舊い時代の事は措くとするも、その民族的苦悶、社會的不滿は醫すべくもなく、常に民を驅つて一種の焦燥に陷らしめてゐた。曾ては宿命論の囚となつた。一切は先定のもの、人間の努力精進の無用なるを信じて諦めた。また曾てはパピニの如く、人間の意思の神聖能力を說き、總ての社會的障碍を打破して物質生活の革新を主張したものにも共鳴した。又近くはクロツェーに從ふて、正とは優越力であり、その正しさはその支配能力によつて試されると云ふ說にも聞いた。

而してかやうな哲學的の立場は、やがて社會變遷の爲に武力を使用せしむる理論的基礎となるのであつて、この思想は先づ智識階級を動かし。次で民衆の頭に深く浸み込むに至つた。その例證は伊太利に於ける社會主義思想の迅速なる浸透である。社會主義思想は一八七〇頃に少數の智識階級者によつて輸入せられたものであるが、直ちにブルヂョア階級を動かして世界大戰まで運動の指導者ならしめ、やがて工業勞働者も農業勞働者も之に參加するやうになつた。而して幾年も經たない中にクレスピの如き政治家の彈壓を拒撥するだけの力を得たのであつた。社會主義や共產主義や組合主義やサンディカリズムやそれ〴〵の思想は、伊太利國民の何れかの方面に於て必ず共鳴の同衆を獲得したのであつた。而してかやうに比較的容易に伊太利民衆の間に侵潤して、之を萬能藥の如く信せしめる迄に行つた主なる理由は、民衆の生活苦の故であつた。何處にか自己の運命を開拓しようと念じた民衆の苦惱に投じたからであつた。火を待つ油紙の如きものとなつてゐたからである。而して、かくまでに救濟を求めた者の不滿は、滿さるれば安んずるであらうが、滿されざる限りは如何なる方法を以て、之を彈壓しようとしても、遂には弱きが如くしてやがては强靱なる彈壓にも打勝つであらう。

然らば思想的に迷ひに迷ふた伊太利の國民多衆は、ファシズムによつて救はれたであらうか。諸々の學說を踏み躪つて自から高しとしてゐるファシズムによつて生活は本質的に一變したか如何か。

伊太利に、國民の自由が否定せられてゐることは、ファシズム哲理の命ずるところだ。一切の自由はない。また政治に對する批判は許さ

れない。あらゆる反對派によつて、そして手段の選擧法によつて輿論は統一せられてゐるのである。反對派の新聞や通信は總て禁壓せられてゐる。世にも稀なる統一力が盲目的に横行してゐる。こうなると人間は奴隷に近いものとなるより外はない。そこへ伊太利移民の捌け口は北アメリカの移民法によつて非常に制限せられた。國内に於ては政府は二十四時間に二十五萬の精兵を動員し得べしと豪語してゐるが、それはよいとしても、その爲に國民多衆の壓迫感と物的負擔は重々なるとも輕くはならない。

かくて伊太利民衆が、何物よりも望むところの生活の安定はなほ得難いのであり、而してそれはファシスチ政府の財政策と不可分の關係にあることを看逃すことは出來ない。伊太利の史家フェレロは曾て伊太利國民の政治生活を描寫してから云つた。「三十人が三十萬家族の利益のために三千萬人を支配する國」と。つまり極めて少數人に富と權力とが集中してゐることを語つたのであるが、ファシスチ政府はかやうな政治經濟を打開したか、如何かゞ問題なのである。

ともすれば、吾々は何人かの劇的行動を禮讃するあまり、その行動の一切を是認するの危險に屢々瀕するの虞がある。首相ムッソリーニはその劇的行動に於て昔しの英雄を髣髴せしむるものがある。その文藻に於てはマキアヴェリーに遠く及ばず、その道義觀念に於てはマヂニーより遙かに低くはあるが、併し伊太利國民が生んだ最も大きい快男子の一人であることは確かだ。その疾風迅雷的な活動、溢るゝ男性の意氣、頭梁としての氣字、何物をも恐れざる豪邁と然も機に望んで變化する彈力性等、等は歴史上に於ける最も見甲斐のあるパーソナリテしであると思ふ。また彼の創想したファッシズムが一例の哲學として、またマキアヴェリ化せるサンディカリズムとして、社會思想上に注目すべきものたることは論するまでもなからう。併しながら問題はその本質である。伊太利の社會歴史の發達から云つて、ファシズムは從來に[illegible]て代つて、[illegible]斷的の、然も資本階級をも壓迫し干渉するの官僚的資本主義的統制を布いたに終るものではなからうか。そしてその強力な政治的バリケードの一角が何かの彈みに毀れたとき、更に恐るべき質的革命を伊太利の天地に招來する爲の準備をなしつゝあるものとも云へないだらうか。事は將來に屬して輕々に豫斷はできないが、自由なき國の將來は暗い。

人格としての首相ムッソリーニを禮讃し憧憬することは人の自由だ。またファシズムに共鳴し同心することも人の自由だ。政局混亂の炎の中から政權を奪取して立つた其の一黨は如何にも花々しい。またその後の外交や、殊に最近は國際聯盟を無いがしろにした植民政策などは或る點から云へば、痛快の極である。

併しながらその下積の民衆は苦しい。その官僚至上武斷主義には、行動の自由を昔ながらに欲する資本家階級の一角にも不滿があると云ふ。吾々は歴史は同じ形でそのまゝ繰返すとは思はない。勞農露國式の變革が同一經程を辿つて伊太利にも見舞ふと想像することは出來ない。併しながらファシズムが眞に伊太利國民の現實の要求と理想を滿たしつゝあるか否かを思ふとき、吾々は[illegible]し、[illegible]じて默せる伊太利民衆の動[illegible]

した思想的の水準は、おそらく世界の何れの國のそれよりも純粹のものであつたかも知れませぬ。然しこの急速なテンポを以てする思想的・意識的飛躍の蔭には、大衆的に見て不堅實な陥穽が培はれつゝあつたのであります！　大衆的な發展は到底かゝる急速な思想的發展のテンポに從ふことは出來ませんでした。大衆と指導者の一群との乖離、思想と現實運動との間隙は、既にこの間に養はれたものでありませう。

かくして日本の無產階級運動は

一、意識的に精練された指導者を作ることにある程度の成功を收めたが、大衆的に訓練された指導者を作ることに甚だ乏しかつた。

二、意識的に精練された指導者と大衆との連繫組織を完備することが出來なかつた。かゝる連繫組織としての勞働組合、農民組合すら横斷的な連繫組織としての役割を演ずる前に、ギルド意識と結合した思想的の水準に從つて縱斷的な分裂を經驗した。

三、從つてまた目的意識的な鬪爭と日常鬪爭とを連關統一することが出來なかつた。兩者はチグハグなものとして併用せられるか、或は目的意識的分子の下に大衆の分割支配を確立すると云ふことに依つて僅に統一されるに過ぎなかつた。

四、大衆的規模に於ける指導理論の缺如は、一々の事象の過大或は過小評價に基づく、絶えざる理論的の動搖を繰り返さゞるを得なかつた。(それはあまりにも目まぐるしい方向轉換の連續に現はれてゐる。)然かもギルド意識と結合した思想的水準を假託せる分割支配の確立は、その都度戰線の動搖を繰り返さゞるを得なかつたのである。階級戰線の異常に鋭敏な感受性である。

五、大衆的に補充される知識階級の精鋭は、我が運動の強味であると共に弱味でもある。常に新鮮な意識的水準を保持すると云ふ意味に於いて強味である、然し本質に於て小ブルジョア的なギルド意識を思想的水準に假託すると云ふ點に於て、大衆との背離的傾向を助長すると云ふ點に於て、戰線の感受性を助勢すると云ふ點に於て．それは弱味である。これは、一つの運動方針が徹底的に戰ひ拔かれることがないと云ふ事實に最もよく表はれてゐる。

と言つたやうな様相を示してゐるのであります。現下に於ける日本の無產階級運動の受難期は、かゝる運動自體の有つ弱點乃至は短所が、必然的にもたらした負擔をも、その肩上に擔つてゐるのではないでせうか？

三、勞働農民黨の功罪と新黨準備會の行方？

大山さん──

日本の無產階級運動の有つ長所を最もよく發揮したのも勞働農民黨であつたかも知れません、然しそれが有つ短所をまた最も如實に表明したものも勞働農民黨であつたのです。

極度に尖鋭化した目的意識の定立、犀利なる批判的立場の確立、細

粹たる机上戰術の展開。而して屢々急角度的な戰術の轉換、自慰に陶した紙上煽動、ギルド的分割支配の階級的鍍金、公式化した共同鬪爭、聲明書、アッピール、スローガン等々。

我々の記憶に新なこれ等の事象に就て具體的に說明する必要はありますまい。僅かな回想すら私の前に提出した命題の妥當さを首肯せしむるでありませうから。然し私は、その最も徵表的な一つとして、所謂暴露戰術の展開を引き合に出して見やうと思ひます。

所謂暴露戰術は、最も尖鋭化された目的意識の定立から出發した、また出發するものと强調された、現實の批判であつたのです。これは無産階級の最も鋭利な、武器として、一應既成政治の喉もとにつきつけられた匕首として、選ばれたものであります。政治的戰野に於て、あらゆる事象の『素性』を、洗いざらし大衆の前にさらけ出して見せるのが、所謂暴露戰術の要締でありました。それは解剖家のするやうに、腸の底までひつくり返して見せたものかも知れませぬ、少くともさうしたものと信じられたのであります。この戰法はたしかに傳統的な政治意識を打破する役割を演じました。然し大衆は、かゝる暴露戰術の展開に一應の納得を感じながらも、直に今一つの切り札を要求し出したのでした。『既成政治のからくりは解つた、然らば汝等の建設的の計畫は？』と。

この要求にははたと當惑したのです。餘りにも散文的な稅制々度の改革意見が、あまりにも抽象的な政治的自由の要求が、その切り札として選ばれ、遂には『勞働者農民の政府』として、忽ちその手の裏を見透かされて了つたのであります。

私はこゝで暴露戰術そのものを非議しやうとは毛頭考へませぬ、それは多かれ少なかれ全ての無産政黨が採つた戰術であつたのですから。また私は勞働農民黨以外の無産政黨が何等かの建設的な切り札を投げ出したと言ふのでは毛頭ありませぬ。他の無産政黨から投げ出された切り札も、勞働農民黨のそれ以上により建設的であつたとは言へないのですから。その限に於て問題は全無産政黨の問題と言ひ得るのです。然し私の言ひたいのは、暴露戰術の展開――大衆の不平不滿の昂揚――封建的、、、の打破――『勞働者農民の政府』と、自己催眠的に昂騰して行つた指導意識の不自然さであります。大衆の鬪爭力を過重に評價した『鬪爭』マニア・大衆の意識的水準とは沒交渉に、所謂檢束ごつこに依つてやたらにこれを驅りたてるサディズム的傾向。こゝに私は、極度にまで押しすゝめられた日本の無産階級運動の『短所』がさらけ出されてゐはしないかと考へるのであります。

大山さん――

日本の無産階級運動の特性を究明してはからずも勞働農民黨の功罪に及びました。然し、それを決定的にすることは今の私の目的ではありませぬ。過去を語るよりもより多く現在を語ることが今の私の關心事でありますから。從つてほんの僅かな素描で滿足しなければならないのです。然かもその僅かな素描から、私は、勞働農民黨の過誤の濟

算の上に、現下の受難期を克服すべき新なる發足の鍵が藏されてゐると信ずるのであります。

あなたもそれを認められてゐることは、『約めて言へば、我々は今、現在の瞬間に於て我々の進路を遮ぎつてゐる一大難關に直面して、單に我々が過去に於て如何に戰つて來たかを顧みてそれに假借なき自己批判を行ふばかりでなく、更に將來如何に戰ひ進むべきかの方針についても、今一應愼重なる再考慮を加へなければならない必要に迫られてゐるのだ』（改造七月號三頁）と言つて居られるのに徴して明かであります。然らばあなたはこの自己批判の上に、如何なる戰術的の再考慮をしたでありませうか？『それには、結局たゞ鬪爭に依る一途あるのみだ』と云ふ言葉がそれの答へとして投げ出されて居ます。また『鬪爭して解散されることの方が望ましいことだ』と云ふ言葉も發せられてゐます。

これはまことに正しい議論で、無產階級的箴言とも言ひ得るでありませう。これはまた極めて眞直ぐな議論でもあります。然しいさゝか——蛇が棒を呑むだやうな眞直ぐな議論ではないでせうか。

無產階級は解放に至るまで鬪爭がそれに科せられた運命であるにしても、如何に鬪爭するか。如何なる鬪爭の過程を履修するか、如何にして大衆を鬪爭に動員するかゞが重要なる問題ではないでせうか？それが科學的の檢討こそ、今、日本の無產階級に科せられた任務であり、その檢討の上にこそ受難期の克服が準備されるのではないでせうか？

大山さん——

外面的な運動の沈衰のみが現下の受難期の有つ意義ではありませぬ。大衆的迫力の不足が、建設的努力の缺如が、自己陶醉的な鬪爭が反動勢力の獰猛なる攻勢に會してもたらした傷ましい『現實暴露』が、その眞意義でなければなりません。從つて現下の受難期の克服は、全無產政黨の肩上にかゝる重大事であります。勞働農民黨のおかした過誤の清算の上に、新黨準備會が如何に更生するかの問題ではなく、全無產階級運動の前途のために再考慮すべき問題なのであります。この問題を全的に解決する爲には、我々は是非とも勞働農民黨に依つて尖銳化された過誤の性質を見究めなければなりません。然るにあなた始め多くの論者は、この清算を目して『鬪爭の回避』であると言ひます。

（またしても例の愛用句『鬪爭』であります——）

我々はそれを奇怪と考へざるを得ませぬ。また合同の門口に持して言ふ、『社會民主々義批判の自由』と。我々はその何の意たるかを解するに苦むのであります。『社會民主々義批判の自由を留保しない合同の提唱が我々の過誤であつた』と考へるそれが過去の清算であるならば、その清算は一面的の清算であつて、日本の無產階級運動に內包された眞實の矛盾の解決とはならないのであります。『社會民主々義批判の自由』が何故率然として揭げられねばならなかつたか、『合法的政黨』論が何故本然として『非合法的政黨論』に變じ、再轉して同じく

卒然と『合法的政黨』論に變じなければならなかつたか？――かゝる動搖の由つて來る根因こそ、日本の無産階級運動の有つ短所の尖鋭化として、より犀利な批判にさらされなければならぬものと考へます。

（これを書いてゐる時に新聞紙は新黨準備會が愈々合法的政黨の結成に邁進することを決議したと報じました。あれほど厭つた『官許』をどうするのか、それとも大衆の壓力で戰ひとるとでも言ふのであらうか。！）

以下私の展開しやうとする未熟な二三の提案は、かゝる短處に應化すべき一個の私案なのであります。

Ⅱ　現實の問題

一、大衆政黨と前衞政黨

勞働農民黨のおかした過誤の最も大きな一つとして、『大衆政黨と前衞政黨の混同』が擧げられると思ひます。

日本の無産政黨運動の短い歴史は、いくたの目まぐるしい出來事をその間に展開せしめたが、その最も著しいもの〻一つは戰線の分裂であると思ひます。この戰線の分裂は、それ自身が思想的の分裂ではなかつたにしても、いくつかの意見の對立を白日の下にさらし、尖鋭なる目的意識の定立に役立つたのであります。かくして日本の無産政黨運動は、細密なる理論的の展開をもたらし、殊に所謂現段階論に於て極めてすぐれた業績を擧げたのであります。

然し乍ら、この一見華かであつた理論鬪爭も、抽象的・一般的の現段階論から由來した前衞分子の結成に關するそれを除いては、何等具體的の戰略乃至戰術の檢討を見なかつたのであります。全ての現段階論乃至は戰術論も、それが前衞政黨の組織及び前衞分子の任務に關する限りに於ては極めて細密であつたが、一度それが大衆政黨と前衞政黨との遊離、大衆政黨の具體的戰術に至つては、著しく漠然たるを免れませんでした。かくして、宗派主義論者の如きは、大衆政黨と前衞政黨との混同を來たし、或は分裂＝結合の理論を大衆政黨に適用し、或は加速度的に昂進して行く自己催眠的陶醉にかられて、彼等の無産政黨理論を現實に生かし得るか否かの現實性の檢討を全く忘却し、唯『果敢なる鬪爭』とか、『大衆の鬪爭性』とか、『彈壓の擊破』とか、『共同鬪爭』とかと云ふ言葉を、空中に向つて、然り空中に向つて――何となれば大衆がそれ等の聲に應じて現實に鬪爭を展開したのではなかつたから――吐きつゞけたのであります。

大衆政黨と前衞政黨の問題は、何等の積極的な解決を見出すことなくして、勞働農民黨の解散となり、無産政黨運動の所謂受難期となつたのであります。今無産政黨の戰線を整備し再建すべき必然に當面して、同じ問題は尙未解決のそれとして殘つてゐるのであります。

第一次的に考慮せられるところの問題は、各無產政黨──合法的無產政黨の合同に依る一大大衆政黨の結成であります。然し乍らこの無產政黨の合同は、各無產政黨を貫くところの『合同の支柱』なしには到底不可能であります。假りに可能であるとしても、合同後の當該無產政黨を動かして行く主動力を有たぬのであります。そこで無產政黨合同の要因としても、前衛政黨と大衆政黨の連關の問題が解決せられなければなりませぬ。これが尙解決せられざる限りは、無產政黨の合同乃至統一も、未だ實行力を帶びて來ないのであります

二、『合同のための支柱』

今無產政黨の合同に對して漠然と二個の主張を區別することが出來ます。一つは無產政黨分裂以前への復歸、所謂單一無產政黨の再建への努力を含むところのそれであります。私の観るところを以てすれば、これが最も卑俗な、且つ大衆的な合同論であります。今一つは、現下の無產政黨の對立闘爭が、必然的に左右兩翼の二大對立に至るべき必然性を豫測する上に立脚した合同論であります。それは前衛分子の結成、乃至はそれが結成への好便なる前提條件を作り出すことを以て出發點とするが故に、既に無產政黨合同の『支柱』如何の問題に觸れてゐるのであります。然しそれと雖も、かゝる前衛分子の大衆的政黨に於ける行動の規準に關しては、一般的の規定以外の何物をも掲げてゐないのでありますから、尙無產政黨合同の『支柱』の問題は殘されてゐる譯であります。

大衆的政黨と前衛政黨との連關の問題は、從來は全て現段階論から論究せられました。然しこれはまた、現に解決すべき問題の見地から言ひ換へれば、現になすべき『合同のための支柱』如何？の見地からこれに近づくことが出來るのであります。かく問題を裏返して、當面の急務の見地からこれを考察するのが、現下の受難期が命ずる一要求ではないかと私は考へるのであります。

合同を考へるに當つて、私は、最も卑俗的な大衆的な合同論から出發するのが妥當であると信じます。從つて私はこゝから出發して、次の如き問を發します『各無產政黨の合同は如何にして可能であるか？』と。

無產政黨の合同論は既に一年近く持ち廻つた看板であります、然かも無產政黨の合同が尙具體的に一歩をも進めず、むしろ全無產政黨を壓する沈滯として表はれてゐるのは何故でありませうか？　一言にして蔽へば『合同の支柱』がないからであります。一指以て合同を打開する道は、それ故、かゝつてこの『支柱』の確立にあると言はなければなりませぬ。

然らば『合同のための支柱』を如何にして確立することが出來るか？

私は自分の私案として、『合法的前衛の結成』を提唱したいと考へる

のであります。

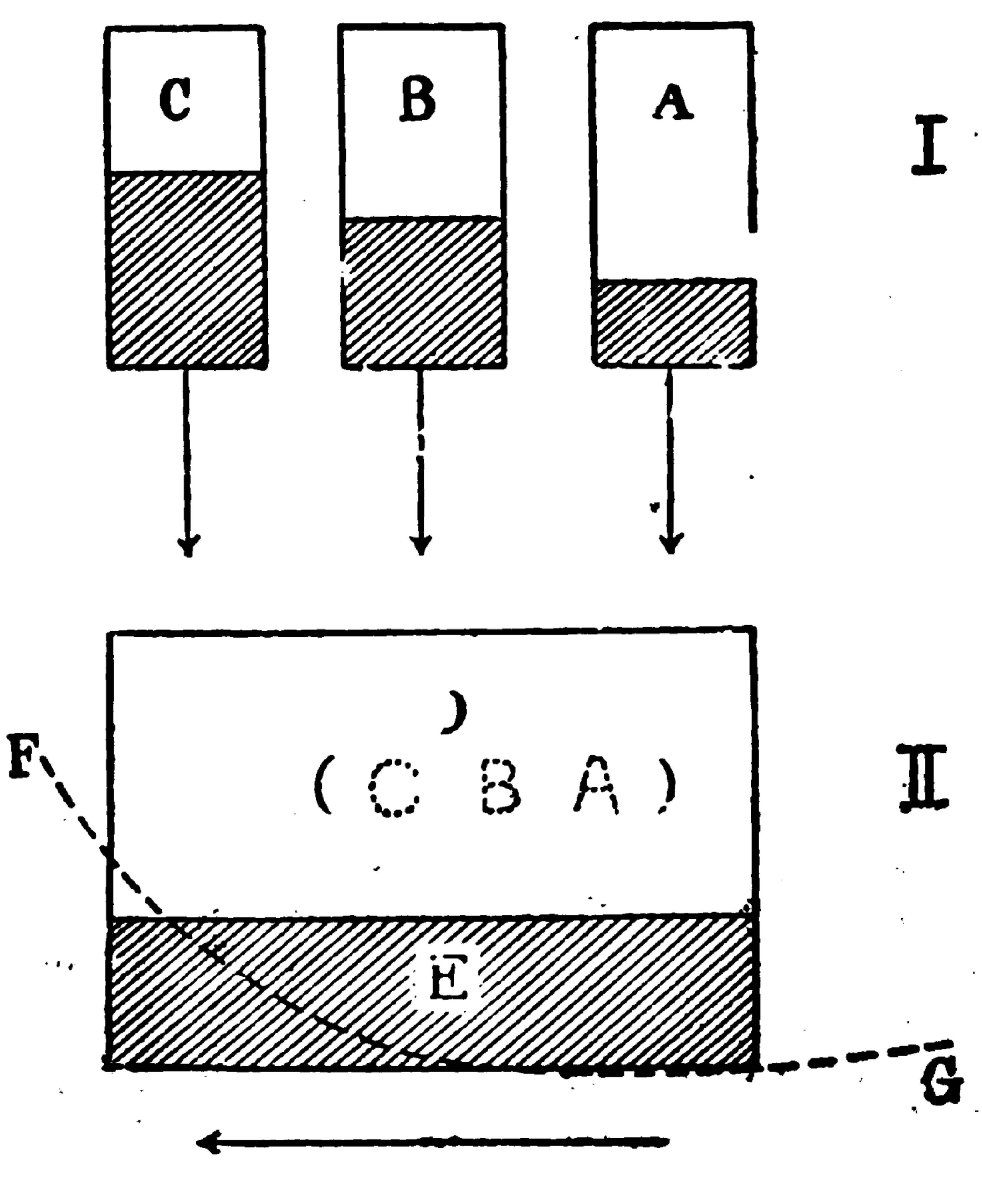
『合法的の前衛』とは何であるか？

一言にして蔽へば、合法的な現存無產政黨を動かして行く、合法的な――それは單に政治的に合法的である許りでなく黨內的にも公認的である――前衛分子の組織であります。それは合法的な無產政黨の當面の目標であるブルジョア民主々義を戰ひ取ることを主要任務とし、またその任務の遂行を限度として結成された、各無產政黨を貫く主動力であります。それは大衆政黨內に於ける一個の發案であり、それが合法的の鬪爭を果敢に展開するところの機關であります。

この合法的前衛分子の結成が、非合法的前衛分子の結成に對して如何なる關係に立つか。總じてそれが後者への發展を準備するであらうことは、すべて一般的狀勢の進展に委ぬべきことであつて、さし當つてこゝには論ずる必要を見ないのであります。唯それに依つて、大衆的政黨と前衛政黨との連關、後者への發展の道行が明かにせられ、目的意識的鬪爭と日常的鬪爭との、稍もすれば絕たれんとする橋が架せられ、然かも全無產政黨の『合同への支柱』が確立せられはせぬかと考へられるのであります。

論者は或は言ふかも知れませぬ、かくの如くば所謂前衛分子の結成そのものである、尙何を苦むで合法的前衛の結成を要せんやと。

然し所謂公式的な前衛分子の結成、それに伴つて必然的に生ずる大衆的政黨內のフラクション運動を前提しては、斷じて無產政黨の合同は不可能であります。また大衆的合法的の活動に歪曲せられざる[illegible]ませぬ。當面の任務の明確なる把握と、それがためにする強力なる鬪爭の展開を第一段階とし、それを目標とするのでなければ、合同は不可能であるし、合同の當面的な實質は失はれなければなりませぬ。この意味に於て、ブルジョア民主々義の獲得を鬪爭目標とする、對社會的には合法的な、黨內的には公認的な、各無產政黨を貫く前衛分子の結成が、現下の行き惱める無產政黨の合同を可能ならしめ、合同後の



無產政黨を生かす、一の主動力を形成すると考へるのであります。

合法的前衛の結成、並にそれが將來の發展に關する見透しは前圖の如く圖解することが出來ると考へます。

A、B、Cは各對立合法政黨を示します。これ等の對立合法政黨を貫いて結成された合法的前衛に依つて、單一無產政黨Dが結成されたとすれば、Dの內部に於けるEが合法的の前衛分子の結成であります。FGは合法・非合法を分つ限界線を示すものであり、このFGが如何なる曲線を描くかは、客觀的狀勢の進展(圖解の矢の方向がそれを示す)に負ふべきものと考へるのであります。かくしてこそ、大衆に即した前衛分子の結成、ギルド的意識から解放された前衛分子の結成が可能ではないでせうか。

三、如何にして合法的の前衛を結成することが出來るか。

『合同の支柱』としての『合法的の前衛分子の結成』がいかに望ましいものであつても、それが結局猫の首に鈴をつけるやうな議論であつては問題になりませぬ。然し私の觀るところを以てすれば、決してさうではないのであります。

かゝる合法的前衛分子結成の方法として、次の如き方策が考へられます。

一、全無產政黨を貫く政策調査會の設置。

各無產政黨の代表者は勿論のこと、無產政黨の一般的外廓からの人々も加へた、超黨派的の政策調査會の設置であります。こゝに於て無產政黨の現になすべき政策の討議決定をなし、同時にそれを統一的に遂行すべき同じく超黨派的の結合を作るのであります。かつて議會對策共同委員會に我々が政策部の設置を提唱したのは、かゝる超黨派的政策調査會實現の一端とも考へたからであります。

二、大衆的無產政治學校の開設

各無產政黨の教育機關の統一を計るため、何れの無產政黨からも超越した大衆的な無產政治學校を開設するのであります。この政治學校は各無產政黨の共同經營とし、講師、教程の決定は各黨より選ばれた經營委員會に於てこれをなし、各無產政黨はこの政治學校に代表者を入學せしむる義務を負ひ、卒業生は一定の連絡の下にそれ〴〵の黨の前衛としての活動を分擔するのであります。

三、統一的機關雜誌の發行。

單に全無產階級的を假托することなく、政策調査會に依つて練られた活動の方針に從ひ、それが政策の遂行を主眼とした、各無產黨構成分子を結合すべき統一的機關雜誌の發行であります。それは各無產政黨に於ける精鋭分子の教育機關であり、また聯絡機關なのであります。かゝる機關雜誌の編輯、その內容、編輯局の構成に對して、各無產政黨の參加することは勿論であります。

然しこれ等の方策と雖も、『猫の首に鈴』の議論に考へられるかも知れませぬ。けれども單なる公式的の『共同鬪爭』、『幹部排撃』の常套手段よりも、はるかに合同への道すぢを滑かにするものと考へられるのであります。

勿論我々は、合法的な前衞の結成と雖も、それが合同の具體的進展を表裏することを知つて居ります。從つて我々は、現實の問題として先づ可能な合同の具體の踏み出しを躊躇するものではありませぬ。唯我々は、同時に、合法的前衞の結成に依る全無產政黨の合同との餘地を殘し、然かもそれを可能ならしむるあらゆる方策を具體化することに依つて、一は以て全無產政黨の合同への道すぢを圓滑ならしむると共に、一は以て合同後の無產政黨を生かす主動力を作り出さうとするに過ぎませぬ。合法的・公認的な前衞分子の結成、かゝる結成への階梯として、均しく合法的・公認的な前述の如き方策を具現することに依つて、『合同のための支柱』が確立され、大衆的にして具體的な合同が最も速に完成せられるものと信じます。

Ⅲ　將來の展望

一、運動の波動

無產政黨運動が現實に當面してゐる守勢的地位は、無產政黨運動が發展すべき客觀的條件が缺如してゐるからではなく、むしろ逆に、急進の反政を可能ならしむる條件が、僅に、、政治に向つて[illegible]てゐるに過ぎないのであります。若し無產政黨に今一歩を押し切る力があつたならば、大勢は急角度の轉換を描くに相異ありません。今一歩を押し切る力！――これこそ現在に於て最も無產政黨に要求されてゐる要件であると考へます。

然らばこの『今一歩を押し切る力』は、どこから？どうしたならば？生れるか？私の卒然として投げ出した『現實の問題』への具體的提案は、これが解答に對する一個の示唆であります。然し私は問題を更に一般化して、日本の無產階級運動の有つ全般的の特性の中に沈潜するの必要を看取するのであります。かゝる沈潜の後に得られた赤裸々の自己批判の上にこそ、この『今一歩を押し切る力』が準備されると信じますから。かくして私はまた無產階級政治運動全體の上に運動の一定方針を樹立するの必要を看取するのであります。

一、運動を一ト先づより大衆化しなければならぬ。自由主義者に對する呼びかけをすらこの際怠ることは出來ないであらう。

二、一つの方向に採られた運動の指針はあくまで戰ひ拔かなければならぬ。運動の一波一波の波動に依つて指針の上に急角度的な轉換を來すことは嚴に避けなければならぬ。

三、ギルド的意識を打破しなければならぬ。殊に經濟戰線に於ける傳統的なそれを打破して、產業別合同に依る經濟戰線の統一を速に實現しなければならぬ。

四、暴露的　批判的の戰術と共に、建設的の努力をしなければならぬ。協同組合運動の如きもそれが具體的政策の一つとして選ばれるであらう。

五、政策を更に具體化し、民衆的なスローガンを選ばなければならぬ。現在無產政黨の掲げてゐる政策乃至スローガンは、現實的＝建設的でもなくさりとて理想的　宣傳的でもない。現實的には大衆に迫る促迫力がなく、觀念的には大衆を鼓舞する、、力を有たない。政策を更により大衆的　具體化すると共に、促迫力を有つ民衆的のスローガンを選ぶ必要があるであらう。

二、無產政黨よ、何處に行く？

既成政黨に對する民衆の一般的な不信任、既成政治の朽廢に對する民衆の怨嗟にも拘らず、何故翕然として大衆は無產政黨の傘下に集らないのでありませうか？

無產政黨の分裂抗爭がその第一の原因であります。無產政黨の運動方法の狹隘さがその第二の原因であります。而して無產政黨運動者のギルド意識がその第三の原因でありませう。無產政黨運動に對して洋々たる前途を期待せんとするものは、速にこれ等諸原因の芟除につとめなければなりませぬ。無產政黨運動當面の受難期に際して、特にこれは切實なる要求となつてゐるのであります。

無產政黨運動が伸張すべき客觀的の條件は具はつてゐます。表面にあらはれた現在の沈衰は、大なる虎躍の前の蠖屈でなければなりませぬ。無產政黨運動は尚長い暗夜をたどるでありませう、然し我々その中にあつて絶えず勝利の光明を見失はないのであります。未曾有の、、政治がもたらした受難期に面して、我等は戰はなければなりませぬ、大衆と共に、科學的に檢討された鬪爭を展開しなければなりませぬ、大衆的規模に於て。

×　×　×　×　×

大山さん——

、、、、と泥靴とに依つて蹂みにじられた第一次普選、あまりにも慘めであつた第五十五議會の無產黨議員團。——これ等無產政黨運動過去二年間の成果の上に感ずる嘆息と唾棄と憤懣の點に於て、私はおそらくあなたに讓らないでありませう。然しそれ等の事象に風馬牛の態度を持してゐる無產大衆のあることを我々は忘れてはならないのです。我々の觀念に於てこそ普通選擧は『戰ひ取つた』ものでありませう。然し大衆の意識に於ては　血と肉とを以てもそれを守らなければならないほど貴い『獲物』ではないのです。八名の無產黨議員團は、主觀的に於てこそ既成政黨の陣營からもぎとつた『堡壘』でありませう、けれども一般大衆の意識に於ては、機械的に煽り立てられた普選氣分の偶成的な『副產物』であつたのかも知れませぬ。これを我が手とし足として、戰ひ拔かせると云ふ熱意が果してそれを選んだ一般大

衆の意識に潜在したでありませうかしら？

から考へて來ますならば、全ての危機は、大衆的規模に於ける『戰ひ』の缺如にあるのではないでせうか。そしてこれからの闘爭は、『小さなものでも好い、大衆と共に、大衆的規模に於て、戰ひ取る』と云ふことから始めらるべきものではないでせうか。血と肉とを以ても守備しようとする大衆の熱情に依つて淨化せられない限り、無産政黨運動もまた前途に陷穽を豫期しなければならぬでありませう。無産黨議員の前途に私は既にかゝる杞憂を感ずるのであります。既成政治との四疊半式のとり引に依つて、白日下の猿芝居に横手を拍たうとするのがそれであります。もし大衆がこれに喝采を贈るならば、猿芝居は正に上々の首尾を以てその幕が引かれるのです。

闘爭！　たしかに闘爭に依つて。然しその闘爭が、唯ひとりよがりの、自己陶醉的な、大衆と沒交渉なものであるならば、それは唯猿芝居への道筋を早めるに過ぎないでありませう。大衆の線に立ち戻つてそこから大衆的規模に於ける闘爭を展開するのが、目下の急務ではないでせうか。

大山さん――

勞働農民黨の華かな闘爭記録を私は決して看過しやうとは思ひませぬ。また、政治の犠牲に對して、殊更に『死屍に鞭つ』底の卑怯を敢てしようとも思ひませぬ。併し勞働農民黨の解散にかまけて、それのおかした過誤まで追讃しようとする事は嚴に避けなければならぬと思ひます。（何ぞ我邦人の輕浮にして沈重の態に乏しき耶、生ける星は追剝盗賊にして、死せる星は偉人傑士なり、と言つた兆民居士の言葉を思ひあはせます）。勞働農民黨の再建が問題でなくして、無産政黨全體の新發足が問題であるのです。『血と肉とを以て堡壘を守れ』と言ふ氣運が、多かれ少なかれ舊勞農黨治下の一般大衆の中に動いてゐるとするならば、それをギルド意識に依つて指導するのでなく、無産政黨運動の新な首途への潜動力に轉換するのが指導者の忠實な任務ではないでせうか？

我々の足下を見つめ、我々の力の卑俗なる算定、一般大衆の意識の散文的な認識の上に、無産政黨運動の新展望が期待されるのではないでせうか？　蠖屈は虎躍の前程である――私はかく考へ、かく信ずるのであります。（九月七日）

この人間を見よ

室伏高信

一

ラヂオの盗み聴きをしてゐるものが幾人あるかを私は知らない。これは無論一つの犯罪といへるであらうが、恐らくは最も望ましい犯罪の一つである。少くともこれが新しいテクニックの一般化したことを示してゐる以上は。

このテクニックはもちろん甚だ簡單なものである。如何にして鑛石セットを組み立てるか、如何にしてポオタブル受信機を製作すべきか、これは小學校の普通の五六年生には易々と理解もされ、また製作もされ、そしてまたこれが措きがたき興味でさへもある。ところがこの簡單な技術を民政黨の總裁の前にもち出して見たらどうか。またこれを「おらが大臣」にやらせて見たらどうか。

自働車の例をとつて見てもよい。自働車の運轉もまた最も簡單なテクニックの一つである。十歳の少年が數日を要せずしてその理論と實際とを呑みこむであらう。ところがこれを頭腦の明晰で且つ博學の一樞密顧問官の前にもち出して見たらどうか、彼はたゞ手を振つて逃げ出すであらう。

これはもちろん才能の相違でも、趣味の相違でも、また學問の深淺でもない。われ〳〵はこゝにたゞ時代の「距離」を見る。そしてこの距離が如何なる學問や才能をもつてしても尙ほ越えがたき涯であることを知る。

二

各々のものはもとより時代の兒であるといふたヘエゲルの言葉は決して誇張でもなければ誤謬でもない。各々のものは今日は何等かの意味において時代の條件をうけてゐる。ムッソリニも時代の兒であるがレエニンもそうである。左翼小兒病も時代の兒であるが「おらが大臣」もまた時代の兒である。そこに何等かの時代的刺戟と、また從つて時代的反應の見るべきものがなかつたとしたら、彼等には存在の餘地はない。彼等が時代の悲劇的方面を代表してゐるか、若しくは喜劇役者であるか、或はまた黑潮に乘つてゐるのか、病的表象としてのみ存在してゐるのか、各々のものがその時代に對する交渉の仕方は自ら異る

ことを免れないにしても、それが時代を反應してゐるの點ではみた共通である。そして人氣が高ければ高いほど、また悪評が高ければ高いほど、その人における時代的反應がより大きいことを示してゐる。

この反應が二つの方面に區別されてゐることは既に私の述べたところで暗示されてゐる。同じく時代の兒であるにしても、その足を過去に向けてゐるものと、未來に向けてゐるものとがある。ともに現在を契機とすることには變りはないが、一つは絶えず過去の榮光のうちに現在を引きもどさんとする努力であり、他の一つはまた不斷に未來の夢にあこがれてゐる。前者は實に現在を契機として過去を實現してゐるものであり、後者は現在を契機として未來を實現してゐるものである。

この兩者はともに現實的であるの點では一致する。われ〳〵の世界においては現實的でない如何なるものも存在しないといつてい〻。未來への渇仰者を空想家とすることも間違ひであるが、ダイ・ハアヅをもつて全然過去だとすることも間違つてゐる。左翼小兒病も現實から出發してゐるが、おらが大臣もまた現實を語つてゐる。ムッソリニも現實政治家であるがレエニンも然りである。現實は實に多面的であるといつてい〻。この現實の多面性こそまた實に世界の多面性をつくりあげてゐるのである。

現實はもちろん一つである。たゞ一つである。それは無機的物理學的な死んだ客觀でもないが、あらゆる黨派主義的、分裂主義的な主觀主義でもない。われ〳〵にたゞ現實とわれ〳〵自身とこの交渉の仕方に應じて、また實にその深淺に應じて、自己における現實の實現を異にするのみである。こゝに現實の最も重大な特性があり、この特性に從つて、生活の、世界の、思想の、若しくはわれ〳〵の政治的なり、社會的なり、宗教的なり、若しくは藝術的なりの諸活動における多樣（ヴァライエティ）性が存在する。

われ〳〵は如何にしてこの現實と交渉するか。それには二つの方法がある。一つは空間的・理性的である。他の一つは時間的・直觀的である。

いふまでもなく、現實の世界においては全然空間的な存在もないが、また全然時間的な存在もない。自然科學的空間一切的世界理解の誤謬も明らかであるが、ベルグソン的純粹持續といふも單なる概念である。また實在に對するわれ〳〵の交渉の仕方からいつても、全然理性的な人もないし、全然直觀的な人もない。われ〳〵の世界は常に時間的・空間的、われ〳〵の人間は常に理性的・直觀的である。けれどもこの二つの關係が常に均等の關係において存在すると考へるならば、それは一層に大きな誤謬であり、この誤謬こそわれ〳〵の時代理解をして全然不可能ならしめるものである。

現實の世界においては、空間的・理性的が支配する場合があり、時間的・直觀的が支配する場合がある。またより多く空間的・理性的である人間もあるが、より多く時間的・直觀的である人間もある。

こゝに現實は一つである。けれども現實に對する人間の交渉の仕方は一つではない。現實に對するわれ〳〵の交渉の仕方が如何に變化しても現實そのものの變化しないことはもちろんであるが。われ〳〵の手に把握された現實は違つてゐる。この現實の相違に從つて思想の相違があり、評價の相違があり、道德の相違があり、情熱の相違があり、また黨派の相違がある。また從つて同じく「時代の兒」であるにしてもイヴもあればリリットもある。ビスマアクもあればベエベルもある。ボオルドキンもあればマクドオナルドもある。張作霖もあれば蔣介石もある。ムッソリニもあればレエニンもある。時代の兒は截然として二つの陣營に分れてゐるのである。

三

同一の時代がいつでも二つ分裂してゐると私はいはない。新と舊と、保守的と自由的と、革命と反革命と、動と反動とが、如何なる時代にも存在するかのやうに考へることは、近代人の慢性的信仰である。社會主義者が唯物史觀を唯一つの歷史觀だと信んじきつてゐるやうに、人々は、この同一時代の内部的分裂が、いつでも不可避だと信じきつてゐる。けれどもこれは人々が既に近代狂となりきつてゐることを暴露してゐるだけである。彼等は悠久な人類の歷史の間にあつて、近代文明が單なる一挿話にしか過ぎないことを忘れたのである。この近代狂こそはわれ〳〵の時代の痼疾である。この病は殆んど救ひがたくさへ見えてゐる。進歩主義も保守主義も、[illegible]家も社會主義者も、そして最も破壞的な無政府主義者でさへも、この病氣から救ひ出されることは殆んど不可能であるかに見えてゐる。この觀念から完全に脫却することのできない限りは、われ〳〵は如何にしてもブルジョア・イデオロギイと手を切ることはできない。われ〳〵をしてこの近代狂の悉くと手を切らしめよ。新しい出發の悉くはこの一點から始まるといつてよく、またこの點から出發しなくては新しい何ものもありえないといつてよい。

試に考へて見よう、原始共產社會において唯物史觀が如何なる意味をもちえたかを。唯物史觀が現代において多くの意味をもつてゐればゐるほど、それが一つの時代文學であることの證據である。實に人々は唯物史觀の現代的價値が、一つの歷史觀としてでもなく、また世界觀としてでもなくして、一つの時代解釋であるといふことを忘れてゐたのである。

また試みに思へ、昔の靜的な社會において、自由主義や保守主義がありえたであらうかを。またノラのやうな新しい女が昔の社會にあつたとしても、それは單なる氣狂ひといふことのほかに如何なる意味をもちえたであらうかを。

保守といひ自由といひ、新といひ舊といひ、動といひ反動といひ、革命といひ反革命といふ。これは正しく今日の生々した現實である。日日に生起する現實、刻々にぶつかる現實、そして實に火花を散らしにゐる現實である。われ〳〵[illegible]ることなくして

は、今日は如何なる現實的活動をなすことも不可能である。けれどもこれとともに、これが近代、または今日の事實であるといふことも忘れてはならない。

　近代社會の特質はその動的社會であることである。われ/\はこれを進歩的社會または發展的時代と名づけてゐる。こゝに世界は單なる空間的距離、たとへば國家と國家、民族と民族、種族と種族、氏族と氏族といふごとき區別のほかに、時間的の距離、例へば階級と階級、黨派と黨派、保守と自由、革命と反革命、總じて新と舊といふごとき內部的分裂を經驗する。

　動的社會においてはこの距離は必至である。同一の時代といふも、そのうちには必ず二つの時代が對立する。同一の國家といふも必ずそのうちに二つの國家が對立する。時間的距離を經驗することなくしては、如何なる進歩的社會、または發展的時代も存在することを許るされないのである。

　マルクスはこれを解して、一定の時代における革命的な思想の存在は既に革命的な階級の存在することを前提とするとなした。マルクスのいつたとほりに、われ/\は既に革命的な思想とともに革命的な階級をもつてゐる。否、階級の存在それ自身が、革命的な思想の存在を語つてゐる。動的社會においては、階級的距離はそのこと自體一つの時間的距離への方向を示してゐるからである。

　けれどもこれは同一階級が常に同一時間を示してゐるといふの意味

でないことももちろんであらう。**諸階級の間に時間的距離が存**
やうに、同一階級內にもまたこの距離が可能である。**現實を見**
にとつては思想統一とか、思想善導とかいふごときは、**進歩的**
前の時代錯誤を意味するほかの何ものでもない。しか、無産者は
政黨に參加するものだとか、若しくはスタリンの命令に服從し
ばならないといふがごとき、似而非現實的な、小供らしい概念
論にも耳をかすことはできない。ブルジョアの間にも保守もあり
もあるやうに、無産者の間にも共産主義者もあり、無政府主義者
ればサンヂカリストもある。
　これは生として生活の條件によつて決定される。けれどもそれは
に主としてである。同一生活條件のもとにあつても暗君もあれば明
もある。ルソウもあればヴォルテエルもある。チエンバアレンもあ
グラッドストンもある。志を天下に行はんと考へた孟子もあれば、
の心を山野の間に養はんとした莊子もある。總じて天才はその逆境
對して意味を與へるものであるといふの立場からいつて、われ/\の
人事は常に一山拾錢の社會科學をもつてしてはそれを說明することを
許るされないのである。さればこゝには單に主としてといふ。主とし
ていへば、生活の條——一體としての生活條件がこれを決定する。心
理學的「條件」の悉くがわれ/\の人格創造に參加し、この人格に應じ
て思想が存在する。
「進歩的」社會にあつては、その條件が

はこれに對して最も大きな影響をもつてゐる。それが殆んど支配的である場合の存在することも疑ひがない。今日の物質主義の時代において物質主義を輕視する位ゐ時代から遠いものはないのである。けれども一方には浪花節に滿足して不平なき老勞働者もあれば、何一つの不自由なき金持ちの息子にして社會主義學說に熱狂するものもある。總じて物質主義の時代にあつてはこの物質的關係の均勢のうちに自己を見出さんとするものと、そしてこの物質に對して自由を要求せんとするものとがある。前者は平凡人であつて後者が天才である。そして一つの物質的時代が終局に近づかうとしてゐる時代においては、かくのごとき天才がしば〲時代を支配する。羅馬帝國の末期のごときは正にかくのごとき時代であつた。

四

進歩的社會が一歩々々的梯子段登りをしてゐる間は天才の出現する餘地はない。梯子段的社會を支配するものは常に敎權政治的、官僚政治的煩瑣主義的である。天才の出現はそのこと自體天才的時代であることを示してゐる。天才とは實に同一時代内における時間的距離の極限を意味してゐるからである。

この極限からして時代の緊張が生ずる。天才の生ずるがごとき時代は常に緊張的な時代である。天才とは緊張それ自體だといつていゝのである。

一方に過去への執着がいよ〱增大すると、他方には未來への憧憬がいよ〱熱烈になつてくる。理性的な人間は益々理性的になつてゆくが、直觀的な人間は益々直觀的となる。一方には現實を過去のうちに把握しようとする傾向が增大するとともに、他方には現實を生起するものへの意欲において把握しようとする能力の增大がある。空間的な現實理解と時間的現實理解とがこゝに緊張的に對立する。

この緊張をしていよ〱緊張的ならしめるものは時代の速度である。高速度の時代が同一時代内における時間的距離を增大するのはいふまでもない。例へば十年前には一萬枚の新聞紙を印刷するのに一時間を要したが、今日一時間に十二萬枚を印刷することができると假定する。卽ち十二倍の速力である。また例へば數年前までは世界を一週するに七十餘日を要したが今日では二十三日である。卽ち三倍の速力である。この縱と横との速力を見積るなら、時代の速度は最近十年以内に少くとも三十六倍になつたことを意味する。從つて十年前の人間に比べるなら、われ〱は三十六倍の時間を經驗してゐるわけである。また從つて直觀的な人間は三十六倍の未來を現在のうちに實現する能力をもつてゐるが、理性的な人間は三十六倍だけ過去の重さを背負つてゐる。こゝに理性的と直觀的とが對蹠的に對立する。卽ち緊張の時代が生れるのである。私はこれを距離の情熱と名づける。時間的距離が緊張點において情熱にと轉化したのである。

距離の情熱(Das Pathos der Distanz)、または高貴と距離の情熱(Das Pathos der Vornehmheit und Distanz)といふ言葉がニイチエの愛用

したものであることは人のよく知つてゐるところである。彼はこれによつて善惡の評價がよつて生れた起原であると考へてゐたのである。

距離は一つのペエトスを作つてゐる。戀愛におけるペエトスが戀人を絶對美へと高めなければやまないやうに、距離のペエトスは、それによつて常に自己の評價を形づくる。この評價はペエトスの消え去るとともに消え去るであらう、けれどもペエトスの存在する間はその評價は絶對的である。例へばマルクス主義者にとつてはマルクスの價値は絶對的である。マルクスもよいがクロポトキンもよいといふがごとき中間的な評價はこゝには存在の餘地がない。戀のペエトスがブラウニングをしてたゞ一人の戀人を謳歌せしめたやうに、時代的距離のペエトスはマルクス主義を、無政府主義を、若しくは反動主義をさへも、一つの絶對的なものと化せしめる。

今日は既にかくのごとき時代となつてきたではないであらうか。一方に「マルクス主義の旗の下に」討死にしようとするものが續出するとともに、他方には眞面目に思想國難を絶叫する一團がある。しかもこれは最早單なる意見の相違とか、立場の相違とか、程度の相違とかいふごとき如何なる同質的なものではなくして、それは絶對的の對立、何等の妥協の餘地のない異質的な對立である。右か左か、ブルジョアかプロレタリアか、都會か農民か、理性人か直觀人か――あらゆる中間的な存在の滅亡したことが現代の特徴である。中間的な階級が滅亡したやうに、中間的な思想も滅亡したのである。あらゆる社會政策的なものが、支配階級にとつても被支配階級にとつても、全く意味を失つたのを見るがいゝ。時間的距離がその緊張の極限において、正に一つの飛躍を要求してゐるのである。

五

流行の思想に對しては常に二つの黨派が對立する。これを鵜呑みにするものと、これを毛嫌ひするものと。前者も無反省のそしりを免れないが、後者は動脈硬化である。

この對立は不可避である。如何なる時代においても、また如何なる流行思想に對してもこゝに一つの流行思想が存在すると假定せよ、われ〳〵は既にその反對者を前提としてゐる。如何なる思想と雖もその反對者を前提とするごときものでなくしては、一つの流行とはなりえない。基督教について見ても、羅馬帝國の存在を前提することなくしては――イエスを磔刑に處するがごとき一社會の存在を前提とすることなくしては、イエスに對する情熱は起りえなかつたであらう。實にこの世の王國が存在することなくしては、神の王國も存在することはできないのである。

流行思想そのものが、時間的距離の緊張點を示してゐる。そしてこの緊張が情熱と化してゐることを示してゐる。

こゝに辯證法の哲學がある。辯證法は何がゆゑに今日の流行となりえたか。あの色蒼然たるヘーゲル哲學が何ゆゑに今日の情熱たりえたか。あのショウペンハウアアをしてペテンの哲學といはしめたものが何

ゆゑに今日の情熱となりえたか。

それが論理學として成功してゐるかどうかはこゝには問はない。それが歴史の解釋として萬全であるかどうかもこゝには問はない。けれどもそれは既に一つの流行思想である。そこには何ものか現實と相觸れてゐるものはないか。

辯證法の哲學が「死せる犬」だといはれた時からして半世紀以上も過ぎた。辯證法はたしかに死んでゐた。われ／＼はヘエゲルの門弟であると宣言してかゝつたあのマルクスの門弟等の間にあつてさへもそれは既に久しく「死せる犬」であつた。この犬が何ゆゑに復活したか。この犬が何ゆゑに時代の流行となりえたか。しかも昨日まで時代の最右翼的保守主義を代表してきたヘエゲル哲學が、今日は何ゆゑに時代の最左翼的情熱の火となりえたか。

われ／＼はこゝに時代の變化を、——跳躍的變化を見ることはできないか。否、ヘエゲル哲學それ自身が跳躍主義においてそしてまた跳躍主義に於いてのみ再生したことの、この新しい局面を見よ。

ヘエゲル哲學は嘗つてはその汎理主義において、その絶對主義において、またその獨逸帝國の辯護において榮えた。けれどもかくのごときヘエゲル哲學は既に棄に「死せる犬」である。ヘエゲル哲學は今日は如何なる斷において復活したか、それはそれの跳躍論において。

それはもちろん何ほ發展の哲學として受取られてゐる。けれどもこの發展は最早や昨日の進步的、進化的、因果的、漸次性的な如何なるものでもなくして、正にこれ等のものへの對立——進化論に對す進化論の對立、發展論に對する新發展論の對立、漸次性に對するの中斷、非跳躍主義に對する跳躍主義の勝利——ヘエゲルはこれから質への變化と名づけたのである。

最近の自然科學がこの點においてヘエゲル哲學と步調を一つにしてゐることはまたわれ／＼の見逃すことのできないところである。生物學はド・フリイス的突變論の與黨となつたのである。物理學は物質不連續論の黨派に組みしたのである。

この思想上の一大同盟を見よ。曰く漸次性の中斷、曰くド・フリイス的突變、曰く物質の不連續性と。

これを十九世紀を支配した自然科學的思想と比較して見たらどうか。自然は飛躍せずといふことから出發した科學の漸次的梯子段主義に對して、自然も歴史も飛躍なくしては進步も進化も發展も存在しないと主張してゐる今日の哲學と科學とを比較せよ。

これは學者の變說であるか、時代の變化であるか。それは思想の突變であるか、時代の跳躍であるか。

哲學が時代の知的表現であるといはれることはこゝにおいて甚だ意味深いものがある。十九世紀が十九世紀の哲學を生み出したやうに、廿世紀は廿世紀の哲學を生み出したのである。昨日の漸次性的進化の時代において漸次性的進化論を必要としたやうに、今日の跳躍的時代が今日の跳躍哲學に流行を與へたのである。實に自然も歴史も、如何

なる漸次性的進化論をもつてしては、これを説明することができなくなつたのである。言葉をかへていへば時代の時間的距離がその膨脹の極限において一つの飛躍を要求してゐるのである。

六

これはカタストロフエの時代ではないのか。これは正しく暗黒の夜ではないのか。この時代のどことなくどす黒い色を見よ、これは何ものか神秘的暗黒の夜ではなかつたか。

單なる歷史哲學ならば學者に任せておいてもよい。またたゞなる物質への解釋ならばこれを物理學者に預けておいてもよい。否、抽象的歷史哲學なるものはわれ〳〵には存在しないし、また抽象的な物質といふごときものもわれ〳〵には存在しない。われ〳〵にはたゞ現實があるのみである。

現實の世界に何ごとか異變の光景が起つてはゐないか。昨日の漸次性的凡庸主義とは違つて、何等かの異樣なものがわれ〳〵の面前に迫つてきてはゐないか。十九世紀の梯子段登り的な樂天的社會進化思想に對して、何等か悲觀主義的、虛無主義的、非連續的、非機械觀的、非道德的、非凡庸的な何ものかゞ始まつてはゐないか。實に何ものかえ知らぬものではあるが、內からか外からか、一つの異樣な力がわれ〳〵に働きかけ、そしてわれ〳〵自身もこれに對してわれ〳〵自身を用意しはじめてはゐないか。

人々はもちろん尙ほこれを發展といひ、進化といひ、若しくは進步といふであらう。これをしも發展といふべくんば、世界には發展よりほかの如何なるものもなく、またこれをしも進步、進化といひうべくんば世界には進步、進化のほかの如何なるものもない。從つてまた發展もなく、進步と進化もありえない。この近代的自己矛盾、この永久樂天的なナンセンスについてはこゝにしばらく問はない。けれどもこれが發展であるにせよないにせよ、また歷史が永久的進步であるにせよないにせよ、こゝに既に一般的承認をかちえた重大な一つがある、この發展、または進步、進化が、漸次性的梯子段的の過程ではないといふことがこれである。即ちそれを進步といふも退步といふも進化といふも退化といふも、若しくは發展といふも沒落といふも勝手であるが、それ等のものに共通な一點がある、漸次性の中斷、突變的變化、不連續、量から質へ、――實に異變的變化の思想がこれである。

われ〳〵を動かしてゐるものはヘエゲル哲學そのものでもなく、突變的進化論でもなく、また物理學上における如何なる理論でもない。われ〳〵は生物學についても、物理學についても、何ごとも知らないのである。今日の辯證法哲學の熱烈な信徒だちについて見るがいゝ。ヘエゲル哲學について彼等は何ごとも知らないのである。流行してゐるものは生物學や物理學における新しい理論でもないが、また決してヘエゲル哲學そのものであるのでもない。それはたゞ異變的變化の思想であるといつてよいのである。何が今日の時代思想であるかと問ふものがあるなら、われ〳〵は躊躇なく答へるであらう、それは

化の思想であると。實に十九世紀が漸次性的進化の原理によつて說明されつくしたのに對して、廿世紀は異變的變化の思想をもつて出發した。時代の時間的距離がその緊張の極點において遂に越ゆべからざる斷涯となつたのである。私はこれを理性の中斷と名づける。

七

この異變的變化の時代思想は何をわれ〳〵に語つてゐるか。そしてまたこの異變的變化の思想に根柢を與へたわれ〳〵の現實は如何なる方向を示してゐるか。

社會主義への方向か、無政府主義への方向か、ムッソリニへかレエニンへか、フォオドへかガンヂへか。

これ等のものはそれ〳〵に意味をもつてゐる。われ〳〵は最早やこれ等のものを說くことなくしては時代を語ることはできない。これ等のものは何れも現實の方向を語つてゐるからである。また實に現實の方向を語ることなくしては如何なるものも時代の流行とはなりえないのである。けれどもこれ等のものは如何なる點において現實の方向を示してゐるか。

フォオドが今日の世界において現實の金的を射當てたものの最も榮譽ある一人であることはもちろんである。「不可能なることなし、たゞなさざるなり。」彼においてこの言あり、また彼においてのみこの言ありといへよう。彼において高度資本主義的現實はその最高代表者を見出したといふべきである。彼においての現實はもとより既に多くは過ぎ去りしものであり、それは實現するところの現實であることの代りに、實現されたところの現實ではある。けれども漸次性的進化文明は彼において既にその資本主義的最高段階を上りきつた。齊一變至於魯。それは既にそのこと自體跳躍への方向を語つてゐるのである。

ムッソリニに至つてはもとより反動の怪物ではある。彼の經濟的立場は依然として資本主義であり、彼の政治的形式は羅馬帝國の復興である。それにもかゝはらず、彼において尙ほ生ける現實の方向が示されてゐるのは何がゆゑであり、また彼をもつて單なる反動政治家として說明することの適當でないことを覺えしめるのは何ゆゑであるか。彼において十九世紀の進化的民主主義の中斷――一切の自由主義的凡庸主義が中斷されたからである。實に歐羅巴の民主化は遂に專制君主の養成のためであるとニイチエの豫言したものは、彼において一つの實を結んだといつてもいゝのである。

社會主義は今日は二つの陣營に分れてゐる。社會民主主義と共產主義とである。カウツキイとレエニンとである。カウツキイとレエニンと何れが眞にマルクスを代表するか。議論は限りを知らない。理性的な人々は恐らくはカウツキイの側に立つであらう。それにもかゝはらず、カウツキイの色の褪せぶりはどうか。社會民主主義のあの無力さはどうか。共產主義の壓倒的な激情に比べて、社會民主主義のあの氣の拔けぶりはどうか。

社會主義における漸次性的進化主義が力を失つたのである。民主主

義的なあらゆる凡庸主義がその根據を失つたのである、理義的社會主義の時代からして、、、社會主義の、、、、つたのである。そして逐に漸次性的進化の社會主義が終りを告げて、跳躍の異變的社會主義思想のために、、、、、してきたといふことができる。

今日の辯證法哲學の熱烈な使徒の多くが同時に共産主義の活動的黨員であることは、決して、、ではない。實に共産主義——露西亞革命の異變的な光景を前提とすることなくして想像することのできない今日の共産主義は、それ自體において、、、、、、、、であるといふべきである。

八

ムッソリニはもとよりである、レエニンと雖も眞に新時代といふにはまだ〳〵である。彼等は遂に一個の過渡的人物である。彼等は半ば理性的であり、半ば直觀的である。從つてまた半ば舊時代であり、半ば新時代である。彼等が一面において舊時代から憎惡と恐怖とをもつて見られながらも、尙ほ全然理解すべからざるものであるとされるに至らないのは、彼等自體が半ば理性的、そして半ば舊時代であることの證據である。

ムッソリニが如何なる經濟政策をもつてゐるかはこれを述べた。レエニンと雖もその資本主義に對する立場は尙ほ甚だ不徹底なものがある。彼は資本主義への革命を要求しながら、資本主義の本質としての機械生産を打破せよといふのでもなく、工業主義を廢止せよといふのでもない。また資本主義文明、のあらゆる[illegible]をけにしたのでもない、尙ほ資本主義文明の精髓としての個人主義、機械主義、科學主義、大量生産主義に向つて爆彈を投ずるのでもない。そしてまた聲を大にして漸次性の中斷、量から質へを絶叫しながらも、尙ほ傳達性的文明に對して非傳達性的野蠻を主張するのでもない。試に彼の社會發展の段階について見る、自由主義から帝國主義へ帝國主義から社會主義へ、社會主義から共産主義へと。そこには如何なる神秘もなく、如何なる魔法もなく、われ〳〵の理性——常識的理性の理解を不可能ならしめるごとき何ものもない。それはこの限りにおいては、如何なる漸次性の中斷でもなく、如何なる異變的變化でもなく、また如何なる量から質へでもない。こゝに彼の凡庸性があり、そしてまたこの凡庸性である、レエニン亡き後の露西亞を支配してゐるものの悉くは。實にレエニンもまた未だ眞に偉大なる天才といふのには甚だ遠いのである。彼をしてこの點において、そしてこの點においてのみ立たしめたと假定せよ、彼の存在は恐らくはその意味を失つたであらう。そしてまた彼とカウツキイとの間にわれ〳〵は如何なる區別をも見ることはできなかつたであらう。然らばわれ〳〵は何によつてレエニンとカウツキイとを區別すべきか。何ゆゑにカウツキイが單なる俗學者の群に落ちて、レエニンの名が獨り輝いてゐるか。彼において跳躍への意志を見るからである。實にムッソリニもレエニンも、跳躍への意志である。跳躍への意志としてのみ彼等の意味がある。

理性的漸次性的

躍への新しい意志としてのみ、彼等の存在の意味がある。こゝに民主主義の跳躍があり、半封建の露西亞から社會主義の露西亞への道があり、辯證法的哲學の要求があり、そしてこの點である、彼等と舊時代とを斷絶せしめるものは。またそしてこの點である、彼等をして理性的理解から遠くへと隔ててゐるものは。然り、舊時代の凡庸主義に對して彼等を遂に一個の天才と呼ばしめてゐるものは。

九

マルクス主義は今日も尚ほ科學的社會主義というてゐる。けれどもその科學とは何か。佛蘭西的唯物論に對する戰闘的唯物論とは何か。自然科學的科學に對する辯證法的科學とは何か。それは空間一切的から時間的へである。理性理解的から直觀理解的へである。科學的理論的から非合理的實践的へである。實に自然は跳躍せずの立場から出發した科學に對して、自然は跳躍するとなすところの對立物――一つの神秘であるに外ならないのである。

否、獨り辯證法の哲學ばかりではない。凡ての飛躍的な新しい理論は理性的理解の彼方に立つてゐる。それは最早や一切の空間的理解を不可ならしめてゐる。ポアンカレの言葉でいへばこゝには微分方程式は既に不可能となつたのである。これはこの限りにおいて正しく不可知論であり、神秘であり、原始的非合理主義、野蠻的無意識への復歸である。實に現代哲學の最も根本的な傾向は意識への不信であるといつてもよい。十九世紀の哲學も、科學も、若しくはヴント以後の心理學も悉く意識の科學であつたといふことができるのに對して、今日界におけるこの意識に對する滔々たる不信任の傾向を見よ。ユングアドラアを、フロイドを、そして知的生活は生活における死である宣言したヨハンネス・ミュウラアを、ペラスヂア人の消極的態度を理想としてゐるルドギッヒ・クラアゲスを、母權的求心的文化を唱へてゐるあの天才的なフロウベニュウスを、あらゆる意識主義への總括的否定から出したワットスンの新しい心理學を――理性的・意識的への總攻撃が始まつたのである。漸次性的、打算的への總括的否定が始まつたのである。科學的・社會的への總批判が始まつたのである。アドラア(フエリクス)の言葉でいふ、實に男らしい抗議が既に始まつたのである。

十

街頭には何ごとが始まつてゐるか。あの街頭の女たちは何をわれわれに示してゐるか。あの怪物的な衣裳とその傍若無人な振舞ひを見るがいゝ。ショウペンハウアアをしていはしめるならばこの見慣い動物といふであらう。實に昨日まではどこか高きところから飛んでも來たかに思はれたほどの若い女たちが、今日は泥沼の中から湧いてきた孑孑のやうにも見える。昔つては調和において美を見ることのできたものは、今日は不調和こそ美である。昔つてはメレヂスをして醜とはたゞ事物の中途半端であるといはしめた所のものが、今日はこの中途半端である、美の標準となつてゐるのは。この世界の轉倒振りを見よ。昨日の調和的、整頓的、靜的、軟性的に對して、今日の不調和的、不

感覺的、動的、お饒舌的なのを見よ。理性的・凡庸的から、非合目的・生命的への傾向をわれ〳〵はこゝに見ることはできないか。古き價値への否定、「男らしい抗議」、そして人間の若返りをわれ〳〵はこゝに見ることはできないか。

こゝに斷髮の女がある。昔の斷髮が肉慾のあらゆるきづなを斷つことを意味したのに對して、今日の斷髮が肉慾への大膽なる意志として立つてゐるのを見よ。否、この世界の滔々たる肉慾への傾向を見よ。夫は妻を捨て、妻は夫を去り、凡ての男は凡ての女に、凡ての女は凡ての男に向つてその胸を開いてゐるところの、この今日の世界を見よ。諸君はこれを不道德といふか、不倫といふか、不貞といふか。貞操も道德も既に否定されたことのこの世界の新しい局面を諸君は見ることはできないか。

人々はあのスポオトに熱狂する若者たちを如何に見るか。あの馬鹿らしいほどの熱狂振りは何を意味するか。運動はまことに健康の母ではある。けれども何人が果して健康と衞生のためにスポオトに熱狂するか。ランメルは百米突を十・八秒で走つたといひ、ヌルミは一萬米突を三十分十八秒八で走つたといふ。人々は實にその速力に驚嘆もし、喝采もする。けれどもこれを自動車に比べて、これを飛行機に比べて、何んといふ人間ののろまさであるか！ 人々は何ゆゑに自ら走ることの代りに自動車に乘らないのであるか。人々は自らの足を傷けることの代りに、何ゆゑに飛行機に乘らないのであるか。リンドバアクの英雄と突進して、オリンピックの小英雄となつてゐる。何といふ馬鹿々々矛盾であることか！ しかもそれは如何なる矛盾でもない、如何なる馬鹿らしさでもない。一方に機械文明は益々發達する。機械文明の勇者はこゝに時代の英雄である。リンドバアクのあの素晴らしい人氣を見るがいゝ。けれどもまたこの機械文明の進歩である、肉體的運動、肉體的美、肉體的力、肉體的憧憬への一切の原因となつてゐるのは。實に機械的發明が進歩すればするほど、肉體的輕蔑が高まるどころではない。肉體への憧憬が益々強まつてきたのである。「勞働節約」の機械がいよ〳〵發達して勞働への欲望がいよ〳〵増大してきたのである。われ〳〵はこゝにあらゆる非人間的なものに對する「男らしい抗議」の始まつてゐるのを見ることはできないか。

あのジャヅの流行はどうであらう。あの古典音樂、數學的整調の古典的音樂に比べて、このジャヅの流行は何を語つてゐるか。古典音樂の理性的に對するこのジャヅの激情振りはどうか。あのサクソフォンの訴へるごとき、泣くがごとき、笑ふがごとき自由さはどうか。あの爆發的な太鼓の音はどうか。あのシンコペエションは、律動の漸次性の中斷、理性の中斷、意識の中斷、ド・フリイス的突變振りはどうか。あの躍動的な、明晰な、非學究的な、行動的な、具體的な、若者的な、單純な、新鮮な、迅速な、突變的な、非整調的な、このジャヅの流行はどうか。――ジャヅが若い音樂であるやうに、これは人間の若返りを示してはゐないか。ジャヅが黒人の藝術として生れたやうに、われわ

れはこゝに黒人的野蠻性の勝利を見ることはできないか。然り一切の文明的價値と煩瑣への否定を「男らしい抗議」を、世界の若返りを、そして遂に一つの野蠻化を、肉體化を。實に音樂の原理は世界の直接なる表現にある。世界を物自體として、その母なるものの直接の姿において。――われ〳〵はこゝに現象的な世界から物自體への世界を、人工的な世界の代りに世界それ自體を、然り世界をその母なるものの直接の姿において實現することをもとめてゐるのではなかつたか。

ニイチエが音樂と造型美術とを二つの對立する原理にと組み立てたことは有名なことである。彼は造型美術においてアポロ的世界を見たのである。そして音樂においてディオニソス的世界を見たのである。實に造型美術が尙ほ現象的世界をとほして世界を見るのに對して、音樂の原理はその世界の直接なる表現にある。それは母なるものの直接の姿を、原始的なるものの直接の姿を、原本的なる明晰さを、そして生命の神秘的なる直接の活動を、表現する。音樂の强みはこゝにある。音樂の訴へる力、そして人間の魂を陶醉せしめなければ止まない力は、こゝにある。眞實なる音樂は如何なる意識的、理性的、認識的、概念的でもない。理性の中斷、意識の中斷、認識の中斷。そして直觀、直接經驗、實踐、實現、世界の全的表現、原本的世界への憧憬、生命の神秘的な振動――アポロ型からディオニソス型への跳躍である。

十一

この人間を見よ！　この人間の突變振りを見よ、そしてこの人間の若返り振りを見よ！　十九世紀の理性人は何處にあるや、十九世紀の意識の哲學は何處にあるや、總じて理性の液汁は何處にありや。

近代文明の漸次的進化が今日は中斷されんとす。あらゆる傳達性的世界からして非傳達性的世界へと突變しようとする。歐羅巴的文明の最高所からして阿弗利加的野蠻性的評價へと「發展」しようとする。妥協でもなく、修正でもなく、如何なる漸次性的進化、進歩、發展でもない。理性的・意識的への總括的否定である。漸次性的・梯子段的への全部的否定である。アドラアの「男らしい抗議」である。フロイドの「煙突掃除」である。Homo Divinans! Homo Divinans! Homo Divinans――直觀人へ、豫言人へ、原始人へ。「野獸は再び野に放たれなければならぬ。」人間は再び人間に還らなければならぬ。肉體は再び肉體へ還らなければならぬ。人間はその人間の手をもつて造りあげたものが遂に人間の自己疎外へと到達したことを知つた時に彼が如何なることをなすべきかを知つてゐた、人間が再び新しいスタアトへともどらなければならないといふことである。

この人間を見よ！　このヂオニソス的なジャヅの陶醉的な人間を見よ！　人間が遂に人間を發見した時のこの喜びを見よ！　新しい時代はこゝに出發してゐるのだ。まことに新しい型だけが新しい世界を經驗する。人々は旣に新しい時代を經驗してゐるのである。

河上博士とマルクス論爭

小泉信三

河上博士は其著「資本論入門」第一册第四分册（七月七日發行）中に、土方博士の所說と共に私のマルクス價値論批評を非難して居られる。私は前年、河上博士及び櫛田民藏氏の非難に答へて可なりの長文一篇を本誌（大正十四年十一月號）に寄稿したが、其に對する意見を河上博士からは未だ今日迄聽く機會を得なかつたので、「勞働價値說に對する異論の分析。小泉、土方兩敎授を徹底的に批判することにより云々」といふ新聞廣告を見ると早速一本を取り寄せて一讀した。然るに、不幸にして今回の分册には、上記拙稿に對する批評は見出すことが出來ず、博士の處々引用せらるゝ章句は、私が大正十一年の春本誌に寄稿した文章に限られてゐる。固より此篇に對する批評も私の望む所ではあるが、其處に述べてある意見に就いては、既に私は博士の批評に對して、前論を補足し、自己の眞意を明にする爲め、可なり詳細なる議論を二度迄も本誌（大正十四年四月號・大正十四年十一月號）で試みてゐる。特にそれを不便とする事情があれば格別であるが、さうでない限りは、此等の比較的詳細なる議論をも參照した上で立論せられるのが自他の利益であり、私もそれを希望するものである。私に自作文章の閱讀を人に強いて求める權利がないことは、承知してゐるが、たゞ右記の二篇は、私が博士の質疑に會つてそれに答へる爲めに起草したものであり、私信によれば、博士もそれを見られた筈であるから申したいのである。

マルクスが商品の共通要素をその勞働の所產たる一事に求めたのは「捨象」であつて、單なる「抽象」ではない云々の今回の說も承服することが出來ぬ。マルクス主義者と雖も此點必しも皆な河上博士に同意するのではあるまい。

併し河上博士の私のマルクス批評に對する批評は、此の第四分册所載のものゝみを以ては盡きてゐないのであらう。私は度々の機會に、マルクスは自由競爭行はるゝことを條件として價値通りの商品交換が行はれるといひ、又自由競爭あるが爲めに價値通りの交換が妨げられると言ふの矛盾に陷つたことを指摘し、且つ此の所謂自由競爭が、一方の場合には一產業內の競爭、他方の場合には產業間の競爭を意味するのだといふ河上博士等の辯明の、到底成り立ち難き所以をも說明した。

此點に關する博士の意見も、猶ほ先きへ行つて聽くことが出來れば甚だ幸ひである。

私が前年、マルクスに於ては、商品價格は其價値（勞働費用）を其旋回中心にするといふ命題と、價値から外れた生産價格が價格の旋回中心になるといふ命題とが相衝突してゐるといつて、其を立證すべき文言をマルクスの「賃銀勞働と資本」及び「價値、價格及び利潤」から引用した時、博士はそれに對して、前の場合の商品は、「單なる商品（資本主義以前の商品）か、然らずんば競爭が同一の生産部門に屬する資本家の間に行はるゝに止まる限りにおいての資本家的商品」であり、後の場合の商品は産業間に競爭が行はるゝ場合の「資本家的商品」だといはれた（「社會問題研究」二一五一頁）。私は之を失當とし、マルクスは、資本の「流入」「逃亡」從つて利潤の平均に依て、價格が價値に歸着すると謂つてゐるのであるから、前の場合の商品もやはり資本家的商品でなくてはならぬ旨を述べた上で、「右の引照にも拘らず、河上博士は猶ほ敢て、彼處にマルクスが論ずるものは『單なる商品』に外ならぬことを主張せらるゝであらうか」と問うて置いた（本誌大正十四年十一月號六五頁）。此點に對する博士の然否の意見も私の聽かんと欲する所である。

次に「資本論入門」第四分册にも、例へば「價値の實體が商品に投下せられたる勞働量だなどゝいふ馬鹿げたことを」（土方博士の言に對していふ）とか、「『教授式な』ブルジョア的な『科學』」の一ダースの代表者たち』云々といふやうな言葉が見えるから、餘り好ましくない事であるが、此機會に近年の河上博士の論爭上に於ける態度論調に就いて一言したい。

忌憚なくいへば、博士近年の論調は餘りに感情的であつて、論敵に對して無用の罵詈の言を放ち、其爲め綿密な理論の推究を妨げられる場合が尠くないと思ふ。他人に對するものは姑らく措く。私自身に就いていへば、前年始めてマルクス價値論批評の文を公にした時、博士は種々之を批評せられ、結局に於て、私の議論は「詭辯の見本にはなつても、學理の研究上三文錢にも値しない」ものだと言ひ（「社會問題研究」第四十號二三頁）、又別の處で一顧の價値なきものだと言はれた（同紙第四十一號）。果して一顧の價値があるかないかは私自身の言ふべき限りでない。批評は固より自由である。私は河上博士の批評に激して推理を妨げられた覺えもないし、又罵詈を以て之に酬ひようとした覺えもないが、その私自身と雖も、今後も決して人を罵らぬといふ約束はしない。併し乍ら、更に何是れ程の評語を使用することは、評者自身に確乎たる、動かし難き定見があるのでなければ意味を成さぬことは明であらう。然らば、河上博士自身のマルクス價値論に對する解釋はどうであるかといふに、私の記憶が誤つてゐなければ、前年の著「近世經濟思想史論」では、博士はマルクスの所謂價値は略ぼ正統派經濟學者等に於ける「自然價格」に等しきものだと解せられた。此解釋が放棄せられて、次に、マルクスの所謂價値は、人類全體の

場から見ての犠牲若しくは費用價値の意味であるといふ、當時多少の論議を惹き起した新解釋（所謂價値人類犠牲說）が採用せられた。（大正十一、二年）右記の如く、私の說を一顧の價値なしとして斥けられたのは、此立場に基づいてせられたものである。然るに、間もなく此解釋の「全然謬れる」ことを知つたと言つて、博士は此說をも放棄せられ、其次に私を反駁せられた場合には、其論據は前とは異なるものになつてゐた。即ち「社會問題研究」第六十一―二册（大正十四年）では、資本論の首節に論ぜらるる商品は「一商品としての商品」又は「一純粹な姿に於ける商品」であると言はれ、又私との間に意見相違の對象となつた交換方程式、「一クオタアの麥＝二ツエントネルの鐵」は「交換を意味せず等價を意味する」と言はれたのである（第六十二册表紙。旁點小泉）。此の「純粹なる姿」云々と、今日の博士の「捨象」云々との間に脈絡のあることは、確かに認められる。然るに、彼の方程式に關する解釋に就いては、少くも「資本論入門」第四分册に現れてゐる限りに於ては、そは「交換を意味せず」といふ見解を、既に放棄してゐられるやうである。博士自ら「マルクスがこゝに問題としてゐるところは、商品の交換關係――價値關係――において現實的に、交換せらるゝ双方の商品に存在する共通物として取扱はれてゐるものは何であるか、といふことである」（二八四頁、旁點原文通り）。「一クオータアの小麥なる商品と二ツエントネルの鐵なる商品とが互に交換せられるといふ方程式は、『同一の大きさ〔分量〕の或る共通なものが、二つの異なれる

物のうちに、すなはち一クオーターの小麥のうちにも、同様にまた二ツエントネルの鐵のうちにも、存在するといふこと』を、意味する。そして吾々の問題は……』（二九六、二八五頁）と云つて居られるからである。

河上博士の見解は、斯の如く餘りにも度々動揺し變遷し來つて今日に及んでゐるのである。斯の如き變動常なき其時々の立場に據つて居評を加へられた論敵は、抑も如何なる態度を以て之を聽けば好いのであらうか。

河上博士のマルクス解釋は、斯の如く變化して來て居る。然り而して博士のマルクス批評者を不當とせらるゝ結論は、常に同一である。常にマルクスは正しく、常にマルクス批評者は無理解であるといふのである。博士の今日の意見に由れば、これと異なる博士自身の過去の解釋は、皆な誤謬でなくてはならぬ。（博士自身その全然謬れることを認めたと明言せられたこともある）。而かもその謬れる解釋に據つても、正しい解釋に據つても、何れにしても常にマルクスは正しいといふ結論が生じ來るといふのは奇異ではないか。若し讀者の中に邪推する者があつて、博士は先づマルクスは常に正しいといふ豫斷、若しくは斯く斷定する何等かの必要から出發し、次に此結論に導くべき理由を求めて彼の解釋を得、また此の解釋を得られたのだと言つたとしても博士は之を咎める理由を持たれまい。若し忌憚なく想像する所をいへば、此の豫斷若しくは斷定の必要の拘束が、特に博士をして短慮

ならしめ、論敵に對して頻りに罵詈を逞にするに至らしめる一原因たるものではあるまいか。而して、博士の事は姑らく言はぬとしても、これは一定の結論を强調せられてゐる黨派學者の一般に常に陷る通弊である。

博士の意見が度々變易するといふ事に就いて、やはり私の身にも關係のある事だから、序に記せば、今度の分册の中に土方博士の所論と對照して少しく私の議論の論法を賞讃するかの如き口吻を漏らされた一節がある。問題は價値と生産價格との關係に關することである。博士曰く、「價値と生産價格との關係については、土方教授もまたこれに言及すること至つてはゐられないが、（『マルクス價値論の排撃』二〇八頁以下參照）、それは頗る混亂してゐて、小泉教授の論難の整然たるには遙に及ばざるものであるから、玆にはこれを殆ど無視しておく」と（三一八頁）。假りに土方博士を抑へんが爲めの對照論法たりしにもせよ、兎に角私の論難が「整然たる」ものであつたと評せられたのは、一應面目とすべき事であるかも知れぬ。併し私は此一節を見て遽かに喜ぶ譯には行かぬ。河上博士が前に私の所論に加へられた評言を憶ひ起せば、たゞ苦笑を禁ずることが出來ないのである。比較的にもせよ、兎に角「整然たる」論難だと今日謂はれた私の文章は、實に曩に博士に依つて「學理の研究上三文錢にも値しない」と評せられた其の同じ文章であるからである。如何に其間に三四年の歲月が隔てゝゐるにもせよ、如何に評せらるゝ個處は同一ならぬにもせよ、三文錢にも値せぬものが、整然たる議論となるのは餘りに甚しい激變で、寧ろ無責任といふべきものではないか。斯の如き不定の評價標準に據つて多少とも承認せられるといふことは、果して喜ぶべきことであらうか、悲しむべきことであらうか。これも私が博士の論調を感情的だといふ一の理由を成すものである。（八月七日）

附記、此一文は九月號に間に合はせるつもりで書いて送つたのであるが、記事輻輳の爲め本號に掲載されることになつたものである。

時　評

暗黒都市

山川均

□

石油の軒燈は瓦斯燈となり、電燈となつて、東京の街は明るくなつた。東京の街が明るくなると共に、東京の政治はます〳〵暗くなる。東京の最も暗い部分は、昔の十二階下や今の玉の井にあるのではなくて、帝都の眞中にある。資本主義社會の腐敗は、枝葉の腐敗ではなくて、根幹の腐敗である。それはひとり社會の殘滓的要素の腐敗となつて現はれるばかりでなく、社會の主腦、社會の心臟の腐爛となつて現はれる。

もつとも東京市は、から風や砂埃で有名なばかりでなく、昔から疑獄をもつて有名な都市であつた。鐵管事件の遠い昔のことは、しばらく記憶のなかゝら帳消しにするとしても、最近數年の間にも、いろいろの醜怪事があつた。もちろん、これらの事件は、よく〳〵運が悪るくて表沙汰になつた寧ろ例外的な場合にちがいない。市政はあらゆる種類の利權を搾出する大規模な機械裝置に變じてゐる。そして何らかの原因のために、この機械裝置の運轉が圓滑を缺ぎ、利權搾取の齒車が喰ひ違つた非常の場合にのみ、その過程の一端が謂ゆる『疑獄』となつて明るみに曝らされる。そうして人々は、今更らのように、驚いた身振りをする。それはちようど、純潔な血の循環してゐる身體に、突如として梅毒の吹き出物が現はれたかのように。人々は、氣候の變り目にたま〳〵現はれるこの吹き出物に膏藥を貼ることによつて、その血液の中に、病害が不斷の作用をしてゐる事實に對して自ら欺き、なかんづく市民の大衆を欺かうとする。

□

最近の疑獄の導火線となつた板舟權補償の對象たる、板舟權とは一

たい何だらう。それは純然たる、中世紀經濟の特殊な產物たる、職業上の特權以外の何ものでもないではないか。今日の資本主義經濟は、かゝる中世紀的特權の否定の上に成り立つてをり、現在の一切の社會秩序は、かような特權の無條件的な破壞を『原則』として、またこれを破壞することによつて、これに取つて代はつたものではなかつたか。そして骨の髓まで資本主義化した昭和三年の東京市が、德川時代がこしらへたこの職業上の特權を、七十萬百萬の金を出して『補償』してやらうといふ、何といふ寬大な親切なことだらう。それも市民の眼にも口にも足にも、いやしくも市民の生活のあらゆるところに掛けられるだけの税金を掛けつくして、なほ世帶が持ち切れない、何か新税目はないかと血眼で探し廻はつてゐる時である。

一たい德川時代が作り出した職業上の特權といへば、賣買の目的物となるといふ程度においてこそ異つてはゐても、決して板舟權のみではない。社會の變革と經濟の進步とは、幾多の職業上の特權を破壞した。誰れか七十萬圓の賠償金を貰つたらう。もつとも今日の東京が德川何代かの將軍樣の治世であつたのなら、板舟權の補償にも若干の理由があつたらう。しかし今日では、板舟權の補償といふ考へそのものが、江戸と東京、德川と昭和との時代錯誤のほかの何ものでもあり得ない。いはんやこの特權を破壞した下手人は、大正十二年の地震であつた。そして昭和三年に、東京市民がその税金をさいて、この損害を補償する。

これほど辻褄の合はぬ問題が問題となつた瞬間に、それはすでに種の臭氣を發してゐる。たしかに、腐つた魚の腹綿の臭氣である。の臭氣に、議員と名づける金蠅の集まることほど、合理にして自然なことはない。そして市民はこれを不思議とせぬほどに、體驗によつて訓練せられてゐる。

板舟權問題の疑獄は、いよ〳〵京成電車市內乘入れ問題にも、飛火するといふことである。板舟權が封建色を帶びてゐるのに對し、京成電車問題は近代的な利權である。板舟權問題では、議員は貨幣の發條によつて踊り、京成電車問題では、彼らは近代的な資本によつて踊らされる。大資本と財閥の勢力が、いかに市政機關を侵略してゐるかといふ點では、京成電車問題は、鬼怒電問題や瓦斯問題と共に、板舟權問題よりも、一そう代表的なものだといふことができる。

□

政黨が完全に大資本と財閥との利害を代表し、全國的政治が、完全に大資本と財閥の影響下に立つようになると、中央の政權は、これらの政黨が、主として大資本と財閥の利害を代表して、大規模な裝置で作業をする舞臺となる。そして自治體は、二流三流どころの政黨政治家の、、場に充てられる。そこで大資本と財閥との全國的な、、裝置を發達せしめる必要といふことは暫らく別としても、政黨は必然に、自治體の政治に浸透する。地方政治の政黨化は、近年の著しい傾向であつて、これは自治體の政治を腐敗せしめるといふ心覺をした人々が

ある。この心理は、或る意味では理由があつた。けれどもこれらの人々が心配した意味においては、寧ろその理由のなかつたことが、東京市の疑獄によつて、少なくとも或る程度まで證據だてられたといふことができる。

地方政治の政黨化の弊害として數へられたことは、自治體の政治が政爭の渦中に陷入るといふことであつた。東京市の疑獄は、利權が反對政黨を握手させ、却つて政爭を窒息せしめたことを物語つてゐる。政爭は政黨の線に沿うて行はれないで、しばしば政黨線を横斷し、これと交叉して特殊な利害の線に沿うて行はれる。もし對立政黨間の政爭が有効に行はれてゐたならば、これほど露骨な醜怪事が白晝に行はれることは、或は不可能だつたかも知れぬ。從つて市政の刷新せられる道は、政黨化を防ぐことではなくて、利權によつて對立政黨と握手することのない政黨、政黨の政爭を徹底的に遂行することのできる政黨の勢力が、市政に浸透することである。かような政黨が、無產政黨以外に求め得られぬことはいふまでもない。政治一般が今日の基礎の上に立つかぎりは、いかに無產階級の力が中央と地方の議會に代表せられようとも、これによつて現代政治の本質が一變する筈はない。けれども無產政黨の勢力が地方議會に侵入し、そしてこれが或る程度の力をもつたなら、かなりの程度まで、自治體政治の腐敗を防ぐにちがひない。無產政黨のかような影響は、中央政治の場合よりも地方自治體の場合には、はるかに顯著である。帝國議會における三十名の無產黨議員は、あたかも例外的の勢力においてのほかは、中央議會に大なる影響を與へることはできぬ。しかるに町村會の場合には、たゞ一人の無產黨議員の選出せられたゝめに、町村會の空氣が著しく變化した實例さへもある。

□

中央政治においては、政權をめぐつてしのぎを削つてゐる對立政黨が、自治體の政治においては、一と切れの腐肉のために協力してゐることは、奇異なる現象のように思はれる。けれどもブルジョア政黨の構成要素の代表する利害は、必ずしも純一でないことを考へたなら、これはあながち不思議なことではない。謂ゆる金融資本の支配が確立せられたといふ狀態の下においても、これに隷屬する利害の間には、無數の對立がある、ブルジョアジーは、永久に、これらの無數の異つた利害の錯綜なのである。中央政治が、全體としてのブルジョアジーの利害を、、、、するようになればなるほど、個々の利害は、勢ひ自治體の政治に活潑に働くようになる。そしてこれらの個々の特殊な利害は、中央政治に現はれてゐる政黨對立の分野とは異つたところの別個な分野を、そのおりおりに描き出す。かうして板舟問題でも京電問題でも、それは政黨と政黨との政爭のために生じた腐敗ではなくて政黨の勢力は、取引を便利にし、必要な瞬間に政爭を中止する役目を演じてゐる。そこで市政刷新の第一歩は、無產政黨の勢力の侵入によつて、むしろ市政に活潑な政爭を持ちこむことに

市政の刷新については、いろ〳〵な方面からいろ〳〵な提案が現はれてゐる。假りにこれらの提案のすべてが實行せられたにしても、暗黒の都市が、忽ちにしてアーク燈で照らされた光明の都市となるわけではない。けれども十燭光の電燈でも、暗がりにはまさつてゐる。

　これらの提案のうちでまづ第一に必要なことは、いふまでもなく、市會の選擧に、普通選擧を徹底せしめることである。普選の名の下に事實上、新興階級の選擧權を剝奪してゐる一切の制限を撤廢することである。

　次には、議員の任期を短縮し、市民に、議員に對する解任權を持たせることである。解任權の行使には、技術上の困難のあることも事實であるが、これは解決しがたい困難ではないだらう。

　第三には、特殊な場合を定めて、市民の一般投票の制度を設けることである。

　第四には、市長の直接公選である。現在の制度では、市長は、市民の市長でないばかりでなく、市會の市長でさへもなく、たゞ一握の利權團の市長にほかならぬ。利權團によつて擁立せられた市長が、利權團の前に何らの威力のないことは云ふまでもない。

　第五には、直接公選せられた市長に、市會の解散權を與へることである。

　これらの諸點は、すでに多くの人々によつて主張せられてゐるところであつて、固よりそのために、市政が根本的に一新せられるわけではないが、それと同時に、市民の現在の無關心狀態をもつてしては、この程度の改革さへも、その實現を見ることは至難であると云はねばならぬ。

盲腸と盲信

　昭和三年の某月某日、東から昇る太陽が消滅して、新たな太陽が西から昇るといふ者があつたら、どうだらう？もしこれが事實となつたなら、たしかに驚くべきことである。けれども何らの理由もなく、何らの根據もなく、何らこれを立證しようとした跡方もなく、なほその上に何らの利害關係もないこの荒唐無稽な預言を、多數の民衆が無條件に受け入れたとしたならば、これは慥かに、預言せられた事實の內容よりも、遙かに恐るべきことだと言はなければならぬ。

　天理研究會の不敬事件は、これに類するものがある。

　新聞によつて公表せられた限りにおいては、事件の內容は、天理教の經典——すなはちお筆先——に不敬に亘るお伽ぎ新解釋を試みたこ

と、そしてこの教理は、まづ智識分子の間に斉へてその支持を得なければならぬといふ見地から、これを印刷して、まつ先きに全國の警察その他の諸官衙などに送附したといふのである。

不敬に亘るといふ教理や預言の內容が何であるかは、公表せられてをらぬ。けれども若し道聽途說の如きものだとしたならば、その內容は『荒唐』の二字に盡きてゐる。それは人々を說得するに足りないまでも、多少の注意を引くような何らの理由も根據もなく、かつこれを信ずることに、何らの利害もないものであつて、何月何日には太陽が西から昇るといふこと以上には、何らの意義もなく、またこれを無條件に信じ得る人の外には、とうてい信じ得べからざることのように思はれる。のみならずその預言的な部分は、一千年の未來のことではなくて、數ヶ月、ないしは十數ヶ月後のことであつて、直ちに事實によつて反證せられる性質のものである。そしてかような教理と預言とを、謂ゆる『愚夫愚婦』をして信ぜしめようとするのではなく、彼ら自ら、『知識分子』の支持を得るものと信じてゐるのである。

この教理と預言の內容は、『驚くべき』或は『恐るべき』不敬と云はれてゐる。しかしながら全べての驚くべきこと、恐るべきことは、或る程度を越えた時、それは寧ろ笑ふべきことゝなる。現に今度の天理敎研究會事件は、警察當事者さへも、最初のほどは狂人の仕業として眞面目に取り上げなかつたとさへも噂されてゐる。

そこで假りにこの事件の『不敬』の內容を、かくの如きものと假定したならば、そして[illegible]實に驚くべきこと、恐るべきことは、この教理の內容ではなくて、吾々の常識がとうてい信ずることのできないものとする事柄をも、幾千人幾萬人の民衆——異常な精神狀態にある例外的な少數者ではなくて——がこれを無條件的に信ずるといふ。この盲信の習慣であると云はなければならぬ。

いふまでもなく盲信は、人間が科學的に考へる方法と習慣とを得る前に用ひた思考の方法であつて、それは科學的思考の發達と共にその領域が縮少し、今日は明らかに、人間の無用有害な廢退本能の中に組み入れられてゐる。それは人間の精神作用の方面における盲腸であつて、いやしくもそれが何らかの存在と活動とを示したあらゆる場合に、それはたゞ人間の生活に取つて危險有害なものとしてのみ現はれてゐる。

しかしながら、均しく人間の廢退的な器官ないしは本能たる盲腸と盲信との間には、少なくとも次の如き一點において、著しい相異がある。即ち、一度びその機能を失つた吾々の盲腸は、人爲的にその機能を呼び起こすことによつて、その退化と消滅への傾向を妨げられることがない。しかるに吾々の盲信は、しばしばその作用を人爲的に喚起し利用することによつて、その退化と消滅の傾向が中斷され、妨害せられてゐるといふことである。

社會が或る階級による他の階級の支配の關係となつてからこの方、

そして社會の、、、、、、、、、、、な支配するあらゆる政治形態の下にあつては、力が常にこの支配を維持する物質的の支柱であつたように最も有力にして有効な精神的な手段は、いつでも、、、、、であつた。いかなる支配階級も、、、、、、をもつて、自己の支配を維持する手段に供しなかつたものはない。この、、、、は、すべての支配階級によつて、常に、例外なく、喚起され、鼓舞せられ動員せられたのであつた。

資本主義社會における支配者階級のみが、この有力な武器を棄てようとしてゐるだらうか？宗教が、信仰が、この精練せられた盲信が、自らはこれに對して何らの敬虔の念をも抱かぬ支配階級によつて[illegible]せられるのは、何を意味するだらうか？

わが國のブルジョア政黨と政治家とは、いまあらゆる手段をもつて民衆の思想を『善導』しつゝある。治安維持法の改正、高等警察網の創設、思想檢事の任命、學生監督制度の充實などの如き、消極的鎭壓的な方法は暫らく別として、いやしくも民衆の思想を積極的に『善導』しようとするあらゆる計畫、本來の意味において『思想善導』と名づけ得られる一切の手段と方法とのうちで、、、、、、、——、、、、、に訴へようとするのでないものが、果してどれだけあるだらうか？

政情安定と政黨不安

床次氏の民政黨脫走と新黨樹立は、現代政治家の行動するあらゆる汚ない諸動機のうちの、最も汚ない動機にもとづく行動であるといふことに、ほとんどすべての批評が一致した。そして田中内閣とその與黨とは、この汚ない行動によつて、局面は政府のために有利に展開し日本の『政情が安定した』ものとして、衷心から『國家のために』喜んでゐる。床次氏自身もまた、國家の政局安定のために、この行動に出たのだと云つてゐる。なほその上に床次氏は、小選擧區制の復活によつて、この『安定』を保證しようとしてゐるのである。

最近の民政黨の内部と、政府ないしは床次黨との關係は明らかでない。したがつて政府および床次黨の政局安定運動の系統的な一部分であるか否かは不明である。ことにこの愛黨的陰謀は、大なる收穫なくして終熄するらしい。けれどもそれにも拘らず、田中内閣とその與黨と床次黨とは、多かれ少なかれ、これをもつて政情安定への動きとして、國家のために慶賀してゐるようである。

かうして政情は安定しつゝある。たゞブルジョア政黨自身の、内部的不安定そのものによつて。

田中内閣とその與黨から見れば、政情安定の條件となるこの政黨不安に、たゞ反對黨たる民政黨の内部的不安にすぎぬ。けれどもすべて

のブルジョア政黨を、たゞ一つのブルジョア政治勢力の分裂と見る階級の立場からすれば、民政黨の内部における最近の動揺は、ひとり民政黨の内部的動揺ではなくして、ブルジョア政黨の内部的動揺にほかならぬ。のみならず、この動揺の要素は、政友會のうちにもある。たゞ一日でも長く現在の政權との繋がりを失ふまいとする欲求が、二の動揺を鎭める態さへ不となつてゐる。そこで一度び在野黨となつた政友會には、恐らくは、今日民政黨に見るような動疆が現はれるにちがいない。

そこで早くも、既成政黨の崩解期が來たのだと觀測する人々がある。ブルジョア政黨の崩解は、ブルジョア政治勢力の崩解を意味してゐる。ブルジョア政治勢力は崩解する代りに、今日は未だかつて見ぬ急速な勢ひをもつて、帝國主義的金融資本の勢力を中樞とするところの、強大な、、、政治勢力として結成しつゝある。吾々は固より、ブルジョア政黨の崩壞を夢想することは出來ぬ。

それでは現在の政黨不安は、既成ブルジョア政黨が分解して、新たな境界線に再編制せられる作用の始まりではなからうか？　或はさうかも知れぬ。けれども、少くとも今日では、現在の動揺には、かような方向が現はれてゐるとは云ふことができぬ。今日まで、既成ブルジョア政黨の指導下にあつたブルジョア政治勢力は、果してどのように再編制することができるだらうか。或る人々が、資本主義的勢力と對立するところの、封建的、絕對主義的權力の社會的根據と規定してゐる地主の階級が、ブルジョア……的政黨に隷屬して……か。わが國における今日までの政黨發達史の一面は、まさにこの地主階級の勢力が、完全に近代的資本の勢力に從屬し、完全にブルジョア政治勢力の一部分をなすにいたつた歷史であつた。近代的資本と土地所有との政治的同盟は、同盟といふ言葉の普通本來の意味における結合状態以上に緊密な結合であつて、言葉をかへて云へば、この兩つのものは、地主そのものゝ人身の上に結合してゐるのである。帝國主義的、、、ブルジョア政治勢力の結成によつて、吾々はむしろ、かような政黨發達史の一方面の完成を見るのであつて、今日俄然として、これに反した作用が現はれたと信ずべき、何らの理由もない。現に吾々は、この同盟に、何らの龜裂の現はれてゐることをも認めることができぬ。

小ブルジョアジーは、既成ブルジョア政黨に對立して、獨立な組織を持つだらうか？　これは前者にくらべて、遙かに有り得ることである。けれども現在現はれてゐる既成ブルジョア政黨の動揺、ないしは分解作用から、獨立した小ブルジョア黨が生まれると考ふべき理由は、極めて稀薄であると云はねばならぬ。少なくとも今日までは、既成政黨の範圍内では、小ブルジョア的傾向は分化する代りに、反對に同化せられたと云つてよい。多少の小ブルジョア的傾向を現はしてゐた憲政會の變化、國民黨、革新クラブの消滅がこれを物語つてゐる。

既成ブルジョア政黨に對立する別個の小ブルジョア黨は、普選によ

つて初めて參政權を與へられた要素の支持なしには、不可能である。そして既成ブルジョア政黨が、普選によつてその勢力の基礎を擴大しようとした對象物は、この階級にほかならぬ。普通選擧によつて、一度び既成ブルジョア政黨の指導に歸したこの階級が、再び分離の作用を始めるかどうかは、むしろ今後の問題であつて、最近の政黨不定が、かような方向を指した分解と再編制との性質を帶びてゐないことは云ふまでもない。少なくとも現在のところでは、既成ブルジョア政黨の分解によつて小ブルジョア黨が形成せられるといふことよりも、無產政黨の離合の間から、その一角が小ブルジョア黨に發達する機會の方により多くの可能性があると云つてよい。

既成ブルジョア政黨の分解は、多くのブルジョア政黨の分立狀態を出現するといふ觀測がある。床次氏の第三黨や、噂さの第四黨が、果してどれだけの固定性を持つかは、今日はなほ疑問である。これに反して第三黨または第四黨が、單なる偶然的な現象としても、相當永續的に存在することが必ずしも不可能ではない。政友民政兩黨は、二大財閥とその系統とを代表する政黨として、依然として對立し、この形勢は今後ます〳〵明瞭となり、要因となると假定しても、なほその間にこの二つの勢力の間を浮動する第三黨のあることは、決して根本的にこの形勢を變へるものではない。床次氏がその聲明書において宣言した第三黨は、すなはちかような偶然的な現象としての第三黨であつて言ひかへれば、あい對峙する二大勢力の間に介在して、何時でもその當兵となり、臨時傭ひとなる政黨にほかならぬ。かような意味での第三黨、ないしは第四黨は、嚴密な意味においての、三つないしは四つのブルジョア政黨（それはたとへば金融資本、工業資本、ないしは特に重工業資本といふような、おの〳〵異つた資本を代表するところの）の分立狀態をなすものではなくて、むしろ同一構成をもつたブルジョア大政黨、主要な財閥系に於て代表する主要なブルジョア政黨の、共同の尻尾にすぎないものである。従つて、かような偶然的な現象としての第三黨第四黨は、永續の可能性があると同時に、いはゆる政情變化の偶然によつて、何時でも、再び二大政黨に吸收せられることもできる。

床次氏は國家のために、何時まで水苔の浮いた政情の、、水を安定させる、その尊い貢献をつづけるだらうか。吾々は床次氏の前途を祝つておく。

この稿を了へた後、一時小康を得たかの如く報ぜられてゐた民政黨からは、さらに數名の脫走者を出した。民政黨の分解作用はなほ進行するだらうといはれてゐる。床次氏らの脫走によつて、近い將來に政權が民政黨に廻はつて來ぬことが確實となつたことは、異なつた利害を結びつけてゐた民政黨のたがが一時にゆるんだことを意味し、をり政權のひでりの爲めに既にがた〳〵になつてゐたこの容器から、さらに第二第三の破片が滑べり落ちたにしても、もとより大した不思議はない。

この空隙の第一の破片は、吾々に『昭和維新』を與へようと云ひ、第二の破片は、『憲政』を『一新』してくれるといふ。民衆はもとより彼らから何物を與へられようともしてをらぬ。けれども少くとも、これだけのことを期待することができる。民政黨の脱走者が、恒久的な第三黨として固定することができるか、それとも政友會に吸收せられるかは明らかでない。かりに第三黨として固定し得たと假定したならば、(これはもとより疑問であるが)或る時期の間、ブルジョア政黨の間における政權の移傳は、この第三黨によつて決定せられることゝなる。そしてこれは資本の二大勢力系統の間に介在する幾つかの資本の勢力が、獅子の配け前におけるその交涉力を、著しく増大することを意味してゐる。その範圍において、この『昭和維新』と『憲政一新』とは、利益の分配における割合に變化を與へることを意味してゐる。そしてそれ以上のことをもそれ以下のことをも意味しない。

普選の回收

ブルジョア政黨は、彼らの鬼ヶ島征伐のために、民衆に普選の吉備團子を約束した。しかし彼らの征戰が終つて、いよく民衆に約束の吉備團子を分配する時になると、彼らは資本家的けちんぼの本能を發揮した。彼らは保證金制度により、居住期間の制限などによつて、約束の吉備團子の量目を、三分の一ばかり胡麻化した。彼等はいまや選擧法の改正によつて、小選擧區制の採用や運動費制限の緩和などによつて、一度び交附した吉備團子のうちから、さらに第二の三分の一ばかりを回收しようとする!

中央では、『政情安定』の使命を帶びて生まれた床次黨と政友會とが、まさにこの政情安定のために、小選擧區制還元の陰謀をめぐらしてゐる時に、地方はさらに一歩を進めてゐる。

『過般の總選擧に、龜井、淺原兩代議士を出した前後より、九州八幡市における無產政黨の進出は著るしいものがあるので、これに脅威を感じた同地方の政友會および民政黨では苦肉の對策として、八幡市會における兩派の議員が合同して八幡市政公新會なる政治團體を組織し秘密中に同市選擧區を六區の小選擧區に分つ選擧區條令建議案提出を策謀し、内務大臣に認可申請をなした……』

これに對して、主務省がいかなる處置をとるかは明らかでないが、無產政黨側の反對にかんがみ、或は妥協な方法として、四區くらいに修正して認可するのではないかと傳へられてゐる。無產政黨の擡頭によつて脅威を受けるのは、ひとり八幡市のみではない。この『策謀』が成功したならば、無產政黨の脅威を受ける多くの都市において、ブル

ジョア政黨はこの先例を學ぶにちがいない。

ブルジョア政黨による普選の實施は、參政權に對する闘爭の終りではなくて、ブルジョアジーに對する新興階級の參政權要求運動の始まりを意味してゐる。新興階級の『徹底普選』の要求は、一度び與へた選擧權を同收しようとするブルジョア政黨のあらゆる『策謀』と、正面から衝突する。

對支國論の統一

田中首相は、與黨議員に對して、政府の對支政策を説明した(八月九日)。首相の説明によると、『今日、南方政府の力が非常に延びて支那統一の事業が完成を見んとする事情に至つたのは、帝國としては非常な喜びとなすのみならず、一日も速かにその事業の成就せんことを希望』してゐるのであつて、南北妥協を阻止するために、『直ちに政府は何らかの積極的行動をこの方面に取るかの如き誤解を生ずるかも知れないが、支那は元より帝國とは全く他國のことではあり、又東三省は他國の領土のことであることはいふまでもない……』さうである。田中外交なるものを一枚看板にして、わが黨內閣外務省の聲明のあとから、『適切有効な手段』を取るぞ取るぞとわめいてゐた與黨議員連は、支那は帝國とは他國のことであり、東三省は他國の領土であるといふ田中首相の最近の發見を披露され、『適切有効な手段』とは、『何らかの積極的行動』を取ることではなかつたと聞いては、いさゝか勝手の違ふことを感じたに相違ない。そして彼らは相顧みて、吾々が誇つてゐた田中外交なるものは、幣原外交と畢竟どの點が違つてゐたのかと囁やき合つたに相違ない。

田中首相が、終始一貫して變らないといふ政府の最近の對支方針なるものは、『……東三省の治安が脅威を受くる時は適當なる手段を取るといふやうな口先だけの聲明をくり返すことをやめ、先づ東三省の幣制を改革し、確固たる中央銀行を設立し、金融の圓滑を計り、次いで土地所有權、滿鐵の鐵道敷設權等の懸案を解決し……經濟外交をもつて臨む』こと、『借款若くは日支合辦事業』として、『森林の伐採、鑛山の採掘、牧畜の奬勵、農產物の助成等に對する必要なる諸般の設備』『鐵道、道路、製鐵、製油等の諸事業』を起こすこと、そしてそのためには、『第二次交渉として、財政經濟方面における權威者を派遣して更に實質的交渉に移り、もつて如上の目的を達せんとする』ことなのである。

こゝで明らかに看取せられることは、かような謂ゆる『經濟的外交』こそ、田中外交の『實質的交渉』なのであつて、南北妥協の、、や『適切有効の手段』のごときは、畢竟この實質的交渉の前幕にすぎなか

うたといふことである。田中外交と幣原外交との間に、何らかの相異があつたとするならば、この筋書の第一幕を、鬼面を着けて演出するか、それとも天女の面を着けて演出するかにある。『經濟外交』とは、言葉をかへて云へば、、、の外交であり、借款と合辦事業――金融資本と工業資本の外交である。そして鬼面を着けた田中外交にとつての『實質的』なものが、これ以外何ものでもなかつたように、內政不干涉といふ天女の面を着けた民政黨の幣原外交にとつての、實質的なものもまた、これ以外の何ものでもない。問題はこの『實質』の問題ではなくて、假面の問題であつた。そしてこの假面を取り去つた時に田中首相は『對支國論の統一』を見、民政黨は、『政府の對滿政策に我が黨の政策（幣原外交）に追從し來つた』ことを見た。

これは『經濟的外交』――、、の外交――は、これを田中外交と呼んでも幣原外交と名づけても、同樣に正しいといふこと以外の何ごとを物語つてゐるものでもない。、、、、、、、の『對支國論』は、もとより統一してゐたのである！

無產政黨合同過程の一進展？

或る時は、大衆が合法政黨を要求するのは、合法政黨以外の鬪爭の經驗がないためだとして、合法的政黨必ずしも必要でないといふ見解を取り、或る時は、新黨組織準備會そのものが、勞働者と農民の日常利害のために戰ふ戰鬪的組織（政黨？）そのものであるといふ見解を取り、或る時は、その所屬の組合と政黨の如何を問はず、すべての戰鬪的な分子を地方的に結合した勞農協議會の組織をもつて、舊勞農黨の再建に代へんとするかの如く、或る時は、『勞働者と農民の××樹立』の『基礎的組織』たるこの勞農協議會の組織が『確立發展』した時がすなはち『我々の結黨の日であらねばならぬ』と云ひ、或る時は、日勞黨との（準備會と）即時無條件合同を叫び、或る時は、『結黨の準備着々進む』『愈々結黨の日は近づいた』と云ひ、或る時は、『これに反して日勞黨は、準備會が結黨しなければ合同しないと云つてゐること』を怨み、また或る時は當面に於て、勞農黨の再建と、それ（すなはち新勞農黨）と日勞黨との無條件合同實現を期するものである』と云ひ、千變萬化、その眞實の姿を端睨することのできなかつた新（勞農）黨組織準備會は、最近にいたつて、合同問題に對する態度を聲明し、『今や我準備會の組織は全國的に確立され、活潑なる活動をなし得るに至り結黨への機運は日々熟しつゝある、我等はこゝにより具體的な準備を進め、今年十一、二月の交、我黨の創立を期す』ることを明らかにした。

新黨組織準備會が、その態度を明らかにしたことは、單に合同問題の上からのみ見ても、極めて有益であつた。なぜならば、合同の問題内に入り來る各要素の明確な態度を基礎としてのみ、合同問題は初めて具體的に考慮され得るからである。

のみならず、準備會が合法政黨に對する從來の疑はしい態度をすてゝ、新政黨創立の意圖を明らかにしたことも、合同問題にとつては極めて有利であつて、吾々はこの新政黨の成立する時は、やがては合同問題の上に、恐らくは一新生面を見るであらうといふ期待をもつて、その實現の速かならんことを希望するものである。

これより先き、無産大衆黨は、合同問題促進の必要にかんがみ、新黨組織準備會に向つて、合同に對する態度を明らかにすることを要求した。（八月二十九日）。新黨準備會は、九月一日をもつて、これに對して長文の回答を與へると同時に、五日をもつて、前記の『新黨結成方針に關する聲明書』を發表した。右の回答文によつては、吾々の（恐らくは何人もが）知らんとする準備會の態度と見解とは、何ら明瞭にせられてゐなかつたにもかゝはらず、この聲明書によつて、結黨の具體的な準備を知り得たことは、大なる收穫であると云つてよい。

この『具體的方針』について新聞の報ずるところによれば、（九月六日『東京日日新聞』）第一には、無産各政黨の大合同は、『無産政黨の力を發揮する上には不可缺の組織』たることが認められたことである。すなはち、曾ては——大山郁夫氏の言葉を借れば——『わが勞農黨がそのために（日勞黨との合同のために）一層有力なる政黨となる……らうといふやうな突拍子もないロジックには、斷じて耳を藉すこと出來ない』ものだつた。しかるに——しかるに時間は一切の證文を棒引きする！——しかるに今日は（云ふまでもなく、客觀的情勢の變化と、舊勞農黨の、ないしは大山氏の、内的發展の辯證法によつて！）あわたゞしくもこゝに、この突拍子もないロジックが日常の常識となり、無産政黨の『即時無條件』（この憎むべき無條件！）の合同が、無産政黨の力を發揮する不可缺の組織となる時代の到來したことは、吾々は無産者運動全體のために、新黨準備會と共に慶賀しなければならぬ。

第二の顯著な具體的方針は、『更生と大合同とに便する爲には、勞農黨のいはゆる極左的、或は破壞的主義を避けて、大體、無産大衆黨に酷似せる主義による』ことである（前記『東京日日新聞』）けれども、これは恐らく新聞の誤報であつて、吾々はまた、その誤報たることを希はざるを得ぬ。なぜならば、合法的な存在と合同とに便するために、その『輝やける指導精神』を妥協することは、新黨準備會の自殺にほかならぬからである。

五月八日には、今日は『多かれ少かれ左翼的戰鬪的分子を排除し、社會民主主義に屈從せざる限り、その結黨は不可能』であつた（『勞働農民新聞』）、七月二十二日には、形勢は依然として同一であつた。そこで無産大衆黨が七月二十二日に結黨し得たといふ事實は、この政黨が

——と新黨準備會は推論する——左翼的破廉恥分子の排除によつて支配階級に降服した裏切り者の重要たる實體であつた！吾々は九月五日をもつて、わが新黨組織準備會のために、階級的裏切り者となる危險なしに結黨の準備に着手し得る幸福の日の到來したことを慶賀せざるを得ぬ。

收穫の增減

八月十五日以後の稻作狀況が、『甚だしく憂慮すべき狀況にあり』收穫高は平年作に高く及ばざるもの』といふ、農林省の調査の結果が知れる直前に、突如として米の買占めが始まつた、そしてその背後には政府與黨の某々があるといふ。

そこで定石の通り、米價は狂騰、立會休止、白米の小賣相場は、十二錢の即日値上げ——そして農林省は、『正米値が三十五六圓である限り、米價は決して不穩當と云へぬから』、『取引所の公定相場がどうであらうと、取引者がどうならうと』、『直ちに對策を講究する必要を認めぬ』ことを聲明した。この聲明は、いふまでもなく、政府の米價調節策——政府の持米の賣出しは當分行はれる氣遣ひがないといふ保證を與へたものであつた。この保證が、市場にどのような影響を與へるかは、說明するまでもない。

かうして農林省の第二回稻作調査により、米の收穫は減つて、、の收穫は增加した。（九月七日）

經濟時評

回復途上の日銀の統制力

杉山幹

一　通貨統制力失墜の經過

目下財界の重大問題視せられて居る日本銀行の通貨統制とは、いふまでもなく通貨の數量を調節すること、即ち財界の事情に順應してこれを增加し又は減少せしむることであつて、中央銀行の重要なる機能の一に屬し、これが完全に行はれて初めて一面金本位制を維持するとともに、他面凡ゆる經濟活動に對應することが出來る。若し日本銀行に通貨統制力がなければ、金本位維持が出來ないばかりでなく、通貨數量の調節が出來ない結果、金利、物價、爲替相場等はその歸趨を失ひ、遂に財界は極度の混亂に陷らざるを得ぬことゝなる。尤も金輸禁止期においては、通貨統制は金本位維持を直接の目的とするものではないから、これに問題とするに足らぬとするも、その復舊のためにはその回復は缺くべからざるものなる事は前項の通りである。

ところがこの日本銀行の通貨統制力は、昨年の金融恐慌以來殆んど破壞され、遂に半身不隨の狀態に陷つて了つた。何んによつてここに至つたかといふに、これについては近因と遠因とに分けて見ることが出來る。近因として第一は固定貸の增加である。これは特別融通及臺灣融資法により日本銀行が支出した金額が八億七千九百四十三萬圓の巨額に上り、これがため特融締切當日たる本年五月八日の日銀貸出總額は十億五千七百六十六萬八千圓の巨額に達した。特別融通による貸出は最初應急資金として、預金支拂の準備を目的としたのであるが、中途においてその方針を變更し、休業銀行や不良銀行救濟が主眼となつたためこれ等資金の大半は固定貸となつて了つた。中央銀行に固定貸が多くなつては到底通貨膨脹[illegible]

に流動性を帯ぶるものでたくてはならぬことは今更いふまでもたい。日本銀行が商業手形を優遇せねばならぬといふのもこの趣旨に外ならぬ。こゝに貸出しが固定したとして、通貨收縮の必要が起つた場合は、資金の吸收、公債の賣却等を別としては、如何ともこれを行ふに方法がないのである。

二　日銀の民間預金の消長

第二は民間預金の増加である、日本銀行に對する民間預金は、金融恐慌前においては七、八千萬圓を普通とした。然るに金融恐慌以來漸増して、本年五月十二日には五億三千八百廿五萬五千圓の巨額に達して、從來の最高記錄を作つたのであるが、これを金融恐慌前に比すれば六、七倍の多額となる。かく民間預金が増加した原因及徑路は、日本銀行から特別融通（臺灣融資を含む）として支出された資金が預金の支拂ひとなり、それが一轉して大銀行の預金となり、更に臺灣銀行から支拂はれたコール、マネーは何れも一流銀行の手許に還り、これ等諸事情が相重なつて大銀行への資金集中となり、更にこれが一轉して日本銀行の民間預金となつたのである。この民間預金は無利息であつて、たゞ日本銀行の庫中に保管してあるといふに止り、これに對しては日本銀行は如何ともすることが出來ない、故に若し日本銀行が通貨收縮の必要ありとして金利を引上げたとするも（實際問題としては無いかも知れぬ）この制肘なき預金の引出しがあつたとすれば、通

貨收縮策の如きは全く施すに由ないので
失墜の最大原因をなすものである。主因としては、民間銀行の發
ある。民間銀行はこゝ數年來著しい發展を遂げたのであつて、これ
力が増大すればする程、日本銀行の力は薄弱となり、通貨統制力は
つて來る。これは數年來既に經驗したところであるが、昨年の金融
慌以來は一層一流銀行の資力が増大しただけ、日本銀行の通貨統制
は殺がれた譯である。

三　實施された回復策

かくの如く前記三原因によつて日本銀行の統制力は全く無力となつたのであるが、このまゝ推移するとすれば金利政策は勿論その他諸經濟政策の如きは到底完全に行はるゝものでなく、こゝに財界は擧げて
非常な危地に陷るものといはねばならぬのである。こゝにおいて政
及日本銀行當局は、その統制力回復の對策を講ぜねばならぬことゝ
なつた。これまで講ぜられた主なる對策としては日銀所有公債の賣却
及び公債の新規發行によつて民間遊資の吸收を計つた。日銀所有公債の賣却は、昨年五月以來約五億一千萬圓に達し、この間買入れもあつて、差引き四億五千萬圓内外は市場に賣出され、それだけ資金を吸收した譯である。これ等對策の是非は別問題として政府及日銀のこれ等對策に加ふるに、民間においては社債券類の發行あり、更にまた金融市場は最近に至つて、生糸資金や舊盆節季の季節的資金の需要ある外、

米國の金利高により國内銀行の舊債償還や新規放資が行はれたため、金融市場の一般情勢は下期に入つて、かなり變化し來つたのである。

これが如何様に違つて來たかと云へば、銀行手許が著しく減少したことである、これを東京交換所社員銀行について數ケ月間を比較すれば次の如くである。（各月とも下旬週末を採る）（單位千圓）

月別	金銀在高
五月廿六日	三九〇、四一二
六月廿三日	三二八、六二二
七月廿八日	三〇〇、五〇二
八月廿五日	二六〇、〇六七

即ちこれによれば各銀行の手許資金は五月頃から漸減して、五月下旬の三億九千萬圓に對し八月下旬は二億六千萬圓と、この間一億三千萬圓を減少してゐる。

かく銀行手許が減少したといふことは反面日本銀行に對する民間預金が減少したことであつて、こゝに日本銀行の通貨統制力の恢復上に重大なる變化を招來したのである。いま特融締切以後における民間預金の消長を比較して見る、次の如くである（單位千圓）

五月十二日	五三八、二五五
同　廿六日	四五六、一四九
六月　九日	四四四、二三四
六月廿三日	三九〇、二八四
七月十四日	四〇七、五四六
同　廿八日	三四〇、八七九
八月十一日	三四五、二五九
同　廿五日	二六六、八二八
同　廿八日	一七一、七七一

四　特融回收は統制力回復の一因

かくの如くその減少は五月以降、七月中頃までは著しく目立たなかつたが、その後は急激に減少して八月廿八日には一億七千百萬圓となり、一時に比し三億六千七百萬圓を減少した。この減少の中には一時的のものもあるが、例月の同期に比すればその減少率は遥かに增加してゐるのであるから、九月に入るも從來ほどの恢復あるものとは到底思れぬが、八月末は一時的の資金需要が多かつただけ九月に入つてはその增加力が早く上旬に既に二億四、五千萬圓に達したから月央には案外多額に達するかも知れぬ、然しその傾向だけは充分認め得るのである。これ前記統制力失墜の因中の近因第二の恢復である。これとともに更に統制力の恢復を助成するものは、近因第一の事情たる固定貸の回收である、これについて本年五月十日と八月二十七日とを比較すれば次の如くである（單位千圓）

	五月十日
日銀貸出高	一、[illegible]九六、二一四

內譯

普通貸出	本店分	一〇八、五八八
	支店分	四八、六七四
爲替貸付		七、六七二
特別融通	本店分	六六〇、四〇六
	支店分	二三〇、八七二

八月廿七日

日銀總貸出高　八〇六、四〇八

內譯

普通貸出	本店分	九五、二九二
	支店分	一九、七〇三
爲替貸付		二三、三九三
特別融通	本店分	四四九、三五六
	支店分	二一八、六六二

これによつて兩者を比較するに、五月における特別融通本店分六億六千萬圓であつたものが、最近四億四千九百萬に減少した、即ち二億一千百萬圓の減少であるが、これは主として臺灣融資法による補償であつて、その原因の如何を問はず、それだけ統制力を恢復したことゝなる。その他本支店を通じ二千三百萬圓(臺灣特融二億圓を控除)は回收され、更に日銀重役の談によれば普通貸出中の一億圓は、固定的のものから漸次流動性のものに變つて居るといふ。これ等は何れも前記民間預金減少とともに通貨統制力を恢復せしめたものである。かく通貨統制力失墜の近因たる第一及第二の事情は漸次取除かれつゝあるも遠因たる民間銀行の發達による統制力殺減は依然として除却さるゝに至らぬ。

五　民間預金の減少だけでは油斷ならぬ

故に最近やうやく統制力は恢復に向つたとはいへ、それは程度の問題であつて、無論完全に恢復した譯ではない。しかしてこゝに問題となるは、民間預金が如何なる程度に復したる時を以て常態とすべきやである。金融恐慌前においては、例月月中において七、八千萬圓に下つた、然しながら金融恐慌前と最近とを比較すれば(一)一流銀行の預金增加において異り、從つてその準備金として日銀に對する預金を增加せしめねばならぬこと(二)は金融恐慌前においては、預金準備金を臺灣銀行等主として特殊銀行にコール、ローンとして放出して居つたが、最近においてはこの種の放出先は極めて少なく從つて日銀に對する預金增加となること等はその主なる相違である。然らばこの兩者の相違によつて幾何增加するを常態とするかといふに、預金の增加率、コール、ローンの數量等を差引して比較考究すれば、二億圓見當の增加を當然とし大藏當局の如きは金融恐慌前の七、八千萬圓に二億圓を加へた二億七、八千萬圓から三億圓見當ならば普通の狀態であらうと云つてゐる。この點のみから見る限り通貨統制力は既に回復したも

といへばいへぬ事もない。けれども日銀の固定貸が殘つて居れば、それだけ統制力は殺減されて居るものと見ねばならぬばかりでなく最近の民間預金の減少は主として日銀の公債賣却によるものであつて、換言すれば預金は減つたが質草は增加したことで、この質草は何時にても日銀から資金の供給を受け得るものであつて、殊に公債に對しては利率による制限即ち高率適用は殆んど不可能とされてゐるから、多分の通貨膨脹性を含み、從つて公債の賣却によつて、民間預金が減少したからとて到底、通貨統制力の完全なる恢復と判斷することは出來ぬ。尤も預金引出しによる通貨膨脹と、公債擔保貸出による通貨膨脹とはその間截然たる區別が存するのであつて、前者は日銀當局の手心によつては如何ともすることが出來ぬが、後者は日銀に手加減をなす事を得るとはいへ日銀の統制力を減殺する一重大原因たる事は閑却する事は出來ぬ。

通貨統制力恢復如何は前記の如く、一國の經濟諸政策及び諸施設を行ふ上に甚大なる影響を與ふるものであるが、最近のわが國において最もこれを必要とする所以は、金解禁と重大關係があるからである。即ち金解禁を行ふとして完全なる金本位に復歸した以上、この金本位を維持するがためには、たゞ〳〵完全なる通貨統制力に俟つ外なく、若しこれが完全に出來ぬ狀態にありとすれば、金本位は到底維持することが出來ぬ破目に陷るからである。(三、九、八)

不徹底なる藏相の金解禁論

一 三土氏の所論の矛盾

最近三土藏相は公開の席上、若しくはその他の機會において、しばしば金解禁問題を論議してゐるやうであるが、こゝにわれ等の最も注意を惹くは、最近における藏相の所說が從來に比すれば何んとなく解禁論に傾いて來た感じのすることである、たゞ感じのみである。いふまでもなく現政府の與黨たる政友會は從來傳統的に非解禁論を主張し來つたのであるから、これが幾分なりとも解禁論に傾いたとすれば一大進歩といはねばならぬ。

然しながら現政府には金解禁に對し、どれだけの誠意があるか、これについては甚だ疑問とせざるを得ぬのである。何を以つてこれをいふかといふに(一)は三土藏相の所說そのもの(二)は政府の諸施設について遙かに信を措くべからざるものがあるとともに時に往々矛盾撞着の甚しいものがあるからである。先づ最近における藏相の所說に見るに、藏相は「財界の整理として、事業會社は合併、減資、解散により若しくは社債發行により高利債の借換へを行ひ、銀行は金融恐慌後に

おいて殊に整理が進捗したから、一般財界整理に何等懸念はなく、貿易も昨年に比し著しく入超減を示して改善の跡顯著なるものあるとともに特別融通によつて一時失墜した日銀の通貨統制力も漸次回復したから、金解禁の障害の大部分は殆んど排除されたのであるが、たゞ殘るは爲替の恢復せざることと日支關係で、これ等が解決さるれば金解禁の時期に到來する」といふのである。こゝに所謂日支關係とは爲替上の影響に外ならぬのであるから、三土藏相の所說は要するに爲替相場さへ恢復すれば解禁は斷行するといふにあつて、その他の諸條件は何れも金解禁の實施に差支へないといふを意味してゐる。ところでこゝに不可解とするは爲替相場のみを切り離して觀察したことである。

二　最近のわが爲替低落の眞因

今更いふまでもなく爲替相場は一國貨幣價値の表徵に過ぎない、これが對內的に現はれた場合が物價であり、對外的に現はれた場合は爲替相場となる、この貨幣價値は國家の信用、財界の事情等その國の凡てを反映する標徵である、從つて財界の整理狀況も、國際貸借關係も通貨統制狀況等も殘りなく歷然としてこれに現はれねばならぬ。故に爲替相場が低位にありとすればこれ等の狀況が不充分であるからか、または不充分と見られて居るが爲めといはねばならぬ。殊に最近における爲替低落は通貨統制力の失墜が重大原因たることを看過してはならぬ、即ち日本銀行に通貨を統制する力が無かつたため、昨年の金融恐慌以來非常に膨脹した通貨を、財界の事情に應じて適宜に收縮することも出來ずに居つたため、遊資は溢れて、水の低きに流るゝが如く海外殊に米國方面へ流出したのである、こゝに益々國際收支は不均衡となつて遂に爲替反落の已むなきに至つた、去る三月末四十八ドル臺に上つた對米爲替も、輸出期に入つてなほ且つ四十五ドル臺に低迷する如きは全くこれがためである。

三　內地資金の海外流出

尤も資金の海外流出については、最近における米國の金利高も一因には相違ないが、それは單に副因たるに止るものであるから、現在における爲替恢復の根本條件は通貨統制力の恢復にあるといはねばならぬ。尤も通貨統制力は一時より恢復したことは事實であるが、これは單に統制力恢復の一階梯に過ぎないところの、日本銀行に對する民間預金が一時に比して幾分減少したといふ程度に止つて居り、從つて直ちにこれを以つて通貨統制力の恢復であるとして、爲替問題から引き離すことは出來ないのである。更にまた國際貸借關係もこれと同樣の立場にあつて、たとへそれが漸次改善されつゝあつたとするも、爲替相場が今日の低位にあるやうでは眞に改善されたと見ることは出來ずこれまた到底爲替相場と切り離して考察することが出來ぬものである要するにこれ等は相互に密接な因果關係を有するといふよりも寧ろ爲替相場は、これ等總ての周圍の條件の改善の程度によつて昇降する

のと同ろべきであつて人爲を以つて寒暖計を引下げても大氣の溫度が下らぬと同樣、爲替相場を人爲的に引上げてもこれ等の條件は改善さるべきものではない。

四　四ケ月前の藏相の所論

か丶る關係に對して三土藏相は單純に爲替相場のみ恢復せぬかの如くに論斷し去つたことを甚しく不可解とするとともに金解禁に對する態度を疑ふ所以である。殊に通貨統制については去る五月十五日大阪に開催された全國手形交換所聯合會の席上において次の如く言明してゐる。

目下の金融界は異常の變態的現象を現出し、又通貨の膨脹が容易であるといふ事情にある。加之日本銀行の通貨の調節力には缺くるところがある始末で、か丶る狀態のもとに俄かに金解禁を實行することはその結果を考へると懸念なきを得ない。金解禁に努力するには先づ以つて通貨狀態を改善すること最も必要である。これには今日の狀態を惹き起したその根本原因たる補償法により日本銀行の固定貨を財界に急激なる變動を與へずして回收することに努力するのが最も適當なる方策である。

これによれば金解禁のためには通貨統制力の恢復を必須條件とし、通貨統制力恢復には日本銀行の固定貨回收を唯一の條件とするのである。ところで最近の狀況を見るに、藏相の所謂固定貨とは當然特別融通を意味するものであらうからその回收狀況は如何にといふに僅かに二千六百萬圓に過ぎない（勿論臺灣融資法による補償は別とす）、特別融通總額六億八千萬圓に對比すれば僅かに一少部分で、常時における藏相の言辭からすれば統制力の恢復どころではない。にも拘らず最近は頻りに統制力の恢復を云爲するのであつて、それは前にも述べたやうに單に日本銀行の民間預金減少の一事實を捉へてのみ言つてゐるやうであるが、僅か二、三ケ月間にかくの如く見解を異にするなどはたゞたゞ驚く外はない。

五　解禁の誠意を疑はる丶政府の施設

以上は藏相の言辭に對してのみ述べたのであるが、更に諸政策や諸施設についても、果して金解禁に對して誠意ありや否やを疑はしむる廉が少なくない。これを擧げ來たれば限りがないが、一、二の例をいへば政府が潜かに滿鐵や東拓等の特殊會社に對して外資輸入を慫慂する如きである。外資輸入は凡ての場合ではないが、多くの場合に通貨膨脹を伴ふものであることはいふまでもない、しかるに今は最も通貨收縮を必要とする時であつて、政府もこの方針によつて進むべきことを屢々言明してゐる、これ等は矛盾撞着の甚しいものといはねばならぬ、更に物價政策であるが、物價は財界不況の上からも、金解禁準備の點からも當然低下せしめねばならぬ筈なるに、最近は著しく昂騰してゐる。これは天候、季節等も關係するところ大であるが、幾分にて

も商品傾向にあるとすれば物價政策の不徹底を意味するものに外ならぬ。物價に關聯して更に注目すべきは有價證券類殊に金價類の暴騰である。最近はやゝ低落したとはいへ、なほ相當の高位にある。これ等は昂騰すればする程金解禁の危險性を多くするものであるから、出來るだけ市價昂騰を牽制せねばならぬ筈であるが、これについては何等施設するところがない。更に金利政策について見るも、一時民間銀行に對し日銀當局者から預金利下げを慫慂する如きであつて、若し金解禁を目前に控へてゐるとすれば、金利引下げの如きは全く矛盾した政策といはねばならぬ。これ等を別とするも財政諸政策の不徹底なる如きは餘りに明白な事實である。

六　動搖烈しき其後の爲替相場

かくの如く三土藏相の最近における解禁論は從來より幾分解禁の感じが強くなつたといふに止り、その言辭にもその施設にも極めて不徹底のものが多い。この不徹底が忽ち爲替市場に影響し時ならぬ波瀾を惹起せしめた。即ち八月末まで辛うじて四十五ドル臺を維持した對米爲替は九月に入つて三日には俄然四十六ドル四分の一、稀れには十六分の七の賣唱へさへ現はるゝ奔騰を演じたかと思へば、五日には四十五ドル半を割るといふやうな、一日に半ドル以上の動搖を演出した、かゝる動搖が生ずれば一般商取引は忽ち停滯不振に陥るは已むを得さるところで、秋季に入り重要なる輸出期を控へてその損害は決して少なくないのみならずかゝる動搖を惹起するにおいては、從來の見込間違であつたマルク、フラン等の安定せる新貨、自ら國の安達標をそゝるは明かなところで、こゝに思はざる國家的損失を招かねばならぬ事情も生じて來る。何れにするも爲替相場の動搖は各方面に甚大なる影響を與ふるものであるから、速かにその安定を期せねばならぬことはいふまでもない。しかしてこれを安定せしむるためには金解禁に對し確乎として徹底した方策を樹つる外に途なく、これ即ち金解禁そのものに觸ふる所以であつて、通貨統制力の回復を忘れ、國際貸借の改善を閑却し、爲替相場の如き枝葉末節に拘泥して、この重大問題を論斷し去らんとする態度はわれ等の執らざるところである。（三、九、八）

「プラヴダ」紙連載
近藤榮藏譯

露國共產黨『內訌』錄

（四六判 四〇〇頁）

定價壹圓五十錢
送料二十錢

露國最高權威の理論的大論爭
血湧き肉躍る劇的情景の活寫圖

露國共產黨に於ける所謂「內訌」問題は決して一時的の問題ではなかつた。夫れは幾多の研究に値する問題と教訓とを萬國無產階級の前に提起した。本書は反對派問題に關する凡ての協議、論爭、決議の完全なる記錄である。本書を通讀する事によりて(一)プロレタリア國家の建設と經營の明確な理論、(二)共產黨議會に於ける大論爭の劇的情景、(三)勞農露國の過去現在未來に對する根本的理解、が得らるゝ樣に排列編譯した譯者の手腕は亦驚嘆に値する。若し夫れ反對派に於てはトロツキー、カーメネフ、ジノヴィエフ等、幹部派としては、ブハーリン、スターリン、カリーニン、ルイコーフ等、何れも世界的に有名なる現代的頭腦の最高權威が、その火花を散らしての論爭に於て如何なる態度を示し、如何なる表現を用ひ、又彼等の獅子吼の前に耳を傾ける大衆が、如何に感激し、如何なる彌次を飛ばしたかを、何等の修飾なく、有りのまゝに知るを得るに至つて何人も思はず卓を叩いて快哉を叫ぶであらう。

內容 ○譯者序文○登場人物の地位○中央委員會及中央監督委員會合同協議會と反對派（プラヴダ社說）○全聯盟共產黨中央委員會及中央監督委員會合同全員協議會記錄（ルイコフ、クルジジアノウスキー、モロトフ等）○人民經濟五ケ年計畫に對する反對派テーゼ○全聯盟共產黨中央監督委員會常任委員會決議○共產黨インターナショナルの通告○全聯盟共產黨協議に於ける討論（ブハーリン、ジノヴィエフ、トロツキー、スターリン、スターリン）○意見（クループスカヤ、コロンタイ、片山潜、クララ・ツェトキン）○中央委員會政治報告（スターリン）○全聯盟共產黨第十五回大會に於ける討論（ラコヴスキー、アンドレーヴ、エヴドキモーフ、カーメネフ、ルイコフ、トムスキー、カリーニン）○全聯盟共產黨第十五回大會に於ける反對派の申告書類○反對派問題委員會報告（オルジョニキーゼ）○反對派に對する大會決議○**附錄**（一）ヨフェー遺書（二）廢頹哲學（ヤロスラヴスキー）

發行所 改造社
東京芝區愛宕下町
振替東京八四〇二

Onoto the Pen

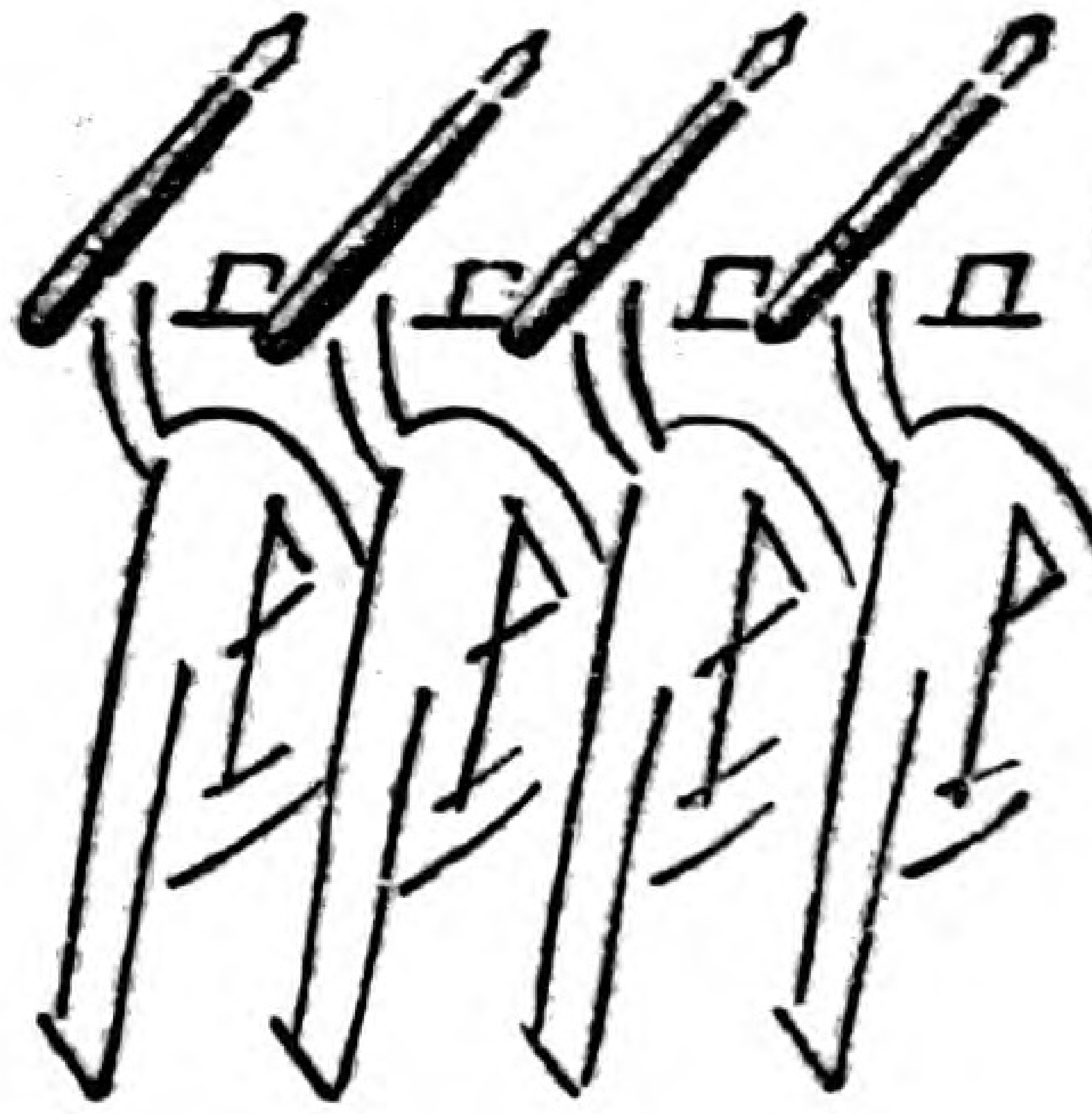
オノト行進曲

一齊にオノトを持つて活動の第一線へ
運筆のテンポも速くペン先の走りも輕く
オノトマーチを奏して

使へば使ふ程書きよくなる

オノト萬年筆　七圓五十錢以上
アテナ萬年筆　三圓五十錢以上
萬年筆用アテナインキ　三十五錢

送料各十八錢（カタログ進呈）



¥1.80

"VALET" AutoStrop Safety Razor

段々若くなる！

宅の主人が十年前よりは若くなつたと皆様が仰います。え、バレーのお庇ですわ、バレーで顏を當りますと胸がスウッとして二つ三つは若返つた氣がすると申しまして毎朝これこの通りでムいますの。

バレー自働研安全剃刀

剃刀で研器を兼ね一枚の刃が半年使へる

價一圓八十錢（革砥一枚、刃三枚付）（カタログ進呈）
外に二・〇〇、三・三〇、四・八〇、一三・五〇以上種々あります

販賣所　大百貨店、著名洋物雜貨金物店等



東京日本橋通三丁目

丸善株式會社

大阪　神戸　京都　名古屋　横濱　福岡　仙臺　札幌

東京―神田｜芝三田｜早稻田｜丸ビル

改造社版「經濟學全集」について

福田德三

經濟學の分野には、古來から、叢書、類書、全書の類其數甚だ多い。殊に近年に至つては、殆んど列擧に遑ないほどになつてゐる。大體の標準によつて、其れらを分けて見ると、必ずしも一定の標準に據らず、過去の重要又は希覯の典籍を集成した叢書、或る一定の標準を立てゝ多かれ少かれ系統的に名篇佳什を蒐めた類書、現在の學問の立場を一定の體系に基いて排列解說し、其の總勘定の全記錄を提供せんとする全書、此の三つに分ち得ると思ふ。英のオーヴアーストン卿の支持にかゝるマカロク編纂の希覯書集、佛のギヨーマンの古典集、伊のクストヂの內外名著集の如きは、第一種の代表的なものであり、伊のヤナコーネの現代經濟學文庫は、更らに、其範圍を擴げたものである。獨のブラーガーの文庫、佛の經濟社會諸學文庫の如きも、或る意味では此種に屬するものと見るべきであらう。

英のアシユレーの古典集、獨のチール・モムペルトの讀本集、ヤストローのテツキスト集の如きは、第二種の代表的なものであらう。而して、此第二種に屬すべき類書又は文庫の數は、現在に於いて、最高位を占めて居て、實に無數である。

此れに反し、第三種の全書は、むしろ少數に屬する。殊に、其の執筆者が現存の學者であり、而して、其收錄すべきものが、主として、新たに下稿せらるべきものであるときには、計劃の挫折、刊行の遲延などの爲めに、中絕するものが尠くないようである。其中でも、嚴格に統一的の體系を立てゝ、執筆諸學者をして、其案に準據して、各分擔しつゝ協動せしむると云ふことは、甚だ困難であるようである。今日までに、其の滯りなく刊行を完ふしたものとしては、殆んど唯一種あるのみと云つて大過あるまい。其れは即ち一八八二年初刊、一八九六—八年第四版刷出の獨のショエーンベルヒの『經濟學全書』Handbuch der politischen Oekonomie これである。此書は、最もよき意味に於いて、當時の獨逸の經濟學（主として歷史派の其れ）の總覽を提供するものとして、久しく珍重せられたものであつた。英にも佛にも伊にも、之れに比肩し得可きものは、殆んどこれを見出し得ないのである。

しかるに、右書第四版發行の一八九八年以後斯學の進步は、實に顯

書であつて、右書は最早斯學の權威たる特典を支ふること能はざるに至つた。而して、其身代りとして、企てられたものは、同じ出版店から刊行しつゝある『社會經濟學大綱』Grundriss der Sozialökonomik これである。此書は、大戰の直前一九一四年に刊行を始め、爾來年を閲する十四年の今日に至るも、未だ全部の刊了を見ないものであるが其編次は、條理井然、あらゆる學問上の要求に應ずることに努力した斷簡然たるもので、たしかに、獨逸經濟學の誇とすべきものである。

然るに、昨一九二七年に至つて、或意味に於いては、其の對立者とも見る可き刊行物が顯はれた。其れは、ハンス・マイヤー教授主幹の『現代の經濟學理論』Wirtschaftstheorie der Gegenwart これである。今日まですでに四卷中二卷が公けになつて居て、殘二卷も間もなく刊行を見るべき旨公告せられて居る。

此兩書は、今のところ經濟學現在進步の立場を、綜覽せしむ可き總勘定の書として、嶄然頭角を顯はして居るもので、他國の學界に、殆んど其類を見ざるものであるが、其編次の體系は、互に著しく相異つたものである。

『社會經濟學大綱』には、全篇を五卷九門に分つてある。

第一卷 經濟の基礎
第一門 經濟と經濟科學
第二門 經濟の自然的並に技術的諸關係
第三門 經濟と社會
第二卷
第四門 現代資本主義經濟の特殊的諸要素
第三卷 資本主義經濟に於ける各個の產業領域と現代國家に於ける經濟的對內政策
第五門 財の流通
第六門 財の生產
其一 工、鑛、建築
第七門 財の生產
其二 農、林、保險
第四卷
第八門 資本主義的世界經濟の諸關係と現代國家に於ける會政策

第五巻

第九門　資本主義の社會的諸關係と現代國家に於ける社會的對內政策

之れに對して『現代の經濟學理論』の編別は、次の如くである。

第一巻　各國に於ける經濟學研究の現況

獨、米、英、佛、伊、那、丁、瑞典、和蘭、露、波蘭、チエクコ、洪、西班牙、希、ユーゴスラヴキア、印度

第二巻　價値、價格、生產、貨幣及信用

第三巻　所得の形成

總論、勞銀、利子、地代、企業利潤、特殊諸問題

第四巻　景氣及恐慌、國際流通、財政學の主要諸問題、社會主義の經濟理論

今兩書を對照して、直ちに看取し得ることは、前者は、經濟學を縱割にし、後者はこれを横斷にして、各々網羅的、綜覽的に其最高の到達境を描き出さんと勉めたものであることこれである。言ひ換れば、『社會經濟學大綱』は、現在の資本主義經濟の機構と現代國家のそれに對する政策とを、上下の兩端に達するまで貫徹して、其の全局面を示さんとするものであるに反し、『現代の經濟理論』には、世界の文明國の一切（但し何故か、日本、支那を除いて）に亘つて斯學の要義を紹介するものである。從つて、前者は、資本主義領域以外に亙らず、而して非資本主義的理論を收錄することを敢てしない。これに反し、後者は、資本主義を尺度としての縱割の代りに、資本主義、非資本主義の一切を横斷的に貫通して、全部面を一の系統的考察の下に寫し出さんとするものである。而して、前者は、近時ドイツ經濟學界最大の天才と一般に許されたマックス・ウェーバー氏が、ブユヒアー・フヰッポヰッチ兩氏の補助を得て立案し主宰したもので、ウェーバー氏の學問的見識が、全體を通じて貫流して居ることが窺はれるに反し、後者は墺太利學派の唯一の殿將とも云ふべきハンス・マイヤー氏が故ヴヰザー先生を記念する意味で、米のフェッター、及墺のライシュ兩氏の助力を得て編輯したもので、編輯者の獨自性よりも、各執筆者の權威の方が重きを爲して居る。從つて兩々相對比するときは、夫れ〳〵に著しく異る特色が濃く顯はれて居て、甚だ興味が深い。

今改造社の企てにかゝる『經濟學全集』の內容編次を仔細に觀察するに、其れは、實に右兩書の特長を、兼備するに著しく意を用ゐた跡が歷然たるを見出す。卽ち此書は、縱割と横斷との二つの標準を合せ採用して、現代に於ける經濟學研究の到達せる境界を網羅的にして而して綜覽的に集大成せんと勉めたものである。資本主義經濟の機構を縱

劃的に其の一切を洩すことなく描出し、現代國家のこれに對する經濟政策と社會政策とを、すべての部門に亘つて一定の學問的體系に立脚して解說することは、ウエーバー氏立案の『大綱』の如くであつて、而して更らに横斷的に非資本主義的諸形相と非資本主義的學說とを、其全面に亘つて取り入れて、これを資本主義的機構、資本主義的學說と併立對峙せしめることは、むしろ『理論』よりも、更らに、より徹底的、より宏量的である。かくて、此書は、言葉の最も眞實なる意味に於いての經濟學全書であり、內容の最も廣い範圍に於いての經濟學總勘定の全記錄であると云ひ得るものと思ふ。恐らく、斯くの如く廣汎に、斯くの如く集大成的なる經濟學全書は、少くとも今日までの經濟學に於いて、始めて見出すところであらうと思ふ。而して、更らに『大綱』の如く、全體の樣案が現代の經濟科學の要求に十二分に應ずるものなると共に、『理論』の如く、其の編輯者の獨自性よりも、各篇の執筆者の權威に重きを置いたことも、また其の特色の一に數へ得ることゝ思ふ。若し更らに他の特色をあげんとならば、其は、『大綱』が十四年を閲して未だ刊了に到らざるが如くならず、『理論』が一兩年の間に全部を刊了する見込であると云ふのと同じく、僅々二三年の間に全篇を刊行し終らんとする一事にありと思ふ。

元より我邦に於ける斯學の研究は、其深さに於いても、其の廣さに於いても、未だ獨逸の其れには企て及はないから、此書の內容が、直ちに、『大綱』『理論』の壘を壓するに至る可しとは斷言し得ないは無論である。しかし、現在の我邦に於て企て得るものとしては、其の全體の結構に於いても、執筆者の振り當てに於いても、粗ぼ遺憾なきに近いものであると言つて大過ないことと思ふ。『大綱』『理論』と雖も、其執筆者は必ずしも當該部門の最高權威を集め盡したとは云へない。此書に於いても、多少已むを得ない事情に制せられて、若干の遺漏は免れまいが與へられた狀況の下に於いて、改造社が其の最善を傾け盡した努は、十二分に報られて居ると斷言して差支あるまいと思ふ。

殊に此書に於いて最も顯著な點は、『大綱』が初めから毫もこれを企てず、『理論』はこれを企てて、徹底的なるを得なかつた一事を、敢て遂行し得たことこれであらう。即ち其の横斷を飽迄も、貫行し得て、資本主義的學說と併立せしめるに、必ず非資本主義的學說を以てするに力を用ひたことこれである。非資本主義學說の最有力なるものは、言ふまでもなくマルキシズムの理論である。本書は、其の各部門に涉つて、マルキシズムの理論を資本主義の其れに配置併立せしめて、資本主義經濟組織に對する批判をして、十二分に其言はんとするところを言はしめて居る。

經濟學のみこそあらゆる社會科學中の最惠者である。何となれば、經濟學は、他の社會科學の何れにも見出さゞるところの有力なる批判者を、マルキシズムに於て有つてゐるから。然るに、今日まで顯はれた經濟學全書、叢書、類書の類多くは、却つて、此の特惠を自ら拋棄し

て、マルキシズムの理論を、全く顧みないか、又は顧みても、『理論』の如く、これを、其の一局部に蟄居せしめて居るに過ぎない。(但し『理論』の第四卷は未刊であるから、内容については、何事も言ひ得ぬ、私は無論排列の上から斯く言ふのである)。然るに、改造社の『全集』は、各篇毎に、資本主義理論とマルキシズム理論とを兩々相對照せしめて居る。此一事は、恐らく斯學に於ける最初の試みであつて、獨り我學の有つ特惠を十二分に活用した所以であるのみでなく、軈て今日の最高水準に立てる斯學の現狀を、最も眞實に、いとも的確に綜括的に寫し出した所以であると思ふ。他に如何に缺點ありとも、如何に不備の點ありとも、私は、此一事を以つて、此全集は、たしかに、學者の首肯を購ふの値十二分なるものと信ずる。

私は、此書の構案について、屢々改造社から、卑見を徵せられ、今又其刊行に方つては、斯學の先覺新進諸彥の末班に列り得ることを、一の大なる光榮と感ずる。殊に從來屢々論陣の間に相見へた我邦マルクス學の碩學河上博士が、其半生の蘊蓄を傾け盡された『經濟學大綱』『マルクス經濟學の基礎理論』の二大雄篇を、私の甚だ拙い二書と同時に公けにすることを快諾せられたことを、此上ない學問的名譽とするものである。私は出來る丈け勉强して、此兩樣の光榮を汚さない樣に勉めたいと念ずるのみである。(二八・八・九)

「經濟學大綱」について

河上　肇

本書の上篇を形成せる『資本家的社會の解剖』は、昭和二年（一九二七年）四月より昭和三年（一九二八年）三月に至る學年に、京都帝國大學經濟學部で、私のなした經濟原論の講義の稿本に屬する。私は右の大學にほゞ二十年間在職したが、講義のためには年々稿本を改めることを習慣としてゐた。たとひ內容には變化を加へない部分でも、新らしくそれを書き直して、ノートのインキが鮮かになつてゐないと、私は元氣よく講義をすることができなかつた。しかし最近には內容を改めらる部分が甚しく減少した。それで今後は每年ほゞ同じやうな講義を繰り返す苦痛を忍ばねばなるまいかと、密かに氣遣つてゐたところへ、私は當局から辭職の機會を與へられた。私は悅んでその機會を捉へ、大學の研究室から私宅の書齋へ退いた。私はこれによつて、同じ題目に關する稿本の改訂を年々繰り返す義務から免れた。私はこれを一期として、私の研究をより以外の領域に進めたく思つてゐる。しかし私はそれ以前に、一應私の講義の最後の稿本を整理して、印刷に附することに決意した。本書上篇はそのためのものである。たゞ改造社の『經濟學全集』の計畫遂行上の必要により、今はこれが補訂に十分の時間を得ることができなかつた。それゆゑ私は遠からざるうちに今一度これに加筆したく思つてゐる。

この稿本を公けにするについては、私は若干の報告と說明とをなさねばならぬ。先づ第一に、右は經濟原論の講義であるとはいへ、一見して何人にも明かなやうに、その實質は、殆どマルクスの『資本論』の解說の如きものである。多くの人々は、それを奇異に感ずるかも知れないが、私から見れば、マルクスの『資本論』は最上の經濟原論であるがゆゑに、自身で經濟原論の講義をなすといふ場合には、全く『資本論』に依據せざるを得ないのである。それにしても、それは餘りにマルクス一天張りではないか、といふ人もあらうが、眞理に二つはないのだから、マルクスの學說がもし眞理を把握してゐるならば、吾々の研究は如何にしても彼れの打ち建てた基礎の上に行はれるの外はないのである。またマルクスの研究法および敍述法からすれば、『資本論』の第一卷の內容は、專ら資本の生產過程の考察でなければならぬし、（從つてそこでは流通過程が捨象されてゐる）、第二卷の內容は、專ら資本の流通過程の考察でなければならぬし、（從つてそこでは生產過

程が捨象されてゐる。なほ第三卷の內容は、これら生產過程および流通過程の統一としての總過程の考察でなければならぬ。またこれを第一卷について言へば、そこでは敍述の進行が必ず商品——貨幣——資本といふ順序を採らねばならぬ。これを勝手に拔き差しできるものの如く考へるのは、まだマルクスの方法を理解せぬのである。自然、私の講義の構成は、一々『資本論』のそれに依據せざるをえなかつたのである。もちろんブルヂョア經濟學の陣營內における諸學者の著作は、現在ではその體系が甚だまちまちであり、曰く何某の經濟原論、曰く何某の經濟原論といふやうに、その內容なりその敍述の順序なりが著しく互に相違するの狀態にあるがゆゑに、その鑑別が他に對して何等かの異色を有つでなければ、學者としての耻であるかの如くに考へられてゐる。だが、或る學問が苟くも科學たるの名に値するものであるならば、その領域における諸學者の硏究は一個の體系に統一されるでなければならぬ。硏究上における諸學者の協力は斯くして始めて可能であり、科學の發展は斯くして始めて實現されうる。そのことは、讀者諸君が理學または醫學の領域における狀態を顧みられたならば、思ひ半ばに過ぎるものがあらう。マルクス學の陣營內にあつては、總ての硏究がマルクスの据えおいた基礎の上に統一されてをる。そしてその基礎工事は、甚しき改修を許さざる程度に、秩序正しく且つ鞏固に建築されてある。經濟學の基礎的部分を說明した私の講義が、殆ど『資本論』の解說の如くなつてゐるのは、根本的には斯かる理由からである。

次に、私の講義は、一學年に亙り每週六時間に限定されてゐた。そこには、かゝる限られたる時間を、對象の重要さに適應して前後の均衡を失はざるやう、各種の問題に配分する必要があつた。このことは私をして、たとひ俗流經濟學派の著作には一般的に多くの頁が費されてゐる題目でも、それがさまで重要でないか又は單なる常識に過ぎないならば、全くこれを無視することを餘儀なくせしめた。なほそれのみでなく、私は大學において隔年交替に經濟原論と經濟學史とを講義せねばならなかつた。交替講義の相手方となつてゐた田島教授が辭職された後も、私の受持は依然舊の如く原論と學史との隔年交替となすべきであるといふのが、教授會での申合せであつた。自然このことは、學史の講義に讓りうる諸學派の批判を原論の講義において省略することを、可能または必要ならしめた。私の講義に他の學派の批判が輕く取扱はれてゐるのは、一つはそのためである。

なほ私の最後の講義は、こゝに公けにする通り、殆どマルクス學の敍述に終始してゐるが、しかしそれは決して最初からさうであつたのではない。この最後の講義に先つ前年度分の講義も、更にその前年度分の講義も、共に活版に附せられ、從來私の意志に反して、『非賣品』として販賣されてゐたが、世間に證據の殘つてゐる此の範圍について見ても、私の講義は終りになればなるほどマルクス學の解說に近づいてゐるのである。そしてこのことは、私が最初からマルクスを盲信

して出發したものでないことを意味する。むしろ私は、私等が今日ブルヂョア經濟學または俗流經濟學の名のもとに排斥してゐるところの、非マルクス的經濟學から出發したのである。現に大正五年（一九一六年）から翌大正六年（一九一七年）に亘る分配論の講義——經濟學上の特殊問題なる題目のもとになせし講義——では、私はボェーム・バウェルク、タウシッグ、クラアク、カアバア、フォシャア、カムマンツ等の學說を紹介するに止まり、マルクスの學說には殆ど全く言及してゐない。なほ大正十二年（一九一三年）から翌大正十三年（一九一四年）に亘る經濟原論の講義案を見るに、緒論は『經濟學とは何ぞや』、『富とは何ぞや』の二節から成り、また本論は第一篇生產論、第二篇交換論、第三篇分配論の三つから成り、更に例へば第一篇は、第一章生產と勞働、第二章勞働の社會化、第三章生產手段、第四章再生產、第五章生產力と社會組織の五章から成り立つてゐる。たゞこれらの篇別だけを見ても、當時の講義は玆に公けにするものと著しくその體系と內容とを異にしてをり、それが甚しくマルクスから遠ざかつてゐたといふことは、恐らく何人にも推察されるであらう。要するに私は、最初ブルヂョアの經濟學から出發して、多年安住の地を求めつゝ、步一步マルクスに近づき、遂に最後に至つて、最初の出發點とは正反對なものに轉化し了へたのである。かゝる轉化を完了するために、私は京都大學で二十年の歲月を費した。このことは、私の魯鈍を證明するに外ならぬが、しかしまた、私の現在の立場をもつてマルクス說に對する無覺判的な盲信に立脚するものとなす一部の世評に對して、或ひは一つの抗辯となすに足るであらう。顧みれば、私のマルクス說への完全なる推移は、輕蔑に値するほどの多年に亘る躊躇と折衷的態度との後に、緩に實現されえたものである。だが路程逡巡の久しきを經て漸く玆に到達しえたる代りには、私は今たとひ火にあぶられるとも、その學的所信を曲げがたく感じてゐる。

本書の下篇『資本家的經濟學の發展』は、大正十二年（一九二三年）八月に公けにした『資本主義經濟學の史的發展』に多少の加筆をなしたものである。（私は近頃、資本主義的生產とか資本主義的社會とかいふ代りに、資本家的生產とか資本家的社會とか言つてゐる。『資本主義經濟學』を新たに『資本家的經濟學』と改めたのは、そのためである。また『史的發展』を單に『發展』と改めたのは、上篇の題名の字數と均衡を保たんがために外ならぬ）。些細なる假名遣ひの訂正などは各頁に及んでをり、またアダム・スミスの自然的自由に關する說明の條下の如く、著しく改作した部分もあるが、しかしそれ以外の重要な變化は、冒頭に序說數節を加へ、また第二章と第三章とにアダム・スミスとリカアドウとの勞働價値說を加へたことである。

この著作は、その公刊に先だつこと何年かの間、經濟學史の研究のために主としてイギリスの經濟學者につき、私の蒐集し來つた材料を整理したもので、その當時大學において私のなしつゝあつた經濟學史

の講義の根本の主なる部分に關する。それと同じ時代における經濟原論の私の講義が、如何にマルクスから遠ざかつてゐたかは、前に一言したが、恰もそれに適應して、この著作も、マルクス學の見地からすれば、甚しき缺陷を有するものである。今重ねて之を印刷に附するに臨み、可能なかぎりにおいて之を現在の立場に引寄せんと試みたが、しかし、譬へば一旦書きおろされた南畫の修正が後からは不可能なやうに、それは殆ど不可能であつた。それのみでなく、むしろ若干の加筆が、それはそれで一の統一體を形成してゐた舊著の面目を傷けたかに感じられてゐる。——私はしばらく元の形態における此の著作について語るであらう。

私は明治三十一年（一八九三年）の秋から明治三十五年（一九〇二年）の夏まで東京帝國大學の學生であつたが、この期間に私は始めてバイブルを繙き、そこに說かれてある絕對的な無我主義とでもいふべきものに、ひどく心を打たれた。それ以來、利己主義と利他主義との問題が、いつも私の心を占領してゐた。大學を卒業して三年目の明治三十八年（一九〇五年）の十二月に、私が一切の職を抛つて、當時『無我愛』を唱道されてゐた伊藤證信氏の無我苑に飛び込んだのは、かゝる年來の問題を根本的に解決せんがためであつたので、決して一時の思ひ付きに出でたのではない。それより三年目の明治四十一年（一九〇八年）の秋には、私は京都帝國大學に赴任することとなり、爾來本年の春に至るまで殆ど二十年間そこに在職したのであるが、そこでの私の研究は、今から振り返つて見ると、經濟思想史の範圍には、最初約十年の間、やはり昔年の問題たる利己主義と利他主義との關係を中心としてゐた。舊著『資本主義經濟學の史的發展』が、最初はマンダギルによる利己心是認の主張に筆を起し、最後にラスキンによる之が否認の主張に筆を擱いてゐるのは、そのためである。それは經濟學史といふよりも、經濟學の領域に反映した道德思想の歷史といふが如きものであつた。それは、善かれ惡かれ、かゝるものとして一の統一を形成してゐたかに思はれる。今回これを再刷するに當り私が新たに追加したところの、アダム・スミスの價値說や、リカアドウの價値說やら、舊著に省略されてゐたのは、當時の計畫からは、むしろ當然のことであつて、かゝる事項を新たに追加したことは、却て全體を一貫せる脈絡を破壞したやうに感じられる。

利己的活動是認の思想の歷史的變遷の敍述、——かゝる思想の成立、發展、および死と、その反對物による代位と、の歷史的過程の敍述、——かゝるものとして先きの舊著は、なほ若干の價値を有ちうるであらう。そこにいふところの利己的活動の是認なるものは、本質的には、資本家の利己的活動の是認なのである。封建社會から資本家的社會への推移の時期——すなはち封建社會が崩壞してその廢墟の上に資本家的社會が成立せんとしてゐる時期——に當つては、ブルヂ・アジーは正に人類の勞働の生產力の發展を代表する立場に立つてゐた。當時の彼等は一の革命的使命を帶びてをり、その使命の實現のために、歷史

は、何等拘束されることなき活動の自由を、彼等に保證せざるをえなかつたのである。封建的な道德思想に反抗して、『私慾は公利である』といふ主張の起つたのは、人間の生活の物質的諸條件の上に起れる變革が、人間のイデオロギーの上に反映したものに外ならぬ。かゝる思想は、資本家的生產の發展につれて發展し、その崩壞期に及んで崩壞せんとしてゐる。私の勞作はかゝる變化の過程を表示するものとしてなほ何程かの價値を有ちうるであらう。

今や第二の變革期に當り、新たにプロレタリアートがブルヂョアジーに代つて、人類の勞働の生產力の發展を代表する立場に立たんとしつゝある。社會形態變革の歷史的使命は、すでにブルヂョアジーからプロレタリアートに推移した。しかもプロレタリアの一切の活動は、强力的にまた精神的に、全般的な拘束を受けてゐる。假に道德論の範圍について見ても、罷業、怠業、その他プロレタリアの企てる一切の階級鬪爭は、いづれも皆な道德的に非難されてゐる。だが千七百年代の初葉に『私慾は公利である』といふ思想が起つたのと同じやうに、吾々の住む現在の社會には、『勞働者階級が自己の階級の利益のために鬪ふのは人類全體の利益のために鬪ふのである』といふ思想が起るべきであり、また現に起りつゝある。階級社會においては、公益の實現は必ず私益の實現を媒介とするものである。

これを要するに、本書下篇はブルヂョア經濟學の歷史的發展の一斑を述べ、本書上篇は斯かる歷史的過程の承繼者たるプロレタリア經濟學の大要を明かにしたものである。全體を名づけて『經濟學大綱』といふは、聊か潛越に似たれども、微力の能ふかぎりにおいては、實際のところ大綱を把握したつもりではある。（昭和三年八月三十一日）

新刊紹介

◇小說　道なき道（翁久允著。定價貳圓五拾錢・東京赤坂區青山南町六丁目一〇一・甲子社書房）

◇戲曲　坂本龍馬（眞山青果著。定價壹圓・東京市下谷區上野櫻木町四五・柳蛙書房）

◇戲曲集　獻　禱（前田河廣一郎著・定價八拾錢・東京市外杉並町高圓寺六一一・文藝戰線出版部）

◇社會劇　更生の誕生日（池田碧丁著・定價五拾錢・東京市牛込區早稻田・早稻田大學出版部）

◇將軍乃木（櫻井忠溫著・定價壹圓貳拾錢・東京市京橋區南紺屋町一二・實業之日本社）

◇御大典と京見物（高橋新六著　定價壹圓・京都市小川通丸太町上ル・神[illegible]書房）

新しき日本に呼び掛ける

衆議院議員　鶴見祐輔

日本は今、もう一度立ち止まつて、自分自身の姿を正視しなければならぬ時になつた。

明治新政府の指導原理は、もう昭和の日本人を感動さすことが出來なくなつてゐる。

明治新政府の樹てた世界政策は、もう日本の世界に於ける位置を進展させることは出來なくなつてゐる。明治新政府の經濟政策は、もう日本民族の生活を安定さすことは出來なくなつてゐる。

昭和の日本民族は、もう一度新しい探索を始めなければならなくなつてゐるのだ。さうでなくしては、今日御互の苦しい生活難は直らない。さうでなくては、今日御互の精神的飢渇は醫せられない。さうでなくしては、今日の世界に於けるお互の民族的確信は定まらない。

その光を我々はどこに求めるのだ。私はかかる光を求めて過去十八年間、大きい世界の隅々を遍歴した。亞細亞の大陸に、南洋の孤島に、南北中米の山と町とに、歐羅巴の川と都とに私は眞理を尋ねて行脚した。人あれば訪れ、書あれば讀み、寺あれば入り、會あれば參し、名山大川の間、平野滄溟の上、私は倦むところなく五大洲を彷徨ひ歩いた。

さうして、豁然として、ある朗らかなる晨私は開眼した。日本を救ふの光は、廣い五大洲のうちにあるのではない。狹い六十余州のうちにあるのだ。名だたる世界の巨人の頭の中にあるのではなく、名もなき日本の男と女との胸の中にあるのだ。

さうだ。王政維新を作り出したるちからが、孔子孟子朱子のうちにあつたのでなくして、貧しき松陰と南洲と山陽と龍馬との中にあり、否、かゝる史上の人物ともならずして死んだ無名の青年達の胸の中にあつたやうに、昭和の時代を作り出すべきちからは、いまは水田に稻を植ゑ、工場に槌を揮ひ商店に荷作りをしてゐる壯青年男女、少年少女の胸の中に燃えてゐるのだ。

その潜在なる力を呼び醒ますことだ、それが新しき日本を作り出すことなのだ。其中から第二の松陰と第二の南洲と第二の龍馬とが出てくるのだ。

日本は艱難の日に於て常に偉人を欠かなかつた國だ。弘安の日に時宗と日蓮とを恵まれ、維新の日に南洲と海舟とを恵まれた日本だ。昭和の御代にはきつとどこかの山村の田の畔から、雄叫して躍り出てくる大丈夫があるに違ひない。

私はいま、斯のごとき未見の大丈夫にむかつて呼びかけんがため、苦心長日月、渾身の熱誠を罩めて『英雄待望論』を著し、之を世に送る。わが敬愛する滿天下の愛讀者各位、冀はくは『英雄待望論』の一卷是非御一讀を賜り、新日本の運命打開の爲、八千萬同胞の福祉の爲、御協力賜はらんことを。

――記者曰く　鶴見祐輔氏著『英雄待望論』は熱誠熱意、全卷これ血であり肉である、之を讀んで奮起しない者があらうか！　何といふ名著であらう、此際老若男女を問はず日本國民全部の必讀を望む、四六判四百頁の大册、定價五十錢破格に安い。九月下旬發賣『東京本郷大日本雄辯會講談社』振替東京三九三〇

第四分冊配本開始

マーシァル原著　大塚金之助譯
經濟學原理

第三、第四分冊は共に價値問題の研究で、第三分冊は交換面、第四分冊はその分配面を取扱つてある。之を反面より見れば第三分冊は需要供給關係の一般理論で本第四分冊は大部分その特殊研究に當る。本第四分冊即第六編は之を序論、特別研究、分配總觀、總結論の四部に分かる。序論では先づ需要面と供給面とを序說し、特殊研究は賃銀、利子、利潤、地代、の四部章に分かれ、之等四部章は夫々一般的部分と特殊的部分とに分たる。續いて之等四部章を總觀して第三分冊に論じたる所との關係を示し、最後に總結論として經濟進步を論ず。經濟學中最も興味深く且つ實際的の部に屬す。

全四巻完結◇一冊壹圓

東京・芝・愛宕下町
改造社
振替東京八四〇二番

——（昭和三年度）——

現代思想·評論家總覽

改造編輯局編纂

（イロハ順）

編纂に就て

□本欄の編纂は、學位氏名及雅號、生地、生年月、學歷、閱歷及外國留學地、專攻科目及主張、著書及最近發表論文、現在職業、現住所等を調査編纂したものである。

□思想家、評論家と云ふ範圍を多數の學者、思想家、文藝家、及操觚者の中から定めることは、頗る難事なので、大體に於て最近發表の著作及評論を標準とし、更に社會評論に比較的緣由の多い人々だけを揭出することにした。そして時日がなかつたので調査洩れの人も少くない。

（記者）

石川三四郎

明治九年五月二十三日埼玉縣兒玉郡旭村字山王堂に生る。哲學館及び中央大學の前身法學院に學ぶ。爾來社會主義運動に投じ明治四十年日刊『平民新聞』の創立に參加す。數回投獄さる。大正二年三月一日秘かに日本を脱走し白國、英國、佛國、モロッコ國等前後九年漂浪す。九年十一月漂然歸國す。「哲人カアペンター」「西洋社會運動史」「放浪八年記」「古事記神話の新研究」「非進化論と人生」の著書あり（東京市外千歳村八幡山）

石原純　理學博士

明治十四年一月十五日東京本郷に生る。明治三十九年東京帝國大學理科卒業。同四十四年より大正十年迄東北帝國大學助教授及教授在職。明治四十五年三月より二年間獨、瑞西、英國に留學。專攻科目理論物理學。著述書名「アインスタイン全集」の譯述、「相對性原理」「物理學の基礎的諸問題」「人間相愛」「戀愛價値論」「歌集靉日」等（千葉縣保田町）

石原謙　文學博士

明治十五年八月東京に生る。明治四十年東京帝國大學文科卒業。大正十年獨逸、瑞西、佛國英國に留學。十二年歸朝。東京帝大助教授。十三年東北帝大教授 專攻科目哲學史 著述書名シュライエルマッヘル「宗教論」、「宗教哲學」。但し以上二著共に絶版。（仙臺）

出隆

明治二十五年三月十日岡山縣津山町に生る。東大哲學科卒業。英國に留學、東京帝大助教授、專攻科目希臘哲學。著書「哲學以前」「神の思ひ」（東京小石川區小日向臺町）

出井盛之

明治二十五年七月廿八日栃木縣安蘇郡葛生町に生る。大正五年早稻田大學政治經濟科卒業、大正六年米國市俄古大學に留學、大正九年歸朝引き續き母校に教鞭を執る。專攻科目經濟學、工業經濟問題「行動經濟學の立場より」「近代經濟組織と學說」「足袋の話」の著書あり（東京市外上戶塚九五六）

生田弘治　長江

明治十五年三月二十一日鳥取縣日野郡根雨町に生る。三十九年東京帝國大學文學部卒業。評論家、「圓光以後」「環境」「最近の小說家」「最近の文藝及び思潮」「徹底人道主義」等の著あり（神奈川縣鎌倉町長谷一六七）

猪俣津南雄

明治二十二年四月二十一日長岡市に生る。早稻田大學卒業後米國ウイスコンシン大學、シカゴ大學、コロンビア大學に留學。大正十二年六月の共產黨事件に連坐して早大講師を罷め現在著述に從事す。昭和二年十二月雜誌『勞農』の創刊に盡力し、指導論客と目せらる。專攻科目經濟學「金融資本論」「經濟學批判」「特權階級論」「新思想の普遍化」「現代日本ブルジョアジーの政治的地位」「帝國主義研究」其他評論多し。（東京市外代々幡町笹塚一、一六九）

猪谷善一

明治三十二年二月十五日富山市に生る。東京本郷湯島小學校、錦城中學を經て大正十二年東京商科大學を卒業、爾來同大學助教授並に附屬專門部教授として今日に及ぶ。專攻科目經濟史、明治經濟史。主要新自由

主義」著書に「經濟學說と社會主義」「明治維新經濟史」「日本資本主義」「朝鮮經濟史」あり。目下巴里に留學中。（東京市外西大久保六〇）

石濱知行

明治廿八年三月廿六日淡路島洲本町に生る東大卒業、歐洲に二ヶ年間留學。大正十四年歸朝、九州大學教授たりしが昭和三年五月當局の忌諱に觸れて辭職す。社會思想同人、專攻科目經濟史、歐洲紀行「闘爭の跡を訪ねて」の著あり。（東京市外高圓寺五五〇）

市川房枝

明治二十六年五月十五日愛知縣中島郡朝日村明地に生る。小學校教員名古屋新聞記者を經て上京、新婦人協會を平塚明子氏と創立、爾來婦人運動に奔走す。大正十年渡米婦人運動を視察し、大正十二年末歸京後、國際勞働局東京支局に入り、一方大正十三年婦選獲得同盟創立に加はり、同會理事たり。昭和三年七月ハワイの汎太平洋婦人會議へ同會代表として出席し、後米國に再び渡り、公民教育の視察に赴く。（東京市外與

蠟山政道

明治廿八年新潟縣に生る。大正九年東京法科大學卒業、東大法學部助教授、「社會思想」同人（東京市外中野町桃園三、三四三）

馬場勝彌　孤蝶

明治二年十一月九日高知縣高知市に生る。二十四年六月私立明治學院卒業、二十八年より三十年迄中學教諭たり。三十年より三十九年迄日本銀行書記となる。「やどり木」「泰西名著集」「モウパッサン傑作集」「戰爭と平和」等の飜譯の外「のもり草」「連翹」「近代文藝の解剖」「最近社會的文藝」等の著書の外小說及評論多し。殊に社會文藝等の造詣深し、故馬場辰猪の令弟なり。明治三十九年以降慶應義塾大學部教授（東京小石川區水道端二ノ一八）

馬場恒吾

明治八年七月十八日、岡山縣倖久郡長濱村に生る。同志社早稲田專門學校等に在學した後ジャパンタイムスに勤むる事十年、紐育で雜誌記者たる事四年、國民新聞記者た

[illegible]「[illegible]」[illegible]小說」等の著あり（東京四谷區南寺町一[illegible]）

林癸未夫　經濟學博士

明治十六年九月十七日、岡山縣高梁町に生る。早稲田大學教授、圖書館長たり。專攻科目、社會政策、工業經濟。「產業民主主義運動」「國際勞働運動史」「社會と宗教と藝術」「社會政策新原理」の著書あり（東京市外代々幡町幡ヶ谷二一〇）

林房雄

明治三十六年五月大分市に生る。本名後藤壽夫。第五高等學校を經て東京帝國大學法學部に學ぶ。大正十五年一月『日本學生社會學聯合會』檢擧事件に連座し退學す。主としてマルクス主義の見地より文化的諸問題を研究し、雜誌「戰旗」同人として、無產文藝評論並に創作多く、短篇集「牢獄の五月祭」「鐵」飜譯「經濟科學概論」「インタナショナルの歷史」等あり。（東京市外高圓寺五六）

林要

明治二十七年五月山口縣に生る。德山中學校、第一高等學校を經て、大正九年東京帝大獨法科を卒業す。經濟學、社會問題を專攻し、現に同志社大學教授たり。ヒルフアデイング「金融資本論」ゾンバルト「社會主義及び社會運動」クラーク「分配論」等の譯者あり。(京都市下鴨北園町一一一)

波多野　鼎

明治二十九年三月愛知縣東春日井郡篠田村に生る。愛知縣立第一中學校、第八高等學校より東京帝國大學法學部に入學大正九年卒業。滿鐵東亞經濟調査局に大正十一年まで在勤す。大正十四年迄京都同志社大學教授なりしが、爾後九州帝國大學法文學部講師となり今日に及ぶ。專攻科目社會問題、社會學等にして、著書に「社會思想史」(絕版)「道德の經濟的基礎」「社會學體系論」等あり(福岡市荒戸町二七〇)

長谷川　萬次郎　如是閑

明治八年十一月東京市深川區に生る。明治卅一年東京法學院(中央大學)を卒業、日本新聞、日本及日本人記者たりし後大阪朝日新聞に入り幹部たり、大正七年退社後大山郁夫櫛田民藏氏等と『我等』を創刊し主幹として今日に至る「額の男」「倫敦」「現代國家批判」「眞實は斯く作る」「現代社會批判」「犬猫人間」等の著書の外多くの評論を公にす。(東京府下東中野九三七)

波多野　精一　文學博士

一八七七年七月長野縣松本市に生る。一八九三年第一高等學校に入學。一八九九年、東京帝國大學文學科哲學科卒業の後一九〇四年より六年迄獨逸國に留學す。一九〇〇年より一七年迄早稻田大學講師及教授たりしが、一九一七年以來、京都帝國大學教授となり現在に至る。哲學を專攻し、「西洋哲學史要」「基督教の起源」「スピノーザ研究」「宗教哲學の本質及根本問題」「西洋宗教思想史」等の著あり(京都市上京區田中西浦町八〇)

服部　英太郎

明治三十二年四月和歌山市に生る。和歌山中學、第三高等學校を經て、大正十二年東京帝國大學法學部政治學科卒業。翌大正十三年四月東北帝國大學法學部助教授に任ぜられ今日に至る。社會政策及社會運動史講座擔任。「社會思想」同人にして、「社會運動史論考」(近刊)並に改造社版「マルクス・エンゲルス全集」翻譯擔任(仙臺市木町末無一一)

早坂　二郎

明治三十年九月三十日宮城縣仙臺市に生る。東北學院、第二高等學校を經て、大正十年東京帝國大學法學部政治科を卒業す。東京朝日新聞、國民新聞の記者を經て、東京毎夕新聞外報部長たる傍、フエビアン協會、獨立勞働協會にも關係せしことあり。現在は專ら著述に從事し、譯著數種あり。(東京市小石川區大塚町五〇八)

西田　幾多郎　文學博士

明治三年八月十日石川縣河北郡字ノ氣村に生る。石川縣專門學校附屬初等中學より第四高等中學校に移り中途退學。明治廿七年東京文科大學哲學選科卒業の上、能登七尾中學、山口高等學校、第四高等學校、學習院等に教授たりしことあり、「善の研究」「思索と體驗」「自覺に於ける直觀と反省」「意識の問題」「現代に於ける理想主義の哲學」「藝術と道德」等の著あり、京都帝大文學部教授

（京都市上京區田中上柳町一一）

西　雅雄

明治二十九年四月二十八日岡山縣勝田郡梶並町に生る。大正四年岡山縣高梁中學校卒業。大正五年七月まで朝鮮江原道廳に臨時雇を勤む。後鳥取歩兵第四十聯隊に入營し除隊後小學校代用教員となる。後上京し牛込秀英舍の文選工などす。大正十年一月以來山川均氏の「社會主義研究」の編輯に當り、大正十二年六月の共產黨事件に連座す。後雜誌「マルクス主義」の編輯人となる。「マルクスの生涯と學說」「社會主義通史」「英國勞働黨發達史」の譯書あり（東京市外世田ケ谷代田一、一五〇）

新居（ニイ）　格（キ イタル）

明治廿一年三月九日徳島縣板野郡大幸村に生る。徳島中學校、第七高等學校を經て大正四年東大政治科卒業、曾つて讀賣新聞、大阪毎日、東京朝日新聞記者をなしたることあり。目下著述に從事す。小說「月夜の喫煙」「近代心の解剖」等あり。（東京市外高圓寺六六九）

帆足理一郎

明治十四年十一月五日福岡縣筑紫郡二日市町大字武藏に生る。中央大學の前身法學院に學び後渡米南加州大學及びシカゴ大學を卒業。歸朝早稻田大學教授たり。專攻科目は宗教哲學、英文學。「宗教と人生」「哲學と人生」「哲學概論」「教育哲學概論」「人生詩人ブラウニング」「精神生活の基調」「深き愛の世界へ」「人間苦と人生の價値」「宗教哲學論」等の著あり（東京市外下落合四〇四）

穗積重遠　法學博士　男爵

明治十六年四月東京市に生る。東京高等師範學校附屬中學校及び第一高等學校を經て明治四十一年七月東京帝國大學法科大學獨法科卒業、大正元年十月より五年二月迄獨「ボン」及び「ベルリン」佛「パリ」英「ロンドン」、米「ケンブリッヂ」留學、民法殊に親族法相續法及び法理學を專修す。「戰爭と契約」「法理學大綱」「親族法大意」の著の外、專門的見地よりせる多くの社會評論あり。「裁判の簡易化」「ロシア革命と婚姻法」「離婚制度の研究」等。東京帝國大學法學部教授（東京市牛込區南町二番地）

本庄榮治郎　經濟學博士

明治廿一年二月廿八日京都に生る。京都大學を卒業す、大正十年歐洲留學十一年十一月歸朝、京都大學經濟學部教授に任ぜらる。「日本社會史」「經濟史研究」「經濟史考」「近世農村問題史論」「近世封建社會の研究」等の著あり。京都帝國大學經濟學部教授（京都市吉田中大小路二〇）

堀　經夫

明治二十九年四月二十日北海道函館市に生る。原籍兵庫縣。廣島高師附屬中學校、第三高等學校を經て、大正九年京都帝國大學經濟學部を卒業し、同十一年まで同大學大學院に學ぶ。後東北帝國大學助教授となり、主として英國に留學し、獨佛米を經て大正十四年歸朝、東北帝國大學教授となり現在に及ぶ。專攻經濟學史。「リカアド經濟原論（譯）」「ボーレ資本主義と社會主義（譯）」「リカアド派社會主義」「經濟と自由」の著あり。（仙臺市元柳町三）

細迫兼光

明治二十九年十一月二十八日山口縣厚狹郡

厚狹町に生る。山口中學、第三高等學校を經て、東京帝國大學英法科を大正十一年に卒業す。直ちに大阪に於て辯護士を開業、勞働運動に參加し、總同盟、官業勞働、農民組合等の顧問たり。大正十五年十月勞働農民黨書記長となる。同黨解散後再組織に奔走中（東京市外池上市ノ倉四三五）

本間久雄

明治十九年十月十一日山形縣米澤市越後番匠町に生る。四十二年早稻田大學英文科卒業「最近の思潮及文學」「生活の藝術化」「社會改造の八大思想家」（生田長江氏と合著）「エレンケイ思想の眞髓」「近代文學の研究」「新文學概論」「尾崎紅葉」「現代婦人問題」等の著書あり。早稻田大學講師、目下英國に滯在中（東京市小石川區雜司ケ谷一四四）

本位田祥男（ホンイデン）

岡山縣英田郡大原町下町に生る。東京帝國大學卒業後、大正十二年より二ケ年歐米留學。農商務省に數年勤務の後、東京帝大經濟學部に轉ず。經濟史を專攻し、著書「消費組合運動」「消費組合巡禮」「人間復興」「ロベアトオウエン自叙傳（譯）」「英國經濟史要」其他消費組合に關するパンフレツト數篇（東京市外大森久ケ原五六五）

朝永三十郎（トモナガ）　文學博士

明治四年二月長崎縣東彼杵郡川棚村に生る。長崎縣致遠館中學校、東京英語學校、第一高等中學校を經て、帝國大學文科大學に入學明治三十一年七月卒業、明治四十二年十一月獨、英、佛三國、主としてベルリン、ハイデルベルヒ、ライプチツヒに留學、更に大正十三年再び歐羅巴を視察す西洋哲學史を專攻「カントの平和論」「我の研究」等の著あり。京都帝國大學教授（京都市吉田近衞町九）

千葉龜雄　江東

明治十一年九月廿四日山形縣酒田町に生る。仙臺市立第一中學、早稻田大學歷史科をいづれも半途で退學、國民英學會卒業、曾に時事新報社會部長、讀賣新聞編輯局長たりしが、大正十五年二月より東京日日編輯顧問たり。外國文學に關する著書及び多くの評論あり（東京府下荏原郡大井町字鹿中塚四、八四二）

小野清一郎

明治二十四年一月十日盛岡市に生る。大正六年三月東京帝國大學法科卒業後、司法官試補となり大正七年十一月東京地方裁判所檢事となる。大正八年一月東京帝國大學助教授、大正十二年八月同教授。フランス、パリ法科大學を主としドイツ、アメリカ等に留學す專攻科目は刑事法。「刑事訴訟法講義」「犯罪の時及び所」の著あり。（東京市本鄕區弓町一の二五）

大內兵衛

明治二十一年八月廿九日兵庫縣淡路松帆村に生る。大正二年東京帝大卒業、大正八年まで大藏省奉職六年、爾來東京帝大經濟學部教授たり。大正五年――六年紐育、大正十、十一、十二年獨、英、佛に遊學す。專攻科目は財政學にして譯書「マルサス人口論」「ミルの婦人解放論」、著書「俸給生活者の沒落とその運動」「勞働黨內閣の財政策」「現代英吉利の政治過程」其他數種あり（東京市外大久保百人町三八四）

大塚金之助

明治二十五年五月二十九日東京に生る。大正五年東京高等商業學校專攻部卒業同校講師。大正八年留學、紐育・倫敦・ローザンヌを經て主に伯林に在り。大正十二年歸朝。爾來東京商科大學敎授、專攻科目經濟學及び社會學。昭和三年六月マーシアル經濟學原理普及版四冊を譯刊す（東京市外中野町字大塚一、八三〇）

小川健作　未明

明治十五年四月七日越後高田市に生る。著述業、早稻田大學英文科出身、著書は小說集「赤き地平線」「血で描いた畫」「彼等の行く」「小川未明選集」等、感想集「生活の火」「人間性のために」等、童話集「ある夜の星たち」「港に着いた黑んぼ」等（東京市小石川區雜司ヶ谷町七六）

小野武夫　農學博士

明治十六年八月三日大分縣大野郡百村村大字川邊に生る。東京商科大學講師。明治三十四年大分縣立農學校卒業、日露戰役に出征し陸軍步兵少尉たり、明治四十二年以來農商務省勤務、傍ら研學を續く、明治四十五年法政大學卒業、大正二年より六年迄帝國農會[illegible]課長、大正九年より十二年迄農商務省囑託、主として專ら小作制度の調査に從事す。專攻科目、農政學殊に農民經濟史にして「黎明期の農村」「農民經濟史研究」「永小作論」「農民運動の現在及將來」「鄕士制度の研究」「農村研究講話」「日本農民史語彙」「農村機構の分裂過程」「百姓一揆叢談」「日本村落史考」の著あり（東京市外小金井村上山谷二、七七三）

大島正德

明治十三年十一月十一日神奈川縣高座郡海老名村中新田に生る。明治三十四年第一高等學校文科卒業、明治三十七年東京帝國大學哲學科卒業、哲學倫理を專攻。「新思想の批判と主張」の著の外「人格の本質としての自由の根本義」「議會是非」「新實在論の論旨」等多くの評論あり。東京帝大文學部助敎授より、東京市學務局長たりしことあり、再び帝大講師となる（東京本鄕區駒込千駄木町五二）

大山郁夫

兵庫縣飾磨に生る。明治卅八年早稻田大學[illegible]なり、留學生として英國に四ヶ年滯在。歸朝後同校に敎授たりしが、大正六年騷動後大阪朝日新聞に入社言論記者たり、大正七年之を辭し長谷川如是閑・櫛田民藏氏等と雜誌「我等」同人、後再び早大敎授となる。「民衆文化」「社會敎育」「政治の社會的基礎」「民族と階級」「現代日本の政治過程」「大衆に呼びかける」「鬪爭の跡」等の著の外社會評論時事評論等頗る多し。大正十五年三月聘せられて勞働農民黨々首となるに及び早大敎授を辭す（東京府下戸塚町上の臺六九一）

奥むめお

明治二十八年十月二十四日福井市に生る。福井高等女學校を經て、大正五年日本女子大學家政科を卒業す。爾來婦人運動に參加し今日に及ぶ。月刊「婦人運動」を主幹し職業婦人社を經營す「婦人問題十六講」其他の著あり（東京牛込區市ヶ谷本村町四）

渡邊鐵藏　法學博士

東京帝國大學法科卒業、引續き同校に敎授たり。曾て社會問題としての都市問題に關して研究を發表し　都市改良の爲め東京市

究會を起して宣傳と研究に力む、其他思想問題に關する評論多し。都市研究會理事、東京帝國大學教授より東京商業會議所書記長となる(東京赤坂區青山南町一の二七)

和辻哲郎

明治二十二年三月一日兵庫縣神崎郡仁豐村に生る。明治四十五年東大哲學科卒業。その前後一時文壇に顏を出す。次でニイチエ、キエルケゴオル等の詩人哲學者を耽讀。後に佛教美術が面白くなり、次いでその興味が日本思想史に集中され、目下その研究中。京都帝國大學助教授、專攻科目哲學及哲學史、日本倫理思想史、佛教倫理思想史等。著書「ニイチエ研究」「ゼーレン・キエルケゴオル」「偶像再興」「古寺巡禮」「日本古代文化」等あり(京都市鹿ケ谷寺ノ前町二二)

河西太一郎

明治廿八年三月十八日生。大正九年東京帝國大學卒業。研究科目は農政學、立教大學教授。「農業の社會化」「社會主義と農業問題」「農業問題研究」「土地問題論」等の譯著あり(東京市外中高井戸二〇)

片山潜

マスター・オブ・アーツ。バチエロル・オブ・ジヴィアニチ、

岡山縣津山に生る。アメリカの大學を卒へたる後、日本に於て、キングスレーホールを設立し『平民新聞』に關係したる事あり。其間熱烈なる勞働運動、社會主義運動を試みたるが、政府の壓迫酷烈の爲め遂に米國に逃る。東洋經濟新報記者たりしことあり。夙に社會主義に共鳴し、日本に於ける社會主義者の最長老たり。ボリシエヴズムを奉ずるや米國を追はれ入露し、目下ソビイエツト・ロシヤにありて第三インターナショナルの常任執行委員の一人なり"Labour Movement in Japan"(シカゴ發行)「自傳」の著あり。

河瀨憲次

明治二十三年二月十六日京都府天田郡福知山町に生る。中學校卒業直後、東京高工建築科に居たることあり、中途退學して廣島高師英語部に學び、大正六年京都文科大學哲學科を卒業す。廣島高等師範教授、專攻科目は純正哲學(廣島市千田町三四五)

勝部謙造

明治十八年三月十四日島根縣簸川郡久木村大字原鹿に生る。京都大學文學部哲學科卒業、廣島高等師範學校教授「デイルタイの哲學」「デイルタイ哲學の本質」「新カント學派の教育說」の著あり(廣島市皆實町一、五〇七)

金子馬治　筑水　文學博士

明治三年一月十日長野縣小縣郡殿城村に生る。明治廿六年元東京專門學校文科卒業引續き早稻田大學教師たり。獨逸ライプチヒ、ベルリン、ハイデルベルヒ等に遊學す。近代思想研究」「歐洲思想大觀」「生活と文化」「哲學概論」等の著の外幾多の文藝哲學評論あり。先年健康勝れず早大文學部長を辭す(東京市外上落合)

加藤一夫

明治二十年二月二十八日和歌山縣西牟婁郡大都河村に生る。基督教牧師をすること二年、女學校教師をすること四ケ月、それより文筆に勞働。トルストイ、ロマン・ロラン、カーペンター等の翻譯。旁に人生問題に關する論文、詩、及小說を書く。それより社

文學」「自由人」等の雜誌を發行す。[illegible]以來個人雜誌「原始」を創刊す。「本然生活」「民衆藝術論」「土の叫び地の囁き」「自由人の生活意識」等の著あり。（神奈川縣都筑郡新治村中山大六天）

河上肇　法學博士

明治十二年十月山口縣岩國に生る。東京帝大卒業後農科大學實科、學習院等に講師たり。後教員をやめて讀賣新聞記者となり、讀賣退社後は日本經濟新誌の創刊に與かり其の主筆となる。明治四十一年以後京大教授たりしが、昭和三年五月大學問題の際自ら教職を抛ち、爾來著述に沒頭す。個人雜誌「社會問題研究」を發行し學界に獻與する所大なり。「貧乏物語」「祖國を顧みて」「社會問題管見」「唯物史觀研究」「近代經濟思想史論」「社會組織と社會革命」「資本主義經濟學の史的發展」「人口問題批判」「資本論入門」「マルクス主義經濟學」等多くの著作あり。（京都市吉田二本松町）

神戸正雄　法學博士

明治十年四月愛知縣一宮町に生る。明治三十三年、東京帝國大學法科卒業、直ちに同大學院に入り、三十五年、京都帝國大學法科大學助教授となり、三十七年八月、文部省留學生として歐米に渡り、特に獨逸ゲュルツブルグ大學シャンツ教授に師事して財政學を專修す、四十年九月、京都帝國大學法科大學教授となり、大正二年九月カーン財團より歐米に派遣せられ三年十二月歸朝して今日に至る。一般財政經濟及社會問題、特に租税論を專攻す、獨逸文著書二種邦文書二十種に上る外幾多の社會評論あり。個人雜誌「時事經濟問題」を主宰す。京都帝國大學教授、（京都市上京區淨土寺西田町七〇）

河津暹　法學博士

明治八年一月東京に生る。東京帝國大學法科卒業後同校に教授たり。卅三年英獨に、四十五年米國に留學。夙に經濟的見地より社會問題の解決に力め多くの著書と評論あり、社會政策學會員、帝國大學經濟學部教授（東京市外中野町桃園）

河田嗣郎　法學博士

明治十六年四月山口縣玖珂郡伊陸村に生る。明治四十年京都帝國大學法科大學卒業、[illegible]四十一年京都帝國大學講師、四十二年同助教授に任ぜられ、大正元年より五年まで獨英佛米に留學、大正七年京都帝國大學教授に任ぜらる。經濟學を專攻し「家族制度の發達」「資本主義的精神」「價値論（共譯）」「土地經濟論」「日本の經濟と佛英」「社會主義論（經濟全書中の一卷）」「婦人問題」「植民地としての巴西」「穀價の研究」「農業倉庫論」「家族制度研究」「社會問題及社會運動」「經濟學要義」「農村問題と其對策」「農政四十二講」「家族制度と婦人問題」「社會問題綱要」等あり。昭和三年大阪市立商大學長となる（京都市上京區北白川追分町七七の一）

嘉治隆一

明治二十九年八月三日生。第一高等學校より東京帝國大學法學部を卒業す。後二年間同大學院にて法理學を專攻す。現在滿鐵東亞經濟調査局員たり。雜誌「社會思想」同人。著書「マルクスとエンゲルス」「近代ロシヤ社會史研究」等あり（東京市外高圓寺五四八）

河村又介

明治廿八年生る。山口縣の人。大正八年東京帝國大學法學部を卒業す。農商務省に勤務し後東京帝國大學法學部の助教授たり、大正十二年獨逸に遊學し、歸朝後東北帝國大學法學部教授となる。專攻科目は國家學（仙臺市琵琶首新町一七）

河合榮治郎

明治廿四年二月東京府下千住町に生る。東京府立第三中學校第一高等學校を經て、東京帝國大學を大正四年卒業、大正七年より大正八年に亘り米國に滯在勞働問題を研究す、農商務省參事官たりしも議合はずして辭職す。「勞働問題研究」「社會思想史研究」「在歐通信」の著の外社會評論多し、東京帝國大學教授（東京府大井町四、九四八）

賀川豐彦

バチエラー・オブ・デヴニチー

明治二十一年七月十日神戸市島上町一〇八番地に生る。德島中學卒業（明治三十八年）明治學院高等科二年修業（明治四十年）神戸神學部卒業（明治四十四年）後米國プリンストン大學神學校（一九一六年）に學び學位を受く、神戸貧民窟に縁居したることあり、獻身的に貧民傳道に從事す。心理學、哲學、神學、生物學を修め、主觀經濟の上に立ちたるギルド・ソシアリズムを主張す。「貧民心理の研究」「精神運動と社會運動」「人間苦と人間建築」「主觀經濟の原理」「基督傳論爭史」「涙の二等分」（詩集）「死線を越えて」（小說）「地殼を破つて」（散文詩）「預言者エレミヤ」「友情」「イエス傳の教へ方」「太陽を射るもの」「星より星への通路」「生存競爭の哲學」「雷鳥の目醒むる前」「空中征服」「苦難に對する態度」「雲水遍路」の著あり、（大阪市此花區四貫島セツルメント）

加田哲二

明治二十八年十一月十六日東京市本郷區湯島三組町に生る。東京京華商業卒業後大正八年三月慶應義塾大學理財科卒業、直ちに同大學助手兼豫科教授となり、大正十二年四月より十五年三月まで獨逸へ留學、社會學を專攻す。著書「經濟價値論」「國家學說と社會思想」（以上絕版）「ウイリヤム・モリス」「近世社會學成立史」「社會學概論」、譯エンゲルスの住宅問題（マルクス、エンゲルス全集改造社版）。現に慶應義塾大學經濟學部教授として社會學及び獨乙經濟學史を講ず。（[illegible]）

神近市子

明治二十四年六月六日長崎縣北松浦郡佐々村大字佐々に生る。長崎市活水女學校を經て東京女子英學塾を卒業す。婦人運動の先覺者にして、女學校教師、新聞記者、語學教師等の閱歷あり。現在はマルクス主義を奉じ、外人相手の日本語教師、和文英譯等の仕事に從事す。著譯書「人類物語」「未來をめぐる幻影」等（東京市外駒澤町上馬五九五）

與謝野晶子

明治十一年十二月七日堺市に生る。堺市高等女學校を卒業し、獨學にて史學と文學を修む、明治三十三年以來新詩社同人として歌壇に新機運を啓す。大正元年歐洲諸國に漫遊「新譯源氏物語」「新譯榮華物語」「火の鳥」「激動の中を行く」「晶子歌話」「人間禮拜」「人間往來」等の著作あり（東京市外下荻窪三七一）

吉江喬松 [illegible]

明治[illegible]

大學留學生として獨逸内に赴き、主に獨逸西文學を研究し九年八月歸朝。論文集「〔illegible〕生活」「愛と藝術」等の外「エミール」「ミ〔illegible〕」の佛譯、ツルゲネーフ、モウパッサン、メエテルリンクの邦譯「近代文明と文藝」「高原」「旅より旅へ」「青空」「砂丘」「雲の原」等の文學著作多し。早稻田大學教授（神奈川縣鎌倉町長谷五八八）

吉野作造　法學博士

宮城縣仙臺に生る。東京帝國大學卒業後歐洲に留學し帝大教授として社會評論と政治論等を公にせしも、大正十三年大學を辭し、東京朝日新聞社に入社す。後辭して現に東大講師たり（本郷區駒込神明町三二七）

米田庄太郎　文學博士

明治六年二月奈良縣添上郡辰市村に生る。奈良英和學校を卒業したる後、米國ニューヨーク市ゼネラル・セオロジカル・セミナリー、米國紐育市コロムビア大學、佛國巴里市コレッヂ・ド・フランス其他二三の歐洲大學を卒業して社會學を修む。「輓近社會思想の研究」「新理想主義の歷史哲學」「現代人心理と現代文明」「經濟心理の研究」「現代文

[illegible]人の心理」「[illegible]」「歷史哲學」「[illegible]」等の著書を出し多數の社會評論と研究の結果とを公にす。京都帝國大學文學部教授たりしも目下は京大法學部講師たり（京都市岡崎入江町）

高野岩三郎　法學博士

明治四年九月二日長崎市に生る。東京帝大法科政治科卒業、明治二十八年七月外國留學——明治三十二年乃至三十六年東大教授——明治三十二年乃至大正十年、現に大原社會問題研究所長たり。東大卒業後主として獨逸ミュンヘン大學に留學す。社會統計學社會問題を專攻、「社會統計學史研究」（四論文集）「本邦人口の現在及將來」の著書あり（兵庫縣武庫郡住吉村花田一四〇五）

田邊元　文學博士

明治十八年二月三日、東京市に生る。明治卅七年一高、四十一年東京帝大文科卒業、大正二年より大正八年まで東北大學理學部講師、大正八年より京都帝國大學教授たり。伯林、フライブルク兩大學に留學、哲學を專攻し「最近の自然科學」「科學概論」「カントの目的論」「數理哲學研究」の著書あり

[illegible]「[illegible]」等著述も[illegible]

高橋誠一郎

明治十八年橫濱市に生る。慶應義塾大學卒業後同校に敎鞭を執り歐洲に留學して經濟史を專攻す、歸朝後同校教授として今日に至る。「經濟學史研究」「歐洲經濟學史」の大著作の外多くの評論と研究とを公にす（相州大磯町王城山五二九）

高田保馬　文學博士

明治十六年十二月廿七日佐賀縣小城郡三日月村に生る。明治四十三年京都大學哲學科卒業、米田博士指導の下に大學院在學、以前商大、廣島高師につとめ、現に九州大學教授、社會學經濟學を專攻し「社會學原理」「現代社會の諸研究」「社會と國家」「社會學概論」「現代社會の諸研究」「分業論」「大數法論」「階級考」「階級及第三史觀」「人口と貧乏」（佐賀縣小城郡三日月村）

高畠素之

明治十九年一月群馬縣前橋市に生る。群馬縣前橋中學卒業、曾て賣文社員となり、大化會、經綸學盟等に關係せることもあり。

加ふるに牧師たらんとして、傳道に從事したることあるも、萬事意に任せず、退いて再び著述を業とす、「資本論」「社會問題辭典」「資本論解説」「社會進化思想講話」「唯物史觀の改造」「社會學思想の人生的價値」「財産の進化」「批判マルクス主義」「古代社會」「社會主義と進化論」「社會學入門」「論・想・談」「マルクス學解説」等の著書あり（東京市本郷千駄木町五四）

高柳賢三　法學博士

明治廿年五月十一日埼玉縣熊谷町に生る。東京帝國大學法學部教授たり。震災後命を奉じて、歐米各國を巡遊し東大の爲めに圖書數十萬卷の蒐集に多大の效をおさむ。「新法學の基調」「現代法律思想の研究」の著書あり（神奈川縣逗子町小道路四三一）

高橋清吾　政治學博士

明治二十四年三月三日宮城縣宮城郡利府村に生る。早稻田大學教授、大正二年早大專門部政治經濟科卒業大正三年米國紐育市コロンビア大學留學大正七年歸朝以來教職に從事す。專攻科目は政治學。著書「歐洲政治思想史」「歐洲社會制度の發達史」「都市政論」「改造期の政治學説」「政治の科學的觀測」（東京市外戸塚町諏訪一七五）

高橋龜吉

明治二十五年一月生。出生地、山口縣德山町西町。略歴、十五歳の時高等小學校半途退學後直ちに大阪に上り、一ヶ年袋物問屋に丁稚奉公す。次で十六歳の時朝鮮咸北城津に渡り四ヶ年半を店員生活に過す。歸國後直ちに早稻田大學に入學、大正五年卒業。久原鑛業に入社、七年退社直ちに東洋經濟新報社に入り、昭和二年まで記者をなす。退社後著述業。著書「經濟學の實際智識」「金融の基礎智識」「日本資本主義經濟の研究」「末期の日本資本主義經濟とその轉換」「資本主義末期の研究」（東京市赤坂區青山南町五ノ三七）

田中喜一　王堂

東京に生る。文學及哲學上の評論を以て聞ゆ。「哲人主義」「書齋より街頭へ」「徹底的個人主義」等の著作の外評論頗る多し。立教大學講師（神奈川縣逗子町櫻山一七三七）

瀧川政次郎

明治三十年五月廿六日大阪市に生る。大正十一年東大法學部獨法科卒業、同年中央大學、法政大學、日本大學講師受託、大正十二年司法官試補拜命、大正十四年任九州帝國大學助教授・專攻科目は日本法制史。著書「日本法政史講義案」（小石川區宮下町二七）

高岡熊雄　法學博士、農學博士

明治四年八月十五日島根縣鹿足郡津和野町に生る。明治二十八年札幌農學校卒業直に同校に奉職、明治四十年東北帝國大學農科大學教授、大正七年北海道帝國大學教授に任ぜられ明治三十四年獨逸に留學を命ぜられ獨逸ボン大學及伯林大學に三ヶ年半勉學、大正十二年歐米諸國を視察す。專攻科目は經濟學特に農政學及植民學、「北海道農論」「日本內國植民論」「普魯西內國植民制度」「米國の農業教育」「農業政策」「農政問題研究」「ブラジル植民研究」「經濟學農政學研究叢書」（既刊四冊）（札幌市）

平貞藏

明治二十七年八月、山形縣北村山郡に生る。

[illegible]

學法學部を卒業、外國經濟史を研究し、「社會思想」同人。現に法政大學經濟學部教授兼圖書館長なり（東京市外高圓寺九一八）

淡　徳　三　郎

明治三十四年八月十五日大阪市に生る。今宮中學校、第三高等學校を經て、京都帝國大學文學部哲學科に入る。大正十四年三月卒業、同大學院に入り、社會學を專攻す。大正十五年一月「日本學生社會科學聯合會」檢擧事件に連座す（東京市外代々幡町幡ケ谷八八）

田　中　九　一

明治二十九年九月一日愛知縣に生る。大正十年東京帝國大學法學部を卒業す。爾來滿鐵東亞經濟調査局に在り。譯書としてボルハルト「マルクス經濟學大綱」ゾンバルト「奢侈と資本主義」トロツキー「ロシアは何處へ行く？」あり（東京市外中野町打越二一〇七八）

田　中　耕　太　郎

明治二十三年十月二十五日鹿兒島市に生る。（佐賀縣出身）第一高等學校を經て、大正四年東京帝國大學法科大學を卒業す。大正四年內務省地方局に勤務し、大正六年東京帝大法學部助教授に任ぜらる。大正八年より同十一年に至る三ケ年英、佛、伊、獨の諸國留學、大正十二年東京帝國大學法學部教授に任ぜられ、商法講座を擔任して現在に至る。著書、「合名會社々員責任論」「商法總論概要」「會社法概論」「法と宗教と社會生活」（東京市外巣鴨町一ノ六三）

恒　藤　　恭

明治二十一年十二月島根縣松江市に生る。明治三十九年島根縣松江中學校卒業大正二年第一高等學校卒業、大正五年京都帝國大學文科大學卒業の上、大正八年九月より同志社教授たりしも、十一年京都帝國大學助教授となり歐洲に留學、「ジムメルの經濟哲學」「マルクス主義の根本問題（飜譯）（京都市上京區下鴨森本町六）

土　田　　茂（ツトム）　杏村

明治二十四年一月新潟縣佐渡郡新穗村に生る。東京高等師範學校博物學部を卒へ、京都帝國大學文科哲學科卒業、京都帝國大學大學院に學ぶ。哲學、生物學を專攻す。「文明思想と新哲學」「生物哲學」「文化主義原論」「日本支那現代思想研究」「文學論」「文學の哲學研究」「戀愛の諸問題」「現代哲學概論」の著あり（京都市上京區新町頭）

鶴　見　祐　輔

明治十八年一月三日生。出生地、群馬縣多野郡新町。東京帝國大學卒業。鐵道院書記官兼監察官たりしが辭して米國に遊び十四年末に歸朝せしが、爾來屢々渡米して各地に熱辯を振ふ。昭和三年第一回普選に岡山縣選出代議士となる。著書「南洋遊記」「歐米名士之印象」「米國々民性と日本關係の將來」「三都物語」「偶像破壞期の支那」「中道を歩む心」「思想、山水、人物」其他（東京市麹町區元園町一ノ一二）

中　野　正　剛

福岡縣の人、明治四十二年早稻田大學政治科卒業、東京朝日新聞記者となる。辭職後「東京時論」を創刊せるも、十二年「日本及日本人」と合併し、雜誌「我觀」を創刊す。大正九年福岡縣より選出されて代議士となる。「世界政策」「講和會議を目擊して」「現實を直視して」等の著あり（東京府下千駄ケ

原宿一九八）

永井柳太郎

明治十四年四月十六日、石川縣金澤市中主馬町に生る。衆議院議員。明治四十二年より大正六年迄早稻田大學教授、大正六年秋早稻田大學改革を企てゝ成らず、却つて誠られ、戰時及戰後の歐米視察に赴く、大正九年初めて代議士に當選す。加藤若槻内閣に外務參與官たり。明治三十九年早稻田大學より英獨兩國に留學を命ぜられオックスフォード大學に遊びマンチエスターカレーヂ卒業。「社會問題と植民問題」「植民原論」「世界政策十講」等（東京市外戸塚町一〇六五）

永井　享　經濟學博士

明治十一年十二月十四日東京市に生る。社會政策を專攻し、農商務書記官、鐵道省經理局長等の閲歷あり。著書、「社會政策綱領」「新産業政策論」「婦人問題研究」「社會思想文典」「勞働組合法論」「日本政黨論」「社會讀本」外四篇。現在著述並に教育事業に從事す（東京市小石川區原町一二六）

中澤辨次郎

明治二拾四年七月七日埼玉縣兒玉郡丹庄村に生る。埼玉の野に自作兼小作農の子と生まれ、二十三歳迄農民としての體驗を持つ、特に學歷なし　現在主として農政學を研究、農民の實際生活問題を調査中なり。岐阜の大和農民組合長たり。「小作制度論」「農民生活と小作問題」「小作問題の新展開」「最近の小作問題」「農業政策改革論」「旅の印象」「小作爭議論」の著あり（東京市外平塚村戸越一一九）

中野登美雄

明治二十四年七月十三日札幌市に生る。早稻田大學教授大正五年早大政治科卒業。同七年留學生として北米、佛國及獨逸に留學し歸朝後同大學教授たり、專攻科目は國法學にして Ordinance Power of the Japanese Emperor, Baltimore 1923. の著書あり（東京府下西巣鴨町六六〇）

那須　皓　農學博士

明治二十一年六月九日東京市本郷區に生る。東京帝國大學[illegible]帝國大學院入學、大正四年南洋諸島巡遊、大正七年東京帝國大學助教授、同年蠶絲中央會の囑を受けて北米に渡り大正八年末歸朝、大正九年歐洲諸國に留學し、同ローマに開かれたる萬國農事協會總會に日本委員として參列、大正十年第三回國際勞働會議に勞働代表顧問として參列、大正十一年末歸朝、大正十二年東京帝國大學教授、大正十三年學位を受く。專攻科目は農政學「農村問題と社會理想」「經濟政策學原理」「公正なる小作料」「中小農保護政策」（絕版）「國民高等學校と農民文明」、（翻譯、絕版）（東京市外世田ケ谷上町四一五）

武者小路實篤

明治十八年五月十二日東京麴町區元園町一ノ三八にに生る。學習院卒業後帝國大學文科に一年在學したる事あり、爾來幾多の創作と評論を公にしたるが、大正七年其主義を實現せんが爲め、同志と共に日向に地をトし「新しき村」を經營今日に及ぶ。「新らしき村の生活」「その妹」「ある青年の夢」「武者小路實篤全集」「愛慾」「母と子」其他（東京市麴町區下二番町四一）

室伏高信

明治廿二年神奈川縣足柄下郡土肥村宮上に生る。順天中學卒業後明治大學に入り半途退學、直に記者生活に入り、時事新報（大正三年）東京朝日（大正五年）に政治記者たりしことあり。大正八年雜誌『批評』を創刊す、大正九年改造社特派員として歐米に遊ぶ。「社會主義批判」「ギルド社會主義」「政友會罪惡史」「エドワード・グレーの外交」「社會主義民主々義」及び「文明の沒落」「日本論」「土に還る」「共産主義批評」等の著作の外多くの評論を公にす、（神奈川縣藤澤町鵠沼橘通町五）

村松正俊

明治二十八年四月十日生。出生地、東京赤坂溜池、第一高等學校、東京帝國大學文學部大學院に學び、慶應大學講師、アテネフランセ教授、最近無産階級藝術論の開拓につとめてゐる。著書名、「光の畫家モネー」其他シュペングラー、ヂュラント等の飜譯あり目下外遊中（東京市麻布富士見町四三）

内田貢 魯庵

明治[illegible]慾なく卒業證書は小學校にすら持たずと云ふ。露西亞文學の造詣深く之に關する多くの著作と評論あり、小說「片らづら」「うきまくら」「暮の廿八日」の外「罪と罰」「復活」「二人畫工」の譯著あり、「獄の舌」「バクダン」「思ひ出す人々」其他の著作多し。明治卅五年以來書肆丸善株式會社顧問の職にあり（東京市外大久保百人町三八四）

内ケ崎作三郎

明治十年四月八日生。宮城縣黑川郡富谷村明治三十四年東大英文學科卒業、三十五年以來早稻田大學の敎授たり。衆議院議員。明治四十一年—四年オックスフォードに留學、大正九年—十年第二回外遊、「人生と文學」「英國より祖國へ」「近代人の宗教」「ロイド・ヂョーヂ」「リンコルン」「白中黃記」「國際聯盟」「人生日訓」「人生學」（東京府下巢鴨町一四七〇）

上杉愼吉 法學博士

明治十一年八月石川縣に生る。明治三十六年東京帝國大學卒業、直に同校に教授たり、明治三十九年より三年間英佛獨に留學す、

[illegible]東京帝國大學教授（東京市小石川區大塚坂下町五四）

上田貞二郎 法學博士

明治十二年五月東京麻布德川侯爵邸に生る。明治三十五年東京高等商業學校專攻部を卒業して商學士となる。爾來今日に至るまで同校教職にありて經濟學を研究す。明治三十八年より四十二年に亘り文部省留學生として英獨兩國に留學す。大正八年第一回國際勞働會議に際し政府代表の顧問として米國に赴き、昭和三年國際經濟會議に日本を代表して出席す。「外國貿易原論」「商業史敎科書」「株式會社經濟論」「戰時經濟講話」「英國產業革命史論」「社會改造と企業」其他の著書あり、東京商科大學敎授、（東京府下雜司ケ谷一一二二）

昇直隆 曙夢

明治十一年七月十七日生。鹿兒島縣大島の人、陸軍教授及著述に從事す。明治三十六年正教神學校卒業、同時に同校講師となる。大正元年陸軍中央幼年學校講師に任命、同四年早稻田大學講師に聘せられ、同五年陸

同教授拜命陸軍士官學校附に補せらる。同六年外國語高等試驗委員拜命、同八年內務省囑託に任命、ロシヤに遊ぶこと前後四回に及ぶ。宗教哲學及文學を專攻す。著述「露國近代文藝思想史」「露國現代の思潮及文學」「露國革命と社會運動」「トルストイ十二講」「ロシヤ藝術の勝利」「露國民衆文學全書」（五卷）「新ロシヤ・パンフレット」飜譯には「現代露國文豪傑作集」（六卷）「決鬪」「虐げられし人々」「トルストイ物語」「トルストイとドストエーフスキイ」「空氣饅頭」「革命後のロシヤ文學」等あり（神奈川縣鎌倉町稻村ケ崎）

野村兼太郎

明治廿九年三月廿日東京市に生る。東京府立第三中學校を經て慶應義塾に入學、大正七年卒業、爾後同校に奉職現に教授たり。英國劍橋大學に留學す、經濟史を專攻し「近世商業史」「歐洲印象記」の著書あり（神奈川縣藤澤町鵠沼）

野上俊夫　文學博士

明治十五年五月新潟縣佐渡郡相川町に生る。明治三十九年東京帝國大學文科心理學科卒業、大正二年八月より大正五年八月まで歐米に留學し獨逸ライプチッヒ大學に學び戰禍に遭ひて英、獨、瑞、伊各國を經て米國クラーク大學總長スタンレー・ホール博士の教室に學ぶ。「歐米教育の印象」「青年心理講話」其他多くの著作と評論あり、京都帝國大學文學部教授（京都市下鴨西林町）

野坂鐵

明治二十五年三月三十日生、本名參次、出生地、山口縣萩町、略歴、大正六年慶應義塾理財科を卒業直ちに友愛會に入る。その後二ケ年半、英、佛、瑞、獨、露に遊ぶ、歸朝後間もなく大正十二年六月の共產黨事件に關係し下獄せり。現在は產業勞働調査所主任にして雜誌「インタナショナル」を主宰し、同所よりの出版物多し（東京府下荏原町小山二六一）

野坂龍子

明治二十九年九月二十八日神戸市に生る。東京女子高等師範を卒業す。野坂鐵氏夫人にて、夫君と共に產業勞働調査所を起し、無產者運動に努力しつゝあり（東京府下荏原町小山二六一）

野呂榮太郎

明治三十五年四月三十日北海道夕張郡長沼村に生る。大正九年北海道中學を卒業し、慶應義塾大學經濟學部に入り、大正十五年卒業す。同年四月「日本學生社會科學聯合會」秘密結社事件に連座す。

大森義太郎

明治三十一年九月二十六日生。東京市立余丁町小學校東京府立第四中學校より第一高等學校を經て大正十一年東京帝國大學經濟學部を卒業す。後東大經濟學部助手より助教授となりしが昭和三年四月「大學事件」の爲餘儀なく教職を去る。專攻は理論經濟學にして現在專ら文筆に從ふ（神奈川縣鎌倉町雪ノ下千度小路二一〇九）

桑木嚴翼　文學博士

明治七年六月東京に生る。明治二十九年七月東京帝國大學文科大學哲學科卒業、大學院入學、三十五年二十八歲にして文學博士となる。三十二年東京帝國大學文科大學講師（後、助教授）第一高等學校教授、三十九年東京帝國大學文科大學教授、[illegible]

帝國大學文科大學教授たり、明治四十年獨佛英米留學二年間、倫理哲學を研究す。「哲學概論」「哲學綱要」「現代思潮十講」「カントと現代の哲學」「五大哲學者」「デカルト」「時代と哲學」「現代の價値」「哲學と文藝」「哲學五流辨」其他、「倫理學講義」「文化と改造」「カント哲學」等の著あり、哲學會丁酉倫理會委員。（東京市牛込區北町三十四番地）

久保田明光

明治三十年九月八日東京に生る。大正八年早稻田大學政治經濟學部卒業。大正十三年更に早稻田大學講師を囑任せらる。昭和二年四月獨逸に留學す。著書「社會主義思想の史的解說」等（東京市外杉並町阿佐ヶ谷六八六）

櫛田民藏

明治十八年十六月十一日福島縣石城郡上小川村上小川に生る。大原社會問題研究所員大正元年京都帝國大學法科大學卒業、同二年―五年、東京帝國大學助手、同五年―同七年大阪朝日新聞記者及同志社大學教授、同八年―九年東京帝國大學經濟學部其他講

師、[illegible]等」社に關係す。九年大原社會問題研究所より歐米各國出張、十一年歸朝、專攻は經濟學（東京市外淀橋町柏木九、七六一）

山川均

明治十三年十二月二十日岡山縣都窪郡倉敷に生る。明治二十八年小學校卒業、同三十三年「青年の福音」に執筆不敬罪重禁錮三年六ヶ月罰金百貳拾圓監視一年、三十八年紫種附機械商の店員となる。四十四年日刊平民新聞に入社、同年十二月治安警察法違反輕禁錮一月半、四十一年『勞働者』を發行新聞紙條令違反輕禁錮二ヶ月、同年六月赤旗事件官吏職務執行妨害懲役二年、四十三年出獄賣藥商人となり星製藥會社の特約販賣人となり、田舍廻りの寫眞師を兼業す。大正五年賣文社に入社、大正七年荒畑寒村と『青服』を出だし、組合權及び罷工權を主張して禁錮四ヶ月、殆んど官權の壓迫下に其半生を投ず。大正八年病軀を押して月刊『社會主義研究』を創刊す、「デモクラシーの煩悶」「歷史を創造する力」「井戶の底から見た日本」「資本主義のからくり」「無產階級の政治運動」「動物界の道德」

會議」「マルクス說に[illegible]」「勞働組合運動史」「マルクス經濟學」「勞働運動と社會主義」「マルクス學說體系」「勞農露國の研究」「新經濟政策」「政治教育講話」「左翼の鬪爭」「社會主義ソヴエート共和國の現勢」「私は斯う考へる」等の著作と多數の評論を公にす、就中大正十一年雜誌「前衞」に發表せし「方向轉換」の一文は日本の左翼運動にとりての劃時代的文獻なり。大正十二年四月個人雜誌「社會主義研究」を「前衞」と合併して「赤旗」（後「階級戰」）となし、[illegible]編輯家となる。大正十三年六月雜誌『マルクス主義』發刊さるゝに及び依然として指導論客なりしが、後この一派と對立を來し、現在では雜誌「勞農」に據る（神奈川縣鎌倉町稻村ヶ崎）

山名義鶴

明治二十四年九月十七日青森市外に生る。大正六年東大法科卒業、大正七―九年內務省保險衞生調査會囑託、大正九―十四年大原社會問題研究所囑託、大正十三年一月以來日本勞働總同盟政治部委員（大阪市外吹田千里山）

栁宗悦

明治二十二年三月廿一日東京に生る。學習院卒業東京帝國大學文科哲學科卒業、京都同志社大學教授。專攻科目は宗教哲學にして「ヰリアム・ブレーク」「木食五行」等の著書あり(京都市吉田神樂岡三)

山川菊榮

明治二十三年十一月東京に生る。山川均氏夫人也。東京麹町番町小學校、東京府立第二高等女學校を經て、女子英學塾を卒業す。均氏と共に『社會主義研究』の執筆經營に任じ、「戀愛の理想境」「婦人の勝利」「現代生活と婦人」「大戰の審判」(反譯)「女の立場から」「ベエベル婦人論」「女性の叛逆」「婦人問題と婦人運動」(飜譯)「社會主義と婦人運動」等の著あり(神奈川縣鎌倉町稻村ケ崎)

山室宗文

明治十三年十月二十一日熊本縣飽託郡芳野村に生る。明治四十年東京帝國大學法科大學政治科卒業、直ちに英・米に留學、三ケ年後歸朝す。三菱銀行紐育支店長、同行倫敦支店長を經て、大正十二年同行取締役に選任、同年歸朝して、爾來同行大阪支店長の職にあり。著書「社債論」「英米銀行事情」「英米財界近情」「我國の金融市場」「同續篇」(大阪市東區今橋四丁目、三菱銀行支店)

山口正太郎

大阪船場に生る。大正三年大阪高商、同六年京都帝國大學を卒業し、同志社大學教授、京都帝大講師を經て、現に大阪商科大學教授なり。一九二四年より二七年まで、佛國ソルボンヌ大學に留學、理論經濟學及經濟學史を專攻す。目下重農學派の研究に從事中。著書「純理經濟學の諸問題」「經濟學說史研究」「中世寺院法と經濟思想」(兵庫縣芦屋)

山本宣治

明治二十二年五月二十八日京都に生る。加奈陀、晩香坡、ブリタニアハイスクルより京都同志社普通學校、三高、東京帝國大學理科動物學科を經て、京都帝國大學院に學ぶ。十九歲の時早稻田大隈伯の玄關番、後加奈陀に渡り列車ボーイ、鮭取り漁夫、數佛・コック、林檎等二十數種轉業す。東京帝大に於ては專ら生理學としての性學の研究、その理論と實踐の辨證法的統一は「性」より「政」に至る。著書に「性教育」「戀愛革命」「戀愛揚棄」等あり。勞働農民黨所屬代議士にして、料理旅館「花やしき」の當主なり(京都市外宇治町)

山内得立

明治二十三年六月十二日奈良縣高市郡天滿村奧田に生る。京都帝國大學卒業、獨逸フライブルヒ大學に留學し、歸朝後東京商科大學教授たり。哲學を專攻す(東京市外代々木幡ケ谷西原一〇〇一)

牧野英一　法學博士

明治十一年三月二十日飛驒高山町に生る。第一高等學校に入り明治三十六年東京帝大法科卒業後同校の教職に就き、大正二年教授となる。明治四十三年より大正二年迄獨、伊、佛、英に留學、法律學殊に刑法を專攻し日本の刑法學に新局面を開く。法律學の教科書として「日本刑法」「刑事訴訟法」の外論文集として刑事學叢書第一編乃至第八編、其他多くの評論あり(東京市小石川區大塚坂下町一一〇)

米田實　法學博士

明治十一年十二月福岡縣久留米に生る。明治三十四年米國オレゴン州立大學卒業。加州々立大學院、アイオロ州立大學修學、マスター・オブ・アーツ及びバチエラ・オブ・ロース等の學位を有す。倫敦クロチウスソサイテーの一員たり。大正十一年東京帝大より法學博士を受く。職業、朝日新聞社相談役、東京商科大學「外交史」講座擔任。著述「最近世界の外交」等（東京市外高田雜司ケ谷九一五）

丸岡重堯（シゲタカ）

明治三十年一月一日津市に生る。津中學校を經て大正八年早稻田大學商學部卒業。大原社會問題研究所々員たること三年、東洋經濟新報記者たること五年、現在社會經濟研究所々員にして「社會思想」同人たり。專攻科目は財政及び經濟にして、「本邦消費組合論」（久留間鮫造氏と共著）ウエッブ「大英社會主義國の構成」「世界資本主義の現勢」の著書あり（東京市外杉並町高圓寺四七五）

舞出長五郎

明治廿四年九月八日神奈川縣中郡伊勢原町に生る。郷里の中學、第一高等學校を經て、大正六年東大政治學科を卒業、大學院にて研究の後、大正八年同大學經濟學部助教授となり、同九年より十一年迄經濟學研究の爲、英、獨、佛に留學、歸朝後十二年教授に昇進、經濟學說史の講座を擔當し今日に至る。經濟學上多くの論文を發表す（東京市外高田町大原一、五二六）

藤井健治郎　文學博士

明治五年八月八日山形縣東田川郡狩川村に生る。山形中學校第二高等學校を卒へて、明治三十一年東京帝國大學文科卒業、三十八年より四十年迄獨國ミユンヘン大學伯林大學へ入學、倫理學を專攻す、夙にマルクス學等を讀破し社會問題に關しても研究せり。「主觀道德要旨」「國民道德論」等の著作評論多し。曾て早大教授たり、京都帝國大學文學部教授（京都市上京區室町通今出川下ル）

藤森成吉

明治二十五年八月二十八日生、長野縣諏訪郡上諏訪町。著述、創作集「新しい地」「研究室で」「寂しき群」「煉獄」「その頃の追憶」「東京へ」。長篇「若き日の悩み」「煩悩」「妹の結婚」「舊先生」感想集「藝術を生む心」「大地の匂ひ」「狼へ（わが勞働）」「悩み笑ふ」其他「相戀記」「新選藤森成吉集」等。諏訪中學、第一高等學校獨法科、東京帝大獨文科卒業、後一年間第六高等學校講師を勤む（東京市小石川區雜司ケ谷一一五）

福田德三　法學博士

明治七年十二月二日東京神田區元柳原町二四に生る。明治二十四年東京高等商業學校本科、同二十九年同校研究科卒業、明治三十年三月獨、佛、伊、英、米、瑞西へ留學、同三十四年九月歸朝、慶應義塾に教鞭を執りし事あり。「經濟學研究」「國民經濟講話」「黎明錄」「暗雲錄」「經濟學考證」「經濟學論攷」「日本經濟史論」「現代の商業及商人」「經濟學講義」「經濟學教科書」「勞働經濟論」「國民經濟原論」「流通經濟講話」「續經濟學研究」「社會運動と勞銀制度」「社會政策と階級鬪爭」「ボルシエヴヰズム研究」等の大著あり。大正十三年末「モスクワ」の露國科學

者會議に出席、ブレンタノ博士を訪れ、マルクスの墓に詣で、大正十五年夏歸朝。最近この學術旅行の産物として「唯物史觀經濟史出立點の再吟味」を上梓す。社會政策學會員、帝國學士院會員、東京商科大學教授(東京中野本郷一〇一)

福本和夫

明治廿七年鳥取縣東泊郡下北條村字田井に生る。鳥取縣立倉吉中學、第一高等學校を經て、大正十年東京帝國大學英法政治科卒業後、島根縣廳に奉職し、松江高等學校助教授に轉じ、大正十一年文部省留學生として歐洲に派遣さる。法學研究の名目なりしも、專ら唯物史、經濟學の研究に沒頭した。大正十三年歸朝、山口高等商業に教授として奉職中、滯歐中の研究を纏め、逐次その發表に從つてマルクス主義の主張者たる事を明らかにし教職を去る。著書に「唯物史觀と中間派史觀」「社會の構成＝並に變革の過程」「經濟學批判の方法論」「無産階級の方向轉換」「理論闘爭」あり。最近之等を「唯物史觀の爲に」「經濟學批判の爲に」の二著に纏む。個人雜誌「マルキシズムの旗の下に」を六號まで發行せり。雜誌「マルクス主義」の指導論客。

布施辰治

明治十三年十一月十三日宮城縣牡鹿郡蛇田村に生る。明治大學の前身、明治法律學校卒業後辯護士となり、法律の階級的考察と無産階級の立場からする反抗戰術を研究し、借家人同盟を組織して今日に至る。著書に「生きんが爲に」「燃跡の借地借家扱」「裁くもの裁かれるもの」「復興計畫と住宅對策」「司法機關の改善法」等あり(東京市外雜司ケ谷八一五)

深田康算 文學博士

明治十一年金澤市に生る。明治三十五年東京帝國大學哲學科卒業後、京都大學に教鞭を執り、英、獨、佛に留學、ライプチッヒ、伯林、巴里大學に學ぶ。美學を專攻し、之に關する多くの研究と著述あり、「カントの判斷力批判」(飜譯)京都帝國大學文學部教授(京都市下鴨五〇番地)

兒玉達童

明治二十六年六月四日神奈川縣足柄上部清水村に生る。大正七年東京帝國大學文科哲學科卒業、大正七年八月より同八年迄文部省に調査事務囑託、大正八年九月より同九年八月迄松本高等學校教授、大正十年一月より日本、立教、曹洞宗等の諸大學に講師、現在は駒澤大學教授、日本、東京兩女子大學、東京女子高等師範學校講師。專攻科目は純正哲學。著譯書名「人智の原理及對話」(譯)「新理想主義哲學序論」(譯)「カントの生涯及性格」(譯)「哲學概論」(著)(東京牛込辨天町一)

小牧近江

明治二十七年五月十一日秋田縣土崎港に生る。著述業、曉星中學中途退學渡佛アンリ四世校を經て、パリ大學法科卒業。專攻科目勞働法制、「クラルテ」及フイリップの譯、「プロレタリア文學手引」の著あり。國民新聞社員たりしが最近辭す。本名近江谷駉(神奈川縣鎌倉町稻村ケ崎)

小泉信三

明治廿一年五月四日東京市芝區三田四ノ二九に生る。小學校―慶應義塾普通部―同大學部卒業―同塾教授奉職現在に及ぶ。倫敦―伯林―倫敦(英國)―巴里に留學し、經

濟學及び社會思想を專攻す、著書「價値論と社會主義」「改訂社會問題研究」（東京市外北品川宿三二三）

河野密

明治三十年十二月十八日千葉縣夷隅郡中川村に生る。大正十一年東大法學部卒業、東京朝日及び大阪朝日新聞外報部勤務、大正十二年秋同社を辭し爾來同志社の講師たりしが大正十五年十一月日勞黨結社を機會に辭す。「神聖家族」「マルクス歷史、社會及び國家學說」「功利主義論」の反譯及び日勞黨の理論家として評論多し（東京市外東大久保三〇六）

五來欣造 素川

明治八年六月廿四日茨城縣久慈郡久慈町に生る。明治三十三年東大佛法科卒業、明治卅七年より大正三年迄佛獨留學、大正三年より四年讀賣新聞主筆、大正七年雜誌「大觀」創立、大正七年より早稻田大學敎授、政治哲學を專攻し「まだ見ぬ親」「社會革命の將來」「大帝那翁」其他の著あり（千葉縣船橋町海神四三四）

黑正（コクショウ）**巖**

明治二十八年一月二日岡山縣上道郡に生る。大正九年七月京都帝國大學經濟學部卒業、大正十一年より同學部講師就任、大正十二年より十四年迄歐米諸國に留學す。農業史を專攻し京都帝國大學助敎授たり。著書「經濟史論考」「封建社會の統制と鬪爭」（京都市上京區淨土寺町南田町一〇三）

權田保之助

明治廿年五月十七日神田區今川小路一丁目河岸に生る。東京市商工中學校卒業、東京外國語學校獨逸語學科卒業、東京帝國大學文學部選科修了、第二高等學校にて高等學校卒業檢定試驗合格、東京帝國大學文科卒業（大正三年七月）美學を專攻。「活動寫眞の原理及應用」「和獨辭典及獨和辭典」「經濟的文明史論」「美術工藝論」の著の外多くの社會評論あり、大原社會問題研究所囑託、文部省囑託（市外中野町鍋屋橫丁）

靑野季吉

明治廿三年二月四日新潟縣佐渡ヶ島に生る。佐渡中學を經て、大正四年早稻田大學英文科卒業、讀賣新聞、大正日々新聞、國際通信社等に記者生活を送ること八年。十二年六月より自由文筆にて立ち今日に到る。曾て「無產階級社」同人たり。現在「文藝戰線」の同人なり。「無產政黨と社會運動」の著の外「資本主義最後の階段としての帝國主義」「鬪爭に赫く光」「蒼ざめたる馬」「國富論」「マルクス・エンゲルス傳」「何を爲すべきか」の反譯あり。又、プロレタリア文藝評論多く「轉換期の文學」の著に之を收む（東京市外代々木初臺五七六）

姉崎正治 文學博士 Doctor of Laws Docteur honoraire

明治六年六月廿五日京都に生る。明治廿九年七月東京帝國大學文科大學卒業、卅一年同講師となる。卅三年外遊しキール大學、卅五年ロンドン大英博物館及卅六年印度ベナレス Queen's College に學ぶ。卅七年東京帝國大學敎授となる。卅九年四十年Kahn Scholarship に旅行し、大正二—四年 Professor of Japanese Literature and Life, Harvard University. 大正四年 Haskell Lecturer, University of Chicago. 大正八年 Conférencier Michelet, Collège de France. 等に外遊すること數回、宗敎學を專

攻し人本主義を主張す、「現身佛と法身佛」「根本佛敎」「法華經行者日蓮」「社會の動搖と精神的覺醒」The Four Buddhist Agamas. Tokyo. Buddhist Art in its Relation to Buddhist Ideals Boston. Nichiren, the Buddhist Prophet. Cambridge Mass. Quelques Pages de l'Histoire religieuse du Japon. Paris. 等多くの内外語の著あり。歸一協會及び巴里の Société Autour du monde 等に屬す、東京帝國大學教授にして同圖書館長を兼ぬ（小石川區白山御殿町一一七）

阿部次郎

明治十六年八月山形縣飽海郡上鄕村大字山寺に生る。第一高等學校を經て、東京帝國大學文科大學哲學科卒業（明治四十年七月）大學では哲學及哲學史を專攻し、斯學の評論の外、文藝評論、社會評論等多し。「倫理學の根本問題」「美學」「合本三太郎日記」「ニイチエのツアラツストラ解釋並に批評」「北郊雜記」「人格主義」等の著あり。大正十一年文部省海外研究員として渡歐、同十二年十一月歸朝。東北帝國大學法文學部敎授（仙臺市土樋町二四五）

安倍能成

明治十六年十二月愛媛縣松山市小唐人町に生る。第一高等學校を經、東京文科大學哲學科を明治四十二年に卒業、西洋哲學を專修し、「西洋古代中世哲學史」「西洋近世哲學史」「オイケン大思想家の人生觀」「カント道德哲學原論」「山中雜記」の著の外評論多し。歐洲を巡遊し歸朝す。現朝鮮大學法文學部敎授（京城）

安部磯雄

慶應元年二月四日福岡市新大工町に生る。明治十二年より十七年まで京都同志社に學ぶ、明治二十四年より二十七年まで米國 Theological Seminary, Hartford, Conn. U. S. A. に留學す。廿七年七月より十二月まで歐羅巴旅行、明治廿年より廿四年まで及び廿七年より三十年まで岡山市にて基督敎傳道に從事、三十年より三十二年まで同志社の敎師となり三十二年五月早稻田大學敎授となる。昭和三年二月東京市第二區より普選に無產黨より打つて出て當選、社會民衆黨々主たり。社會問題を專攻し「社會問題解釋法」「應用市政論」「都市獨占事業論」「社會問題概論」「理想の人」「婦人の理想」「子供本位の家庭」「產兒制限の理論と實際」「社會主義の時代」「土地國有論」等の著書あり（東京市外高田町三四四）

荒畑勝三 寒村

明治二十年八月橫濱市永樂町一丁目八番地に生る。高等小學校卒業以外學歷を持たず外國商館のボーイ、橫須賀海軍造船工廠の職工、社會主義書類の傳道行商、本屋の小僧、新聞記者、雜誌「近代思想」「月刊平民新聞」「勞働組合」「靑服」等の發行經營等具に苦難を甞め、幾度か官憲の壓迫を蒙り主義の爲めに活動し、囹圄の人たること三回「谷中村滅亡史」「ショウ警句集」短篇小說集「逃避者」「光を掲ぐる者」ウエッブ氏著「勞働組合運動史」ロイド著「勞働組合論」ポール・ラファルグ著「財產進化論」フイッシャー著「石油帝國主義」（反譯）の著あり。日本勞働新聞主幹たりしことあり。エルエル會員として長く大阪にて宣傳に從事せしが現在雜誌「勞農」の同人なり（東京市外東大久保百人町三〇七）

麻生久

明治二十四年五月廿四日大分縣玖珠郡東飯田村に生る。辯護士、大正六年東京帝大法科卒業、大正八年五月まで東京日々新聞記者、雜誌「解放」を主宰せしことあり。同八年六月より友愛會へ入會、出版部長、主事、大正九年全日本鑛夫總聯合會を創立し、全日本鑛夫總聯合會顧問、日本勞働總同盟政治部長として活躍せしが、大正十五年十一月總同盟が勞農黨を脱退せる直後、「日本勞働組合同盟」を組織して總同盟と分裂し「日本勞農黨」を結成し、委員長(後に書記長)となり現在に至る。著書「勞働運動者のひとり言」「濁流に泳ぐ」「生きんとする群」「黎明」「人生を横ぎる者」「無産政黨の理論と實際」「無産政黨とは何ぞ」(東京本郷駒込動坂林町六八)

赤松克麿

明治二十七年十二月四日生、出生地、山口縣徳山町。略歴、大正八年東京帝大法科卒業。職業、日本勞働總同盟本部員、社會民衆黨政治部長、雜誌「解放」及び東洋經濟新報の記者たりしことあり。現在『民衆新聞』を主宰す。著書「社會革命史論」「日本勞働組合運動史」「轉換期の日本社會運動」(東京市外巣鴨町二ノ二〇一)

秋田雨雀

明治十六年十二月二日生。青森縣津輕郡黒石前町二〇、明治三十五年青森第一中學卒業。明治三十六年―四十年の間に第一期の自由思想に影響さる。明治四十年―早稻田大學英文科卒業。大正五年日本エスペラント協會員となる。大正九年―日本社會主義同盟員となる。昭和二年夏革命十週年記念に招待され、勞農ロシヤを訪れモスクワ其他へ九ヶ月滯在つぶさに文化を調査して昭和三年五月歸朝す。戯曲小説集「幻影と夜曲」戯曲集「埋れた春」「三つの魂」「佛陀と幼兒の死」「國境の夜」、童話集「鬼の子供へ」「太陽と花園」感想・評論其他。(東京府下高田町雜司ケ谷二二一)

淺野晃

明治三十四年八月十五日滋賀縣大津市に生る。東京府立第一中學校、第三高等學校を經て、大正十四年東京帝國大學法學部卒業、引續き同大學經濟學部大學院に在學せり。「哲學の貧困」「マルクス的方法の形成」の著譯書あり(東京市外中野町打越一、八七五)

阿部賢一　經濟學博士

明治二十三年八月二十八日徳島縣板野郡神宅村に生る。同志社中學より早稻田大學に學び、世界大戰中英米に留學せり。經濟學並に財政學を專攻し、最近經濟學博士の學位を受く。現に早稻田大學教授にして、國民新聞論説部長。著書に「財政學」「國民經濟原論(上)」「租税の理念と其分配原理」あり(東京市外大森源藏ヶ原二、八六二)

堺利彦

別名貝塚澁六と云ふ、枯川といふ號は十數年前から使はぬ事にしてゐるとの事、明治三年十一月豐前國豐津に生る。小學校、中學校、第二高等中學校等を卒へて小學教員新聞記者、實文社、入獄、社會主義運動等波瀾重疊の半生を過し、主義の爲めに惡戰苦闘す。大正十二年六月の共産黨事件に連座して下獄、爲に震災の難を免れたりと云ふ。我が社會主義の巨頭にして、「社會主義倫理學」「マルクス傳」「人と超人」「女性中心説」「社會主義研究」「唯物史觀解説」「猫のあくび」「猫の百日咳」「樂天囚人」「當なし行脚」等多くの著譯書及評論あり。社會講談

「一休和尚」「いかけ松」あり。目下「日本平民史」の大著に從事しつゝあり（東京市麹町八ノ二四）

佐藤丑治郎　法學博士

明治十年五月二十八日山形縣西田川郡鶴岡市天神町に生る。第二高等學校を經て明治三十六年京都帝國大學法科大學政治學科卒業、直に京都大學法科講師となる。明治三十八年京大法科助教授に任ぜらる。明治四十一年外國留學（獨國、佛國、英國及米國、伯林大學）明治四十五年六月歸朝し大正元年八月京都帝國大學法科教授に任ぜらる。大正二年十二月法學博士の學位を授けらる。「衆議院議員選擧法正解」共著「租稅法と豫算との關係を論ず」「政治學上卷」「代議士と選擧」等の著あり。東北帝國大學法文學部長（仙臺市）

佐野學

明治廿五年二月二十二日大分縣速見郡杵築町に生る。縣布中學校第七高等學校を經て大正六年に東京帝國大學政治科卒業、それより大學院に入り矢作博士につきて農政學研究、社會學、經濟史、農政學等を專修し社會評論多し。主張は生産者本位の社會主義、譯書「マルクスかカントか」「露西亞經濟史研究」第一卷（約六百頁）の著あり「解放」社同人、舊新人會同人、全日本鑛夫總聯合會相談役の外滿鐵東亞經濟調査局囑託たりしことあり。後早大教授たりしが大正十二年六月大學騷動及び共產黨事件に際しロシアに亡命、滯露一年半に及びしが、歸りて「無産者新聞」を創刊し之れを主宰す。「日本經濟史」「日本社會史序說」「農村問題」「鬪爭によりて解放へ」の著あり（東京市外下澁谷三五〇）

佐々木惣一　法學博士

明治十一年三月二十八日鳥取縣鳥取市西町七〇番地に生る。明治三十六年七月京都帝國大學法科大學法律科卒業、同三十九年十月京都帝國大學助教授に任ぜられ、同四十二年九月出發、獨、佛、英三ケ國の大學に學び大正元年十二月歸朝、翌二年一月教授に任ぜられ、同十二月法學博士の學位を授けらる。行政法を專攻し、「行政學」「立憲非立憲」「此一票の捨てどころ」の著作の外多くの著述と政治評論あり。京都帝國大學法學部教授（京都市上京區田中上柳町）

澤田謙

明治二十七年三月六日鳥取縣岩美郡浦富村に生る。大正四年第一高等學校卒業。大正七年東京帝國大學法學部卒業。茂木合名會社、外務省國際聯盟などに勤務せしことあり。大正十三年より東京市政調査會參事たり。少時米國遊學社會科學一般を專攻。「國際政治の革命」「國際聯盟概論」「スペンサア「第一原理」（織譯）」「勞働內閣まで」「ムッソリーニ」等の著書あり（東京市牛込區中町一〇）

澤村康

明治廿六年八月廿九日東京市本所區緑町に生る。大正六年東大農學部卒業、大正九年東大法學部卒業、大正九年農商務省に被任、大正十年九州大學農學部助教授に轉任、大正十三年より同大學に教授たり。英國、獨逸及び佛蘭西に遊學し農業政策及び農業經濟學を專攻す。「小作法自作農創定法」の著あり（福岡市西新町新地九八）

佐佐弘雄

明治三十年一月二十三日熊本縣熊本市新屋

五月共產黨事件の餘波を受けたる全國大學事件のために辭職す（東京市麻布區材木町・六八）

向坂逸郎（サキサカ）

明治三十年二月六日福岡縣大牟田市に生る第五高等學校を經て、大正十年東京帝國大學經濟學部を卒業す。同學部助手たりしが獨逸に留學し、歸朝後九州帝國大學法文學部教授となりしが、「思想國難」事件にて昭和三年四月辭職す。專攻經濟學（東京市外中目黑一、〇〇〇）

阪本勝

明治三十二年十月十五日尼崎市大物町に生る。大阪北野中學校、第二高等學校を經て、大正十二年東京帝國大學經濟學部を卒業。大阪每日新聞記者たること二年傍ら日本勞働總同盟に屬せしが、轉じて神戸關西學院社會學部に教鞭を執る。左翼經濟學一般を專攻し一大統一無產黨主義の下に、實崎市大物町）

木村久一

明治十六年七月山形縣南村山郡宮生村下生居に生る。仙臺東北學院。東京文科大學、大正二年卒業、爾來教育に從事、大正十四年五月早稻田大學在職中、過激思想宣傳の嫌疑を受け、不敬罪に問はる。心理學を專攻す。「早教育と天才」の著の外多數の評論あり（茨城縣）

北澤新次郎

明治廿年二月二十一日東京市本所區菊川町一ノ十一に生る東京府立第三中學校早稻田大學を卒へて北米ノースカロライナ大學（在學一年半）同上ヂョンス・ホップキンス大學（在學四年）同上サウス大學留學期間七ケ年に及ぶ。社會問題及經濟學を專攻し、社會評論頗る多し。「勞働經濟論」「新社會の建設」「最近勞働運動」「勞働者問題」（上卷）「資本主義經濟と社會主義經濟」の著あり。

町字湊に生る。早大哲學科を
に出て茨城縣土浦中學、東京府第三中
論、早大講師を經て米國と獨逸に四年
學し大正十一年十二月歸朝す。現在
文化協會研究所員、大東文化學院教
本大學講師たり、日本新聞に關與す。「ロヂャース西洋哲學史」（譯）「ヘフ
グ近世哲學史」二卷「ベルグソン哲學
說及び批判」二卷「哲學より政治へ」
東方より」等（東京市外西荻窪上井草）

紀平正美 文學博士

明治七年四月三十日三重縣安濃郡明合
宇野口に生る。東京帝國大學文學部卒
學習院教授にして同時に帝大、高師等
師をなす。哲學を專攻し、著書に「行の
學」「自我論」「哲學概論」「認識論」「論理學
哲學の基礎概念」「國民道德の概念」等あ
り（東京市本鄉區駒込千駄木町五七）

木村毅

明治二十七年二月十二日岡山縣勝田郡勝間田町に生る。早稻田大學英文科卒業後、大正七年隆文館編輯員、後春秋社に轉じ、大正十一年末退社。大正十五年雜誌『反響』を主宰編輯せり。現在專ら著述に從事しつゝあり。昭和三年五月英國へ留學、二ヶ年滯歐の豫定。『文藝東西南北』『小說研究十六講』『世界文學の輪廓』「小說の創作と鑑賞」「兎と妓生」（短篇集）の外近著「明治文學の展望」の著あり。（東京市外西大久保二〇三）

三宅雄二郎　文學博士

雪嶺と號す、萬延元年五月、石川縣金澤に生る。帝大文科哲學科卒業、曾て日本新聞記者たり、後『日本及日本人』主筆として多年健筆を揮ひしが震災後該誌を去り『我觀』の主筆となりて現在に至る。「宇宙」「世の中」等の著述の外多くの評論あり、論壇の最古參者の一人也（東京市外代々木初臺五五四）

美濃部達吉　法學博士

明治六年二月七日兵庫縣に生る。卅年東大法科卒業、卅二年比較法制史研究の爲め獨佛英に留學、歸朝後東大教授たり。憲法論の上より見たる多くの政治論社會評論あり。「日本憲法」「行政法提要」「憲法提要」「行政法判例」等の著述多し。東京帝國大學法學部教授たると共に九州帝國大學法文學部長（東京市小石川區竹早町一二四）

三木清

明治三十一年一月五日兵庫縣龍野町に生る。龍野中學校、第一高等學校を經て、京都帝國大學哲學科に入り、大正九年卒業。引續き同大學の大學院に學生となり、後二年にして外遊、ハイデルベルク、マールブルク、パリの各地に學ぶ。大正十五年歸朝。第三高等學校講師より轉じて現に法政大學教授たり。哲學一般の研究に從ひ、思想はなほ發展過程にあり。著書として「パスカルに於ける人間の研究」「唯物史觀と現代の意識」あり（東京市本郷區菊坂町菊富士ホテル）

三輪壽壯

明治二十七年十二月十五日福岡縣糟屋郡廣内村大字古賀に生る。第一高等學校を經て東京帝國大學法學部を大正九年卒業後、直ちに辯護士開業、大正十五年日勞黨創立さるゝや書記長となる。「カウツキー著社會民主黨綱領解說」の譯其他評論等あり（東京市外中野町東中野一、六一三）

水谷長三郎

明治卅年十一月四日、京都市外伏見町に生る。大正十年京都帝國大學卒業後辯護士を開業す。大原社會問題研究所囑託、立命館大學講師の傍ら、マルキシズム研究日本農民組合顧問。昭和三年二月第一回普選に京都よりえらばれて舊勞働農民黨の代議士となる。譯書「通俗資本論」「史的唯物論略解」「唯物史觀批判」「科學的社會主義序論」「ゴータ綱領批判」等あり（京都市御幸町通御池下ル東側）

下中彌三郎

明治十一年六月十二日兵庫縣多紀郡今田村に生る。小學校、中學校、女子美術學校、師範學校教員たりしことあり。大正八年、日本教員組合啓明會の創設に盡力、同會の主幹たりき。大正九年以來勞働運動に參

加、勞働組合同盟會に理事たりしことあり。大正十一年、國際教育協會創設に盡力す。「教育再造」「萬人勞働の教育」の著書あり。現在平凡社を經營す（東京市麴町區下六番町）

島中雄三

明治十四年二月十八日奈良縣磯城郡三輪町に生る。奈良縣畝傍中學に學び上京して英語學校に入り中央大學を出でて雜誌記者となる。一時身を社會主義的啓蒙運動に委ね九州各地に轉々せることあり。後『サンデー』『新公論』等に主筆たり。爾來賣文の傍出版業に從事す。社會民衆黨に屬す（東京市小石川區小日向臺町二丁目一九）

汐見三郎

明治二十八年二月九日大阪市に生る、京都帝國大學助教授。東京帝國大學部卒業後獨逸ハイデルベルグ大學に學び財政學を專攻す「經濟統計研究」を著す（京都市上京區上長者町通室町四）

新明正道

明治三十一年二月廿四日生。出生地臺灣臺北市。大正十年東京帝國大學法科卒業。關西學院社會學部教師より東北帝大法文學部教授に轉じ社會學を專攻す「社會思想」同人にして著書「社會學序說」「權力と社會」「群集論」「ソフイストの政治學研究」「形式社會學論」外に評論あり（仙臺市木町末無一一）

廣濱嘉雄

明治二十四年一月二十日三重縣多賀郡神戸村大字上神戸に生る。明治四十四年三月京都府師範學校を卒業し、同校訓導並に教諭の職を奉じ、大正八年九月京都帝國大學法學部に入學し、十一年三月卒業、同大學助手に任ぜられ、後十三年一月より東北大學法學部教授たり。論理學特に私法原理を專攻し目下外遊中（仙臺市定禪寺通り）

平塚明子

らいてうと號す。明治十九年二月東京麴町に生る。お茶水高等女學校を卒へて日本女子大學家政科卒業所謂「新らしき女」を糾合して雜誌『靑鞜』を起し、我が婦人問題に新紀元を劃す、其後新婦人協會を起し實際運動を試みし事あり。多くの創作と評論あり。「圓窓より」「現代と婦人の生活」「現代の男女へ」「婦人と子供の權利」「局ある窓にて」飜譯エレンケイ「母性の復興」等の著あり（東京市外千駄ケ谷九〇五）

平林初之輔

明治二十五年十一月八日、出生地、京都府竹野郡深田村字黑部。略歷、大正六年早大卒業。やまと新聞、國際通信記者大正十五年より二年間雜誌「太陽」主幹たりしことあり。職業早稻田大學講師。著書「無產階級の文化」「近世社會思潮」、「日本自由主義發達史」飜譯「自然界に於ける人間の位置」「民約論」（東京市小石川區水道端一ノ一二）

土方成美　經濟學博士

明治二十三年七月十日生。出生地、兵庫縣姬路市。略歷、大正四年、東京帝國大學法科大學經濟科卒業。米、佛、英に留學し財政學を專攻す、東京帝國大學教授。著書「財政學の基礎概念」「日本經濟研究（全三卷）」「財政學講義」「我國民經濟と財政」「マルクス價値論の排擊」（東京市麴町區一番町四一七）

平野義太郎

明治三十年三月五日東京市に生る。東京帝國大學法學部卒業同校の助教授となり教鞭をとる。民法及び勞働法を專攻し「民法におけるローマ思想とゲルマン思想」「法律における階級鬪爭」の著書あり。目下佛蘭西留學中（東京市外下落合七五三）

森口繁治

明治二十三年三月二十五日神戸市に生る。大正四年京大法科卒業佛、英、獨に留學し大正十二年より京大教授たり專攻は國法學にして「ルソー民約論」（市村博士と共著）「近世民國政治論」「立憲主義と議會政治」の著あり（京都市上京區田中里ノ內町二九）

森本厚吉

法學博士ドクトル、オブ、フイロソフイー

明治十年三月京都府舞鶴町に生る米國ボルテイモーア市ジョンスホプキンス大學院にて經濟、政治、歷史を專攻し、更にボストン及シカゴ市大學普及講演協會の講師として經濟問題の講演に從事せり「生活問題」「生活經濟の新能率」「消費經濟論」「中流階級の研究」「生活標準の研究」「英文學の著作」の外多數の評論あり。東京文化生活研究會主幹、北海道帝國大學教授（札幌市北十一條西三丁目一）

森戸辰男

廣島縣に生る。東京帝國大學法科を卒業同校に教鞭を執り助教授となる。大正九年一月帝大經濟學部機關雜誌「經濟學研究」にクロポトキンの社會思想に關する研究を發表し、世筋の睨む所となり、遂に罪に問はる。大正十年二月末大原社會問題研究所より派遣されて英佛獨に赴き大正十二年歸朝す。多くの社會評論を公にし「社會主義思想史」「クロポトキンの片影」「青年學徒に訴ふ」「學生と政治」「思想と鬪爭」等の著其他譯書あり。大原社會問題研究所員（兵庫縣原居町字茶屋薦居）

杉原三郎

明治二十二年四月七日山形市香澄町に生る。東京府立第一中學、青山學院、アテネフランセ、獨逸語專修學校、正則英語學校を卒業する。社會主義の價値哲學、（社會主義倫理學）を專攻し「人格主義の哲學」「社會主義の價値哲學」の著あり（東京市外青山原宿一七〇ノ一六）

鈴木義男

明治廿七年一月十七日福島縣白河町に生る。大正八年東京帝大法學部を卒業し獨佛伊英米に遊學し歸朝後東北大學教授たり（仙臺市東三番丁一六一）

鈴木茂三郎

明治二十六年二月七日愛知縣寶飯郡蒲郡町字所九九に生る。正規の學歷を經ざるも早稻田大學專門部政治經濟科を卒業す。大正四年より八年迄報知新聞記者、大正八年より九年迄大阪大正日々新聞記者たりしが、兩社共に編輯ストライキにて退社。大正十一年より昭和三年五月一日迄東京日々、大阪每日新聞に記者をなせしが「思想國難」事件にて退く。一ケ年を紐育に一ケ年を歐洲並に革命直後のロシアに遊ぶ。經濟學を專攻し、現在では著述の傍ら無產政黨運動に盡力し、昭和三年七月二十二日無產大衆黨編成に參加し書記長となる。「勞農ロシアの國賓として」其他の著あり（東京市外蒲田女塚一五五）

杉山元治郎

明治十八年十一月十八日大阪府泉南郡北中通村下瓦屋に生る。明治三十六年四月大阪府立農學校卒業後和歌山縣農會技手たり。明治四十二年三月仙臺東北學院神學部卒業大正九年まで福島縣相馬郡小高町にて日本基督教會の傳道をなす．大正十一年四月日本農民組合長となる。大正十三年三月齒科醫學の免許證を受く。大正十四年十二月委員長となり農民勞働黨を結黨せしが僅か三時間にして解散を命ぜらる。最近は分裂せる全國農民組合の合同に盡力し、全國農民組合に屬す。「通俗福音物語」「農村經營の理想」「農家經營の實際」「五用論」「農民組合の理論と實際」の著あり（大阪市北區堂島濱通三ノ一八）

杉森孝次郎

明治十四年四月靜岡縣小笠郡南山村に生る。明治三十九年早稻田大學文科卒業、同校に教鞭を執り、大正二年十月より同八年三月迄文部省留學生として獨英に滯在修學す。「The Principles of the moral Empire」「人類の再生」「新社會の原則」「性意識の哲學化」「倫理學」「社會學」等の著書あり早稻田大學教授たり、社會評論家として名あり（東京府下代々木新町一一）

鈴木文治

明治十八年九月四日宮城縣栗原郡金成村に生る。明治四十二年東京帝國大學政治科を卒業し、曾て東京朝日新聞記者たりしことあり、夙に友愛會を組織し『勞働と產業』を發行して全國の勞働者聯合に力む。大正三四年に二回米國の勞働運動視察に赴き、大正七年巴里の國際勞働聯盟會議に臨み更に大正十三年四月以來國際勞働會議に我國勞働代表として列席すること數回。「勞働問題早わかり」「工場法釋義」「日本の勞働問題」「國際勞働問題」の著作及評論多し。日本勞働總同盟會長第一回の普選に大阪より當選社會民衆黨の代議士たり（神奈川縣鎌倉町材木座）

末弘嚴太郎

明治二十一年十一月三十日、山口縣山口町に生る。（但し本籍は大分縣宇佐郡宇佐町）東京市本鄕小學校から開城中學、一高を經て東京帝國大學法學部を卒業す。後三年程歐米に遊學す。東京帝國大學法學部教授たり。又社會思想家、評論家として論壇に活躍す。「債權各論」「物權法」「嘘の效用」「農村法律問題」「法窓閑話」等の著あり（東京市小石川區竹早町一二三）

二木保幾

明治二十五年六月二十九日長野縣南安曇郡明盛村に生る。大正三年早稻田大學政治經濟科を卒業し大正四年十月より大正七年一月まで東京朝日新聞に記者として勤む。大正八年十一月母校早大の留學生として米佛獨に留學し、大正十一年四月歸朝、直ちに同校の教職に就き今日に至る。專攻經濟學（東京本鄕區動坂町一〇六）

靑木得三

明治十八年二月二十六日秋田市に生る。東京帝國大學法科大學卒業後大藏大臣秘書官となり、大藏省普通銀行課長、同國債課長、同文書課長となり、現に東京稅務監督局長たり。倫敦及巴里に留學せり。經濟學の專攻にして「貨幣論」「銀行論」「日本國債論」等の著書あり（東京市外千駄ケ谷五六二）

最新刊（五六九頁）定價壹圓 送料廿錢

新選 北原白秋集（散文篇）

目次

生ひたちの記○桐の花小品（三篇）○植物園小品（九篇）○南海小品（三篇）○パパヤ物語（四篇）○葛飾小品（六篇）○小田原小品—その一—（四篇）○小田原小品—その二—（四篇）○海の畫の解說（四篇）○雀の生活○山莊主人手記（四篇）○季節の窓（十九篇）○風景は動く（八篇）○雛子ぐるま（五篇）○フレップ・トリップ○（小說）葛飾文章○歌路○よぼよぼ順禮○影○秋山小助

最新刊（七四一頁）定價壹圓 送料廿錢

新選 長田幹彦集

目次

ゆく春。尼僧。アイヌの子。小夜ちどり。自殺者手記。旅鳥。桑名心中。夕潮。蕩兒。嵐の曲。（以上長・中篇・十篇）

最新刊（六〇〇頁）定價壹圓 送料廿錢

新選 吉田絃二郎集

目次

（小說）芭蕉○燕○人間を悲しむ○欅○老年○寒日○砂丘日記○支那鶯籠救はれぬ人間○草は上○露の中○カフスとカラー○凡人の一生○故郷の町○生れ來る者○或る男と女○愛執の日○花梨の下○二老人と彼○或る時○少年○小犬○霧の野邊○ダビデと子達○霧の中○麥日和。（感想）靜かな雨が○奥の旅○日の暮るゝ頃○詩の心○心の影○睡蓮夢○旅人のごとく○雨の薔薇は悲し○渡り鳥○夜空○感謝○五月の城○一人苦しむ者○夢の墓場○幻影を追ふ心○母○嘆振の友へ○春から春○秋○啄木鳥○光は過去の○春の美○大隅の先生へ○桃○雲○子供の生活○孤島の春に○雨あがりの日○暮○修禮行○超人論○雁來紅○寒い日であつた○キリストについつ○壯日○孤島の島○三月の嘆き○庭の隅の小さな花○秋の言葉

最新刊（七四〇頁）定價壹圓 送料廿錢

新選 近松秋江集

目次

舊痕○無明○伊年の屛風○小石川の家○久世山情趣○老若○人の影○初しぐれ○食後○青草○津の國屋○流れ○冷熱○嫁はれた女○朝霧○はげ白粉○墓域○村火事○男清姫○秘密○浮氣もの○舊戀○舊戀（續篇）○葛城太夫○意氣なこと○女一人男二人○めぐりあひ○早春の温泉場○銀河を仰いで○憐を嘆んで死んだ人○中禪寺湖物語○紫野と雪岡○小猫○子供の病む○遺言○私は生きて來た○頽廢時代を○惱みて○幾行○流なさけ○死んでいつた人を○うつろひ

發行所 東京芝區愛宕下町 改造社 振替東京八四〇二

森戸辰男

明治三十年三月五日東京市に生る。東京帝國大學法學部卒業同校の助教授となり教鞭をとる。民法及び労働法を[illegible]

西三丁目一〇 [illegible]

鈴木義男

明治廿七年一月十七日福島縣白河町に生る。大正八年東京帝大法學部を卒業し獨佛[illegible]東北大學教授たり

白河町[illegible]

新選 北原白秋集

新選 吉田絃二郎集

大衆文學全集

スカラムッシュ

淫蕩の貴族を父とし、而も其父を知らぬ薄命の孤兒、神學生アンドレは、生れながらにして、笑ひの能力と、世の中は皆氣狂ひだ、と云ふ感じの持主であつた。彼は學友が暴虐な貴族の爲に斃された其靈に對して復讐を誓ひ、亡友の思想を代辯して官憲の追跡を受け、法服の人より舞臺の人となり、スカラムッシュの役を引受けたが、其惡謔と皮肉と冒險とが彼の性格にぴつたりと嵌まつた。つゞいて煽情的なロマンスが展開する。最後のハッピー・エンディングに至る迄の主人公の數奇な閲歷を主材として、現代ジュマの名あるサバチニが、恐怖時代のフランスを如實に物語つてゐる。

第一回	家なき子	マロー作 菊池幽芳譯
第二回	ルパン	ルブラン作 保篠龍緒譯
第三回	寶島他三篇	スチブンソン作 野尻清彦譯
第四回	シャアロック・ホウムズ	コナンドイル作 延原謙譯
第五回	洞窟の女王 ソロモン王の寶窟	ハガード作 平林初之輔譯
第六回	ダイヤモンド カートライト事件	フレッチャー作 森下雨村譯
第七回	アンクル・トムス・ケビン	ストウ夫人作 和氣律次郎譯

全三十六巻 ◇各册五十錢

改造社　振替東京 …

最新刊

最新刊

横瀬夜雨編著

天狗騷ぎ

定價參圓
送料廿七錢

藤田小四郎一派が筑波山に據つて、偃武三百年の夢を破つた元治の變が天狗騷ぎである。水戸藩には學派の異同から天狗黨と諸生派が相拮抗してゐた。筑波の軍は急進的な尊王攘夷を唱へ事を擧げたが、共鳴者と共に諸國の浪士も馳せ參じ、頑固に幕軍に抗し諸大名と鬪ひ、十二月遙か越前に至りて勢盡くるまで、民間の向背、軍の掛引き、實に興味深きものがある。著者の祖父は此亂の眞只だ中にありて事實を見聞し審察して、驚嘆すべき記錄を殘した。著者は更に民間記錄を蒐集し故老に尋ね、茲に完全なる記錄を編した。幕末に於ける開鎖の論爭と階級鬪爭の實情は本書によつて讀者の眼前に髣髴するであらう。

「目次の一斑」濱田の野鼠。鮪庖刀。無賴取締。地震手當。大獄。水戸天狗十八人。菊水の流。常陸帶。首は有る。尖脚爲凶。落首。天誅ぶり。骨拔參覲。御立退。長府奧方御立退。てんやわんやの中で。似せ浪士。（中略）天狗行列。風聞。（中略）灰掻き。（中略）落ち支度。天狗山を離る、天狗殺し。天狗水戸城を攻む。天狗湊に入る。（中略）木戸の軍議。兵糧がかり。天狗赦免狀。續天狗行列。天狗降る。白虹日を貫く。世は移る。丹羽は飛ぶ鳥居は進む。水戸は如何なる。立往生。將軍薨ず。

發行所 東京芝區愛宕下町 改造社 振替東京八四〇三

天下を動かす大全集!!

御國の爲め、同胞のため
眞劍熱誠!大犠牲大壯擧!!

これ程良い!安い
立派な全集なし
見る人皆驚嘆!

修養全集
講談全集

面白い〳〵
感動感激
上品で愉快
爲になる

善い全集だ!

日本人には誰でも
讀ませたいものだと
朝野名士大賞讃

詳細＝十月一日發表

東京・本郷
大日本雄辯會講談社

秩父騒動

堺利彦

序

去年の夏、私は初めて武州秩父の地に遊んだ。それまで私は秩父といふ處について、只だ歴史上に古くから知られている、何となく多少神秘的な、山間の一地域といふより外、殆んど何んの知る所も無かつた。

秩父の庄司次郎重忠、即ち源氏の武將畠山重忠。それは勿論、芝居や淨瑠璃や日本外史での古いおなじみである。それに續いては、直ぐ近處の熊谷直實も思ひだされる。然しそれらは只、當時に於ける、莊園制度と、その制度の產物としての剛健なる武士、——時としては淨瑠璃に現はれた重忠の如き文化的の武士——が、源氏の嫡流を擁立して勃興した事を想像させるだけであつた。

私は又いつとなく『秩父絹』といふ言葉を聞いている。然しそれも只だ何となく、山地の農業を想像させられるだけに過ぎなかつた。

今から十五年ばかり前、私は田嶋梅子といふ若い社會主義婦人を知つた。彼女は秩父の生れで、そこの小學教員をやめて東京に來ていたのだつた。當時の新らしい女で、善く歌を作る、色の白い人だつた。『山戀し、雪にうもれし山戀し、二十年住みし故鄉戀し。』『幾萬里、長き尾を引く星となりて、無窮の空を横行せん願ひ。』『そそり立つ秩父の峰に神秘あり、吾れかくめいの御告を聞きぬ。』不幸にして彼女は間もなく病死した。

それから一二年の後、私は又ひとりの秩父人を知つた。彼は下駄の齒入を職とする倔強な勞働者で、多くの家族を控へて生活に窮していた。或時、私が慰める言葉を知らないので『人間まさか餓死するものでもあるまい』と云ふと、『イヤ、これは氣の强い言葉を聞いた』と云つて、勢ひよく歸つて行つた。彼には相當の文字があつた。そしていつも戰鬪の意志があつた。備前燒の德利をつかみつぶしたような顏付に、負けじだましいが漲つていた。私は彼が、いつか必ず社會的改革者となることを信じていたが、數年の後、彼は熱狂的な宗教信者に變

じた。現に今、宮崎寅之助氏の最高弟として知られている。名は村田濱太郎君。右の男女二人を秩父の人として記憶する事は、私に取つて、秩父の地に對する、多少の好奇心の釀成であつた。

その外に今一つ、秩父の地に關する、極くボンヤリした古い記憶が私の心に霞んでいた。それが『秩父騒動』であつた。何で讀んだか、誰から聞いたか、わからない。只だ百姓一揆に類した、自由黨騒ぎに似たような事柄だと、感じていた。それが極くボンヤリした記憶であるだけ、それだけ却つて私の氣に掛つていた。そんなこんなで、私は秩父に關する智識を少しも持たないながら、何となくその地方に對して床しさを感じ、一種の淡いあこがれを持つていた。

そこで去年私が『當なし行脚』といふ、毎月一回の小旅行を思ひ立つた時、フト秩父といふ地方が私の腦に浮かんで來たのであつた。それには近來流行の『長瀞の風景』も一つの引力であつたに相違ないが、然し秩父に對する私の『古いあこがれ』が更に一層强い引力であつた。

それで私は七月の初、遂に秩父の地に遊ぶ機會を得た。『私は先づ秩父鐵道の終點、影森まで（電車に）乗つた。電車は荒川に沿つたり離れたりして、秩父の山中に登つて行く。山中の氣が自然に人を襲つて來る。影森に近づく頃には、武甲山の雄大な姿が、蝦蟇のうづくまるが如く前面に現はれ』た。

それから[illegible]

この鍾乳洞を探り、さま〴〵の『奇勝絶景』を賞し、色々と『秩父の山水を踏み、秩父の自然に接觸し』た後、二三驛引返して、この地方の中央都會たる秩父町（昔の大宮郷、『延喜式内社』たる秩父神社の在る處）に入り、そこで幸ひ意外にも種々の便宜を得て、目的とほり、ほゞ『秩父騒動』の要領に通じた。その時の事は、大概、私の『當なし行脚』の中に、少々得意の獲物として記されてある。

所が、その後、私のあこがれは更に『秩父騒動』の裁判記錄の一部と、當時の新聞記事の一二種とを讀ましめた。私の智識は稍や豐富となり、正確となつて來た。私は一篇の『秩父騒動記』を書かうと計畫した。そこに折あしく私が病氣になつて、空しく半年餘を過したが、それが今こゝで漸く果される事になつたのです。

一　一揆の役割と陣立

明治十七年十一月一日の夕刻、武藏國秩父郡下吉田村椋神社に人民の大群集があつた。彼等は皆な白木綿の鉢卷を爲し、白木綿の襷を掛け、或者は竹槍を持ち、或者は鐵砲を持ち、或者は刀劍を帶びていた。彼等は明白に一揆の徒黨であつた。彼等の首領連は神社境内の小學校に入り、先づそこで一揆の役割を發表した。

總理　田代榮助

副總理　加藤織平

[illegible]

甲大隊長	[illegible]
甲副大隊長	（姓不詳）千七
乙大隊長	飯塚盛藏
乙副大隊長	落合虎一
上吉田村小隊長	高岸善吉
飯田三山村小隊長	犬木壽作
日野澤村阿熊村小隊長	村竹茂一
下日野澤村小隊長	新井槇藏
勢川村白鄕村小隊長	坂本伊三郎
上下影中村小隊長	黒谷長吉
横瀬村小隊長	千島周作
大宮郷小隊長	柴岡熊吉
槇田村小隊長	逸見彌十
三澤村小隊長	新井貞吉
三澤村小隊長	新井駒吉
會計長	井上傳三
會計副員	宮川津盛
同（小隊長兼）	柴岡熊吉
兵糧方	新井繁次郎
同	井上善作
同	泉田　部
[illegible]	[illegible]
同	大久保□吉
同	坂本宗作
軍用金集方	井出爲吉
同	宮川寅五郎
小荷駄方	小柏常次郎
同	柴崎佐作
傳令使	坂本宗作
同	高岸善三
同	堀口幸助
同	木戸爲吉
同	門平惣平
同	駒井貞作
同	（外十八九名）
書記	島田正九郎
同	（外一名）

右の中、總理、副總理は『他よりの借物』だとある。或る場合には、田代榮助と加藤織平が『兩大將』と呼ばれている。又『参謀長』の菊池貫平は自ら望んで其の地位に就いたとある。

彼等は又軍律様のものを左の如く規定して發表した。

第一、今般大事件中、金圓其他を私に押領致す曲者、若し犯

ものは斬
第二、事件中、決して婦人に關係致す間敷事、若し犯すものは斬
第三、酒宴遊興は一切致す間敷事、若し犯すものは斬
第四、私の意恨を以て人を暴害致す間敷事、若し犯すものは斬
第五、總て指揮するもの〻命令を受けず私に事を爲す間敷事、若し犯すものは斬

斯くて彼等は同勢を甲乙の二大隊に分ち、甲大隊は加藤が率ゐ、乙大隊は田代が率ゐ、加藤隊は上吉田村を經て小鹿野町へ、田代隊は下小鹿野町を經て小鹿野町へ繰込む手順であつた。その隊の組方は、第一鐵砲隊、次に竹槍隊、次に帶劍隊。小隊長は帶劍隊の中に在り、大隊長は帶劍隊の次に進む。それから又竹槍隊と傳令使があつて、その次に總理（又は副總理）があり、又その次に竹槍隊と傳令使があつた。同勢は追々に增加して、この時既に八九百人に達していた。

然るにこれより先、同日の午前十時頃、巡査數名が吉田村へ押寄せて來るとの報告があつた。そこで田代總理等は、居合せたる柏木太郎吉、新井周三郎、門平惣平、堀口幸助、坂本惣作、外に鐵砲打三四人を吉田村へ驅けつけさせたが、午後一時に至り、門平外三名が注進として立戻り、只今、吉田村の淸泉寺前に於いて巡査一人を打取り、味方二名（柏木外一名）が戰死した旨を報告した。それから間もなく、味方のもの百五十六人は既に下吉田村の戶長役場を取圍み、鐵砲を打ちかけた。もちろん役場員は皆な逃げだした。

それから同勢がいよ〳〵繰出さうとする時、仲間の秋原勘次郎が、巡査一人と、秩父郡新道測量師一人とを連れて來た。井出爲吉がそれを引取つて說得した處、巡査は贊成して仲間入をすると云ふので、總理の手元に置いたが、測量師は『降伏致さずと强情ばる』ので、總理が『止むを得ず、殺す方然るべしと申聞』けたところ、結局『降參すると申出』でたので、秋原に預けた。

二　高利貸の燒打と叩きこわし

こんな事のあつた後、夜八時頃、甲乙二大隊は左右に分れて出發し、その途中、甲大隊は下吉田村で吉川宮次郎の家を燒き、乙大隊は下小鹿野町で平齋十郎の家を燒いた。平と吉川は共に高利貸であつた。平は田代と懇意の者で、八年前妻を離別する時、離別の『趣意金』に差支へ、それを田代が貸してやつた程であるのに、近頃は八千圓からの身代になつていた。吉川は最も苛酷だといふ評判で、僅か八圓の元手から、數年間に一萬圓の身代になつていた。一揆は高利貸を征伐するのが主要の目的であつた。

當時、吉川が警察への申立の拔書、左の如し。『十一月一日午後十時、放火さる、……同日午前九時頃、用事ありて野巻村へ罷越、午後一時頃歸途久長村にて騷々敷事ありやに聞、……こゝかしこ立寄り樣子を聞、……七時頃歸宅……妻云、賊共見張り居り、押寄せ來るとの事、早々逃げよ、……[illegible]

迯出し、自分は吉田椋上野壽の藪地に潜伏、……十時頃自分宅の方に火燃え上る、……賊共大宮へ行くと聞き歸宅、……家は既に焼失、……それより山を越え寄居警察へ届出、……誰云ふとなく、井上傳三が指揮し、同村高野作太郎が放火し云々……』

又吉川に對する、警察官の聞書樣のもの、左の如し。『有名の高利貸、此度の借金黨には充分關係あり、……過般來、負債者計取より談、……答へて云ふ、代人には答へず、言分あらば本人共來るべし、承知して借りながら高利だの延期だの、スペッタノ、コロンダノと、メンドクサイ、貸金者に差紙付けるは當然なりと、更に取合はず、いよいよ甚だしく差紙をつける、……同人は毎日大宮裁判へ出頭し、手にはステッキ、腰には短銃、……何ゆゑ兇器を携へて他行するやと、その理由を問へば、此頃は借金黨がマゴマゴするからと答へ云々、……故に世人、宮次郎を呼んで强欲親爺、强情親爺と云ひ、關係なき者まで同人を憎まざるなし』

平嘉十郎の申立は左の如し。『三十一日、大宮郷の親類へ參り、吉田邊大分騒々敷樣子につき用心致せとの事、……急ぎ歸宅、……金の無心云々……。一日、構はず在宅、午後十一時、數百人旗を立て押來る、……何の話もなく鐵砲を打掛け、……中々五發十發に無之、……大いに驚き家族を引連れ、宅の南手、凡そ三丁ばかり、赤ピラ川の川端に逃げて夜を明す……。二日、又々暴徒の噂、……自分だけは村内コバン澤山の中に匿れ、終日食はず、夜に入り峰越にて伊豆澤村の親類田米藏方へ參り、十一月十四日まで潜み、……歸宅して見れば住居家財殘らず焼失、……川端に居る時、既に火の上るのを見云々……。借金少々、但し催促には致さず云々』

一揆は夜十一時頃、小鹿野町に着し、諏訪神社に繰込んで陣取つた。そして同町の高利貸、加藤常七と柴崎佐平の家を叩きこわした。但し加藤は平生餘り苛酷でないので、僅かのコワサレで濟み、柴崎は無慈悲の評判が高かつたので、大破壞をされた。それが『自然人氣の然らしむる所』であつた。外に同町の高利貸田畑讓助の家も焼拂はれた。大體一揆の方針としては、『一應掛合を爲し、貸借を皆無に致させ、應ぜざれば打毀す存意』であり、『放火は近隣の害を思ひて之を禁じ』『成るべくは放火せざる樣』『已むを得ざる場合、最も苛酷なる者の家には放火するも致方なし』と云ふのであつた。

一揆は又小鹿野町の警察分署を襲撃して多少の破壞をやつた。元來、椋神社での申合せに依れば、『凡そ何人と雖も先方より手向ひ致さざる内は決して此方より手出しすべから』ざる約束であり、『又警察署等は人が居れば格別、人の居らざるに破壞しては國益を害するに付、決して空所を打毀すべから』ざる筈であつた。然るに小鹿野町では左の通り、警察官の逃げだした跡の警察署が破壞されたので、嚴しく詮索を遂げたが、『多人數の事とて遂に誰の所爲とも分ら』なかつた。

三　事の起り、田代の人物、困民黨

ここで少し遡つて事の起りを調べて見ると、[illegible]
頃は大宮郷の『郷士』であつた。元來、徳川時代に於いて、[illegible]八千
[illegible]は武州秩父の領地で、その八千石の中、田代家は代々、[illegible]の
[illegible]をつとめたとも云ふ。然し維新以來、『近隣に顔を賣つた、[illegible]
[illegible]その身代が『左前』にならざるを得なかつた。
[illegible]について問はれた時、『自分の自用をする位[illegible]
[illegible]明治七年に『懲役六十日』に處
せられている[illegible]であつたか分らない。裁判の判決書
[illegible]人の窮民を救し窮難を
恤み依頼を受て[illegible]に知られ』云々。然し一方には、『大宮郷にて三
百代言を營業せし者なり』といふ記錄もある。

榮助は自分の財産について、『田畑上り高入石高何程は多分に所有せず』と申立てて居るが、裁判書類中の『田代榮助財産調』に依れば、次の如くなつている。

大宮郷、畑八畝十步、地價十五圓九十四錢三厘。明治十六年五月、稻葉へ書入。同年同月、山崎慶次郎外一名へ金四十二圓五十錢、頼母子講二番書入。

一、畑一反五畝十五步、地價二十四圓三十一錢。十六年五月稻葉へ金八十八圓の書入。加藤增太郎へ四十三圓七十五錢頼母子講二番書入。

一、畑一反三畝十二步、地價十九圓四十七錢。十六年新井伊八方へ三十二圓質入。

一、畑一反二畝廿八步、地價十五圓九十三錢六厘。十五年影森村原島

それから同勢がいよ／＼繰出[illegible]
巡査一人と、秩父郡新道高篠[illegible]師一人[illegible]
[illegible]藏、巡査は[illegible]

[illegible]方へ五十圓書入
一、山林一畝二十步、地價十九錢三厘。
[illegible]の頼母子講書入。
一、畑一反十四步、地價四圓八十錢四厘。十二年[illegible]
宮郷田代源太郎へ六十圓の頼母子講書入。
一、藁葺平家建一棟、間口三間半、奥行二間半。十六年[illegible]
一、藁葺平家建一棟、間口二間半、奥行三間半。
一、火テリン二ワ、外五十五品。

榮助の家政が可なり困難に陥入つていた樣子が窺はれる。[illegible]
事件の起つた時、自宅の裏畑で『芋掘』を行つていた。[illegible]
明治十七年八月廿一日の夕刻、下吉田村の[illegible]
れの家を尋ねて來た。彼は天氣のために山に居たのだ。[illegible]
た。その後兩三度使が來たが、同じく會はなかつた。[illegible]
から秩父に來てゐた堀口幸助と外一名が、彼を山に尋ねて來
は、下吉田村や石間村邊で『困民黨』といふものが出來て居り
の人民が高利貸の爲に難澁して居るのを救ふ爲、借金を年賦
て貰ふ事、學校を三年休業にして貰ふ事、雜税を減省し、村
にして貰ふ事などを談判する筈であるが、その相談の爲、井上
まで是非出向いてくれといふ事であつた。井上は年來、田代と懇
間柄であつた。田代は『獄中に一度必ず行く』と返事した。その日に
鷄爵の盆の十三日であつた。
九[illegible]六日[illegible]

使として、砥間村の新井紋次郎がやつて來た。今日、群馬縣の小柏常次郎なる者も參り居るにつき、是非同行せよとの事であつた。夕飯、後は新井紋次郎と同道して阿熊村の新井駒吉方へ行つた。そこには駒吉の外、井上傳三、坂本惣作、彦久保次郎吉、門平惣平、小柏常次郎、外三名ばかり居た。困民黨、或は貧民黨の事について、明方まで色々話があつた。(然し話はまだ本題に入らなかつた)。そこに日野澤村の者が二人ばかり來て、『貧民黨が飯田村の唐松峠に凡そ三百人集合』云々と報告した。『棄置難し』と云ふので、七日午前六時頃、一同出發した。途中で高岸善吉に出會ひ、同道した。扨、田代は峠下の或家に控へ、他の者共を見せにやると、人の集まりたる様子なし。それから一同、高岸善吉方に引揚げ、そこで又落合虎一、井上善作等と落ちあつた。こゝで高岸善吉が大いに高利貸の無慈悲を罵り、窮民の多きことを說き、年賦償還、雜税減省等の必要を主張し、改めて田代に對し、是非この運動に盡力してくれと依頼した。

田代は之に對し　高利貸の害毒は兼ねて承知いたして居るも、然し容易に行はれる事でないから、篤と考へた上、返答すべしと云ふ。人々は猶ほ頻りに迫る。そこで田代が改めて、『然し人は皆、イザとなると命が惜しくなるものだから、猶よく考へるがよい』と云ふと、小柏常次郎は、『貴殿を見込んでの頼みであるから、是非盡力して貰はねばならぬ』と云ひ、他の人々は、『我々は決して命を惜しむものでない、どんな書付でも書く』と云ふ。そこで田代も遂に決心して、『貴殿等左様の心底なら、自分も國の爲め命を棄てゝ[illegible]力すべし』と答へ、『然し今一應、總代を立て[illegible]』め、その日はそれで別れた。

四　借財年賦濟請願運動

田代はその翌朝、十月八日頃まで一個月間は用事があるとて、大宮郷へ歸村した。以上は田代を中心にして事件の進行を[illegible]であるが、困民黨の年賦請願運動はそれよりズット以前、即ち、[illegible]十二月から行はれて居た。

この運動の最初の發起人は高岸善吉、落合虎一、坂本惣作の三[illegible]あつた。彼等は大宮郡役所へ借財年賦濟の願を差出したが、それ[illegible]りる者の方が惡いと逆様に說諭された。三度目には請願條例に依つ[illegible]請願せよと云はれたが、それには戸長の調印を要するのに、戸長が[illegible]印して呉れないので其の儘になつた。その中、養蠶で皆々多忙の爲[illegible]一時中止した。然し養蠶は終つたが、生糸の相場が大いに下落して[illegible]十六年度に比すれば殆んど半額となり、借金の利子も拂へぬ始末とな[illegible]つた。そこで今年八月三十一日、小鹿野町の市の歸りに、二十餘人の者が更に小鹿坂峠に會合し、翌九月一日、飯田村和田山に移り、そこから四五人づゝ三手に別れて高利貸に談判したが、大宮警察署長が巡査十人を引連れて出張し、多人數一緒に掛合に參るは宜しからずと說諭があつて一先づ解散し、その後は警察の云ふ通り、二三人位づゝで

こゝで少し遡つて事の起りを調べて見る。第一の首領たる田代榮助は大宮郷の『郷士』であつた。元來、藩政時代に於いて『秩父八千石』は武州忍藩の飛地で、その八千石の中、田代家は代々、最大の『名主』だつたとも云ふ。然し維新以來、『近隣に敵を買つた、世話好』の榮助は、自然その身代が『左前』にならざるを得なかつた。榮助は裁判所で『讀書』について問はれた時、『自分の自用をする位は學びたり』と答へている。彼は又、明治七年に『懲役六十日』に處せられているが、それは何事の爲であつたか分らない。裁判の判決書は彼れの人物を次の如く記している。『從來善く人の葛藤を裁し窮迫を憫み俠客を以て名郷黨に知られ』云々。然し一方には、『大宮郷にて三百代言を營業せし者なり』といふ報告もある。榮助は自分の財產について、『地所上り高入石高動產は多分を所有せず』と申立てて居るが、裁判書類中の『田代榮助財產調』に依れば、次の如くなつている。

大宮郷、畑八畝十歩、地價十五圓九十四錢三厘。明治十六年五月、稻葉へ書入。同年同月、山崎慶次郞外一名へ金四十二圓五十錢、頼母子講二番書入。

一、畑一反五畝十五歩、地價二十四圓三十一錢。十六年五月稻葉へ金八十八圓の書入。加藤分太郞へ四十三圓七十五錢頼母子講二番書入。

一、畑一反三畝十二歩、地價十九圓四十七錢。十六年新井伊八方へ三十二圓質入。

一、畑一反二畝廿八歩、地價十五圓九十三錢六厘。十五年影森村某島藤蔵方へ五十圓書入

一、山林一畝二十歩、地價十八錢三厘。十二年宮郷橋柳嘉兵衛へ十一圓の頼母子講書入。

一、畑一反十四歩、地價四圓八十錢四厘。十六年横瀬村本橋藤吉、大宮郷田代源太郞へ六十圓の頼母子講書入。

一、藁葺平家建一軒、間口三間半、奥行二間半。

一、藁葺平家建一軒、間口二間半、奥行三間半。

一、火テリン二ツ、外五十五品。

榮助の家政が可なり困難に落入つていた樣子が窺はれる。彼はこの事件の起つた時、自宅の裏山で『天蠶』を飼つていた。明治十七年八月廿一日の夕刻、下吉田村の飯塚盛藏と井上善作が彼れの家を訪ねて來た。彼は天蠶のために山に居たので、會はなかつた。その後同三度使が來たが、同じく會はなかつた。九月二日、群馬から秩父に來てゐた堀口幸助と外一名が、彼を山に尋ねて來た。話は、下吉田村や石間村邊で『困民黨』といふものが出來て居り、多數の人民が高利貸の爲に困難して居るのを救ふ爲、借金を年賦償却にして貰ふ事、學校を三年休業にして貰ふ事、雑税を減省し、村費を半額にして貰ふ事などを談判する筈であるが、その相談の爲、井上傳三方まで是非出向いてくれといふ事であつた。井上は年來、田代と懇意の間柄であつた。田代は『途中に一應必ず行く』と返事した。その日は蹶起の前の十三日であつた。

[illegible]

他として、石間村の新井繁次郎がやつて來た。今晩、[illegible]次郎なる者も怒り居るにつき、是非同行せよとの事であつた。[illegible]依は新井繁次郎と同道して阿熊村の新井駒吉方へ行つた。そこには駒吉の外、井上傳三、坂本惣作、彦久保文次郎吉、門平惣平、小柏常次郎、外三名ばかり居た。困民黨、或は貧民黨の事について、明方まで色々話があつた。（然し話にまだ本題に入らなかつた）。そこに日野澤村の者が二人ばかり來て、『貧民黨が飯田村の唐松峠に凡そ三百人集合』云々と報告した『棄置難し』と云ふので、七日午前六時頃、一同出發した。途中で高岸善吉に出會ひ、同道した。扨、田代は峠下の或家に控へ、他の者共を見せにやると、人の集まりたる様子なし。それから一同、高岸善吉方に引揚げ、そこで又落合虎市、井上善作等と落ちあつた。こゝで高岸善吉が大いに高利貸の無慈悲を罵り、窮民の多きことを説き、年賦据置、雜税減省等の必要を主張し、改めて田代に對し、是非この運動に盡力してくれと依頼した。

田代は之に對し　高利貸の狀態は兼ねて承知いたして居るも、然し容易に行はれる事でないから、篤と考へた上、返答すべしと云ふ。然し人々は猶は頻りに迫る。そこで田代が改めて、『然し人は皆、イザとなると命が惜しくなるものだから、猶よく考へるがよい』と云ふと、小柏常次郎は、『貴殿を見込んでの頼みであるから、是非盡力して貰はねばならぬ』と云ひ、他の人々は、『我々は決して命を惜しむものでない、どんな[illegible]付でも付く』と云ふ。そこで田代も遂に決心して、『貴殿等の[illegible]力すべし』と答へ、『然し今一應、[illegible]代を[illegible]み、その日はそれで別れた。

四　借財年賦濟請願運動

田代はその翌朝、十月八日頃まで一箇月間は用事があると申置いて、大宮郷へ歸村した。以上は田代を中心にして事件の進行を見たのであるが、困民黨の年賦請願運動はそれよりズット以前、即ち去年の十二月から行はれて居た。

この運動の最初の發起人は高岸善吉、落合虎市、坂本惣作の三人であつた。彼等は大宮郡役所へ借財年賦濟の願を差出したが、それは借りる者の方が悪いと云ふ様に說諭された。二度目には請願係に依つて請願せよと云はれたが、それには戸長の調印を要するのに、戸長が調印して呉れないので其の儘になつた。その中、養蠶で皆々多忙の爲、一時中止した。然し養蠶は終つたが、生糸の相場が大いに下落して、十六年度に比すれば殆んど半額となり、借金の利子も拂へぬ始末となつた。そこで今年八月三十一日、小鹿野町の市の歸りに、二十餘人の者が更に小鹿坂峠に會合し、翌九月一日、飯田村字和田山に移り、そこから四五人づゝ三手に別れて高利貸に談判したが、大宮警察署長が巡査十人を引連れて出張し、多人數一緒に掛合に參るは宜しからずとの說諭があつて一先づ解散し、その後は警察の云ふ通り、二三人位づゝ

諸方の高利貸に掛合つた。その後も彼等は下吉田村の井上山、飯田村の唐松峠などに集會した事がある。前乃、唐松峠に貧民黨三百人云々の話は、即ちこの集會に一つに關する噂であつた。

巡査野崎彌太郎の『探偵復命書』を見るに、この困民運動の發展した次第が善くわかる。『復命書』の抜書、左の如し。『十月八日、秩父郡下吉田村自由黨井上傳三外數名發起に係る延期組の組織……、郡中高利貸若干人有之、……本年諸品下直、糸繭等も下直、負債返金不能、……延期勘辨を債主に申入るゝも聞入れず、……九月より折々集會……年賦請願……同意者屯集……各郡に流傳……男衾郡、榛澤郡、幡羅郡、比企郡、群馬縣北甘樂郡まで同盟する手配、……十月四日頃より折々各村にて延期申入……』

『九月廿九日及び十月一日、負債人百廿七名連印帳を以て、債主に對する説諭願を大宮警察署へ差出す……採用不相成——飽まで債主に迫り、不聞入れば過激に渉るより外なし云々……』

又『負債者債主談判』と題する書類を抜書すれば左の如し。『秩父郡中、負債者の多きは吉田村を初め……外數個村、……その頭取は石間村の博徒姓不明折平、同人子分落合寅吉、高岸善吉、……姓不明惣作、新井周三郎(教員)、その外二三名が其の債主……に對し、五個年据置、向ふ二十個年賦を談判、……一時身を他に避けるもあり、斷然謝絶したるもあり、本月十五日或は廿日に蜂起すると云ふもあり、年數夥多なれば[illegible]すると云ふもあり云々……』

こゝに『博徒姓不明折平』とあるは前記の副總理『加藤織平』の事だらう。そして落合、高岸等が『同人子分』と云はれて居るので、その關係が想像される。『姓不明、惣作』は坂本惣作と判斷される。

斯くて困民黨と田代榮助との關係は、田代が首領として困民黨を作つたのでなく、困民黨が運動の發展上、地位あり名聲ある田代を擁立したのであつた。坂本の申立の中には、『警察への答へにも困るので榮助に頼んだ』とある。然し又同じ申立の中に、田代が『五村十村では駄目、秩父全郡で事を爲さねば駄目』と云つたとあり、又『その時、三十二ケ村一致し居』たるが、『それから榮助の力で全郡に廣まつ』たとある。田代が、『人は皆な命が惜しくなる』といふ事について念を押した點など併せ考へて、さすがに首領らしい所だと思はれる。

五　軍用金押借、强盗

十月八日、田代は又困民黨の連中から使で招かれたが、不快で行かなかつた。同十二日、坂本惣作が迎へに來たので、同道して井上傳三方に行つた。加藤織平、井上善作、落合寅市、新井周三郎、門平惣平、小柏常次郎、柴崎周作等の人々が居た。彼等は警察に對する債主説諭願が却下された事、年賦償却の談判が行はれない事などを報告し、この上は止むを得ず强訴の外なし、それには人數の多きを要すとて、人の集め方を相談した。即ちこれでいよ〱事を起すに決定したわけであつた。

十三日、田代榮助、小柏常次郎、新井周三郎、坂本惣作、井上傳三等が加藤織平方に集まつた。その席上、加藤が軍用金を借用して貰ひたいと云ひだした。田代は、當分不融通、調金六かしと答へた。加藤は、押借なりともして金策の外なしと云つた。田代は即答せず、いづれ歸宅の上、返事すると云つた。然し、大抵この時、押借の相談がまとまつた。

十四日、田代は柴岡熊吉方へ行き、何處かで百圓か百五十圓借りる處は無いかと聞いた。その位なら富田瀧次郎方へ行けばあるだらうと、柴岡が答へた。田代は猶、大野茂吉へ金圓所持者の姓名を聞合せてくれと依賴して歸宅した。八時過、新井周三郎、坂本惣作、堀口幸助等七名が、加藤織平からの賴みとして、今晩是非軍用金を借用してくれと云つて來た。皆々横瀬村スガタの堤へ出張し、柴岡、大野を案內とし、金の外強奪せぬ約束で、新井外六名を先づ富田方へ遣はした。田代はその時、まだ飯前であり、それに鞋も無かつたので、一旦歸宅して仕度の上、スガタの堤で待合した。程なく皆々歸り來り、金四十七圓と、外に刀二本を田代に渡した。次に大野の案內で柳熊藏方へ押入らしめた。田代は大野方の軒下に待つていた。格別手間も取らず立戻り、金三圓と提灯を出した。その時、坂本が風呂敷包を持つて居るのを、田代が見咎めると、それは生糸であつた。左樣な物を取つては外聞あしと、直ちに棄てさせた。金は新井と坂本へ十五圓づゝ渡して、それを加藤へ屆けさせた。二人に對し充分の信用が置けないので、田代は金を二人に分けて渡したのだが、後に聞けば、果して新井の分は加藤に屆かなかつたと云ふ。田代は餘ほど氣になつたと見えて、この強盜金の始末を極めて詳細に申立てている。即ち彼は五十圓の內、その夜、柿崎、坂本の二人へ小使として二圓五十錢を渡し、殘り十七圓五十錢を自分の手に預つていたが、三四日後、又十圓を加藤に送り、十月廿日、門平惣平が米代に差支へるから幾許か分配してくれと申出でたので、二圓五十錢を渡し、又井上傳三が何か入用があると云つたので、三圓を渡した。それでいよ〳〵の殘りが二圓になるが、その中、「自分が始終使役せる堀口幸助に五十錢づゝ兩度」わたし、「自分奔走中の小使」に一圓を費した。

この件につき富田瀧次郎の申立は、大體次の通り。十月十四日夜十時頃、強盜六名拔刀にて潜戶を打破り裸蠟燭にて押入、細引にて自分等家族五名を縛り、手拭にて口を蔽ひ、拙者共は頭滿の者、甲州へ赴く路銀に差支、無心に參る云々、黑頭巾の四名が宅內を搜索、刀の脊で自分の左の腕を打ち出血、金が無ければ親子の首を貰ひ質に入れる云云、金は四十七圓一包、外に女子供の貯蓄金、合計八十四圓ばかり、生糸二束、槍一本。

柳熊藏の申立は大體次の通り。自分は仰天してシカと覺えぬが、賊は十人位、殘らず刀を持ち居たり、靜かにしろ、騷げば燒拂ふ云々、麻の細繩にて自分を後手に縛し、又妻が緣端に隱れ居るを搜して同樣縛し、札を出せと申す、金は無いと云ふ。あるものかないものかと、

刀で脊を殴打、自分その時氣絶、奪はれし金子總計十六圓八十錢、外に刀一本、提灯二張。(右二項とも、田代の申立と金額が合はない。)

六　落ちついた態度と、性急な態度

十五日から廿一日まで、田代は近村を歴訪して同志を求めた。廿二日、加藤織平方の會合に於いて、來る廿六日、不間村アノー山(粟野山)に困民黨の大會議を開くに決した。(アノー山は加藤織平宅の直ぐうしろに在つた。)それから廿五日まで、田代は人目を避けて近村に潜んでいた。いよ〳〵廿六日、五十六人の困民黨がアノー山に集合した。いよ〳〵廿八日に事を擧げやうといふ形勢であつた。之に對し、田代と井上傳三とは相謀つて、三十日間の猶豫を群集に求めた。その理由は蓋し準備の不足にあつた。然し『窮民等、債主の督促を避け、處々に流寓し、多くは家に還らざるの情況なるを以て、衆皆延期を好まず』田代等の意見に反對した。田代等は更に一週間の猶豫を求めたが、それすらも聞かれず、僅かに三日間の猶豫を以て、いよ〳〵十一月一日擧兵と決定した。

廿七日から廿九日まで、田代は更に近村を歴訪して同志を求めた。そして廿九日夜、歸つて門平惣平方に宿した。田代と井上はその夜更に十五日間の擧兵延期を發議したが、聞かれなかつた。田代は延期提議の理由を次の如く語つている。先に小柏常次郎が、加藤と井上の儀として、度々兒玉郡、榛澤郡へ加盟勧誘に赴き、それ〳〵同志を得たとの報告があり、それを本としてアノー山の決議になつたのだが、その後、加藤が右二郡へ人を遣はしたる處、小柏の話と相違あり、それでは人に迷惑をかけると思ひ、十五日の日延を求めたのであると。然し田代等は多數者の反對を見て、然らばと其の意見に従ひ、

三十日は加藤方にて諸種の準備を議した。

三十一日、田代は門平方に在り、前章に記した役割を定めた。『役付は貴殿の隨意に』と、加藤等はそれを田代に一任したのだが、田代は當ノ人物を知らないので、加藤と門平とに尋ねてそれを決定した。

午後二時頃、長野縣の井出爲吉、菊池貫平の二人が田代を尋ねて來た。彼等は、昨夜、加藤から話を聞いたと云つて、加盟を申込んだ。田代等はそれを探偵かと疑ひ、好き程にあしらつたが、二人は熱心に話をして、夕刻に立去つた。

所が、その直ぐ跡に、加藤織平が狼狽の體で門平方へ走りこんで來た。井上傳三はその樣子を見て、テッキリ巡査に追はれたものと思ひ、直ぐ其の旨を田代に知らせ、田代と共に直ぐ山の中に逃げこんだ。夕方になつて加藤等が焚火をして居る所に、田代と井上が出て來て、先刻の加藤の狼狽は、菊池と井出の姿を見て、それを巡査と思つた爲である事が分つた。(この菊池が會計長になつたりした事は、前に記した通り。)

この時、田代、加藤、井上の外、門平、坂本、高岸、堀口、村木太郎吉、小柏常次郎などが居合せたが、加藤は[illegible]助に向ひ、『小柏は無暗に人民を煽動し、僞すところ一も實在ならず、甚だ不都合

合、然しこれまでに至りし上は、成るだけ人数を引連れ、高利貸をつぶし命を棄てる、お前は跡に残り、徐々と事を謀りくれ』と謀りだした。之に對し田代は、『今日に至り、貴殿が命を棄てると云ふのを傍觀する譯には参らぬ、元來此事たる、小柏の失策より切迫に至りし事ゆゑ、小柏の首を拙者が貰ひ、其の首を見せたらば多衆の者、十五日位の猶豫を與へてくれるならん、依つて首を貰ひたし』と小柏へ迫りたるに、その時、井上が、『今ま小柏の首を取つても益なき事に付、今一應、小柏を同道にて集合のものへ談判致すべく』と申す故、日野澤村の或る人家、即ち貧民等集會の場所へ井上と小柏を遣はしたるに、集合人は決して日延を承諾せず、依つて一同、前に約せし如く、十一月一日に事を起すに決定した。

右は田代の申立で、全部そのまゝ事實であるかどうかは分らない。田代の判決書を見ると、『三十一日、又繼平、常次郎、由三郎、傳三、惣平、熊吉等数名と、上日野澤村小前耕地に於て密議の際、被告は猶前説を執り、傳三と共に延期を主張するも、衆議納れず、却つて繼平等の擯斥する所となり、遂に意を決し繼平と伴ひて其家に至り』云々とある。これは廿九日の事と混雜して居るのかとも思はれ、殊に『繼平等の擯斥する所』云々の意味が分らないが、その間に自然、田代等の大事を取る、落ちついた態度と、小柏等の性急な、輕卒な、イラ〳〵した態度との反撥が、善く見えるような氣がする。

それから田代がその夜、坂本方の隣家で『將に寢ねんとする時、柴岡熊吉、柏木太郎吉、外二人、拔刀を携へて押來り、活かし置いたに外聞惡しき故、切り殺すと申し』云々。そこで田代は、『お前方は心得違なり、拙者固より生命を惜むにあらず、只小柏が心なく人を扇動したるにつき、夥多のものが此事に加はり、後にて一層困窮するを思ひ、延期を乞ひたるなり、然れども斯る場合に至りし上は、來月一日相違なく着手す』と答へたので、『拙者四名は立去りたり』といふ、田代の申立がある。

兎にかくこんな事で、田代は三十一日夜、『靜かだから來い』といふ宮川津盛方の招きに應じ、『酒一本飲』んでそこに宿した。一日朝は『心忙しき故、早く起き、朝飯を喫し、六時過、津盛同道該家を出で阿熊村新井駒吉方へ行かうとする時、柏木太郎吉、坂本惣作、外二三人來る『昨夜石間村城峰山に測量に來りし陸軍士官二名を生捕りたる處、鐵砲を持ち居る……それを取りたい、……渡さねば殺して取る』云々。

田代等は阿熊村に來て士官に面會し、困民黨に贊成を求めた。或は士官の兵隊的技術を利用する積りであつたかも知れない。然し士官が容易に同意しさうも無かつた爲か、混雜の間に放還してしまつた。この士官、實は土木技手であつたらしい。

この時、巡査が吉田村へ押寄せ來るとの報告あり。それから巡査一人打取となり、戸長役場へ鐵砲打かけとなり、續いて椋宮繰出しとなつた事は、既に第一章に記した通りである。

七　大宮郷乘取、郡役所本陣

扨、一揆は二日午前六時、小鹿野町を出發し、二大隊を一手に合せて、長留村、坂田村を經て寺尾村に入り、小鹿坂峠に到着した。兼て出だしおきたる斥候來りて、大宮郷の方は大いに混雜せりと云ふ。依つて大宮郷のもの柴岡熊吉等に獵師（即ち鐵砲兵）二名を附添はせ樣子を探らせた。寺尾村と大宮郷との間に荒川と云ふ川があり、その川に竹界の渡しがある。その渡しが無事に渡れたら、相圖として鐵砲二發、若し渡れなければ一發といふ打合せであつた。やがて午後二時頃、二發の砲聲が聞えた。サア大丈夫と云ふので、小鹿坂峠の廿三番の觀音堂で早鐘をつき、一同鬨を作つて押出した。

その時、隊兵を率ゐて先づ大宮郷に繰込んだのは副總理加藤織平で、總理田代榮助は、該町より六七丁西手の字ムカトと稱する耕地の地藏院に暫らく足を止めてゐた。井上傳三、井出爲吉、柴崎周作、堀口幸助、獵師二人、竹槍持四五人が隨行してゐた。

然るに幸ひなる哉、大宮の高利貸井上四郎次が、丁度その地藏院の物置小屋に隱れてゐるのを見つけだした。四郎次の申立に依れば、五十人ばかり押來り、遂に彼を引出し、カラムシ繩にて後ろ手に縛し、巡査ではなきか、……金貸か、……少々用立て居る者なりと答へると、然らば殺してしまへと一人は云つたが、他の一人はそれを差止め、四郎次に軍用金を出せと云つた。その時、四郎次を取調べたのは井出で、『常々汝等が心掛よろしからざる故、小民が竹困に迫り、[illegible]者等も一命を抛ち困民を救はんと企て、この處まで參りたり、汝等常に命を出せ』と申渡すと、四郎次は『誠に申譯なし、此度は一切の證書を燒拂ひ、これまでの貸金を皆無に致す間、一命だけ助け貰ひたし』と、達て相頼む』に依り、『然らば一應、總理へ申立てる』と、井出は地藏院の方へ行つた。そこに兼て面識の柴岡が來たので、四郎次はそれにすがり、總理の前へ連れ行き貰ひたしと懇願した。そこで四郎次は地藏院の緣側に腰かけてゐる田代の前に引出された。その時、四郎次は初めて田代が總理である事を知つた。四郎次は兼てから田代を知つて居り、殊に百三十圓の貸金があつた。尤も、それは、田代が他人より畑地を百五十圓にて質地に取る金に差支へると申すに依り、其人の差入れた質地證を抵當にして貸したのであつた。

田代は四郎次に向ひ、この度の事は據んどころなき次第にて、自分も一命を抛ち取掛りたるに付、其方も命を出して貰ひたし云々。そこで四郎次は又頻りに一命だけは助けてくれと懇願したが、そこに柴岡が來り、大宮方面は平定致したるに付、早々出張あるべしと申すに依り、田代は四郎次を井出と柴岡に任せ、午後四時頃、井上傳三と共に大宮郷の秩父神社に入つた。

午後六時頃、參謀長菊池貫平が來り、今晩から郡役所に陣取ると云ふ。田代は秩父神社内の學校を本陣にして居たが、菊池が達て主張するに依り、郡役所に移つた。この時、總勢は一萬人に近く

なつていた。他の書類には七八千人とある。大宮郷の警察署、郡役所、その他の官吏などは、云ふまでもなく總てコソ〳〵逃げてしまつた。『その時、役人達は皆んなそこらの家に飛びこんで、ちよつとカミソリを貸してくれと云つて、銘々大急ぎで口髭を剃り落したものださうだ。』

井上四郎次は一命だけは許されたが、懐中の蟇口を引出されて在中の金二十六圓を取られ、更に貫一歩銀南鐐各一個、及び銀側時計をも取りあげられ、證書を出すまでは繩は解かずと云ふので、腰繩に替へられ、柴岡等三人に護送されて自宅に歸り、よんどころなく證書八十二本（凡そ二千圓）を差出した。それから人足に出でよと云ふので、跡から參ると云つたが聞かず、彼れの食事するを待ち、一緒に連れだした。然し『幸ひ宅を出るや否や三人は先に參り』彼は『其スキに相別れたり』とある。

八　大宮第一の高利貸刀屋の破壊

二日の夜、田代等は郡役所の本部に在つて、改めて高利貸處分法を評議した。落合、坂本等は直ちに家屋を破壊する說を唱へたが、田代等は一應掛合、應ぜざる者のみ破壊するといふ態度であつた。いづれにしても、大宮に於いては、近隣の害を思ひ、放火はせぬ方針であつたと云ふ。

そこに先づ、大宮第一の高利貸として有名なる、刀屋事、稻葉貞助の代理、黒澤常吉、岩田東左衞門の兩人から頼まれて、柴岡熊吉が、如何樣にも示談に及ぶから家屋破壊は勘辨いたしくれと申出でた。田代はそれに對し、示談は當方も望む所なれど、稻葉の貸付金高何千圓の内、半額は見捨てに致し、半額は年賦に致し、尚ほ軍用金として一千圓を差出し、且つ我々當地滞在中、炊出しを致すに非ざれば勘辨いたし難しと答へた。柴岡は後刻返答するとて立去つた。田代等はその返答のあるまで、暫らく他の家屋破壊を見合せたが、返答は中々來なかつた。

夜中過になつてヤツト柴岡がやつて來た。柴岡は稻葉の番頭に口說かれ、稻葉は田代と懇意の間柄でもあるから、五百圓で勘辨してくれと傳へて來た。（書類には、五十圓とあるが、間違ひだらう。）田代は大いに怒り、平生の懇意は別の事、今日は今日である、そんな事で一等の高利貸を勘辨する程なら、世間に憎むべき高利貸は一人も無いと突き放した。

田代はその夜、一揆の首領として故郷の町を占領し、大した威勢を示した譯であるが、思ふに今後、再び大宮に來ることは萬々期し難しと考へ、姉の深田いちを訪うて別れを告げた。その時、既に、諸處の家屋を破壊する物音が聞えていた。裁判所、警察署なども、その時に破壊された。破壊見合せの指圖もモウ實行されないのであつた。

その歸途、田代は萩原勘次郎の來るに遭うた。萩原は稻葉の宅を打毀しに行つたが、只今掛合中であるから見合せくれと云ふが、果し

木様かと田代に問ひつめた。田代は郡役所の本部に歸ると、萩原は再びやつて來た。誰か稻葉方に參り居るか。加藤織平が話し居る。然らば織平を直ぐに呼び來れ。織平來る。彼は云ふ、四百五十圓にて勘辨する事に談じて來た。尤も貴殿に相談の上、確かに取極める約束である。田代云ふ、甚だ迷惑なり、第一等の高利貸を僅か四百五十圓で勘辨しては、後に汚名を來すべし、殊に他の高利貸は既に打毀したる後の事なり、最早や示談は致し難し。斯くて評議の上、金四百五十圓は證書と共に突き返すに決し、田代は小柏外一人をつれて稻葉方に赴き、稻葉の代人岩田東左衞門に對し、人を馬鹿にするな、拙者は元の榮助にあらず、之より直ちに叩きこわしに取掛ると叱りつけ、證書と金子を其の前に叩きつけた。そして田代が其の家を出ると同時に、叩きこわしが始まつた。

然し稻葉貞助の申立は次の如くなつている。一日夜、自分は岩田東左衞門へ跡を頼みて逃げ去り、五日朝歸宅した。二日夜、暴徒來り、金二千圓と、證書、質物、帳簿、殘らず差出せと申す。東左衞門と黑澤常吉が掛合ひたる末、金千圓にて談じ済となり、今夜金四百四十八圓と、證書の内、出訴期限の切れたる分を選び二十本相渡し、殘金及び一切の證書質物は翌三日朝渡す約定。その證書を坂本惣作が認め、常吉が拇印を押し、柴岡、加藤がそれを持去り、其跡にて東左衞門等が、殘金は差支なきも證書と質物を出すは難澁なりと評議中、同夜三時頃、塀を毀ち潜り戸を打破り、多人數押來り、その中十名ばかりにて東左衞門を睨み、同人の胸を押へ、鐵砲を差向け、この榮助を何と思ひたるか、斯くの如きヤクザ證書を出したるにつき打殺すと云ひたから、證文をズタ〳〵に裂きて東左衞門の前に投出し、……東左衞門は大いに驚き、其の場を逃れて湯殿に隠れ、……それと同時に散々叩きこわしが始まつた。（そしてこの時、田代が金を持來りしか否か、それを投げ返したか否か、東左衞門がそれを受取つたか否か等は、總て疑問として殘つてゐる。）

九　高野一族燒拂、軍用金借入

右の如く、稻葉方の談判が後れている中、そこからは半里ばかり隔たり居る、高野嘉代吉、高野フサ、高野伊兵衞の三家は、早くも既に燒き拂はれた。三家とも高利貸で、伊兵衞が本家、嘉代吉は伊兵衞の從兄、フサは伊兵衞の妹であつた。

伊兵衞申立の要點。二日、日暮頃、暴徒三百人、列を作つて嘉代吉方へ押寄せ、頻りに發砲、自分は立退きて樣子を窺ふ、初め嘉代吉方燒け、次にフサ方燃えあがり、自分方は助かると思ひ居りしに、孫家の豆殻から燃えつき、間もなく本宅から物置、石油を持來りたる樣子。同じく嘉代吉申立の要點。二日午前十一時、暴徒の風聞あり、自分は長男を連れて逃出し、比企郡小川町へ參り一宿、五日まで寄居に滯在、六日歸宅して見れば、宅は悉皆燒失。二日夜、暴徒多人數押寄せ、自分宅の諸建具を持出して破壞し、これを粉微塵にして火をかけたる由。

アサ申立の要點。午後三時頃、自分一人在宅、白鉢卷の男十四五名來る、内四五名は鐵砲、その他は拔刀、自宅を目ざして押來る、自分は直ちに逃げだし、裏手の山に匿れた、……日が暮て嘉代吉方燒け、それが燒け落ちる頃、自分方が燃えだした。裏の豆殼を宅内に持込み、それに放火した樣子。

斯樣に一方では燒立てて居る間、一方では金策に取掛つた。吉田、小鹿野までは、まだ同勢に持合せがあつたが、寺尾村では既に食事も辨ぜざるに至つた。そこで大宮占領後、早速、井出爲吉が係となつて諸方の資產家に掛けあひ、軍用金を集めた。その總金額は凡そ三千圓、即ち左の如し。

一金八百圓也　大森喜右衛門
一金五百圓也　松本六藏、矢尾利兵衛
一金五百圓也　上山金平、久保直藏
一金五百圓也　柿原吟三郎
一金五百圓也　根岸藤太郎
一金百圓也　福島七兵衛
一金百圓也　井上伊藏
一金八十圓也　新井峰吉
一金二十圓也　逸見助五郎

右は請取證（若しくは借用證）の殘つていた分であり、田代或は加藤の承認した分である。但し根岸の分と、逸見の分とは、田代に於いて請取りたる覺えなしと申立てている。受取れば必ず會計に渡した筈だと云つている。

右の事實を『被害者』の側から見ると、大略左の如くなつている。

大森喜右衛門方。二日夜十二時拔刀の賊四五名、附隨六七十人。主人は岡埼八方表の家屋へ人足の體にて隱れ居る。賊は店の者に對し、當家には郡役所より預かりたる金一萬圓ある筈。左樣の大金なし、三百か五百なら。然らば一千圓即時出せ。出さねば切殺す。店の者、八百圓こそ無之と云つて、郡役所に持參。それにて事濟。殘二百圓は翌朝持參の筈の處、賊取りに來らず、その儘。

松本六藏方。家内の者は近處の農家へ立退き居り、吉次郎なる者、只一人殘り居る。夜二時半頃、帶刀の賊七人來る。軍用金六百圓出せ。吉次郎、親戚矢尾利兵衛方と相談の上、田代總理の處に參る。二軒にて五百圓、承諾。同夜持參。外に炊出しとして白米一石八斗、澤庵五樽、味噌一樽、薪五十一束。外に刀三本。

井上タマ。二日夜四時頃、戶を閉めれば破りて入るとの事ゆゑ、開けて置いた。軍用金百圓無心。女の事ゆゑ恐れて直ぐ出した。賊は六發を所持したる者もあり、外に刀一本。

久保直藏方。二日夜四時、主人不在。軍用金百圓出せ。上山金平方四百圓と、自分百圓と、合せて五百圓、本營へ持參。

上山金平方。二日夜、一同在宅。賊四名來り、脇差を出せ。一本出す。次に三名來り、、、、、を改良するとか永々數年を申し、其の川

金として千圓出せ。自分方大屋久保武藏より相談あり、自分方四百圓、久保百圓、合せて五百圓出す。
柿原吟三郎方。二日夜三時頃、町內の者十名ほど詰め居る。賊帶刀四名來る。一人は六發を構へ、貧窮人助けの爲、千圓出せ。出さねば一命にも及ぶ。二百圓にて勘辨してくれ。七百圓なら勘辨すべし。結局、總理の處へ出で、五百圓にて話がつく。
逸見助五郎方。二日午前三時、自分不在、母と雇人在宅、色白き廿三四の男と、色黑き三十四五の男、帶刀にて押入、母に向ひ、金を借用致したし、何程入用なるや、百圓出せ、左樣の大金は無之、何程ありや、廿圓位、早速出せ。

十　脆い沒落、潜伏、捕縛

三日朝、官軍（憲兵および巡査）が矢納村に到着し、大宮へ進擊の筈といふ報知があつた。一同急に騷ぎ立つた。そこで早速軍議を定め、全軍を三隊に分ち、加藤織平が甲隊を率ゐて竹の鼻の渡しを扼し、菊池菅平が乙隊を率ゐて大野原を擁し、田代榮助が丙隊を率ゐて大宮に止まり、そして互に應援する手順であつた。然るに進發の後、甲隊の加藤、新井等は竹の鼻を守らずして上吉田へ進み、乙隊の菊池、飯塚等は大野原に止まらずして皆野へ進んだ。これは田代の考からすれば、地理を知らぬ者の無暗な進出であつた。田代の考としては、この際、遠く手を延すは得策でなく、若し事成らざる時は、退いて大淵村に立て籠るといふ最後の策もあつた。

然し多數の者は兎にかく敵前の進出を喜んだ。そこに萩原勘次郎が注進にやつて來た。熊谷、寄居の、、は既に打破り、埼玉まで無人の地を行くが如しと、只今寄居から報知あり、總理にも直樣、御繰出しあるべしとの事であつた。

田代はそれを信ずることが出來ず、頗る躊躇したが、附居る人々は皆この報知に勢ひを得て、直ぐに繰出さうとするのであつた。止むなく田代も出發した。小川まで行つて樣子を探るに、先發兵は既に皆野に着して居るが、今にも官兵が攻め來ると云つて、頗る混雜中の由であつた。

午後三時、田代等も皆野村角屋の本陣に到着した。然し田代は胸腹の苦しい持病が起つたので、跡の事を柴岡、菊池、井上等に托し、下小川の知人の許に休息した。所が四日早朝、菊池が來て、是非皆野へ出張つて吳れと云ふので、勉强して再び角屋本陣に行つたが、矢張どうしても堪へられないので、又同村字原といふ處の、界屋といふ旅人宿に行つて休息した。この時、田代の三男入作が、久しく會へなかつたと云つて尋ねて來た。こんな場合の親子の間とて、四方山の話に時を移した。

午後一時、小柏、柴岡、高岸、飯塚、落合等が來り、昨夜貴殿の退陣後、荒川を隔てて憲兵と戰つた由を語り、更に本陣へ出張を求めるので、田代は又角屋に赴いた。すると諸方から續々と注進がある。敗

は井戸村、藤間村まで來たと云ふので、それ〳〵手配りをして居ると、今度は坂本村の方から、憲兵巡査八十名攻め來る、加勢を頼むと云つて來る。然るにその時、本陣は極めて手薄で、本陣の直ぐ裏なるクリワゼの渡し場が一番の要所であるのに、そこを僅か十人ばかりで固める次第であつて、加勢を出すなど思ひも寄らない。すると又そこに大宮から注進がある、大宮は變心して敵になり、こちらへ向けて進んで來るといふ。

田代は熟考するに、敵を三方に受けた有様である。今はこれまでなりと、柴岡から金を五百圓貰ひ、その半分を伜の八作に與へ、下吉田の叔母（根岸淸助の妻）方へ落した。

午後三時、島田淸三郎が馳せて來た。只今、大淵村の我が甲隊に裏切が始まり、大隊長新井周三郎外數名が殺されたと云ふ。又大濱の渡しを敵が既に二段越したから、早く逃げざれば危しと、内密で知らせて來た。

そこで、田代は、柴岡熊吉、井上善作等へ萬事を托し、同人等を目星として殘して置き、井上傳三、犬木壽作、島田淸三郎、磯田左馬吉等と共に、角屋の西裏に走り、畑を横切つて大濱の渡しの上に出で、倉宮神社の境内を通り、下の川を越えて横田村に出で、或家にて茶漬を乞ひ、それから寺尾山の峰傳ひに長留村の芝原といふ處まで、皆の者と同行した。

然し考ふるに、見張りが嚴しいに相違ないから、多人數は危うし、別々になるより外なしと、ここで別れて金を分配して解散した。大木は信州へ行くと云ひ、島田は小鹿野へ行くと云つた。

田代は井上傳三と磯田左馬吉と三人で、長留村芝原の、至つて懇意のゲン齋と云ふ醫者を尋ねた。ゲン齋は驚いたが、岩村からも梟雄に出たものが澤山ある。混雜するので泊めるわけには行かないが、然し懇意の間柄、火でも焚かうと云つて、焚火をしてくれた。暫く休息の後、三人が又ちり〳〵になつた。

田代は大野原村へ行き、『姓名不知者』方で鰹節三本を無心し、日野村の山中へ凡そ二里ばかり入り込み、炭焼小屋を宿にして九日朝まで潜伏した。それから饑渇に堪へかね、山傳ひにて田野村と上影森村の間なる浦山村へ出で、字ケッチといふ處で、又『姓名不知者』に一飯を乞ひ、鰹節少々を貰ひ、今度は武甲山に入り込み、九日夜から十二日朝まで潜伏した。

所が又々持病が起つたので、一先づ養生を致し、その上の工夫と考へ、山を出で横瀬へ行き、八幡峠でフト二男安太郎に會ひ、宿元の様子など聞き、嚴しき詮索にて家族一同捕縛された事を知つた。そこで二男へは早く歸りて自首せよと敎へたが、父の病ひを見て歸るに忍びない様子であるから、同人を召連れて横瀨村五番の觀音堂の裏山に隱れ、十三日までそこに居た。

それから十三日夜、三澤村へ赴き、妻の叔父なる横田太郎方にて、二男に食物を貰はせ、十四日の日沒まで三澤の山中に隱れたが、『いよ

いと自訴する方、然るべきと心付、その夜、黒谷村宮谷倉吉方へ行き、入浴にても致し、少し身装を整ひ、自首致さんと存じ居りしが、其夜大いに疲れ熟睡罷在る中、午後十二時過、巡査二十名ばかり御出張、皆共に捕縛さる。』

十一 言ひもらした點々

事件の大體は以上で盡きてゐるが、言ひもらした點々を少しこゝに書き添へる。

田代の徴兵延期が若し行はれて居たら、この事件はモツト大きなものになつて居たかも知れない。田代の警察での申立には、『三十日の騷擾があれば、埼玉縣は申すに及ばず、群馬、神奈川、長野の諸縣に於いて暴徒一時に蜂起するは明かなり』とあり、又『大宮郷に於いて一萬圓の金を強奪し、信州に引揚ぐる目的なりし』とあり、後に公判ではそれを取消して居る。これは失敗した以上、事件を成るべく小ひさくして、刑を輕くし、或は被刑者を少なくしようと考へたのかと思はれる。

田代は自由黨との關係を否認し、純粋の『百姓騒動』であつた事を主張して居るが、それも右同様の誠意からだらうと察せられる。然し實際上、他の輕率な急進連中が濫りに『、、本部』などと稱したりしたのに對しては、反感を持つて居たかも知れない。然し又、實際上、この事件が自由民權運動と關係のある事は爭はれない。田代作我もフランスの法律が高利を禁じて居つた事を語り、フランス國の影響を見せてゐる。だから此の事件も、明治十年代に於ける、多くの自由黨暴動事件の一つだと見る事が出來る。政治家的強盗は當時の流行の一つであつた。

金貸の流行と、それに對する多數人民の苦悶とは、當時の社會に於ける一般的現象であつたらしい。殊に『秩父は他郡の比に非ず、僅に蠶糸を以て生計を立ふ、然るに近年その價格甚だしく減却せり、今一年せば小民共大半飢餓に陷る』だらうとは、田代の語る所であつた。

秩父は『山間なるを以て獵師多く、且つ民家にても野獸を威す爲め、小銃を所持する者多し、秩父一郡にて獵銃の鑑札を受け居る者、一萬五千…… それに猪威し筒の數を合すれば、二萬挺の鐵砲を得ること容易なるべし。』

加藤織平は博徒の親分だと云はれている。彼は負債年賦運動につき、先づ自ら一切の債權を放棄したとある。武器彈藥等の準備は總て彼の受持であつた。それらが彼れの副總理たる所以だらう。小柏常次郎は田代から、無責任な煽動者として批難されたが、新井周三郎は、小柏が『自由黨風の説を吐露』したと語つている。新井周三郎は元小學教員で、教員の口を探して加藤を訪問し、それが機緣となつて遂に困民黨に入つた。自由黨に入黨しようとした事もある。井上傳三は事件の前、警察に出たまゝ歸宅せず、郡役所から失踪届を出された。彼は九月[illegible]して[illegible]たと、[illegible]から[illegible]されて

いる。田代榮助の裝束は『白の股引をはき、西部の衣裝を着し、黑の不織と太織の黑の羽織を纏ひ、其上に白色の手帶を着用、一尺五六寸の刀を帶び居たり、袴は用ひず』とある。

× × × × ×

秩父町は今や『秩父の三越』と呼ばれるデパートメント・ストアが出來たり、乘合自動車に赤襟孃が居たりする程の、當世的都會になつている。武甲山の全山が石灰岩であるので、從つてその山麓に石灰採掘の産業が起り、秩父町には秩父セメント會社の大工場が建築されている。そしてその大工場の傍らに、田代榮助氏の長子田代啓助氏の小さな家がある。

私は去年啓助氏を訪問して、氏に導かれて榮助氏の墓に參詣した。墓は昔し榮助氏が天蠶を飼つたといふ、その山の麓にある。『振りかへり見れど昨日の影もなし、行くさき暗き死出の山道』といふ辭世が彫りつけてある。私は啓助氏と共に、墓前に長くツイ〳〵とのびた雜草を拔きすてつゝ弔意を表した。

私は又その時、秩父町の稻葉家を餘所ながら訪問した。稻葉家の營業は今ますく繁昌して居るらしく見える。この家の大黑柱には、田代等の殘した刀痕が今も殘つているといふ。刀痕萬歲！。

秩父町にはその頃、石灰工場の煙害問題がやかましかつた。資本家と小市民との對立が、今は何處までも發展して居るやら。、、、、、、、、、、、、、、、、、、、。

水戸義公

三浦周行

一　緒言

本年は恰も水戸義公の生誕三百年に相當する爲めに、水戸でも、東京でも、各種の記念事業が企てられたが、私は去五月、東京帝國大學内で開催された史學會の大會でも、同七月、水戸市公會堂の記念講演會でも、義公の修史事業を各方面から觀察して説明を試みた。抑も義公の趣味や事業は頗る多方面に亘つてをるのであつて、修史事業は只其一部に過ぎない。併し水戸義公といへば今尚ほ誰しも直に大日本史を思浮べるのでも知れる通り、大日本史の編纂こそは、實に義公七十三年の生涯に於て、最も心力を傾倒したところの光輝ある不朽の大業であつた。其歳十八にして、始めて修史の大志を起してから、在職中は申すに及ばず、致仕後に於ても、殆ど渾身の努力をこれに拂つたのであつて、其期間は、修史事業の草創時代から、守成時代に入らんとするころ迄の長期に亘つてゐるのである。而かも單にみづから大體を統ぶるに止めて、細目は擧げて史臣に一任するが如き所謂御大名仕事では決してなかつた。義公自身材料蒐集の最初から、一定の計畫を立て、各地に出張する史臣の一擧一動をも監視して、さながら手足の如くに働かせ、又其編纂に當つては、みづから骨子となるべき主要の方針を定め、史臣の書いた草稿をも精讀して、時には意見を付し修正を命じた程の精勵振であつた。大日本史の完成迄には、前後二百五十年の長き歳月を重ねたけれども、何れも義公時代の延長に過ぎないのであるから、一部の大日本史には義公の貴き血が流れてゐると謂つても決して誣言でなからう。彼れ自身に書いた壽藏碑の文を見ても、其
蹟としては只修史の一事を述べて「自レ蚤有レ志二編史一。然
徵、爰搜爰購、求レ之得レ之、微遴以二稗官小説一。摭レ實闕
統二是非人臣一。輯成二一家言一」といつてゐる丈では
史が義公の名に於て知られてゐるのは、正に當然過ぎ
ある。私のこれから説かうとするのは主として此方面に
卓越した天分や不斷の活躍を傳へて、大方と共に、此一大
念とするの微意に外ならぬ。

二　時代の産物

義公は資性英偉であつて、身を以て一世を率ゐた指導的人物即ち「リーダー」であつたが、併し又これを冷靜に廣く大局から考へて見たならば、矢張時代の生んだ一產物であつたといはなければならぬ。これは獨り義公ばかりでなく、古今東西の歷史的人物、誰一人として此軌道を脱するものがあらうか。單に事の成敗から見れば、所謂英雄豪傑は其人丈が圖抜けて大きく、周圍の人物は皆其脚下にも寄り付けぬ程小さく見えるから、彼等丈が偶然に變り種として生れたとしか思はれまいけれども、それは淺薄な觀察であつて、若しよく時代を理解することが出來たならば、さうした時代にさうした人物の出でて來る自然の徑路の洞開されてゐたことが見出だされ、又それを見出だすのが歷史家の着眼點でもあらうと思はれる。然らば義公の出でた時代は、抑々如何なる時代であつたらうか。

近頃よく反動時代とか反動政治家とかいふ言葉が使用されるが、それは專ら保守的傾向や其傾向を有する政治家を意味するものとしてい
ある。併し世の中は絶えず回轉してゐるのであつて、其間には急進的に馳せた次に、保守的傾向が現はれて來るかと思へば、又其次には進歩的な機運が廻り合せても來る。それを反動といへば、保守的も反動であるが如く、急進的も反動でなければならぬ。保守的傾向に限つて反動といふのは、一派の急進者流が、自身に都合のいゝ世の中の動きを、正しき動きと認めて、他を排斥せんとする一種の偏見に外ならないのである。

我國の歷史では、武家時代の中でも、別して南北朝、足利時代位、名分の暗かつた時代はあるまい。天皇が幕府膺懲の爲めに兵を御擧げになるのを、「天皇御謀叛」とか「天皇令亂世給」抔といつて怪まなかつた時代も此時代であれば、將軍が勅許を待たないで、密に外國即ち明と外交を開き、明の天子から日本國王に封ぜられて臣と稱し、明の年號を用ゐてをつたのを、國民が平氣で眺めてゐたのも、此時代である。獨り將軍ばかりではなく、諸國の大名



德川光圀畫像（狩野養朴筆）京都高臺寺藏

逆とても同様、皆それぞれに得手勝手な僭傲をして憚らなかつた。天皇の即位の御大禮が、践祚後十年も二十年もしてから漸く行はれたのも、時代の一つの現れである。君臣、父子、兄弟等の間の倫常も亂れ勝であつて、子が親を逐ひ、家臣として主人を斥けたものも少いとはせぬ。北朝は皇統の正統に立てられ、楠公の子孫は永く朝敵として楠氏を名乘ることが出來なかつたから、世に憚つて皆他姓を冒してをつた。みづから楠氏の後裔と稱した大饗正虎が、幕府の權臣に縋つて將軍に申入れ、朝廷に請うて、先祖正成の朝敵御免の綸旨を頂戴し、始めて天下晴れて楠氏を名乘ることが出來たのも、此時代の末の出來事であつて、今から思うと嘘のやうな眞事である。

此時代の儒學は、皮肉にも名分に重きを置いた宋儒の註疏が行はれてゐたのであるが、教育の實務に當つてゐた僧侶は、殆ど皆宗學の徒で、議論には無關心であつて、區々たる字句の穿鑿を能事としてゐたのである。彼等は求めて我國の事物を知らうともせず、殊に歷史には門外漢であつて、年代記の知識すら覺束ないものが多かつた。此時代が日本歷史上の暗黑時代といはるゝも、彼等に於て其責の一半を負はなければならぬ。

然るにこれも其反動といへるであらう、此時代の末期となつてから、國民の間に、漸次自覺が高まり、反省が繰返さるゝと共に、國家的色彩が次第に鮮明にあらはれ出した。地方の大名の中から朝廷を[illegible]するものゝ出でたのも時代の[illegible]の一表現に外ならぬ。[illegible]め、秀吉でも、家康でも、皆此時代の精神に順應して、勤王の大旗を樹て、義兵を擧げたから、彼等は何れも輿論の支持を受けて、各々其目的を達成することが出來たのである。さしも亂れた戰國の世も次第に統一に赴いて、國民は久し振りに平和を樂み、文運も進んで、文藝復興の盛世の端緒となつたのが、近世の初期である。

是に於て、學問は僧侶教育家の手から儒者の手に移され、宋學はこゝに其頭角を發揮し、内を修め、外を卑め、佛教を排斥するの新風潮が滔滔として至つた。惺窩、羅山以下の此時代に輩出した儒者が、何れも申合せた如くに、我國文、和歌を學び、神道を研究して、儒者であり乍ら歌學や源氏、徒然草抔に關した著述もあれば、歌集もあり、又神道に關した研究のあるのもあつたのは、此時代の特産物であつて近世の中期に所謂國學者の出現以前の國學は、全く彼等儒者に依つて開拓されたものである。我國史研究の風も亦其一つの現れに外ならぬ。

我國では紀傳體とか編年體とかいふが如き史體を備へた完全な歷史は、近世初頭になつて始めて現れたといつても差支ない。此時代には林家の本朝編年錄即ち後の本朝通鑑を始めとして、大名や個人の撰に、我國史の研究編纂が頻に勃興して來たが、それらは皆歷史の要諦に據つて名分を明らかにせんことを目的とせないものはなかつた。諸藩の中では言ふ迄もなく、義公の修史が最も際つてゐるが、義公の[illegible]

せてゐる。羅山が尾州家の需に撰したる楠中將の像の贊の一節に、
公平生慕二儒風一、向二詩道一不レ倦、深二居一、常考二朝儀一、愛二諸氏一、不レ忘二武備一
と見えるが、若しこれを義公の事とするも、大體に當て嵌るではなからうか。南朝正統の聲が漸く高調され、楠公の崇敬の勢に加つて來たのも、此頃の事であつた。義公は湊川に楠公の碑を建てたが、其碑陰の朱舜水の文は、義公が師事しつゝあつた人丈に、義公の請に應じて作つたものと思はれもしようが、其實さうでなく、前田松雲公の需に應じて作つてあつたものを、義公が建碑について借用したのであつて、楠公崇敬に於ては松雲公も決して義公に讓らなかつたのである。そこが私の義公も亦時代の生んだ産物であるといふ所以であつて、同じ意味から大日本史も亦時代の産物の一つであるといはなければなるまい。

斯くいへば、義公は甚だ平凡化するやうに聞えもしようが、決してさうではない。すべて一切のもの何者か時代の産物でないものがあらう。其間に優劣もあれば成敗もある。時代の産物であるからとて、等でか手輕く取扱ふことが出來よう。然らば義公の修史事業は如何なる點に於て、世間一般のそれらと變つた特色を有し價値を有つものであらうか。

三　修史の動機

先づ義公が一大修史事業を發起した動機を考へると、未だうら若い青年の如き時代にあつて既に此の志を起したに違ひない。これは言ふまでもなく、正保二年、義公十八歳の時に、史記の伯夷傳を讀んで感奮したのであり、史籍に由らなければ、後人に感奮させる事は出來ないといふところから、修史の一念を發起したものであると傳へられてゐる。史記の伯夷傳からは、此外にも義公は弟を以て兄の嫡流に先きだつて封を受くるの非をも悟つて、賴重の子を養つて嗣となしたといはるる程で、頗る深刻なる印象を得たと見える。大日本史はもと書名を定めず、國史、紀傳等種々の名稱を以て呼ばれてをつたが、これは遂に勅撰を望んだ深意に出でたといはれる。然るにそれらの書名の中に於て、最も古く史記と稱せられ、日本の史記とも呼ばれてゐたところに、義公が是非褒貶を寓する史記の史體に私淑してゐた事が窺はれる。彼の本朝通鑑の書名の如きも、司馬光の資治通鑑から取つたものであつて、矢張名分を明らかにする意を寓せんと試みたものである。義公の場合はそれが青年時代であつた丈に純眞無垢の一念であつた事は言ふ迄もない。

修史の志は其前からあり乍ら、愈々駒込の別邸に史館を設けて事業を開始したのは、彼有名なる明暦三年正月の江戸の大火の直後、義公が三十歳の時であつた。此大火に於ては、人畜の外、多數の惜むべき典籍も燒失を免れなかつたのである。義公が其翌二月を以て愈修史事業に着手するに決したについては、此大火が多少の近因をなしてゐるのではないかと私は觀測してゐる。桃源遺事にも、義公が常に人に語つた言葉として、史籍を秘するの餘りに、徒に湮滅せられ、火災

に依りて一時に烏有となることがあつて、往古の奇聞實事が是に依つて泯滅し、今世に傳はらなくなる事の多きは悲むに堪へぬ、關東關西兩地に藏置くならば、假令一方が滅ぶとも、一方は傳はることが出來る、我は繼往迎來の寸志であるから、所望の人があらば、少も秘する事なくこれを許容する、それを見て非難するものがあつても、憚る事なく、力めて世に傳へんことを思ふのであるといひ／＼したと見える。此思想は義公をして京都の公卿の日記を始めとして多くの記錄の副本を作つて所藏させた所以であつて、それらがやがて修史の史料として大に役立つたのである。斯様な襟度があつてこそ、此時代としては驚くべき記錄の蒐集ともなり、又それらに據つて所謂「奇聞實事」即ち歷史的事實を傳ふる爲めの修史事業が具體化さるゝに至つたのであるまいか。これについては別に書いたものはないが、義公の平生から推して試みに私案を述べた迄である。

それは兎に角、義公が修史事業に着手すると共に、そこには意想外な困難が横つてゐた。



大日本史元祿稿本　德川圀順氏藏

四　史臣の登用

義公は最初修史の志を起すと共に、人見卜幽、辻了的の二人の儒臣に諮つて見た。兩人は何れも其昭代の美擧であるとて讃辭を捧げたが、史料の缺乏してゐることゝ、史才のある學者に乏しいことゝから、成功の程は覺束なく存ずると答へた。所謂史才のある學者は和漢共に其人を得難かつたものと見え、唐の劉知幾の如きも、昔から文士は多いけれども、史才の少ないのは何故であらうかとの質問を受けて、彼有名な史に三長あり、才、學、識なり、世にこれを兼ぬるは罕なり、故に史は少しと答へてゐる。それとは別な意味に於て、私は斯る修史事業に取つても三長が要ると思ふ。（第一）は史家を得る事（第二）は史料を得る事（第三）は編纂宜きを得る事である。而かも編修其人に適材を得るのでなければ、大業の達成は思ひも寄らぬ。前代以來一般に國史が閑却されてゐた丈に、近世の初頭の學者に史才のあるものゝ少つたのも無理はなからう。加之昔から六國史を始め國史は漢文で書くものと極つてゐた。然して近世初頭

の國史の修正は儒風につれて起つたのであつて、義公の修史の如きも、日本の史記を以て自任した程であるから、漢文で綴らるべき事は殆ど既定の事實と看做されてゐた。古來の歴史材料を遺漏なく蒐集する努力の外に、其時代〳〵の文章で書かれた材料の意味をよく理解して、更に正しく漢文に移さねばならぬといふ二重三重の苦心と勞力とを要するのであるから、尋常一樣の文才の企て及ぶところでなかつた。正德四年の時の彰考館の酒泉（竹軒）佐治（竹暉）の兩總裁が明曆三年の史館の創立以來、五十七年の歳月を經て居乍ら、編輯の進行の遲々たる理由を釋明した書狀の中に、斯ういふ事が見える。（前略）「其上百一代二千七十二年之間之帝王人臣不レ殘書立申事ニ而御座候。殊ニ日本口上ノかな書ヲ、唐口上ノ眞文章ニ書立申事ニ而御座候ヘハ、手間ニあかせ書立不レ申候ヘハ、味よく參兼申候。此段御料簡被レ遊可レ被レ下候。」これは如何にも尤もの次第であつて、所謂日本口上の假名書で歴史を書く事すら、なか〳〵容易のことではないのに、それを又唐口上の漢文に直して書からうとするのであるから、更に二重の困難を加へる事とならう。

義公自身其教養が頗る高かつたことは、桃源遺事に、「和學、漢學は勿論、諸宗の佛學、神書、醫書、算數、詩文、聯句、詩餘、和文、和歌、武藝等何によらず御存知被レ遊候」といつてゐるのでも窺はれる。彼れはみづから十三經に句讀を施し、左傳の系圖を作つた。私は最近彰考館文庫に藏せらるゝ後者を見たが、全部其手記に成り、頗る精微を極めたものであつて、其既に史館のあつたことを見るに充分である。世間では義公の如きも所謂大名學問であつて、其詩文は儒臣の代に依つたと思ふものもあらうが、其實、一字半句も他人の力を假りることなく常に國語、戰國策、荀子、楊子、韓柳歐蘇等の文を讀み、佶屈な文字を使つて著述をしたから、儒臣はそれを讀み解き得るを仕合とした程で、助撰抔思ひも寄らなかつたとは、井上玄桐の告白である。さりとて、もとより自身筆を執つて編輯に當るべきでないから、史臣其人を得るは當面の急務であつた。

然るに義公は其天賦の大度を以て人才を吸收するに當つても異常な成功を示してゐる。他の同時代の修史の實例に見ると、家臣の或者に命じ、若しくは門人をして編纂に當らせたものはあるが、義公は廣く史臣を全國各地に募つて優秀なる人物を登用した。これは當時の封建割據の時代としては、國境を超越したものである。啻に國境ばかりではない、大井貞廣の如き、伊藤仁齋の門下として、朱子學を排する異學の徒であるとの譏のあつたものすらも史才だにあれば、學派の異同は問ふところでないといつて拔擢してゐるから、當時殊の外手嫌ひされた學派をも超越してゐたのである。殊に私の敬服して措かないのは、將來有望のものは、少年の内から良師に就かせて養成した事であつて多年に亘るべき事業に對する深謀遠慮に出でた事と察せられるのである。義公自身人才登用について注意を怠らなかつたばかりでなく、史臣に向つても、前途ある青年の推薦を奬勵したのであつて、

佐々宗淳の如きは、西山隱を始め最も多くの人才を推薦して義公の盛意に副うてゐた。當時史臣の俸祿は、最高四百石、最低百五十石位であつて、其中二百石以上のものが六十人にも達したといはるゝから、厚祿を以て迎へたことが知れよう。併し厚祿丈では未だ充分優遇の途を盡くしたものとはいはれぬ。然るに義公は史臣の辛勞に向つて滿腔の同情を寄せ、不平無聊なく執務し得るやう、江戸邸內の最も眺望に富んだ閑靜の地に一館を設けて、時々饗宴を賜ひ、時には自身も親しく史館に臨んで、史臣を相手に談笑もすれば、又深更迄詩作に打興ずることさへあつた。もとよりこれが爲めに主從間の禮儀を失ふが如き事はなかつたけれども、義公の史臣に對する態度は、一般の型を破つて、頗る「デモクラチック」の傾きがあつたやうである。それについて最もよき例證は、史館の總裁の選擧の場合に現れてゐる。開館以來約二十六年間、總裁を置かなかつた史館も、後に事務の進捗を圖るの必要から、一人の總裁を置くことに史臣の議が熟して義公の指揮を仰ぐと、義公は忽ちこれに同意を表して、彼等に總裁たるべき人の投票を命じ、自身も亦一票を投ずることゝしたが、開票の結果は、衆望の歸するところ、人見又左衞門（傳）が當選して、光榮ある最初の總裁に任命されたのである。修史の事務はおのづから他の俗務と異るから、官僚的な任命に依る代りに、選擧の法に依つたものと見える。それ丈彼等は感激して義公の誠意を揚げたのであらう。安積澹泊が「義公之解釋記傳、隙有英發、成業節下」といつたのは、もとより誇張の言ではあるまい。

一五　史料の蒐集

轉じて史料の蒐集について見るに、こゝにも亦義公の大規模な壯圖が反映されてゐる。近世初頭の歷史家は、殆ど有り觸れた如何はしい材料丈では滿足が出來なかつた。林家の如きも、相當廣く史料を渉獵してゐるが、幕府から江戸にある諸大名に達して記錄の提出を命じ、寺社奉行からも諸國の社寺に同樣の命令を發したに止まる。義公はもとより此程度を以て滿足するものではなかつた。彼れは佐々宗淳、吉弘元常、大串元善、鵜飼眞昌等の有力なる史臣を各地に派遣して探訪に從事させることにしたのである。昔から文化の中心であつた京都畿內地方を始めとして、彼等の足跡は殆ど全國に印せられてゐる。而かも其方針は頗る徹底的であつた。當時奈良へ出張中の吉弘、佐々、內藤（貞顯）の三人から、東大寺の上生院、寶嚴院、勝光院の油倉の記錄として唐櫃二合を殘らず閲覽したが、天平より慶仁頃迄のものが數千通あつた中から參考となるべきものを抄錄した、其他は年貢、寺用の勘定帳許であるけれども、夫等をも殘らず披閲すべき旨の報告に對した義公は、一紙半紙にても、史料に供すべきものは、反古の內からでも見出す事もあらうから、披閲するがよいとの指令を與へて居る。別して南朝を正統と立てた關係から、其材料の乏しき爲に、南朝關係のものは、和歌な斷片をも遺らさず蒐集さす

ことに力めたが、出張員もよく其意を體して職務に當つた。これらの收穫は纏まり次第、江戸邸に送達したが、義公はそれを待遠しがつて、しきりに督促してゐる其熱心な態度は寧ろ驚くべきものがある。

公平に見て義公の一生は專ら修史の基礎を築いたものであつて、史料の蒐集と編纂とは、凡そ七分三分の割合であつたかと思はれる。從つて義公の苦心の大部分も、此基礎附に向つて拂はれたのである。當時皇室を初め奉り、公卿諸家にはそれぐ\所藏の記錄がないではなかつたが、何れも口授秘傳を貴んだ時代の常として、所謂門外不出の書が多く、それらの記錄も、一般に秘記と呼ばれてゐた程であるから、容易な事では他見を許されなかつた。且つ其貸借等にも、到底今では考へられぬ程の殊廟氣質が行はれてゐる。例へば公卿は水戸家に其所藏の記錄を用立てるに當つて、幕府に對する遠慮から、一時に大部の貸出を憚つて、少しづゝ貸出さうとした事抔がそれである。幸ひにも水戸家には所謂駿河御讓り本を始め、好文の質であつた初代賴房（威公）の集めた藏書に富んでゐた。併し義公はもとよりこれを以て充分とはせなかつた。彼れは幕府の力をも借りて迄も、しきりに蒐集に力めたから、數年の後には、得難き記錄を寫取もし又買入もして、其藏書の豐富な事は到底諸家の藏書が只自家のものに偏してゐた類ではなかつたのである。

是に於て義公は是等の諸家から其藏書を借り出すに、最も鄭重な一方法を案出した。それは書本又は本替と稱して記錄の交換をなす事である。其所謂秘記の多くを藏することが諸家の誇負であつた文獻さへもこれには動かされざるを得なかつた。水戸家の請求に應つた諸家の中には、一往仕合がない抔と斷ることもあつたが、其場合にも、此類の手の利目は覿面であつた。或は他の秘記が見たさに、自家の秘書を示さうといひ、或は家本の不足のところを水戸家本で補つて呉れとかいつて喜んで取出す段取になつたのも、全く此方法の宜しきを得た結果に外ならぬ。圖書に對する平生の抱負から推しても、それが義公自身の創意に相違あるまいと思はれる。當時諸家の本替の申出に接した京都出張員の伺出に對して、義公は、其本とならば同意をしてもよいとか、其本はさして入用でないから、一往御斷りして、更に他の記錄を借出す事を力めよとか一々細かく指揮してゐる。

斯くて義公が古書の蒐集に成功したのは、此方法の外にも、冷泉家や日野家等の異數の好意を寄せた爲めでもあつたらうが、又義公の方針は只編纂に役立てる爲めに、全部の謄寫、若しくは一部の抄錄をなすに止まるとの眞相の諒解の爲めでもあつた。これと略時を同じうして、義公と共に好文の聞え高き者といはれた加賀の前田松雲公は金に飽かして是等の諸家から平安朝の公卿の日記抔の貴重な記錄を買取る事に力めた爲めに、家計の不如意勝な公卿衆の人氣が荒んで、義公の蒐集にも多少の惡影響を免れなかつたやうである。併し公卿の中でも、古風な人達は、却て松雲公の仕方に反感を抱いて、義公に好意を

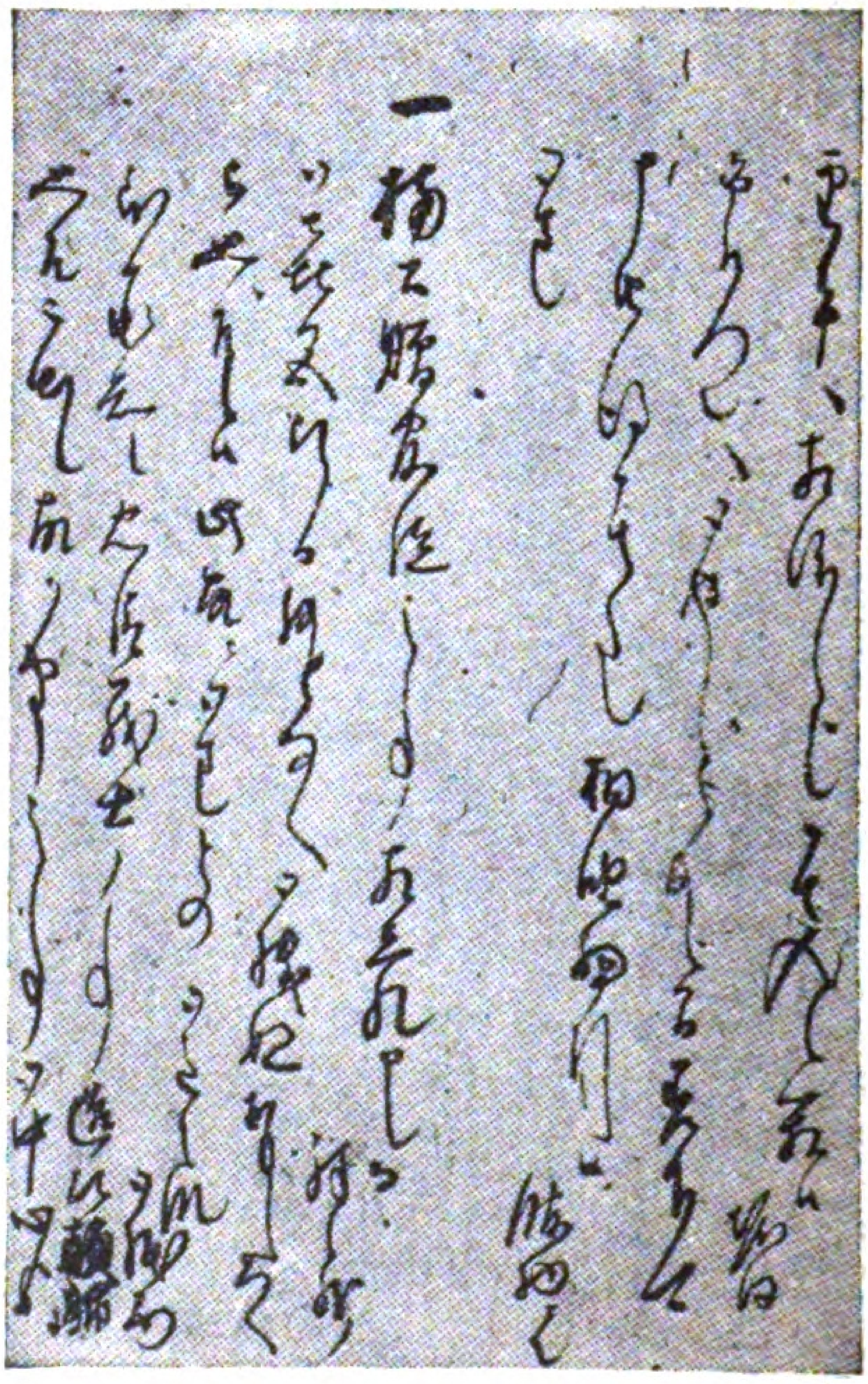
寄せ、便宜を圖らうとした向もあらはれた。皇族の中でも記錄に留まれた伏見宮家の如きは、是迄遂ぞ其藏書を何方へも貸出されなかつたけれども、義公の志に感ぜられて、誠の味づくで御貸しになるから、他見を許さぬやうにと仰せられたが、義公は御意に任せて、他見も他借も許さぬ事にした。同宮家では猶ほ御藏書の修復がしたいと仰せられたから、義公は御意のまゝに修理して差上げてゐる。これは諸家に對しても同樣であつて、中には製本についての先方の好みを聞かせて、其通りに仕立てた上にも、立派な新調の本箱に納めて返却したのもあつた。

當時は所藏者に對して、水戸家からの直接の交渉の困難な場合もないではなかつた。殊に御三家の身分として餘りに手重くもなり、自然費用もかゝるところから、多くの場合はそれ〴〵人傳に交渉を進めたものであるが、それが又想像以上に廻りくどい緣故を、二重にも三重にもくゞつて交渉を重ねたものであつて、其間種々の人々が介在してゐた爲めに、出張員からの附屆が、肝腎な先方へ屆かぬ途中に消え失せて、一向に埒の明かぬ事もないではなかつた。此場合にも、義公から直接使を遣つて修史の趣意を説明させると、所藏者は一議に及ばず快諾を與へて呉れる。義公自身も、例へば醍醐の水本坊の如き、多くの史料を藏するものが參府した場合には、面會の上、直接に依賴したから、よく其趣旨を諒解して、出張員を藏に入れて閲覽させ、且つ他の寺院にも紹介して便宜を圖つて呉れた。それらに對して義公は、それぞれ好意の程度に應じて、其謝狀を與へるとか、金子、銀子、時服を贈るとか國産の鮭や僧侶には衍齋麥を遣すとか、種々の形式で謝意を表する爲めに、一々氏名を申立てるようにと、出張員に命じてゐる。河内方面の案内人別所甚兵衞の如きは、義公から國絹鹽雁を飛脚に託送されたのを、非常の光榮として、鹽雁は料理して在所中のもの七十餘人に振舞ひ頂戴させたとの事である。

斯樣な純朴眞率な態度は、地方に行く程強く現れてゐた。高野山の如きは、御影堂の文庫の記錄文書は、古來御影堂以外に出した例のないにも拘らず、義公の御用は格別であるからといつて、釋迦文院迄取出して、出張員に二日間心閑かに熟讀抄錄するの便宜を與へてゐる。彼長慶天皇の御在位を肯定するに有力な同天皇宸翰の勅願文も、是時に始めて出たのである。其他南朝の綸旨が數十通も同時に出でたから、それらの史料を參考したならば、多少は南朝の事蹟も知れることであらうとの出張員からの報告に接した時の義公は、定めて胸の高鳴を抑へ得なかつたであらう。肥後の阿蘇神社の如きも、南朝の文書が數十通あるが、義公の御編輯の事は内々承り及んでゐるから、一事にても御用に立つ事が阿蘇から出でたならば、末代迄の神社の光輝であつて、少しも惜む事はないといひ、宇佐でも到津氏は、殿様の事（義公御用の事仰下されたのは、誠に以て當宮繁榮の瑞と申し、斯樣な大慶な事は御座らぬと、社務全部を提供した上に、社人、社僧中に觸を出して、悉く所藏の文書を見せた。諸寺に諸社で、出張員の聞く

退するをも聞かばこそ、案内人を出して、宿々の人馬から、旅宿の世話迄燒かせ、別に記錄に詳しき人物をも附けて說明役を承らせ、出張員が宿料を拂はうとしても受取らぬ。これには出張員も今更に「殿樣御威光之程、言舌ニのべ申事不レ罷成一候」と、其報告に殿樣禮讃を行つてゐる。尤もそれが爲めに、紀州の出張員の如きは、一時の骨休めに和歌浦の遊覽を試みようとすると、そこには紀州家で饗應の準備があると聞いて中止したといふ一插話もある。

斯くて蒐集された史料は、今日から見れば、もとより遺漏がないではないが、封建割據の時代にしては、實に意想外なる莫大の收穫であつて、當時の蒐集の中、今日迄に既に散佚して傳はらぬものも多々あることを思へば、義公の全國的探訪は空前の壯擧と謂ふべく、史學に對する貢獻の多大なる事言語に絕してゐるのである。


（元祿五年六月二十五日彰考館總裁中村顧言より同鵜飼眞昌宛書狀案）

大日本史編纂記錄　京都帝大國史研究室藏

六　史料の科學的研究

偖斯樣にして閲覽した記錄や古文書が如何に取扱はれたかといふに、そこにも、周到なる用意が拂はれてをつた。是等の史料の購入の出來るものは購入もしたが、割合に少なかつたのは意外である。珍本の購入を水戸家に申出でたものが、若し御當家で御求めにならなければ、加賀樣に買つて貰ふといへば、加賀守が求められたとば借用することにしようと言つて斷り、又は先方の言値を値切つて、若し負けねば見合せる。謄寫にしても、全部寫すのかといふに、それも多くは編纂に必要なる部分丈の書拔に止め、用が濟めば返して了ふ。民間の本を水戸家で借りて寫すといへば、事が手重くなるから、案内人の名義で借入れて寫すといふが如き苦心も拂はれた。借りるには借り賃を出ださる〻場合が京都あたりではよくあつたが、それすら借り賃の言ひ値が餘り高いと見合せる。同一の本が水戸家にあれば、水戸家の本を送り屆けて校合させる。先方の好意を空しうせぬ爲めにと、水戸家にある本を借り受くるやうな事を義公は殊の外嫌つたもので斯る場合には、無益の儀に厚恩を受け重複の書出來て費へなる事であるから、よく了簡せよと、出張員に注意を與へてゐるのを見ると、出張員らもなかなか骨が折れたらし

い。

斯くいへば、御三家にも似合しからぬ慳吝と聞えもしよう。實際義公の近臣井上玄桐の筆記を見ても、義公が當時慳吝の名を取つたのは僻陬の微瑕といはれたと書かれてゐる。水戸家では此修史事業の爲めに歳入の三分の一を充てたといはれ、史館の經費は特別會計となつてゐたやうであるが、史料の全國的蒐集丈でも莫大の經費を要した。此百年の大業に向つて、初めから華美に金銭を浪費したのでは、如何にして有終の美が擧げられよう。義公自身にも「常ニ天下國家ノ主カラ士庶人ニ至ル迄儉約ヲ第一ノ德トス」といひ、太平が久しく續いて元祿の奢侈時代の出現となり、國用家費の不足を來したのを、全く上たる人の不用意が下に及んだものであると、苦々しき事に思つて、人主の身持を謹むべき事を高調してゐる位であるから、其閨閥の非難を顧みず、率先して冗費の節約を斷行したのは、實に其主義から來てゐると見てよからう。併し彼れ自身も節儉と吝嗇とは紛るゝものであるから、此間をよく辨へよといつてゐた程であるから（年山紀聞）多少の誤解はみづから覺悟してゐたのであらう。

採訪員が各地方で抄録した史料は南行雜錄、續南行雜錄、又續南行雜錄、西行雜錄等となつて、編修上非常に役立つた。別に古文書の全文を見取寫にしたものに古簡雜纂がある。而して是等の古文書の眞贋鑑識には、花押の研究が必要であるから、義公は丸山可澄（可澄）に花押數の纂輯を命じた。又諸家の出自を知るには系圖の研究に依るの外ないから、義公は中年に諸家系圖纂を編纂させた。日本の古書は大抵寫本で傳つてゐる爲めに、轉寫の誤が多い。故に義公は史料として利用する爲めに、出來得る丈校正の嚴密を期したものであつて、校正の爲めに取寄せた十訓抄が、水戸家本より五十枚も多いと聞いて大に喜んだのも、其正しきを校正に置いた爲めである。而かも手不足勝な史臣は、此種の校正に熱中する爲めに、一時編修を中止するに至つた事も屢あつたらしい。六國史の校正を始め、參考保元物語、同平治物語、同源平盛衰記、同太平記等は其成果としてあらはれた。又我國の圖書には一般に索引は勿論、完全な内容目錄もないから、檢索の不便一と通りでないが、義公は史臣の請ふがまゝに、如何な貴重本でも隨意に朱筆で標出をすることを許した。これ亦も世間普通な好學家の思ひも寄らぬ果斷であらう。

以上は何れも修史事業の基礎工事に當るものであつて、言はゞ其副業ではあるが、今日から見れば、史料の科學的研究とも謂ふべく、是等の道具立が備らなくては、到底完全に修史の目的を達することは望まれなかつたであらう。

七　修史の大方針

天和三年に新撰紀傳百四卷即ち後世からは前紀傳といはるゝものゝ編纂を終へたが、それは義公の意に副はなかつたから、編纂方針を改めて更に改修することゝなつた。何故に義公の意に副はなかつたかといへ

ば、時の政府、徳川幕府の監督に「一手前作り之鑑」であつたからと見えてゐる。所謂手前作りとは、私撰の歴史を意味してゐる。天時勅撰の歴史に准ぜらるゝを以て理想としてゐた義公は、到底此くの如き史記に滿足すべくもなかつた。

舊紀傳には又一々引用書を註してなかつたが、其改修と共に、それぞれ史實の出典を註して其正確を期する事となつたといはれる。記事の正確は大日本史の一生命でもあつたから、これ亦編纂方針の重要なる改善と看做すべきであらう。

義公は當世の教訓を垂るゝ書として司馬遷の史記に傾倒してゐたが、只同書が忠臣義士の傳を多く載せてゐるうちに、漢高祖の爲め、身を以て其危難を救つた紀信の傳を缺いでゐるのを深く遺憾としてゐた。紀信の事蹟が此一事以外に傳はらぬ事を以て特に其傳を立てぬ理由とするを義公は大なる誤であるとし、これ丈でも彼れの忠節は百戰百勝の功に優つてゐるから、蕭何、曹參、陳平の傳と並者すべきであつて、傳は短くとも省略すべきでないと痛論してゐる。それ丈其修史に當つても、此點に留意し、本朝の人物は一般に記錄に乏しいから、稗官小說迄も取入れて其傳を立て、縱ひ文路は多少拙く聞ゆるとも、事實の遺漏なきを期したいといつたことも注意すべき要項であらねばならぬ。

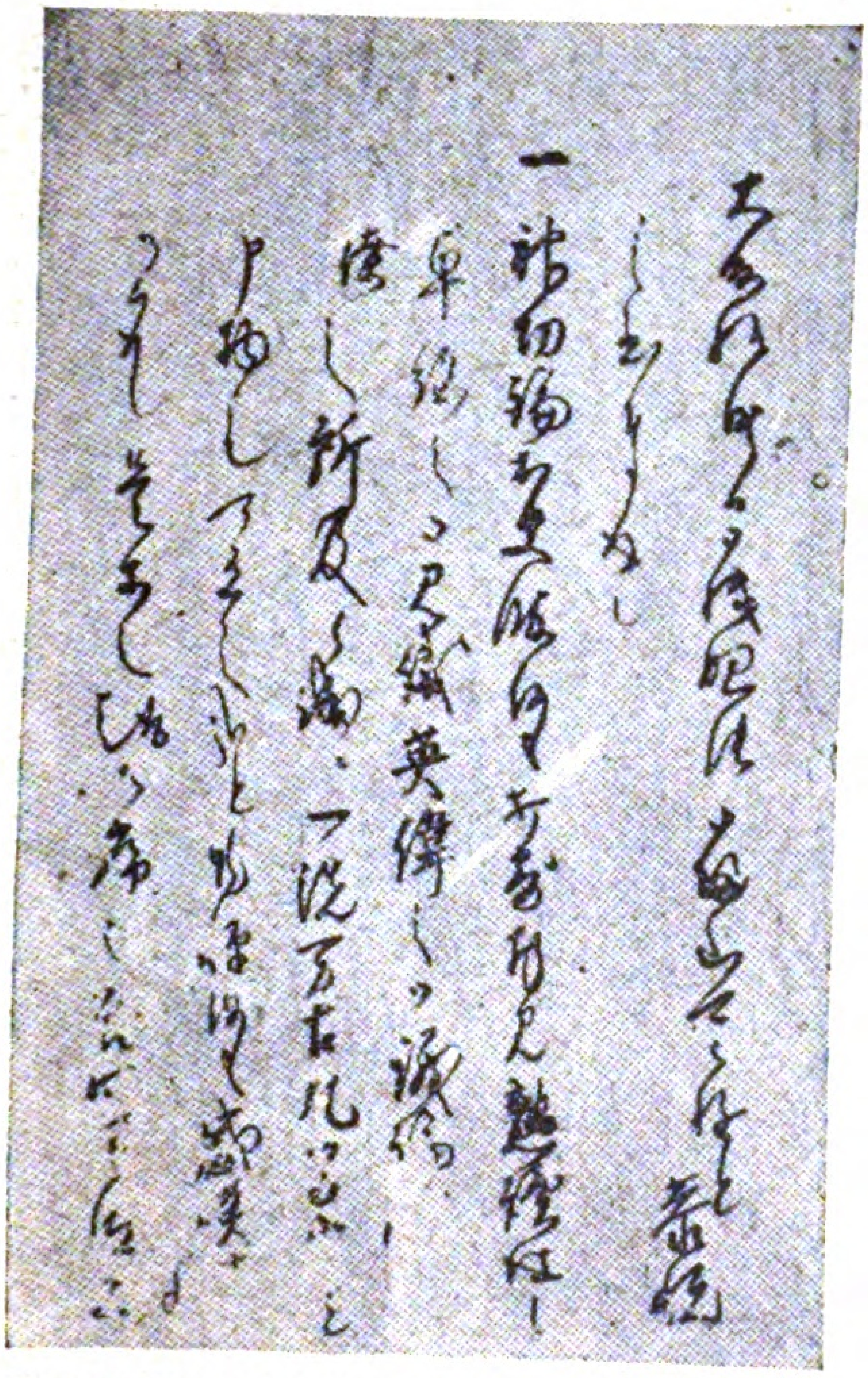
義公の修史の大方針ともいふべきは（第一）其常に左右に告げたといはるゝ「我主君ハ天子ナリ」との尊皇の大義から名分を明らかにせんとの精神に出でゝゐた事を擧ぐべきである（梅里遺事）。義公に當時の所謂學問卽ち漢學の素養が深く、朱子學に師事してゐた丈に、斯る支那の思想、感情乃至嗜好に傾いて居たにも拘らず、當時の名儒すら免れなかつた中華の語を支那に對して用ゐるの弊を戒め、日本の都をこそ中華といふべけれ、何ぞ外國を中華と名けんやといつてゐるのは、其名分に於て一歩も譲らなかつたことを示すものである。林家の本朝通鑑の初稿には我國は吳の泰伯の後胤であるとの文があつたのを、義公が辯駁した爲めに出版を中止されたと傳へられてゐる（年山紀聞）。これに對して、今傳つてゐる同書には、其明文がないから、學者の間に、此傳說を否認するものと肯定するものとがあるが、これを公平に考へて、泰伯後胤說が林家の家說であつたのは否定し得ない事實であつて、羅山や、鵞峰の文集を見れば、正に一點の疑を容れぬところである。併しそれについては、私は別個の見解を有つてゐるものである。由來此說は餘程古くから我國に行はれてゐたものであり、且つ泰伯は當時の儒學者の間に最も敬慕されてゐた人でもある。實は義公の如きも其一人であつたのは泰伯の墓地の名を取つて、みづから梅里と號してゐた事でも知れる。林家の家說は泰伯の至德が我皇室の始祖たるにふさはしく思つたから出でたものであつて、其說の當否は姑く措き、我皇統を汚すといふが如き、大それた動機からでは決してなかつたものと私は信ずる。

本朝通鑑は其編年體からして、惟に資治通鑑を取つたものであつて、

其書中にも褒貶の意を寓してゐないではないが、只これを義公の修史の方針に比すれば、著しく微温的であり、又不徹底的であつた丈である。例へば本朝通鑑の編者は女帝に對し奉つては牝鷄の晨する戒めを楯に取つて好意を有たなかつたから、神功皇后の爲めにも一紀を立つるを好まなかつたことは明かであるが、只微意を寓すと斷つた丈で、矢張一紀を立てゝゐる。然るに義公は、皇后の御身であり乍ら、遠征を事となされ、嫡庶の分をも、、、武内宿禰を重用なされた事を非難し、一紀を立つるの非を痛論したから、史臣は其卓絶の見識、英偉の議論に敬服して、遂に后妃傳に收める事に確定したのである。

次に安德天皇と後鳥羽天皇、南朝と北朝との正閏の問題について見ても、本朝通鑑には、壽永、元祿の間に東西に二帝があり、曆應より明德に至る迄にも南北に兩統のあるのは、本朝の大變であつて、妄りに正偏を議すべきではないが、聊か微意を各篇に寓すといつてゐる。然らば其微意とは何かといふに、南北の對立の間は、後醍醐天皇御一代に限つて、南朝を正として、北朝の事實を其間に附載するが、後村上天皇以後は、其反對に北朝を正として、南朝を其間に附記し、代數の算出も、後醍醐天皇から北朝の光嚴天皇以下の諸帝に及んでゐる。其理由としては後醍醐天皇には御讓位の儀がなかつたから、其御一代は正統であらせらるゝが、後村上天皇に至ると、都鄙の別、即ち京都と地方との別が生ずるのと、北朝の皇統が今に傳つてゐらせらるるからとの二つの理由に基くのである。併し乍ら若しも後醍醐天皇の御讓位に重きを置くならば、後村上天皇は正さしく後醍醐天皇の御讓位を受けさせられたのである。又所謂都鄙の別をいふならば後醍醐天皇は崩御の三年以前に既に吉野に御遷幸になつてゐる。更に北朝の皇統が後に傳はらせられてゐる事に重きを置くならば、後醍醐天皇以後に限つてをらぬのであるから、其論據は頗る薄弱と謂はざるを得ぬ。

それに比べたならば、義公が神器の所在に依つて南朝を正統とし、北朝を閏統としたのは、其主義が明瞭であつて、且つ終始一貫してゐる。壽永、元曆の場合、安德天皇の御在位を認めたのも亦同一轍に外ならぬ。其他義公は漢史の廢帝とした弘文天皇を始め淳仁天皇や仲恭



（元祿十二年十二月十五日彰考館總裁中村顧言安積覺より井上玄桐宛書狀案）

大日本史編纂記録　京都帝大國史研究室藏

天皇の爲めにも御在位に對して一紀を立てゝゐるのである。是等の史斷は必ずしも悉く義公の創見ではなかつた。試みに南朝を正統とする說についていふならば、親房の神皇正統記の强き主張のあつたにも拘らず、足利時代は北朝が正統として取扱はれて來たが、近世の初頭に入つて、南朝を正統と認むる新らしい見方が動き出した。羅山の如きも確かに其一人ではあつたけれども、事、皇室に關する爲めに、何人も明言を憚り、記錄を曖昧にしたのであるが、理智に輝いた義公は堅く執つて動かばこそ、其舊紀傳には北朝の五帝を皇子列傳に編入して憚らなかつた位徹底してをつた。逌の安積澹泊も、これには眉を顰めて、革命の行はるゝ外國で前代の歷史を修するには此書法もよからうが、我國は北朝といつても、皇祖の御後胤で、今の皇室の御祖先であらせらるゝから、斷じて列傳に下すべきでないと、遂に僚友と建議して、合一後の後小松天皇紀の初に倂叙し、變態乍らにも本紀の中に列することゝしたのは、頗る穩當の處置であつた。

長慶天皇の御在位の如きも、同樣近世の初期からこれを主張するものが續出したのであつて、大日本史以前にも、林家の續王代一覽、鵞峯文集の公卿傳凡例、續本朝通鑑其他の諸書に於て、既にこれを認めてゐるが、大日本史に至つて、新發見の高野山文書等を根據として一層これを明確にしたのである。而してそれらの斷定は一つとして義公の明斷に出でなかつたものはない。當時史臣の意見は必ずしも義公の所見と一致したのではなかつた。又此學說ばかりは、如何に主君の權威を以てしてもこれを强制すべきではなく、義公自身も亦決して强制しようとせなかつたばかりか、寧ろ充分に彼等の意見を盡くさせることに力めた。彼弘文天皇の御在位を認める事や、南朝を正統と立てる事についても、史臣の間には異論がないではなかつたけれども、義公は彼等に反覆辯論させた上で、後世必ず自身を咎めるであらうと、責を其一身に負うて始めて確定を見たのである。長慶天皇の御在位を認むる說の如きも亦さうであつた。

大日本史の特長とする所謂三大特筆を始め、義公の明斷に依つて古來の歷史上の皇室に關する大なる疑問は適當に解決され、國に二王なしとの事實も始めて我歷史上に成立し、我國體の尊嚴が維持され、神器の神聖が確保された。今日の自由研究の世の中では、學者の間にもとより多少の異論なきを免れないが、何樣確乎たる有力の根據に基かれてゐる丈に、縱し多少の出入はあるにしても、根柢から其決定を覆へすことは有り得ない。先年宮內省に於て、皇統譜編製の必要から、臨時御歷代史實考查委員會が開かれて、是等の皇室に關する疑問を解決すべく、三年に亙つて審議を重ねたが、其結果は彼長慶天皇の御在位を認めた事を始め、大日本史の編纂後新たに世に出でた史料に依つて、一層其年代をより綿密に限定する事抔の事はあつたにもせよ、大體に於て義公の裁斷の範圍を出でなかつたのは、偶其千古の確論たる事を立證するものでなくて何であらう。

（第二）は史實に依つて名教を維持する事であつた。大日本史にはも

い。

斯くいへば、御三家にも似合しからぬ慳吝と聞えもしよう。實際義公の近臣井上玄桐の筆記を見ても、義公が當時慳吝の名を取つたのは白璧の微瑕といはれたと書かれてゐる。水戸家では此修史事業の爲めに歳入の三分の一を充てたといはれ、史館の經費は特別會計となつてゐたやうであるが、史料の全國的蒐集丈でも莫大の經費を要した。此百年の大業に向つて、初めから華美に金錢を浪費したのでは、如何にして有終の美が擧げられよう。義公自身にも「常ニ天下國家ノ主カラ士庶人ニ至ル迄倹約ヲ第一ノ德トス」といひ、太平が久しく續いて元祿の奢侈時代の出現となり、國用家費の不足を來したのを、全く上たる人の不用意が下に及んだものであると、苦々しき事に思つて、人主の身持を謹むべき事を高調してゐる位であるから、其周圍の非難を顧みず、率先して冗費の節約を斷行したのは、實に其主義から來てゐると見てよからう。併し彼れ自身も節儉と吝嗇とは紛るゝものであるから、此間をよく辨へよといつてゐた程であるから（年山紀聞）多少の誤解はみづから覺悟してゐたのであらう。

出張員が各地方で抄錄した史料は南行雜錄、續南行雜錄、又續南行雜錄、西行雜錄等となつて、編修上非常に役立つた。別に[illegible]文を見取寫にしたものに古簡雜纂[illegible]鑑識に[illegible]

ないから、義公は雲平に諸家系圖纂を編纂させた。日本の古書は大抵寫本で傳つてゐる爲めに、轉寫の誤が多い。故に義公は史料として利用する爲めに、出來得る丈校正の嚴密を期したものであつて、校正の爲めに取寄せた十訓抄が、水戸家本より五十枚も多いと聞いて大に喜んだのも、其重きを校正に置いた爲めである。而かも手不足勝な史臣は、此種の校正に鞅掌する爲めに、一時編修を中止するに至つた事も屢あつたらしい。六國史の校正を始め、參考保元物語、同平家物語、同源平盛衰記、同太平記等は其成果としてあらはれた。又我國の圖書には一般に索引は勿論、完全な內容目錄もないから、檢索の不便一と通りでないが、義公は史臣の請ふがまゝに、如何な貴重書でも隨意に朱筆で標出をすることを許した。これ抔も啻に趣味な好書家の思ひも寄らぬ果斷であらう。

以上は何れも修史事業の基礎工事に當るものであつて、言はゞ其副事業ではあるが、今日から見れば、史料の科學的研究とも謂ふべく、是等の道具立が備らなくては、到底[illegible]修史の目的を達することは望まれなかつたであら[illegible]

大なる遺憾はなかつたであ

の事業を主裁して、自身で計畫もし、實行もし、而かも斯
もに驚くべき成果を擧げ得た義公は、實に一大歷史家といはなければ
ならぬ。大日本史が一たび世に出でてから、我國體の記念塔となり、
國民道德の燈明臺となつて後世に輝き、國民を指導したと共に、所謂
水戶學所依の經典ともなつた。明治維新の大業は、薩長等の諸藩を中
心として行はれたものの、西鄕を始め改革の寵兒は皆水戶學の憧憬に

微を極めさせられた戰國時代には、御即位の禮ばかりは、
年後れても兎も角行はれたものの、大嘗祭は後土御門天皇
十一月に行はれたのを最後として、實に二百二十一年の間
たのである。近世に入つて東山天皇の貞享四年十一月に一
たけれどもそれは型ばかりであつて、御儀式も備はらず、辰
日に巳午の節會を行はれたに過ぎなかつた。それすら其次の
皇の時には又中絕したが、更に其次の櫻町天皇の元文三年十一
つて再興せられて、同十八日から二十三日に亘つて行はれた。

と論贊を附して褒貶を示す豫定であつたが、それは中止したけれども、記事の間に自然其意を寓してある。今彰考館に殘つてゐる伊東曾我傳の草稿の如きは其一適例と看做すことが出來よう。此草稿には、處々に附箋があるが、其書風が義公と同一であるばかりでなく、「刪去ヘシ」といふが如き命令的の文字があるかと思へば、本文の文を改めて「五郎丸佯爲二婦人一自レ後抱二住時致一既而衆皆相聚擒レ之トケ樣ニイワネハ時致カ本意ニアラス候、抱住字俗語カシラス」といつて、一旦示した抱住の文字を俗語かも知れぬといつてゐる素人らしきあたり、(其實抱住の文字は立派な成語であつて、俗語ではないが)何れも義公の筆と思はせるものであつて、安積澹泊は一々命に依つて訂正を加へ、前記の抱住の如きは「抱持に改申候」と書いてゐる。其內本文に「其母以二禰親命一再醮」とあるに對して附箋には「雖下不レ書二禰親命一不レ用二再醮字上自無レ嫌、於二自弁一縱因二勇氏命一亦不レ得レ爲二貞女一書レ之有二何裨補一乎以二禰親希二(命カ)四字實事ナリ可刪去ヘシ」と書かれてゐる。即ち名教道德に裨補なき事は、縱ひ事實であつても刪除するがよいとの意味外ならにぬ。此一事義公の修史が單なる史實の敍述よりも、一層重きを置いた點のあつた事を雄辯に物語つてゐるではないか。

斯る方針の下に進められた義公の修史事業は大局から見て、時代の一產物であつたに相違ないが、これを同時の他のそれと對照すれば明らかに色彩の濃淡を異にするものゝあつたことが掩はれぬ。それは私が上來說き來つた(第一)點も亦、異なる國家的意識の下に、歷史的事實を以て、徹底的に大義名分を明らかにした點であつて、其間些の曖昧摸稜を許さなかつた事(第二)史實の敍述よりも寧ろ名教の維持に重きを置いた事の外に(第三)其理想や抱負の絕大であつた事である。私撰の歷史を以て滿足せずに、勅撰に准ずるを理想とし、從つて千古の確論を立てゝ、一世をも萬世をも指導せんとするの抱負が窺はれる。(第四)全國から史才あるものを任用し、其間、國境や學派や老若を超越した事である。(第五)史料も亦全國から採訪して遺漏なきを期した事である。斯樣な事は實に空前どころか、明治初年の政府の修史事業すら、始めは有觸れた雜史、軍記で編纂する方針であつたのを、後にこれに慊らずとして、關東六縣から漸次全國に及ぼして徧く史料を採訪することゝしたが、義公が疾くに其先鞭を着けてゐたのは偉とせなければならぬ。義公は獨り國內の史料ばかりでなく、日本の人物の史實が、支那の史料に見えてをるものに對しても、特に注意を拂つて其採錄に力めさせてゐる。(第六)それ丈後世に及ぼした感化は甚偉大であつて、實際國民はこれを勅撰の歷史と同樣に取扱ひ、其絕大なる權威を認めてゐる。明治初年の修史事業が、始めは六國史の後を繼ぐの方針であり乍ら、後には大日本史の後に接して、南北合一から筆を着ける事になつたのでも知れよう。

義公の晚年には遂に修史の成功を急いだ。元祿九年五月六日、義公の意を承けたと思はるゝ佐々宗淳から安積澹泊に宛てた書狀の一節に「紀傳之草藁全部成就仕候へば、先以偉大之書出來と奉レ存二候

候。漸々年老衰被レ成候ニ付、御待兼被レ成候。御安泰之内、御書物之成就ヲ御覧被レ成度被二思召一候。校合之事ハ、たとひ千秋萬歳之以後當君（綱條）又ハ世子之御代ニ而も緩々と被二仰付一候様ニと被二思召一候。右之仰ニ御座候故、御尤至極と申上候。

とある。宗淳自身も義公の修史事業が四十餘年に及ぶも成功せないから高年に達して待遠く思ふは尤の事と附加へてゐる。義公が一日西山の草廬に伺つた酒泉竹軒の退出に際して與へた詩に「勿レ設難行常陽雲霞境、自レ此冥望江東日暮天、子歸告二史臣一成功何歳、歳不レ待レ人、我去臨二墓前一といふのがあるは、其頃の事であつたらう。

義公の世を終る頃には、本紀は略脱稿し、列傳も草稿は大分出來上つたが、未だ充分でなく、部分も定らねば、史體をも成してゐない狀態であつた。併し編纂の義例は略立ち、方針も確立してこれを踏襲すればよい迄に進められてゐたのであるから、生前に所謂紀傳の草稿全部の成功を見るに至らなかつたとしても、大なる遺憾はなかつたであらう。

此一大修史事業を主裁して、自身で計畫もし、實行もし、而かも斯様に驚くべき成果を擧げ得た義公は、實に一大歴史家といはなければならぬ。大日本史が一たび世に出でてから、我國體の記念塔となり、國民道德の燈明臺となつて後世に輝き、國民を指導したと共に、所謂水戸學所依の經典ともなつた。明治維新の大業は、薩長等の諸藩を中心として行はれたものの、西郷を始め改革の龍兒は皆水戸學の憧憬に依つて精神的刺戟を與へられたのであるから、大日本史に盛られた尊王精神は、間接に又明治維新の原動力となつたといつても誇張ではあるまい。一部の歴史にして斯く迄に深刻なる感化影響を永く後世に與へたものは、古今東西に未だ嘗て其比類を見ないところである。

八　結語

義公は猶は大日本史以外にも、種々の編纂を監修したが、其中で扶桑拾葉集、本朝詩文集、釋萬葉集、正續神道集成、禮儀類典等は其主なるものであつて、それらは啻に大日本史の編纂に役立つたばかりでなく、皆それ〴〵に斯道の發達に寄與してゐるのである。中にも別して今秋國民歡呼の裡に行はせらるゝ御大禮に關聯して、感慨の深きものは禮儀類典であらう。言ふ迄もなく、天皇の御一代に一度行はせらるる御大禮は古來最も莊重嚴肅に擧行されたものであるが、皇室の式微を極めさせられた戰國時代には、御即位の禮ばかりは、十年二十年後れても兎も角行はれたものの、大嘗祭は後土御門天皇の文正元年十一月に行はれたのを最後として、實に二百二十一年の間中絶してゐたのである。近世に入つて東山天皇の貞享四年十一月に一旦再興されたけれどもそれは型ばかりであつて、御儀式も備はらず、辰の日只一日に巳午の節會を行はれたに過ぎなかつた。それすら其次の中御門天皇の時には又中絶したが、更に其次の櫻町天皇の元文三年十一月に至つて再興せられて、同十八日から二十三日に亘つて行はれた。是時の

御再興は實に義公が心血を注いで編纂した禮儀類典を朝廷に進献した爲めに大嘗祭に關する朝儀が巨細に闡明され、其式法に基いて復興されたものであつて、貞觀、延喜の盛觀に復する迄には至らなかつたけれども、大方は古制に復せられたといはれてゐる。爾来歷朝即位の禮を擧げらるゝ毎に、大嘗祭をも行はせられて今日に至つた。されば近世に於ける大嘗祭の再興は、義公の力に依ること大であつたと謂はなければなるまい、其他湊川の楠公の建碑等が、國民道德に多大の感化を與へたことは周知の事實である。

義公は幕府の親藩であり乍ら、皇室を尊奉し、陰にこれに接近して、靈元天皇から備武兼文絶大名士の優詔をも賜はるに至つた。彼れが此數字を其印文としたのを見ても、如何に聖恩に感激したかを察すべきである。義公在職中の治蹟の多い中に神社の神體として佛像を祀つたものを排して悉く神鏡若しくは幣束に代へさせ、神道は神道、佛道は佛道、修驗は修驗、各道を專らにし、他を混雜せざれと敎へたのは、明治維新直後の新政府の神佛混合廢止の大方針に一致してゐる。更に大船を造つて北海を探檢させたのは、幕末の國難に思合せて、着眼の非凡を偲ばせる。彼れは又所謂御三家の隨一として絶代の崇敬を一身に集め乍ら、其身を終る迄、驚くべき平民的な態度を以て、庶民に迄も臨んでゐた。西山に隱栖後、そこから程近き馬場御殿に講筵を開き、史臣をして庶民に向つて經書を講ぜしめ、毎回二百名前後の熱心なる聽衆を引付けつゝあつたのは、正に今日の社會敎育成人講座の先鞭を着けたものといへる。

思ふに義公は其青年時代に、史記の伯夷傳から受けた一大「ショック」に依つて、家を兄の子に讓つて、自身は生涯一子をも儲けまいとの非人道的覺悟を決したことが、やがて一生の捨身的態度となつて現れ、各方面に思切つた活動を續けさせたものであつて、啻に彼れをして一大歷史家たらしめたばかりでなく、すべての點に於て不世出の偉人たらしめたのである。其死に至る迄、日夕左右に親炙した儒醫井上玄桐が彼れを評して「只々英雄と申奉るべし」といつたのは、眞に至言である。私は他日更に英雄としての義公の眞面目を描寫するの機會を得たいと思つてゐる。

二葉亭について

正宗白鳥

（一）

「あひびき」は、ツルゲネーフの「獵人手記」のうちの、最も短いものゝ一つの飜譯であるが、當時のいろ〳〵な作家の創作よりも、不朽性をもつて明治文學史上に光を放つてゐることは、衆人の認めてゐるところである。二葉亭や鷗外の飜譯のあるものは、單なる外國文學の飜譯といふよりも、明治文學中の重要な古典だと云つていゝ。「あひびき」は、明治二十一年に「國民之友」誌上に揭げられたのだが、その頃世に現はれたどの創作だつて、この飜譯に比べると、稚拙であり陳腐である。

文章だけについて云つても、言文一致體のそれとして、最初から殆んど完成してゐる。「浮雲」よりもいゝ。「あひびき」「めぐりあひ」の二篇は飜譯でありながら、自然と人生に對する新しい情緒と、それを生生と表現する新しい文體とを、新日本の文壇に示したのであるが、當時は幾人の讀者がその味ひを翫賞したことであらう。少數の敏感な青年文學者の心を刺戟したゞけであつたと思はれるが、その以前のさまざまな、粗雜なる政治小說の飜譯とは違つて、微妙な藝術的感觸を、新代の青年の心に傳へたのであつた。この二篇が奇蹟の如く新文壇に投出されたあと、彼れの飜譯は暫く杜絶してゐたが、明治三十年前後から、新たに、しかも頻繁に、露國の名小說の飜譯が現はれるやうになつた。今度は、新日本の文學も餘程進步してゐたので、それ等のロシア物も、前よりは多數の讀者を得るやうになつた。しかも深く翫賞されるやうになつた。そして、日本の創作よりも却つて青年の心に響くところが多かつた。

森鷗外は雜誌「趣味」の、二葉亭追悼號に於いて、「飜譯はいくら巧くつても、それだけでは、文學者の價値を上下するに足らぬ。二葉亭も創作で評價すべきものだ」と云つた意味の感想を述べてゐた。鷗外自身、すら〳〵と勞せずして飜譯の筆を執つてゐたため、飜譯を輕視してゐたのかも知れないが、二葉亭の外國文學移植はそんな手易いものではなかつた。

私は、日本はいつまでも飜譯國ではないかと思ふ。明治初年の自由民權說の輸入以來、今日でも、外來思想の直譯がそのまゝに受入れられて、青年の血を湧かせてゐる。文學でも、外國の文學が、今なほ盛んに飜譯されてゐる。しかも、自國の文學を今尚壓倒してゐる。新潮社の飜譯文學集が、數十萬の會員を得て、多くの飜譯家が、創作家にも勝つた巨額な印稅を獲得するといふ奇異な現象をさへ呈するに至つた。

獨創の才は文壇に乏しい。二葉亭だつて、創作の方は、飜譯に比べると、見榮えがしない。

飜譯のうちでは、ツルゲネーフ物が最も多數を占めてゐるが、出來榮えも最も優れてゐると思はれる。當時の日本の文學青年は、この多感多情で、近代思想をも胸に抱いてゐた詩人的小說家ツルゲネーフの作品に最も共鳴したのであつた。紅葉露伴一葉などの創作に對するよりも、むしろ、二葉亭によつて移植されたツルゲネーフの「片戀」や「うき草」などに於て、一層よく眞實の自己を見出したかも知れなかつた。若い心に潜んでゐるものを煮出されたのであつた。ルーヂンやアーシャは、異國の無緣な男女ではなくつて、露伴紅葉などの作中の人物よりも、讀者の身に親しく思はれたのであつた。

私は、森田思軒が「懷舊」と題して飜譯したユーゴーの「バクジヤルガル」でも、あるひは、「即興詩人」など鷗外の飜譯小說でも、明治二十年代の日本文壇のうちでは、最も印象の深かつたものとして心に殘つてゐるのを覺える。そしてこれ等の飜譯家は意味を傳へるだけではなくつて、それ〴〵に文體や表現や味はひを閑却しなかつた。そのうちでも、二葉亭はことに苦心した。鷗外思軒などとはちがつて、はじめから言文一致體で、日常語を自由に使つたから、誰れのよりも新味に富んでゐた。ゴルキーの「猶太人の浮世」や「ふさぎの蟲」などは、あまりに二葉亭化されて、筆に調子がつき過ぎて、洒落れつ氣があり過ぎて、ゴルキーの原作が、こんなに垢拔けがしてゐるであらうかと疑はれるほどであるが、ゴルキー物を材料とした一つの創作として見ると面白い。日本の飜譯のうちで、飜譯的創作と銘を打つていいものは、この二編に留めを差すのである。二葉亭の面目が躍如としてゐる。多少の戲作者口調を含んで、しかも生きのいゝ、取り立ての魚がぴちや〳〵跳ねてゐるやうな趣きのあるのは、この二篇で、二葉亭の才分は、ここに於て、最もよく發揮されてゐる。私は、この頃である物も、今日の私には、實はあまり面白く感ぜられなくなつてゐるが、「ふさぎの蟲」などは、内容も文章も面白い。

ところが、二葉亭の創作は、彼れの飜譯的創作である「猶太人の浮世」や「ふさぎの蟲」などに比べると、著しく劣つてゐる。そこが私に取つては考ふべき問題になつてゐる。

（二）

飜譯では女主が、ぴちや〱跳ねるやうに生きてゐるのに、創作では、筆が著るしくいじけてゐる。原作の束縛を受けるべき飜譯に於て、自己の才氣が隨分に働いて、自由自在に奔ける筈の創作が、却つて窮屈さうに見えるのは、いたましく思はれる。

「浮雲」が、「當世書生氣質」などと殆んど同じ時代に現はれたことは異例であつて、たとへそれがロシア文學の刺戟によつたとはいへ、この作者の天分に、他の凡庸の徒と違つたところのあつた證據とすべきであらうが、日本のその頃の周圍の狀境がこの作者の天分を充分に培養し發展させるのに適しなかつたゝめか、あるひは作者自身の心掛けが當を得なかつたゝめか、あるひは、天分にそれほどの强み深みがなかつたゝめか、兎に角、はじめの勢ひは續かなかつた。創作道に於て、作者は直ぐに息切れがした。反省力のつよい二葉亭の煩悶苦惱が、私には想像される。

「浮雲」も第一編と第二編とが、今日なほ讀應へのするものであるが、その續きはガタ落ちがする。讀むに堪へぬほどだらしのないものである。創作に斷念してゐた彼れが、處女作後二十年も經つてから、新聞社に對する義理から止むを得ず執筆した「其面影」は、いくらか讀者受けはしたらしかつたが、「浮雲」以上の何物でもなかつた。彼れに對して、過分の好意を寄せてゐた內田魯庵氏でさへ、「浮雲」の描寫は直線的に極めて鋭く、色彩や情趣に缺けてゐる代りには、露西亞の作風の新らしい匂ひがあつた。之に反して其面影の描寫は、婉曲に生温く、花やかな情趣に富んでゐる代りに、新しい生氣を缺いてゐたゝ[illegible][illegible]件はかつて浮雲を評して、寫實の斷面圖を見るやうだと云つたが、其面影は、斷面圖の代りに、横濱出來の輸出向きの美人繪を憶出させた、」と云つてゐる。これは適評である。「浮雲」よりも古い感じのする小說である。哲也と小夜子とが、レストランで會食するあたりは、作者もなか〱味をやつてゐるが、全體としては、たゞの通俗小說である。文章だつて飜譯のやうには冴えてゐないのだ。

第三作「平凡」では、二葉亭も、思切つて自分を投出したので、「其面影」ほど陳腐平凡ではなかつたが、さしたる深みも厚みも、鋭さも、あるひは輕快な味ひも見られなかつた。犬についていろ〱叙述したところは、寫實の妙があるが、こんな挿話だけで生命を保つてゐるやうな小說である。しまひの方のお糸さんの一件なんか、型の如き通俗味の漂つてゐるもので、私の空想裡にある二葉亭がどうしてこんなものを書いたかと疑はれるほどに低級な感じのするものである。……

……しかし、この小說には、ところ〲作者自身の文學觀や自己批判らしいものが出てゐるのが面白い。

「平凡」は鷗外の「ヰタ、セクスアリス」と同樣に、當時流行の自然主義の刺戟によつて思ひついたものらしい。「其面影」の型を脫して新しい意匠を凝らす力のなかつた彼れは、日本の自然主義者等の書振りの手易さに目を留めて、おれもその手で行かうと思つたのであらう。

「近頃は自然主義とか云つて、何でも作者の經驗した愚にも附かぬ

ぜられるだらうが、そこに、明治二十年代の悩みが見られて、二葉亭の存在に興味が感ぜられる。彼れはその小説の主人公の如く、少し最後で頭が冴えてゐなかつたらしいが、正直であつた。今日のある種の青年のやうに狡猾なところ、輕薄なところは少しもなかつた。あの三つの小説は、藝術として幼稚ではあるが、人間の正直さは現はれてゐる。内田魯庵氏の「思ひ出す人々」のうちに、「二葉亭四迷の一生」と題して、彼れに關する追憶と批評とが、面白く記されてゐるが、これは二葉亭の人となりを知るためには、必ず讀むべきものである。創作と云つては、たつた三つしか書き遺さなかつた二葉亭が、明治文學史上に重きを置かれた所以が、内田氏の所説を讀むと理解される。「こんなまづい物を書いて原稿料を取つては相濟まん」といふ自責の念、自己の才能に對する過分の不信は、世間の甘い常識によつてもぐらつく時がなかつた。これは、他に例のないことで、私などは、自己の創作については、常に不足を感じ續けて來たのに關はらず、世間に推賞されると、ちよつといゝ氣になるのである。夏目漱石でも、世間のおだてに乘せられて、自分も一ぱしえらいものになつた氣でゐたらしい。藝術家で名譽の快感を覺えないのは、藝術家としての特權を失ふ譯であるが、唯一人二葉亭にだけはそれがなかつた。その點では不思議な人であり、また不幸な人であつた。自作の世に認められないのを憤つて、たまに惡評を下されると、親の敵のやうに深く記憶に留める文學者氣質は、二葉亭の氣持とは正反對である。

（四）

鷗外が新日本の文壇の先覺者として重んぜられたのは、近代の西歐文學に早く接觸したのに由る。二葉亭が早くから異色を呈したのも、偶然、近代のロシヤ文學に刺戟されたためであつた。陳腐な儒教によつて少年期の精神を鍛錬された彼れは、青年時代にロシヤ文學の感化を受けてあゝいふ人間になつたのであつた。儒教氣質と、詩趣を帶びた夢想癖との、矛盾した傾向の混和が、二葉亭といふ人間をつくり上げた。昔の支那文學で培はれた國士とは違つてゐた。ガツシリした體軀の持主で、天下國家を志してゐたあの二葉亭が、「氣の鬱したる時は、外出せば少しは紛るゝ事もあるべしと思へど、わざと引籠りて求めて煩悶するが却つて心地よきやうに思ふ」と、自から云つてゐたやうに、空漠たる人生問題なんかに思惱んでゐた有様を想像すると、いかにも不調和に思はれる。粉屋のチホンが、譯の分らぬ「ふさぎの蟲」に取付かれて煩悶するのが、傍目には滑稽に思はれるのと似寄つてゐないこともない。國木田獨歩も空漠たる人生問題に苦しんだ。北村透谷もさうであつた。綱島梁川もさうであつた。

しかし、今日は時代が變つた。一般の青年の心意氣は違つて來た。

私は、たつた一度、人に連れられて二葉亭を訪問したことがあつたが、その時、彼れが、年にも似合はず、「藤村操の投身」事件を話題として、同情のある感想を述べてゐたのを、今も覺えてゐる。

コロンバイル問題

長野朗

北滿に於けるコロンパイル問題は突如として起つて世人の注目を惹いたが、然し之の問題は今に始まつたものでなく、一昨年も獨立騒ぎがあつたが、物にならなかつた。然るに今回はコロンパイルの背後に外蒙があり、其後にロシヤがあると思はれて居るのと、東三省が新たに主人を失つて不安定の狀態にあるために事件の成行が重大視さるゝに至つた。今回の事件の結末はどう付くか分らないが、コロンパイルの問題は決して一時的のものでなく、今後も連續すべきものであり、且つ益々重大化するであらう。之の事件の内面には二つの重大なる意義が横つて居ることを見逃すことは出來ない。一つは民族自決の運動であつて、一つは日露支三國の北滿に於ける葛藤である。

民族自決は最近に於ける世界的風潮であつて、久しく屏息して居た蒙古人も、之の風潮の圏外に立つことは出來なかつた。殊に蒙古人と漢人との爭闘は甚だ古く、旣に支那建國の當初から繼續して居ると云はれて居る位で、漢人は之を防ぐため萬里の長城を築いた。蒙漢の衝突地點は主として今の 察哈爾 であつた。然るに近年蒙滿人甚だ振はず、漢人は倒滿興漢の民國革命を斷行して其勢ひ益々猛烈に、内蒙古方面では察哈爾、綏遠、熱河を漢人の勢力範圍とし、内蒙古人は次第に逐はれて外蒙境に屏息するに至つた。滿洲方面でも同樣の狀態は繰返され、漢人の移住は非常な勢で行はれ、滿洲人先づ征服され、蒙古人は四平街、長春の線まで出て居たのが、漢人の開墾が進むにつれ、遊牧を業とする蒙古人は次第に押されて西方に退き、今では洮遼、洮南よりずつと西に逃れて最後の陣地まで退き、この上に漢人から壓迫さるれば絶滅するか、外蒙或は露領に逃れる外なき狀態にある。かくて滿洲及東蒙古も亦漢人の有に歸し、僅かに殘つて居るのは コロンバイル 一ケ所となつた。然しコロンバイルが漢人に征服さるゝのも、現狀が繼續するものとすれば、それは最早時の問題である。最近漢人の北滿發展は著しいものであるが、それがコロンバイルに及ばないのは次の理由にある。コロンバイルは興安嶺により防護されて居るのと、土地が餘り開墾に適しないのと、住民が漢人に對して好感を有たないために、漢人が移住しないからである。漢人は今興安嶺の東麓まで其開墾線を進めて居る。興安嶺の東部は嫩江の流域で土地極めて豐饒である上に、未だ未墾地が多いために、漢人の移住は盛んにこゝに行はれ、興安嶺を越えて西方に進まずして、却て嫩江を上流へ上流へと遡りつゝある。然し一度嫩江流域が耕し盡された場合、其餘勢は西へ向ふことは明であつて、こゝにコロンバイルが漢人化するか、それとも原住民族の手に殘るかの問題が起る。一方ラマ敎により骨拔きにされて居た外蒙が敢然起つて民族自決の大旆を押し立て、次第に其勢威を增すに從ひ數千年來繼續して來た蒙漢兩民族の爭闘により極度に防勢に立ち壓迫しされ盡して居た蒙古人が、愈々最後の陣地から攻勢に出たものと思はなければならぬ。蒙古の故土恢復、外蒙と内蒙とコロンバイルとでは民族は種々異

つては居るが、彼等は一團となつて大蒙古國を造る外に自己を衞る道はない。彼等が漢人に對する反撃の方面は先づ二つであると見なければならぬ。一つは從來からの行懸りがある內蒙古の察哈爾方面であつて、一つは滿洲に於て漢人の侵略から殘された唯一の土地であるコロンバイルの獨立であらねばならぬ。コロンバイルの住民自身も亦自治を欲して居るから、之の爭鬪は恒久性を有つたものと思はれる。卽ち漢人が完全にコロンバイルを克服し盡すか、それともコロンバイルが蒙古國の一部として獨立するまで續くだらう。

かうした蒙漢兩民族の爭鬪に複雜づけるものは之を繞る日露支三國の關係である。之の關係は將來益々複雜さを加へて來るだらう。それは何故かといふに、現在滿洲問題が國際間に重要視され、その又中心が北滿に移つて來たためである。殊に日本の北滿進出と漢人勢力の北滿發展とは日露支の三角關係を益々複雜ならしめコロンバイル問題を重大化せしめずには置かない。

コロンバイルは黑龍江省の西部を占め、一方はシベリヤに一方は外蒙に接し、こゝには從來から之の地方に居たソロン、オロチョン、ダホリ、ブリヤート等の遊牧民族が住んで居るが、其人口は極めて少く、且つ經濟的にも力が弱いから、自力で獨立し得る能力を有たない。從て古くから露支兩國が此等民族を其手に入れやうと努めて來た。從てロシヤの勢力が強くなれば支那から獨立し、ロシヤの勢力が弱くなれば又支那に屬して來た。淸朝の盛んな時代には其節制に服して來たが、淸末ロシヤ勢力の東漸と共に屢々獨立を企てたが淸朝の滅亡を機として一時獨立し自治制を布き、一九一五年露支協定により支那に屬する特別區として自治制が認められた。然るにロシヤ革命の結果其力及ばざるに乘じコロンバイルの自治は取消された。ロシヤがコロンバイルを重大視するのは、こゝに緩衝地帶を造くつて日支勢力のシベリヤ侵入を防がんとするにある。シベリヤは支那に對してかなり長い側面を曝して居るから、かの經濟的にして恐るべく平和的侵略民族である漢民族と直接境を接すれば、あの長いシベリヤの境界線を守ることはロシヤにはとても出來ない。從て其中間に無害な遊牧民族を置くことは彼等の最も希望する所である。かくてロシヤは外蒙古國を造つた。次に最も重要なシベリヤ西部線のコロンバイルを獨立させる希望を有つことは當然である。然しロシヤとして考へなければならないことは、下手にコロンバイル題で尻尾を出すと、之れを口實に東支鐵道を回收され、藪蛇式に全部を失ふ虞れがあるのと、支那の後に日本の幻影を描いてそれを虞れて居るために今回のやうに不徹底な行動に出て居ると思はれる。ハイラルにある蒙古政廳はコロンバイルの行政權を握つて居るが、自力では何んにも出來ないため、支那官憲から睨まれることを虞れて却てかうした獨立運動を迷惑がつて居る有樣だが、大局が決定すれば之に反對する力も有たない。然し外蒙にせよコロンバイルにせよ、結局は民族自決であるから、支那から獨立するためロシヤの援助を受けては居るが、獨立が完成したらロシヤの勢力をも驅逐して完全に一本立ちしたいと思つて居る。之の傾向は外蒙にもコロンバイル南部地方にも相當に強く、其ため日本の援助を求めやうとする連中も居るが、之れは支那の勢力が伸びて來る以上にロシヤに取つては禁物だから、外蒙の如きも日本に對し堅く閉鎖して居る。支那がコロンバイルを完全に其實力下に置かんとして居ることも確かであるから、コロンバイル問題も民族問題と國際關係の二つを織り交ぜて益々面倒臭くなるだらう。

父よ悲む勿れ（六）

麻生久



五二

佐多は、親代々の坑夫の家に生れた一人子であつた。佐多の父は渡り坑夫の一人であつたが、佐多が未だ生れない前に、東北のある小さな金山から、足尾銅山に渡つて來てからは、彼が五十二の時、三人の仲間と一緒に落盤に出會して、無殘な横死を遂げたまで、まる、二十五年間を、支柱夫としてそこで働いた。

彼の父は腕も確かであつた上に、酒も餘り飲まない極く眞面目な男であつたし、家族と云つても、親子三人暮しであつたからして、彼が達者で働いてゐさへすれば、どうせお粗末な坑夫の暮しであるからして、其日に困ると云ふ事はなかつた。そこで、息子の成績のいゝのを自慢に、尋常を卒業してからも、多くの坑夫の子供達のやうに、直ぐには稼ぎに出さずに、あと二年間を高等小學まで卒業させたのであつた。

彼の父は極く正直な無口者で、ほんとに坑夫らしい性格の持主であつた。それでも何處かに人に立てられる處があると見えて、坑夫仲間では、何事かあると、重立つた役目をやらせられた。それで、どうかすると、役人達に目を付けられて、稼の上で苦められる樣な事があつた。

けれ共彼の母は、その夫とは反對に、ひどく負け嫌ひの强性張りで、どちらかと云へば情熱の勝つたはき〱家であつた。彼女は役人達が、稼ぎの上で夫を苦める樣な時には、ひどく夫れを憤慨して、無口で引込み思案の夫を齒痒がりながら嗾しかけた。

一度なぞ、彼に割當てられた磐割が惡くて、幾ら稼いでも、稼いでも、稼ぎの惡い事が幾月か續いた時なぞは、彼女は、ぷり〱怒つて、會社の役人共を糞味噌に罵つた揚句のはてには、それを何とも云はずに默つて聞いてゐる夫にかん〱に癇積を起して、罵り始めた。

『ほんとにお前さんたら、何處まで意氣地がないんだか分りやしな

い。あんな木ッ葉共にビクビクしてゐた日にや、こつちの鼻の下がひ上つちまはあねえ。お前さんだつて口があるんだから云ふべき事はどんどん云つたがいゝよ。口のない蝦蟆だつて夜になりやあピーピー位ゐ啼かあね。木ッ葉が怖くてお前さんが云へないんなら、私が行つて來るよ。こゝばかしお太陽様が照りやしまいし」

その時には流石に穏厚な彼も、顔を眞赤にして立ち上ると、いきなり、

「やかましいやい醜婦め。默つて引つ込んでろ」

と云ひながら、鐵のやうな握り拳で、頭と一つ其横すつ頬を撲りつけた。

「あ痛つ」

と叫ぶと、彼女は手もなく仰向けに顛倒して仕舞つた。彼女の唇からは、たらたらと血が流れ落ちた。彼は彼の息子のやうに背の高い頑丈な男で評判の力持ちだつた。

それでも強性張りの彼女は、見るみる腫れ上つて來た頬べたを兩手で押へながら、血走しつた眼で夫の方を睨み付けながら罵り續けた。

「卑怯者！　女なんぞ撲りやがつて……」

「何ッ」

と云ふと、も一つ鐵の拳が、電光の様に兩手で押へてる頬べたの上に飛んで來た。

「あ痛ッ」

と、云ふ叫びと一緒に、流石強性な彼女も今度は疊の上に、つつ伏して仕舞つた。それを見ると、彼は默つて、ぷいと外に飛び出して仕舞つた。彼女の頬べたはそれから半月位ゐ見事に腫れ上つて彼女を正眞正銘の醜婦にして仕舞つた。けれ共大體二人は仲の好い夫婦であつた。

佐多は、こんな性格の夫婦の間に生れ、その中に育つて來た。彼の高い背、頑丈な體格、それから素朴な中にほの見える優しい性格はこれを父から受繼ぎ、その戰鬪的な勇敢さや情熱は、その母の血から受繼いだのであつた。

明治四十年に、あの大暴動が足尾に起つた時には、彼は未だ小學校に通つてゐる十才の小供であつた。

彼は或る日の夜明方、まだ寢床の中にむぐつてゐる時、彼の家の前を非常に澤山な人達が、口々に何か物凄い事を叫びながら、疾風のやうに駈けつて行く物音を聞いた。

五三

彼はその物凄い音に吃驚りして寢床の上に刎ね起きると、不安な氣持に襲はれて、傍に寢てゐる母親に訊ねた。

「お母さん。今のは何の音だい」

「默つてお出で、何でもないよ」

けれ共、何でもないと云ふ母親の聲も、不安の色を帶びて、その耳は、何かを聞からとする様に澄まされてゐた。

彼は本能的に父親の寝床を見た。けれ共その寝床は藻抜けの殻になつて、何處にも姿は見えなかつた。彼は又母親に訊ねた。

『お父さんは何處に行つたんだい』

『お父さんはお仕事に行つたんだよ』

けれ共、彼には母の言葉が、どうも腑に落ちなかつた。彼の胸にはだん／＼不安が増して來るやうに思はれた。

其日は一日中、赤禿げた肌を露出して、突兀と聳え立つ嶮しい死の山に圍まれた足尾の山は、一種云ひ難い不安と騒々しい昂奮とに包まれて、何か知ら狂暴な空氣が渦巻いてゐた。いつも、毒々しい白煙を空中に吐いて、銅山の生き／＼した活動を象徴してゐる精煉の大煙突の煙はぴたりと止つて、死のやうな靜寂が物凄くそのあたりを蔽うてゐた。

彼の母は、その日一日中表の戸をぴたりと閉めて、家の前を、多くの坑夫達が罵り喚いて、疾風のやうに過ぎ去る度に、そつと戸の隙間から、不安と好奇心とがこんがらかつた樣な表情をして外を眺めた。そして彼が一緒に覗かうとすると、あつちに行つてお出でと叱り付けた。彼は其日は一歩も家の外に出る事を許されなかつた。彼の家は本山と通洞との眞中頃の路傍に建つてゐた。

父親は、その日の晝過ぎに、裏の方からこつそりと歸つて來て、腰掛けた儘、茶漬を搔つ込むと、其儘又ぷいと出て行つて仕舞つた。

その父の眼は、いつもとは違つて、ぎよろ／＼して、ちつとも落着かなかつた。そして飯を食ひながら、母親の耳元に何か囁いた。すると、母親は、如何にも痛快げに、

『いゝ氣味だよ。ほんとに。あんな奴は×されて仕舞へばいゝんだ』

と小聲で云ひながら、異樣な微笑を漏らして、父親の顔を見やつた。すると、父親は何か考へる樣子をしながら、

『でも、いざとなりや、いくら憎い野郎でも矢張り人情つて奴が出て來るからなあ』

と、しんみりした調子で云つた。

父親が出て行かうとすると、母親は後から、

『お前さん、どちを踏んぢやあ、いけないよ』

と、云つた。父親は一寸振り向いて、

『うむ、大丈夫だ』

と、何となく、ずるがしこい眼で母親の方を見ながら云つて出て行つた。

彼は、不安な裡にも、非常な好奇心に燃えて、何とかして一度家の外に出て見たいと思つて母親にせがんだけれ共、母親は頑として聽じなかつた。

『小供なんか外に出るもんぢやないよ。外は危險いんだから』

さう云ひながらも、母親自身は、一と時も靜つとしてゐられなくて、堪へず立ち上つては、表の戸の隙間から外を覗きに行つた。

その日、一日は、こんなにして息苦しい樣な不安の中に暮て行つ

た。そして、物凄い音が、絶えず聞えて來た。

『お母さん。何だらう。何が起つたんだらう』

と、彼は幾度も母親に訊ねた。

『あんまり、會社の奴がひどい事をするから、皆が怒つたんだよ』

と、母親は、小氣味がいゝやうに答へた。

『皆、何してるんだらう』

『何かやつてるのさ』

夜になると、其不安と物凄さとは段々に高潮に達して、遂々夜中頃になつてからは、荒涼たる足尾の谷には、ほんとに物凄い光景が展開された。

夜の十二時頃、誰かゞ、悲痛な聲で、

『火事だ、火事だ』

と、高く叫んで走せ去つた。すると間もなく、無數の群集が、

『火事だ、火事だ。長屋が火事だぞ』

と、口々に罵り喚きながら、通洞の方に向つて雪崩のやうに駈け出して行つた。

五四

彼は寢床の中にむぐつて、母親と二人で寢てゐたが、眼が冴え切つて、どうしても眠る事が出來なかつた。そして、ふつと外の叫び聲を聞くと、電氣にうたれたやうに跳ね起きて、

『お母さん火事だよ』

と、傍に寢てゐる母親を起した。その母親も眼を閉ぢてはゐたけれど、眠つてはゐなかつた。そして息子がさう云ふと、自分も鸚鵡返しに、

『火事の樣だね』

と云ひながら、刎ね起きた。

母子は、直ぐに裏戸を開けて外を見た。すると其瞬間、パッと眞赤な光が二人の顔を照した。

『火事だ、火事だ』

と、彼は思はず大聲で叫んだ。

渡良瀬の下方、通洞の方にあたつて、炎々たる赤い焔が、闇の中に、くつきりと燃え上つてゐた。そして其眞赤な焔は、彼の家のあたりまでもぼんやり赤い色に照し出してゐた。

その夜の光景は、全く異樣な物凄さと美しさとであつた。炎々と燃え上つた紅蓮の樣な焔の上方には、蜒々とした帶のやうな白煙が二千有餘尺の山間の、澄み切つた夜の美しい蒼空の中に、くつきりと棚曳いてゐた。そして、その晴れわたつた蒼空には星が降るやうにまたゝいてゐた。

死骸のやうな巖石の山骨を露出して深い谷の兩側に聳え立つ死の山は、限りなき靜かさの中に、薄ぼんやりと赤く照し出されて、足尾の谷は、全く地獄のやうな光景を呈したのであつた。そして其餘映は、遙か上空の積雲の方まで、うすぼんやりと照して、聲の絶えた大[illegible]

は、死せるが如く突立つてゐた。

そして、時々、群集の遠い叫喚の中に交つて、ダイナマイトの破裂する物凄い音が聞えて來た。

彼の父は、次の日の夜明方、又こつそりと裏口から歸つて來て、簡單に飯を搔つ込むと、暫時、母親と何かこそ〳〵話して、今度は、蒲團の中にむぐり込んで寢て仕舞つた。母は注意深く、彼の草鞋や何かを片附けて、その日は、何食はぬ顏をして針仕事を始めた。

表の戸は相變らず閉されて、彼は今日も外に出る事を許されなかつた。そして、母親はきびしく彼に云つた。

『お父さんの事を何も云ふんぢやないよ』

外は相變らず、不安で騷々しくつて、家の前の道は、不絕多くの人間が右往左往する音で滿されてゐた。

其日の午後になつてからは、家の前を駈けて行く者の口から、

『宇都宮の兵隊が、日光街道を越してやつて來るんだ』

と云ふ聲が、ちよい〳〵聞える樣になつた。そうして、さう云ふ聲が聞える度毎に、母親は仕事の手をやめて、聞き耳を立てた。

夕方から、夜になると、銅山の光景は全く一變して仕舞つて、何か恐しいものが刻々に迫り近づいて來るのを、凝つとして待つてゐるやうな、異樣な靜かさが四邊を占領して仕舞つた。嵐のやうな勢で、熱狂して騷ぎ廻つてゐた坑夫達は、穴の中にでも、むぐつて仕舞つた樣に姿を消して、家の前を通る者の氣配も、昨日とは、まるで異つて仕舞つた。そして、今度は、一日前の不安とは全然ちがつた、妙に、おどおどした樣な不安が、外にも内にも、憂鬱に蔽ひかぶさつて來たやうに思はれた。

そして其次の日の朝は又、全然新らしい騷々しさが足尾の谷を占領した。

軍隊が來た！　軍隊が來た！　騷いだ奴は片つ端から、ひつ縛られるぞ！

未明から大檢擧が始められた。

ギラ〳〵光る劍を鐵砲の先きにつけて肩に擔いだ兵隊が、後手に縛り上げられて珠數繫ぎにされた坑夫達を幾組も〳〵通洞の方に引つ立てゝ行くのが、戸の隙間から覗かれた。

殺氣た聲を立てながら、忙しく道を通る者は、銃を擔つた兵隊と、巡査と、引つ立てられて行く坑夫と、それから、二日間と云ふもの、何處にむぐつて居たか、まるつきり姿を見せなかつた會社の役員達ばかりであつた。

彼の父は、昨日一日寢て、今日になつてもまだ寢床の中にむぐつて起きなかつた。

そして、その日の晝頃、巡査と兵隊とが、不意に、裏と表の戸を蹴破つて、どか〳〵と入つて來ると、土足の儘、寢床に踏込んだ。

彼の父親は、見る間に、高手小手に縛り上げられて、有無を云はさず引つ立てられて行つた。

母親は、それを見ると、動顛して、何か叫ばうとしたけれ共、それは何を云ふ暇もない程、激しい敏速な出來事であつた。そして、縛り上げられた父親が、戸口を出やうとする時に、一寸振り返つて、何か云はうとした瞬間、劍付銃を肩に擔いだ一人の兵隊が、眼を怒らせながら、

『行けッ』

と、怒鳴りつけた嶮然たる聲丈けが、何時までも消えずに、家の中に殘つてゐる樣に思はれた。

それでも彼の父親は、引つ張られて一週間目に、ひどく憔悴して、ひよつこり家に歸つて來た。

この狂暴を極めた暴動は、全く組織もなければ訓練もない坑夫達が、會社の非道な搾取と壓迫に堪へ兼ねて、積りに積つた鬱憤を、一時に爆發させた暴動であつた。夫れは恰かも、空氣を極度に詰め込んだ風船玉が、空氣の壓力に堪へる事が出來ぬやうになつて、ひとりでに破裂するのと、何の變りもない爆發であつた。

虐げられ苦められて絶望に陷つてゐた坑夫達は、自分等のなす事が、どんな結果に陷るか等と云ふ事は考へる餘裕さへ持つてはゐなかつた。たゞ、其時に心の底から欲し且つ感じてゐた事は、怨み重なる會社をやつつけてゐると云ふ事と、やつつけたら、[illegible]れて、どんなに氣持がいゝだらう、と云ふ事丈であつた。

そして、その事丈けは、確然と欲し、確然と欲してゐたのである。

その證據には、その時の被告の一人は、坑夫長屋を燒いた事に對する、裁判長の次ぎの質問に對して、その氣持を明確に語つてゐる。

『何故、お前は、自分達の住むでゐる家までも燒いたのか。それでは、第一自分自身が困るではないか』

『誰でも知らぬ者はさう思ふのですが、なかなかあんな長屋があればこそ、足尾の樣なひどい山にも、欺かれて來る者があるので、いつそ長屋がなくなつて仕舞つたら、誰も來る者がなくなつて、ひどいめに逢はぬでも濟むと思つて燒いて仕舞ひました』

此、無學な坑夫の率直な氣持は、小さくしては、一つの工場に、大きくしては、一つの社會に、、、、、、、、させるに充分な、心理的條件である。

當時、足尾銅山の持主である古川家は先代の×××が死んで今の×××の代になつた時であつた。×××が足尾銅山に手をそめた時には、足尾は未だ微々たるものであつた。彼は何處の家の創業者もが然る如く、足尾を手に入れてからは、自分自身草鞋を穿いて、坑夫達と一緒に、骨身を碎いて働いた。彼は又、總ての創業者が然る如く、其創業時代には、多くの坑夫達に、成功の曉の、よい報酬を約束して、其骨身をけづらせた。そして、骨身をけづらせた結果、銅山の都[illegible]達となり、[illegible]の[illegible]は[illegible]に[illegible]されるやうになつた。さうなつて

眸には、昨日まで、自分と一緒の心算で働いてゐた坑夫達と、××××との間には、何時の間にか最早、千里も萬里もの距たりが出來てゐたのであつた。それでも未だ××××の代には流石に創業時代を忘れぬ温情が殘つてゐた。成功の曉の報酬を約束されながら骨身をけづつて古川の身代をつくり上げた坑夫達は、あとに取り殘されて、相變らずの坑夫生活で汗水垂らして働いてゐても、淳朴な彼等は一年一度、昔を忘れずに、足尾にやつて來る××××の、幾何かの酒代をお土産に戴いて、古川の徳を稱へてゐたのであつた。

けれ共、××××が死んで、×××××の代になれば、古川家は、もう立派な近代的資本主義を代表する古川王國である。坑夫等を、人間として取扱ふ事は資本主義讀本の何處にも書いてない。機械である。機械なら、人情も糞も必要はない。使ふ丈け使ひ、絞れる丈け絞つて、破損すれば、これを路傍に棄て去つて、又新しい機械を仕入れゝば夫れで結構である。

新らしく撰ばれて足尾の所長になつた南と云ふ男は、坑夫を機械として取扱ふ典型的な人間であつた。たゞ、彼にとつて都合の惡かつた事は、資本主義が坑夫を機械だと切角認定しても、坑夫は矢張り血の通つた人間だつた事である。

五六

それから幾年が過ぎ去つた後も、彼の父親は、どうかすると、一杯飲んだ時などに、その時の事を思ひ出しては、もう小學校を卒業して彼と一緒に働くやうになつた息子に話して聞かせた。

『あの時お前、おいらの方の大將も南つてえ先生だつたが、會社の方の大將も南つて奴だつたよ。南ばかりで北がねえんだから全く可怪しなもんだつたさ。

あの朝、未だ夜が明けるか明けねえうちに、皆酒に醉つ拂つて、あ奴の家に押掛けたんだが、いくら家の中を探しても見つからねえんだ。忠臣藏の討入り見てえなもんさ。それでど奴か氣の利いた奴が、

「出て來なけりや火をつけろ」

つて大きな聲で呶鳴つたら、野郎、遂々縁の下から、蒼白な面あして、土まみれの寢卷姿で、這ひ出して來やがつたんだ。それを見ると、皆ぶつ殺せつて騒いだんだが、から意久地のねえ野郎で、いつもは馬鹿に威張つてゐやがる癖に、土の上に膝まづいて、

「どんな要求でも肯くから生命丈は助けて異れつ」

て兩手を合して皆を拜みやがるんだ。そこになると、坑夫なんて奴あ又意久地のねえ程涙脆えもんだからなあ、遂々皆でいくらかぶつ叩いた切りよ。

その時、甘え事を考へついたのが病院の院長の奴よ。いつもから皆に惡まれてゐやがつたんだが、騒動になると、いきなり病院の屋根の上に、大きな白旗を、おつ立てちまいやがつたんだ。皆は病院もぶち壞す筈だつたんだが、ど奴かゞ、その白旗を見つけて、

「ありや俺達に降參したしるしだ――と云つたもんだから、降參した奴を、とつちめるのは日本人の恥だつて事になつて其儘さ、たあひもねえこつだつたよ』

彼の母は、父親が一杯機嫌でこんな話をする時には屹度思ひ出したやうに云つた。

『ほんとに、あの時の役人共と來た日にやあ面憎かつたよ。あの騒動の時に、あとの目標だつて皆の脊中に白墨で印をつけたつて云ふからねえ。前の日にや、どこにどう隠れたか姿も見せなかつた癖に、兵隊がやつて來たら皆のこく出しやばつて來やがつて、忠義面に皆を引つ張らせる巧風ばかりしてゐやがるんだもの。ほんとに癪にさわつたつて云つたら、ぶん撲つてやりたかつたよ』

彼の父親が落盤で横死した日には、彼も一緒に働いてゐたのであつたが、一寸用があつて事務所の方に行つてゐた、留守の間の出來事だつたので、幸運にも生命を助つたのであつた。落盤のあつた場所は、もう支柱が古くなつてゐる上に、盤が摺れて、性質のよくない裂目が這入つてゐるので、前から皆が危險だと云ひ合つてゐたところだつた。

彼の父はその朝、それを修繕するために、仕事にやつて來た時、その危險な狀態を見て、

『此奴は、いけねえなあ。うつかりした事をすると、やられるぞ』

と、仲間の二人に云つたのであつた。

彼が坑内の事務所で用を足してゐると、一人の坑夫が坑道を駆けつけて來て、

『大變だ、大變だ、落盤で三人やられた』

と叫んだ。彼は夫れを聞くと、何か知ら直覺的に豫感がして、

『誰だ〳〵』

と、叫んだ。すると、その坑夫は、ひよつと彼の顏を見ると、吃驚した顏をして叫んだ。

『やあ、大變だ、お前の親父がやられたんだ』

彼は、それを聞くと、暗い坑道を一散に駆け出した。そして、彼が父親の仕事場に駆けつけた時には、最早他の坑夫達が、いつぱいに集つて、必死になつて、大きな落盤の下に、ぺしやんこに壓しひしがれてゐる三人の無殘な死骸を引き出してゐる處であつた。

軈て三人の死體に、引き出されたが、夫れは見るも無殘な有樣で、頭は打砕かれ、顏は、、、、、、、、、、、、、、、、、、、、顏の中から飛び出してゐた。會社のお傭ひ巡査は、事務所の前で、上に莚の掛けられてゐる三つの死體を、一寸のぞいたばかりだつた。……

そして會社は、坑夫の方にも過失があると主張して、幾らの手當も出さなかつた。丁度その頃は、四十年の暴動のあつた後、未だ組合の出來ない前だつたので、それをどうする事も出來なかつた。

五七

此不幸な事件は、彼の母親を極度に悲歎させた。そして彼女の命は

を憎悪する念は、いやが上にも煽り立てられた。彼女は自分の息子に云つた。

『お前はいつか、お父さんの×をうつんだよ。』

母親のその言葉は、父の横死以來、深く自分達坑夫の運命に就て考へるやうになつた彼の心の中に、激しい刺激と鼓舞とを與へた。

こんなにしてゐる間に、何時の間にか又時勢が何となく變つて來だした。

大正六七年頃から、日本の社會を訪れて來た勞働運動の黎明は、銅山の好景氣と一緒に、勞働組合運動の事や、各所に起るストライキの事を、新聞紙上にのせて、深く山の奥に閉された足尾の町にも、新時代の動いてゐる空氣をどし／＼と輸入して來た。

そして、稼ぎ人の數は日に／＼増して、新しく來た連中は、あちこちで見聞して來た新智識を、そこいらに振りまいた。こんなにして足尾の坑夫達の間にも、新しい生き／＼した機運が生れ、あちこちで組合の話などもはずむ様になつて來た。そして皆の頭の中には、あの四十年の大暴動に對する憧憬れが、何と云ふ事はなしに閃き始めた。

彼は、毎日の新聞記事の中に、勞働運動の事が出てゐると、それを食ひ入る様に眺めた。

大正八年の春になつてから、ふとした動機で足尾一萬の坑夫を包含するやうな、勞働組合の組織運動が起つた。時期の來るを待ち構へてゐた坑夫達は、大旱に雲霓を望むが如く、組合の旗の下に集つて來た。彼は闘士として押し出して、組合の評議員になり、幹部の一人に擧げられた。年は若かつたけれ共、彼の人物は何時とはなしに皆から認められて、早くも父親のやうに皆から立てられてゐたのであつた。

氣の強い彼の母は、息子がさうなつて行くのを心の底から悦んだ。

そして彼女は息子を勵ました。

『愈々お父さんの×をとる時が來たんだよ。確りしなけりや駄目だよ』

けれ共、彼女の息子は、父親の×をとる代りに、其年の十一月終りには、その時に勃發した大騒擾に連坐して、早くも監獄の洗禮を受けさせられたのであつた。

四ケ月の未決生活から歸つて來た息子は、見違へるやうに變つて、以前の子供／＼した處がなくなつて、確りと落着た立派な勞働運動者になつてゐた。

實際彼は、四ケ月の未決生活が自分をどんなに變へたかと云ふ事を自分でも判然自覺してゐた。未だ監獄に這入る前までは、氣持丈は判然してゐても、勞働者と云ふものがどんなものだか、資本主義と云ふものがどんなものだか、何も分つてはゐなかつた。彼は監房の中に一人坐つて百二十日の間、差入れられた勞働問題に關する書物を讀み耽つた。讀んでは考へ、考へては讀み、それを又自分等の生活にあてはめて見れば、書物に書いてある事がしつくりと身に着いて來るやうに思はれた。出獄する時に、典獄は、いつもの儀禮的な態度で、改心すべ

き事を諷刺したが、その時には彼の心は岩の樣に固く勞働運動の上に結びつけられた。

『監獄は勞働運動の學校なり』と云ふ言葉はそつくり其儘彼に當てはまつた譯である。

　彼は、未決から出て來ると、非常に固い決心と努力とで、多くの殘された同志達と一緒に、爭議の後に荒れ切つてゐる組合を整理して、それを盛り立てる事に必死の努力を拂つた。

　彼が未決から出て來た頃には、世の中は又一段と變つてゐた。足尾の暴動に引き續いて日立鑛山、釜石鑛山にも暴動が起つて、多くの勞働運動者は監獄に投ぜられてゐた。日々の新聞紙は、日本の全社會を席捲しつゝある澎湃たる社會運動の出來事を、異常の緊張を以て報じてゐた。

　彼が忠雄と、知り合ひになつたのは、大正九年の秋に當時日本に組織されてゐた三つの鑛山の勞働組合が一緒に合同して、一つの坑夫組合を組織した時からであつた。忠雄は、その中の一つの組合の最高幹部であつた。

　そして、今忠雄と佐多とが、どんな關係にあるかは、讀者の既に知られる通りである。

五八

方に引返した。

　日はもうとつぷりと暮れて、晴れた空には、冷たい星がきら〳〵と輝いてゐた。月のない星夜の四邊は、暗い闇に包まれてゐるけれ共、その闇の下には、雪の野原が無限に廣がり續いて、靜かにほの白く夢のやうに浮いて見えた。寒さに馴れて來た彼には、風のないだ夜が、寧ろ暖かさを覺えさせるのであつた。

　彼は頭巾を外して、此靜な氣持のいゝ雪の夜を味ひ樂むやうに、氣持よく辷つて行く橇の上から、遠くを眺めやつた。彼は何となく誰かに話しかけたい樣な氣になつて、馭者台に、うづくまつた樣に腰掛けながら、馬を驅つてゐる老馭者に呼びかけた。

『おつさん。此雪は、何月頃になつたら消えるかね』

けれ共老馭者は何の返事もしなかつた。彼はふと馭者の耳の遠い事を忘れてゐたのに氣がついた。彼は自分で可笑しくなつて、くすく笑ひながら、今度は力いつぱいの聲で呶鳴つた。

『おい、おつさん此雪は何月頃になつたら消えるんだい』

　今度は、確に手應へがあつた。

『さうだねえ。皆とけるなあ五月だよ』

と、どつしりした重い聲で答へると、彼は又思ひ出したやうに鞭をあげて、馬の尻にあてた。雪野原の中にとほつてゐる[illegible]の光が前の方から、ぽつと、馬の足もとの雪道を明るく照しだしてゐた。何となく、人を[illegible]

生が和室に寂々てゐた。そして又何となく悄くさへあつた。

『何て愉快な氣持なんだらう』

彼は、始め頭の中でさう叫んだ。だが暫時たつと、今度は胸の中で叫んだ。

『だが俺は、何でこんなに愉快なんだらう』

けれ共、彼の胸の中には、急に其答が判然と出て來なかつた。胸から答は出て來なかつたけれ共、其代りに、彼の眼は無意識の間に其疑問に答へてゐた。彼の眼の中には、何時か知らぬ間に、今朝から彼の身邊に起つた光景が順々に浮び出てゐた。

彼が朝早く停車場の曲り角に待つてゐた時、マントの化物の様な女が近づいて來た。そして自分の前で立ち止ると、女の眼が頭巾の中から自分の顔を覗いた。自分も覗き返した。其瞬間、胸がちくりと刺された様に感じた。曾て見た事のない美しい眼が、凝と、魅惑する様に自分を眺めてゐた。そして自分の眼に出會すと、心持にこりと微笑した様に思はれた。橇に乘つてから、優しい澄んだ聲が氣持よく耳にひゞいた。それから、そこまで來ると、彼は、それから先の光景を見失つて仕舞つた。暫時く考へてから、彼は自分の眠つて仕舞つた事を思ひ出した。

『ちえつ、俺は何故眠つたりなんかしたんだらう。惜い事をしたもんだ』

彼の心は、如何にも殘念さうにさう叫んだ。それから、俺の家に行つて、それから又二人で電車に乘つて停車場に來たのだ。

『あゝあの夕陽に照された顔は何て綺麗だつたらう』

二人が夕陽に赤く照らされた顔を見合はして笑ひ合つた時の光景が眼の前に浮び出た時、彼は思はず聲を立てゝ叫んで仕舞つた。そして自分で夫れに氣が付くと、自分が可笑しくなつて、高い聲で笑つた。こゝまで來た時、彼の胸は、彼の愉快な氣持の原因を判然と答へた。

『なる程、俺が今日こんなに愉快なのは、多榮さんに會つたからだなあ。あんな美しいお孃さんが家を飛び出して、運動に加はるなんて、あり得る事か知らん。あんな美人と駈落なら何處まで行つてもいゝなあハ、、、、、』

彼が無邪氣に、ざつくばらんに、こんな考へに耽つてゐる間に、橇は何時の間にか家の前に止つたのであつた。

彼が橇から飛び降りて、家の中に這入つて行くと、忠雄は、夕飯を食ひ終つて爐端で鳥山と話をしてゐたところだつた。彼は佐多の這入つて來るのを見ると、

『やあ早かつたねえ。御苦勞様』

と、快活に云つてから、今度は、

『どうだい。駈落はうまく行つたかね』

と、ざつくばらんな調子で佐多を冷かした。

佐多は、忠雄の冷かしを聞くと、何の蟠りもなく快活に笑ひたがら、

『部落は大成功だつたが、僕は美人と一緒に橇に乗つたのは、生れて今日が始めてたんだから、何だか嬉しくつて駄目だ』

と、ほんとに嬉し相に云ひながら箸端に坐つた。日の暗い島田も、つい其軽い調子に釣り込まれて口を入れた。

『佐多さんも、北海道の山ん中で美人と一緒に橇に乗るたあ思はなかつたんべえ。様婦は大将でもなかなか嬉しいかねハ、、、』

『ハ、、、僕は女は駄目だよ。此夫の娘つ子だつて、僕の傍にや寄りつかないんだからなあ』

『さう云へば、佐多さんは餘り色つ気がねえやうだねえ』

『馬鹿にしてらあ。僕だつて若い人間だよ。色氣なんかうんとあるよ』

『そんだや、何だつて、そんねえ、色つ氣のねえ真面目な顔ばかりしてんだんべえ』

『ハ、、、そ奴あ、しやうがないよ。親父がこんな不愛嬌に生みつけたんだもの』

『ほんとに佐多さんと來たら、去年から來てんだけど、女の話なんどしねえんだからねえ』

……になる者があるたいがり……

『……姉さんが、自分から來てさうして云ふのに』

……夫れを聞くと……ながら答へた。

心配がいらたいよ』

『ハ、、、そねえに悲觀したもんぢやあねえ。佐多さんならつて娘つ子が幾らもゐるんだが、あんたが、餘りむづかしい顔はかりしてるから娘つ子が寄りつけねえんだ』

『ハ、、、どうだか分らんよ。ねえ内儀さん僕にでも惚れてがあるだらうか』

囲爐裡に坐つて、さつきから皆の話を面白さうに聞いてゐた、妻君は、笑ひながら、それに答へた。

『そりやあ、ありますよ。佐多さんの顔を一度でいゝから見てえつて娘つ子が、澤山來るんだものねえ』

『おやく。こ奴あ大變だ。今日は、美人と一緒に橇に乗つたお蔭で皆から騒りものにされるんだなあ。まあ、それより飯だ。いくら美人に惚れられても腹がへつちやあ駄目だからなあ』

皆は、又どつと一緒に笑つた。爐ばたは愉快な空氣に包まれて、薄暗い室も明るみわたる様に思はれた。

島田の妻君は、佐多の茶碗に飯を盛りながら、思ひ深げに忠雄に云つた。

『でもまあ、お嬢さんは、ほんとに惜ましいねえ。切角お金持の立派

『でも、それで親爺さんの埋坑に閉込められると云ふんだもの、私は不思議なんだか』

太郎は猶更ら腑に落ちぬ様な顔をして、さも殘り惜しさうに云つた。すると内田は、太郎の方を見ながら、揶揄ふやうに云つた。

『お前なら飛びついて行くだらう』

『そりや私だら飛びついて行くよ。お金持で男つ振がよくて、お父さんの埋坑まで助かるんだもの。行かない譯がないよお前さん』

『ハ、、、こ奴は、しやうのねえ奴だなあ。まるで惚氣喧嘩つて理が分られえんだから』

『大丈夫だよ。私たんかにや何處からも、そんないい婿さんは來ないからハ、、、』

『ハ、、、馬鹿め、貴樣の話ぢやねえ。嬢さんの話だよ』

『分つてるよ』

『こ奴は大變だ。とんだ惚氣喧嘩だ』

伍多は、飯を頬張りながら、冷かした。それで皆は又どつと笑つた。

でも、親切な太郎は、多榮子の事を思つて、晝飯をどうしやうの何を食べるか、のと、色々心配して惜ましがつた。

六〇

けれ共、太郎が惜ましがつた其多榮子は、中一日置いた日の朝九時頃には、早くも、たゞ一人橇に乘つて、降りしきる雪の中を彼女の家にやつて來たのであつた。

今朝早く起きて、やつと今台所で朝飯の仕度をしてゐた太郎は、思ひがけなくも、ひよつこりと多榮子の這入つて來るのを見ると、吃驚して入口の方に出て來た。彼女は、あはてゝ聲をかけた。

『まあ、こんなに早く』

『えゝ、まあ私、こんなに早く參りましたの。今朝早く家を出たものですから』

多榮子は、被つた頭巾を脱ぎながら、生き〳〵した聲で云つた。

『ほんとにお世話になりますねえ。未だ兄達は休んで居るのでしやうか』

『えゝ、また休んで居りますよ。夜が遅いものですからねえ。今起しましやう』

彼女はさう云ふと、二階に上つて行かうとした。すると多榮子は、あはてゝそれを止めた。

『いゝえ、いゝのですよ。私ちつとも急がないんですから、これから、暫時、こちらに御厄介になるんですもの。まあ夜が遅いのなら、ゆつくり休ませて置きましやう。私も爐端で温まりながら、ゆつくり休ませて戴きますわ』

多榮子は、快活にさう云ふと、靴とマントを脱いで、上にあがると爐端に坐つた。太郎もそれに釣り込まれて、上にあがると爐端に坐つ

て、

『まあ大變な雪降りで、さぞお寒かつたでしやう』

と、云ひながら、今やつと燃えついた爐の火を掻き立てた。そして室の隅に未だ蒲團を頭から被つて寢てゐる夫に氣が付くと、又あはてゝ夫れを起さうとした。

『ほんとにしやうがない。未だ寢てるんですよ』

けれ共、多榮子は又あはてゝ夫れを止めた。

『ほんとに、ほんとに、どうぞ私にかまはないで下さい。そんなにされると、却つて私はお邪魔し惡いんですから。私も今日からは、皆さんのお仲間ですもの。台所でも何でも致しますわ。朝御飯の仕度のお加勢をしましやうか』

『まあ、お孃さん、そんな事を』

と、妻君は、飽氣にとられたやうに、多榮子の方を見守りながら云つた。多榮子は夫れを見ると、晴れやかに笑ひながら、氣輕に、

『奥さん。もうどうぞ私の事を、お孃さんなどと云はないで下さい。私、今日からは、もうお孃さんでも何でもないのですもの。たゞの孃の多榮子ですわ』

『おやまあ、それぢやあ、何とお呼びしましやう。それに私の事を、奥さんだなど……』

[illegible]して[illegible]の隅には[illegible]を覗いてる風がとれて、氣安い親しみが漲ひ始めたやうに思はれた。多榮子には夫れが何よりも嬉しく思はれた。彼女は又氣輕に云つた。

『私の事は、お多榮さんでも、多榮子さんでも結構ですわ。そして奥さんの事は何とお呼びしましやうねえ』

『オホヽヽ、私の事なんぞ、嬶でもお内儀さんでも、何でもかまひませんわ。そしてお孃さん……はあの、お家の方は、もう何も彼もお片附きになつたんですか』

『えゝ、えゝ、もう何も彼も。そして今日からは、ほんとに自由に、貴女方のお仲間入りが出來るやうになつたのですわ。今朝家を出る時、父にも母にも、ちやんとその事を書いて置いて來ました。』

『まあ、ほんとうに……』

妻君は、たゞ何か知ら痛ましげな顏をして多榮子の顏を眺めるばかりだつた。

皆は、妻君が心配して起すまでの事はなかつた。二階でも下でも、二人の話聲に皆眼をさまして、一時に起きて仕舞つた。隅に寢てゐた夫は、二人の話に吃驚して起き上ると、妻君から、

『まあ、あんたはほんとに寢坊だねえ』

と叱られて、狼狽てゝ蒲團を疊んだ。

普段から下を覗いて、多榮子の聲を[illegible]つけた佐吉は、

『多榮子さんが來た』

と、[illegible]の方に叫んだ。

日本人ヂョージ・サルマナザアル

大佛次郎

一

ヂョーヂ・サルマナザアルを、この名前の奇妙な重なり工合が人に考へさせるやうに父母のいづれかを英國人に持つた印度人のやうに取ると大間違ひである。當人の語るとほりならば、彼は日本皇帝に臣屬する臺灣島民である。また、事實の上に於て、このサル マナザアル氏は英國倫敦で「臺灣誌」を出版して、佛蘭西譯獨逸譯が直ぐと後を追驅けて出たほどの成功をした。西暦千七百四年のことである。

この年號は僕等を吃驚させずにはゐない。西暦千七百四年は僕等の勘定の仕方に依れば神武紀元二千三百六十四年で、犬公方と云はれた綱吉の治政の寶永元年にあたる。まるでお伽話のやうに遠く思はれる年代である。無論日本は當時嚴重に鎖國してゐた。この年代に日本人の中で歐羅巴に渡つてゐたのみか羅典語で堂々たる著述をして出版した者があつたと云ふのは、確かに驚いていゝことである。

倫敦で出版された「臺灣誌」は羅典語の原稿からオスワルドと云ふ人が飜譯したやうに云つてあるが、原作者サルマナザアルは實際に倫敦にゐて社交界の寵兒になつてゐた。この本が捧げられた倫敦の大僧正ヘンリ・コンプトンが、基督教に改宗した此の日本人を可愛がつてくれたばかりでなく、どの客間も爭つてこの珍らしい異邦人を迎へ、各地の大學の地理學教室ではサルマナザアルを招いて講演を依頼したのである。サルマナザアルも自筆の回想錄の中に當時自分がどんなにいそがしかつたかを書いてゐる。人氣が、どの邊まで馬鹿げて來たものかは、千七百十一年三月十六日金曜日の「スペクテエター」に掲げられた次の廣告が證明してゐると云つてよい。

ヘイアケツト劇場、四月一日より歌劇「アトルスの悸虜」を上演。シエステスが我が子の肉を喰らふ場面は、最近臺灣より來朝せる有名なるサルマナザアル氏特に上演指揮……

記錄はないが日本人サルマナザアルは實際に此の人肉を喰ふ場面の上演を指揮したものであらうか？　そして、また、觀客はその迫眞の場面を見るために小屋へ殺到したものであらう。

二

さて、その、サルマナザアル氏の名著「臺灣誌」、原の題名とほり飜譯すれば「日本皇帝に臣屬する一島嶼、臺灣の、歴史的並びに地理的記述」のことである。千七百四年に初版を出したものであるが、この再版には初版本に比して「進歩」のあとが認められ、加ふるに卷頭に初版本になかつた「臺灣の地圖」が掲げられてゐる。殊に初版本が、純粹の意味の「臺灣の記述」に入る前に、サルマナザアルの渡來記事並びに基督教に改宗の由來、殊に、歐羅巴各地に於けるえすいた派僧侶とサルマナザアルの宗門上の討論（えすいた派は英國教會の敎敵である）をくどく書いて前半を埋めてゐるのに比べて、訂正せられた再版本は幾分かかう云ふ宗教的な主張を削除し、「臺灣の記述」に力を入れてゐるのは、訂正が、學述的に行はれたものとして敬意を表してもよささうなものであるが、サルマナザアルの「臺灣誌」の特徴は、初版本によりよく現れてゐるのである。

讀者は先づ、第一章を讀んで臺灣島の位置を知る。

臺灣島は、日本の北部、二百リーグのところにある。

素張らしい自賛だ。臺灣人サルマナザアルがかう云ふのだ。英國の讀者に残された途は感心することだけである。

「臺灣は、土人の言葉では、ガト・アヴイアと稱へられる。ガトは、美しいと云ふことで、アヴイアは島を指す。支那人はパカンドオ島と云つてゐる。亞細亞の島々を通じて最も美しく樂しい島とされた位置はよし、氣候は良し、土地は豐沃で、川流の水利はよく、泉は涌き、金も銀も到るところから出る、殊にこの島には、ほかの島では見られない良いことが悉くあると同時に、ほかの島で語るやうな短所もまた漏れなくそなはつてゐるのである。」

これが日本の本土の北にある臺灣島なのだ。

いそがう、僕等を驚ろかせるものは、たゞ、この臺灣人サルマナザアル君の創造力の素張らしさだ。讀者は、支那から渡つて來たメエリアンダノオと云ふ男が如何にして日本に革命を起して成功したかを見る。その男が作つた法制が詳細に說明せられるかと思ふと、次いでこの島の男女の風俗、冠婚葬祭等の民俗にわたつて詳しく知る。凡そ三百頁の嘘か、その最後の傑作である異形の「臺灣文字のアルフワベット」の圖表とともに絵入りで展開されるのだ。この臺灣文字は、羅馬字のアルフワベットと一々對照してあるのみか、これを言葉に組合せて、一々英譯を附けてある。更にサルマナザアルは、モーゼの十戒を臺灣語の文章に譯して讀者の參考に掲げてゐる。

（一つの國語を組織するのがどんなに難かしいことか、信じられない方はためしにやつて御覧なさい。基本の文字だけでも、混同する心配のない變つた形で數を揃へられますか？　すくなくともこれは、弘法大師だけの頭腦と根氣の要る仕事です）。

我がサルマナザアル君は、これをやつて成功した。

「天にまします我等の父よ」と云ふのは、「アミイ・ポルニオ・ダン・チン・オルニオ・ヴイエイ」と臺灣なら云ふのだと云ふ。ポルニオは父を意味する。そこで「全能の父を信ず」と云ふ文章にも「ジエル・ノスキオン・チン・パゴット・バルハニアン・ポルニオ」と、同じ言葉が入る。これは當然のことには違ひない。更に同人の説くところに依れば、日本人は初め支那から文字を移入して使つてゐたが、臺灣文字が簡單で便利なのを知つてから自然とこれを用ひるようになり今では支那の文字を知らない者の方が多いくらゐに、臺灣文字が一般に普及して終つた。けれども、臺灣人と日本人とでは同じ文字を使つてゐても發音がいろいろの場合で違ふからと云つて、その異同を實例を擧げて懇切に説明してゐるのである。何ともこれも畏入つた實證的態度である。嘘も、かうなるとお筆先の壯嚴さを帶びて來る。日本人が神々の怒りをなだめるために一萬人の子供を生贄に捧げると説き、また土人が熱病を癒やす方法が炎天下に精一杯に二哩乃至三哩を力走して汗を取ることにあると云はれても、千七百年代の倫敦人と一緒に、「成程」と頷きたくなることである。

三

同時代の人で有名なサミユエル・ジョンソンは、「あなたの知つてゐる一番いゝ人は？」と訊かれた時デョージ・サルマナザアルの名を擧げた。

この稀代の詐欺師の本名は、遂に世に判つて居ない、彼は自ら遺した回想錄の中に、サルマナザアルの名が昔のアッシリア國王の名から思ひ付いたものだと書いてあるだけである。彼の經歴についてもまた、この回想錄に掲げてある以上に知ることは出來ない。回想錄は死後に出版せられたものである。

生れたのは千六百七十九年頃らしい。父母は佛蘭西人で、佛蘭西も南方だと云つてゐる。六才の時から舊教の坊さまの學校へ入つて、こゝで羅典語を習つた。これが後の役に立つたわけである。が、神學の講義を聞くのが窮屈で、都會へ出ることを志して學校を退學し、家庭教師を勤めるようになつた。間もなくこれも永續しないで、たゞ自分を偉いものに見せたい性癖をあとに殘した。スタンダールの「赤と黒」の主人公ジュリアンと同じ途を踏んだのである。この男は家へ歸りもせず、また母親に仕送りを頼むこともせず、どこまでも自分の力で衣食しようとした。その結果、自分が信心から求めて貧しい生活をしてゐるやうに僞つて世間態を飾つた。愛蘭土生れの神學生だが、信仰のために故郷を去り羅馬へ順禮して行く途中だと云ふのである。やがて、これをもつともらしく見せるために、寺から順禮の衣裳を盜み出して旅へ出た。ちよつと日本の天一坊のスタートを忍び合させる話である。

この若い行脚僧は、順禮の衣裳のほかに語學を身分を隠す方便に用ひた。道中では、習ひ覺えた羅典語だけを使つて佛蘭西語を決して出さなかつた。かうして道中で逢ふ人たちが、皆自分を實際に愛蘭土人

が通ひ始めたやうに思はれた。[illegible]子には夫れが何より[illegible]

[illegible]云つた。[illegible]さんでも結構ですわ。そし

何でもかまひま

彼もお片

[illegible]

[illegible]

[illegible]の[illegible]があつた[illegible]

れを[illegible]つた[illegible]

た[illegible]家に[illegible]つて[illegible]

れて、まだ十六やそこらの[illegible]があつたからであらう。[illegible]へ行つて見ると、[illegible]

たうも、この[illegible]があつたからであらう。そこで、自然とまたサルマナザアルの[illegible]

と[illegible]に[illegible]してゐた。[illegible]から[illegible]和蘭陀附近を放浪したのである。

[illegible]けられた。[illegible]から[illegible]マナザアルは、[illegible]土人だと云ふのを[illegible]めて、

この[illegible]の[illegible]にするマナザアルは、[illegible]日本のことは[illegible]の

[illegible]つと[illegible]の[illegible]に[illegible]することを[illegible]いた。

[illegible]の[illegible]がたつた[illegible]一[illegible]してゐたし、[illegible]

[illegible]ついた。これ

[illegible]この[illegible]もないわけだつた。これ

[illegible]の[illegible]。この[illegible]の[illegible]日本人だと云ふ[illegible]

から、[illegible]、ブラバント、フランドルの各地方へ、日本人だと云ふ[illegible]

[illegible]風の形ならしいほろを着た若者が一人見受けられることになつた。

言葉は、意味のわからない異様な發音のものゝほかに、羅典語をよく

喋るのである。ランドオでは怪しまれて牢屋で夜をあかした。やがて

[illegible]

[illegible]に[illegible]

[illegible]した。[illegible]

[illegible]和蘭陀の軍隊へ志願した。[illegible]

[illegible]とカフエを手[illegible]ふようにして

云[illegible]

ナザアル[illegible]

を[illegible]へるように[illegible]

發明する」工夫を考へ始めるようになつた。

四

その[illegible]に、日本の[illegible]一[illegible]に[illegible]する[illegible]、ブーシェ[illegible]

リス、[illegible]の[illegible]い[illegible]者に[illegible]ける[illegible]しき[illegible]

う云ふ[illegible]事件のプログラムにはゐなくてはならな[illegible]

來た。スコツトランドの軍隊に附いてゐたウイリヤム・イ[illegible]

牧師である。この坊さまは、その時分の軍隊に附いて[illegible]

うと云ふひとだから、どうせ、したゝか者である。これは、

まが後にやつたことでもわかるのだが、役者としてはサルマナ[illegible]

の[illegible]上だつた。

イネスは、サルマナザアルと云ふ日本人が[illegible]

あるの[illegible]

[illegible]

た。この案間はうやむやに終つたが餘人は知らずイネスの眼力は晦まされない。『一度ゆつくり話して見ようぢやないか、わからないところは敎へてあげるから、』かう云つて、ほかに誰れもゐない自分の宿所へサルマナザルを連れ込んだ。

サルマナザアルは最初からこの男が怖ろしかつたと告白してゐる。イネスの計畫は、この日本人の化の皮を剝がうと云ふのだ。優しくもてなしながら、罠を掛けて、キケロの文章のあるくだりをサルマナザアルの所謂日本文で書かせてから、感心したやうに見せて取上げて置いてまた別の文章を書かせて見た。この試驗を無事に通るまでにサルマナザアルの日本文字はまだ用意が出來てゐない。始めて、狼狽の色を示した時、イネスは、

『そんなことぢや駄目だぜ。』

と本性を見せて冷笑した。

サルマナザアルは昻奮して涙ぐむだ。イネスは優しくこれを慰めてやつた。世間には默つてゐてやるから心配は要らない。洗禮も俺れがしてお前を信者にしてやる。お前はこれまでどほり日本人になつてゐる方が、お前の爲だらう。しかし日本のことは大分世間で知つてゐるから看破される危險がある。まだ世間で知らない臺灣人だと云ふことにした方がいゝ。臺灣が日本の内だと云へばそれで濟む話だ。と云ふのである。

サルマナザアルはこの男に負けた。しかし負けたのがいゝことだつたやうにも考へられた。たゞ、困つたのに、に魚肉をなまで食ふ習慣を附けることである。間もなく、の效能が見えて來た。魚肉だけではなく、木の皮草の根も、むしやと喰へるやうに成つた。この食物の激變が腦細胞の組織をのかも知れない。浮浪兒サルマナザアルの驚嘆すべき創造が間始まつた。イネスを神父として改宗した異邦人ヂョージ・サルアルが倫敦の客となり、「臺灣誌」の著述で洛陽の紙價を高からのは、それから間もないことだつた。

サルマナザアルも、嬉しかつた。たゞ自分の皮膚の色が白いつたが、これも臺灣でも黑いのは外へ出て働く者だけで、いつゝゐて日蔭や地下室にゐられる者は別段歐羅巴人と違はないのだとた。また自分の素行から人に非難されないやうに努めて謹嚴に身をした。

彼の回想錄はこの苦心を物語つてゐる。

『隣りの人が見て自分が仕事に勵んでゐると見えるやうに、私は殆ど夜中書齋に灯をともしばなしにして置いた。眠るのも寢台へ登らずに窮屈を忍んで椅子の上で睡つた。寢台の仕度をしてくれる者が、そんなに睡らないでよく平氣にしてゐらつしやると驚いてゐたくらゐだつた。』

と見るらしいことに不思議な悦びを感じたやうに見える。街道筋にはこの子供らしい悦びのほかに、若いサルマナザアルが始めて知る悦楽の數々があつた。旅は、決して最初考へたやうに苦勞なものではなくなつた。一度母の家に戻つて、獨逸にゐる父親のところへ行くように云はれて、まだ十六やそこらの若者が平氣で、新しく、この長途の旅へ出たのも、この經驗があつたからであらう。獨逸へ行つて見ると、父親は豫想以上に窮迫してゐた。そこで、自然とまたサルマナザアルの乞食行脚が續けられた。獨逸から蘭和陀附近を放浪したのである。

この放浪の間にサルマナザアルは、愛蘭土人だと云ふのを歇めて、もつと遠い東方の人間に化けることを思ひ附いた。日本のことは舊の學校の先生達が耶蘇會の人々だつたので幾分か聞いて覺えてゐたし、一般の世間は日本と云ふ國がどの方角にあるかも知らないのだ。サルマナザアルの名はこの時分考へ出したものであらう。旅券は手垢で汚れて名前も消えてゐたので、この方の不都合もないわけだつた。これから、獨逸、ブラバント、フランドルの各地方へ、日本人だと云ふ觸[illegible]風の汚ならしいぼろを着た若者が一人見受けられることになつた。言葉は、意味のわからない異様な發音のものゝほかに、羅典語をよく喋るのである。ランドオでは怪しまれて牢屋で夜をあかした。やがて[illegible]

くれたが、これもうまく行かず再たび放浪を始めた。

その内に、幸運もまた、再たび廻つて來た。サルマナザアルはメックレンブルグ公の聯隊へ日本人サルマナザアルとして加はることになつた。聯隊の者は主にルーテル派の新教徒だつたので、サルマナザアルもこの新しい教義を知ることになつた。兵士達は「日本の歌」だと云ふ意味のわからない歌をサルマナザアルが歌ふのを聞いた。サルマナザアルもまた「この間の歌」と註文されると同じ音の同じ節のものを歌へるように練習を積んだ。そんなことから、「日本の文字や言葉を發明する」工夫を考へ始めるようになつた。

四

その内に、日本の天一坊に對する山内伊賀亮、プーシュキンの「ボリス、ゴドノフ」の若い僭稱者に於ける美しきオルガ姫のやうな、かう云ふ劇的事件のプログラムにはゐなくてはならない介添役が現れて來た。スコットランドの聯隊に附いてゐたウイリヤム・イネスと云ふ牧師である。この坊さまは、その時分の軍隊に附いて外國へ來てゐようと云ふひとだから、どうせ、したゝか者である。これは、この坊さまが後にやつたことでもわかるのだが、役者としてはサルマナザアルの一枚上だつた

[illegible]

た。この喧嘩はうやむやに終つたが餘人は知らずイネスの眼力は晦まされない。『一度ゆつくり話して見ようぢやないか、わからないところは教へてあげるから。』かう云つて、ほかに誰れもゐない自分の宿所へサルマナザルを連れ込んだ。

サルマナザアルは最初からこの男が怖ろしかつたと告白してゐる。

イネスの計畫は、この日本人の化の皮を剝がうと云ふのだ。優しくもてなしながら、罠を掛けて、キケロの文章のあるくだりをサルマナザアルの所謂日本文で書かせてから、感心したやうに見せて取上げて置いてまた別の文章を書かせて見た。この試驗を無事に通るまでにサルマナザアルの日本文字はまだ用意が出來てゐない。始めて、狼狽の色を示した時、イネスは、

『そんなことぢや駄目だぜ。』

と本性を見せて冷笑した。

サルマナザアルは昂奮して涙ぐむだ。イネスは優しくこれを慰めてやつた。世間には默つてゐてやるから心配は要らない。洗禮も俺れがしこお前を信者にしてやる。お前はこれまでどほり日本人になつてゐる方が、お前の爲だらう。しかし日本のことは大分世間で知つてゐるから看破される危險がある。まだ世間で知らない臺灣人だと云ふことにした方がいゝ。臺灣が日本の內だと云へばそれで濟む話だ。と云ふのである。

サルマナザアルはこの男に負けた。しかし負けたのがいゝことだつたやうにも考へられた。たゞ、困つたのは、臺灣人に見せかけるために魚肉をなまで食ふ習慣を附けることである。間もなくこれにも[illegible]の效能が見えて來た。魚肉だけではなく、木の皮草の根も、むしやむしやと喰へるやうに成つた。この食物の激變が腦細胞の組織を變へたのかも知れない。浮浪兒サルマナザアルの驚嘆すべき創造が間もなく始まつた。イネスを神父として改宗した異邦人ヂョージ・サルマザナアルが倫敦の客となり、『臺灣誌』の著述で洛陽の紙價を高からしめたのは、それから間もないことだつた。

サルマナザアルも、嬉しかつた。たゞ自分の皮膚の色が白いのに困つたが、これも臺灣でも黑いのは外へ出て働く者だけで、いつも家にゐて日蔭や地下室にゐられる者は別段歐羅巴人と違はないのだと云つた。また自分の素行から人に非難されないやうに努めて謹愼に身を持した。

彼の回想錄はこの苦心を物語つてゐる。

『隣りの人が見て自分が仕事に勵んでゐると見えるやうに、私は殆ど夜中書齋に灯をともしばなしにして置いた。眠るのも寢台へ登らずに窮屈を忍んで椅子の上で睡つた。寢台の仕度をしてくれる者が、そんなに眠らないでよく平氣にしてゐらつしやると驚いてゐたくらゐだつた。』

ウイリアム・イネスには、異教徒を改宗させた手柄のほかに、金儲けを目標にしてゐた。「臺灣誌」を二ケ月間でまとめろと云つたのもこの男である。材料を提供したのもこの男である。段々と、サルマナザアルの化の皮が剝げて來たのを見て、素迅やく離れたのもこの男である。

しかし、サルマナザアルは、その時はもう一本立で歩けた。

不思議なくらゐ彼は勇敢になつてゐた。

「臺灣誌」が眞赤な嘘だと云つて非難した論敵が現れると進んで立會演説をして公衆の批判に問ふまでの度胸が出てゐた。この公開の討論でサルマナザアルは勝つた。大衆はいつの時代にもチョージ・サルマナザアルに味方するであらう。サルマナザアルはこの成功に感激した。今日の自分が苦しい放浪時代から自分の目標になつてゐたやうに感ぜられる。筆が小說の領分に一歩入るのを許して貰へるならば、時には自分が書いたやうな言葉を使ひ、風俗習慣もそのとほりな美しい島がひろい海のどこかに有るやうにも空想出來たものに違ひない。サルマナザアルが同じ本の再版を促されて訂正をする良心を持つたと云ふのも、自分の夢想の美しい島を、誰れの爲でもなく自分の爲に、もつと現實のものに近く完成しようとしたのではなかつたらうか？

出版の利益はイネスがさらつて行つた。サルマナザアルは名聲に比例して困窮した。そして、窮乏と云ふものは、人に實質がそなはつてゐても世間の目に價値以下に沈めるものだ。サルマナザアルの金銭も[illegible]相手にする者もすくなくなつた。最後にどん詰りまで落ちてランカシア騎兵聯隊の世話をやつた。聯隊の士官が、馬鹿にして「チョージ・サルマナザアル卿」とわざと敬語を附けて呼ぶことにした。不遇なサルマナザアルは、これまで悅んでゐた、自分が臺灣の名族の出だからこれだけの敬意を示して貰ふのは當然だと口外したくらゐである。後にこのことを彼は一道化者の帽子の羽根が欲しかつたのだ』と、悔恨をこめて告白してゐる。まつたく、聯隊中のいゝ玩具になつて、自分で知らずに悅んでゐたのだ。目があいて來るほど、サルマナザアルの生活は不幸なものになつて行つた。

聯隊を捨てゝ倫敦に戾つてから、いよく苦しい日が續いた。イネスと違つて情深い坊さま達の慈悲で僅かに命をつないでゐる時分もあつた。再たび神學を學ばうと志したのはその頃のことである。その後は駈けずり廻つて、下受け仕事を探しては、昔あの素張らしい著述をした立派な腕を原稿稼ぎに驅使した。皮肉な運命はボウエンの「地理全書」の下働きをしてゐる中にサルマナザアルに「臺灣」のくだりを書くようにさせた。

サルマナザアルはペンを取り上げた。多分は悲しい目付をして書いたものであらう。もとサルマナザアルと云ふ臺灣人を自稱する者の臺灣に關する著述があるが、あれは一部の爲にする人間たちがこの若者の名譽慾を煽つて僞作せしめたもので、決して取るに足りないものだと[illegible]

にしたカンヂヂウスの著書を紹介して批評してゐる。

『カンヂヂウスは臺灣へ行つたことがあると云はれてゐるし、この地のことについて特別に書いたものはこの人のもの以外にない。ところで嚴密に吟味して見ると、これも彼の自稱臺灣人と同樣に、どうも信頼し難いやうな節があるのは遺憾である。』

サルマナザアルの遺言書がある。

『私が何時どこで斃れようとも、許される限り死體を埋めないで捨てて置いて貰ひたい。その後に共同墓地へ送つて隅の方へ埋めてください。お上の扶助で生きてゐた人間として死ぬることであつて見れば、そのとほりの扱ひで充分なのだ。極く粗末に金を費はないでやつてください。後生だから棺などは使はないで貰ひたい。安いありあはせ物で簡單に、蓋も被布も要らない、土をかぶせてくれゝばそれだけで結構なのだ。』

から云ふ意味を述べたあとに自分の若氣のあやまちを一々懺悔してゐる。ところで、「地學全書」で自分の非を暗に認めながら、ついでにカンヂヂウスの記述にまで餘計な非難を向けたと同じことで、この遺言に於ても、何となく、芝居がかつてゐる感じが普通あるべきいたましさを削いでゐる。疲れてもヂヨージ・サルマナザアルはそれ以外の何者でもなかつた。神樣も不幸なこの男の魂を憫んで、すぐとほんものゝ日本の臺灣の空へ送つてやりなすつたことだらうと自分は思ふのである。

政友民政黨首後繼者問題

政友民政兩黨首の首のすげかへ

麻生久

一

一時、日本の政界も、二大政黨對立時代出現の形勢を示したのであつたが、最近に至つて此形勢は、俄然急轉逆轉して、極端なる小黨分立の時代を出現せんとする形勢を示すに至つた。過ぐる二月の總選擧に於て、極端なる干渉も時代の波には勝てず、政友會は遂に議會に絶對多數を占むるを得ず、臨時議會に於て危機に瀕し遂に鈴木内相の辭職問題を惹起し、内閣改造問題に逢着するに至つた。斯かる危機の間にあつて、田中首相の黨狀を無視した人事行政は黨と内閣との間を極端に阻隔し、ために政友會は分裂の危機に瀕する如くに思はれた。突如たる勝田文相の任命、殊に久原の入閣に、これにからんで所謂優詔問題を惹起し、水野文相の辭職となり、政友會の元老にして策士を以て鳴る小泉三申の田中首相に對する愛憎づかしとなり脱黨となつた。

此間にあつて、三土藏相の問題あり中橋商相の問題あり、政友會は將に内に爆彈をひそめて噴火山上に居するの狀態であるが、たゞ、然りたゞ政權を掌握してゐると云ふ事の一事を以て、今日に至るも、小泉三申の黨外に虎視耽々たるを除いて、僅かに崩壞前の結束を保つてゐる狀態である。

此秋にあたつて、表面平靜を保つて結束せる如く思はれた民政黨は突如として大崩壞を開始したのである。床次氏の脱黨は靑天の霹靂の如く朝野を驚愕せしめ、其後小康を保つ如く思はれた民政黨は今や更に第二回の大動搖を惹起して、將に四分五裂に陷らんとする狀態である。

舊憲政會と、舊政友本黨とが合同して、所謂彼等の新黨たる民政黨

を創立して僅かに一年有餘、二つが合して一となれる其一は、今や數個の再分裂を行ひつゝある有樣であつて、人をして轉た、政界の事の今日を以て明日をはかり難きの念を今更の如く感ぜしめずにはおかないのである。

民政黨は、其黨狀から推すれば、最近、政友會の惡風評に乘じ、あらゆる選擧に於て好成績を示しつゝあつたのであつた。過ぐる二月の總選擧に於て然り、政友會內閣の極端なる干渉の中に立つて、野黨としては充分なる好成績を擧げた。東京府會議員の選擧に於ては、長年に亘る政友會の勢力をくつがへして絕對多數を占め得たのである。其他の地方に於ける選擧に見るも、最近遙かに政友會よりも好成績を示しつゝあつたのである。

此形勢を以てすれば、たとへ來るべき冬の議會に於て、解散に當面するも其奮闘如何に依つては、遙かに政友會を拔くべき形勢を見る事が出來た筈である。然るに、其時を待つに至らずして、自分から崩壞し去つた。

床次氏の脫黨、其後の崩壞、卽ち民政黨を土崩瓦解せしめつゝある原因は何處にあるか、個人的な勢力爭ひ、個人的な野心、それ等の交錯は勿論原因であるに相違ない。併しながら、夫れ等よりも、もつと根本的な原因は、民政黨が春の臨時議會を中心にして、巧みに……解散を堵せすして……政友會から政權をもぎ取る事が出來なかつたからである。最早今日の狀態に於て、民政にせよ政友にせよ、政權を失ひ、當分これを取る見込みの立たないとなつた曉に於ては、黨の結束は寸時もこれを保つは不可能事である。

この一點は、今日、政友會が、內部に幾多分裂の危機を孕みながら尙ほ結束を保てる所以であり、民政黨が選擧に於て前途に優勢を望みながら眼前に瓦解する所以である。若し、臨時議會當時に於て民政黨が政友會より政權を爭奪して、今日政友會が野にあるならば、土崩瓦解の運命は、民政黨の上に來らずして政友會の上に來つた事は火を睹るよりも明かな事であつたに相違ない。

政友會のあの不人氣、其續出せる失政、加ふるに議會に於ける不利な地位、之れに對して民政黨は何故に政友會內閣を倒壞して、政權を奪取し得なかつたのであるか。

其原因は多々あるであらうが、第一資金の缺乏第二鬪爭力の缺乏、之れである。民政黨は第一鬪爭力が缺乏してゐる。第二に資金が缺乏してゐる。政府の切り崩しを恐れて所屬議員を鑵詰にして箱根に送つた。如何に彼等が鬪爭力に缺乏してゐるかの何よりの證據である。彼等は極端に解散を恐れてゐる。何故ならば金がないからである。彼等は一面政友會よりも時代に順應して一般から好評を以て迎へられつゝあるのであるけれ共、所詮據つて立つところは金である。金なくしては寸時も立ち行く事は出來ない。其信念と政策とを以て勇敢に戰ふ事は不可能事である。金を以て一切とする點政友會と毫も異るところはない。

要するに、黨を結束し維持して行くためには政權が必要である。政權を奪取するためには闘爭力と金とが必要である。而して民政黨を代表する濱口氏は、其健康の弱い點もあるであらうが、野生的な闘爭力を有しない。そして金に依つて立つ既成政黨を維持して行くためには餘りに人格者過ぎて金が出來ない。即ち政權を取り得べくして取り得ず、從つて黨が分裂瓦解して行く所以である。

二

斯くの如くして、民政黨既に分裂瓦解し、政友會漸く政權維持の上に小康を得てゐるけれ共、之亦近き將來に於て分裂し瓦解するの運命に逢着すべきは火を睹るよりも明かである。之れ、世間、民政黨、政友會の黨首の首すげかへを噂する所以である。

たゞ、濱口氏と田中氏とは、其首のすげかへを噂さるゝ原因が相當相異してゐる。而も濱口氏は民政黨の分裂に依つて既に試驗ずみであるに反して、田中氏は、今日政權を維持しつゝあるが故に、未だ政友會は大分裂に至らず、其運命は未來に殘されてゐる。

濱口氏が其闘爭力を缺如し、金の點に於て大民政黨を維持するに足る資金の調達に缺如せるに對し、田中氏は闘爭力を相當に有してゐる。金の點の能力は幾何あるか疑問であるが、少なくとも、之れを作るためには手段を選ばずして其方向に向ひつゝあるは、あらゆる反對を排撃し、小泉三申の如き黨の古老を振り棄てゝも財閥久原を入閣せしめた點を見ても明かである。此點に於ては未だ未知數で[illegible]の能力を有するとも見られる。

今日、彼に就て其首すげかへの問題を惹起せるは、其人事行政の點に於て、彼獨得の政策の遂行の點に於てのドンキホーテ振りである。

彼は人事行政に於て、殆んど入婿たる地位を超越して、古き政友會を無視し、自己の腹心を以て之れを固めんとしてゐる。勝田久原の入閣然り、黨內に紛爭の絕えざる所以である。彼は外相の地位を兼職して對支外交に對し、彼獨特の軍閥的見地から、、の政策を遂行せんとして、事毎に危き綱渡りの藝當を演じ、、、、、、、、引つ張り行くかを危ぶましめつゝある。

優詔問題に於て問題を惹起し、其定心なく輕卒至極なる事を暴露した。

彼は、あらゆる方面に對し、ドンキホーテ振りを發揮し、あらゆる者にハラ／＼させ乍らも勇敢に政權に嚙りつき、民政黨の崩壞に幸されながら政權を維持しつゝある。最近に於ける、思ひきつた反動的對支政策は一時世間を危ぶませつゝも一方には其支持者を得、民政黨をも引きづる狀態を呈し來つた。資本家地主等は、田中の不評にあきれつゝも彼の無產階級運動に對する徹底的彈壓政策に、食指を動かさんとしつゝある。

彼は今大政友會の黨首として今後尚ほ生命を有するや否やの試金石の上に立つてゐる。彼の危機は、對支政策と人事行政の上にかゝつて

ゐる。彼が今後此二つの危機を切り拔け、從つて今後尙ほ政權を數年間維持する事が出來るならば、こゝ暫時くは政友會總裁たるの地位は動かないであらう。若し彼が此二つを切り拔け得ずして政權を失ふに至るならば彼の地位は忽ち失墜して、後繼者に其人を得ざれば政友會も亦大分裂の運命に逢着すべきは必然である。

三

今日民政黨は、單に其黨首たる濱口氏の代りに何人かを拉し來つて黨首にする事の問題に先だつて、床次氏の脫黨に次ぐ第二の内紛問題のために、四分五裂の危險に瀕してゐるのである。内紛の一派は大隈侯を擔いで新黨を創立せんとの計畫も噂にのぼつてゐる。斯くの如く四分五裂すると假定せば、最早大民政黨の黨首の首のすげかへは問題たり得ない。たゞ此際濱口氏を引つ込めて、新たなる黨首を迎へ、其四分五裂を防がんとし、防ぎ得る者は果して何であらうか。

巷間擬せらるゝ者に、幣原あり宇垣一成がある。其黨内より之れを求める事は不可能である。幣原は三菱を背景にするも、今日の錯綜せる民政黨の内部をまとめて行く大壓力を人間的に有するや否や、彼も要するに平凡なる常識政治家に過ぎないではないか。たゞ宇垣一成は未知數である。世評は彼のしつかりものであり、相當徹底せる日本の革命的改造意見を有する事を語つてゐるが、これを眞なりとすれば、民政黨の黨首たる事は彼の素思を貫く上に邪魔になつても役には立たないであらう。併し強いて求むれば此二者の内何れかである。民政黨が四分五裂すれば、特に民政黨の黨首を物色する必要はあるまい。

田中總裁沒落の後の政友會の黨首は何人であるか。併しながら我々は其黨首を考へる前に其時の政友會の運命も亦今日の民政黨のあとを追ふと考へざるを得ない。鈴木喜三郎辭職の後、鳩山一派は頻りに鈴木の副總裁說を流布して擔ぎ上げに之れ努めた。けれ共夫れは見事に失敗した。

床次を持ち來るか、不可。

之れを要するに田中沒落後は矢張政友會の崩壞と見るを至當とするであらう。

四

之れを要するに、我々は現在の狀勢に於て、田中濱口に代つて二大政黨の黨首のあと釜を考ふるよりも、これをきつかけにして、日本の政界の小黨分立化を考ふる方がより現實的であると思はれる。

二大政黨の對立時代は現下の日本の社會的狀勢が既に過ぎ去つたのである。所謂從來の議會主義の上に、既成政黨的大政黨を維持する客觀的狀勢が今日の日本からは過ぎ去つた。

明治維新を背景とする大物的人物は死に去り其官僚藩閥的壓力も過ぎ去つた。而も日本の財閥が大政黨の黨首を助けて資金をみつぐ餘裕も今日に於てはなくなつて來た。そこに小黨分立の社會的必然性が生

れて來たのである。

小黨分立は政變を繁くし、議會政治を無力ならしめる。而して其政權の爭奪が醜惡を極むるに至つて、其間から又必然に、、、、、力が生れるであらう。その、、、、ツソリニであるか、それとも亦日本獨特のものであるかは、之亦日本の社會それ自體が決定するであらう。

濱口總裁の後繼は？

星島二郎

濱口民政黨總裁の後繼者は誰れであらうか？　と云ふ質問に對して即座に『それは誰れだ』と答へるものがあれば、政黨も餘程組織的になり又、政界も餘程安定する時と思ふ。何も『誰れだ』と云ふ事を、個人の名前をあげ得ないでも、それを當然組織の力で、例へば、現在の黨員中より、選擧せられたものとか或は、副總裁とかいふものがあつて、慣例上、總裁が止めたら、副總裁が昇格するとか、何とか總裁の後繼が定まつてをれば、こんな難題を出す人もなければ、又答辯に困る事はないと思ふ。然し現在の日本の政界の中心人物、政黨の首領となる人が、全く後繼が定まつて居ない處に政界の面白味はある。ひよつこり、他所から慧星の如く現はれる事もあれば、中々見當がつかない。

床次さんが民政と合したのは、次の總裁の内約があつたからだと誠しやかに噂したのは、つい近い事だ、それが望みがなくなつた故、飛び出したのだと極めて、簡單に片づけてしまふ。いや何と云つても、民政黨は憲政系中心、憲政系は三菱の背景だ、幣原外交で有名な[illegible]とした三菱のお婿さんがある。兄分の加藤伯が總裁たり總理たりし事を思へば、幣原夫人にしても、秘かに期待をもつ事は何不自由なき身であれば人情として當然考へられる事である。

前の選擧に身銭を切つて選擧應援に出かけたのは、其下準備であつたと云はれて居る。經歷人物、今の民政黨系としては申分あるまい。それに政治につきものゝ、兵糧が如何に堅い三菱でも、兄加藤伯を應援して、幣原を見逃しにはすまい、と云ふ樣な次第で、ぜひ幣原を總裁にと、チヤンと定めて居る連中もあるかに聞いて居る。それを知つたから、床次さんが飛び出したんだと、見て來た樣な事を云ふ人もあ

然し中には、幣原氏が健康でないから死花を咲かすために、一番最後の舞臺を飾らせたいと云ふ、噂さへある。

これで見ると、床次氏なき民政黨では、幣原氏の次期總裁說は、かなり強い根據があるのではないかと思ふ。

事によつたらば、若槻氏は、返り咲きするかも知れない。いや今の民政黨は何と云つても、安達中心である。幣原が無かつたならばキットン安達だと云ふ者さへある。政友會でも原敬氏が總裁となつた。今でこそ、原總裁と云へば、理想的總裁總理と評されて居るが、松田氏なきのち、腕の人で通つた原氏も、總裁になるまへには、かなり敵もあり、評判もそれほどではなかつた。安達氏を、原敬氏と比べては、原さんに對しては、すまない氣がするが、ともかく、現在の民政系では總裁候補者の一人たるを失なはない。

然し內部の人から昇格さして、總裁をつくるといふ事は本筋ではあるが同じ様な仕事をして居ると、嫉妬心や競爭心や地盤や子分關係の複雜した中から選び出すといふ事は、なかなかむづかしい事であつてい。一つ大將をかついで、政友會の向ふをはり、大將同志で、そくバラバラやるのも、おもしろいと本氣で考へてゐる人もあい。他から迎へるとなると今更、破れかゝつただけなかなか困難で、やはり同じ畑の、半隱居の山本達男氏か、仙石雷大臣でもひり出せばよいが、なかなか物になるまい。

政界隱士の様な口調で、次期總裁を評判してみれば、大體誰れが答辯してもザットこんな事と思ふが、私は、本心こんな文人じみた事は申したくはない。一體、今の政黨の組織は、根本より改める時が來てゐるのだ。

總裁だ總務だとエライ名前をつけて、その肩書が物云ふ様な日本の政治空氣を一掃する時が、來たのである。總裁の更迭、時期にそれを實現したい、何も新しがつて、中央執行委員長とまではまねんでもよいが、もつと一人の人物中心の政治から進んで、主義政策中心委員の會議により、互に替りあつて總裁なり委員長を、つとめるといふ時代になつて來たのではないか。或は總理の候補者たるべき一黨の總裁たるものは、少なくともアメリカの大統領の候補者を、選ぶ時の様に、

小黨分立は政變を繁くし、議會政治を無力ならしめる。而して其政權の爭奪が醜悪を極むるに至つて、其間から又必然に、、、、力が生れるであらう。その、、、、、、、、、、、、、、、であるか、ムツソリニであるか、それとも亦日本獨特のものであるかは、之亦日本の社會それ自體が決定するであらう。

濱口總裁の後繼は？

星島二郎

濱口民政黨總裁の後繼者は誰れであらうか？　と云ふ質問に對して即座に『それは誰れだ』と答へるものがあれば、政黨も餘程組織的になり又、政界も餘程安定する時と思ふ。何も『誰れだ』と云ふ事を、個人の名前をあげ得ないでも、それを當然組織の力で、例へば、現在の黨員中より、選擧せられたものとか或は、副總裁とかいふものがあつて、慣例上、總裁が止めたら、副總裁が昇格するとか、何とか總裁の後繼が定まつてをれば、こんな難題を出す人もなければ、又答辯に困る事はないと思ふ。然し現在の日本の政界の中心人物、政黨の首領となる人が、全く後繼が定まつて居ない處に政界の面白味はある。ひよつこり、他所から慧星の如く現はれる事もあれば、中々見當がつかない。

床次さんが民政と合したのは、次の總裁の内約があつたからだと誠しやかに噂したのは、つい近い事だ、それが望みがなくなつた故、飛び出したのだと極めて、簡單に片づけてしまふ。いや何と云つても、民政黨は憲政系中心、憲政系は三菱の背景だ、幣原外交で有名な歴とした三菱のお婿さんがある。兄分の加藤伯が總裁たり總理たりし事を思へば、幣原夫人にしても、秘かに期待をもつ事は何不自由なき身であれば人情として當然考へられる事である。

前の選擧に身銭を切つて選擧應援に出かけたのは、其下準備であつたと云はれて居る。經歷人物、今の民政黨系としては申分あるまい。それに政治につきものゝ、兵糧が如何に堅い三菱でも、兄加藤伯を應援して、幣原を見逃しにはすまい、と云ふ樣な次第で、ぜひ幣原を總裁にと、チヤンと定めて居る連中もあるかに聞いて居る。それを知つたから、床次さんが飛び出したんだと、見て來た樣な事を云ふ人もあ

る。然し、幣原氏がその希望があつても、やはり總裁たるには、第一が健康、第二が金、第三が度胸、の三要素が必要だが、それには幣原氏は、落第だといふ人がある。近時健康恢復したとは云へ、何にか同氏には根本病があるといふ事だ。濱口ライオン總裁も病氣には勝てない。今日後繼者云々の評判するのも、民政黨内部のゴタ〲よりも、むしろその健康問題が中心と思ふ。

然し中には、幣原氏が健康でないから死花を咲かすために、一番最後の舞臺を飾らせたいと云ふ、噂さへある。

これで見ると、床次氏なき民政黨では、幣原氏の次期總裁説は、かなり強い根據があるのではないかと思ふ。

事によつたらば、若槻氏は、返り咲きするかも知れない。いや今の民政黨は何と云つても、安達中心である。幣原が無かつたならばキット安達だと云ふ者さへある。政友會でも原敬氏が總裁となつた。今でこそ、原總裁と云へば、理想的總裁總理と評されて居るが、松田氏なきのち、腕の人で通つた原氏も、總裁になるまへには、かなり敵もあり、評判もそれほどではなかつた。安達氏を、原敬氏と比べては、原さんに對しては、すまない氣がするが、ともかく、現在の民政系では總裁候補者の一人たるを失なはない。

然し内部の人から昇格さして、總裁をつくるといふ事は本筋ではあるが同じ様な仕事をして居ると、嫉妬心や競爭心や地盤や子分關係の複雜した中から選び出すといふ事は、なか〲むづかしい事であつて結局、それ等の頭をさけて、外からむかへて來て、この破れかゝつた屋臺骨をさゝへる方が或は黨自衛策よりして、よいのかも知れぬ。それには、先づ白羽の矢を、宇垣大將に向ける。大將は、目下兩政黨から、色目をむけられて居る人氣男、たゞのサーベルではないと、西園寺公まで折紙をつけた人、本人も滿更でもなさそうに、見えぬでもない。一つ大將をかついで、政友會の向ふをはり、大將同志で、チャン〲バラ〲やるのも、おもしろいと本氣で考へてゐる人もあるらしい。他から迎へるとなると今更、破れかゝつただけなか〲困難な事で、やはり同じ畑の、牛隱居の山本達男氏か、仙石雷大臣でもひつぱり出せばよいが、なか〲物になるまい。

政界隱士の様な口調で、次期總裁を評判してみれば、大膽誰れが荅辯してもザットこんな事と思ふが、私は、本心こんな文人じみた事は申したくはない。一體、今の政黨の組織は、根本より改める時が來てゐるのだ。

總裁だ總務だとエライ名前をつけて、その肩書が物云ふ様な日本の政治空氣を一掃する時が、來たのである。總裁の更迭、時期にそれを實現したい、何も新しがつて、中央執行委員長とまではまねんでもよいが、もつと一人の人物中心の政治から進んで、主義政策中心委員の會議により、互に替りあつて總裁なり委員長を、つとめるといふ時代になつて來たのではないか。或は總理の候補者たるべき一黨の總裁たるものは、少なくともアメリカの大統領の候補者

眞の明るい賑やかな方法で選ぶのもよいかも知れぬ。なるほど形は現在日本のも選擧になつて居るけれども、これを實際の黨大會の黨員全體の選擧による時代が、きたのかも知れない。民政黨たるものは、理屈や揃ひを幸ひに、極めて、ラヂカルな一推出を人數に
も次期の總裁は理想的な方法で定めてほしいものである。（終り）

政黨お家騷動記

石川六郎

一、床次氏の脱走と金

床次氏が平素の優柔振りに似ず、疾風迅雷的に單身民政黨脱退を決行した際。その劈頭第一の仕事として設けた昭和ビル樓上の新黨組織事務所が、如何にもスケールが大きく、陣營の堂々たるに拘らず、その後この大政治家に追隨し來るもの意外に少なく、屋臺骨ばかり徒に大きくて、今日所屬代議士が辛うじて二十五名の交渉團體を維持するといふ涼し過ぎる有様は、さらでだにその進退出所が世の惡評を買ふに充分であつた床次氏に、更に世人の冷笑熱罵を雨下せしめた事は、寧ろ當然の成行といふべきである。

併し翻つて思ふに、今の政治社會に於ける床次氏の地位權勢は、世人が現に見縊りつゝある程に見殺つたものではないのである。實際床次氏の越中は、當世の新式のものでなく、舊來のはづれ易い越中であり、百名以上の豫想が、此上如何に努力しても、先づその半數の五十名に達したら意外の大成功と思はれる。然しそれかと云つて、今の黨首級の政治家中、この床次氏の打つた芝居を、兎に角これだけの成績で演出し得るものがあるだらうか。こんな馬鹿な芝居は打たぬといへばそれ迄だが、田中男にしろ、濱口氏にしろ、若槻氏にしろ、事前に適判状も取らず、相談もせず、單身ヒラリ脱黨して、さて諸君の御同情に訴へると濕つぽく持ち懸けた所で、果して追隨者何名を數へ得るであらうか。これは勿論それぐ事情境遇等によつて異なる譯であるが、近時の床次氏と同じやうな境遇であつたとしたら、これ等の黨首級諸氏は恐らく床次氏の半數の追隨者をも見出し得ないであらう。それは床次氏には、政友本黨の世帶がだんく傾いて、恰も敗殘の落武

者のやうに減る者は減つて、多年苦節は守らなかつたにしても、少くとも苦勞は共にして來た腹心だけが殘つたやうなものであるから、他の軍人上りの養子總裁や、鰻上りの跡取り總裁やの企て及ばざる相當の追隨者を床次氏が有することも、寧ろ怪むに足らないのである。

然らばこれ等の追隨者は、床次氏の平素の恩顧情誼によつてのみ動いたのであるかといふに、夫れ然り豈にそれ然らんやである。政黨の裏には金が附物であること、雪駄の裏のそれと同じである。およそ政黨の組織、黨員の離合集散、いろ／＼の理屈は並べられるにしても、裏面に金錢が働かない場合は少いのである。恰かも魚釣の浮木がいろ／＼の色に彩られて水面に躍るが、糸をたぐれば必らず錘りの金が水底でそれを支へてゐると同じである。私の言はんと欲する所はこれからである。

本文の初めに、私は床次氏が廣大な事務所を設けて世人の嘲笑を買つたことを一言した。併しこれは私をして云はしむれば嘲笑する方が考へが淺いのである。諺にも醫者の玄關といふ。これから新黨の店開きをして、一人でも多く黨員を引ずり込まうといふ場合である。如何にも此の新店が景氣がよく、資金が豐富であること、若くはあるらしきことを知らしめる必要がある。それが家賃一ヶ月九百圓の昭和ビル樓上の新黨事務所となつたのである。而してさきの政友本黨本部時代はバラックにふさはしいガラクタの家具ばかりであつたのが、今度は椅子卓子其他の家具こと／＼く永久的で善美を極めたものを装備し、如何に床次氏の手許の新黨組織準備資金の豐富であるかを宣傳せんとした。心なき世人はこれを嘲笑したけれども、心ある黨人原は『さては金があるな』と尊信畏敬したであらう。

この床次氏の新黨準備資金は何處から出たか。それは天から降りもしなければ地から湧きもしない。勿論床次氏自身造り出したものに相違ない。併し床次氏は元來貧乏人である。親から資産を譲られる代りに借金を貽された人である。そのために餘り高利貸に責められて、一時は役人生活をやめやうとさへした。それは兵庫縣あたりに地方官をしてゐた頃の事である。それから政黨生活に入り、丁度原首相の下に内務大臣をしてゐた際、それ迄原氏のために毎月生活費を支持してゐた或る實業家が、原氏も總理大臣となつて最早や勝手元の世話を受けなくともよくなつたから、自分の代りに床次の生活を見てもらひたいといふことで、原總裁から生計の支持者たる實業家を譲受けたといふ話がある。この話はどこ迄事實であるか、現に今日まで尚ほ繼續されてゐる事柄であるか、その實否は明かでないけれども、要するに床次氏が有り餘る金持でないことだけは、この話の反面が證據立てゝゐる。その上彼は金離れが宜い、と言へば貧乏人の金離れは問題にならないといふかも知れぬが、さうでない。由來薩摩人は概して金にきたないといふことを言はれてゐる。所が彼は金を使ふ。切れ離れが宜い。有れば出す。それだから貧乏だとも言へる。

この金離れの外に、床次氏には人好きのする素質がある。殊に初對

面の印象が馬鹿に好い。温顔で、深切で、ニコポンではないか、眞摯らしい賴母しさがある。兎に角彼れの悠揚たる態度と均整された容姿とは生面の人を傾倒させるに餘りある。嘘から出た誠か、野合から結婚へと憲本兩黨が合體して民政黨を組織して後のいろ〱のいきさつはあつたが、就中最も意外であつたことは、この一年ばかりの間に憲政系の間に床次宗の歸依者が相當に出來た事である。謹嚴と病弱の濱口總裁に慊らぬ者、安達江木等の最高幹部の横暴偏狹に切齒扼腕する者、その他中央地方の失意者、野心家、不平組等等、みな期せずして床次の門に趨つたのである。これ等は深淺いろ〱の意味で款を床次に通じたと言へる。それだから床次氏が新黨の店開きに、百名の代議士を豫算して準備を進めたことは、必ずしも氏の自惚れとばかりは云へないのである。併しそれは自惚れでないとしても、氏の計算に誤算があつたことは確かである。本黨系が僅か二十餘名に過ぎなかつたことは第一の非常な誤算であつた。憲政系の糾合に至つては、田中善立氏等のヘマな除名騷ぎで一層氣勢を削いだが、かゝる騷ぎを演ぜずに如何に手際よく脫黨者を取纏めた所で、純憲政系からさう二十名も三十名も取り得るものでない。同情者は必ずしも追隨者ではないのだから。

さて話は金の問題に戻る。床次氏の今度の芝居は決して徒手空拳で打てる芝居ぢやない。必ずや相當の金の準備の出來た後に取りかゝつた仕事に相違ない。即ち床次氏の脫黨は、腹心の同志にも事後に報告したのであるが、少くとも金主にだけは事前に通[illegible]る。さて然らば金主は誰か、用意の金は何程かといふことになるが、それはまだ絕對に漏らされてゐない。金高については、本黨系で幹部級の一代議士が、――それは追隨の瀨戸際まで行つて殘留した一人だが、單刀直入床次氏に『金は五十萬圓も出來ましたか』と質した所、床次氏は唯だ『ウム、ウム』と首肯いた許りで、それ位は勿論用意してゐるといふ意志は表示したが、結局本音は吐かなかつたといふ事である。所で費用の支出の方面から考へて見ても、選擧の際に黨から候補者に補助する費用は平均ザッと一萬圓であるが、議員の吸收費も一人平均一萬圓と見て宜い。これは勿論節操の賣價といふ譯ではない。少數の議員がキャスティングヴォートを握つた際の如きは、一頭十萬圓以上にも釣り上げられるものであるが、この費用はさうではないのである。昔と違つて代議士がさう偉くなくなつたと共に、地方の黨情が六ケしくなり、代議士が中央で勝手に去就をきめたのでは、なか〱事後承諾をしない。脫黨を決行する前に先づ歸鄕して地方の有力家を纏めなければならない。有志の上京者も御馳走しなければならない。札ビラを切らねばならぬ場合が多い。憲政系に糸をひいて傀儡をあやつるとすれば、その方の一切の費用も、當然實費以上に負擔しなければならない。かくて床次氏の新黨準備金は少くとも百人分百萬圓は用意されたであらうことが推定される。今年の春の總選擧に床次氏の造つた金は九十萬圓であつて、そのうち二十萬

圓を民政黨選擧費に提供し、七十萬圓を床次直系の同志に頒つたといふことを聞いてゐる。兎に角この不景氣な世智辛い世の中に百萬圓ポンと投げ出す人があるのだから耳寄りの話である。

この金を誰が出したかは判らない。が併し床次氏の金主は大阪方面の實業家に多いことは明かである。三井三菱の二大財閥にこそ縁は薄いが、大實業家仲間には床次ファンは少くないのである。世間の評判の惡いのと反比例して實業家仲間には評判が好いとも云へる。一例を擧げると、彼は穩著主義を以て終始して居り、思想取締思想善導の主唱者であり、これ等は一として金持階級の共鳴を博するに足るものである。又役人上りの役德として、內務省時代に公恩私恩を施した應報が今に現はれて、思はぬ金穴を得たといふ噂さへある。これは警察官上りや、司法官上りの政治家が、昔し摑んだ金持の弱點を種子にして、こわもてで選擧資金を奉納させる、謂のいゝゆすりとは質が違ふが、政治家には何處に金があるのかわからぬものである。一說には床次氏の軍用金の出所は政府側だと傳へてゐる。さうなると床次氏自立の動機を詮索しなければならなくなるが、これには他動的には政府側の策謀によるといふ說と、秋山長島氏等の浪人組策士に釣られたのだといふ說とがある。併し何れにしても、それ等の手からこの莫大な軍資金が出たらしくもなし、出來るらしくもない。それよりも寧ろ金の出所と結黨の動機とを直接結びつけて、暫らく現狀のまゝ政局を安定せしむることを有利とし、且つ支那に對する田中外交を頓挫せしめざるやう相當有力にこれを支援することを必要とする方面——大阪實業家側の有力者などが、その意見と共に資金を提供して床次氏を說き、その決意を促したことが、今回の氏の脫黨事件の最大の外的動因であると見るのが、最も妥當なる觀測であらう。

併しそれは何處までも外的の動因である。まだこの外に、床次氏の胸裡にひそむ內的の動機が檢討されなければならぬ。それは抑へがたき野心か、將た燃ゆるが如き不平か。

二、政黨の黨首と金

由來お家騷動なるものは、後嗣の問題にからんで起る所の、陰謀的手段による權力と利慾の爭奪に外ならない。これは昔も今も變りがない。唯だ昔の大名屋敷のお家騷動は往々にして妖艶な女性を中心人物とするが、今の政黨のお家騷動には流石に女性は居ないだけの違ひである。最近政黨お家騷動の最も著明であつたのは、原氏の後を襲うて政友會總裁となつた高橋是清氏に反抗して、山本達雄男、中橋德五郎氏、床次竹二郎氏が連袂脫黨して政友本黨を組織したことである。その表面に現はれた動機は高橋中橋兩氏の確執に違ひないけれども、そこにはまだ底があつて、財政家として先輩である所の山本男がその後輩たる高橋氏を頂いて、その放漫政策を容認しなければならぬ苦痛と憤懣とが、政友會分裂の大なる原因であつたと云はれてゐる。床次氏の惱みは、その頃操縱し來つた横田千之助氏が星氏の直系を以て[illegible]に

自ら原總裁の後繼者たるを期し、漸やく床次氏の勢力と拮抗して來た點にあつたが、併しこれは勿論床次氏をして處決を覺悟せしむる程の事ではなかつたのである。それを山本男が極力勸誘して脫黨させたのである。後に本黨が總務委員會議制から總裁制に變つて、山本男が斷乎として退讓して床次氏を黨首に頂いたのも、かゝる因緣があつたからである。それから田中男の下に政友會が陣容を新たにした際中橋氏が一味を率ゐてこれに復歸したのも、後輩床次總裁の麾下に跼蹐することを潔しとせざる感情もその一因であつたに相違ない。

又近くは小泉策太郎氏が自ら黨首に擁立した田中首相と喧嘩して、飄然政友會を脫退した理由についても、世間では極めて簡單に、田中首相が久原房之助氏を遞信大臣に据ゑやうとしたことに極力反對した結果だと見てゐるが、小泉氏自身その地位に野心でもあつたのなら格別であるが、さうでもない一伴食大臣の椅子の配置位の事で、自己の進退を賭して爭ふやうな、そんな野暮な單純な小泉策太郎氏では斷じてないのである。これは私の聞いた所では、久原氏を大臣に登用することに對して、小泉氏が黨內の輿論を代表して田中首相に忠告したことは事實であるが、田中首相はこれに耳を借さぬのみか、反對に極めて熱心に久原氏が政治家として稀に見る人物であることを例の口調で稱揚し、オラの後繼者は久原の外はない、オラは久原を次の政友會總裁に推すつもりであると、例の通り開放的にベラ／＼饒舌つたので、流石の小泉氏もすつかり愛憎を盡かし、脫黨を決行した次第で、小泉氏は別段政友會を見限つた譯ではないから、早晩來るであらう田中男の失脚と入れかはりに、當然政友會に復歸すべく期待されてゐる。政黨員は官吏や軍人と違つて、幾度出たり入つたりしても、恩給や年金に關係がないから重寶である。

玆で問題になるのはオラの後繼者は誰かといふことである。田中男は總理大臣をやめる時期が政友會總裁をやめる時期だといはれてゐる。とすれば、政友會總裁の後任問題はさう先きの長い問題ではなささうである。所で黨內から後繼者を求めるとすれば、先づ久原氏か、鈴木喜三郎氏か、山本条太郎氏か、この三者を出でないであらう。久原氏は前にも云つたやうに、田中總裁が熱心に推薦してゐるのであるが、田中男自身あまり人氣がないのであるから、久原氏自身が自己の財力なり手腕なりで黨內の人心を收攬することに成功せざる限り、この總裁候補は有力でないであらう。鈴木氏は偏狹なやうで存外融通が利き、苛烈であるが情愛が深い。だから敵としては甚だ恐ろしいが、味方としては此上なく賴母しい。實に黨人中稀に見る鬪士である。今や黨內における彼れの勢望は隆々たるものがある。彼も有力な候補者ではあるが、唯だ疑問なのはその包容力である。彼れの鬪爭心は敵黨を粉碎するに足るものがあるが、併せて自黨を粉碎する素因とならなければ幸ひである。山本条太郎氏が三井財閥を背景として黨內に扶植しつゝある勢力は素晴らしいものである。彼れも政友會の黨首として實力ある有望候補者の一人である。

田中總裁は持參金つきの入黨であつた。當時噂に上つた陸軍の機密費や、乾新兵衞氏の金や、煙のある所に火があるとすれば、幾百萬の金はつぎ込んだに相違あるまい。それは當時犬養一派入黨の尻拭ひなどに使はれた筈である。政黨の經常費は、民政黨は約一萬圓、政友會はその倍額は要るであらう。それに補缺選擧でもあれば、不時に必らず三萬や五萬は出る。候補者は心得たもので、補缺選擧となるとどんなに氣があつても容易に起たない。結局本部が大部分の費用を負擔することゝなる。これが既成政黨の頭痛の種子である。そこで今度の選擧法ではちやんと補缺選擧が行はれないやうにし、各派異議なし〳〵で通過した譯である。今年の總選擧で、政友會が候補者の援助に使つた金は少くとも六七百萬圓に上り、民政黨と雖も四百萬圓はかゝつたと云はれてゐる。所で政友會の財源は、第一は故野田卯太郎氏によつて開拓され、現に山本条太郎氏によつて代表されてゐる三井財閥、それから原敬氏との久しい關係の古河、その外それ〴〵の巨頭によつて緣故づけられた富豪からの奉納金、その折々の利權あさり、例の塔連炭坑のやうな大口は滅多にないにしても、例へば震手や銀行救濟の裏をたどつて、それ〴〵吐き出させて選擧資金の一端としたといふことも決して噂だけではあるまい。それから實業家に對する授爵となると可なりな資源になるのであるが滅多に行はれないから別として、勅選議員に對しては容赦なく奉納金が課せられる。この相場一人二十萬圓也。その算出の基礎は、衆議院議員の選擧を爭つたとして一回七萬圓はかゝる。三回爭つてざつと二十萬圓、これで終身貴族院議員の名譽が買へれば廉いものだといふ。二十萬圓といふ相場は實際の取引値段かどうかは知らぬが、計算だけは間違つてゐない。

次は民政黨である。濱口總裁自身金に緣がある方ではないが、彼れが仙石貢老に支援されてゐる限り、彼れの背後には三菱財閥が光り、その地位の安固さは加藤前總裁同樣に保證されるであらう。三菱の外には、今度は安田も出したやうであり、その外實業家で、政友會にも民政黨にも同額を出すといふ安全第一主義者もあり、利權あさりも相當にやつてゐるのであるが、政友會ほど惡辣の噂を立てられないのは矢張り三菱財閥との關係が、單なる取引關係、利害關係ばかりでなく、親類關係、姻戚關係といふやうな、すこぶる密接な關係になつて來てゐる強味であつて、この點は政友會と三井財閥との關係の及ぶ所でないのである。而してこの關係は、濱口氏の後繼者として民政黨々首の有力なる候補者に幣原喜重郎男を數へることを極めて順當とするものである。

幣原男は意外の人ではあるが疑ひもなく民政系である。第一順位の候補者として間違ひのない所である。若し強いてこれ以外に求むれば若槻前總裁の復辟も考へられないこともないが、少しく緣が遠いやうに思はれる。床次氏が脫黨しなかつたならば、幣原男に次ぐ黨首候補者であつたことは疑ひないが、併し實現の可能性の乏しいことは、誰よりも床次氏本人がよく知つてゐたであらう。それは三菱財閥のハツ

クが全然ないこと、總務として安達氏等舊憲政系幹部の權勢の牢乎たること等による。そこで床次氏は民政黨に見切りをつけ、寧ろ憲政系の不平組を自己の傘下に糾合し、多年腹心の本黨系その他を一團として、相當有力なる床次黨を組織することが、自己の運命を打開する唯一の方策であると考へたであらう。これが床次氏の脫黨を急がしめた最大の動機ではなかつたであらうか。即ちこの見地からすれば、床次氏の脫黨によりて惹起された民政黨のお家騷動も、結局はこれまた黨首問題に端を發した一種の陰謀であつたと云ひ得るのである。

黨外にも若干の黨首候補者がある。常に第一に指を屈せられる萬年候補の後藤新平子は輕い腦溢血を煩つてゐるさうであるから最早その望みもなからう。その外には軍人で多分に政治家の素質ありとせらるゝ宇垣一成大將があり、樞密院副議長の平沼騏一郎氏また囑望せられつゝある一人である。

× × ×

私は今の政黨や黨首の事を述べるのに、專ら金と野心とのみを書いた。主義政策や抱負經綸に觸れることは、さほど重要でないと思ふからである。

田中、濱口の後に來る者

山浦貫一

田中義一氏は山高帽子である。雨が降つても汚れはしない。ペシャンコに潰されても裏から押しかへせば元通りの格構になる。そして、却々ユーモラスである。銀座通りを步いたら、珍らしい物ずきの連中がはやし立てるに相違ない。何しろ山高帽子は既に風俗史の中に入つてゐるのだから。

濱口雄幸氏はストロー・ハツトである。カンカンでいかめしい。上品である。が然し雨降りには被つて步けない。强い風が吹くと飛んでしまふ。ペシャンコに潰されたら買ひなほさなくてはならぬ。さり乍ら紳士常用の品、當世の人氣には合ふ。

床次竹二郎氏はこれソフトハツトででもあらう。しつくり頭についてゐる。雨や風に合つて寸法がちゞこまつても、尙ほ依然として帽子である。ペシャンコとならない。なりやうがない。夏でも冬でも被つ

てゐれる。禮服着用の際でも、これ一つでごま化して通せる。

山高、ストロー、すちよみの古いソフト。

上等なパナマやシルクハットには笑はれるかも知れないが、然し大概な場所に通用する。

けれど、人間といふ奴は物慾のする動物で、外の奴を被りたくなることがある。鳥打帽にあこがれをもつたり、絹帽がほしくなつたり、舶來のパナマがよかつたり、まかり間違へば臺灣パナマや東洋パナマも出て來やう。

そこで帽子に更代論が起きる。改造の編輯者は帽子に興味をもつてゐるのかも知れぬ。

◇

現在、總裁の地位にゐて一黨を指令してゐる人を私に後任總裁の論議をするのは隨分失體な話しである。名譽毀損の訴訟を起こされたら成立するかも知れない。けれども世の中には事實、後任總裁は誰だらうかといふ疑問を持つ人が多い。所謂社會通念に從へば、政民兩黨の帽子はやがて代るべき日が來るのであらう。たゞ、どういふ動機で代るかは知らぬ。高橋是清氏の如く、總裁等に倦きて引退するであらうと考へておくのが一番穩當で紳士的である。編輯者も、穩當にして紳士的なる社會通念に從つて注文を發したに違ひない。

そこで差し當り、最も手近かに後任總裁を問題にされるのは民政黨である。現に、黨中の所謂不平組の頭目と稱せられ除名された小寺謙吉氏の如きは、身、黨の幹部級であり乍ら、後任總裁を裏面に畫し、床次竹二郎氏がしかあるべきに拘らず三奸、（安達・江木・町田）の徒は、故加藤伯の義弟幣原喜重郎氏を擁いでゐるのは、故總裁の意志に反するものだといふ秘密出版さへ發行してゐる。黨内既に其の論横行する證據である。濱口氏は、紳士である。正しい人である。然しながら當然ストロー・ハットである。風雨にたえ得る人ではない。氣の毒だが第一の條件たる健康の資格に於いて三黨首中のビリである。日に十人の面會人を引見すれば既に疲勞する。床次氏脫黨事件で靜養先きの鎌倉から、久世山の黨邸へかへつた。小康を得たので再び鎌倉へ引きかへした。すると又不平組の脫黨騷ぎがもち上つたので急遽歸京した。疲れた中で、中野正剛氏と晝飯を食つて野菜の罐詰に中毒した。又疲れた。面會人を引見するのは重大なる負擔である。

斯ういふ微弱な健康では、一旦大命を拜して一國の大黑柱になつた時、一日に三十人四十人、多くて百人位の人に迎接し得るか？乃至は議會中、貴衆兩院に出席して駄議員の駄辯を聽いて、一々答辯をなし其の上、朝に夜に刻々政狀を適當にさばいて行くことが能きるか、といふに、殆ど不可能である。このことは、黨の人もいふ。本人も洩す社會の人も想像する。今や『社會通念』になつてしまつた。して見ればいつかは重い役目の總裁を辭任して誰かに讓らねばならぬのは、濱口氏の他の資格を數へ上げなくても明らかな問題でなくてはならぬ。故に、こゝでは政治家としての本質的能力等の題目は論議しないで、彼

れが辭任した後の問題に移るの德義を守りたいと思ふ。

床次氏がをれば、たとへば幣原、宇垣を擁きまわる者があつたとしても結局は氏に、總裁のお鉢はまわらざるを得なかつたのは、これ亦社會通念的である。然るに今や床次氏なしとすれば、第一に考へられるのは、加藤伯の義弟で、三菱の女婿である幣原喜重郎氏である。床次氏を排撃する安達氏一派はこれを計劃したと小寺氏はいふ。が然し幣原氏は案外聰明である。一黨の總裁であつた義兄高明氏の日常をよく見てゐた。高明氏は强情の我儘者であつたけれども、然し一黨を維持する爲めには幇間の如き男のお世辭にも感心して見せねばならなかつた。田舍の百姓にも一見舊知の如き言葉をかけねばならなかつた。院外團や、ボロ通信の社長にも小使錢を與へなければならなかつた。更に／＼、總選擧がやつて來ると、內田信也氏と珍品五個の證文もかゝなければならなかつた。親父筋の三菱へ仙石貢氏の取り次ぎで懇願もせねばならなかつた。

しかも在野十年にして漸く一回總理大臣になつたと思ふと荷が重すぎて健康を害し、卒然として天に昇つてしまつたのである。餘りに屈辱的な外交であつた。いたましい自屈であつた。巨額の犧牲であつた。

聰明な人は勢ひ急進的でない。幣原氏の場合がそれである。彼れに有名な讀書家である、有ゆる世界のあらゆる種類の書物を讀む。外交官であつて同時に學究である。その彼れが俗中の俗である政黨政治家たるの無鐵砲と度胸とが缺いてゐることは自然の勢ひでなければならない。『紳士』は遂に政治家ではない。

濱口氏と大學同期卒業の幣原氏はまた、紳士であること、正しい人物であること、ストロー・ハットであることに於ては全然共通である。而して濱口氏より世の中が廣い丈け反省が深い。引つこみ思案である。多難な民政黨の總裁たらずとも、外交官では押しも押されもせぬ大先輩である。自分の育つた畑を守つて居れば、そこに自分の生きて行ける立派なアスファルトの途がひらけてゐる。何を苦しんで、俗世界に出しゃばらんや……。第一金の工面がやり切れない。聰明なる紳士、幣原外交が證明する弱氣な幣原氏は、民政黨の總裁たることを肯んじないであらう、といふ信ずべき情報をにぎつての、如上の話しである。

幣原氏の次に問題に供されるのは陸軍大將、軍事參議官宇垣一成氏である。本人がなりたいとも、なるとも、勿論彼れが一人前の常識をそなへた男である以上言明する筈はない。何となれば現に濱口氏が總裁の地位に居る。自分は現役の兵隊でしかも軍事參議官である。ウッカリした口を利いたり、下手な策士のモッコに乘つたりすれば將來を滅茶苦茶にしてしまふ。

が然し彼れには政治的野心が充分に在る。現役の大將だから其の門を叩くのは兵隊に限つてもいゝ。世の誤解を恐れ、一武辯として終る積りならさうすることが日本の兵隊らしいのだが、然し彼れの迎接する客は政友會、民政黨、床次黨、其の他策士、新聞浪人等々が多い。

行く者は彼れを擔いで一仕事しやうといふ途中である。故に亦何かをねらひ定めてゐる。床次黨が出來る所、到る所に第三黨の運動が潜在してゐた。宇垣大將を擔ぎ出して一仕事しやうと目論んだ者も勿論居る。彼れは話しを聞いてゐる。充分色氣をもつた。が乘り出す迄には到らなかつたところへ床次黨にだし拔かれたから、何喰はん顏であの顏を酒に染めて、濟ましこんでゐるのである。生涯濟まし込んでゐれるかゞ問題だ。

彼れは、政治的發言權を保有したいといふ意志を有する。うまく擔がれゝばのり出さぬとは限らない。いや色氣たつぷりだ。そこで民政黨内の反安達江木派であり、濱口氏の將來を考慮するものは、ひそかに宇垣で下準備をしやうと策謀する。現にさういふ巨頭とも稱すべき人物のうごいてゐることは確實なニウスで、伊澤多喜男氏あたりは注意人物である。

が然し政友會が陸軍大將を引つぱりこんだ當時の不評判を考へる。更に、陸軍部内にゐれば立派な『政治家』でも、丸腰になつて、雲助ぞろひの政黨に入つて來ては、何の程度まで『政治家』であるかといふ經驗は反對黨の政友會がいゝ手本を示してゐる。二大政黨は陸軍に占領されてしまつた、といふ風な惡聲をきくことは民政黨といふ他力本願の理屈屋ぞろひの政黨にたえられる所ではない。殊に、民政黨の現狀は、彼がどう不平を起して幹部排斥をやつてゐたんでも、安達謙藏氏なくしては世帶が張れるものでない。濱口氏は飾り物で安達氏が金庫の鍵を握つてゐる。だから、反安達派が、安達派に對抗する爲めに擔ぐのであつたら、宇垣一成大將の總裁は六かしい。六かしい中に投ずる程彼れは向ふ見ずではない筈である。

田中義一氏よりは或は人物だと評される彼は、田中氏程の痛快なる脫線的蠻勇に欠ける。

次に考へられるのは若槻禮次郎氏の返り咲きである。彼れは、實をいふと、讓りたくて濱口氏に讓つたわけではない。黨の大勢力に壓迫されて自ら退いた丈けである。退かうとしたら、まあ〳〵で止めてくれるのが順當である筈の所、誰も止めはしなかつた。待つてましたといふたので、心中甚だ面白くない。安達氏等に對しても快よくは思つてない。證據として、民政黨の顧問、最大幹部である所の若槻氏が、いやしくも黨が分裂したり、大動搖を來してゐる最中、片瀨の別莊に孫を相手にボートを漕いだり、江の嶋で樂燒に駄詩を書いたりして、東京の火事の中へ歸つて來たといふ話しをきかない。文字通り對岸の火災視して居る。

次の總裁の第一候補床次氏既になし、幣原、宇垣、兩氏不可能とすれば勢ほひ若槻氏の立場が作られなければならない。しかも、彼れの出現難は三菱系の不贊成ではないかと思はれる。三菱と加藤、三菱と濱口の連鎖役である仙石貢氏は若槻氏には極度の反感をもつてゐる。若槻内閣の末期に下諏訪鹽尻間鐵道の自案を通さず見殺しにしたこと内閣改造に際し、時の政友本黨の山本達雄氏と下話しをして、床次氏

を内務大臣にすゑて憲本聯立内閣を作る手筈を、若槻氏が承知しないのでこわれたこと。愛婿青木鐵道次官を馘つたこと等々の原因から、若槻氏の出現阻止を試みるかも知れぬ。すると改造黨以來の三菱との傳統的因縁が切れるから黨を維持する金に困る。

由來若槻氏は聰明で、明哲保身の大家で、常識家で、呑氣相にしてゐて實は神經質で、身銭を切る藝當が出來ないから所謂子分が極めて少ない。死物狂ひで縋がらうといふ手合がないのだから、餘程うまく潮がさして來なければ、再び若槻總裁時代を見ることは困難であらう。けれども、あゝでもない、かうでもない、とこね廻して居れば財布は彼の拾ふ所となるかも知れぬ。

安達氏自ら總裁たらんと欲する程先きの見えぬ男ではない。彼れは人を擔いで踊らせるが身上である。江木翼氏は、ひよいとすると、そんな大望を抱かぬでもあるまいが、彼れは寧ろ一個の智識に過ぎない。法學博士、書記官長が器であつて、帽子になる人物でないから、到底物にはならない。なつたら自他共に大損害を來すばかりだ。

から勘定して來ると、濱口氏がたとへばストロー・ハットにして見ても一番、總裁らしい。誰も後繼者がないとすれば病身でお氣の毒ではあるが當分やつて貰ふより仕方がない。

嗚呼民政黨、何んぞ人物の少なきやである。

◇

田中義一氏が萬一引退した場合を考へる。二三人の候補者が豫想される。曰く鈴木喜三郎、曰く床次竹二郎、曰く久原房之助の三氏である。その他にも大勢有爲（？）の材はひかへてゐるが員數の足りぬ時に擧げる程の人物ではない。

床次氏が持前のふら〱病を出さずに、大政友會分裂當時にちつとしてゐさへすれば、敢て田中氏を迎ふる必要はなく、とくの昔に床次政友會内閣が出來てゐた筈である。更に田中氏が總裁になつてからでも、政本合同を斷行してさへゐれば、立派な副總裁で、しかも實權は氏の握る所となり衆望は彼れに歸してゐたであらうこと、これ亦、社會通念といふ重寶な字で片づけられる。して見ると、今、鈴木氏や久原氏やをあげる必要は毫もないことになる。

が、今でもおそくはない。一部の策士が考へてゐる樣に機會を見て斷然政友會に合同といふ名目で復黨してしまふのである。此の場合を考へて見ると、何しろ彼れはやせても枯れても一城一閣の主、三十人近くの手勢をひきゐてゐる。根が生れ故郷だから政友會の中にも同情者がゐる。政友本黨時代の僚友、鈴木喜三郎氏は一味三十名に近い手勢を以て彼れを應援するであらう。田中總裁亦喜んで迎へるであらう。

最近の情勢に從へば、一時政本合同を感情的に肯定できぬ程田中氏を非常に毛嫌ひしてゐた床次氏の感情は大變やはらかになつてゐる。一方田中氏は金輪際人を傷めぬ人である。鈴木氏は兎も角として彼を繞る人々は、鈴木總裁時代を夢みてゐるかも知れぬが、もし床次氏が

復黨すれば、鈴木氏は自分をさしおいて彼を援助する丈の俠氣をもつてゐる。鳩山一郎氏でも森恪氏でも、鈴木氏のすることに苦情をさしはさむものではない。

床次氏は今迄が餘り感心した行動をとつてゐないし競爭者も多いから故障は生じるとも限らないけれども、大丈夫たどりつくであらうこと太鼓判を押してもいゝ。復黨は早いが勝である。

床次氏が復黨しない場合は、先づ鈴木氏が考へられる。

政黨は惡口で形容すると馬賊の集團であつて、中にも兵隊を澤山持つてゐるのが張作霖のやうに頭目となれる。鈴木氏は政友會内に於て少くとも二十人の手固い部下を持つてゐる。脫黨といふ樣な場合には五十人の部下が半分の二十五人へるものであること床次氏の場合に證明されるが、黨首にでもなるといふ樣な場合には二十人が四十人となり六十人となり八十人となるのが相場である。さういふ鈴木氏の勢力に對して、反感の多いのは又止むを得ない。彼れが田中内閣を殺さない爲めの犧牲者となつて内務大臣を辭職した時に、直ちに副總裁說が起つたけれど、遂に實現を見るに到らなかつたのは反感の然らしむる所と片づけて差し支へない。けれども勢力は伸びるとも縮みはしない。それは彼れの人間味による。一旦子分にした者は如何なことがあつても捨てない。敵に對しては强氣一點張りの彼れが内に對してはいゝ親父であるといふ俠客めいた氣質が、手下の集まる原因である。殊に未來性をたつぷり持ち合はせた、鳩山一郎、森恪、宮田光雄氏等の如き人物を秘藏してゐることは鈴木氏に取つて過分な幸福である。

鈴木氏の次におへられるのが久原房之助氏である。氏は政治生活には尋常一年生だ。たつた一回當選した代議士に過ぎない。その人を一躍大臣にするから小泉策太郎氏が憤つて脫黨したり、黨員の不平も田中氏に向つて投げかけられる。が然し、事實久原氏は相當以上の政治家である。分析的比較研究を試みるならば閣僚中一番政治家としての素質が豐かだらうと思はれる。

細かい說明の餘裕はないが、細心であつて豪膽である。算盤に明るくて算盤を超越し得る。ザンギリ頭の童顏、鐵緣の眼鏡の下から羊の樣なやさしい目をのぞかせて人と應待する。相手をそらさぬ樣なやわらかい調子でいくらでも話しをするが相手に要領を得させない。鈴木氏は一見して毆りたくなる面憎さをもつてゐるが實は好々爺であるに反し久原氏は一見處女の如くにして剛々しさは鈴木氏にまさる。

日立鑛山爭議の眞只中へ、事務員さへも下山した危險な山へ、エツサ〳〵と登つて行つて二晩かゝつて爭議を解決した豪膽さは、彼れを充分政治家づけるであらう。その日立鑛山を得て百萬の富を作る迄には、自分も一緒に坑の中に入つて掘つたこともある。このあたりの熱は通り一ぺんの代議士や官僚上りの閣僚などゝは趣を異にしてゐる。で、彼れは充分すぎる野心を藏して久原黨の黨勢擴張に苦心してゐる。田中義一氏は多年の恩義にむくいる爲めに、矢の樣な非難が降らうとも氏を引き立てやうとしてゐる。しかうして、久原氏には總裁た

るの資格に於て他の競爭者に劣つてはゐない。だから、田中氏が總裁である期間が長びけば長びく程久原氏が後繼者たり得るの資格を増して行く。田中氏も其の邊の事はちやんと例のオラが胸に藏してゐるかも知れない。が、今日や明日や明後日あたりに、田中氏が辭任でもする樣なことがあれば久原總裁は成立しない。田中氏と同じ身上だとはいふものゝ、久原專用の土臺が出來てゐない。

だから田中氏も、お疲れではござい……やめにならぬ方がよいのである。政權をもつてゐる中は、常に不平か……ひそんで居やうとも、世間が何と評しやうとも、後釜をねらふ曲者が居やうとも田中總裁萬歲である。だからオラも疲れるではあらうが、金輪際政權を手ばなさぬ工夫をすることである。

次の總裁は誰

鈴木＝久原＝江木＝安達
幣原＝平沼＝床次＝若槻

野村胡堂

田中總裁は、政權を失ふと同時に、政友會の黨首としての地位をも併せて棒に振るであらう、それは、黨首になつた經路に無理があり、且つ黨首として思ひの外不人氣な彼に取つては、氣の毒乍ら、當然豫想され得る末路でなければならぬ。

濱口總裁は、それとは全く事情が違ふ、彼は黨人として既に十數年の經歴を有し、その總裁就任は、順序であり、擧黨一致の心からなる推戴を得たものである。

從つて、民政黨としては、嫌が應でも、一度は彼を總理大臣の椅子に据ゑなければならぬ義理がある。病弱だからといふ口實で、その後釜を考へることは、濱口に對してはあまりに殘酷であり、民政黨としても、それは到底忍びない事だ。

併し單に理屈の上から言へば、總裁の後繼者を考へられない事はない、それは誰か。

◇

一般の政黨員は、素知らぬ顔をして居乍らも、常に將來の黨首について周到な考慮をめぐらして居る。一番有望な後繼者を守り立てて、それに引つ付いて居ることは、現代の黨人に取つては一番安全な投資方法だからだ。

から言つた空氣は、既に政友會あたりにもかなり濃厚になりかかつて居る。黨員達は、或は意識して、或は無意識に、將來の勢力を中心として、大小それぞれの磁場を形成して居るのだ。

ところで政友會にはどんな中心があるかといふと、今のところ、十指十目の觸ふのは、鈴木喜三郎と久原房之助だ。イヤそんな事は無いといふ人があるかも知れぬが、事實は枉ぐる由もない、鈴木と久原の四國に、一番濃厚な磁場が出來て居ることは、いやしくも政治に興味を有する程の者で知らない人は無からう。

これに對して民政黨の方は、安達謙藏と江木翼がある。二奸でも三凶でもいたし方は無い。あまり愉快な顔ではないが、外に人は無いのだから、陣笠根性の心理には、この二人が最も將來有望らしく映つて居るのは事實だ。

尤もこれは、次の黨首としての可能性の多いのを擧げて居るので、誰が黨首として適任かといふ議論ではない、適任不適任といふ事になると自ら又議論が別になる。

◇

政黨の總裁には、大事な資格が三つある。一つは包容力、一つは、金そして最後のものは指導精神だ。包容力と金とについては言ふ迄も無からう。伊藤公、原氏、大隈侯などは最もよき包容力を有し、高橋氏、加藤伯などは最もよき金力を持つて居ると信ぜられて居た。

總選擧や政變が始まると、政黨はフンダンに金がいる、モグラモチの穴へ水を注ぎ込むやうに、いろいろの穴へ無限の黃金を注ぎ込まなければならぬ。而してそれは多くの場合黨首の仕事だ。二十何名の新黨クラブでさへ、床次は九百何十圓の家賃を出して居る有樣だ、政友會や民政黨のお勝手が、どんなに荒つぽいものか想像に餘りあるだらう。

が、世間の一部で考へるやうに必ずしも金ばかりが總裁の資格では無い、一に金、二に金、三に金と言つた時代もあるが、今日の世の中はそんな甘い事では通らない。包容力と金だけで黨首を張り通せたのは十年も二十年も前の事だ。

今時の總裁たるものは、其の上に指導精神が必要だ。指導精神といふ言葉が可笑しかつたら、これを黨首としての識見と改めてもいい。いやしくも一黨の黨首たるものは、二百二十名の政友會を拱げて起つと、たつた四名の實業同志會を牛耳るとを問はず、その黨首を通じて國民を攜つて行からといふ、充實した精神を持つて居なければならぬ、これ私の所謂指導精神だ。

指導精神を形成する第一の要件は、政務に對する理解だ、これを理解能力と言つてもいい。第二の要件は、更に主義政策を押し樹てて行

ぐ理想だ、これは多少のイマジネーションが必要だ、尤もこれは、あり過ぎてはいけない、過ぎるとツイ後藤新平氏になる。

◇

さて、この條件を當てはめて行つて、上に掲げた次の黨首候補者の適不適如何。

先づ政友會の方から言ふと、

久原は申す迄もなく財界から出た人、近頃左前だと言つても、黨人から叩き上げられたのとは自ら財布のフクラミやうが違ふ。が併し、彼は財力以外は全然疑問だ。或人は彼の人格を褒めちぎるが、それが何處まで本當なのか、何處まで政界に通用するか、疑問と言へば疑問だ。便所へ電話を引くやうなセセツコマシイ頭では、あまり遠大な理想もあり相はない。

指導精神に於ては、恐らくゼロだらう、彼は政界の一年生だ、政治に對しては、常識以上の何者をも持つて居る筈はあり得ない、この點彼も亦肥料の分配組たるを免れない。

鈴木には財力は無い、が併し彼は政治を解し、政務に通曉して居る。この點、大政友會に於ても、彼に追從する者はそんなに澤山は無い筈だ。其上彼は、闘志が旺んで宣傳上手でもあるが、その宣傳は反つて不人氣を喚ぶほど舊式で、その闘志は又あまりに多くの敵を作る。政治家としての理想も、甚だ高しとは申されない、議會中心政治問題で騒がれるやうな事では、新時代の指導者として何んなものであらう。

翻つて一方、民政黨は如何。一怪物安達謙藏は、財力なく、識見なく、包容力なく、僅に有するものは、一流の剛岸と選擧技術のみだ、これを以て將來の黨首に擬するは、一種時代錯誤でなくて何んだらう。

江木翼は如何、金力に至つては倒様に振つても鼻血も出ない方だが、彼には拔群の聰明さがある。彼は政務に通じ、相當の識見を有し、代議士黨員の指導者としては、知識の量に不足は無い。が、惜しむべし、彼には包容力が無い、始末に了へぬ黨員を操縱し、理想らしきものに醉はせて、彼の思ふが儘に踊らせることが出來るかどうか大に疑問だ、彼の頭や人格には蒸氣が相當に豐富だらうが、あまりにアルコール分が少い。

◇

觀じ來れば以上四人は、いづれも黨首の相續者らしく考へられて居て、事實の相續といふには甚だ遠い。田中、濱口が各々後繼者を用意して引退するならば格別、不意にその位置を去つて、足許から鳥が立つやうに相續者を物色することになれば、恐らく中間人物を拉し來つて、婿養子とするの途を賢こしとするだらう。

此意味に於て、政友會の一部には、平沼騏一郎に望を嘱して居る者がある。民政黨の一部には、幣原喜重郎を目標として居る者がある。黨首候補者として、いづれも尤らしく、いづれも多少の可能性はあるが、實現は恐らく困難だらう。

それならば、外には無いか。

これは常識以外で、理詰めには考へられない事ではあるが、時のはづみで、案外有力な候補者にならないものでもあるまいと思ふのが二人ある。政黨は水物だ、時の勢でどんな事になるかもわからない、暫らくその名を掲げて、長い眼で見て居るとしやうか。

◇

それは、政友會の方で床次竹二郎、民政黨の方で若槻禮次郎だ。

床次の第三黨計畫は、田中が内閣を投出した時、直ちにその政權を奪取するのが目的では無かつたらうか、さうで無いまでも、田中が引込んだ後の政友會に、その根を下さう位の事は當然考へて居るだらう。微々たる第三黨で、キャスチングボートを握る位のことで、あの野心滿々たる床次が我慢して居るわけは無い。

床次の強味は、不思議な財力を有することだ、曾ては本黨にも注いだ、民政黨にも注いだらう、新黨クラブにも、相當以上に注ぎ込まなければなるまい、何處からその金を持つて來るか、それは政界の奇蹟の一つにされて居る。

人間としての床次は、單に一介の好人物で、頭も良いとは言へず、識見も高いとは言へず、僅に老大な輪廓と、包容力らしきものを持つて居るに過ぎない。

彼にして、更に政友會と接近する機會を作り、田中が何んかの理由で急速に引込んだとしたら、或は入つて政友會を率ゐないとは誰が保證しやう、[illegible]れていふが政黨は水物だ、横田千之助亡き今日の奇蹟は充分實現し得る可能性を持つて居る。

若槻をもう一度民政黨の黨首に擬するのは、床次を政友會以上の常識外れだが、これも或場合には可能性が無いとは言へ濱口が後繼者を準備すれば問題は無い、もし江木その他の人乃至は自稱相續人達が、政治家としての停年に達する前、退して、後繼者の詮衡が困難を極めた場合を想像して見るが、つかしい繼嗣問題に、黨の運命を賭けて騷ぐより、若槻を再めて、一時を糊塗する臨時便法を適用しないと誰が保證し得る但しこの實現は、斷じて計畫的であつてはいけない、物のハさうなればなるだらうと言ふ迄の話だ。

この、豫想するさへ常識を飛離れた候補者が、そのくせ最も可能性があるから面白いではないか、若槻の政界に於ける創痍はしも大ならず、その上彼はまだ若くて、然も丈夫だ。

◇

かくて結論に入る、政友會の鈴木、久原、民政黨の江木、安達は、格好な相續者には相違ないが、直ちにあの屋臺を背負つて立たせるには、未だ尾鰭が充分でない、恐らく彼等は、何代目か先の相續であるであらう。

第一次の後繼者は、案外飛んでもない所に潛んで居るかも知れない、併し新聞で屢々問題になる、新平後藤子や、巳代治伊東伯で無いこと

く理想だ、これは多少のイマジネーションが必要だ、尤もこれは、あり過ぎてはいけない、過ぎるとツイ後藤新平氏になる。

◇

さて、この條件を當てはめて行つて、上に揭げた次の黨首候補者の適不適如何。

先づ政友會の方から言ふと、

久原は申す迄もなく財界から出た人、近頃左前だと言つても、黨人から叩き上げられたのとは自ら財布のフクラミやうが違ふ。が併し、彼は財力以外は全然疑問だ。或人は彼の人格を褒めちぎるが、それが何處まで本當なのか、何處まで政界に通用するか、疑問と言へば疑問だ。便所へ電話を引くやうなセセツコマシイ頭では、あまり遠大な理想もあり相はない。

指導精神に於ては、恐らくゼロだらう、彼は政界の一年生だ、政治に對しては、常識以上の何者をも持つて居る筈はあり得ない、この點彼も亦肥料の分配組たるを免れない。

鈴木には財力は無い、が併し彼は政治を解し、政務に通曉して居る。この點、大政友會に於ても、彼に追從する者はそんなに澤山は無い筈だ。其上彼は、鬪志が旺んで宣傳上手でもあるが、その宣傳は反つて不人氣を喚ぶほど舊式で、その鬪志は又あまりに多くの敵を作る。政治家としての理想も、甚だ高しとは申されない、議會中心政治問題で騒がれるやうな事では、新時代の指導者として何んなものであらう。

翻つて一方、民政黨は如何。

怪物安達謙藏は、財力なく、識見なく、包容力なく、僅に有するものは、一流の剛岸と選擧技術のみだ、これを以て將來の黨首に擬するは、一種時代錯誤でなくて何んだらう。

江木翼は如何、金力に至つては倒様に振つても鼻血も出ない方だが、彼には拔群の聰明さがある。彼は政務に通じ、相當の識見を有し、代議士黨員の指導者としては、知識の量に不足は無い。が、惜しむべし、彼には包容力が無い、始末に了へぬ黨員を操縱し、理想らしきものに醉はせて、彼の思ふが儘に踊らせることが出來るかどうか大に疑問だ、彼の頭や人格には滋養が相當に豐富だらうが、あまりにアルコール分が少い。

◇

觀じ來れば以上四人は、いづれも黨首の相續者らしく考へられて居て、事實の相續といふには甚だ遠い。田中、濱口が各々後繼者を用意して引退するならば格別、不意にその位置を去つて、足許から鳥が立つやうに相續者を物色することになれば、恐らく中間人物を拉し來つて、婿養子とするのを良しとするだらう。

此意味に於て、政友會の一部には、平沼騏一郎に望を囑して居る者がある。民政黨の一部には、幣原喜重郎を目標として居る者がある。黨首候補者として、いづれも尤らしく、いづれも多少の可能性はあるが、實現は恐らく困難だらう。

それならば、外には無いか。

これは常識以外で、理詰めには考へられない事ではあるが、時のはづみで、案外有力な候補者にならないものでもあるまいと思ふのが二人ある。政黨は水物だ、時の勢でどんな事になるかもわからない、暫らくその名を掲げて、長い眼で見て居るとしやうか。

◇

それは、政友會の方で床次竹二郎、民政黨の方で若槻禮次郎だ。

床次の第三黨計畫は、田中が内閣を投出した時、直ちにその政權を奪取するのが目的では無かつたらうか、さうで無いまでも、田中が引込んだ後の政友會に、その根を下さう位の事は當然考へて居るだらう。微々たる第三黨で、キヤステングボートを握る位のことで、あの野心滿々たる床次が我慢して居るわけは無い。

床次の强味は、不思議な財力を有することだ、曾ては本黨にも注いだ、民政黨にも注いだらう、新黨クラブにも、相當以上に注ぎ込まなければなるまい、何處からその金を持つて來るか、それは政界の奇蹟の一つにされて居る。

人間としての床次は、單に一介の好人物で、頭も良いとは言へず、識見も高いとは言へず、僅に尨大な輪廓と、包容力らしきものを持つて居るに過ぎない。

彼にして、更に政友會と接近する機會を作り、田中が何んかの理由で急速に引込んだとしたら、或は入つて政友會を率ゐないとは誰が保證しやう、重ねていふが政黨は水物だ、横田千之助亡き今日では、この奇蹟は充分實現し得る可能性を持つて居る。

若槻をもう一度民政黨の黨首に擬するのは、床次を政友會に擬する以上の常識外れだが、これも或場合には可能性が無いとは言へぬ。

濱口が後繼者を準備すれば問題は無い、もし江木その他の法定相續人乃至は自稱相續人達が、政治家としての停年に達する前、不意に引退して、後繼者の詮衡が困難を極めた場合を想像して見るがいい、六つかしい繼嗣問題に、黨の運命を賭けて騒ぐより、若槻を再び起たしめて、一時を糊塗する臨時便法を適用しないと誰が保證し得るだらう。但しこの實現は、斷じて計畫的であつてはいけない、物のハズミで、さうなればなるだらうと言ふ迄の話だ。

この、豫想するさへ常識を飛離れた候補者が、そのくせ最も實現の可能性があるから面白いではないか、若槻の政界に於ける創痍は必ずしも大ならず、その上彼はまだ若くて、然も丈夫だ。

◇

かくて結論に入る、政友會の鈴木、久原、民政黨の江木、安達は、格好な相續者には相違ないが、直ちにあの屋臺を背負つて立たせるには、未だ尾鰭が充分でない、恐らく彼等は、何代目か先の相續であるであらう。

第一次の後繼者は、案外飛んでもない所に潜んで居るかも知れない、併し新聞で屢々問題になる、新平後藤子や、巳代治伊東伯で無いこと

士的智識的集團と、地方議會から進出して來た地方ブルジョワジイと（地主及び農業利潤の餘剩を商工業資本に轉化した資本家）同じく地方議會に根據を据ゑ得た政治職業家と、結合した勢力と云ふ二つの細に言へば多くの狹雜物から、政友會は構成されたのである。この事實は、政友會に地主的要素の多い事又ひいて最近の田中大將の總裁を歷史的に說明するものである。一方に於て、同志會も憲政會も、大體相似た過程によつて構成された。長閥の歷史的勢力と軍閥勢力は桂大將によつて代表された。文治官僚の勢力は、是に於て特に著しい。之は後藤田、大浦によつて代表された。今は若槻、濱口、江木によつて代表される。官僚に轉化しそこねた處の他の藩閥的武士的知識的集團と夫れから派生した自由民權運動者の結合である。改進黨の殘黨は尾崎其他によつて代表される。地方議會から進出して來た地方ブルジョワジイは、憲政會に於ては、其の發生の歷史が新しい丈け、商工業資本家の色彩が顯著である。更に地方議會に、憲政會に於ては主として商工業都市に、足溜りを置く政治職業家の一群があるのである。畢竟、共に、**社會層から遊離した政治擔任者乃至政治職業家の混合型態であつて**、議會政黨とはいひながら、ブルジョワ民主主義の第一頁をも具現して居ない處のものである。畢竟、政治統制力の所在は、軍閥と文治官僚との一群に存し、政權は其の一群の間に於ける藩閥的分派の夫々と、政黨全部に於ける藩閥的及び官僚的要素の聯絡型態其者の間を授受されて來たのである。尚元老の政治的勢力を說明すると共に樞密院

勢か憲法で定められた權限以上の作用を

然るに、〇〇〇、、問題を端緒とし、又山縣公の死によつて官僚の政治に於ける實質的統制力は崩壞した。吾人の知る限りに於て、之は主として、當時の首相原敬に負ふ處のものである。藩閥的官僚的力は政黨に對立する存在でなくなり、其の一部は政友會なる政黨的存在に混入したのである。政黨時代來るの際は、如實に政友會の絕對多數によつて證せられた。憲政會に於ける正統派としての藩閥的官僚的勢力は當初から、政友會に比して稀薄であつたが、其の代り他の藩閥的官僚的勢力は優勢であつた。藩閥的官僚の正統派の崩壞と共に、官僚の本家は憲政會に引越したかの觀がある。薩派は、〇〇に於ける爭で長閥を倒したが、十五銀行問題で失脚せんとし、薩派一形式的勢力としての政友本黨をして憲政會と握手せしめ、市來日銀總裁を憲政會內閣の下に於て其の地位に留らしむることによつて、窮狀を免れんとした。しかし、結尾に於て矢張り實質的勢力を失つてしまつた。以上の藩閥的官僚的正統派が夫自體として政治的勢力であつた時代は既に**終つたのである。彼等に隸屬して居た官僚も政黨に分屬し、資本家も**分屬した。だが、其の代り、顯著なる現象は大資本家的（金融資本產業資本の）要素が顯著に政黨活動を支配し來るに至つたことである。しかしある資本家は、兩政黨に捨石を打つて其の事業を安固にする。更に大なる資本閥は、自ら夫々對立して相鬪ふの故に、政界に於て夫々對立して相鬪ふ政黨の孰れかに加擔して、其の事業を安固にする。

資本主義の政黨に於ける優勢は近代政黨の特色である。といはねばならない。たゞ紡績業は從來政府の保護を受くること最も少かりしものであつた丈け政治勢力にの隷屬性が少くして、實業同志會たる自由主義的政黨の發生を生んだものである。

近代の政治理論は、政黨を以て政策による對立と見るよりも、階級的な對立即ちイデロオギイによる對立として居る。かくてこそ、獨逸の政黨は、獨逸國民黨、國民社會黨、獨逸社會黨、バワリア人民黨、バワリア農民同盟、農民同盟、人民黨、民主黨、中央黨、ハンノーヴアー黨、社會民主黨、共產黨の小數分立を示し、佛國の議會政團は保守派、共和同盟、左翼共和主義者及民主主義左翼、急進黨及び急進社會黨、共和社會黨、社會黨、共產黨の小數黨分立を示して居る。政權は、政策による各派連合によつて保持されるのである。則ち知る。二大政黨對立又はいはゆる憲政の常道なるものは普選後の今日に於ける常道でないのである。政權移受の爲めにあらゆる夾雜物を集めて其他にこしらえ上げた二大政黨は即ち必然的に分裂の過程を辿るものである。共通の階級層が即ちイデオロギイが、二大政黨と云ふことの爲めに、夫々相對立する陣營に介入して居たものが、今や分裂を通して新らしい結合に入る可きものであらう。社會現象は純粹單純ではないから、多くの隨伴した現象を伴ふであらうが、要するに既成政黨に保守自由の二大主點に對立しながら、當面先づ各種のイデオロギーによつて分裂して存在するに至るであらう。これは既に始まつて居る。民政黨に於ける官僚閥と改進黨系の爭ひは未だ序幕であらう。反動床次パ政友會の反動的主流と合流する傾向もその第一波に過ぎない。加藤杉浦岩切氏等が夫々民政黨と新黨俱樂部內に持つイデオロギイはいづれの日にか表面に表はれるであらう。政友會に於ける分裂は改造となつて表はれよう。紙數がないので、政友會に關する敍述は之を省くこととする。だが、兎に角普選によつて第一に代議士は親分から貰ふ金丈けでは當選出來なくなつた。ある程度の見識と人物が要件となつた。親分に對する從屬性は少くなつた。第二に小數黨の利益を確認した。第三に兎も角も新らしい頭と清新な精力とでなければ、議會で活動し得ない事を意識した。大衆の政治常識は既成政黨の幹部の夫れより遲れて居ることは發見された。即ち分裂動搖は必然であるのである。

田中總裁の魂膽

中野正剛

政友會の次の總裁は誰になるかと云ふことは、田中總裁が今後何年間其の地位を維持するかと云ふ前提を解決して後に考慮すべき問題である。

田中總裁は現內閣が繼續する限り、總裁の地位を失ふやうなことは斷じてあるまい。併し內閣は如何に長く見ても今後一年か二年、早ければ半年內に倒れるかも知れぬ。其の內閣の倒れた時が、政友會內に成長せる幾多の勢力が是に分解作用を起す時であり、其時こそは田中總裁が、之を鎭撫するに非常の力を盡す時であらう。さうして出來るならば圓滿に退却して、意中の人を後任總裁に推すであらう。その意中の人とは誰であるか、それは久原房之助君である。

政友會の內幕と政界の情實とに通曉せぬ人々は、何々久原など云ふ財界の落武者が、大政黨の總裁などになれるものかと罵るであらう。併し政友會が何故に田中義一君を總裁に頂いたか、田中義一君が如何にして今日の地位を維持するかを知る者は、何人も余の推定を怪しまないであらう。

一言にして盡せば、田中義一君が政友會の總裁になり得たのは金の力である。田中義一君に如何にして金があるかと云へば、それは長州軍閥の政治的勢力に附隨する一切の遺產を繼承したからである。機密費を胡魔化したとか、金塊を胡魔化したとか、乾新兵衞から貰つたとか、種々雜多な非難はあるが、要するに田中氏が豐かな軍資にありつくことが出來たのは、長州軍閥の正統を繼承するからである。

山縣公が大御所として儼存する間、陸軍を中心に〔…〕の自由に出來る莫大なる金があつた。山縣在世中此金は國家の大事にのみ使用せらるべく、之を惡用して政界を攪亂することなどは出來なかつた。それが寺內時代にもさうであつたが、田中時代になつては、如何に之を使用したか、之は天下の大疑問となつて居る。山縣のやうな寺內のやうな謹嚴な男が居たならば、西伯利出兵に伴ふ金塊とか機密費とか云ふものは、陸軍の最高機密費の中に振り込まれ、それは長州正統派の信ずるが如き、純眞なる國家の目的の爲にのみ使用せらるゝに至つたであらう。

然るにそこに田中義一君のやうな政界の大野心家が出て來たから叶はない。何でも田中義一君は若い時から講談本や何かを讀み耽り、天下を取ることを唯一無二の理想としたらしい。さうして其の天下を取らんが爲には、彼れが長州正統派として承けついだ、有形無形一切の遺產を濫費して顧みないのが、彼れ田中義一の今日ある所以である。

支那の古書莊子には、盜跖と云ふ假想的人物をして、『戸の外から目覗いただけで、其の家の中の財產のありかや、總額が見て取れるやうになれば盜中の聖だ』と告白せしめてある。田中義一君は長州軍閥の正統として、陸軍省軍務局長時代から、權力の要衝に坐して、天下の形勢を觀測した。さうして何處をどう押せば、天下の大金が如何に動員せらるゝかと云ふ要點を見極めた。さうして黄金動員の爲に捨石も惜けば、人物も蓄した。斯くして羽翼全く備はるに及びて、猛然と

して政界に出て來たのである。田中氏も長州の正統を繼承せねば、あれ丈の黃金動員は出來まい。長州の正統を繼承しても田中氏でなければ、あれほどの手腕は發揮し得まい。此意味に於て田中氏は果報者であり、天才である。

天才が大家に生れて大金が自由に使はれる。随つて彼は明治以來蓄積せる長州閥の遺産を蕩盡して、長閥最後の豪奢振りを發揮するものである。少數政友會の總裁に擔がれて以來、黃金の魔力一點張りで、黨員を殖やし、政權を取り、今日の政界に今猶攻勢を維持する點は頗る華やかなものではあるが、其の一方に於て山縣以來蓄積せる長閥の勢力は彼によつて蕩盡されつゝある。

併し政界で大金を散ずれば、金其物は減ずるが、權力は多少増大する。其の權力を惡用すれば金はまた出來る。其の金を使へば又々權力が維持される。そこで田中義一君は一方長閥の遺産を蕩盡しながら、大に後圖を策せんとし、此處にあつらへ向きの人物久原房之助君を得た。

久原君は決して馬鹿者でない。愚圖でない、智慧もあれば膽略もあらう。何樣大戰中の好景氣には三井三菱につぐ程の大成金となつた男が尾羽打ち枯らしてしまつたかと思へば、一旦意氣相投じた田中義一君の爲には、何處までも懸命の應援を繼續し、愈ゝ覆面を抛ちて代議士に打つて出た所は、さすがに一代の風雲兒である。

田中義一君が政友總裁となつた最初から、黃金動員の勳功によりておらが總裁をおらが物にしやうとした男が、小泉策太郎君である。小泉君は出來る丈田中義一君に入れあげて、其の代りに自己の考へ通りにこき使つてやる考らしかつたが、彼をして第一に幻滅を感ぜしめたのは、內閣組織の際である。田中總裁は乾度俺の言ふことは聽くときめ込んで居た小泉には、少しも頓着せずして、彼れ一流のおらが人事行政をやり始めた。第二に、而して最後に、小泉君をして匙を投げしめたのは、總選擧の際である。小泉君は少なからぬ選擧費を調達して田中の前に並べて見せたが、これなら悅服すると思ひきや、田中は軍資缺乏など云ふ顏つきもせず、金が出來たら君の勝手に使ひ給へと云ふ風であつたさうだ。之には流石の小泉も呆氣に取られたが、田中の方にはズット大きな旦那がついて居たのである。それが卽ち久原房之助君である。小泉が事志と違ひ、政友會を去るに至つたのは之が爲である。

田中と云ふ長閥の正統にして、且つ一世の濫費者を抱へ込み、之に貢ぎて其の權力を維持し、其の權力を利用して、公私の黃金動員を巧妙に運ばする久原房之助君は、黃金萬能の政界に於て随一の調法者である。彼れが入閣せんとする際に、素町人入る可らずの札を立てゝ、之を阻止せんとした閣僚は、水野、望月、三土であつた。併し解りの早い望月は田中總裁から一言今までの關係を說明されると、急ち首肯いてしまひ、迂遠な三土はそんなとかと聽いて腰がくじけ、コダワリの多い官僚の水野一人が踏み外して隊落したのも、田中に取りて久原

が如何に有力なる陰武者であつたかを立證する。

田中總裁は裏面の援助者たる久原房之助の力により、當々政友會を大にすると共に、其の大なる政友會をおらが物にしてしまつた。新參の久原が癪に障ると力んで見ても、自分達が衣食する政友會の臺所を久原が一人で引受けて居ると解つては、二の句の次げやう筈はない。渇しても盗泉の水を飲まずなどと云ふことは、斷じて現代に流行せずとすれば、田中に服從する政友會員は、矢張り久原に服從せねばならず、大臣も陣笠も、盡く久原に召し抱へられたる大名、小名、足輕、小者となるの外、旨い轉業先は斷じて見つからない。

今日の政友會に於て、現内閣に於て、事實上の副總裁、事實上の副總理は久原である。從つて次の總裁は久原であらう。これは少くとも田中義一君の當て込んだ仕事であり、又現政友會に成長しつゝある機運である。久原君は政友會總裁までは行くであらう。併しまさか總理大臣にはどうだか。

田中總裁の人事行政は非常に不評判である。而し黄金、智力、腕力才力、膽力ばかりを標準とし、正邪と氣品の高下とを別にして、所謂實力本位に見れば田中の人事行政はなかなか旨いと曰はねばならぬ。金が第一に入るから、一番金の出來る久原を後任總裁にする所、露骨ではあるが大膽なやり口である。金さへあれば人材は使へる。其の人材は腕本位で行くから、鳩山、前田、森、秋田等の少壯連を、ドシドシ抜擢して、他日の大臣にも、後年の總裁にも育てゝやらうと[illegible]又後進に對する御慈悲である。

右は筆者の理想を交へず、現政界、現政友會を其儘觀察して、單なる豫測を加へた丈であることを承知して頂きたい。

早稲田大學

政治經濟講義

現代社會人にとつて最も緊要なる『社會問題』と『思想問題』との完全なる綜合的講義！　苟くも時代に目醒めて社會的聰明に向はんとする全國民大衆の必讀すべきものである。

法律講義

普選法は既に施行され今秋を期して更に陪審法は施行されんとす。法律知識の欲求は國民の輿論となつた。新時代人として活躍せんとする者及び高等試驗受驗者は本講義に來れ!!

文學講義

一般文藝の愛好者は勿論、文藝の創作家・批評家・研究家たらんとする者、及び文檢國漢文科受驗者は必ず讀め！歷史あり背景ある、名實共に具はれる『文科大學講義錄』はこれ

秋季新學年開始
入學の絕好機

各講義共
内容見本進呈

每月一册發行
一ケ年半修了
學費月一圓廿錢
一册編版四百頁

中學講義、商業講義
女學講義、電氣工學
各講義共新學年開始
内容見本速時進呈

東京牛込　早稲田大學出版部發行

電話牛込三四五・三四六
振替東京一一二三

仙臺以北に於ける吉利支丹遺跡

——傳說と史實——

村岡典嗣

昨年二月、本誌に仙臺殉教の一文書を紹介した後心がけてゐたが、この程漸う思立つて、仙臺市以北の二三地方に、吉利支丹の遺跡を探訪して見た。その收穫を記して、吉利支丹研究家の參考に供する。

本吉郡狼河原町は、仙北鐵道米谷淺水驛から北上川を渡つて東北約二里、同じ川の支流二又川にそうた山間の平地にある。かねて登米郡南方村の高橋清治郎氏から筆寫しておくられた、享保五年拾一月廿九日付「類族存命壹季本帳」によつて、當時信者が相應に多かつたことを知つたので、先こゝを尋ねた。小學校長中津川氏の案内で、一二舊家を訪ね、終りに町の入口の大慈寺（禪宗）を訪うた。類族の丹那寺として、件の帳にもしばしば名が出た寺であるが、火災で燒けたさうで、何等文書も殘つてをらぬ。たゞ、檀家に、もと吉利支丹の家で、數代前に大津保村の大籠（次に出づ）から移住したといふものがあるよしを、住職から聞いた。大籠又馬籠方面からの類族の移動は、かの類族帳にも記されてある。本堂の後ろの山にある墓地を探つたが、問題となるものもなく、たゞ慶長十二年八月十四日付の、「右爲泉窓禪定門十七回忌之辰也」とある古碑の紋章の卍が目に止つた。別に吉利支丹關係のものではなからうが、住職にきけば、他地より持つて來たものといふ。（序でに境内に仙臺俳人曰人の句碑があつた）

大籠馬籠の地に、吉利支丹の遺跡があるとの事は、嘗て、盛岡の菅野義之助氏から聞いてもゐたので、吾人の第二の目的地は、大籠であつた。大籠は岩手縣に屬し、東磐井郡大津保村の字で、狼河原の東約二里、街道から北に入つた村落である。狼河原で名を聞いてきた儒者千早多聞氏を、千葉小學校長の紹介で訪ねた。氏は千早東山翁の息である。東山は、もと磐井郡奥山村の人で、江戶に出て山地蕉窓の養子となり、儒を以て幕府に仕へたが、安政の比、時勢に慨して此地に來り、匿れ住んだ。爾後育英濟民の事に盡して、郷黨に重んぜられ、明治三十四年八十才で歿した。千早氏を訪うた事は、こよなき幸福でおつた。氏によつて示された東山翁の遺著や遺蔵の書、又氏から親しく

聞いた談話は、吾人をして大籠の吉利支丹について、ほゞ今のところ十分な知識を得させた。遺著とは大籠往來及び大籠神明記であり、遺譽とは裁栅坊物語抄錄である。吾人はまづ往來によつて、大籠の如何なる地かを見よう。

「陸中陸前間有桃源號大籠鄕。前有田東山突兀而貫九天。後有保呂羽山峨々而接虛空。左右皆山也。其爲鄕形也。猶士谿於此有百頃沃田。戸數一百。口數七百存。雞犬聲喔々相聞。鳥雀好哢。此隱者仙人所住也。自此去人間界也。北至藤澤凡二十里。南至狼河原凡拾六里。東至馬籠凡拾里餘。鎖此三洞口則懸隔人間界。而一鄕獨立也。」とは書出しである。同書はすゝんで人情の質朴信實と一鄕の親睦とを誇り、土民の長壽を說く。土產としては、煙草を始め、朝鮮芋、葛粉等の農產物があり、又鐵が數へられる。名所には、大峰、中峰、小峰の山々、兩股河、左澤、右澤等廿八、寺社には、大籠神社、妙泉寺等十二、次に舊家には日之澤の首藤家以下廿一戸があり、それらの舊家は、いづれも戰國時代諸國に割據した武將の隱遁したものゝ子孫であるとされる。こは幕末か明治初年の記述であるが、思ふに、今も昔に多くは變るまい。殊に吉利支丹の輸入また流行當時のこの地の狀態も、これによつて想像するに足りる。さて、かくの如き桃源仙境の地に、いかに吉利支丹宗が入りまた行はれたか。この傳說と史蹟とを、文字の上に傳へてゐる殆んど唯一のものが裁栅坊物語である。この書は、思ふに東山翁抄錄の千早家藏本以外は、他に片影を存すまいとのことである。作者裁栅坊（裁造、才三も書く）は東山翁の序記によるに、大籠邑の百姓で、慶長十七年に生れ、寬延三年までは生存し、九十三才から剃髮して裁栅坊と稱し、長壽百三十才に及んだといふ。即ち元文二年に歿したこととなる。而して彼は、かの義經の家來で、五百才も長らへ、元和中政宗に召されて樣々の昔物語をしたといふ、有名な淸悅房から、養生傳を得て、この長壽を保つたと傳へられる。

この裁栅坊物語の內容は、主としてこの地方の歷史や傳說であるが、吉利支丹に關するものを綴り合はせると、次の如くである。

文祿元年に、千松大八郎同小八郎といふ兄弟が、吉備の中山有木の別所から、この地に來た。背の澤といふ所を見立てゝ、鄕士須藤相模と共同して開發し、專ら烔屋工として、鐵の採掘に從つた。土地の舊家の祖先たりし人は、概ねこの兄弟に從つて、烔工に從事したので、やがて大籠村をして、仙台領の御鐵根元邑とならしめた。（當時の烔屋方八人衆の家は、今もなほ存してゐ、從來の廿一名家のうちの重なものをなす）。而してこの千松兄弟が、吉利支丹の信者で、表向烔工を職とすると共に、布敎につとめ、またゝくひまに、當村はじめ近鄕に信者三萬を得た。兄弟が居住したところには、今なほ千松の名殘り、山神の社があるが、そこにははじめデイス佛を安置した。かくて大籠は、吉利支丹宗の中心となり、その際、[illegible]

慶長年中に斷絶し、虛無僧寺大聖寺は元和中に住職を追出し、更に斷絕にある神明神社(今も村社として存す)は、寛永年中に社司和泉守殿も、吉利支丹の徒に逐られて、田畠屋敷を取られ、栗原郡柿沼に逃げたといふ有様であつた。然るに一方寛永の頃から、伊達家の禁教が嚴しくなるや、此地の信徒も、固より迫害を避け得なかつた。千松が安置したデイス佛が埋められて、山神を代へて祭るやうになつたのもこの時である。(而して山神は、須藤相模の家の氏神として、今も十二月十二日に祭られる)。更に寛永十六年には、耶蘇宗徒八十四人、翌年には九十四人が所成敗となつた。刑場の跡へは、菩提の爲に地藏が立られ、地藏の辻と名付けられた。(この辻は澤の入河と左澤川といふ二つの小川の辻になつた所で、今も存する。小字曾根といふ。澤の入河の岸に、大きい丸石があり、實驗石と呼ばれてゐる。刑死の時、役人が腰かけて首實驗した石とされる。)

千松兄弟の何人かは未だ明らかにし得ぬ。備中の出とあるからは、吉利支丹大名の一人浮田秀家の家臣などであらうか。とにかく、當時備中あたりから流浪して來たといふことは、あり得べきことでもあり、この傳説には相應の史的根據があるべく、この兄弟によつて、大籠が馬籠や狼河原はじめ、近隣の吉利支丹の根元地となつたことは、疑ひないと思ふ。

この半史的傳説と、別種の一傳説との結合を示すものが、大籠明神由來記である。この書は、東山翁の著のよしで、安政五年當地に漫遊して來た醫師法庵といふ人が、舊家首藤家の依頼に起して、同家が吉利支丹隆盛以來廢絶してゐた同神社再興の功をたゝへるとともに、同社の由來を記したものに擬せられる。文中、吉利支丹に關する記述は、概ね栽増坊物語によつたが、其他には、寛永の迫害の頃佐藤對馬といふ處士があつて、元來吉利支丹であつたが、改心の證を示す爲に、當社の掃除につとめ、祭祀毎に神酒を供したりしたので、里人皆之にならつて、改宗の眞似をした。爾來、對馬の子孫を、里人が地別當といつた。この事の爲に、この家は廢絶を免れたといふこと。又、當時この地宗門の盛なことは非常で、連年戸口の版籍に、特に切支丹類族御改帖と記したことなどが加へてある。

さてこの由來記に於いて、吉利支丹と結付られた他の一傳説と、そのいかに結付られたかは次の如くである。曰く、元正天皇の御宇、この地に賊酋が住んだ。身の丈三仞餘、首には兩股の角がある凶々の怪物で、さまぐの妖術を使つた。人々は鬼と稱し、自らは大王可汗とよんだ。その麾下八千二百、近郷數百里を脅し從へた。たまぐ大野東人が勅命を奉じて、東夷征伐に來り、自分を攻撃するにあふや、三牙城を築いて夫々防備を整へ、様々の奇計を施して對抗し、加之例の妖術を用ゐたので、王師も徒らに窘められて危かつたが、七日後に神風が吹起つて城郭を仆し、終に賊軍敗れ、可汗も亦[illegible]の飛來つたのに當つて死失せた。そこで、東人朝臣は神明の加護を謝して神社を建立し、吾稱某を宮司とし、號けて大加護神社と言つた。爾後社

運益々榮えて後世に及んだが、偶ま慶長の比（栽培坊物語には文祿とある）、千松兄弟が來て吉利支丹を傳へ、その教が盛んになつて以來、社運衰運に向つた。さてこれについて、この大籠の地に吉利支丹が榮えた所以を思ふに、そは實に魔鬼大王可汗が故地なるからであらねばならぬ。即ち、「噫當社の衰微して已に廢絶にも至んとする事は、耶蘇の行はるゝよりす。其耶蘇の行はるゝ事は、千松兄弟此地に來りて、其宗旨を弘むるに依れり。千松兄弟の、此地に來りて住する事、……誠に因縁あり。夫此地は、往古大王可汗の住で妖魔の術を修行せし所なり。故に、其舊染汗浴未だ全く除けずして、千歳の下猶以て奇なる事を尊び、妖魔を重んずるに至ること休ざる也。抑妖術魔法と耶蘇とは、名目異なるのみにして、同穴の狐狸也。故に千松兄弟の意快しとして來住めるなり。古諺に曰く、同氣相應ず、友は類を以て聚るとは此の謂なる可し、當社は可汗亡て創業なり、千松來りて衰微せり。夫可汗なる者は、當社の讐敵なり。嘗て神風の爲に滅亡せり。其魂魄未だ消滅せず、千歳の下猶も天地に止り、遺恨を爲か。彼故に千松兄弟を招き、此手を借て、里人を誘ひ催促して、當社の廢絶を計るに似たり」と。

大王可汗の物語に、どれ丈の史實があるかは固りわからぬが、奈良朝時代の奥羽拓殖の遺響を傳へて、かゝる傳說が此地に生れいでたのは、あり得ることで、筆者の單なる創作でないことは、栽培坊物語（現在の抄錄中にも可汗の記事がある）はじめ、可汗一代記、里老傳話その他の書名とその說とが引用してあり、現に近傍の地名には、例ば牛萬館とは可汗の本城の名で、可汗王師に抗する日、牛萬匹を屯せしめたによつて後世號く（栽培坊物語）とか、狼河原とは、可汗豺狼を畜養したよりその名始つた（里老傳話）といふ類の、可汗傳說に出來せるものゝ多いことなどにも、徴せられる。而して可汗傳說と千松兄弟の吉利支丹とを結付けたのも、亦傳說意識の作用としては、自然のことで、これ又、筆者の單なる作爲ではあるまい　而してこのことは又、當地に於ける吉利支丹の勢力が、一時、如何に盛んであつたかを語る證據とも解し得る。

以上を、重な收穫として、其地方には昔吉利支丹か柿の種を金に使用したから、柿が出來ぬといふ口碑があるよしなど、千早氏に聞いた。西方更に二里の馬籠にも、遺跡の存することを聞いてゐたし、殊に金城秘韞補註で見た、支倉とともに西洋にわたり、鎔鐵の術を學んで歸り、南蠻鉄吹き役人となつて伊達家に仕へたといふ佐藤氏の後と思はれる家について、狼河原できく所もあつたので、行きたいと思つたが、時間がなかつたので又の時にゆづつた。

大籠の吉利支丹傳說については、後に千早多聞氏が報道に接したから、抄記して補ひとする。曰く「一頃日一日、東北御鐵方根元地及吉利支丹根元地と稱せらるゝ千松へ出遊致候。本年八十七才之老翁有之候。其舊記調殊見聞致候處、歷々手掛り有之申候。是は當時銅屋工之數にて、銅屋山及千松大八郎小八郎之吉利支丹布敎の大意、

拶幼ながら相話し申候。大八郎之千松地方に招聘せられたるは、慥に文祿年中にて、慶長には無之候。是は、老翁所藏之「組頭及肝入大肝入連判之烔屋諸願書」中に相見え申候。且つ他の記錄にも、皆文祿と有之候。文祿以前に於て、當地より備中へ自費にて出張之上、製鐵の法を稽古致しし者有り、その緣にて、千松を招聘せし由に候。大八郎從來居りたる鐵山は、備中吉備中山有木別所、戸坂山に候。

千松神社は、昔吉利支丹之神にて、デイス佛を祭りし處にて、千松が斬に處せられて後に、山神に祭かへられたりと申候へども、該山神は全く千松大八郎之吉利支丹の神に御座候。此山神は、大八郎の故鄕の吉備一宮を分靈せりと申傳居候へば、平生大八郎の祭りたるものの樣に御座候。其神は十二神と山神と二柱の由にて候。デイス佛は、其社地に埋めたる其神の代神にて御座候。而して大八郎烔屋吹之山間に、ハヤリガミと申字有之由、人家一戸も無之昔烔屋有之處にて、其處に大善神と刻したる碑有之由、是も吉利支丹の神にて、大八郎の建てたるものにあらずやと申居り候。當時大にハヤリし故にて、ハヤリ神の字は付居次第と存じ候。昔大八郎の住せし屋敷地は、今猶イヅミヤシキと字して殘り居候。近くに當時の火葬場と申處も有之候。猶、大八郎を葬りたりと稱する處も有之、墓即ち小石一ツ有之候。近古より畑地になりしため、或農夫其畑之芋を掘る折、瓶棺に石蓋を蒙りて有之、其際より枡を入れて試みたるに、水のみ有之樣に思惟せらるゝと申傳をり候。大八郎の墓と稱せるもの、他にも一ヶ處有之候。又首塚と稱せるものも有之候。

口碑として傳ふる所に、吉利支丹宗門者をハセに縛り付け、斬首に處する折、其首領之者の中には、我は決而死を厭はず、喜んで斬に應せらる、併しながら我巧妙の術を、一應貴官等に見せて而して後に、甘んじて斬に處せられむ。ついては一本の長竿を建てよ。攀ぢ上りて妙術を見せむといふ。よつて望む如くにしたるに、攀ぢ上り忽ち化して鼠の如くなり、一直線に上端に登る。衆人驚愕たる中に、大鷹來り攫み去る。爲に首領者一人丈は斬首せられざるに至る云々と。

製炭製鐵は、すべて吉利支丹の發明にかゝると、當地にては專ら評傳へをり、當時千松烔屋山之繁昌は、山谷の一都會の如き俤あり、近傍谷地の人々集まり來りて、滿山皆人といふ趣ありしならむと想像され候。何にしても雄大の事業を、山中にては烔屋吹の樣たりと、今尙申ならひ候。なほ烔屋の烔の字は火扁を用ゐ、金扁にあらざること、老翁所持の書類等に徵して知られ候云云。

かねて金城秘韞の補遺で、栗原郡高淸水の石母田家(元和寛永の頃仙台藩の奉行で殊に外國關係のことを掌つた石母田大膳亮宗頼の後)に、吉利支丹關係の文書のあることを讀んでゐたところへ、會ま一昨年秋仙台で手に入れた文書が、その一つに違ひない推測をつけてゐたので、爾來、同文書の存否と行方とについて調べて見たところ、やう

やう心當りがついたのを、更に南方村の高橋氏によつて確かめ得たので、愈調査しようと思ひたち、かくてこの度の探訪の最後のプログラムを、專らこれに充てたのであつた。

東北線瀬峰驛から西へ一里半、自動車で坦途を行くこと二十分ほどで、高清水町につく。先小學校長阿部氏を訪ふ。校舍の敷地が石母田家の舊屋敷跡の一部に當ることを聞き、同氏の紹介で、石母田家の家老の家土田甲平氏を訪うて古文書類を見た。この古文書は、かつて明治廿二年（三月）に、故星野恒博士が（思ふにその一部を）調査されたよしを、後に奥羽史料で見た。學界に知られた「南蠻へ之御条文」も、その時發見されたものであらうか。もとは大長持に六七個あつたのが、數年前の火災に大部分燒けたとの事で、今殘つてゐるのは小長持に一杯大小廿三四束ある。成程燒焦げたり水に漬いたりして、火災の名殘を語つてゐる。同行の大森、重松二文學士とともに、前後二日に亘つて調査した結果、探し出した吉利支丹關係の文書（原書もしくは當時の寫し）は、斷片的のものも合せて約四十六通で、假に分類すると左の如くである。

第一類　幕府禁令の傳達　六
第二類　後藤壽庵に關するもの　五
第三類　そてろに關するもの　二
第四類　南蠻伴天連に關するもの　六
第五類　諸せんさく類　一四
第六類　類族改め類　一一
第七類　其他　二

今、その各類について説明しよう（例にあげた書状に頭記または註記した數字は、整理にのぞみ筆者が假に付したところである）。

第一類は、德川幕府の吉利支丹禁令を、江戸詰の奉行から仙台及び在郷の奉行（石母田は大抵の場合その一人である）へ書送つた書状又その寫しの類ひである。そのうち、

(1) 尙々、御國中侍町中在々迄も、能々可被申付候。無申迄ニ候へ共、從上樣之御法度殊外きつく御座候間、若又、御國御法度大形に被成置訴人など罷出候へば、諸大名衆に相違申事に候間、御前も如何候條、如何樣にもきつく御法度被成置度候。以上。

爲御意申入候。然ればきりしたん御法度之義被仰出、爰元に而五十人六十人宛、火炙、牛ざき、其上大判三十枚之札の表に書懸、訴人罷出樣に被仰出候。國々へも御横目被相付候樣子、上聞召、分而殿樣御國中御法度改可被仰付候間、左樣に相心得、毎年の御札々は其は捨に仕、此度改きりしたんの法度之札相立可申候。若又きりしたんの者はころび申においては、不及是非候。無左くば御法度に可被仰付候。其に付而、得御意被申義候は、無機遣可申上由　御諚候。恐々謹言。

霜月三日　片倉小十郎
大條　薩摩

石母田大隅亮殿

茂庭　周防守殿
山岡　志摩守殿
奥山　大學助殿

こは正しく元和九年のもので、日本殉教者一覧の第百三十二次殉教者の、江戸に於ける刑死直後のものであらう。家光将軍の厳命が傳へられたのである。他は概ね島原亂後のものとおぼしいが、そのうちには、寛永十五年八月廿八日、忠宗が登城の時、幕府の老臣から将軍の旨をきいて郷里に傳へて、(2)「唯々盗人之御改御同然と思召、成程堅被仰付可然由、大炊殿、讃岐殿、被仰候。此は法度此度にかぎらず、當御世中、毎年如此可被仰付との事に御座候。此度は、取分御法度強被仰出候」と報ぜしめたもの、また同じ年の十二月の、

(5)一筆　御意申入候。然ば昨日七日朝、於　御二之丸御茶被爲進、無殘所御仕合共御座候。其上御直談被成　御意候者、江戸中にさへ、吉利支丹御座候而、唯今澤山に罷出候。定而奥州方にも可有之候間、成程致穿鑿可被申付之由御諚に付而、伊藤彌兵衛被相下、委細口上に可被申上候。恐々謹言。

極月八日

古内　伊賀守
古内　主膳正
中島　監物丞

石母田大膳亮殿
茂庭周防守殿
津田近江守殿
奥山大學助殿

御宿所

などがある。後者は、徳川實紀に「七日二丸數寄屋にて、陸奥守忠宗（以下諸侯五人）に御茶を給ふ。酒井讃岐守忠勝を相伴として召加へらる」とあるに當る。文中「定而奥州方にも可有之」の句に、家光が奥州の吉利支丹を如何に注意してゐたかゞわかる。

第二類　後藤壽庵が、元和七年八月十四日付羅馬法皇奉答文の筆頭署名者であること、そが伊達家の重臣で、又奥州吉利支丹の頭目であつたことは、今は周知の事實である。彼の事蹟も、盛岡の菅野義之助氏が長年の熱心な研究によつて、大分明らめられた。(同氏の著、後藤壽庵の事蹟、昭和二年十一月刊行)しかも、壽庵に關する本邦の記録とては極めて稀で、殆んど上記奉答文以外（伊達家文書政宗大阪夏の陣々立書にその名が見えてゐるが）無いと思はれたが、こゝに、この數通を發見し得た。六通中、二つは壽庵が迫害前のもの、他は其後のものである。前者の一つは、

(7)「きりしたん御法度、きふく被仰出候付而、先立大條薩摩、片倉小十郎爲　御意被申越候間、兼而後藤壽庵きりしたんに御座候間、内々異見仕候へ共、合點不申候。然者今度以　御直書被仰下候間、近邊に居被申候衆、藤田但母、内ケ崎越後、武藏殿、御年寄衆水澤へ申請、數年御重恩を相請被申候間、頻ころび候様にと何も異見被申候へ共、合

點不申候。天下御改きふく、御法度の儀候間、何方へも可罷失由申事候。拙者一人に被仰下候間、色々申候へ共、右之通に候間、無是非候。以御大被仰上可願候。恐々謹言。

極月十四日

中島監物様

これは、石母田大膳が監物に宛てた書狀の案文で、本文には書直しがある。(今は直されたところに從つて記した)。思ふに元和九年の書狀で、はじめに「先立而大條薩摩片倉小十郎より」云々とあるのは、正しく前掲(1)の書狀である。石母田大膳が壽庵に好意を寄せてをり、改宗を忠告したが終に聽かなかつたといふこと、政宗が、幕府に迫られて壽庵を追ふに至つたといふことは、外國側の史料の記すところであるが、この書狀は、よく之を確かめてゐる。又書中の文言と、元和七年付法王への奉答文に、同六年九月四日から穿鑿始まつたとあるのを照し合して考へると、壽庵が水澤近くの三分に住むやうになつたのは、或はもとからではなくて、穿鑿が相應に嚴しくなつてから後、御年寄衆に申請られたものかと想像される。他に一通、一部分燒失はれた小春十有八付石母田大膳宛の瑞□の書狀(8)がある。燒焦がおほいが、その中に、「壽庵厭後……住所仕、預御情候而、居……屋敷も被下置候……奉頼候。世間之……候而御座候間、被加御意……言候は、可忝候。委細は……中條殿より可被申」云々の文句があり矢張り、壽庵に好意がよせられてゐることが知られる。日付も、思ふに前文と同年、即ち前文の前に來るものであらう。文中、中條殿とあるのは、にもいづる中條帶刀で、彼また少くも當時信者であつた諸士の一人である。

他に奉答文第二の署名者の横澤將監吉久から、石母田にあてた三通がある。壽庵逃失後、その領土見分の地を預つて年貢を取立てたことに關する。元來將監は、元和二年に政宗の命を受けて支倉を迎へに、黑是哥まで赴いた人であるが、その後の事蹟が殆んど傳つてをらなかつた。(金城祕韞補遺に將監堤のこといづ。)が、この文書によつて、上記の事がわかつた。壽庵の跡を引受させられたのも尤のことで、壽庵とは少くも壽庵が逃亡までは、親しくしてゐたことがわかる。文中しば〱、茂庭周防、遠藤式部の催促の嚴しいのを大膳に訴へてゐる。西洋の史料が、周防を大膳に對して壽庵の敵役と記してゐるのが、思ひ合される。また同じくその一つの中に、「南部へ被參候而も」云々の一句あり、或は壽庵の逃走先を南部とする同じく西洋側の說を、支持するかと思はれる。(なほ壽庵については後出書狀(18)をも參照。)

第三類　そてろ關係の二通は、一つは元和九年七月廿四日付で、大村入籠中のそてろへおくつた石母田の書狀、かの金城祕韞にいでたものの案文である。他の一つは、それと關係ある左のものである。

(13) 如仰雖未申通候。就御狀令拜見候。然ば大村籠に入置申候そてろと申伴天連へ、其許ゟ御狀被遣候處に、其飛脚大村に可罷有由被仰候。如何左樣に御座候哉。猶委細の儀に、御使者へ申達候間、御報不具候。恐

惶謹言。

後八月廿七日　長谷川　權六書判

石母田大膳亮様

南蠻への御案文の筆者でもあつた石母田がそてろと親しかつたことは、前記七月廿四日付の書狀でもわかり、又、支倉以來の仙台藩との關係でも當然であるが、この書狀は、當時の幕府の長崎奉行が、幾分不審の目を以て見てゐたことを、語つてゐるのではなからうか。

第四類　伴天連召捕りに關する五通中、三通は當時仙台地方に入込んでゐたゼスイト派の伴天連壽庵が、幕府の命によつて捜索され、終に捕へられ、白狀させられた經過に關する。まづ、

(14)急度令啓候。此中に、於此方、きりしたん頭立候者四五人拘置申候。妻子以下、人數十八人御座候。於此方成敗可申付候哉。先達被仰越候ほろう、右之者共に具尋申候得共、行衛于今無御座候。再而承付候はゞ、則可爲申上候。此御報に早々待入候。

三月廿四日　陸奥守

土井　大炊殿

酒井　讃岐殿

松平　伊豆殿

阿部　豐後殿

堀田　加賀守殿

これは思ふに、寛永十六年の交。陸奥守即ち二代忠宗からの書狀の寫しである。ほうろとに、Giovanni Battista Porro 即ち壽庵であらう。他の一つ(15)は金城秘韞に出た、十月卅日付(寛永十六年か)久世九左衛門出、石母田大膳宛の原文で、秘韞引用のもの、誤讀が正せる。文中に、「然者伴天連壽庵重而致白狀ニ付而」云々、又「一支倉六右衛門口書一枚」等の句がある。當時久世九左衛門は江戸詰で、この文書は江戸から報じたものらしい。他の一人のフランシスコ會の伴天連普羅牟志古孫右衛門に關するもの二通は、ともに甚しく燒焦げてゐるが、種々の點で興味に富む。その一つは、(17)「きりしたん……めいわく申……爲　御意申入候……度伴天連ふらんし……孫右エ門、仙臺に居……此如之書付、從江……申來候付而は……被成候得共、中村……內に居候源內、吟……川地源五郎所に居……捕樣々御尋……間を被成候白狀……申候。仍而仙臺廻……留を被指置共……仙臺中屋さか……之仰付候。御府……か様にきびしく(云々)壬霜月二十九日」とあるもので、差出人は、古內主膳、津田近江、中島將監、宛名は石母田大膳殿とある。治家記錄には、「寛永十六年十一月二十一日甲辰、江戸御老中より中村十內屋敷の內に居る源內、南蠻伴天連普羅牟志須古孫右衛門を隱しおき扶持する由、同宿彌左衛門白狀す。孫右衛門を召捕差上らるべきの旨、仰進ぜらる」とある。この書狀は、正しくこれに先立つて、江戸詰の奉行から內報したものであらう。他の一つは、一層燒焦がひどい。(尚々書あれど略す)

(18)爲　御意申入候。此度……古內被爲相上候……太郎左衛門口上に

可被申候。此度……吉内拷問之口書差入……存爲相上申候。其……吉内能きりしたん之様……見召候と相見へ申候間……吉内可爲相上由……此候。此方に而相尋候……之者に無之候。尤後藤壽……など所より文など可參……之候由申候。

一松木惣右衛門長屋に而小……申者に會申候由。吉内申……惣右衛門に相尋、惣右衛門口書……上申候。

一此方に而捕申候伴天連……しすこ舗之内に而相果……難計候間、其元へ被尋

遺憾ながらこれ丈で、半面がないので、差出人も宛名も日付もないが、文意からおして、やはり江戸詰の奉行などから、國詰のおくられたのと思はれ、後段によると、伴天連ふらんしすこが江戸に送られた後のものかと思はれる。(治家記錄には、寛文十六年十二月の條に江戸送りのことを記す。)なほこの文中には、注意すべき人名が出てゐる。一つは吉内で、これは往年支倉に從つて渡歐した召仕らしい。二つには太郎左衛門で、彼また支倉の召仕(後にいづ)のそれらしい。三つには後藤壽庵の名が出てゐる。四つには松木惣右衛門で、この人亦元和七年の法王への奉答文の第三番の署名者である。この燒焦をどう讀補ふかに、前出の二文書の場合と同じく、研究者にとつて興味ある問題なるべく、ともかくも、支倉とか後藤とかいふ大立物を中心に、信者等が棚交渉してゐた狀態が、髣髴として想像され、(14)文書に一きりしたん重立候者四五人拘置一就々とかゐるのも、勢へ合される……綴りに、

(19)此南蠻伴天連、從仙臺至江戸召寄候間、路次中宿次に馬にのせ、竹にてはめしをくはせ、不欠落之樣番をいたし、急度可送屆者也。

寛永十六卯　　對馬
　　　　　　　豐後
　　　　　　　伊豆
大宿中

仙臺より、江戸伴天連召寄候。宿次手形壹枚、

この伴天連はふらんしすこであらう。

第五類　諸穿鑿類十四は、いづれも元和寛永の交のもので、封内におけるものが大部分で、別に穿鑿の區分け(八つに分けてある)の地名を書いたものがあるのと、一々の文書とを照し合すと、いかに普く津々浦々の果まで、穿鑿が行はれたかゞわかる。

(21)一筆申入候。然者如此馬淵隼人所より召仕之者共所へ書狀參候付而、色々穿鑿仕候へ共、きりしたん宗躰知れ不申候處に、澁谷與右衛門と申者、白石と宮之間にて見合申、不審に存、則於宮繩を懸相尋候へば、御尋之妄目宗躰にて候。我等滿足不過之候。此者之口早々被相尋候ば、必十大夫參所知申可候間。御穿鑿不及申候。與右衛門大手柄仕候と存候。與右衛門事は澁谷右馬丞弟にて御座候。恐惶謹言

三月晦日　　片倉小十郎
　　　　　　　書判

石母田 大膳様
奥山 大學様
嶋田 駿河様
人々御中

などはその一例で、きりしたん喜齋については未だ詳でないが、いかに捜索に苦心したかゞわかる。

江戸藩邸における穿鑿のものもある。また藩府へ訴人が出て、江戸詰の役人から仙台へむけ穿鑿を命じたものもある。次の如きは後者の例である。

(31) 爲御意申入候。然者内山將監親子共に吉利支丹之由、御公義之御目安上申候。付而、穿鑿可仕由被仰、酒井讃岐守殿御直に書物被相渡候。則寫相下申候間、其元に而成程兩人の者(以下三行よごれありて讀めず)無申迄候へ共、證據も出候はゞ、急度預り置、様子具に可被申上、必々油斷有間敷候。恐々謹言

極月四日未刻

古内 主膳正
中島 監物

石母田大膳亮殿
茂庭 周防守殿
津田 近江守殿
奥山 大學助殿

此狀昨廿八日巳刻下着也

御番所

(25) 訴人木村新左衛門申候きりしたん之由、中條帶刀、松平陸奥守家中に罷在候。此以前は、すくれたる能きりしたんにて御座候。我等杉原伯耆守所に罷在候時分迄に、付合致申候。唯今は宗門之義は不川候へ共、こころまでころび不申上候。内證はきりしたんにて可在御座候。

正月廿六日

こは江戸にてか仙臺にてか定かでないが、文中中條帶刀は伊達文書のうちに、寛永三年九月朔日付の伊達政宗留守居番申付狀にいで、十二年七月十二日付の家中知行高并家族書上書覺に、同じく留守居として、久世九左衛門と名を連ねてゐる。又治家記錄寛永廿年二月十六日の條には、「御老中より書付を以て、中條帶刀事十箇年前まで切支丹宗門なり、今に心底轉ぶまじき由、伴天連市左衛門白狀す。因て、右帶刀を江戸へ差登せらるべきの旨、仰出さる」とある。この文書は、その記事の前に來るべきものか。なほ又、秋田藩の役人から、角助その他一名あて報じた「此地きりしたん宗旨調候に付而、當領仙北增田之内之手倉川原と申所に、此道齋と申者罷有候。人改仕候間、様子相尋候得者、仙臺之内上衣川と申所之者に御座候。然常五月爰元に參候而髮を剃、道齋と名を付候由申上候。本之名者、駿川と申候。若其元より缺落など仕候者に可有之かと存、返し置申候。慥に御請取可被成候」云云といふ、九月十三日付のもの(20)がある。文中道齋とは、或は日本殉教者一覽第百三十七次の條にいでた(寛永元年

死）ドミニコ道齋であらうか。果して然らば、この手紙はその直前のものであらう。

別に、仙臺におけるきりしたんの籠者と刑死者との名簿二通がある。(33)「きりしたん籠者」（寛永十四年比のものと思はる）の一通には、「道益子玄知」以下「人數卅人」の名前、年齢や出身地が記してある。封内のものが大部分であるが、「越後のもの」「關東のもの」「京伏見のもの」などある。最後に、

大窪太郎兵衛

の名がある。彼は支倉六右衛門内之者で、伊達氏史料寛永十四年七月八日の條に、御尋ねに對する調書が出てゐる。その後まもなく囚へられたことが、これでわかる。

他の一つは、三月五日に(32)「御法度に罷成候」覺で、「年五十五、もにか草刈正左衛門内之者」以下、老幼男女の名を列記し、終りに、

仁口合貳拾三人　つるし殺
同下供合貳拾人　斬罪
仁口合四拾三人

とある。内、第一の草刈正左衛門内之者の正左衛門が、別の文書にいでたのをはじめ、「原田甲斐守内之者」として「九右衛門及び女房子供六人」、「支倉六衛門内之者」として「大良左衛門女房同男子」。「中條帯刀内者」として「勘右勘門」又「九郎右衛門、加賀之者かゞみとき」とあるなど、注意される。この年代は、伊達家の死失帖によつて、寛永十七年と推定される。

第六類　類族改めの類約十通は、貞享元祿以後延享にいたるもので、いづれも石母田家が未だ加美郡宮崎にある頃、その領内のものと思はれる。吉利支丹で死刑した藤戸十左衛門内與五郎及びその家族に關するもの（貞享五年）寛永二十年釣殺になつた岩ヶ崎藥師甚兵衛及びその一族に關するもの（元祿四年）、松崎半左衛門召仕太兵衛の一族に關するもの（貞享四年）、等がある。

第七類　雜二通の一つは、46)「筑前國大島に而捕候南蠻伴天連いるまん白狀之覺」（寛永二十年寫し）で、こは故星野博士の調査の時、目にとまつたらしく、前記の奧羽史料の中の採訪古文書品目にも出たが、慶安二年大目付井上政重が幕府へ出した口供書の寫しで、本文は諸書にも出てゐる。第二は左の一通である。

(45)　一書令啓上候。其後久々不得御意背本意候。随而此者、銀用所御座候而、おろし江銀山え指遣し申候。自然指合も出御座候には、被仰付可被下候。恐惶謹言。

十二月二日　　梅澤　半右衛門

山岡志摩守殿
奧山　大學殿
石母田大膳殿
　　人々御中

カルバリヨが逃れ住んだといふ下嵐江（パゼスの Oroc. o）が、こ

こに銀山としてある。梅澤半衛門は、菅野氏の「後藤壽庵」によれば、秋田藩の役人である。

文書の一々については、今後の研究を要するも、今はたゞ、整理に際して心付いた點を記したに止る。通覽してくると、仙台藩は、はじめは吉利支丹に對して比較的寛大であつたが、幕府の命令に迫られて、段々きびしくなつて來たことや、其の信者が、藩士はじめ封内各地の凡ての階級に亘り、相應にひろくまた長く普及してゐたこと等、仙臺吉利支丹史の實狀が、歴々と眼前に徴證される感がある。

なほ本文書は、菅野氏がわざ／＼仙臺に自分を訪うて、熱心に寫して歸られたから、いづれ、精しい研究を試みられることゝ思ふ。とにかくこれ丈でも燒殘つて散佚せず、また讀みうる形を存して世に出たことは、吉利支丹研究の爲に悦ばしいことゝ思ふ。

以上數日間の探訪の成績を略記して、公けにするにのぞみ、種々便宜を與へられた（本文中其芳名を掲げた）諸氏、又諸方面へ紹介の勞をとられた宮城縣女子師範學校の二階堂教諭等に、深く感謝の意を表する。

（昭和三年五月末日稿）

追記

その後調査を重ねた結果は、上揭の記述を補ふべきもの、また少しとせぬ。大籠では、千早氏の東道で、同氏報告の遺跡を踏査した外、別に俗稱塔婆てふ地域に、寛永十七年の成敗後六十二年の念佛供養として、元祿十四年に建てられたと傳へらるゝ供養塔を見た。南無阿彌陀佛の名號を彫んだものであるが、建立者の氏名を、正德二年の大籠村宗門御改帖に徴して、そのいづれも類族であつたことを明らめ、以てこの口碑の信ずべきことを知つた。馬籠では、藤原小學校長の斡旋で、二三文書を見た。また石母田文書からは、更に、前記各類に亘つて加ふべきもの十通を探し得たが、就中、壽庵と南蠻伴天連とに關して有益なものがあつた。その一つによると、上出21文書中の十太夫は、伴天連壽庵（じよあん、はうろ又はほうろ）の別稱である。この種資料の蒐集が、なほ爲されたら、或は仙臺吉利支丹史をまとめ得ようかと思ふ。（七月二十三日記）

漱石の思ひ出（十三）

夏目鏡子述
松岡譲筆録

五十七　芝居と角力

大正三年頃一時しきりに芝居を觀に參りました。よく皆さんで脚本を書いて見たらどうですなどゝおすゝめになつたので、自分でも書いて見る氣になつたものか、それとも又どういふ下心があつたものか、その邊のことは私にはわかりませんが、とにかくよく芝居へ參ゐりました。しかも行く時には、自分一人で行くのはきまりが惡いとか申しまして、よく私を誘つたり、小宮さんあたりと同行したりして參ゐりました。ところが御芝居の方はあんまり面白くないと見えて、

「おい／＼御覽よ、あの棧敷で雛妓がおさしみで御飯をたべてるよ。」

などゝ申しますので、

「そんなもの見なくたつていゝぢやありませんか。」

と申しますと、

「だつて見えるんだから仕方がないぢやないか。」

といつたわけです。こんなへらず口を叩いて居りますと、小宮さんなんぞも敗けずに、

「先生、あすこに綺麗な藝妓が居るでせう。あれは時藏の馴染で魚といふ字を書いてとゝ子と讀ませるんです。」

に、夏目は夏目で、

「そんな馬鹿なことがあるもんか。そんなら米といふ字を書いてまゝ子と讀ませるんかい。」

てな調子で、一向芝居の方はどうでもいゝ樣子です。さうしてかへつて來ては、どうも舊劇は不合理だとか何とか申してぶつ／＼言ひます。

或る時、高田の森成さんが久々で上京されましたので、一晩芝居へでもお連れしようぢやないかと申しまして、自分で切符を買ひに行つてくれました。買つて來てくれましたのはいゝけれども、さて當日參りまして案内されて見ますと、二階の大分後ろの方で隨分舞臺に

遠いので見難いのです。どうしてこんなにうしろなのです、こゝの外舞臺がなかつたんですかと尋ねますと、いゝや、席はいくらも前があつたんだが、おれは老眼で、丁度此邊からだとよく舞臺が見えるんだよ」と言つて居りました。

此時の出し物が丁度『千代萩』でしたが、かへつて來てから、どうもおれはあゝいふ芝居は嫌ひだ。子供がキイ／＼聲でマセたことをいふ。腹を切つてから舞をまつたりする。不自然なことだらけだと憤慨して居りますと、森成さんが御醫者さんだけに、全くですよ、あすこなら食鹽注射といふところですにね、とう／＼笑ひ出して、憤慨もけし飛んで了ゐました。

菊五郎や吉右衞門が前後して訪ねて來たのも、此頃のことだつたでせう。菊五郎はたしか長谷川時雨さんがお連れになつて、狂言座の顧問かにされ、脚本なんぞも書いてくれといつた話があつたかと思ひますが、顧問の方は直きに何か氣に入らないことがあつたと見えて斷はつて了ゐました。

吉右衞門は小宮さんがお連れになつたのです。當時の小宮さんの吉右衞門贔屓と申しますか崇拜と申しますか、それは／＼大したもので、吉右衞門ならでは夜も日もあけない惚り方でして、何でも芝居者なんか無學で何も知らないから、あゝいふ社會であの儘おいては、折角の名優も駄目になる、一つ連れて來てみんなで新らしい教育をしてやらなければならないと、何でもこんな意氣込みで連れていらしたのです。それが又お若い時の向ふ意氣の強い時で、夏目のところへ同じ集まるものでも、年の若いものや話のわからないものぢや仕方がない、吉右衞門を連れて來た時はさういふ邪魔者は斷はつて、自分とか森田さんとか鈴木さんとか、さういふ人達が揃つて教育したいんだなどゝ勝手な熱をお吹きになるので、人に甲乙をつけたりすることの嫌ひな夏目は、何だ、貴樣達ばかりがえらいんぢやないとばかりに一喝を喰らはせて、その手には乘りませんでした。

しかし菊五郎にしても吉右衞門にしても、夏目の方でそれ程芝居に乘り氣でないので、其後は訪ねても來ませんでした。

芝居はこんな工合で、とう／＼性に合はないと申しますか、最後迄本統に好きになれない樣子でしたが、角力は本場所になるとよく出かけました。芝居はうそで堅めた上に又うそがある、しかし角力は八百長角力以外は、自分の力のありたけを出し合つて戰ふ、そのうそいつはりのない謂はゞ無邪氣な眞正正銘かけ値なしのところが見て居て氣持がいゝといつたところがあつたやうです。で角力には根氣よく通ひました。

丁度其頃中村是公さんが席を取つてらして、そこへ來い來いと誘はれましたので、いつもお邪魔をして居たのでした。そこで仙様の席だといふので、家族のものを連れて行くではなし、自分一人でひよつ

り出かけて、かへつて來ても、此方できくでもなし、自分で進んで話すでもなし、一向角力の話は出ないのでしたが、それでも翌日になると又出かけました。餘程好きだつたと見えます。だから私どもはどんな顏をして角力を見てるのか知らず、かへつて岡本一平さんの漫畫などで、それを知るやうなものでした。

この、人様の席だから子供などでも決して連れて行かないなどゝいふ律義なところが如何にも夏目の夏目らしいところで、かういふところは禮儀正しいと申しますか、遠慮深いと申しますか、或は小心と申しますか、とにかく窮屈な位几帳面で、キチンとけぢめがついて居たものでした。

この大正三年の十月に又もや胃を惡くして一月ばかり床につきましたが、いゝ案配に大したことにも至りませんでした。毎年少くとも一度は臥せるのが例になつて居りますので、又かといつたものでしたが、自分でも觀念して大事にもしますので、ひどく惡くするやうなこともありませんでした。とにかく修善寺大患以來年百年中藥を離れたことはございませんでした。

此の年から此の次の年にかけて、無闇と縮刷本が出ました。一番最初は大倉書店の『吾輩は猫である』の縮刷で、これは元々菊判三冊の本でしたのを、この形では大分賣れもとまつたので、こゝらで一つ形をかへてポケット入りにかへて見たらどうかといふ書店の發案でやつて見たのが大變いゝ工合だとあつて、それから次々にいろ〳〵なのが縮刷に形をかへて出るやうになりました。夏目は恥の上ぬりをするやうなものだが、とに角一度かいた恥なのだから、目をつぶらうなどゝ申しまして、請はれるまゝに次々に縮刷になるのを許して居りました。御承知のとほり、只今の四六判全盛の時代と違つて、夏目の本の初版本といふのは、『硝子戸の中』と『切拔帳』とかいふ例外はありますけれども、外は殆んど菊判の大型のものばかりでしたが、それが急に縮刷となつてポケットへでも入りますので、大變喜ばれたものでした。尤も此頃は一般讀書界では袖珍本流行の時でもあつたのではありますが。

五十八　京都行

水彩畫と日本畫の混血兒見たいな繪をしきりに描いたり、大物の南畫をせつせと仕上げたりしました此頃、油繪が描いて見たくなつたと見えて、繪具箱を買つて參りまして何かと寫生をして居りました。大きさはスケッチ板ばかりで、大概板に描いたのですが、初めの頃ののは、青ずんだやうな顏みたいなものが一面にあるばかりで、繪具と繪具がこんがらかつて、何が何やら形のけじめのつかないものが出來て居ましたが、やがて四枚五枚と根氣よく描いて行きますうち、大分物の形のわかるものが出來て參りました。相談相手は津田青楓さんで、一緒に靜物の寫生なんぞをやつたりしてましたが、どうもこの

油繪ばかりは素人目にも如何にもまづく、自分でも窮屈だつたらしく、とう／＼物にならずに了ゐで、ろく／＼繪具を使はないうちにやめて了ゐました。性が合はないとでも言ふものなのでせう。

　津田さんとは以前からの識り合ひだつたのですが、自分が繪に熱中しましてからといふものは、殊の外親しくもし、繪刷本の裝幀なども殆んど津田さんの手を煩はすやうになつて居りました。又繪の上とだけではなく、あのぬうつとして居られる無口なところなどが好きでもあつたのでせう。

　其頃の話でしたでせうか。或日津田さんが訪ねていらつしたから、書齋に居ますよと申しますと、其儘つか／＼書齋へ入つていらつしやいました。が、いつまでたつても挨拶もなし話し聲も致しません。變だと思つてのぞいて見ると、夏目はいつものやうにぐなつと横になつて、座蒲團を枕にして午睡をして居ます。そのわきに津田さんは手持無沙汰にちやんと坐はつて起きるのを待つてられるのです。このごろりと横になつて午睡するのが夏目の癖で、書齋や緣側で横になつては、苦もなくうと／＼と眠るのでした。

　そこで目を覺まして、津田さんの顏を見ていふことが振つて居ます。おゝ、君だつたのか、さつき足音が近づくのを聞いてたんだが、又細君が何か用事で來たのかと思つて、其儘狸を極め込んで居るうち、いゝ氣持になつてうと／＼して了つた。君と知つたらあの時すぐに起きるんだつたに失敬したといつた風です。こんな工合で氣がおけないで下手に神經を尖らせたりすることがなくつてよかつたのでせう。殊に此頃は夏目がしきりに南畫を描き、津田さんも西洋畫ばかりでなく、同じく日本畫を始められたのも此時分からでしたでせうから、繪が出來るとは津田さんに見せて批評をして貰ふといつた工合でした。又津田さんの方でも見せていらしたやうです。

　この津田さんがどういふ御都合でしたか、大正四年の春先に京都の桃山の奥の方へ移られました。お立ちになる前に、どうも近年は病氣ばかりして居る上に、いゝ、あたまの方もはつきりしない模樣だから、京都へ行かれたら、一つ旅行に誘つて、京都へ呼びよせて遊ばせてやつて下さい。違つた土地で呑氣にしてましたら、きつと體の爲めにも頭の爲めにもいゝだらうからといふので、連れ出して下さるやうに呉々もお頼みしたのでした。それぢや僕が向うで落ちついたらお誘ひして見ませうと言つておわかれ致しました。

　津田さんからの誘ひが來る。自分でも行かうかなといふ氣が萌します。私の方でも行つてらしたらとすゝめます。行くのはいゝけれど、出かける迄が億劫でなどゝ、又もいつもの傳で消極的な引つ込み思案をして居りましたが、それでも思ひ切つて彼岸の入りに東京をたちました。別に何の目的もない全くの呑氣な遊びなので、京都大學にいらつしやる知つた方々や、朝日新聞の方などにも知らせず、從つて宿なども人の知らない靜かなところがいゝと言つて居りましたのですが、折よく津田さんの兄さんの西川一草亭さんの紹介で、此程宿を開いたば

かりだといふ木屋町御池の北ノ大嶋といふのに落ちつくことになりました。京都へ參りましてからは、元々遊ぶつもりで行つたのですから、津田さんや西川さんの御案内で、一力の大石忌を觀たり、方々の別莊を見せて貰らつたり、雨でも降れば宿に居て、みんなで寄せ書きをやつて字を書いたり繪を描いたりして遊んださうですが、東京をたつ前に、もう亡くなられましたが並川照吉さんから、京都へ行つたら祇園にお多佳さんといふ有名な文學藝者が居る。今では大友といふお茶屋の女將だがこの女に是非會つて御覽なさいとすゝめられ、自分でも興味をもつて居たのでせうが、京都へ行つてその話を、西川さんにすると、すぐ呼びませうといふとで連れておいでになる。話がいかにも面白くて、一中節などは大の御得意、そこで暇な時にはよく遊びに來て貰らつて、話を聞いたり一中節をきかせて貰らつたりして相手になつて貰ふ。いゝ遊び相手だつたのでせう。

そこへお君さん金之助さんといふ二人の仲のいゝ人達が、是非、夏目先生といふえらい先生が來てられるさうだから、たつた一目でもいゝから會ひたい、會へなければ椽越しに顏だけでもきゝたいからと言つて、先斗町のお多佳さんを大嶋の玄關に呼び出してのたつてのお頼み。さうなると京都式のやゝこしい押問答で、片方でそんなことは自分には出來ないといへば、一方では是非どうとかして下さい。若しそれも出來ないといふなら仕方がないから、こゝへ持つて來た短冊か何かに臓でもいゝから一筆書いて戴きたいといつた押問答があつて、とどのつまりお多佳さんの方が敗けて、それではともかく夏目に願つて見やうといふことになり、二階にかへつてさう申しますと、夏目の方は至つて氣輕なもので、お上りなさいといふわけに、二人はこんな嬉しいことは無かつたと申して居ります。一人のゝが二人增えて都合三人になつたので、それからといふものは中々賑かであつた樣子です。

殊にこの中で金之助さんといふ人が、きさくな滑稽家で、自慢のお座持ち藝妓といつた女でしたので、なほ更賑かなことでしたでせうが、お君さんといふ人は又その反對で、全く貴婦人タイプの無口な人でしたが、金光教の大の信者で、その信心から醫者も手離した危い一命を救はれたといふ程の人だけあつて、どつかリンとしたところがありました。三人三樣の、いづれもみんな東京とは違つた京都女のそれ〴〵のタイプなので、時々宿へ遊びに來てもらつては氣樂にくつろいで興じて居たさうです。

さうかうして一週間ばかり遊んで居りますうちに、又々胃の工合がよくないので、津田さんを誘つて奈良へ遊びに行つたりしやうといふのを取りとめて、あんまり惡くならないうちに東京へかへらうと思つて居たさうですが、丁度其頃、夏目の姉が不遇のうちに突然腦溢血かで亡くなつて了ゐました。知らせてやりましたけれども、かへつて來られないといふことに、私が葬儀萬端にまゐりましてそれをすませたところへ、こん度に京都の方から、急に病氣だから來てくれといふ電報が參りましたので、さつそく京都へ行きました。

まだ電報の來る前のことでした。自分でも京都をいゝ加減に切り上げるについて、今迄西川さんや何かに何くれとなく御厄介になつた、その御禮心にどこかで一夕お招きしたいといふので、お多佳さんのお家で舞妓の踊でもといふ段取りをつけて、それには金が少し足りさうにもないので、すぐに百圓許り送つてくれろと申して來ましたのでそれを送りました。丁度病氣が惡くなつたのはその招待の日のことで、木屋町の御池から祇園の新橋迄、俥でいらしたらといふのを、道も近いとですから歩るいて行つたさうですが、段々お腹がいたみ出したのを初めはどうやら我慢に我慢して居たものゝ終ひにはやり切れなくなつて臥つて了つたのださうです。ところがお多佳さん初め他の人達も そんなことには出會したことがないのでびつくりして了つて、じつと樣子を見ると、夏目の臥つてゐる樣子たらないのださうです。といふのは、苦しいので物をいふのもいやなので、默りこくつて、額に玉の汗をいつぱいかいて、それが息もせずに苦しさうにねてゐるので、死んだんぢやないかと思つては覗き込んではみとつて居たさうですが、さて樣子を見てるとなほりさうにないどころか益々いけなくなる一方のやうに見受けられるので、私から來て貰はうかどうかといふ相談です。するとそれを小耳にした夏目が、何も家内なんか呼ぶことはないからやめにしてくれろと申すのださうです。何故と申しますと、私がやつて來て、又お惡いんですかとか何とかいふと、それ丈けでぞつとするとかやり切れないとかいふんださうです。が、そんなことをいつてられない程どうも樣子が惡い。このまゝにしておいて若しものことがあつてはといふので、そこで夏目が怒つたら怒つたで責任は自分が負ふといふので、津田さんが私のところへ電報を打つて來られたのださうです。私が行つた時には、大友（お多佳さんの家）から宿へかへつて臥つて居りましたが、いつもの病氣で大したこともない樣子で、まあ／＼と一安心しました。そこへ又皆さんがお見舞ひを兼ねて遊びに來て下さいます。中々賑かなことでした。

病氣は例によつて例のとほりなもので、落ちつくと段々よくなりましたが、それからといふものは、ずつと床の上にねたり起きたりして、自然に癒るのを待つて居りました。別にむづかしい本を讀むでなし、自分でも大變悠々とした氣持で、少しよくなつてからは、床の上に坐はつては、よく繪を描いたり、俳句を短册に書いたりして居りました。畫帖なんぞも大分持ち込まれて、自分では暇なものですから、手當り次第によごして行くといつた工合でした。

此頃西川一草亭さんが見舞にいろ／＼珍らしい御手のものゝ花を下すつたりして居りましたが、畫帖や筆洗やらを持つてらして、夏目にいろ／＼と繪や字を書かせていらつしやいました。何でも西川さんは、以前淺井忠さんの元へいらした時分、一向そんな慾がなくて、いつか何か描いておいて頂から位の氣持で呑氣に構へて居るうちに、淺井さんが亡くなられて何も揮毫されたものを持つてないで、惜しいことをした經驗があるとかで、病氣でのんびりしてゐるのをいゝ幸にし

て、今のうちに書いて貰へるうちに書いて貰らつておけといふわけで、せつせと書いて貰らつておかれたものだといふことです。それに力を得て、お多佳さんでもお君さんでも金之助さんでも、大分何かと書いてもらつて居られましたが、私などは側について居て、自分には慾はなし、又いつでも書いて貰ひたい時には書いて貰へるといふ氣もあり、他の方々もさう言つては、私が扇子に描いてもらつた分迄分捕つたりされたのですが、結局人樣がお貰ひになるのばかり見て居て、自分ではとう／＼何も描いて貰はずに了ゐました。今思ふと惜しいことをしたと思ひますが、あれ程多病の人を、いつ死ぬかわからぬなどゝは元から思はず、反對にいつまでゝも生きてゝくれるやうに呑氣に構へて居たのですから、考へて見れば人間の氣持なんていふものは儚い變なものでございます。

京都からかへる時には、こんな風に散々いろ／＼書いた上に、まだ畫帖を皆さんから三四册も預かつて來まして、好きな道とは言ひながら、根氣よく花卉とか風景とか詩とか俳句とかをかきまして、屆けてやつて居りました。此時のものは、病氣でのんびりしてひまにあかして描いたものゝせいか、私どもにも大變面白いかと思はれます。

お多佳さんに一中節を唄つてもらつては聞いて居りましたが、其內でどういふのか道行きが大好きで、一中節の所望といふと道行きなのです。あんまり道行きばかりやつて貰ふので、私がさう道行きばかりやるのはおよしなさいよ、緣起でもない、自分で道行きがやりたくなるといけないからなどゝ言つても、其時はやめても、直ぐ又道行きを所望するのでした。

このお多佳さんがのべつに駄洒落を飛ばします。輕口にかけては夏目もよく出る方で、まけずに駄洒落を飛ばしまして、傍で聞いてゐられないなどゝ言つて笑つたことがありますが、實によく駄洒落のかけ合ひをやつたものです。私が來るといふ時に、夏目が洒落のめすお多佳さんに、家の妻は洒落が大嫌ひでね、そんなに駄洒落をいふと怒られるよなどゝ言つてゐたさうですが、家に居る時でも、よくこの手には引つかかつて、眞面目に聞いてゐると、なあんのことだと言つて落ちになることがあつていまいましがつたものでした。例へば私が夏目に旅の話の出た時に、私まだ伊勢へも高野へも行つたことがないから、いつか連れてつて下さいと申しますと、そらお前駄目だらうよ、純一(長男)でも大きくなつてから連れてつてお貰ひとかう申します。何故ですのと、私が何か仔細があつてのことかと眞顏で尋ねますと、だつてコウヤノアサッテていふぢやないかといつてはぐらかして了ゐます。

又、死んだ夏目の姉さんが、夏目の修善寺の大病の時深川の不動さんに願をかけて、どうか病氣をなほさして下さいますやうに、若しなほりましたら、本人は來られますまいが、本人の家內なり誰なりが御禮に上りますと言つて來たといふから、私御禮參りに行つて來ますと申しますと、[illegible]だつて願をかけて

お斷りしたのですと申しますと、そんならハガキで間に合はせて置いたらよからうといつた調子です。機嫌のいゝ時には隨分駄洒落や輕口を飛ばしたものです。

病氣も大分よくなりました或る日のこと、西川さんの案内で南禪寺の方へ別莊を見に行くといふので、夏目を俥にのせて、私や津田さんもついて參りました。一つ二つ拜見したところで、もう一ついゝのがあるのだけれども、どうしませうかといふ西川さんの話に、大分疲れたやうですから、此の邊でかへらうぢやありませんか。まだあるなどゝいふと、それも見やうといふにきまつてるが、若し體に障はつちやいけませんからと私が申しまして、いゝ案配に打ち合せをしてかへることになりました。途中、津田さんと私とで、まだ歸へつても早いし、夜二人で芝居へでも行きませうと話し合つて居たものでした。

ところが宿へかへりましての話に、どうしたはづみか津田さんが、うつかりもう一ついゝ別莊があつたのだけれどもと、ついうか〳〵と打ち明け話をして了つたものです。すると、どうしたのか夏目が急に機嫌を損じまして怒り出して了ゐました。さあさうなると、さつきの約束もあつて、芝居に行く時刻もせまるのですが、二人とも妙にばつが惡くなつて、お尻を上げるわけに參らなくなりました。そこで貴方も一緒に芝居へいらつしやいませんかと誘つて見たところが、かへつて藪蛇で又もや怒られて、とう〳〵その日はどういふ風の吹きまはしか[illegible]喧嘩にされて[illegible]ました。

別莊の話でもう一つ。大阪の富豪家の加賀正太郎さんが、京都から二停車場大阪よりの山崎に別莊をおこしらへになるといふので、地を相し、大體の設計迄出來たから、是非一度其の地へ來て見て、別莊の名を選んで頂きたいといふことで、お多佳さんと御一諸においでになつて、しきりにお賴みになります。伺つて見れば大分山の上の方だとのことで、身體は惡し、とても行けさうにないと當人も申しますと、私なども心配なので一緒になつてお斷りして居ますと、加賀さんの方ではお多佳さんあたりの援兵で、さうでもありませうが是非おなほりになる迄滯在してらして、それからとに角一度來て見てくれるやうに、山の下迄自動車で、それから山は山籠を用意させるからといふたつてのお話です。そこで東京へかへるといふ二三日前になつて、夏目、私、西川さん津田さんお多佳さんといふ一座で參りました。山崎の停車場のところから、五六丁の急阪を登るのでした。つまり天王山の中腹にあるわけです。

別莊地といふのはこれから工事を始めやうといふところで、本當に景色のいゝところでした。おくれ咲きの山櫻などがちらほら殘つて居りまして、そこでこさへたおでんなどのもてなしにあづかりまして半日のんびりと遊びました。するとすぐ背中合せのやうになつたところへ、古い三重の塔があつて、元もつと奥にあつたものを一夜のうち

にそつくりその儘豊臣秀吉が今の地に移して、山崎合戰の時に物見臺に使つたとか何とかいふ昔噺を聞いて居りますと、どなたかゞそこの寳寺のお話をなさいます。三重の塔といふのはこの寺の塔なのです。

その寺に有名な大黒樣があつて、打出の小槌があるが、今寺で出す鬱金の財布をうけて、御祈禱と一緒に其の小槌で打つて貰ひ、それをだまつて捧げもつたまゝ門迄持つて出ると、大變お金持になるといふので、京都大阪はいふ迄もなく、隨分遠くからでもその黄色な財布をうけに來る人が多い。しかし門迄のうちに一言でもしやべつたらだめなのだといふお話なのです。私たちが面白がつて居りますと、夏目がお前行つてこの財布をうけて來いと申します。しかし私も一人では極まりが惡いので、それぢやお多佳さん一緒にいらつしやいといふとで、二人で財布を貰つて、それから祈禱をして貰つて小槌で叩いて貰ひました。さてそれからが無言の行なのですが、さうなるとむづ〳〵可笑しいやうな妙な氣持になつて仕方がありません。それを危くかみ殺して、大眞面目な顔をして門のところ迄來ると、其れが又堪らなく可笑しいとあつて、西川さん津田さんが待ち構へてらつしやいます。とう〳〵門を出たところでみんなで吹き出して了ゐました。

東京へかへりましてから、別莊の名前をあれやこれやと澤山考へて言つて上げたやうですが、お氣に入らなかつたと見えて、其うちからの名前はおつけにならなかつたやうです。夏目はそれを面白からず思つてたやうで、聞けれぱ聞いで、あれでは氣に入らないから、もつと別なのを考へてくれと言へばいゝにと申して居たことがありました。其後其の御禮心か、別莊の主から印材を贈とかいふとでしたが、うける筋がないと申して、とう〳〵頂かないやうでした。ところで、私はこれが縁になつてか、其後殆んど毎年京都の方へ行つては、寳寺へお參りして御堂から門前迄無言の行をするならはしになつて了ゐました。

私が京都へは初めてゞしたので、隨分方々を見物しまして、それからもう汽車に乘つても大丈夫といふ時を見計らつて、東京にかへりました。丁度一月ばかり京都に居たわけです。

五十九　子供の教育

京都からかへりまして暫らくしてから、六月頃からだつたでありませう、『朝日新聞』に『道草』を連載し始めました。これは重に私どもの千駄木時代に起こした一寸した事件を題材に取りまして、それに自分の昔の記憶などを結びつけて書いた、謂はば自敍傳小說とかいふものなのでせう。この中に私初め親類のものなどが出て參ゐります。それにその前の『硝子戸の中』にも昔のことなどが出て來るので、自然矢來の兄さんなどにも差障りのあることがあつたのでせう。いつぞや兄さんから、あゝやつて書くのもいゝけれど、自分達も子供が大きくなつてるのだから、あんまり打ち明け話を書かれたりすると子供の手前みつともないからとかいふ一寸した抗議が現はれたこともありますの

で、その點を指しまして、私なんかは『猫』でも散々書かれてゐながらいゝやうなものの、あんまり家のことや人のことを書くのは感心しないとか何とか言つたものです。すると夏目は、何だ、お前達それで飯を食つてる癖にと申しますので、これには全くそのとほりなので參つて了ひました。

この兄さんの話をどう聞きかぢつてゐたのか、四番目の愛子といふその頃十か十一かだつた娘が、或る時夏目に申します。

「お父さんたら、伯父さんのことや人のことばかり書かないで、もう少し頭を働かせなさい。」

夏目は笑ひながら、

「この奴、生意氣なことをいふ。そんなことをいふと、こん度はお前のことを書いてやるよ。」

などとからかつて居ましたが、『硝子戸の中』の一番終りに、焚火をしてゐる子供達のことなんか書きまして、「あら、いやーだ」と悲鳴を上げさせて居りました。

この愛子がお父さん思ひで、夏目がよくお菓子をつまんだりするので、お腹によくないと思ひかくしておきますと、書齋で勉強をした後で一つ羊羹でもつまみたくなつて出るのでせう。戸棚をさがしてもありません。すると子供は目が早いので、私の隱くしておいたところを知つて居て、氣の毒だと思ふのでせう、お父さん、こゝにあつてよ。と出してやります。おゝ、いゝ子だ。お前は中々孝行者だなんかとにや/\しながら、お菓子をつまんで頬張つて居ります。[illegible]に惡い癖に、こんなことは呑氣な方でした。

娘の子でも、上の二人とは、娘の方で夏目の頭の惡い時の記憶などがあつてか自然しつくりなづまない樣子でしたが、下の二人とはよく雨方で裸になつて角力をとつて遊んだりからかつたりして居りました。次の年に夏目が亡くなるのですが、よく二人とも、生きてたら角力なんかばつかりとつて居ないで、繪でも字でも澤山書いておいて貰ふんだなどと言ひ言ひしたものです

子供達のことが出ましたから、子供達の學校の方の話を致しませう。

女の子の方は放任主義といふのでせう、一向構ひつけず、私があすこがよからうと思つて、上の二人は女子大學の附屬の方へやり、その下の一人は女子大學の方がどうかと思つたので雙葉女學校へやりましたが、夏目の考へではどこがどうといふやうなことも無かつたやうでした。たゞ娘め琴などを習つてゐたのを、ピヤノがいゝとか、ヴアイオリンがいゝとか言つて變らせたりしたことはありますが、女の子の教育については先づそれ位のところでした。といつて學問をさせないの何のといふのではなく、小生意氣にハイカラがられてはいやだったのですが、學問を常人が望みでやることには、自分が好きな道ですからとめたりはしたいのでした。

ところが男の子が小學校に上がるといふ段になつたら、大分自分に

考がある樣子で、九段上の「曉星」がいゝ、あすこは生徒も上品の子が多いし、小學校から外國語（佛蘭西語）をやるし、制服も可愛いといふので、わざ〳〵自分で行つて規則書を取つて來てくれて入れたものです。といふのも外國語をみつちりやらせやうといふ考だつたらしいのです。

まづ小學校で佛蘭西語をやる。中學校へ行つてそれに英語が加はる。しかし外の中學よりは程度が落ちるといふから、中學へ行つたら英語は自分が敎へる。それから高等學校へ行つたら獨逸語を敎はる。すると大學へ行つた頃には英佛獨三ケ國語に通じることが出來るとかいふのでした。實際自分でも、英語はお手のものでしたでせうが、始終佛蘭西語の雜誌や本をよみ、獨逸語は大分忘れたからといつて、一時小宮さんから獨逸語の本をよんで貰らつて勉强してゐたことがあつた程ですから、私にはわかりませんけれども、絕えず語學のことは心掛けて居たのでございませう。それ位ですから男の子のことが心配だつたものと見えます。

そこでまづフランス語を見てやるといふので、學校からかへつて來ると、書齋へ呼んで敎へます。それを隣の部屋で聞いて居ますと、馬鹿野郞馬鹿野郞の連發で、とう〳〵しまひには男の子が泣き泣き書齋から出てまゐります。どうも敎へてるより、馬鹿野郞の方が多い位です。そこで私が見るに見兼ねて申すことです。

「貴方のは敎へていらつしやいますと、叱つてる方が多いぢやありませんか。これぢや隨分方々の學校で先生をしてらして、いつもあんなに生徒に向つて馬鹿野郞と怒鳴り續けてらしたんですか。」

「彼奴は特別出來ないからだ。一體おれは出來ない生徒にはどこの學校でも仇敵のやうに思はれたんだが、其代り出來る生徒からは非常にうけがよかつたもんだ。」

とかう申しますから、

「でも相手は子供ぢやありませんか。そんなに馬鹿々々叱つてらつしやる間に、出來なけりや親切に敎へたらいゝでせうに。」

と申しますと、彼奴は頭が悪いんだとか何とか言つて居りますが、それからといふものは、あんまり馬鹿々々を言はなくなりました。一體こんな些細なことでも、その時は愚圖愚圖申して居りましても、自分が悪いと思へば後ですぐに改める質の人でした。やはり此頃のことでしたでせうか。よく見ず知らずの人が玄關に來て、短册を書いてくれの何のと賴みますと、直きに出て行つて書いてやつたものです。さうかと思ふと、座敷へ上がつて賴んだ人にも斷はつたりして居ます。それでは第一不公平だし、又それが例になつて、始終玄關で何か書かされてはやり切れないので、さう申しますと、其時は、おれは氣が向けば書くし、氣が向かなければ書かないんだなどゝ言つて居りましたが、次からはばつたりそんなこともやめて了つたことなどもあります。

この年の十一月に、中村是公さんに誘はれて、一週間程鹽ヶ原へまゐりました。かへつて來てからの話に獨で箱根へ越したなど〻申して居りました。

此頃には、以前からおいでになつた所謂漱石門下といはれた人達の外に、若い人達が大分お見えになりまして、一時一寸さびれたかと思はれた書齋も隨分賑かになりました。和辻哲郎さん、太宰施門さん、江口渙さん、内田百閒さん、岡榮一郎さんなんかゞ、始終ではなかつたでせうが、ちよい〳〵おいでになつて居たやうです。中でも賑かなのは赤木桁平さんで、家中にとほるやうな甲高い聲で、始終喧嘩でもしてゐるやうに一人でしやべつてらつしやいました。姿を見たのは餘程後のことで、私は聲だけ聞いてるのですが、あの聲はどなたですと尋ねますと、夏目が、あれは赤木桁平といつて、あの字をケタヘイと讀むと怒るんだよ。あれのいふことはよくきいてると片側町でね、裏は田甫なんだよなどゝ冗談を言つてゐたことがありました。それから來ては殆んど商賣のやうに字や繪をおかゝせになる中央公論社の瀧田樗蔭さん、この方も風變りな常連のお一人でした。少しおくれて芥川龍之介さん久米正雄さん、それから松岡譲など、まだ此外にも若い方々がよくお見えになりました。しかし大半は私が名前や聲や、時には隣の部屋で聞く聲位のもので、お付ひして顔をおぼえたのは、夏目が亡くなる時からでした。

陪審裁判と共産黨事件

布施辰治

一

いよいよ來る十月一日から實施せられる「陪審裁判」と、近く其の公判を開廷せられんとする「共産黨事件」とは、昨今の我國裁判史上に劃時代的の渦を捲いて居る二大變革事件である。

× ×

特定刑事事件の犯罪事實認定を、斷然、民衆司法參與の陪審評議に附せねば爲らない陪審裁判の實施は、從來、法律專門家のみに依りて獨斷せられた官僚裁判の缺陷を救ふ裁判制度の一大變革だと云ふので、在朝在野一聯の法曹は、今や其の宣傳に大車輪の汗を流して居る。然かも、民衆の意に背いて國賊の罪に陥るか？民衆の意を迎へて、、、、、を樹立するか？と云ふ共産黨事件の公判を、民衆司法參與の陪審裁判から除外せんとする司法當局の苦心、殆んど想像の外なるものがあると云ふから可笑しいでは無いか。

だが、今頃依然として、法律專門家のみの官僚裁判所に、陪審評議答申の一蹴を許す先天的畸形の姿を以て實施せられる我國の陪審法第四條は、最も民衆司法參與の必要ある政治犯罪、公安犯罪、選擧犯罪等に對する陪審裁判を除外して居るのだから、民衆、、、、、、、、其の事が直ちに國體の變革を意味すると云はれる共産黨事件を、民衆司法參與の陪審裁判に掛けまいとするのは、素より其の所であらう。

夫れかあらぬか、所謂三・一五事件として、全國一齊の大檢擧を彈壓した、彼等の所謂共産黨狩り以來、まさに半歳、五百有餘名の多數に上る起訴被告の氏名さへも發表せしめない記事禁止裡に、其の審理を進めて居た日本共産黨事件に對する豫審決定は、八月二十九日福岡地方裁判所の發表に相次いで、同三十日岡山地方裁判所の發表あり、東京のみは、どう焦つて見ても、陪審裁判實施期の十月一日前に決定し得ない事を覺悟したらしいが、其の餘の旭川、函館、新潟、大阪、京都等に於ける豫審決定は、少々位——否寧ろ少々ならざる無理をしても、陪審裁判實施期の十月一日前に發表して、共産黨事件を陪審裁判から除外するつもりだと云ふ司法當局の苦心が、切りに傳へられる。

私は、斯ふした陪審裁判の實施と共産黨事件公判とに關する司法當局の苦心なるものを聞きつゝ、先天的畸形陪審裁判實施の沿革を顧みて、常に其の名の獨立不羈を僭稱しながら、其の實、時の法相を兼任した原敬總理の命ずるがままに、頭其度し盛したとさへ言はし

めた司法當局の陪審制度反對[illegible]を[illegible]し[illegible]コトに手の裏を返へすが如き陪審制度贊成論と變り、莫大なる陪審裁判準備の豫算を以て、大車輪の實施宣傳に汗を流しながらも、宣傳方法唯一の模擬裁判が一寸でも不評判だと、「夫れ見た事か、陪審裁判の不成績は初めから判り切つてる」と云ふた調子の、奇妙な得意顏をしたり、民衆司法參與の結果を憂ふる共產黨事件の陪審裁判を持て餘して居るのを見ては、有らゆる意味の特殊性を誇る我國に、「西歐文明の模倣の陪審制度などを實施するからさ」と云ふ厭味を並べて居る司法當局の淺猿しさに、今更の如き激情を禁じ得ない。

× ×

ともあれ、斯くして大正十二年陪審法の發布以來、陪審法廷の新築改築、陪審員名簿の調製及び一般民衆の陪審裁判訓練に一切の準備を整へた司法當局の、いよいよ來る十月一日から實施する先天的畸形陪審裁判の前途果して如何? 其の眞に我國裁判史上の劃時代的變革を招來するや否やを試驗するものは、[illegible]我國民の[illegible]れる共產黨事件の陪審裁判であらう。

と云ふのは、我國の先天的畸形陪審裁判は、總ての事件に對する罪の有無と、刑の輕重とを裁判するものでは無くて、檢事から起訴せられた犯罪事實の有無を爭ふ「然り」「然らず」の認定に關する民衆司法參與を許すだけのものである。餘程廣く、其の參與事項を擴張解釋しても、共產黨事件の問題となるであらう。檢事の或る起訴事實が「國體變革の目的を以て行はれたる事實なりや否や」の「然り」「然らず」と云ふ事實認定に關する民衆司法參與を許さるる以上のものではあり得ないだらう。夫れ故に、如何に「公平」な陪審員達が民衆司法參與の陪審裁判をしようとしても、被告自身が、檢事の起訴した犯罪事實を認めて其の罪に服する事件に就ての陪審裁判は成り立ち得ない。又、私共辯護士が如何に陪審裁判の民衆司法參與に依りて被告の有利を計らうとしても、被告自身が、檢事の或る罪を擬した起訴目的を認めて仕舞へば、其處[illegible]陪審評決に[illegible]たい。

ここに於てか、先天的畸形の姿を以て實施せられる我國の陪審裁判ではあつても、民衆司法參與の效果を十分に發揮せしむるがためには、あくまでも、彈劾當局の起訴檢事と對立、、する被告がなければならない。ただに身に覺えのない起訴事實を否認して爭ふのみならず、「お前がやつた或る行爲は、、、、の目的に出でたものに相違ない」と云ふ檢事の起訴に對し、決して、、、、の目的に出でたもので無いと爭ふ目的の否認から、更に進んでは、其の目的意識の對象と爲る、、に關する見解を爭ふ被告がなければならない。

だが、何迄、認定、、の獨斷に、、さるる被告心理を蹴飛ばして、彈劾當局の起訴檢事に對立するは勿論、官僚裁判の「欠陷」を指摘抗爭する勇敢な被告は、果して如何なる罪質の被告人に其の幾人を見出すことが出來るであらうか。

尤も、陪審裁判の實施と共に、一身一命の冤罪を民衆司法參與の信賴に訴へて、、、

、の司法當局に對立抗爭する被告の増加するであらう事は之を疑はない。が、しかし乍ら、實に陪審裁判の「實施」を試験し裁くためには、それらの一般事件とそれ等の被告達は、あまりにも小さくして且つ弱いであらう。——私は、この意味に於て、今や實施せられむとする陪審裁判の本質を最もヨク實験するものの一つは、近く其の公判を開廷せられんとする共産黨事件であらう事を指摘して憚らない。

共産黨事件こそは、我國に陪審制度實施直後の最大事件として、陪審裁判に附せられた場合、所謂陪審裁判の如何なるものであるかを如何に利用逆用して、其の本質を示すのであらう。

司法當局の間に於て、共産黨事件を陪審裁判に附すべきか否かといふ事が今何ほ問題にせられて居るのも、けだし其の爲であらう。處で、事實上法律上、問題の共産黨事件は果して陪審裁判に附せられるであらうか？　司法當局に[illegible]日に、共産黨事件に[illegible]陪審裁判を適用しないといふ方針に立て關係裁判所に之を通牒したと云ふ陪審裁判の除外を聲明しながら、越えて七月六日、原法相の車中談は「共産黨事件にも陪審裁判を適用する」と言明した。而して、今又、陪審裁判の實施期十月一日前の共産黨事件豫審決定に依りて、共産黨事件に對する陪審裁判の適用を除外せんとする司法當局の苦心なるものが傳へられるのである。

斯くては、被告關係當事者は勿論、昨今の我國裁判史上に劃時代的の渦を捲いて居る、陪審裁判の實施と共産黨事件の公判とに目を睜れる一般大衆の迷はざらんと欲するも迷はざるを得ないものは、共産黨事件に對する陪審裁判の謎であらうから、私は以下其の謎を解くと同時に、讀者諸君にも解かれるであらう謎の結果に對する所見のあらましを述べて、讀者諸君の注意を喚起したい。

× ×

私は、先づ、其の結論を提示するが、所謂共産黨事件[illegible]して、其の公判は陪審裁判[illegible]期たる十月一日以後に開廷せられるものは法律上斷然、法廷陪審事件として取扱はれなければ爲らないものである事を主張する、と同時に、共産黨事件其のものの性質上、事實的にも、飽迄民衆司法參與の陪審裁判に附すべきものであることを主張して、其の謎を解き進めよう。

抑々、共産黨運動の如何なるものであるかは玆に之を說く自由を有たないが、とにも角にも、民衆の廣汎なる、、、、、とによつてのみ眞に力强き其の發展を期し得るものである事を疑ふものはあるまい。從つて、共産黨事件の被告達が、單に資本家地主政府の手先を奉仕する、、、、と爭ふ爲にばかりでなく、官憲當局の檢擧彈壓が如何に、、、、、を極めたものであつたか、そして共産黨運動が如何に、、、ものであるかといふ事を一人でも多くの民衆に訴へむが爲に、あくまでも陪審裁判の適用を要求するであらうことは、共産黨運動の性質上素より當然のことでなければ[illegible]

この故にこそ、如何にかして共[illegible]局は、苦心陪審裁判にかけまいとする司法當局は、苦心の共產黨事件陪審除外策を按じて、、、、、、、、裁判に附する官僚獨斷の、、を希ふのである。それは、從來、一般民衆に訴へられる事を怖れる斯種事件公開禁止の闇黑裁判によつて、民衆の眼から之を斷ち切りたるが如く、共產黨事件闇黑裁判の官僚獨斷を彈壓せんが爲である。

何故なら共產黨運動に對する官憲當局の恐怖俱に驚くべきものがあり、彼等が、如何なる、、、、、を以てしてでも、共產黨運動を徹底的に破壞し彈壓しなければならぬ事を敢行した、治安維持法の改惡は、實に、左樣した恐怖と痛感との法律的具體化にほかならないからである。——試みに見よ、治安維持法の法益とする「國體の變革」と「私有財產制度の否認」とは、既に刑法の內亂罪にも外患罪にも共に含まれて居て、敢へて之を特設する必要なきものである。にも拘らず、稀代の惡法治安維持法として特設した所以のものは、[illegible]黨運動——即ち——打倒資本主義運動——の目標たる「私有財產制度の否認」を結び付けて之を恩赦令から除外せむがために、或る意味の犯罪を光榮とする政治犯から之を斷ち切り、そして、大審院特別權限初審終審の裁判管轄を奪ふて瀕々たる檢擧彈壓の、、を凝視せんとする、、、、の耳目を、、すると共に、傳統的政治犯の恩赦を除外したものであることは、種々の關係法規から之を綜合判斷するに難くない。從つて、內亂外患に關する政治犯を、陪審裁判から除外した彼等の意圖より言へば、治安維持法違反の共產黨事件を陪審裁判から除外せむとすることは、ただに事件內容の、、、、、るが故のみならず、共產黨運動彈壓の立法政策そのものから見てもあまりに當然な事であつたらう。

だが、彼等の立法破綻は、陪審法第四條の除外法規中に治安維持法を記載することを遺忘したのであつた。その結果は、司法當局の苦心殆んど想像の外なるものあるにもかかわ[illegible]改惡前の陪審法第三[illegible]惡後の同法第二條法定陪審に該當するのである。即ち、皮肉にも、改惡前の治安維持法は、陪審法第三條の、所謂請求陪審に該當する丈けだつたのだから、被告達からさへ其の請[illegible]求がなければ、敢へて陪審裁判に附さなければならない必要が無かつた。けれども、改惡後の治安維持法は、被告達に死刑の極刑を擬して居る關係上、如何にしても之を陪審法第二條の法定陪審に附さなければならなくなつたのである。——とはいへ、被告關係者達に萬一もの誤解のないやうに注意して置き度い事は、改惡後の治安維持法は、實質上決して此度の共產黨事件に適用せられるものではないと云ふことである。これは、刑法第六條に「犯罪後の法律に因り刑の變更ありたるときは其の輕きものを適用す」と云ふ規定があり、新舊の法律、即ち、犯罪當時の法律と裁判當時の法律とを比較して其の輕きものを適用することになつて居るから、犯罪後に頒く

なつた改惡治安維持法の規定は、絕對に適用せらるべきものでない事をハッキリ斷言し得る。然かも、手續法としては、其の何れが重いか輕いかを比較するために、新舊改惡前後二つの治安維持法が共に共産黨事件の比較適用法律として提示せらるべきである。

そして、その新法律、即ち改惡後の治安維持法が死刑及び無期懲役を法定刑として居る限り、陪審法第二條の法定陪審として、此度の共産黨事件を陪審裁判にかけなければならないことは、實に法律知識のＡＢＣである。

其の爲に司法當局苦心の一策は、十月一日の陪審裁判實施前に急遽無理矢理の豫審決定を發表し、次いで最初の公判期日を指定して共産黨事件に對する陪審裁判の適用を除外せんとして居るのであらう。だが、如何に、彼等が其の公判を急がうとしても、彼等丈けの意圖を以て決することの出來る豫審決定や、最初の公判期日指定は、假に十月一日の陪審裁判實施期前に之を決定發表し得ても、被告人達及び辯護人達の意圖にかかる實際の公判進行は、斷然十月一日前に之を決行せしめないであらう。

果して然らば、陪審裁判の實施期十月一日前彼等の意圖のみを以て爲し得る最初の公判期日指定に依りて陪審裁判の適用を除外し得るものは、所謂請求陪審事件丈けであつて法定陪審事件を除外し得ないことを如何とも爲し能はないであらう。

爰點に就て、司法當局の或者は、既に普通刑事訴訟法の手續に依りて、公判手續に着手した共産黨事件其の後の陪審裁判を適用し得ざるが如くに云ふて居るが、陪審法が刑事裁判手續法であり、そして刑事裁判手續法は其の施行前に發生した事件にも之を適用することを命じて居る限り十月一日の陪審裁判實施前に檢事の起訴事實陳述を終つて居らない共産黨事件は、如何に其の前に最初の期日のみを指定しても、所謂法定陪審事件として斷然之を陪審にかけなければならない事に爲るであらう。

二

かくして、いよいよ共産黨事件が所謂民衆司法參與の陪審裁判にかけられた場合の結果はどうか。

或者は、不忠不臣其の肉を喰ふとも飽き足らない「國賊」事件としての不利を憂ふと云ふ、如何にも彼のサッコ、ヴアンゼッチの強盜殺人事件が其の冤罪なりしにも拘らず、被告達の無政府主義者なりしが故に有罪と認定せられた不利な事例のない事はない。だが、私は思ふ。——サッコ、ヴアンゼッチの強盜殺人事件は、彼等の裁判記錄を讀む何人でも其の冤罪たることを認めない者のない一般大衆が、其の死刑決定後、嵐の如く捲き起した死刑反對の大運動をサッコヴアンゼッチの冤罪、、、ノに捲き起して與れさへすれば、如何に彼等が無政府主義者であつても、陪審裁判は必ず之を無罪にしたに違ひない。

而して、我國の陪審裁判は、如何に其の見るが如き畸形の姿を以て實施せられたものにもせよ所謂民衆司法參與強調の意味に於て同樣のことを言ひ得よう。

要に、治安維持法の法益と共産黨運動の主張と、其の何れが眞に民衆の、、をかち得るかといふ事にかかるのである。即ち、共産黨事件の陪審裁判を有利に展開せしめ得るか否かと云ふことは、ひとへに、共産黨運動の、、を如何に深く民衆に徹底せしめるか、又共産黨運動に對する民衆の、、を如何により多くかち取るかの努力にかかつて居るのである。だから、今日の民衆にして、所謂共産思想を彈壓する目的を以て治安維持法を制定した資本家地主階級同様に其の所謂共産黨なるものと見て居らない限り、私は共産黨事件に對する陪審裁判の評決は断然其の不利ならざることを確信する。

先年、幸德某等の「大逆事件」に關與した某氏は、當時民衆の思想水準を「甲狂暴」「乙過激」「丙危險」「丁急進」の四段階に分けて、要視察人物の黒表を作つたものであつたが、當時の「甲狂暴」が今日の「丁急進」位と爲り、當時の「乙過激」「丙危險」「丁急進」は、最早や今日の一般思想になつて居る、と云はれた。

如何にも共産黨運動の目標とする一私有財産制度の否認」——打倒資本主義——の思想は、多かれ少なかれ、漠然たる姿を以てにもせよ、今日の、、が等しく胸に抱く「、る所から、い所へと希ふ」一般思想である。果して然らば、打倒資本主義の共産思想を所謂「國體の變革」に結び付けて彈壓せんとして居る治安維持法の法益こそは、民衆司法參與の非とする所であらう。

又、假りに、共産黨運動が、所謂國體を變革せんとするものであるにしても、その所謂國體の變革を眞に怖るるものは、、、、、、、、、、、、、、、、、、、、、知れない。

何故なら、行き詰つた資本主義の不景氣に苦しむ今日の、、は「、るもの」が「、い者」に其の、、、、することによつてのみ此の不景氣を切り抜けることを希求して居るのである。日本の國富は次第に増加して行くと稱せられ乍ら、その國富は有るが上にも「、る者」の懐へ悉く流れ込んで「、い者」に無いが上にも益々「、る者」から、、せられて居る現狀に堪へられない不滿と不平とを感じて居るものは民衆である。これこそ、民衆が、、、、、、、、、、、、、、、でなくて何であらう。だから資本家地主階級の、、、、なる、、、、の逆宣傳から醒めて、、、、、の如何なるものであるかを認識し得るであらう民衆は、必らずや、、、、、、、、の方向にこそ進め、決して、、、、、、、、、が如きことはないであらう。少くとも働いて喰ふ一般民衆の頭の中には、所謂國體は私共民衆の苦しみを救ひ「、る者」から「、い者」への、、を徹底せしめてこそ其の尊さを誇り得るものではないか、といふ國體觀念を生じつつあるのである。

故に私は曰ふ——共産黨事件を民衆司法參與の陪審裁判に附する事は、共産黨事件其のものの本質上、斷然必要な要求であると同時に、亦不利では無いと。

と云ふても、我國の陪審裁判は、先天的の畸形兒であり、陪審員に、すべて、、、、

、、、の忠實なる奉仕者、若しくは、少くとも、、、、、、、の主張に對立し得ない者のみによつて構成せられて居るのであり。又、、、、、、、、は、あらゆる機關を總動員して共産黨運動に對する逆宣傳を試みるであらうから、共産黨事件を陪審裁判に附するの危險は絶對にないとは云はない。だが、既に、、、、、は民衆をして、、、、、の側に歩ましめつつある。そして、彼等權力階級が反共産の術策を弄すれば弄する程、其の曝露はいよいよ民衆を、、、にかち取るであらう。

而して、當局も陪審員も、民衆の輿論と力とに壓倒せられなければならないであらう。

三

最後に私は、陪審裁判に臨む共産黨事件被告諸氏の態度に就て一言したい。

大正十二年、東京共産黨事件公判の際、盛岡の一同志の言ふた事であるが——被告諸氏は其の、、、的な犧牲の態度に堂々たるものである事を仰ぎ見せしめて貰ひ度い。夫れは地方青年の解放運動に對する感激を深からしむるためにも、止むに止まれぬ、、、、、、、、ゆる信念の焔を燬く民衆の胸に點ずるにも必要な態度であると。

そして、時の裁判とは何か。それは、時の支配者が民衆に加へる、、の合法化である。被告が裁かれるのではない。裁かむとする支配者を被告達の身を以て信念する社會科學の、、が裁くのである。

我國の解放運動史上を飾る我等の行動を見よ。我等の主張の如何に、、、かを聽け。我等の、、、、、し我等の主張を、、、とする者こそは、全民衆の、であり、やがては社會進化の、、に裁かれるであらうと——私も望む共産黨事件の被告達は、あくまでも此の態度を以て裁く者を、、し、聞く者をして感激せしめなければならない。

總ての人間は、感激に富む不思議な性能を有して居る。それは、實感に直面し、何者の、、をもかなぐり捨てて感激のままに動くことすらあるものである。斯うした感激性の人間であればこそ、、、、、、もうり得るのである。前々の共産黨事件に於ける某被の堂々たる態度に感激した裁判官があつた。アナキスト復讐事件被告の、、なる態度に感激して、其の告白書を自家の子女に讀物として與へたと云ふ某があつた。

私は、私の斯うした體驗に顧る時、共産黨事件を陪審裁判に附する事の決して不利ならざることを、否な、むしろ、有利なることを確信するものである。共産主義の、しき限り、又その運動に犧牲を任じた闘士の、、として、、、、、、、なる限り、必らずやそれは、民衆を之が、、、として獲得するであらう。而して、、、せんとする支配者を、裁かんとする彈壓者を、遂に、、し去るであらう。然かも、萬一にも其の反對の結果を見たら、その時こそは、我國の陪審裁判が、如何に反動的な民衆、、に滿ちたものであるかと云ふ事が、白日下に明らかにせらるるものであることは、素より、改めて語るを要しないであらう。

歌曲　秩父の長者

佐々木信綱

「これは秩父の奥、荒川の水上に住居する樵夫にて候。此ほど、峰なる木を樵り候をりから、我が手にもたる斧の柄の、あやしや朽ちてころ〳〵〳〵、底なし淵に沈んで候。

「いかにせむ山賤の、かつがつ立つる直柴の煙、たえず勤しみ執りし斧を、いかにかせましたづきなや。

「歎き候ほどに此七夜、夜ごと〳〵に靈夢あり。淵の奥かを極めなば、斧は我が手に返らむと。

「眼もこそ二つあれ、唯一つなるよき斧を、いざさは取らむ取らでやは。身を躍らして淸淵の、うづまく中に飛び入つたり。

「や〻や〻や、此處は何處ぞ白浪の、みる目まばゆき高殿に、乙姫君が織り給ふ、機の筬の音とん〳〵〳〵。筬は白玉經緯の、糸は黄金に白金や。魚族光る冠を、よそほふ童子聲淸く。

「汝年ごろ生業に、勤しみはげむを御感のあまり、投入し斧を返したまふ。そが上に、授けとらすぞ玉の筬。この筬を、ささげ祈らば望むもの、のぞむまに〳〵出でくべし。さはあれ心たゆまん時、忽ち消えんず靈驗は。

「有がたや、賜ふ二つを兩の手に、いただきまつり額づけば、其たまゆらにもとの岸、花さく桃の陰なれや。夢か現か摩訶不思議。筬をさゝげて祈らくは。

「わが家いでよ、たんらるら。見る〳〵成れる殿づくり。

「わが妻いでよ、たんらるら。見る〳〵笑める顏よ人。

「斧と筬とは結ぶの神、神とし齋く眞心は、たゆむ思のあらばこそ。夫は造る、機殿を。妻は筬の音とん〳〵〳〵。機おり唄も束ふり

「秩父の山はを三峰や。雲居に並ぶ夫婦杉。をさ〳〵をさき玉の筬

「秩父の水はゝ長瀞や、永久に動がぬ千曳岩。をさ〳〵をさき玉の筬

「織るや千疋萬々疋。秩父の長者と榮えたる　昔がたりを今ここに、うたひことほぐ唄の一ふし。

（秩父宮殿下の御成婚を祝ひ奉るべく、作曲者杵屋佐吉氏の囑により、秩父の客舍にて作る）

西園寺公評傳(其二)

白柳秀湖

一　自然人としての西園寺公

西園寺公が佛蘭西に到着した時は、ちやうどかの普佛戰爭の大詰で、名高いセダンの城砦が落ち、勝ち誇つた普魯西軍が潮の如くパリに押寄せて、さしも世界にその華美を稱せられた歡樂の都も、一朝にして紅蓮の海と化し去らうといふ大騷動の最中であつた。

此時、公は歐洲航路にとらず、太平洋からアメリカを横斷し、英吉利を經てパリに入られたものらしい。

公と同船で洋行した人に黒岡帶刀といふ薩摩人が居た。此人は先づ英吉利に留學し、後佛蘭西に遊んだものらしい。嘉永四年八月生れで、公より二歳の弟であるが、明治六年佛蘭西から歸つて海軍少尉補に任ぜられ、西南戰爭及び日淸戰爭に出役し、明治二十六年までに累進して海軍中將となり、豫備役編入と同時に貴族院議員となつて最近歿したが、晩年は薩派に關する維新史料の整理などに携はり、公のこともよく知つて居た。公卿の子弟中から優秀なものを拔擢し、之に新國家建設の一部面を受持たせるがよいといふのは、當時一般の輿論で木戸も之を云つて居たし、大久保も之を云つて居た。殊に大久保の如きは、その日記の中に公を名指して、その洋行を望む旨を、述べて居る。前號に述べた公が斯樣に薩長の巨頭から囑目されたのは、その越後口の戰場に於ける大參謀としての活動が頗る目覺しく、所謂長袖者の亞流を以て目すべからずといふので、武人の間にひどく評判がよかつたのも、確にその原因の一つであらうといふことは從來此黒岡の說で、黒岡から竹越氏に話のあつたことである。必ずしも竹越氏の意見といふわけではなかつたさうであるが、僕の見る所では、前號に掲載した洋行に關する公の談話は、必ずしも黒岡の說を打消して居ないと思ふ。公は自分で思立ち、自分で洋行されたと信じて居ても、公も亦一個の人間であるから、周圍の事情によつて動かされ、時代の波濤に推蕩される關係を一々意識し得るものでな

い。

僕は此機會に一言して置きたいのは、前號に援用した某氏筆記[illegible]のことであるが、之は僕にとつては、幸徳、堺の二氏を通じ、久しい間の先輩である小泉策太郎氏が、公の特殊の性格から、その正しい傳記資料の一として世に傳はらず、竟に湮滅に歸せんことを惧れ、公に會つてその談話を聽取する毎に、全く忠實な速記者の態度で、一字一句も修飾を加へず、ボツ〳〵と筆記して置いたものの中から、發表して支障なしと思はれる部分を寫させて貰つたものである。公の談話としては絶對に正確なものと云へよう。下らぬ憶測の起る惧れもあるから、茲に發表して置く。

公が船中からその學習院時代の教師、伊藤某（前號參照）に送つた手紙は大へん面白いものださうで、それが内藤湖南氏の手にあるといふこともきいて居る。又、蒐集家として學者の間に評判のある牛込の林若吉といふ人は、公がパリに著いて間もなく認めた家信の寫しを持つて居る。此家信は公がサンフランシスコに著いてアメリカを横斷し、英吉利を經てパリに入る間の見聞を述べたものださうであるが、自分も發表する積りであるからと云つて見せられなかつた。

普佛戰爭及びパリコムミユンを公は果して何う見られたか。今僕等の立場から之を見れば、ナポレオン戰爭も、普佛戰爭も、パリコムミユンもひとしくこれ佛蘭西革命史の一節であり、日本の明治維新と共に、世界歴史上の[illegible]事柄である。ミシュレーも、ソレルも、ステフェンも、カーライルも、僕等の見る佛蘭西革命には見て居ない。況んや公に僕等と同じ佛蘭西革命に對する理解のあらう筈がない。併し、それにも拘らず、明治維新史を語らずして公を傳することが出來ぬと同じく、佛蘭西革命史を語らずして公を傳することは出來ない。何故となれば、僕の公を評傳する立場は、從來の傳記作者と全くその根柢を異にして居るからである。公が明治維新を如何に見、佛蘭西革命を如何に見て居られるかに論なく公は明治維新によつて造られ、佛蘭西革命によつてはぐくまれた『自然の一存在』であるからである。之を脱線だとか、馬琴張りだとか評するのは、近代人意識の皆無を自白するより外のものでない。

二　西南日本とジロンド州

佛蘭西にも大阪はある。マルセーユがそれである。佛蘭西にも兵庫はある。ツーロンがそれである。佛蘭西にも京都はある。リヨンがそれである。佛蘭西にも日本の薩州若しくは長州に比すべき特殊の地方がある。ガロン、ドルドーニユの下流、ボルドーを中心とする西南の一隅、ジロンド州はその地位から云つても、氣候風土の關係から云つても、人情風俗の關係から云つても、正しく中國以西の日本に對比すべき地方である。佛蘭西革命の初め、ジロンド黨が中心となつて立法議會（アッサムブレエー・レジスラチーブ）を指導し、千七百九十二年[illegible]

を執つて、リヨン、マルセーユ、ツーロン、ラ・ヴアンデー等の諸都市に於ける商工中産階級の財力を背後に負ひ、革命の中心勢力として働いたことは人の善く知る所である。日本の明治維新に於いても、尊王倒幕運動の第一線に立つて働いたものが、薩長土を始め各藩の下士階級であり、その背後から財力を以て之を支持したものが、大阪、京都、伏見、堺、下關、長崎等の富豪即ち商工中産階級か、然らざれば、地方に在りて地頭と百姓との中間に介在した土豪即ち地方的中產階級であつた點は全く佛蘭西革命とその揆を一にする。即ち日本の明治維新も、佛蘭西の千七百八十九年から千七百九十三年に至る第一次革命も、事件の基調をなして居る社會的動因に至つては全く一である。

併し、日本は何處までも日本であつて、佛蘭西ではない。明治維新と佛蘭西革命との經濟的、社會的動因は一であつても、その歴史として表面に現はれて居る事實は、全く同じでない。明治維新と佛蘭西革命とは如何なる點に於いてその筋書を異にし、又、形式を異にして居たか。

明治維新と佛蘭西革命とを比較して、僕はその國情の相異に基く、三つの大きい事實上の對照を擧げることが出來る。

（其一――皇室の比較）日本の皇室と外國の皇室とは、その國民に對する血統の關係に於いて全くその本質を異にして居る。此點の科學的說明は、科學の忠僕を以て自ら任ずる近頃の思想家も餘りに等閑に附し過ぎて居るが、頑固な國粹論者にも怠慢の實は十分にある。日本の皇室は太古の血族的農業部落から、現時の商工的大國家に至るまで、連綿として續いて居る血統上の絕對尊族である。外國に在りても、太初の國家組織は必ず日本と同じであつたのであるが、大陸の關係上、異民種と異民種との接觸が著しく頻繁で、太古の血統的支配者は夙にその跡を絕ち、人民も亦幾度か異種族の血を交へて、皇室と人民との關係が單なる經濟上の支配關係に過ぎなくなつて居る。勿論日本にも有史以來、經濟上の變革は外國と同じやうに起り、奴隷制度は莊園制度となり、莊園制度は貨幣制度となつたけれども、經濟上の豪族は唯、政權を掌握したゞけで、何物も皇室の血統的尊嚴を犯さうとはしなかつた。外國の皇室は、名こそ同じ皇室であるが、その尊きは經濟的、政治的權力によつて尊いのであつて、日本の皇室の如く、經濟的、政治的、實力の如何に拘らず、血統的に尊ばれるのとは事情が違ふ。佛蘭西の皇室などは先づ日本の征夷大將軍といふ格であらう。マルセイユは大阪であつても、パリは京都でない。ブルボン家の素質から云ふとパリは寧ろ江戸に比較すべきものである。

（其二――寺院勢力の比較）羅馬はチユートン人の爲に滅ぼされてしまつたけれども、羅馬のキリスト教は又マンマとチユートン人を骨抜きにしてしまつた。羅馬法王はチユートン人の蠻俗を利用して歐洲大陸を封建化し、更にキリスト教の世界主義的教化を以て諸侯國を羅馬教會に統一した。此時から歐洲諸國は經濟的には自給自足となり、宗教的には一家となつた。

日本には此羅馬法王に匹敵すべきものはない。延曆寺、園城寺、興福寺の勢力は、鴨川の水と賽の目の譬と共に古く、本願寺門徒の勢力は戰國の歷史に著しいが、之を歐洲中世紀の羅馬法王が、全歐洲の寺院を總轄し、之を通じて各國にその三分の一以上の莊園を有し、何れの國王よりも強大なる財力と兵力とを擁して、諸王をその脚下に平伏せしめたのとは同日にして語ることが出來ぬ。

歐洲では商工中產階級が擡頭して、專制君主に迫り、その生命、財產に對する法律上の保障と、通商貿易並に利潤取得の自由とを要求する前に、先づ之を羅馬法王及びその地方的行政機關である各國の寺院に對して要求しなければならなかつた。僕は前項に於いて、歐洲各國に於ける諸王家を、その血統上の支配關係から征夷大將軍に比較したが、それは一ヶ國に就いての話である。右に述べる如く歐洲を一ヶ國と見て封建制度の根柢をなす莊園經濟の上から云ふと、征夷大將軍は各國の王家でなくして正しく羅馬法王である。法王權に對する帝王權の主張、若しくは恢宏運動が尊王論であり、ルーテルやカルヴインは實に尊王論の先驅者であつた。

然るに此宗教改革といふものは一面から云ふと歐洲大陸に於ける南北兩種即ち南方のラテンと、北方のチユートンとの勢力爭ひであつた。佛蘭西は南北兩種の相接する中間地帶であるが、チユートン諸國に對する商業上の支配權に於いて或る程度まで羅馬教會と利害を同じくした爲に、舊敎の總本山となり、西班牙、伊太利の南方諸邦と提携して、北方の宗教改革を鎭壓しようとした。佛蘭西の政治革命が、英吉利の政治革命より百年も後れて、彼が如き陰慘事を繰返さなければならなかつたのは、近代國家の成立に是非とも必要な宗教改革といふ切開手術を怠つて、病氣を內攻させて居たからである。日本の明治維新にはかやうな厄介極まる革命の二重性はなかつた。

（其三——第四階級の比較）日本の明治維新は大名の兵力と、之を支持した富豪及び豪農の財力とによつて成し遂げられ、佛蘭西の所謂第四階級の力は全く之に與らなかつた。強て云へば、長州の奇兵隊の如きは第四階級の力を利用したものであるが、其數の上からは殆ど云ふに足るほどのものでない。然るに佛蘭西革命には初めから第四階級の力が利用されて居り、歐洲諸國の壓迫に對しても、王宮を護衞した外國の雇兵に對しても、ジロンド黨、モンタギウ黨ともに之を利用して革命の目的を達して居る。

西園寺公がパリに入つて目擊されたコムミユンの騷動は、即ち革命に利用された第四階級の一揆で、日本で云へば、奇兵隊の騷動に思想的色彩を施したやうなものであつた。

三　明治維新の三黨派と佛蘭西革命の三黨派

千七百八十九年、商工中產階級を代表するミラボーが三族會議に獅子吼して、佛蘭西革命の火盞を切つてから、千八百七十一年五月パリ・

コムミユンが亡び、現今の共和政體が成立するに至るまでの變遷を、中學校の生徒が世界歴史を暗記しようとするやうにして呑込まうとしても、それは全く無理である。それほど佛蘭西革命は迂餘曲折し、波瀾重疊して居る。併し、その複雑な、目まぐるしいほど變化の多かつた佛蘭西革命も、之を我明治維新の際、薩、長、土三藩の上士階級によつて主張された公武合體主義と、同じくその下士階級によつて支持せられた尊王攘夷主義と、幕府は勿論各藩の頑迷者流によつて固執せられた佐幕主義とが、三つ巴となつて揉みに揉んだ事實に擬へて考へて見ると、それは正しく我嘉永、安政から慶應、明治に至る間の朝廷及び幕府の政變以上に複雑で目まぐるしいものではない。

革命の初め國民議會（アッサムブレエー・ナショナール）を組織した第三階級、即ち商工中産階級の代表者の中に、大體三つの黨派があつた。其一はフユイアン、即ち立憲黨であり、其二はジロンド黨であり、其三はモンタギユー、譯して山嶽黨と稱するものである。山嶽黨はその議席が、他より稍高い所にあつたので命名せられたものである。

此三黨は何れも平民、即ち商工中産階級を代表するものであつたが、立憲黨は其中の所謂右傾派で、國王及び貴族、僧侶の階級を大體其儘とし、之と協調して、佛蘭西を立憲君主政體の商工國家に改造して行かうとするもので、公武合體主義者の中でも佐幕派に近い、長藩の永井雅樂とか、永井とは[illegible]にしたけれども、先づ[illegible]大[illegible]改革を行ひ、幕府を中心として公武合體の實を擧げ、以て攘夷の目的を達しようとして居た水戸侯齊昭とかいふ位の所に比すべきものと思はれる。ジロンド黨は、之も公武合體主義者に相違なく、初めから國王の周圍に在りて政權を壟斷し、放恣專濫を極める貴族、僧侶の階級には反對したけれども、國王を刑戮しようとか、共和政治を施かうとかいふ考は毛頭なかつた。飽くまでもブルボン王家を中心として、佛蘭西を立憲君主制の商工國家に確立して行かうとした點は立憲黨と同じであつた。之は朝廷を中心として幕政に干渉し、譜代中心の傳統政治を覆へして僕の所謂文久維新の實を擧げて居る島津久光とか、將軍に説いて大政を奉還させ、公武合體、擧國一致して開國進取の經綸を行はうとした後藤象二郎とかいふ所に比すべきものであらう。モンタギユー黨は正しく尊王討幕一本槍の下士階級で、薩藩の西郷、大久保、小松、長藩の高杉、桂（木戸）大村、山縣、土藩の中岡、坂本、板垣といふ所であつたらう。但し、モンタギユー黨とて、其多數は初めからルイ十六世の處刑を主張したわけでもなければ、千七百九十三年の威嚇政治を計畫して居たわけでもない。初めはジロンド黨と提携し、國王ルイ十六世を中心として改革の目的を達しようとして居たのであるが、國王が革命以來、國外に奔竄した貴族、僧侶の誘惑に打克つこと能はず、密にパリを出奔し、普墺を始め諸國の兵刃を藉りて、國內の革命運動を鎮壓せんと企つるに及び、勢の激する所黨內のジヤコバン[illegible]

し、ジロンド黨の與黨を排してルイ十六世に死刑を宣告し、革命裁判所跳梁に公安委員會の名による血腥い恐怖政治の幕は切つて落されたのである。

是より先立憲黨は全く屏息し、ジロンド黨のみその溫和なる立憲主義を把持して、ジャコベン黨の共和主義に對峙して居たが、ルイ十六世が刑戮せられて佛蘭西の主權がロベスピエールを首領とするマラー、ダントン、カルノー等公安委員會の手に移つてからは、ジロンド黨は血に渇いた狼のやうな暴徒の群に驅立てられて多くは斷頭臺上の露と化し去つたが、ジャコベン黨は尙ほ之に飽足らず、マラーが花の如きノルマンデーの一少女コルデイの手に刺殺されてからは、更に其狂暴を逞うして王妃、王妹、オルレアン公ローランド夫人、前パリ市長に至るまでも悉く之を虐殺し、その犧牲が盡きてからは同志互に相食み、ダントンはエベールを仆し、ロベスピエールはダントンを殺し、鮮血淋漓たる革命の祭壇に、上帝を呼戻して『道理』の神を驅逐することにより、漸く虐殺に飽かうとして居る人心を收攬しようとしたが及ばず、千七百九十四年七月二十六日、ロビスピエールも亦コンヴェンション、ナショナールから全會一致、無道の暴王として彈劾せられ、七月二十九日ダントンの跡を追つて刑に伏し、茲に佛蘭西革命の劫火は人民の敵も、人民の味方も、漸進主義も、急進主義も有らゆるものを燬き盡して自然に鎭火する時が來た。佛蘭西は荒涼たる革命の墓場と化した。

四　長州の奇兵隊と佛蘭西の國民軍

佛蘭西が荒涼たる革命の墓場と化し去つた時、此廢跡の整理をして、革命をその本來の目的に呼戻し、商工中產階級を代表するジロンド黨あたりの理想とした立憲君主制か、若しくは立憲共和制かの近代佛蘭西を建設すべき使命は、國民議會（コンヴェンション・ナショナール）の牛耳を執つたバラー、カルノー等の双肩に落ちて來たのであるが、當時佛蘭西の存立を脅かして居た内外の難局は、到底無力な國民議會や、バラー、カルノー輩の手で打開せらるべきものではなかつた。佛蘭西は此時完全に革命本來の目的を達成し、四境に迫つて居る歐洲各國の軍隊を擊攘し、且つ此機會に乘じて大陸の商權を確實にしようとして居る英吉利の野心を挫く爲に、天才的一大獨裁官の出現を必要として居た。此要求に應じて生れたのがナポレオン・ボナパートである。

初め佛蘭西に革命が起ると、王室を圍繞して政權を壟斷して居た貴族、僧侶は何れもその緣故を求めて外國に奔竄し、國外から盛にルイ十六世を誘惑した。さうしてそれ／＼各國王を唆かし、兵を出して佛王を救援し革命を鎭壓させようとした。普墺は實に此時から所謂神聖同盟の中堅たる觀があり、千七百九十二年革命佛蘭西に對して先づ戰を宣し、十二萬の兵を以て潮の如く佛國に侵入し、一擧にしてヴェルダンを抜き、長驅して巴里を陷れようとした。之に對しては革

命軍の側にも、デユムリエーの如き名將があり、第四階級から成る國民軍を率ゐて善戰健鬪し、一旦之を國外に擊退したが、ルイ十六世の處刑はいたく各國の王室及び貴族を震駭させ、西班牙軍はピレニースを踰え、ピエモント軍（伊太利の一侯國）はアルプスを踰え、英軍は白耳義から、普墺聯合軍はライン河から、四方一時に迫つて革命佛蘭西を包圍した。此時の佛蘭西は實に我慶應二年に於ける長州そのまゝで、長藩の下士階級が百姓、町人の階級から壯丁を募つて奇兵隊を編制し、内に俗論黨（上士階級）と猛烈なる戰を交へつゝ、四境に迫つた幕軍を擊攘したやうに、革命政府は全國に令し、十八歲以上、二十五歲以下の男子百二十萬を以て悉く兵役に服さしめ、別に老幼婦女に命ずるに後方勤務の事を以てし、到る處に敵を擊破して、中世式封建軍に對する近代式國民軍の威力を遺憾なく發揮した。ナポレオンは此捷利の結果を一層確實のものとなし、全歐洲に對する佛蘭西の產業的、政治的支配權を決定し、大陸に對する英國の商業的野心を封鎖する爲に、革命佛蘭西の輿望と信賴とを一身に負うて奮起したものであつた。

英國と佛蘭西との歐洲大陸に對する經濟的爭覇戰は、百年戰爭以來のことであるが、ナポレオンが革命の精神とは全く相容れぬ黄金の帝冠と、厳めしい古英雄の假面とにかくれてした仕事は、國民議會に代つて、走り過ぎた革命を其本來の目的に呼戻し、歐洲に於ける佛蘭西の覇業的支配權を確立する爲に、英吉利の勢力を大陸から驅逐することにあつた。ナポレオンが歐洲を征服して英吉利を潰[illegible]大陸の經濟的封鎖によつて之を屈服せしめようとしたことや、伊太利のタペストリー（綴織）を禁止して、自國のゴベリン織（同じく綴織の一種）を保護しようとしたことなどによつて見ると、金冠も金モールも、彼にとつては世を欺く一時の假裝であつて、その如何に忠實なる革命の後繼者であり、商工中產階級の使徒であつたかといふことがよく分る。

ナポレオンがセント・ヘレナに流謫されて後、佛蘭西は約三十年の間、普墺を中心とする神聖同盟の監視の下に在り、ヴイナ會議によつて擁立されたルイ十八世は、小心翼々としてメッテルニヒの鼻息を窺つて居たが、佛蘭西の自由思想は間もなく歐洲全土に瀰漫し、革命の火の手は保守的思想の總本山たる普墺の足許をさへ脅すに至つた。是より先、佛蘭西がナポレオンの蹉跌により歐洲に於ける經濟上の支配權を失ふと普魯西は關税同盟によつて巧に中歐諸國を結束し佛蘭西に代つて大陸に於ける商權を把握しようとするに至つたので、英吉利は神聖同盟に對して快らず、自然其根柢に龜裂を生ずるに至つた。神聖同盟の緩解と共に、佛蘭西にはギゾーが出で、チエールが出て、コンスタンチンが出て猛烈にシャール十世の保守政治を攻擊し、結局千八百三十年の七月革命となつて、オルレアン家のルイ・フイリップ一世が迎へられ、佛蘭西は玆に完全に神聖同盟の羈絆を脱した。七月革命に續いて千八百四十八年には、二月革命があり、ギゾーが

選はれて第二の共和政府が成立し、ルイ・ナポレオンが迎へられて大統領となつた。處がナポレオンは二月革命に裏切つて帝位に即き、自らナポレオン三世と稱し、ヴイナ會議以來、新興の氣運隆々たるものありし普魯西を壓迫してその帝國的統一を妨げ、其羽翼の發育未だ十分ならざるに乘じ、歐洲の商業的覇權を確實に佛蘭西の手中に回收しようとして、ルクセンブルグ太公國の中立問題を始め、種々の要求を新獨逸に提出し、千八百七十年七月遂に普佛戰爭を迫出した。之が我明治三年中のことで、西園寺公は實に其年の舊暦十月、日本を立つて、佛蘭西留學の途に上つたわけである。

五　パリの陷落と公の入京

西園寺公が此戰爭の最中、如何にしてパリに入ることが出來たかは、興味ある問題である。

公が佛蘭西に著いたのを新暦に直して、千八百七十年の十二月の半過ぎとして考へて見ても、當時パリは容易ならざる混亂の眞最中であつた。セダンが陷落して、ナポレオン三世の捕虜となつたのが九月二日、皇后ユーゼニーが巴里を出奔して英國に遁れ、トロシユを大統領とする共和政府の出來たのが九月四日、メッツの開城で十七萬三千人の兵士が三人の大將と、三千人の將校とに率ゐられたまゝ敵に降つたのが十月二十七日、かくして普魯西軍の包圍を受けたパリが完全に敵手に落ちたのが翌千八百七十一年の一月二十八日であるから、西園寺公の巴里に入つたのに恐らく、一月二十九日パリ郊外の要塞に普魯西の國旗が飜つてから三月十八日巴里が一揆の手に落ちるまで、約一ケ月半ほどの間のことであつたらうと想像される。

既に述べて來た通り、佛蘭西革命の動力となつたものは、ジロンド州（ボルドーを中心とする）や、マルセイユ、ツーロン、リヨンあたりに擡頭した地方的若しくは都市的中產階級であるが、此第三階級たる中產階級の爪牙となり、羽翼となつて、國王及び貴族、僧侶を守衞した封建的正規兵を一掃し、普墺を始め歐洲各國の軍隊と戰つて、革命の目的を達成せしめたものは、其中產階級の最下級に班する一般市民、若しくは第四階級を以て稱せられる勞働無產階級である。此第四階級は始め、第三階級の鬪士達に煽動せられ、若しくはその雄辯に魅せられて、バスチーユを破壞したり、王宮に亂入したりする所謂モブに過ぎなかつたのであるが、國民軍としての團體的訓練が進み、その封建的正規兵に對する自分達の力の價値を自覺して來ると、何時までも同じモブではなく、第三階級の共和政府（若しくは第三階級の擁立した君主）に對して、その權利を要求するやうになつた。此第四階級運動の先驅者として、佛蘭西にサン・シモンがあり、アンファンタンがあり、プルードンがあり、フーリエーがあり、カベーがあり、ルイ・ブランがあり、その思想は後のカール・マルクスや、フリードリッヒ・エンゲルスの科學的であるのにくらべて、また著るしく哲學的であり、空想的であり、且つ詩的であつたが、兎にも角にも第三階級の政治的

由思想に對して、第四階級の社會的權利思想を促進させるに十分であつた。就中、ルイ・ブランの如きは、二月革命の際、假政府に入つて國民工場を起し、その理想を實行しようとしたほどで、その第四階級に對する思想的影響は決して尠少ではなかつた。殊にオルレアン家のルイ・フイリツプの下にギゾーが首相として政治を行つた時、パリに客寓し、間もなく佛蘭西を逐はれた露西亞のミカエル・バクーニン、獨逸のカール・マルクス、フリードリツヒ・エンゲルスなどの國外からした有形無形の援助もあつて、普佛戰爭の終局を告げる頃までには、佛蘭西の第四階級は非常な勢ひで、その近代國家の上に於ける自分達の地位に眼覺めて居た。

六　パリケードのお手傳ひ

講和條約批准の必要上、ジロンド州のボルドーに召集せられた國民議會には、保守黨が多數を占めた爲、パリ市民の意志は全く無視せられ、此際は速かに獨逸の要求を容れて講和條約に批准すべき事、同時にパリ市民の武裝を解除し、都をベルサイユに遷すべき事などが議決され、チエールが之を執行すべき新政府の首腦として選ばれた。

國民軍として、最後までパリを支持し、祖國擁護の爲、四圍の獨逸軍に對して勇敢に戰つて來た第四階級が之に不服であつたことは云ふまでもない。三月十五日、チエールがボルドーからパリに來て、市民の武裝解除を斷行しようとし、十八日の朝、先づモンマルトルにあつた二百五十門の大砲を取り上げようとし正規兵は到る處で、國民軍と合流し、共和政府の諸大臣は其日の內に難をベルサイユに避けて十九日には、オテル・ド・ヴイール（パリの政廳）を始めとして、市中の主なる公共建造物が悉く一揆の手に歸し、茲にパリとベルサイユとの對抗が始まつた。此騷動は三月十八日に始まつて五月二十九日に及び、全くコムミユン（執行委員會）側の失敗に歸してしまつた。一揆は、獨逸軍を後援とするベルサイユ軍の鏖殺するところとなつて六月三日にはパリが完全に共和政府の手に戻つた。

三月十九日巴里がコムミユンの支配に歸してから五月二十一日の夜、ベルサイユ軍の侵入と共に慘澹たるパリケード戰の始まるまで、五十餘日間のパリは極めて平和で、靜穩で、政府萬能主義者の想像するやうな不安な、亂暴な、卑猥な狀態は全く見られなかつたらしい。西園寺公が此間にパリに入つて宿屋に落ちついたものとすれば、何も不思議なことはない。曾て本誌に掲載せられた堺利彥氏の『パリコムミユンの話』に次の如き一節がある。

『然し、コムミユンの支配下に於けるパリ市の一般光景はどんなであつたかと云ふに、如何にも靜かで、平和で而も犯罪らしいものが殆どなかつたことは、敵も味方も一樣に認めて居た所である。從來ならば種々の犯行があつたり、淫賣婦が無數に出沒したりして居た場所に、コムミユン時代にはそんなものの影もなかつたと、殊にイギリス

の旅行者は語つて居る。（中略）此外教會の壇上には赤旗が掲げられて、キリストの福音の代りに社會主義の理想が說教され、チュイレリイの王宮は誰でも無料で聞きに行かれる音樂場に變つて居た。』

堺氏はその得意の譯筆で『或るイギリスの旅行者』の語る所を引くことにより物々しくパリの平靜を立證して居るが、その時、巴里には、我西園寺公も存外平氣で腰を落つけて居たのである。尙ほ此時のパリの事情はユーゴーの『ミゼラブル』にもよく現はれて居る。ベルサイユ兵がサン・クラウドの木戸を破つてパリに侵入した五月二十一日の宵には西園寺公も、群集の中に交つて國民兵の演奏を聽める野外演奏に耳を傾けて居たのかも知れない。

五月二十一日の夜から、二十二日にかけて、パリの三大要塞と稱せられるモンマルトル、トロカデロ、パンテオンの三個所が聯絡する市街の要所々々には、非常な速かさでバリケードが築かれ、男も、女も、老人も、子供も、市民といふ市民は皆その手傳ひに忙しかつた。バリケードといふのは、本來、一般要塞のことであるが、此時から、市中の建物を破壞して街路を閉塞し、市民が之によつて政府軍と對抗する革命戰の常套語として用ゐられるやうになつた形跡がある。

多分此時のことであらう。西園寺公が此物々しい光景を見物しようとして、市中を散步して居ると、今しも鶴嘴を揮つて、街路の舖石を掘かへして居た市民の一人が、『何うだい、少し手傳つて呉れちや…………。』と、親しげに笑ひながら呼びかけた。西園寺公は何心なく、

『ウイ、ムッシュ！。』

と答へた。すると件の男は言葉をとゞめて、稍々揶揄的になり、

『ウイ、ムッシュ？　今時そんな佛蘭西語を使つちやいかんよ。ムッシュたんて語はモウ此革命と一緒にケシ飛んでしまつたんだ。ウイ、シトアイアンと云ひたいネ。』

『ウイ、シトアイアン！。』

西園寺公はかく呟きながら、暗然して去つたといふことである。

七　西園寺公と佛國の諸名家

西園寺公は佛蘭西に留學中、エミール・アコラス（Emile Acollas）を師として法律學に政治學を學んだ。アコラスは當時佛蘭西で最も名聲のあつた政治學者の一人で、千八百七十年九月ナポレオン三世がセダンを保つこと能はずして普軍に降つた時、パリに出來た假政府の內務大臣であつたレオン・ガンベッタとは友とし善かつた。ガンベッタは獨逸軍のパリ包圍中、輕氣球に乘つてパリを脫出し、ロアル軍を編制して、パリを救援しようとした最も熱烈な、最も徹底した共和政治の支持者として有名である。

アコラスの著作として名高いのは（1）Manuel de droit Civ-（2）Les Droits du Peuple,（Cours de Droit Politique（3）Philo-hie de la Science Politique の三つであるが、その中最後のもの法律學上の[illegible]で、西園寺公からひとくその人となりを[illegible]

酒井雄三郎が『政理新論』と題して之を譯して居る。原著は千八百七十七年の出版で、それは公の歸朝する三年前のことであつた。公は酒井の譯書に序文を書いて居る。『亞哥剌士著、同氏門人西園寺公望序』とあるのがそれである。此譯書のことは木村毅氏の『第一メーデーの報道者』としての酒井雄三郎の評傳にも載せられて居る。(改造社版明治文學展望)併し、木村氏は右の一篇をものされた當時まだアコラスと西園寺公、西園寺公と酒井のことに關しては少しも興味を持つて居られなかつたものと見え、アコラスの事には一言も及んで居られぬ。酒井と西園寺公との關係は後に詳しく述べることにしよう。

西園寺公はアコラスを通じて世界大戰役の大立物であつた佛蘭西の老政治家クレマンソウ翁と同門の關係がある。クレマンソウは千八百四十一年佛國ラ・ボンダの生れで二十五歲の時米國に移住し、千八百七十年に歸國してパリのモンマルトルで醫者を開業をしたが千八百七十一年の國民議會には選ばれて議員となり、コムミユンが亡びて共和政體が確立すると衆議院議員として打つて出で、常に共和黨の最左翼に在りて行動し、終始ガンベツタを支持した。彼が米國から歸つたのは、西園寺公が初めて佛蘭西の土を踏んだ年で、その時クレマンソウ三十歲、公二十二歲であつた。ガンベツタ、アコラス、クレマンソウと絲を手ぐつて考へて來ると、公の思想の系統がよく分る。

西園寺公が、千九百十九年七十一歲の高齡でベルサイユの講和會議に全權委員として派遣せられたのは、主として公とクレマンソウとの交情に關し、何かの便宜が考へられたからであ[illegible]

アコラスは千八百九十一年六十六歲で死んだが、西園寺公を始めとして、中江兆民、松田正久等當時、佛蘭西に在りて自由主義の思想に觸れ、歸朝して民權運動の先驅者となつた人々の間には評判頗る高く、板垣退助の如きも、自由黨の內部に例の大波瀾を惹起した明治十五年の洋行では、パリに入ると先づアコラスを訪ひ、その意見を叩いて居る。板垣が明治十六年八月二十六日、大阪中之島の自由亭で東海、北越、近畿、中國、四國、九州の同志二百餘名と相會した時、列席者の懇請に應じてした歐洲觀光談に、左の一節がある。

『余の佛國に至るや、同國の學士アコラス氏を訪ひしに、氏は余に向つて、子は歐洲に來りて事物を觀察し、如何なる感覺を發したるやと問はれしに付、余は歐洲に在る日猶ほ淺きを以て、固よりその事情の詳細を知るに由なしと雖、大體上に着目するに、故國に在りて曾て聞きしが如く、歐洲理學の進步は實に驚くべきものあり、然れども今回最も驚愕したるもの二あり。其一は生活社會の大に進步したること是なり。其二は生活社會に比すれば、政治社會の大に進步せざること是なりと答へしに、アコラス氏は大に余が此言に感じて曰く、予も亦三日前に於て朋友と相議り、十九世紀に於て何をか最も注意すべきものかとの論題を揭げて叙述したる所ありしが、其意歐洲の生活社會は進步したるも政治社會は大に進步せず、故に十九世紀に於て最も[illegible]しく改良すべきは政治社會なりと云ふに在り。されば子が觀察は寔に善く我歐洲の現狀を看破したりとて、言外の

貴諾を受けたり。」(自由黨史下卷)

概畧はアコラスの外に、クレマンソウも訪うた、ユーゴーも訪うた。英吉利ではスペンサーにも會つて居る。但し、アコラスは當時佛蘭西の自由主義思想を代表する碩學として、我民權論者の間に最も聲望の高かつたものである。

公は明治元年十一月二十八日、會津の陣地を引払つて、京都に凱旋し翌年一月新潟府知事として赴任の命を受け、明治三年佛蘭西留學の途に上るまで、風流の道を學んだとしてもそれは恐らく何ほどのことでもなかつたに相違ない。(前號參照)公の道樂は先づパリから始まつて東京に及んだものに相違ない。

それにしても、時勢の變遷、政局の推移、彼が如くに急にして、薩長土肥の諸藩はもとより、天下の人材、我と思はんほどのものは皆官途に其地歩を爭ひ、權勢を競ひ、阿修羅となつて相鬪ぐ間に在りて、悠々十年をパリの客舍に自適し、靜に自然界の一存在としての人間を觀、自然界の一現象としての社會を考へるといふやうなことは、公のやうな特殊の性格の持主でなくては所詮出來ないことである。

アコラス派の人々で經營して居る雜誌に『ルビユー・デ・ドーモンド』(兩世界評論)といふのがある。公はアコラスの門下であつた關係から、此雜誌とは特別の親しみを持つて居られる次第であるが、此雜誌の記者が曾て公の佛蘭西語を批評して『品のよい、奧ゆかしい佛蘭西の上流社會を代表する語』と云つて居たさうである。曾ては最も徹底した共和政治の支持者として議會の最左翼に置かれた人々が、何時の間にか、品のよい佛蘭西の上流化して居る所に、當然ではあるが、一種の皮肉がある。

八　西園寺公と中江篤介

西園寺公は二十二歳から三十二歳まで十年間佛蘭西に居て、悠々と法制の學を修め、パリの空氣に親しんだ。公のことであるから無論勉めて學び、深く究めるといふことはしなかつたであらうし、其間には道樂の方も隨分盛にやつたらしい。試驗勉強で遊びに出られぬ時などは、女を下宿に呼んで夫婦氣取りで暮して居たなどいふ話もある。日本に歸つてからは藝妓遊びの方も立派に卒業されたのであるが、公の遊びの手ほどきは新橋、柳橋よりも佛蘭西のカフエーであつたらしい。中江兆民が泉州堺に病を養つた時、大濱の蛤の吸物を殊の外賞美し、カツフエー・アングレーのスープ以上であると云つて居る。公もそんな所に足しげく出入されたものであらう。

東京が永久の帝都と定まり、太政官の移されたのは、明治二年二月二十四日である。是より先、明治天皇は明治元年十月十三日を以て東京に入らせ、江戸城を皇居と定めさせたが、其年の十二月一日京都に還幸あり、明治二年三月更めて東幸、宮城に入御あらせた。西園寺

西園寺公の佛蘭西で識合つた人々に中江兆民、松田正久、光妙寺三郎などがある。公使館の書記であつた西徳二郎も明治七年から、滯

四郎も明治八年からパリで公と相交つた。中江兆民は本名を篤介といひ、土佐の人である。安政六年十三歳で父に死別し、慶應元年十九歳の時、細川潤次郎の推擧で藩の留學生となり長崎に出て佛蘭西語を平井義十郎に學んだ。慶應三年長崎の留守居後藤象二郎が、商法所の殘務を岩崎彌太郎に引繼いで急遽上洛しようとして居た時、得意の絶句を扇面に認めて謁を通じ、その補助を得て江戸に出た。かくして上京することを得た彼は、平井の紹介で佛蘭西語學者村上英俊の塾に入つたが粗暴の爲破門をうけて横濱天主堂の宣教師に就き、更に箕作麟祥の門に轉じ、略その業を成すことを得た。明治二年福地源一郎が湯島に日新舍を開き、生徒に英佛語を教授することがあつた時、中江はその塾頭となつて佛蘭西語を教授した。是より先中江は佛蘭西に留學の志あり大久保利通に謁して請ふ所あらんとしたが、家人怪みてその刺を通ぜず、中江止むを得ず一策を案じ、大久保の馬丁と狎れ親しみ、一日大久保の退廳を要し、其馬車の後尾に飛乗つて清水谷の邸に至り、自ら刺を通じて面會を許された。中江は熱心に政府の海外留學生を官立學校の卒業者に限るの非を難じ、且つ自ら薦めてその學力の優秀にして國內に就くべきの師なく、學ぶべきの途なきを説き、海外留學生として最も適當の資格者たる所以を述べた。大久保一見してその異彩を識り、之を後藤、板垣に謀り、明治四年中江を司法省出仕に補し、佛國留學を命じた。中江は明治四年から明治七年まで、五ヶ年間[illegible]に留學し、[illegible]く西園寺公と知つた。[illegible]

着であつたから、そんなことでも拘らず公の世話になつたこ[illegible]ふ。それかと云つて佛蘭西に居る間、決して遊んで暮したわけではない。哲學、史學、文學の研究はもとより、孟子、文章軌範、日本外史などの佛譯をして、日本を佛蘭西に紹介する上に裨益する所が多かつた。

一〇 西園寺公と松田及び光妙寺

松田正久は佐賀藩士、横尾只七の次男である。弘化二年四月の生れであるから、兆民より二歳、西園寺公より四歳の兄である。明治五年松田勇七の養子となり、陸軍省から佛國に留學を命ぜられた。然るに松田は佛國に赴くや、常に公及び中江兆民等と往來して、政治、法律、哲學、史學を談じ、軍事の研究は之を放棄して顧なかつたので、間もなく政府の問題となり、留學を停止して歸朝を命ぜられた。西園寺公が歸朝して『東洋自由新聞』創刊の擧あるや、中江兆民、松澤求策と共に之に與り、同紙の發刊後、檢事となり、鹿兒島（高等中學）造士館教頭となり、文部省參事官となつたが陸々しいこともなかつた。其處で松田は志を官途に絶ち野に下つて九州進步黨に加盟し、明治二十三年第一議會議員となり、明治三十一年六月憲政黨內閣の成ると同時に一躍大藏大臣となつた。次いで明治三十三年十月伊藤の政友會內閣が成立すると文部大臣となり、同內閣の[illegible]後、[illegible]

[illegible]

入つて司法大臣となり、四十一年一月[illegible]大臣となり、大正二年二月の山本内閣には四たび入つて司法大臣となつたが、間もなく病の爲職を辭し、大正四年七十歳で死んだ。その西園寺に關し、伊藤に隨つて終始した生涯を見るべきである。

長州の人、光妙寺三郎に至つては、中江兆民と並んで、明治數奇人傳中の双璧と云つてよく、それが揃ひも揃つて公と淺からぬ關係があるといふのに見ても公の特殊の性格を察することが出來る。公の留學當時は、佛蘭西社會の空氣が已に上述の如くであつた上に、その周圍の人物も、右の如くであつたから、公も若さは若し、パリに居る間は隨分思ひ切つた奇行があつたらしい。或るカッフエーで公が誤つて窓ガラスを一枚毀した處が、給仕の辨償を要求する言分態度が氣に喰はなかつたからと云つて、尚は手あたり次第にその邊のガラスを打毀し、それだけの代價を支拂つて、驚き呆れる給仕を尻目に、悠々とそのカッフエーを引揚げたなどいふ話もある。近頃の公としては殆ど信ぜられぬ話であるが、昵近の人々も或る程度までの事實としてそれを信じて居る。その元氣があつたればこそ、歸朝匆々『東洋自由新聞』の旗揚げもあつたわけである。

公の佛蘭西に於ける思想及び行動は手に取る如く薩長政府に知られて居たものと見え、公は明治十三年十月二十一日、三十二歳で日本に歸つて來たが、官職のことに關しては何の御沙汰もない。伊藤仁太郎氏の『第二快傑傳』（東亞堂發行）に、歸朝匆々藩閥とも公を懼れて[illegible]

ろ。公の賞勳局總裁に任ぜられたのはズツと後のことで、公が墺國公使から、法律取調委員を命ぜられてベルリンに轉任し、白耳義公使を兼ね、明治二十四年八月歸朝した時のことである。唯、洋行前、即ち明治二年七月を以て辭退した官位を洋行中、即ち明治十一年十二月二十九日、特旨を以て舊の正三位に復されたといふことはあつた。之も公の思想、行動を覊束しようとする政府の一策ではなかつたかと想像される。

公が歸朝した時は、大阪會議の結果として板垣が入閣したことや、西南戰爭に關聯する林一派の陰謀發覺等で一旦頓挫した土佐を中心とする國會開設運動が再び白熱化し、愛國社は再興される、國會期成同盟會は結成される、囂然たる天下の輿論によつて支持せられる有志の國會開設請願運動は日に日に猛烈となつて、政府も殆ど施すべき策に窮して居る際であつた。其處へ、清華の一貴公子たる西園寺公が歸朝して、從來推奨された、ミル、ベンサム、スペンサーに對し、新たにルーソー、モンテスキユー、ヴォルテールの新旗幟を翻へし、民權思想に一段の熱度を加へたのであるから藩閥政府の錯愕狼狽したのも無理はない。

二　『東洋自由新聞』時代

『東洋自由新聞』は明治十四年三月十八日の創刊で、同年六月には早

くも廢刊の非運に遭つて居る。此新聞は、明治の文獻、殊に古新聞の蒐集で名高い吉野作造氏も、久しい間、心掛けて居るが、一破片の外はまだ手に入れ兼ね、目下例の外骨老人を信州に出張させ、松澤求策の遺族に就き詮索中とのことを同氏の書信によりて知り得た。辛うじて索め得た右の一破片は現に帝國大學圖書館に大切に保存してあるとのことである。西園寺公を說いて此新聞の社長に擔込んだのは誰であるかといふに、一般に信州松本（深志町）の人で、熱心な國會の請願運動者であつた松澤求策といふことになつて居る。發起人が五百圓、その中社長に推戴される人が千五百圓出すといふ規約で、西園寺公も松澤の口說き上手に、到頭千五百圓出させられたなどいふ話もある。但し、之はまだ公若しくは公の昵近者を通じて確めたことでないから一說として掲げて置く。

發起人といふのは松田正久、松澤求策、中江篤介、柏田盛文、上條信次、林正明等で、その中、中江は論文を書き、松澤と松田とが主として事務會計の任に當るといふやうなことになつて居たらしい。信ずべき人の話によると、論文は中江ばかりでなく、公も直接執筆されたとのことである。

然るに政府は之を見て錯愕措く所を知らず、有らゆる方面から手を廻して公の志を飜さしめようとしたが、効果がないので、遂に或る、、、、、公を社長の椅子から退かせた。その顛末はまだ歴史として記述するには餘りに生々しいことであるから遠慮しなければなるまい。『自由黨史』には、岩倉か公の實兄、徳大寺實則をし

とあり、又、伊藤仁太郎氏の如きは、岩倉か三條と打合せ、一芝居打つて泣落し的に公の社長を罷めさせたと云つて居る（第二快傑傳）が、孰れも事實の一端を傳へたもので、正しい說ではない。かくして公が社長を辭したのは明等十四年四月十二日で、『東洋自由新聞』も間もなく廢刊となつた。松澤等は西園寺公辭退の後、其顛末を紙上に掲載した爲に罪を得て居る。その明治十九年、三十二歳で石川島に獄死したのは別の事件であつたやうであるが、兎に角その末路は悲慘なものであつた。

西園寺公は『東洋自由新聞』の社長を辭して、明治十四年十一月二十四日、參事院議官補に任ぜられたが、其後は常に伊藤博文の影身に副つて憲法並に議院制度草創の事に盡瘁した。公が同志を棄て丶閥族と提携したことに關しては世間にとかくの批評もあらうが、その更めて官途に就いたのは、明治十四年十月十二日、國會開設の大詔が煥發せられた後で、公としては立派に筋途が立つてゐる。幕末朝廷に於ける諸藩の分野をいふと、近衞家の背後に薩藩があり、三條家（徳大寺、西園寺と同一門）の背後に長藩があり、鷹司家の背後に水戸藩があるといふ大體の形勢であつた。已に國會開設の大詔が煥發せられ、所謂藩閥政府も、着々憲法制定の準備を進めて居るといふに、公としては、飽くまでも政府に反對し、政府を攻撃する必要を認めなかつたに相違ない。公が伊藤と提携してその女房役となり、憲法制定のことに盡瘁したのは、その始めから落着くべき所に落着いたのであつた。

「東洋自由新聞」を一期として公と分手した中江兆民は、明治十五年板垣の『自由新聞』に幹部となり、明治二十一年栗原亮一等と大阪に『東雲新聞』を起し、尋いで後藤象二郎の爲に大同團結の機關『政論』に執筆し、明治二十三年には大阪から衆議院議員として打つて出で、板垣、大隈の提携を策するなど盛に政界に活躍したこともあつたが、晩年は例の如く實業に手を出して失敗し、赤貧洗ふが如く、明治三十四年喉頭癌に病み、その絶筆として世に問うた『一年有半』及び『續一年有半』で纔に最後の氣焔を揚げて居るが、何としても、その末路の蕭條を蔽ふことが出來なかつた。彼は『一年有半』で西園寺公を次の如く批評して居る。

『西園寺侯、氣宇高亮、識見宏遠にして、加ふるに聰明匹儔なし。但其甚だ聰明にして、一切事に於て直ちに輙ち其著落の處を透觀するが爲に、一も侯の好奇心を動すに足るものなし。即ち天下如何なる事も侯に於ては始めより奇なる莫し。即ち此侯や好奇心有るなし。是れ其冷々然として些の内熱無くして、其丰采に接し、言語を聽く者をして亦皆内熱を冷却し去らしむる所以也。侯其心必ず曰く、我兵を用ゐん乎、アニバル、ナポレオンには踰ゆ可からず。政事を執らん乎、ビスマルク、カヴールには勝る可からず、且縱令ひ我之を爲さゞるも、世間之を爲す者餘有り。我何ぞ人と功名權勢を爭ふことを須ゐんや。故に常に避けて就かず、其伊藤侯を佐佑するや、風に於ける柳の如く、桑花に於ける胡蝶の如く、亦唯冷々澹々、毫も自己靈臺に映射する所無く、自己志氣を動かす無し。郭嘉荀彧の阿瞞に於けるとは大に科を異にせり。到底侯は終局政事家たるを肯せざる也』所謂

一二　伊藤博文の女房役

明治十五年には參議伊藤博文が歐洲各國の憲法並に議院制度取調の爲、彼地に差遣せらるゝに付、公も三月四日附でその隨行を命ぜられ、伊東巳代治、平田東助、戸田氏共、河島醇、三好退藏、山崎直胤、吉田正春、相良頼紹等と日本を發して、獨逸に赴き、本居をベルリンにトして、特に力を獨逸、及び英吉利、の憲法並に議院制度研究に用ゐた。此時公は英吉利の皇室に關する諸制度の調査を分擔し、ロンドンに滯在して親しくバッキンハム宮殿や、ウインゾル宮殿の内部を參觀し、皇室の財産から、用度のことまでも詳細に調査して伊藤に報告したとのことである。

公がロンドンに滯在した時は實に英吉利が帝國主義的發展の絶頂に登り詰めようとして居たヴイクトリア朝の全盛期で、東洋方面では印度、海峽殖民地を踰えて香港を占領し、南支那をその繩張りの中に入れて、日本の開發に佛蘭西と猛烈な競爭をした揚句であり、近東方面では前後二回の露土戰爭に干渉して土耳古を藥籠中のものとし、アフガンを侵略し、アフリカ方面では埃及を征服し、喜望峰殖民地の經略を進め、アメリカ方面では千八百十四年のゲント條約で合衆國に對する海上の封鎖は解いたが、太西洋の水は尚は完全にその勢力範圍であつたし、パナマ運河の開鑿も確實に阻止せられて居たし、加奈陀もま

た本國に對する忠實な義務の履行者であつた。

かくして兩半球に連亙し、太陽の沒するなき英吉利の大領土からロンドンに集まつて來る珍貨異寶は、アルバート親王を總裁とするハイド・パークの大博覽會となり、マンチエスター、ケンシントン、エヂンボロウ、ダブリンも之に倣つて大博覽會を催し、英國は舞踏と音樂と國旗と彩燈とでパーマーストンの所謂地上の一大樂園と化して居た。ロンドンタレー夫人が社交界の女王として輝き、パリから乘込んだ女優サラベルナーがプリンス・エドワードを擒としてとかくの噂があつたのも此時である。此絢爛花の如きロンドンに、その日本及び日本人に對する待遇は如何であつたにもせよ、兎にも角にも國賓として置かれた當年三十四歲の西園寺公が何を見、何を感じたかは考へて置く必要がある。

公は明治十六年八月四日を以て日本に歸朝し、同年九月には伊藤に隨行して福島縣に出張し、同年十二月二十四日、參事院議官に任ぜられて居る。(歸朝匆々福島縣に出張したのは河野廣中等の疑獄事件に關聯してではなかつたかと想像される。)伊藤は歸朝すると間もなく宮內省に制度調査局を設け、着々憲法及び議院制度の創定に步を進めて居たが、明治十七年七月七日には貴族院令制定の準備として先づ華族令が公布された。此時始めて五爵の制が設けられ、公卿諸侯の外に維新の功臣がそれ〳〵華族に列せられた。西園寺公は此時侯爵を授けられた。

明治十八年二月十[illegible]地に赴任したがその途次羅馬法王に謁見して[illegible]た。明治に入つて日本の官人の羅馬法王に謁したのは恐らく之が初めてであらう。初めてでないにしても此謁見は極めて有意義のものであつたに相違ない。明治十九年八月六日には、ヴイナに在りて法律取調委員を命ぜられ、明治二十年六月四日にはヴイナから轉じてベルリンに駐在し、白耳義公使を兼ねることを命ぜられたことは前にも述べた通りである。

是より先、明治十八年には、從來の太政官制度が廢せられて、現行內閣制度が成り、明治十九年には各省官制が發布せられ、明治二十一年には樞密院が設けられ、明治二十二年には愈〻憲法發布の大典が擧行せられ、翌年十一月二十五日には最初の帝國議會が召集せられた。公は日本の此目まぐるしい變化を靜に外國から眺めて居たが、明治二十四年八月二十一日歸朝して、九月四日賞勳局總裁に任ぜられた。かやうにして公は久しい間伊藤の爲に忠實な助役の一人として甘んじて居たが、明治二十五年八月、第二次伊藤內閣が成ると翌年十一月を以て貴族院副議長となり、明治二十七年三月八日には、樞密顧問官に任ぜられ、賞勳局總裁を兼ね、同年七月、日清戰爭が起ると八月二十日附で、朝鮮に出張を命ぜられ、十月三日井上毅の後を承けて戰時內閣の文部大臣に任じた。此時から公は始めて舞臺の正面に立ち、政治家としての步を明治政史の上に印せられることとなつた。(以下次號)

内容見本 ハガキで申込み次第進呈す

世界知識の一大パノラマ

世界地理風俗大系

豫約募集

珍奇最新の世

生きた世界の一大展開

『先づ世界を知ること』これ我等現代人第一の急務である事はいふまでもない。本大系は諸君にこの生きた世界を知らしむべく我社が數年來あらゆる苦心と莫大の費用を拂ひ、學界各方面の權威者後援の下に漸く大成したもので、最もアップツーデートな生きた世界の展開であり活動映畫である。

居ながら全世界の見物

卽ち本大系は全世界の文明國と未開國とを問はず、政治、經濟 産業の現狀は勿論都市、田園、山川、湖沼、建築 奇蹟 名勝 記念

刊行書目及内容

1	日本（内地）
2	日本（殖民地）
3	滿洲、蒙古
4	支那（上）
5	支那（下）
6	南洋（インドシナ マレイ）
7	インド、西アジヤ
8	ソヴエートロシヤ

編輯委員及執筆者（五十音順 ○印編輯委員）

○文學博士 石橋五郎
○理學博士 飯本信之
文學博士 今井登志喜
林學博士 上原敬二
滿鐵囑託 上田恭輔
學習院教授 遠藤金英
前總領事 大山卯次郎
○文學博士 大類伸
商大教授 緒方清
○早大教授 小田内通敏
理學博士 今原信恭
早大教授 煙山專太郎

藝術の社會的地位について

（游歐雜記の序）

阿部次郎

凡そ西歐の藝術が戀愛文化の發展に貢獻した點は如何なる方面にあるか。寧ろ、彼が戀愛文化の發展に寄與した諸方面のうち、特にその基礎となれる點を何處に認むべきであるか。概括して云へば、それは女性美に對する尖銳纖細な官能を開發するとともに、直ちにこの美しさに陶醉し沒頭する心熱に表現を與へたところにあると言ひ得るであらう。私はその例證として先づ「好色一代女」のうち卷之一の「國主の艷妾」の一節を引用する。それは國主のために[illegible]品の艷姿を求める一老人が「大かた是にあはせて抱えたきとの品好み」に、一し[illegible]の[illegible]物語より」取出した「女繪」を敍述する部分である——

「是を見るに先づ年紀は十五より十八迄、當世顏はすこし丸く、色は薄花櫻にして面道具の四つふそくなく揃へて、目は細きを好まず、眉あつく、鼻の間せはしからず次第高に、口ちいさく、齒並あら〳〵として白く、耳長みあつて緣あさく身をはなれて根迄見へすき、額はわざとならずじねんのはへどまり、首筋立のびてをくれなしの後髮、手の指はたよはく長みあつて爪薄く、足は八もん三分に定め、親指反つてうらすきて、胴間つねの人よりながく、腰しまりて肉置たくましからず尻付ゆたやかに、物腰衣裳つきよく、姿に位そなはり心立おとなしく、女に定まりし藝すぐれて萬にくらからず、身に疵ひとつもなきをのぞみとあれば、都は廣く女はつきせざる中にも、是程の御物好み稀なるべし……」

この稀なる御物好みの對象は、廣い都の中にも容易に見出し難き理想的女性美である。その敍述のうち、心性に對する注文が極めて少いことは見逃し難い點であるが、それはこの特殊な場合には自然なこととして[illegible]

[illegible]

る。固よりこの隱微な鑑賞には傳統がある。その背景には慶長以來に於ける遊廓文化の發展がなければならぬ。それは箕山の大鏡其他の通人によつて開拓された趣味の洗煉の結晶であつて、西鶴一人の獨創でないことは云ふまでもない。併しこの「女繪」の注文を引受けて女性美の理想を描き得たであらう畫家は、西鶴時代の近くに於いて一體誰に求むべきであらうか。團氏所藏湯女の圖の作者は、その遒勁な描線と形體の無假借な現實的把握とに於いて、固より既に西鶴以前の人である。師宣版畫の美人も亦この系統を受けてあまりに樸茂に過ぎ、西鶴式美人に於ける優美婉柔の一面を缺いてゐる。少しく後れて、京都の祐信の肥胖せる婦女も決してこの「女繪」にふさはしいものとは云[illegible]。それは一面、寛文頃の作と推定せらるゝ帝室博物館の舞妓圖（岸田氏「初期肉筆浮世繪」挿圖第二十九）大關氏所藏の若衆圖（贊「あひ見ての後の心に」云々）等と趣味に於いて相通ずるところを持ちながら、一面に於いて後に來るべき石川豐信の顏、鳥居清長の手と足と首筋と腰付などを豫想するものがある。故に西鶴式女性美の理想は、女性美鑑賞の發展史上、前を受けて後を開くものとして、或創造的位置を要求することが出來るであらう。優美を失はぬ生氣、健康さ失はぬ婉柔——このやうな女性美に對する嗜味が、西鶴の文學のレンズの中に、繪畫的に云へば間接な結晶を發見したのである。

併しこの間接的結晶に、一面に於いては浮世美人觀の根柢を流れてゐる女性美鑑賞の特質に對して洞察の手引を與へる。それは言葉といふものの性質上、視覺形象以外に、把握の重點とこれに對する感動とにアンダーラインをひくことが出來るからである。云はば女性美の理想發生の根據が言葉によつて暗示され得るからである。浮世畫家の代表的作品が例證するやうに——さうして初代歌麿の繪が最も深刻に具現してゐるやうに——西鶴の女性美も亦單獨な視覺形象の幾何學的な釣合のみを主として見てゐるのではない。人體の鑑賞に於いては到底截り離すことを得ぬ色彩の要求は、既に彼の女性美の觀念が何處から發生してゐるかの方向を指示する。顏の「薄花櫻」は云ふまでもなく、齒並の「白さ」も亦一種の色彩的要求であり、「長みあつて緣あさく身を離れて根まで見へす」く耳の注文も、決してその幾何學的形式に關するのみではなく、又日にかざせばすき通つて見えるやうなほのかな赤味の强調を含んでゐると見るべきである。さうして顏の丸み、首筋の「立のび」、手指の長みと爪の薄さ、足の小さ、その親指のそり、其の形體に對する理想も亦單純な幾何學的美の要求とは云ひ得な[illegible]のである。特に「腰しまりて肉置たくましからず尻付ゆたやかに[illegible]言葉は、遂に彼の女性美感の最後の根柢を暴露する。彼は[illegible]ならずその觸覺的聯想を以て女性の美を見てゐるのである。

並びに陶醉の根本的發源地として女體の美を鑑賞してゐるのである。この趣は更に他の短い文章を引用することによつて確められるであらう——「さる太夫殿……糸仙も死ぬるほどの足首見えて、然も拇指反つて色あつて、少し髮の縮みたると思ひ合せ、此無疵千枚道具たり」好色二代男、卷之四、「心玉が出て身の燒印」)。吾々は此處に又「親指のそり」が出て來たことを見逃すわけに行かない、而も彼はこのそりに「色ある」ことを發見してゐるのである。さうしてこの親指のそりと「髮の縮み」とを西鶴が他の諸著に於いても幾度か繰返して讚美してゐるところを見れば、彼が此等の體質に強い魅惑を感じたことは疑ひ得ぬところである。これは固より西鶴が狹義の性的欲望のみを以て女性を見たと斷定する根據とはならない。たゞ彼の女性美觀が、あらがひ難く男性の心に押し迫る女體の力——靈肉を一つにした女性のいのち——の體驗に根ざしてゐることは、孰れにしても疑ひ得ないであらう。

女性美觀のこのやうな性質は、直ちにこの美しさに陶醉して他を顧みなかつた心熱を理解すべき鍵を吾々に與へる。その淫婦であると賢婦であると愚婦であるとを問はず、美婦の美が直ちに男の眼から飛び込んで彼の心を燒くのである。彼の「心玉」はふら〳〵とその體の中から拔け出でゝ美婦の身邊に纏綿するのである。さうして女の美男を見るこゝろも亦同様である。かうし[illegible]清十郎の中でも特にお夏清十郎に於いて見ることが出來るであらう。清十郎は「自然と生つきてむかし男をうつし繪にも增り其さまうるはしく、女の好ぬる風俗、十四の秋より色道に身をなし」多くの遊女に思ひつかれて、既に一度心中さへしようとした男である。固より彼は又「人たるもののそだちいやしからず、こゝろざしやさしくすぐれてかしこく、人の氣に入るべき風俗なり」と云はれてゐるが、西鶴の物語るところによれば、お夏はかういふ心性の長所に惹かれて彼に戀をしたのではない。「其年十六迄男の色好ていまに定る緣もな」きお夏は、只管にこの美男の美に陶醉する。さうして普通の處女には恐怖の理由となりさうな清十郎の過去が、彼の周圍に放射する好色の背光として、一層彼女を魅惑するのである——「さて內證にしこなしのよき事もありや、女のあまねくおもひつくこそゆかしけれと、いつとなくおなつ清十郎に思つき、それより明暮心をつくし、魂身のうちをはなれ、清十郎が懷に入て、我は現が物いふごとく、春の花を闇となし、秋の月を晝となし、雪の曙も白くは見へず、夕ざれの時鳥も耳に入ず、盆も正月もわきまへず、後は我を覺えずして、恥しさは目よりあらはれ、いたづらは言葉にしれ」るほどの戀が此處に釀し出される。これに對して清十郎は、最初のうちは受身であるが、但馬屋の女どもが、抱姥下女

にいたるまで「あなたこなたの心入、淸十郎身にしては嬉しかなしく、内かたの勤は外になりて、諸分の返事に隙なく、後には是もうたてくと、夢に目を明ぬ情なるに、なをおなつ便を求めてかず〳〵のかよはせ文、淸十郎ももや〳〵となりて、御心にはしたがひながら、人めせはしき宿なれば、うまひ事は成がたく、しんいを互に燃し、兩方戀にせめられ、次第やせにあたら姿の替り行、月日のうちこそ是非もなく、やう〳〵聲を聞あひけるをたのしみに、命は物種、此戀草のいつぞはなびきあへる事もと、心の通ひぢに」兄嫁の關を恨む宿命的な相思は成立したのである。

さうしてこの戀愛はその出發點にふさはしく發展する。姬路を驅落ちさせる二人の夢想は「大阪に着て、高津あたりのうら座敷かりて、年寄たか〻ひとりつかふて、先五十日計は夜晝なしに肩もかへずに」引籠つてゐることである。捕へられた淸十郎が座敷牢の中で「舌を齒にいて目をふさぎし事千度なれども」猶これを敢てし得なかつた理由は、「今一たび最後のわかれに美形を見る事もがな」の願ひである。併しこの美男美女の官能に身を燒かれる戀も、「魂身のうちをはなれ、淸十郎が懷に入」るが故に、結局は超我の世界に接續する。引さかれた淸十郎が「其日より座敷籠に入て浮難義のうちにも、我身の事はなひ物にして、おなつは〳〵と口ばしり」、淸十郎に後れたお夏が「有髮比丘尼となり」て、「傳へきく中將姬の再來なるべし」と所作から崇められるやうになつたことも、決してあの出發點から到達し得ぬ境地ではない。かくてそれは、「是ぞ戀の新川、舟をつくりて思をのせて、泡の哀れなる世や」といふ全體の觀相の中に融け込むことが出來たのである。

併し西鶴の戀の成立に心性の要求が與らないといふやうな暴論を私はしようとするのではない。心性は西鶴流の意味に於いて戀愛の中に重大な役目を演ずる。お夏が淸十郎の過去に牽引力を感じたのも、既に對手の心性に對する味解を意味する。それは戀の戯れに堪能なことも亦心性の働きに相異ないからである。彼女は對手の過去の純潔に代へて、戀愛に對する、鍛錬と多能とを要求する。男が遊女に對して特別な魅惑を感ずる心理を、彼女は女の側から繰返してゐるのである。吾々は此處に、西鶴流の戀愛が異性の心性に對して要求するものの特質を認めなければならぬ。さうしてこの立場から「國主の艶妾」の中に僅かに書き込まれた心的條件をも理解することが出來るであらう。「姿に位そなはり心立おとなしく、女に定まりし嗜すぐれて萬にくらからず」——此處に要求されるものは、位とおとなしさと藝能である。さうしてそれが必ずしも尊い宮仕への女のためにのみ特に要求されるのでないことは、「一代男」の中に出て來る多くの名妓の批評を

見ても明かであるであらう。戀愛の選手としての名女には、上品さ（Vornehmheit）がなければならぬ、愛らしさがなければならぬ、同時に心と頭との働きがなければならぬ。これ等の心性のあらはれが初めて美女に滋味を與へる。西鶴がこの心性の微細な動きにも、如何に味解を持ち、如何に溫かな愛を持つてゐたかは、吾々が上來既に見て來たところである。西鶴的戀愛の基礎は異性の肉體の美に對する味解の深さとこれに傾倒する心熱にあるが、併し彼はこの基礎の上に、魂と魂との接觸より成立する男女の人生を見た。さうして愛と諦觀とフモールとを以てこの人生を描いた。戀愛文化の進展に寄與する彼の事業は、主としてこの點にあつたと云ふことが出來るであらう。德川時代の意識は彼によつて一つの深みを獲得したのである。彼によつて一つの自覺に到達したのである。

36

たゞし西鶴の戀愛に於ける心性の要求が上述のやうな特質を持つてゐたといふ事實は、同時に、狹義に於ける倫理的要素が彼の世界に缺けてゐたといふことをも說明する。然らば狹義に於ける倫理的要素とは何であるか。それは戀愛を人生と文化との全體の繫がりの中に置いて見ることである、この全體との連繫を義務の意識使命の意識を正しく認めることである、さうしてこの要點に從はうとする意志を誠實に持續けることである。西鶴にお[illegible]にも、この意味に於ける倫理的要素が極めて少い。人間の位と品[illegible]と、心の淸さときたなさと、さかしさと愚かさとに對する味解と鑑別と批評とが緊張せる姿に於いて持續けられてゐる事體を寸毫も否認することなしに——この點に於いて西鶴の事業の倫理的意義を聊かも輕視することなしに——吾々は猶上述の主張をすることが出來るであらう。彼の作中に於いては、天性の美しい男女はその美しさに任せて美しく行動する。さうして作者も亦その美しさに對する十二分の味覺を以つてこれを取扱つてゐる。併し此等の人物は廣い人生に對して——その戀人に對してさへ——嚴正な倫理的意味の責任を感ぜぬのみではなく、作者も亦極めて寬大にその無責任を看過してゐるのである。然るに戀愛は人生全體と倫理的責任の意識を以つて交渉するところにも、その深さとその悲しさとによつて發展し行くべき無限の廣がりを持つ。この方面に發展すべき根據を持つてゐぬことは、西鶴の戀愛にとつてはやむを得ぬ限界と云はなければならぬ。この事情は後世の小說や戲曲に愛用若くは濫用された「愛想づかし」の動機を、西鶴の作中に發見し求めることによつて明かになるであらう。男を愛するが故に、愛する男に道義的援助を與へるために、心にもなき愛想づかしをする[illegible]なき[illegible]の主[illegible]に、私の知つてゐる限りでは西鶴の中に一つもない。然もそ

れは彼の[illegible]さへ「[illegible]」の一の巻、第一の中に描冩してゐる動機であつて、當時の世相の中には決して乏しからぬ事實であつたらしく推察されるとすれば、この主題の嫉妬は寧ろ西鶴がこれに十分の同情を持たなかつたことを證明すると見るべきであらう。西鶴に於ける戀愛の破綻と葛藤とは、對手の變心や外界の事情（特に經濟的事情）や當事者の愚かさなどによつて發生する。何等かの内的斷念に基く戀愛の亢進と悲劇の主題は殆んど發見することが出來ない。戀愛がその反對力に對抗して自己を主張せんとする情熱に於いて、彼の作品には決して劇的要素を缺いてゐないが、その反對力が人物自身の道義的意識から發生してゐるといふやうな内的葛藤が少い點に於いて、彼の文學的領分は劇的であると云へないであらう。さうしてその限界は、人生に對する彼の見方の中に、殊に於ける倫理的要素が十分の力を持ち得なかつたところから來てゐるのである。「好色五人女」のうちでも、樽屋おせんや大經師おさんの物語が特にこれを證明する。

然らば西鶴の見た戀愛には、戀愛と戀愛以上のものと――これよりももつと深くもつと強いものとの交渉が意識されてゐないのであるか、若しさういふ人があるとすれば、それは甚だしい誤謬である。彼の戀愛に對する陶酔が如何に熱意を帶び、彼の戀愛の根柢に[illegible]する[illegible]觀が如何に冷徹を保つてゐるにしても、この交渉の意識なしには、彼は藝術家の作者たることを許されないものと云はれなければならないであらう。私は固より西鶴の作品にこの交渉の意識を認める。私はただそれが前に云ふ倫理的意識以外に成立することを云はうとするのである。それならばこの交渉は如何なる領域に於いて見出さるべきであるか、西鶴の戀愛描寫に全人生と連繋する廣さ若くは深さを與へるものとして、私は三つの領域を擧げる。第一は心性の美しさに對する新鮮な味覺。第二は運命の不可思議。第三は經濟の世界。

第一に就いては既に云つた。第二の運命とは、個人以上の力、人間の集團たる社會以外の力として人生と交渉し來る自然と超自然との一切の因果である。本來から云へば、不可抗力としての人間の性格、個人を包圍してぬきさしならずこれを運はし行く社會力も、運命のうちの極めて重大な要素であるが、この場合私は此等のものを除外して、暫くこの言葉を前に云つた意味に限定する。自然的社會的因果律から見れば不可思議に人の幸運惡運に結び來る因果應報、念力によつて隱顯出沒する誘惑惡靈のたぐゐ、物理的に云へば自然でありながらそれが人間と交渉する場合に意想外の結果を生ずるさまざまな偶然の姿、如何なる社會に生れた如何なる人も脫れ難き生死無常の相――かう云ふやうなものが茲に意味する運命の主要部分を形成する。西鶴に、

時には恐怖を以て、或時には驚異を以て、或時には又信順な敬虔の感情を以て、この運命に對した。固たり其處には「本朝二十不孝」のやうに、それがあまりに平淺に因果覿面に拵へられ過ぎてゐる場合もあり、又遊び盡して今は世を輕く過してゐる道心者の前にあらはれた太夫の幽靈の話のやうに（二代男、卷之四、「七墓參詣に逢へば昔の亡巫」）山氣過ぎたもの もないではないが、凡そ西鶴の作中に飛び出して來て、往々事件の進行に重大な役目を演ずるこれ等の力を、吾々は單純に小説構成の猾手段とのみ考へることが出來ない。特に西鶴が眞實な感情を以てその不思議を觀じてゐるものは、人生の偶然と無常とである。この二つは人間以上の運命として、人間の最も熱烈な戀愛の上にも覆ひかぶさつて來るのである。前後を忘れて相互の心熱を柱とも杖とも頼む戀愛と雖も、いつか人間以上の力の前に牽き出されて、その支配の下に立つことを餘儀なくされるのである。かくて「但馬屋内藏の金戸棚にありし小判七百兩見へざりし」その置忘れの偶然によつて、淸十郎は座敷牢から更に刑場に曳き出されなければならぬ身となつた。かくて隣手代のおせんが鬢の上に、宿の亭主が偶然に棚からとりおとした入子鉢が、内儀の度外れの嫉妬を煽り、おせんの「あんな女に鼻あかせんと思ひそめし」反抗を誘發し、遂には夫との仲睦じき樣[illegible]を、[illegible]し者といふやうな恐ろしい罪に突き入

れるまでに人生を支配する。又若道の方面から一例をとれは、ばこそ丸裸に脇差一腰となつて思ひ川を泳ぎ返る島村太右衞門は、曉の鳥と見ちがへられて遠矢に脇腹を射透される（男色大鑑、卷之一、「墨繪につらき劍菱の紋」）。「定めなきは人の身ぞかし」――西鶴はこの一語以外偶然の干渉について何の註釋をも加へずにたゞこれを描いてゐるだけであるが、彼がこの果敢ない人生を支へてゐる地盤の底に、思議すべからざる黑い力の唸りを聽いてゐたことは信じてもいゝであらう。弱い人、強い運命――彼は戀そのものゝ力を弱めずに、戀愛をこの背景の前に描き出すことを知つてゐた。熱烈な戀も飽くことなき好色も結局は無常の背景の中に融け込む。「人は入日の如く、誰か一日も世に留るべき」、一代男の結末に近く次第に響を高めて來る無常觀は、暑苦しき好色の一生に一味の靜寂の晩涼を吹き送つて來る。又「黑羽二重の大ふり袖に、梧銀杏のならべ紋、紅うらを山道のすそ取、わけらしき小袖の仕立、燒かけ殘りてお七心にとまり、いかなる上﨟が世をはよふなり給ひ、形見もつらしと此寺にあがり物かと、我年の比おもひ出して哀にいたましく、あひみぬ人に無常おこりて、思へば夢なれや、何事もいらぬ世や、後生こそまことなれとしほ〳〵としづみ果、母人の珠數袋をあけて願ひの玉のを手にかけ、口のうちにして題目いとまなき折から」、戀は「やことなき若衆の銀の毛貫片手

に、左の人さし指に有かなきかのとげの立けるも心にかかると、斷方の障子をひらき身をなやみおはしける」姿をとつてお七の前に現れる。此處では戀と無常を織りまぜた物語の主動機が既に第一章に於いて掻鳴らされてゐるのである。さうして西鶴の文章の最良の部分に沁み出してゐる獨得の諧調――華かさの中に寂のある柔かさを融かしたあの風趣（例へば五人女、巻之五、「もろきは命の鳥さし」の書き出しも亦、作者の魂の底に染みついてゐるこのやうな觀相から、おのづから響いて來てゐるものと見らるべきである。戀は「梧銀杏のならべ紋」いづれは秋風に散り行くべきさだめの前に置かれてゐるのである。――云ふまでもなく人はこの無常觀を「それも死なぬ身か、あらば費へ」（一代男、巻之七、「末社樂あそび」）と氣負ひ立つ思想と混同すべきではない。彼にあつては、無常は人を歡樂に驅る拍車。此にあつては、それは戀の本末を包む朝夕の誓「一寸先は闇、命は露の間、あすをも知らぬ浮世なるに、たゞおせ〱」（東海道名所記）と押し出して行く思想は、單に德川時代のみに限つてこれを見るも、遊廓の成立と共に古く、この點に於いて西鶴はたゞ時流に追隨したにとゞまると云つてよからう。併し「さてもさても取集めたる戀や哀や、無常なり、夢なり、現なり」（五人女、巻之四）といふ立場から人生を描き得たことは、明かに粋法師の一つの新しい事業である。それは同一主題に縋りながら遂これに或る表現を與へ得なかつた德川時代の先輩を遥かに凌駕して、「物の哀れ」の傳統を鮮かに新時代の中に復活させる。さうして彼はこの事業に於いて、一見彼と甚しく相違する芭蕉と握手するところがあるのである。戀も人生も無常の中に置いて見る見方に於いて兩者に共通するところが多いことは、一面に連俳の附句に於いて芭蕉の世相描寫を觀察し、一面に自然描寫の風韻に着眼して西鶴の文章を讀むほどの人が、決して否定し得ぬところである。

併し第三の領域に移るに從つて芭蕉の事業と西鶴の事業とは截然とわかたれる。固より「戸障子もむしろかこひの賣屋敷」といひ、「上のたよりにあがる米の直」といひ、「割木のやすき國の露霜」といひ、「算用に浮世を立る京住居」といひ、「しまふて錢を分る駕舁」といふ如き西鶴的情景の描寫が芭蕉にも亦案外に多く、彼を經濟生活の觀察に迂濶であつたものと極めてしまふのは決して當らないが、人生と經濟との相關を認めること深く、斷乎としてこれを文學の中に攝取した點に於いて、西鶴はお伽草子式の空虚な修辭の間に踏み迷つてゐた所謂假名草子と手をわかつて、同時代の他の何人とも異れる文學の新様を開拓してゐるのである。この方面に於ては近松と雖も亦彼の追隨者の一人に過ぎない、而も把握の深さに於いて遂にその先蹤に及ばなかつた

追隨者の一人に過ぎない。文學に働きかけてこの方面の開拓を遂つたものは固より當時の世相そのものであるが、文學は單に世相から受けてこれを反映しただけではなかつた。それは「胸算用」も亦文學になり得ることを——それも亦人生の一片であつて其處に人間の魂が明暗さまぐの姿を見せてゐることを世間に教へた。町人の世界に魂を與へたことは西鶴の最も顯著な事業の一つと云ふべきである。「人間は慾に手足の付いたるものぞかし」(二代男、卷之三、「慾捨てゝ高札」)「一生一大事身を過るの業、士農工商の外出家神職にかぎらず、始末大明神の御託宣にまかせ金銀を溜べし、是二親の外に命の親なり」(日本永代藏、卷之一、「初午は乘て來る仕合」)「人の家にありたきは、梅櫻松楓、それよりは金銀米錢ぞかし、庭山にまさりて庭藏の眺め、四季折折の買置、是ぞ喜見城の樂」(同上、同卷、「二代目に破る扇の目」)。この慾とこの金銀米錢とが人生の諸相と深くからみ合ふ。さうして凡てのうちで最も非打算的な戀愛も亦これと交渉することによつて深刻な變化を受けて來るのである。西鶴は戀愛をこの經濟生活の中に置いて、その交渉から生ずる諸相を見ることを忘れなかつた。前にあげた特殊の趣味の運命を除いて、人生の諸相のうち、最も的確に最も具體的に戀愛を左右する力を、彼は藝術に於いて見たのである。

物にあらはるゝ武士と武士との若衆道「好色五人女」に於いて取扱はれてゐる地女の戀などは、最も經濟に制肘さるゝこと少き部類に屬する。併し大鑑の後半をなす舞臺子色子との關係は既に賣買を原則とするもの、況してその美形とわけ知りとによつて、西鶴流の戀愛の中心地帶をなす遊女との戀は、その複雜な情緒と陰翳とによつて、最も多く金銀の影響の下に立たなければならぬ。私が茲に敢て遊女との戀を中心地帶と名けるのは、「男色大鑑」に出て來る若女兩道の優劣を無視してゐるのではない。「いづれか二つ取には、其女美人にして心立よくて、その若衆なるほど俗風にして柔そげにても、一つ口にて女道衆道を申は罪のもつたいなし、惣して女子のこゝろざしを喩へていはば、花は咲きながら藤蔓のねぢれたるがごとし、若衆は針ありながら初梅にひとしく、えならぬ香芬深し、此を以ておもひわくれば、女を捨て男に傾くべし——(卷之一、「色は二つの物あらそひ」)——この一節には總して男性が女性に對して感ずる疑惑嫉妬不安の代償があるが、この疑惑や懊惱や不安や女性輕視の根柢には、ぬきさしならず女にひかれる心、惹かれ惑はさるるが故にこそこれを征服せむとする心が磐石の堅さを以つて腰を据ゑてゐるのである。故に西鶴が是を概括して把握を下すには至らなかつたらしい野郎が、自身の[illegible]に入れて考へると

西鶴一生の著作を通觀すれば、彼はこの點を殊外に好つてゐたのである。故に私は彼自身の批評あるに拘らず、遊女を西鶴藝術の寵愛の中心地帶と名ける。彼の若道優位論は、彼の女性觀の中に蹂躙された意味として受取ればそれで足りるであらう。ねぢれたる藤蔓は花咲くまゝに遂にその蔓の中に人を捲き込まずにはゐない。捲かるゝまゝに捲かれて行くところに美形に解脱する經路はあるのである。

「世に身過ぎほど悲しきものはなし」(二代男、卷之一「心を入れて釘附の枕」)――これは西鶴がその著書の到る處に繰返してゐる職業觀である。人はそのためには「女房どもの隱す事まで人中で語らせ」られる屈辱も忍ばなければならぬ、嘘もつかなければならぬ、酷いことも敢てしなければならぬ。さうして遊女も亦悲しいうちにも悲しい身過ぎに相違ないのである。「一城の傾城、過去の因果を現せり……元正直なれども僞は皆世を渡る業なれば、諸人の諸旦那機嫌取に、心は變る事にあらず、さら〳〵憎むまじき者なり」(二代男、卷之八「流れは何の因果經」)。併しこの世渡りは入ること多くして出づること更に多き、勘定の合はぬ商賣である。さる夜の踊の人崩れに鑓手の袂から遺された「太夫樣入帳遣帳」がこの間の消息を明かにする――一擱げて見れば、八十六匁本高宮一疋、五十九匁二重紬帶一筋、百五十目晒布三疋、三匁糊、八匁六分白粉二箱、三十文放鳥三羽、金子一兩御掛樣へ、六十目加賀絹二疋、[illegible]の手間、九兩二分揚屋の取替、十八匁杉原紙、銀五百目愛宕樣への代參、七匁雪踏二足、小判五兩傾城屋へ、二匁饂飩、一匁耳搔、聞く程哀く、讀捨てて奧を見れば、正月より盆前まで、合はせて九十一兩二分三匁四分、又買帳を見合せば、七十九兩一分なり、早や七月までに、十四五兩も足らず、最年の中に、二十貫目の借銀あるべし、精出しても、損の行く商事なり」(二代男、卷之八「袂にあまる心覺」)。されば「內證の苦しさ胸に火宅を離れず」口を開けずに浮世に殘すことの惜しさに、炭俵を掛げた太夫の幽靈も出ようといふものである。(同上、卷之四「七草祭詣に逢へば昔の」)。而も彼女は位をとつて喰べたいものも欲しくない顏をせねばならぬ。禿が「人前にしてうまきものを喰ふも今二三年の娯樂」、「太夫樣達も喰度い虫は鳴けども身過とて堪忍強」く、見て見ぬふりに居眠りをすれば、內攻せる食欲が夢に鼠となつて、葉がくれに美しき葡萄一房を、盜んで喰ふやうなさもしい心も起きて來るのである(同上、卷之四「心王が出て身の燒印」)。世過ぎとしての遊女は正にこのやうなものである。この諸客人の美形に醉うて、これと共に綱の樂みを盡さうとするとき、男はどんな經濟的條件を充すことを必要とするか。

遊女は生產者でなくて消費者である。故に彼女を色界の女王とする

諸費は凡て遊客の朝貢に俟たなければならぬ。「一切の女郎諸事は男次第なり」(二代男、卷之三、「樂助が執猿」)。「人皆賢過ぎたる世」には、女郎が、「昔の幅十が一つにもあらず」と云はれるやうになるのも亦やむを得ぬ自然の數である。故にこの里に戀を樂まうとする者は、浪費を厭はぬ大まかさを持つてゐなければならぬ。「傾城狂の始末と、下手に月代剃らす程、世に嫌なる物はなし」(一代男、卷之五、「一日貸して何程が物ぞ」)。併し此處に傾城狂と始末大明神との正面衝突は當然に開始されなければならぬ。人は始末大明神に背いて傾城狂に徹底すべきであるか、若くは大明神の神壇に跪いて色戀を斷念すべきであるか、この矛盾の間には、義務の意識に似たものの發生を催す事情が潜んでゐる。さうして藝術家は始末宗の説教者とならんとする誘惑を感じ易いであらう。實際西鶴は時としてこの説教を試みた。併しこの義務に似た意識は倫理的に云へば贋物である。それは功利的怜悧道徳としてたゞ損をせぬやうに警告するに過ぎないのである。若し西鶴が前後を通じてこの立場に立ち通したならば、戀愛文化の開拓に貢獻することは前々から述べて來たやうではあり得なかつたであらう。併し幸ひにして――文藝のためには幸ひにして――彼の説教は結局大膽の限度を讃する點に躊躇した。「惣別傾城買、その分際より仕過す物なり、あれば五百貫目より上のかりまはしの人、此先に[illegible]べし、七百貫目[illegible]と云ふもの、それも一[illegible]での人、天職苦しからず、五十貫目までの人、十五に出合ひてよし、それも其銀働らかずして居喰の人は思ひもよらぬ事、近年世上を見るに、半年續かざる人無分別に騒出し、二割三割の利銀に出しあげ、主人親類の難儀となしぬ、かやうになるを覺えての悩み、何かはおもしろかるべき」(一代女、卷之二、「淫婦中位」)。「二十より內の隙ぎは、此道に入る皆足代と、譯知り和尚も説き玉へり、それより十年大興に入りて、太夫の難有いところを覺え、四十より內に留る事を覺らずは、揚錢の淵に沈む事眼前也、手前にある程叩き上げて、既に廻向の金の無い段に、假に止めるも見苦し」(二代男、卷之八、「大往生は女色の臺」)――これが「世の中の浮かれ男に、物の限りを知らしめんが爲」の説教である。

併しこの「限り」を守ることは決して容易なことではない。「扨正月をする時の樣子は聞けば、太夫樣への遣ひ金先づ十五兩、他に小袖一襲、禿に小袖代金子三兩、遣手に銀二枚、これは年の暮にとらせ、春は小判一兩取らすなり、禿へ金子十兩、內へ同じく五兩、勤日八[illegible]日より十五日まで、十七日八日廿日廿五日廿八日まで、正月買の後たり、右は六十目小判に直し、六十兩一歩に一諸事しまはるゝといふ、傍から思ふたほどのものいりにもあらず」(二代男、卷之二、「男かと思ば」

然も粋への點頭を拒へ、全盛が見せたさ、他の客と張り合ひたさ、興に掛せた賢さなどから來る無分別な榮耀をも與へ合せて見れば、如何なる大身代も遂には赤裸とならぬを得なかつたであらう。說教者としての西鶴はかういふ人達を蔑み責めなければならぬ筈である。併し彼は事實上殆んどこれをしなかつた。彼はただこの境界の内に、外に、若くはこれを縫ひつゝ行はれるさまざまの戀愛を觀察し描寫する。さうして藝術家としての彼にとつては、彼自身の定めたこの限りも、其觀察の重要な目盛りとなる一線に過ぎなかつたのである。この境界線の内に於ける遊びの描寫と、吾々は一代男の太夫買時代に於ける插話の大部分に就いて見ることが出來る。さうしてこれを踏み外した世之助も亦、「食さして袖の橘」(巻之六)を奴に笠とわかち、「口添へて酒輕籠」(巻之七)を藤屋吾妻ととりかはすほどの悲痛な戀を續けることが出來たのである。故に西鶴が戀と經濟との交渉を全く見たといふのは、決して金がなければ戀が出來ぬといふやうな淺墓な意味ではない。金の有無は戀の姿を變へる、その變化は必ずしも戀の破滅のみではない、金を失つて戀が深まる場合があることをも彼は充分に承知してゐるのである。「先は見えぬ世の中、一日勝りにながめば、人いかいかい程可愛らしき者はなし」(二代男、巻之五、「死は諸共の木刀」)この見方が賢愚の兩者を通じて保たれてゐるところに、西鶴の藝術家としての大きさが成立する。

西鶴のこの大きさを證明するものに、特に彼の遺稿「置土産」である。其處に語られてゐるものは遊女との戀の結末のさまぐ\な姿であるが、受出して餘生を樂む者も、添ひ遂げながら淪落のつれなき命を繋ぐ者も、身一つにあるかなきかの世を送る者も、皆運命と和げる靜かな心を以て人生の日沒を迎へてゐるのである。一つ一つの說話の上に、作者の清澄な、溫かな、超脫せる心の姿が宿つて、殆んど白光を放つとも云ひたいくらゐである。戀を得て財を失はぬ長崎の大盡と吉野との隱栖は——「ひがし山の片陰、粟田口のほとりの草屋、すこし都をはなれての住居、男ざかりに法體して、月にも花にも吉野をながめ、あした夕のたのしみに、太夫が手づからの煎じ茶をくませ、よろづに他の人をまぜず、碁相手、揚弓の友、春には女鞠も色あり、風待つすゞみ床に名の木をかをらせば、初雪のあしたは歌に心をなし、世にある花車あそびをつくし、雨の折ふしはほとゝぎすも鳴けかし、螢も數見る夜のなぐさみ、又ある時は夫婦水茶などこしらへて寐酒の種となす事、ひとしほ醉もおもしろかるべし」といふ結構づくめな靜けさであるが(巻四、二)、それよりももつと心を惹くのは、經濟的に破滅して淪落した人達の姿である。其處には其の身ひとりの草庵、江戸客の貸ひれりして「世はかろく消して揚をあけゝる大臣もある」島

原の揚屋町の横手に小さき借屋をかりて、「はやり噺のうけ賣して、女郎さまより物もらひて口惜しからず暮し」てゐる豪家の三代目もある。江戸の小紫に戀して他人に奪ひ去られた二人の男は、「相住してせめては女良かふんだる土を見過の種と、揚屋町の眞砂を金龍山のまつちにまぜて」太夫姿の土人形の水あそび、その商賣の寂れるのも構はずに「つれ節のかはり加賀、つみもなく銀もなく世の人におそれもなく、外の事なく外まぜずよねぐるひの意氣知を語りて、埒の明きたる二人が仕舞」を樂み（巻三、一）奈良の木辻に七百貫目を使ひ棄てた仙人坊は、請出して寵愛せし小野島に子を生ませて、「今は世上にはづる事もなく其の子を肩車にのせて、春日のやしろに參りける、明神も彼が全盛の時を御存じなれば、さぞさぞふびんに思召すらんと、貌見しる八百屋禰宜、是は〱と手をうつもかまはず、おもはく女良が胎内より出でし若君と、具足のくさずりをあげて、おの〱に指似を見せて男子をしらせて歸る」（巻三、三）。さうしてところてん草の渡世から蜘まひの人形賣りにと、次第にどん底に陷つて遂には野倒死のやうに此世を去つた松本といふ大臣の成れの果てにも、作者の白光は靜かにさしてゐるのである――「渡世かなしく、夜毎に蜘まひの人形拵へて朝に賣りて、此の絲のほそき事にて命をつなぎける、貧躍心をかふる物はなし、其の後はからた三味線かしましく、慰[illegible]ひとへの色戀のことを忘れて、何とぞ雜煮を喰うて年をとけた[illegible]外山に暮し、三十七の極月九日に空しくなりぬ、哀やかたびらも着ぬの旅繩からげの棺桶、道頓堀の野におくられて、よその亡者の跡さして、やう〱煙とはなしぬ、今見れば竹林寺に山譽風雪と切付けて、銀貳枚ばかりにて出來さうなる石塔、施主は越後町まんとしるせり、いかなる女良か立てられける、心ざしの程やさし、此の入替に思ひがけなき銀もらひ給ふべし」（巻五、一）。戀と經濟との關係は、此處まで來ることによつて、本當に人生の底に觸れるのである。

維新回天史の一面（其十）

久邇宮朝彦親王を中心としての考察

蘇峰　徳富猪一郎

（第八十）京都の攘夷論

一般の評判にては京都の攘夷論は、全く水戸齊昭が手入をしたる爲である。言ひ換ふれば、齊昭がその經綸の江戸の幕府に容れられなかつた爲、その腹癒せに京都に向つて種々の意見を吹き込み、それが更に猛烈なる攘夷論となつて天降つたものであるといふのである。これも一應尤もであり、又た多少かゝる痕跡がないでもない。されど必らずしも全くその通りとは申されない。それは京都の攘夷論は、齊昭の刺戟、策動なきも、本來存立すべき筋である。而してその中でも孝明天皇と最も親密の關係に在らせられたる朝彦親王の如きは、その最なる一人にて在した。

固より朝廷の攘夷論も、その淵源に溯れば、水戸歴代の感化が少くなかつたであらう。併しそれは事實上の問題でもなく政治上の問題でもなく、謂はゞ思想上の問題にて、直接齊昭の手入が根本であり、原因であるとは斷定し難い。唯だ當時の京都は一箇の天王山で、攘夷派、開港派と云ふよりも、一橋派非一橋派が、各々秘術を盡して、これを我物にせんと

一方に於ては、水戸は勿論、島津家を代表したる西郷隆盛、越前家を代表したる橋本左内の如き、而してその他京都に於ける儒者、學者、浪人者等があり、又た非一橋黨、若くは紀州黨と云ふべき筋には、井伊家が専ら中堅となり、長野主膳及び九條家の諸大夫島田左近等が、専ら秘術を盡して運動した。

（第八十一）反對派の見た朝彦親王

若し手入れといふ事を論ぜば、五分、五分の沙汰にて、何れが何れとも殆んど輕重する所はない。我等は此の際に於て、如何に非一橋派、若くは非水戸派の面々が、朝彦親王を反對の中心人物としてこれを取扱つてゐたかを、觀察せねばならぬ。

屢々申す通り、朝彦親王の攘夷論は、奈良一乘院に在す時からの攘夷論にて、常座仕入れの攘夷論でもなく、一夜漬けの攘夷論でもなく、その根柢は随分深かつた。宮の攘夷論は、一方に於ては朝廷の政權回復に及び、他方に於ては幕府に賢明なる將軍の存立を必須とせられ、從つて宮は外に對しては攘夷論で在し、内に於ては一橋擁立論であつた。而して始らすしも悉く皆、然りと云ふ點ではなかつたにしろ、宮の意見は取りもなほさず孝明天皇の思召[illegible]次第であれば反對派が宮を目の上の疣瘤と認め、如何にかしてこれを除き去らんと企てたのも、決して偶然ではない。

× × ×

今彼等の間に取交されたる文書によつて考ふれば、安政五年三月十八日附にて、島田左近が長野主膳に與へた書翰の一節に左の如くある。

『當三月十一日頃如二別紙一御返答に可二相成一。宮中御評決ニ相成先々御相方御安心之場ニも可二相成一と存居候處、俄に十二日ニ相成太閤殿「鷹司政通を稱す」發頭ニて大ニ模樣變りニ相成、決て此度之事、御沙汰止ニ被二仰出一可レ然杯被二申出一。其外粟田宮、左府殿、内府殿皆々應印之强意に隨從被レ致候大變事ニ相成、是迄之評決トハ皆々裏ヲかゝれ、此上如何樣之變事出來も難レ計、加之十二日夜堂上現任一組其以下都合三組ニ相成〆而五人當殿へ被レ參、此度之一義是非御勅許に不二相成一候樣と之衆意被二申上一、其外十三日昨今人六十人是モ夜分參殿、一同於殿中同意之次第夜分旁々以上一同騒動之事ニ御座候。[illegible]ニても追々任候書付

日々被ニ為上ニ置ニ此末如何可ニ成行一事ニ御座候哉。事懐御安心之場ニ者一寸モ不ニ相成一、宮武之混亂ニ可ニ相成一哉、何も御賢慮可レ被レ下候』

これは堀川が上京中の事である。即ち堀川が勅許を乞はんとする事に、既に一應定つたのを『更に諸大名其の他の衆議にかくべし』との事に變更せられたる事を申したるものにて、即ち粟田宮、近衛忠煕、三條實萬を以てその魁首と認めてゐる。

× × ×

又た同年五月二十五日附、島田左近より長野に與へたる書翰の中に左の如くある。

『彼〇役者外ニ一ケ條

右二ケ條ハ實ニ不ニ容易一安危存亡之基源ニ付、實ニ此上及ニ遅滯一候てハ不ニ容易一御次第ニ可レ及程之義モ不レ無レ之事モ御座候ニ付、無ニ覺束一思召候』

又た同書中に、

『〇役者在南都ニて之不如法篤と取調候處、先達て申入候通り之次第ニ毛頭相違無レ之、京師粟印家來ニ承候ても能く相分り申候。實ニ此宮ハ不穩ヲ御好ミけしからぬ御行狀末々

無ニ覺束一御氣毒ニ存居候』

とある。

この『〇役者』若しくは『粟印』といふは即ち親王の事を指したものであつた。如何にもしてこの親王を遠ざけんとの策を講じ、親王が奈良に在せし際の御行狀などを、それ〴〵取調べつゝあつた事がわかる。

× × ×

又た同年六月二十九日附、長野より島田へ與へたる書中に

『〇役者云々之一義ハ若州もよく御存之由に候へハ、間部家上着之上御取計ニ可ニ相成一と奉レ存候』

とある。若州とあるは、新に京都所司代となつた酒井忠義の事にて、老中間部詮勝京都到着の上は、追々親王に就いて何とか處分をなす意味が、この書中に仄かされてゐる。

又た七月十日附の島田から長野に與へたる書中には、左の文句がある。

『一印之義ニ付御内々御究リハ誰一人モ不レ奉レ存候ニ付、只々殿下并〇役右右より被レ申候ニは、あほふ正直に大樹公御血縁近き御方にのみと被[illegible]に至り候[illegible]

之、世亂之時節ニは是非賢明之大樹無レ之てハ難レ治、後手後手手間取候ては不ニ相成一候付、左右の兩公奸計ヲ以て荷擔之人々ヲ引出しこしらへ准后印之御下り中ニどふして成ともこふしても御職不ニ取上一とハ惡計有レ之候事鏡ヲ掛て照ニ同樣之事ニ有レ之候。尤左右之本實ハ水老より之急事ニ御願談ニ相違無レ之候。實ニ此節主上印御前之首尾左右兩公〇役の外に右ニ出る人無レ之、實ニ恐入候事ニは候ヘとも、　遺恨且口惜敷次第共御賢察可レ被レ下候』

この中にある一印とは、即ち一橋の事にて　殿下とあるは九條尚忠。〇役は即ち朝彦親王、左右兩公は左大臣近衞忠熙、右大臣鷹司輔熙である。准后印とあるは、即ち孝明天皇の皇后九條家より入輿あらせられた英照皇太后である。即ちこれは鷹司父子や近衞や朝彦親王が、如何にもして九條尚忠を關白職より斥けんとするといふ事を意味してゐる。又た七月十日、島田左近が、長野主膳に與へたる書中に、『九條關白殿御辭職等之事』と題し左の如く記してゐる。

『今度之一件　殿下御辭職之[illegible]根元は關東を非ニおとし、一印を押立候手段ニ而水老一印を西丸へ入んと思召候發端は、かの御自領の寺院を取潰さんとせられしに、公邊より御咎ニ相成候處より一橋を　西丸へ出し以來存分ニ事を可レ計之御趣意之由先大老を謀反人とし、　殿下と大老と御内通被レ遊候樣ニ被ニ取成一候より

六月上旬太閤〔鷹司政通〕殿御自筆ニて申上候書、彦根事主上を自城ニ押籠奉り　祐宮を天位ニ即、外夷之取置より天下之政事を恣ニセンとの謀計、當職右へ手ヲ組内通いたし候事、實ニ國賊也。右樣之國賊ニ當職を爲に持置候てハ甚一大事ニ候間、早々當職被ニ召上一候樣言上

太閤左右ニ内徳大等同樣被ニ申立一、粟田宮其取持專之事六月廿七日右大閤之御書出、　主上より　殿下へ御見セ被レ遊候。彦根ヲ取除候ハヾ一印へ綸旨を出す之謀ハ鵜吉誓狀ニ見へ、彦根謀反と申立之事ハ樞源之書狀ニ顯然。粟川

右の事もかの狀ニ見ゆ。

主上御逆鱗と相成候處、六月廿七日には正邪益顯致候』

以上によつて如何に彼等が朝彥親王を恨んで居たかゞ判る。

× × ×

尙ほ八月十八日附、長野主膳より宇津木六之丞に與へたる書中に、此の如くある。

『太閤殿內覽御免相成候後、○役者參內被㆓申上㆒候ニハ、是迄惣而御上より御治定被ㇾ爲ㇾ在候事故、當職取上之事も內實は其意味の以働候處、御裏をかき被ㇾ遊、却テ太閤を被ㇾ罰候と恨を含被㆓申上㆒候處、主上御即答ニ太、左、右、並其方共より種々之義を申上候ニ付、其事本實ニ有ㇾ之候ハヾ不㆓容易㆒義ニ付、何と致いたさねハならずとは申聞候へ共、オレカラは何も申聞候事ハ無ㇾ之ト被ㇾ仰候ニ付、○役者大閉口赤面之由』

此等は固より反對黨の言にて、悉くあてにはならぬけれ共、兎に角彼等が攘夷論一橋黨の巨魁として親王を見てゐたかが解る。

又た同じく八月八日、長野主膳が、宇津木へ與へたる書中にも、

『抑太閤殿內覽御免の後少々穩成氣色ニ相成掛ケ候處、久我殿、中山殿、水、尾、越之惡謀ある事をさとり、殿下之正道ニ立戾被ㇾ申候より、三條前內府殿誠ニ憤り深ク、依ㇾ之又々一亂再發いたし、段々惡計を廻らし、○役者ヲ以主上を動シ奉リ、御家を惡逆之第一とし、水老ヲ天下一之忠節として是非御召出之勅命ヲ出ス巧ヲ被ㇾ致候處、又々殿下御不承知ニ而十分ニ參宴候處より、御辭職之奸計ヲ廻らされ候』

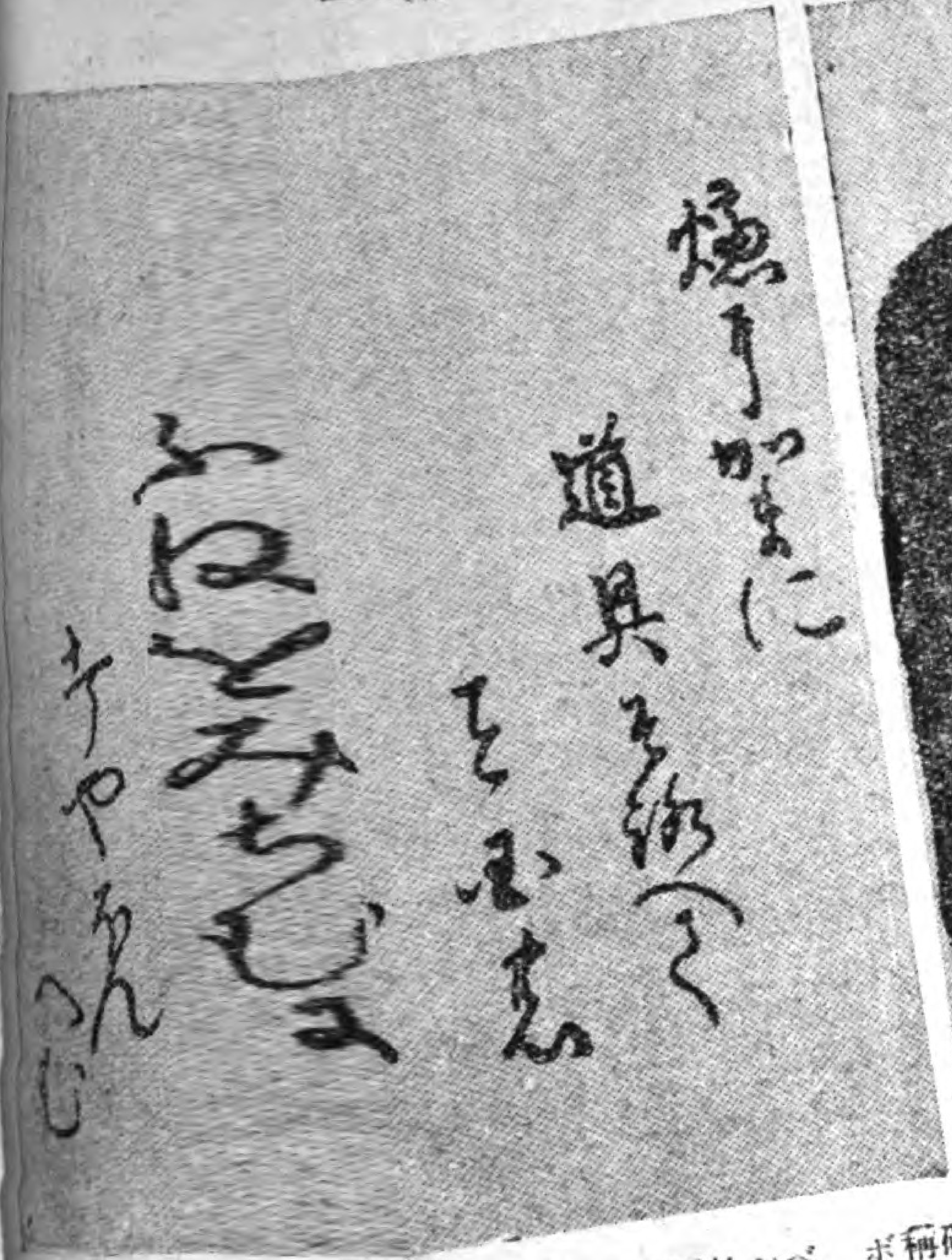
とある

以上に依つて見れば、如何に宮がこの際井伊一派の眼中に重きをなされてゐられたかゞわかる。而して斯の如く重きをなされてゐたといふ事は、又た如何に一方の一橋派卽ち所謂正義派に重きをなされてゐられたと云ふ事が判る。

（第八十二）島津齊彬の態度

當時孝明天皇には、朝彥親王及び近衞忠熙、三條實萬などの外に武家として賴母數く思召したのは、東に於ては水戶齊昭、西に於ては島津齊彬であつたらう。水戶齊昭は年來水戶家と





島津齊彬手製茶碗稱ボンペ井題函和歌

朝廷に接近してゐたのみでなく、當時天[illegible]父とも仰ぎ給ひたる太閤鷹司政通は、その姉婿であり、かたがた又た種々の獻上物などもなして、至尊の御覺えも目出度つたであらう。但し鷹司政通は親類とは申しながら、必らずしも水戸の意見に服從したといふわけではなかつた。彼は何れかと云へば、幕府當局側に同情し、堀田の上京した時にも、『速に勅許ある可し』との意見であつたが、漸くその臣下小林民部權大輔、三國大學等の運動と、その子輔凞が近衞三條等の仲間であつたから、遂に意をまげてその方に傾いたのである。

× × ×

されば陛下は政通を重んじては居給うたにしろ、御信用あつた乎否乎、甚だ覺束ない。それに比すれば、近衞忠凞は頗る御信用を得且つ近衞家と本末の關係を結んだる、島津齊彬は又た一入至尊の御依頼を博したに相違ない。當時至尊は幕府以外はせめて二三の有力なる大名が、至尊の思召を奉戴するやうにありたしと、屢々仰せられた程にて、その意味に於て島津齊彬は御依頼を忝くした事は云ふまでもない。

卽ち彼は種々の獻上物をなしたばかりでなく、安政四年江戸

より歸藩の際には、京都にて窃かに謁見を遂げてゐた。而して近衞邸にて三條實萬等とも會合し、翌年琉球人を率ゐて出府の際は、その警衞を名として、大兵を率ゐて上方に出で、廓清の業を計らんと目論んで、豫めその大兵を置くべき大邸地の撰擇をも命じてゐた程であつた。

× × ×

齊彬は攘夷家でもなく、倒幕者でもなく、只だ公武合體、全國の力を一にして以て外に向はねばならんといふ意見だ。その爲に將軍にも賢明の人を要するとの意味を以て、一橋說に贊成し、それが爲に内輪からは、將軍の御臺所となつた、その養女篤姫をして、將軍家定に說かしめ、外からはその親臣西鄕隆盛等をして、それ〳〵諸有志の間を運動せしめたのである。

× × ×

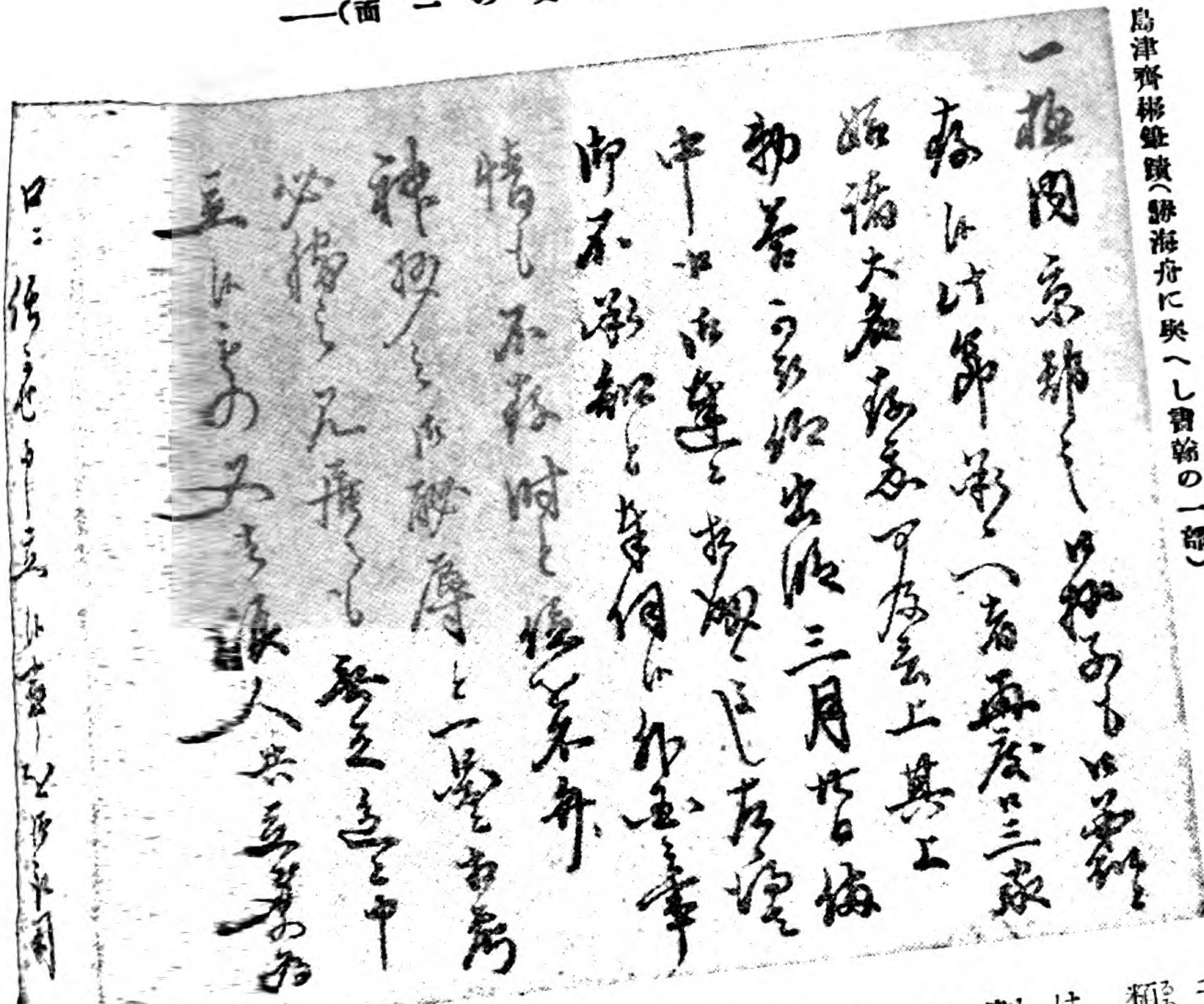
彼は一橋を西城に置くといふ以外には、殆んど水戸齊昭とは意見が一致してゐなかつた。齊昭は言葉通りの攘夷家ではなかつたにしろ、言葉はなか〳〵强硬なる攘夷家であつた。而して篤姫を將軍の御臺所に入れるなどは頗る反對で『東照宮の敵であつた島津氏の、しかもその陪臣の女を將軍の御臺所などとは怪しからん』と云つてゐたが、併し一橋一件では、恐くは思議に叶ふところもあつたし、且つ島津は齊昭の股肱腹心とも頼む松平慶永等とも頗る親しくあり、伊達宗城等とも懇意であつたから、表向の交際は互に圓滿であつた。

× × ×

尤もその臣下の西鄕隆盛等は、當時に於ては寧ろ藤田東湖の感化を受け、幾分か水戸かぶれしてゐたかもしれない。齊彬は何處迄も理想家でなくして、實行家であつた。彼は空言の世に益なきを知り、事を行ふには實力を要する事を知つてゐた。併し彼は濫りに實力を用ひるといふのではない。彼の目的は恐くは『拔かぬ太刀の功名』であつたらう。即ち大兵を上方に屯し、その勢力を以て擧國一致の改革を行ふ事であつたらう。彼は決して現狀維持者ではなかつた。外事の起つて以來、先づ朝廷に目をつけたのは彼であつた。

× × ×

彼の意見は如何なる點迄進んでゐた乎知れぬが、少くとも上に陛下を戴き、德川氏を首班として、若干の有力なる公家及大名の合議によつて、擧國一致の政治をなさんと心掛たのである



島津齊彬筆蹟（勝海舟に與へし書翰の一部）

う。彼は果してビスマーク以前の獨逸聯邦の

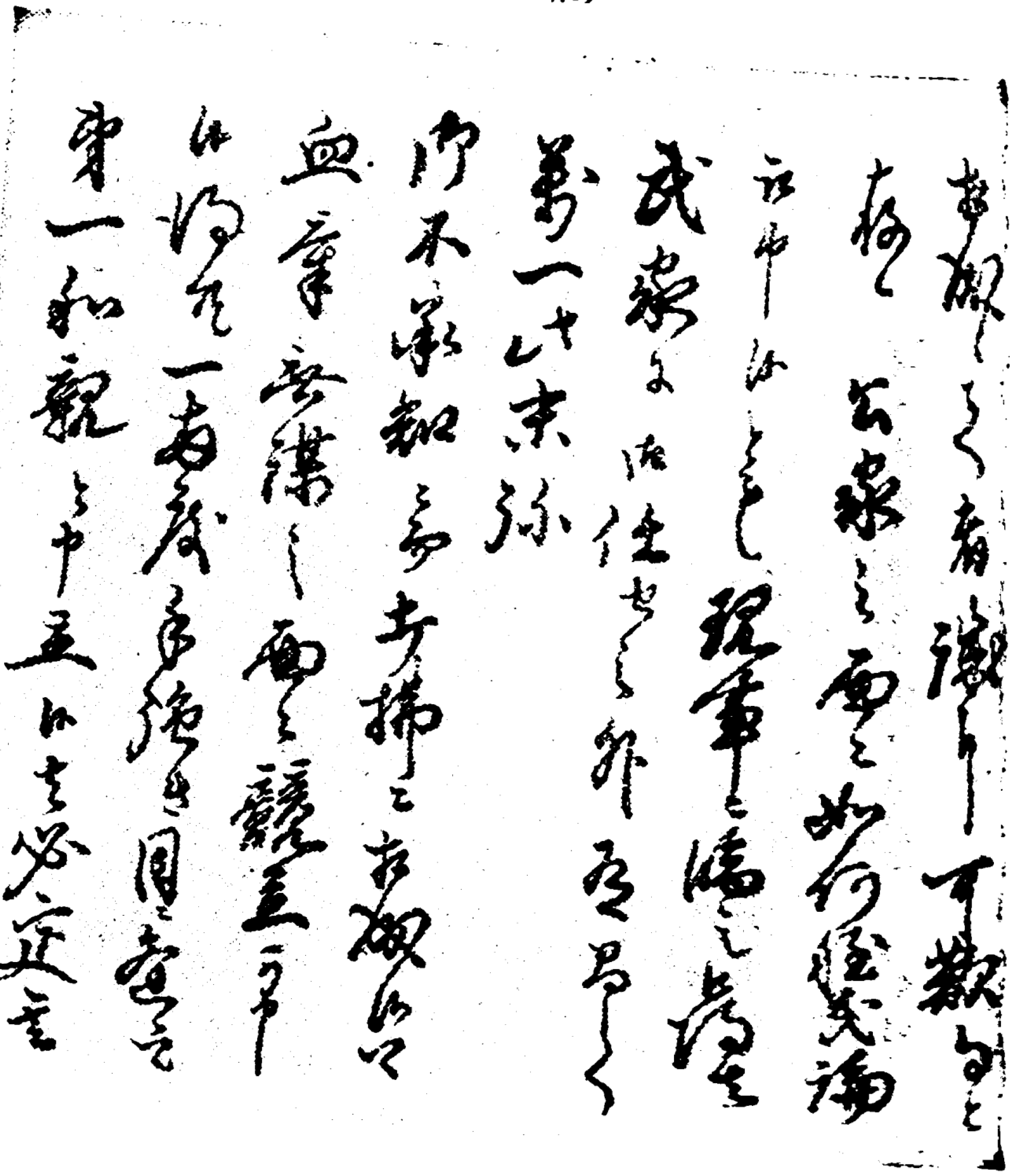
乎、否乎は知らぬが、少くとも彼の頭に描きたる企畫はそれに類似するものであつたかも知れない。彼はその爲に歸國の上は、專ら兵力を練つてゐた。而して彼は安政五年正月六日には書を近衞忠熙に與へて、一橋を西城に置く事に就いての內勅降下を請願し、五月二十八日には幕府の諮問に對して、假條約調印許容の建議をなし、同時に副書を以つて、條約批准の勅許を仰ぎ、公武の合體を希望し、養君嗣立を決し、國論を定めん事を、老中に建議してゐる。而して六月五日には、更らに書を近衞忠熙に呈し、幕府奏請の假條約勅許を贊請せん事を希望してゐる。

×　　×　　×

彼は假條約勅許と、西城養君問題を殆んど交換條件として、此の如く申してゐる。

『左候て西城御養君之儀、此節急度御治定相成候樣被二仰出一、於二關東一も異人之所置、御許容相成候上者、西丸之儀否可二申譯一無レ之、兩全之御事と奉レ存候』

×　　×　　×



話代つて、西郷隆盛は江戸に於ける養君運動が、甚だ思はしくなく、遂に安政五年五月十七日江戸を發し、六月七日に鹿兒島に歸り、早速その旨を報告した。彼は齊彬に向つて江戸の事情を述べ、

『井伊直弼が大老となつて以來、世嗣は紀州に內定し、諸有志の面々は追々斥けられ、この上は當分時世の成行御觀望の外なかる可し』

と申したるに、齊彬は、

『否、余自ら多數の伴人を率ゐ、上方に出で、朝廷より幕政改革の勅諚を降され、公武一體、內外の國是を定むる積りである』

といふ大事を打明け、西郷はこれを聞き、更らに豫めその地をなす爲に齊彬の命を承けて上京した。

齊彬はいよ〳〵八月出府の積りで、それ〳〵準備をなし、西郷は七月十四日京都に入り、その旨を京都の諸有志家に告げ、又たこれを有志の諸縉紳にもそれ〳〵報道し、何れも一日千秋の思をなして齊彬の入京を待つてゐた。蓋し所謂る正義派に於ては、上下一切の望は、悉く齊彬の入京に繋つた。

×　×　×

然るに齊彬は自ら夏期炎熱の候、鹿兒島城南天保山調練[illegible]て、兵隊の演習を指揮し、遂に病に罹り、七月九日床に就き[illegible]十五日の曉、四十九歲にて逝いた。彼の死は單り薩藩の不[illegible]あるのみならず、日本の不幸であつた。

（第八十三）島津齊彬死去後の形勢

若し彼にして今後十年生存せしめたならば、日本の維新開國史は、恐くは現在のそれと趣を異にするものがあつたであらう。彼は實に見識、手腕が一世に卓絶してゐた。その死する三ケ月以前、四月十二日附にて、勝海舟に與へたる書翰の中に、左の如くある。

『一、極内京都之御樣子も御承知と存候。此節承候へ者、再度御三家始諸大名之存慮可レ及二言上一其上勅答可レ被二仰出一段、三月廿日備中（堀田正睦）に御達に相成候よし。左候得ば御不承知と奉レ伺候。外國の事情も不レ存、時と位を不レ辨、神州之御恥辱と一圖に相考、必勝之見居も無レ之色々申立候もの、又は浪人共立身の爲、口に任かせ申立候事を御取用相成候而者、誠に可レ歎事と存候。公家之面々に如何程議論被レ申候とも、現事に臨み候へば、武事に御任せの外有間しく、萬一此末彌、御不承知に而打拂に相成候はゞ、勇氣無謀之面々發立可レ申候得共、一兩度手緊き目に逢候はゞ、第一和親と申立候には必定。其上之和親にては猶更御國威も相立兼御恥辱難計可レ申と、實に心配に存候。辱も御座候はゞ十分に所存可二申上一と心得罷在候』

これをみても、彼の見識が無謀なる攘夷家、卑屈なる開港家の外に卓越して、自らその眼界の闊大なる事を證するに足るものがある。

× × ×

此の如く京都に於ける有志家の望は勿論、恐くは孝明天皇に於かせられても、深く齊彬の上京を御待ちあらせられたであらうと思ふ。然るに彼はその志を行はんとするその間際に於て、此の如く逝いた。有志家の失望定に知る可きである。惟ふに齊彬程の實力と誠意とがあれば、京都の議論を攘夷からして開國に立直さゞる迄も、條約勅許位に持ちゆくは、決して難事であるまい。併し他人に於てはなかく然らずである。元來井伊の政策は、言はゞ喧嘩づくめの政策で、所謂陰謀家退治であつた。その陰謀家と稱せられ、若くは目された者は攘夷論者にせよ、開國論者にせよ、何等の區別を置かず、苟も擧國一致、公武合體をその旨とする者、若くは賢明なる將軍をその儲に必要と

する者、悉く一切合切、悉皆、これを謀叛の者として、何よりもその退治を專務とした。而してこれと同時に、假條約は勅許を待たずして調印し、最早や何事も取返へしのつかぬ事となつた。喧嘩は五分、五分といふけれ共、事實は井伊の方からしかけたる喧嘩といふが、寧ろ相當であるかも知れない。此の如くして遂に勅諚が水戸に降る事となつた。

(第八十四)　承久の惡例

扨く、水戸へ勅諚の降下になつた顚末には、一通りの徑路がある。我等は先づ表向きからこれを觀察せねばならない。我等は先に孝明天皇が御讓位の御內沙汰を降し給うたことを掲げた。これは安政五年六月二十七日の事で、それはやうやく在廷の諸卿が陛下を慰め奉つて一時中止となつた。然るに幕府は爾來何等陛下の思召を奉するといふ事もなく、只だ井伊直弼が自ら行はんと欲する處のものを、隨意に行つてゐる。而してその間には、隨分承久の例を云々する者が出來つた。承久の例と申すは、甚だ不祥の例にて、謂はゞ下剋上の極端なるものである

これに就いては、至尊もうすく御氣付き遊ばされた事であらう。現に井伊が間部閣老、酒井所司代へ『十分に關東の御威光を以て押付け候故、いよいよ事六ヶ敷なりたらば承久の例もありたれば』云々の例を持出し、議論斷然として言を出す者が無つたといふ事が、『昨夢紀事』にも出てゐる。これは井伊反對黨側の記事であれば、證據とはならぬが、斯る事はあつたであらう。又た梁川星巖が、間部下總守詮勝の入京に就きて與へんが爲に作りたる二十五首の中に、

莫レ援二承久元弘例一。事態方今逈不レ同。皇上只要レ殲二海雉一。未レ宥二一刻外二關東一。

とある。斯る詩を作る位であるからして、幕府の當局者たる井伊などには、假令その思想がなかつたとするも、斯る思想があるものとして、他からは認められてゐたに相違あるまい。

猶ほ鷹司家諸大夫の一人、小林民部權大輔が幕府の糺問に對して語りたるところによれば、左の如き事がある。

『當二月廿二日頃と覺。太閤殿關白殿御同席にて主上へ太閤殿御閑靜之節、承久之例に可レ被レ行旨押張被二仰上一候由、其後

閤殿御不興を被レ蒙候得共、太閤殿より朝敵抔と被二仰出一候儀は、心當り無レ之由　關白殿には兼々太閤は御油斷難二相成一旨奏聞有レ之由之處、右御諫諍之御一言之御言葉も無レ之候付、主上御不審に被二思召一其後關白殿にも御不首尾に相成候由、主上を彦根之城へ奉レ移候と申儀、當春備中守殿御上京中專ら流言致し候得共、出元等存不レ申、一說には近海へ異船渡來之節彦根、之城へ御還幸可二相成一哉之風說も有レ之候得共、出元不二相分一併此說ハ御安心の爲の事に相心得候旨之風聞に有レ之候由、主上を彦根へ奉二押籠一候儀、太閤殿より被二仰上一候儀は一向不レ承候旨、當二月廿日頃と覺、青蓮院宮より民部權大輔を被レ召罷出候處、宮御對話有レ之、被二仰聞一候には、此程東坊城大納言を以伺之上川路左衞門尉に面會有レ之。右は南都以來之因緣を以ての儀にて、出家捨身之事故、川路も役意を離れ返答有レ之候樣御示談之上、異國之儀彌交易通商相成候ハヽ後患も無レ之、天下泰平之事に候哉と御尋有レ之候處。**川路申答には交易通商**相成候ても、天下泰平とは難二見極一往々には亂にも可レ及哉と相答候由にて。左候はゞ交易通商不レ致候ても亂に可二相成一哉と宮[illegible]可二相成一旨申答候由。今一段之處は押詰御[illegible]共、猶相尋宜儀も候はゞ被二仰聞一候樣太閤殿へ申上候樣、民部權大輔へ被二仰含一候付、其後太閤殿へ申上置候旨、右に付別段青蓮院へ御沙汰等無レ之由。當四月頃と覺、民部權大輔儀、太閤殿內覽御辭退御差止之御沙汰相成候樣、青蓮院宮へ御取持歎願に罷出候節、太閤殿御諫諍度々過候次第歎息申上候處、宮より被二仰聞一候には。太閤殿計にも無レ之、既關東にて承久之例を申者も有レ之候處、下として上を量候儀は難二相成一候と川路申消候由之風說、宮にも及二御聞一之旨被二仰聞一候旨（朱書）右風說宮には何れより及二御聞一有レ之候哉。左衞門尉より及二御聞一之樣子とも不レ存旨、民部權大輔申立候。右歎願に付民部權大輔儀近衞殿へ罷出候節、前書承久之儀、青蓮院宮にて承り候。川路之事を申上候處、左大臣殿にも其儀は及二御聞一之由被二仰聞一候旨

右川路より青蓮院宮へ申上候儀は、其頃度々右宮御參內有レ之候付、頻々被レ達二叡聞一候哉其儀は何れ共難レ計由）

當五六月頃と覺。關白右大臣殿久々にて御對顏有レ之候

處、先達て中之勅書に無二餘儀一醜夷條約御取替二可二相成一、或公卿より被レ罰、其上御讓向等も關東より不レ被レ進、如何にも御難澁被レ遊候樣之儀出來可レ申趣之風聞達二奏聞一被レ惱二叡慮一候趣を以、右大臣殿之存意御尋に付、右體之事に相成候はゞ朝敵同樣之譯に付、右大臣殿には假令父子不和に相成候共（朱書）大閤殿は何事も關東御同意之旨兼々達二內奏一有レ之候間、本文之通被二仰上一候儀に可レ有レ之旨、民部權大輔申立候）左大臣へも申談叡慮被レ安候樣遵奉可レ仕、尤諸藩も座視仕間敷旨被二仰上一之處、主上乍レ恐御落涙御感悅有レ之候旨、翌朝右大臣殿より民部權大輔へ沙汰有レ之候旨、右之通民部權大輔申立候付、當月朔日同人別段申立候箇條書之內に一應申上置、猶又相尋候處、同樣申立、此節迄之御處置を以朝敵と申上候者は勿論、陰にて申者も及レ承不レ申旨申立、云々」

これは小林が他の有志家と共に縛せられ、幕吏の吟味したる時の口供にて、彼としてはその見る所、信ずる所を語つたに相違あるまい。この中にて太閤殿とあるは卽ち鷹司政通にて、關白とあるは、卽ち九條尚忠である。これにて見れば當初鷹司政通は幕府方に偏黨し、御許諾の手段として永久の例などを申上げたものであらう。

× × ×

更らに詳かに云へば、若し幕府の申す處を御聞入れなき時は、幕府は永久の例を行ふかも知れないから、枉げて御勅許あつて然るべしとの事であつたらう。然るにこれは政通一人の申したる事でなく、青蓮院宮も亦た斯る事を御聞きになりたる由であれば、これは當時に於て、風說は風說であつたらうが、可成り有力なる風說であつたに相違あるまい。而してこれ等の風說が如何に孝明天皇を惱まし奉つたか、我等の想像し奉るだに恐れ入つたる事である。

（第八十五）再度御讓位の宸翰

斯る次第にて、幕府から上京の命を受けたる間部詮勝は、上京に先立ち、七月二十一日附を以て、傳奏廣橋、萬里小路にあて、所謂風說書なるものを差出した。その風說書は、專ら水戶齊昭を中傷したるものにて、これはその[illegible]つて蛇蝎と相成り、主上はこの風說書の趣を御信用なき

ならず、斯るものを差出したるに就いて、かへつて御不審を生じさせ給ひ、從つて傳奏兩人よりは、『別紙風聞書内々一覽せしめ候。當地に於ては右樣の風聞は一切未だ承らず候』と不定的回答を與へてゐる。

斯る次第にて幕府の行爲一として至尊の滿足遊され給ふ事無之。こゝを以つて八月五日、更に御讓位の宸翰を關白九條尙忠等に降し給つた。卽ち左の如し。

『醜夷一件にては(御名)愚存春來申述候通にて、假條約之儀に相成候ては、實以神國の瑕疵奉レ對二神宮始皇祖一無二申譯一儀、關東申聞之通和親候ては害遲く、又拒めば害速と承知候得共、何れに致ても天下之大患於二和親一ては皇國の大體を失ひ、憂患增長相成候事顯然之時は、公武共に禍に相成候はん哉と存候。京都計之爲を存候にては無レ之、差當り德川家之爲不レ宜と存、無二隔心一返答候處、去六月二十一日迄一事之往返も無レ之、只々無レ據次第にて、條約調印爲レ濟候由、屆棄同樣に申越候事如何之所置に候哉。嚴重に申せば違勅、實意にて申せば不信之至には無レ之哉。依レ之右模樣及二尋問一度、評議之上三家之輩、又者大老上京之事申遣し候得者、三家者押込而不レ爲レ致二上京一、大老も差支申立延引之申越、加之朝廷之議論不同心之事を乍二承知一、七月七日魯西亞も醜夷之振合にて條約取極候由、同十四日英吉利も同斷、追々佛蘭西も同斷之旨屆棄に申越候。右之次第を捨置候而、朝威相立候事哉如何に當時政務委二任于關東一之時乍も天下國家之危亡に拘る大患を、其儘に致置候ては如二前文一奉レ對二神宮已下一如何可レ有レ之哉。只公武間柄に拘る事計思慮候者柔弱薄忠之人之事、平常之時と違、如レ此國家之一大事關東之橫道之時節、何事も聞濟候ては、却而如何可レ有レ之哉、仍各所意相尋一應者不審之儀申遣度候。就ては去六月廿八日愚存書差出候親王中へ讓位之儀、度々被二差止一候得共、先文之通關東之所置にては爲二國家一萬民に申遣候所存一事も不二相立一儀者實全(御名)薄德之故に候間、再三申乍如何是非是非衆評之上、右兩條關東へ通達可レ有レ之樣存候。近々間部下總守使に上京之由乍是も延引之由故、何卒右兩條總州上京迄に早々可レ遣屹度申入候事。家人之中短慮之沙汰候樣申述も可レ有レ之哉。乍レ夫者國忠薄輩、實に如二前文一難二捨置一事と存候間、不レ顧二愚慮一申述候事』

(第八十六) 勅諚水戸へ降る

此の如き宸翰を頂戴して、關白九條尚忠は、愈〻措く所を知らず。左大臣近衛忠熙、右大臣鷹司輔熙、内大臣一條忠香及び前内大臣三條實萬等と彼是打合せの上、この上は幕府及び水戸へ勅諚を降し給り、いよ〳〵朝命を遵奉し、それを實行すべく御沙汰あらせらるゝ事となつた。而してその御沙汰書は左の如し。

『先般墨夷假條約無二餘儀一次第にて於二神奈川一調印使節へ被レ渡候儀、猶亦委細間部下總守上京被レ言上之趣 候得共、先達て勅答諸大名衆議被二聞食一度被二仰出一候詮も無レ之、誠皇國重大之儀、調印之後言上、大樹公叡慮御伺之御趣意も不二相立。尤勅答之御次第に相背輕卒之取計、大樹賢明之處有司心得如何と御不審被二思召一候。右樣之次第にては蠻夷之儀は暫差置方今御國内之治亂如何と更に深被レ惱二叡慮一候何卒公武御實情を被レ盡御合體永久安全之樣にと偏被二思召一候。三家或は大老上京被二仰出一候處、水戸、尾張兩家愼中之趣、被二聞食一且又其餘宗室之向にも同樣御沙汰之趣も被二聞召一及候。右は何等之罪狀に候哉難レ被レ計候得共、柳營羽翼之面々、當今外夷追々入津不二容易一之時節、旣に人心之歸向にも可レ相拘、旁被レ惱二宸襟一候。兼て三家以下諸大名衆議被二聞食一度被二仰出一候旨、全永世安全、公武御合體にて被レ安二叡慮一候樣被二思召一候儀、外慮計之儀にも無レ之、内憂有レ之候ては殊更深被レ惱二宸襟一候。彼是國家之大事に候間、大老閣老、其他三家三卿、家門列藩、外樣譜代共、一同群議評定有レ之、誠忠之心を以得と相正し、國内治平公武御合體、彌御長久之樣、德川御家を扶助有レ之、内を整、外夷之侮を不レ受樣にと被二思召一候。早々可レ致二商議一勅諚之事。

添書

別紙御沙汰之趣尋常の御事に候得ば、御斟酌之御次第も被レ爲レ在候得共、何分蠻夷之事件にて於二關東一も大改革之御時節に候得ば、萬一此上公武御隔心不間敷儀有レ之候ても、甚以被レ惱二叡慮一候間、格別之儀を以無二御隔意一被二仰進一候間、此段不レ惡御聞取に相成候樣被レ遊度御沙汰之事。

今度被二仰進一候趣三家始相心得候樣、別段水戸中納言へ被二仰下一候。此段御心得之爲申入候事。』

水戸へも同樣の御沙汰書を降し給うたが、それには別紙とし

て更に左の如き添書がついてゐる。

『叡慮之趣被二仰進一候。右は國家之大事は勿論、徳川家を御扶助之思召に候間、會議有レ之御安全之樣可レ有二勘考一旨以二出格之思召一被二仰出一候間、猶同例之方々三卿家門之衆以上隱居に至迄、列藩一同にも御趣意被二相心得一候樣、向々へ傳達可レ有レ之被二仰出一候。以上』

この御沙汰書は表向は幕府及び水戸へとあるが、その目的は專ら水戸に向つてゞある事は云ふまでもない。而してこれは、更に尾張、越前、加賀、薩摩、肥後、筑前、安藝、長門、因幡、備前、津、阿波、土佐の十三藩にも、それ〴〵各藩に縁故ある公家をして、その寫しを傳へしめ給うた。

即ち鷹司右大臣より長門藩主、毛利敬親へ與へたる書翰は左の通りである。

『(上略)是迄未御通章は不レ致候得共竊々拜面御談話等申入候儀故、内々以二一封一申入候。外之儀にても無レ之候得共、外夷一件去冬以來段段皇國一重大事に及御同然に心痛之事に候。當春堀田備中守上京にて言上勅答被二仰遣一候後、異國追々條約調印尤無レ據子細、近々間部下總守上京に一々委細言上之趣申來候得共、未出京も無レ之候處、水戸、尾張并家門之輩にも愼被二仰出一候由言上。其邊にて更に深被レ惱二叡慮一候儀、別紙去八日關東へ被二仰進一候儀、極密に申通置候樣、實々は御内勅に候。何分にも此上は國内靜謐之樣と、朝幕寢食不レ安恐入候儀に候。自餘彼是と申入度儀も候得共、定めし御傳聞と用ひ密々亂筆ながら申入候也。恐々謹言。

八月十一日夕認　輔熙

大膳大夫殿

内々

尚々當時嫌疑之時節故、御覽後、右一紙御返し之樣と存候。若貴方より御報書候はゞ是も同樣本紙は御返却申入候儀、右之儀鳥渡申置候也』

× × ×

此の勅諚は幕府にとつては固より青天の霹靂であつたに相違ない。九條關白などがこれを贊成する筈はなかつたが、然も勢のせまるところ、遂に然すべからさるものがあつて、八月五日御前會議の御評議より、[illegible]

同[illegible]
勅諚降下の事を奏し、その際兩役の面々から隨分意見が出たが、近衞忠凞、鷹司輔凞兩人が、決して心配には及ばないと云ふ事にて、いよ／＼斯く御決定となつた。その顚末は一條忠香の日記に、斯く掲げてある。

『八月七日己酉墨夷一件に附午後於二禁中一參會有レ之様、昨夜近衞家より申來候儀、忠香午刻後參內。(中略)鷹司右大臣輔凞公にも被レ參居也。次近衞左大臣忠凞公被レ參 次三條前内府實萬公被レ參(中略)先左府計御前へ被レ召被レ參候處、段々墨夷一件御沙汰有レ之、左府勘考之條内々被二申上一、御滿足之御様子にて兼てより被二仰下一候御讓國之儀は、今日御絕念之御事也。右府、忠香、三條等難レ有難レ有拜聽敬承候事、大安心大安心。後左府、右府、予等被レ召御機嫌能御對面被二仰付一、左府より昨日以來勘考之儀言上、先右様にて御治定、猶兩役被レ召御相談之御事也。(中略)養君被レ立候儀、如何之御事を關東へ被二仰入一候儀に付、彼是申合有レ之、先々此儀は御止め也。(中略)御治定迄之處にて一應殿下之存意御聞に被レ及に付、久我、萬里小路兩役被二罷越一後被レ歸。殿下には右府、忠香、三條四人連名にて御治定之趣、四ツ折にて一封に致し殿下へ議奏中山を以て被レ遣。(中略)議奏中山を以内々含置儀は、今日御沙汰之儀に付通達申入候邊甚恐入、進退之儀相伺置也、後皆々退朝云々亥半刻也』

即ちこの勅諚には、九條關白は反對にて、それには加はらなかつた事が、これにて明白である。九條家は固より京都に於ける井伊黨の大本山であつた。

◎第一回配本‖申込順により即刻配本（菊大一千頁に達す）

群峯に聳立する
經濟學界の偉著

經濟學原理 總論及生産篇

執筆擔當者 法學博士 福田德三



福田―河上といひ、河上―福田といひ、その名は巍然として經濟學界の最高峰を代表す。本書は實に博士三十年間の間斷なき研鑽の光輝ある結晶である。今本全集の第一回配本としてこの權威ある一書を得たことは我々の喜びである。經濟理論の研究に於て福田博士は獨歩の地位に居る。博士の學と識とを傾けたるこの一書は凡百の類書に比して燦として一大光芒を放つものであることは天下萬人の異論なきところである。

◆全體系の根幹!! 全建築の礎石!!!

「經濟學全集」總內容

理論經濟學

1 經濟學大綱（資本家的社會の解剖・資本家的經濟學の發展）　法學博士 河上肇

2 經濟學原理 總論及生産篇　商大教授 法學博士 福田徳三

3 經濟學原理 流通篇　商大教授 法學博士 福田徳三

4 經濟學の基礎理論
- 經濟學方法論　九大教授 文學博士 高田保馬
- 數理經濟學方法論　商大助教授 中山伊知郎
- 經濟心理學　商大教授 經濟學博士 高垣寅次郎

5 經濟哲學　京大教授 恒藤恭　早大教授 二木保幾

6 經濟學特殊理論（上）
- 貨幣論及銀行論　神戸高商教授 田中金司
- 市場理論　商大教授 法學博士 内池廉吉
- 企業理論　神戸高商講師 阪西由藏
- 價格（物價）概論　商大教授 高城仙次郎

7 經濟學特殊理論（下）
- 配分理論　高岡高商教授 大熊信行
- 獨占理論—カルテル、トラスト等—　九大講師 小島精一
- 經濟週期理論　早大教授 小林新
- 恐慌及經濟危機理論　東北帝大教授 和田佐一郎
- 人口理論　[illegible]專教授 藤井萬三郎

8 マルクス經濟學の基礎理論　法學博士 河上肇
- マルクス主義の世界觀と社會觀
- マルクス主義經濟學序說

9 唯物史觀　大森義太郎

10 資本論體系（上）　櫛田民藏
- 商品・價値・貨幣・利潤

11 資本論體系（中）　向阪逸郎　東北帝大教授 宇野弘藏　商大教授 大塚金之助
- 資本・剩餘價値
- 資本流通
- 商品資本と貨幣資本

12 資本論體系（下）
- 利子・企業利得　向阪逸郎

地代 資本の蓄積と矛盾の展開　東大助教授 山田盛太郎　東大助教授 有澤廣巳

部門經濟學

13 部門經濟學

題目	著者
農業經濟	大阪商大學長法學博士 河田嗣郎
山林經濟	農學博士 吉田雅男
蠶業經濟	上田蠶専教授農學博士 早川直瀬
水産經濟	京大教授法學博士 山本美越乃
鑛業經濟	九大講師 小島精一
工業經濟	早大教授經濟學博士 林癸未夫
商業經濟	早大教授商學博士 小林行昌
交通及運輸經濟（海運）	經濟學博士 小島昌太郎
交通及運輸經濟（鐵道）	元鐵道次官 東大講師 中川正左

14 世界經濟論

題目	著者
世界貿易論	京大教授 作田莊一
世界金融論	大阪商大教授 松崎壽

經濟政策

15 經濟政策（上）

題目	著者
經濟政策總論	東大名譽教授法學博士 河津暹
農業政策	北大教授 中島九郎
工業政策	慶大教授法學博士 氣賀勘重
商業政策	九大教授 竹内謙二

16 經濟政策（下）

題目	著者
交通政策	京大教授經濟學博士 小島昌太郎
金融政策	名古屋高商教授 高島佐一郎
殖民及移民政策	北大教授 上原鐵三郎
ソヴエート經濟政策	社會經濟研究所

社會化の理論並に諸行程

17 社會化の理論並に諸行程

題目	著者
總論	東大教授農學博士 那須皓
各論	東大教授農學博士 東畑精一

社會政策

18 社會政策

題目	著者
社會政策原理	九大講師 波多野鼎
社會政策施設各論	藤井悌
ソヴエート社會政策	田中九一
勞働組合	山川均
消費組合論	九大講師 波多野鼎

財政學

19 財政學（上）

題目	著者
財政學原理	早大教授經濟學博士 阿部
歳出論	法學博士 小川鄕
歳入概論	九大教授 三田村

題目	著者
官業及官有財產	東京税務監督局長 青木得三
租税	京大教授法學博士 神戸正雄
公債	京大教授經濟學博士 汐見三郎
歳計及豫算	貴族院議員 西野元
會計監督	會計檢査官 河本文一

20 財政學（下）

題目	著者
財政史	法學博士 小林丑三郎
財政學史 / 財政政策論	早大教授經濟學博士 阿部賢一
地方財政論	内務省地方局財務課長 田中廣太郎
ソヴェート財政及税制制度	後藤信夫

經濟學史

21 經濟學史（上）

題目	著者
前史（古代・中世・近世初期）	慶大教授 高橋誠一郎
正統學派	慶大教授 増井幸雄
社會主義學派	慶大教授 小泉信三
歴史學派 / 限界學派	慶大教授 高橋誠一郎

22 經濟學史（下）

題目	著者
現代經濟學（英米）	慶大教授 小泉信三
（佛）	慶大教授 増井幸雄
（獨墺）	慶大教授 加田哲二

マルクス派經濟學史

23 マルクス派經濟學史

題目	著者
マルクス剩餘價値學説史	森戸辰男 / 久留間鮫造
マルクス以前の社會主義經濟學	森戸辰男

マルクス經濟學説の發展

24 マルクス經濟學説の發展（上）

題目	著者
金融資本と帝國主義	猪俣津南雄
人口理論	向阪逸郎
農業理論	立大教授 河西太一郎

25 マルクス經濟學説の發展（下）

題目	著者
轉形期の經濟理論	山川均
近代ブルジョア經濟學批判	大森義太郎
現代のマルクシズム	
ロシア	東大助教授 山田盛太郎
ドイツ・オーストリー	林要
イギリス・アメリカ	岡田宗司
フランス	山川均

世界經濟史

26 世界經濟史

漢代以前（漢代ヲ含マズ）

漢代以後……
古代地中海諸民族經濟史
ギリシャ經濟史
ローマ經濟史
中世經濟史
近世經濟史

慶大教授 高橋誠一郎
神戸高商講師 阪西由藏
商大教授 上田辰之助

各國經濟史

27 各國經濟史
イギリス
ドイツ
フランス
ロシヤ
アメリカ

慶大教授 野村兼太郎
石濱知行
商大教授 上田辰之助
嘉治隆一
丸岡重堯

日本經濟史

28 日本社會經濟史
京大教授 經濟學博士 本庄榮治郎

29 日本經濟史(特殊研究)
財政史
農業史
商業史
貨幣史
金融史
工業及一般產業史

東大助教授 土屋喬雄
農學博士 小野武夫
慶大教授 法學博士 瀧本誠一
慶大教授 法學博士 瀧本誠一
石橋湛山
鈴木茂三郎

明治大正經濟史
日本經濟思想史

慶大教授 法學博士 瀧本誠一

唯物史觀經濟史

30 唯物史觀經濟史概說
資本主義以前經濟史
資本主義以後經濟の發展
社會主義經濟の發展

山川均
石濱知行
河野密

31 日本資本主義經濟史
猪俣津南雄

統計學

32 社會統計論一斑
法學博士 高野岩三郎

33 統計學
理論統計學總論
數理統計論
人口統計
社會統計
經濟統計
金融統計

東大助教授 有澤廣己
理學博士 小倉金之助
東大講師 內閣統計官 森數樹
東大講師 竹下淸松
商大教授 商學博士 藤本幸太郎
早大教授 小林新

經營經濟學

商業學

34
經營經濟學及商業學(上)
- 經營經濟學 — 商大教授 増地庸治郎
- 商業學總論 — 慶大教授 向井鹿松
- 會計學及簿記學 — 商大教授 吉田良三 / 商大教授 太田哲三

35
經營經濟學及商業學(中)
- 賣買及市場組織 — 商大教授 法學博士 内池廉吉
- 商品論 — 東京商品陳列所長 阪口武之助
- 取引所
- 外國爲替 — 向井鹿松

36
經營經濟學及商業學(下)
- 信託業 — 立大教授 呉文炳
- 倉庫 — 商大教授 法學博士 内池廉吉
- 保險 — 東大教授 法學博士 森荘三郎
- 商業實務 — 商大講師 ブロック・ホイス
- 商業史 — 慶大教授 野村兼太郎
- 經濟地理學概論 — 京大教授 黒正巖
- 聚落地理 — 慶大教授 小田内通敏

37
企業形態論
商大教授 法學博士 上田貞次郎

特殊問題

38
特殊問題
- 都市經濟 — 法學博士 渡邊鐵藏
- 産業合理化 — 獨逸プラーグ大學教授 東大講師 アルフレッド・アモン
- 廣告研究 — 「三越」廣告部長 松宮三郎
- 經濟記事解說 — 東洋生命支配人 細貝正邦
- 最近國際資本戰 — 鈴木茂三郎

現代日本經濟の研究

39
現代日本經濟の研究(上)
- 戰時及戰後の日本經濟 — 東大經濟學部長 法學博士 河津暹
- 日本の産業及企業 — 野村證券株式會社調査部長 勝田貞次
- 日本の重要商品 — 商品陳列所長 阪口武之助
- 日本の原料問題 — 理學博士 大河内正敏
- 日本の國際經濟研究 — 鈴木茂三郎
- 日本の國際金融 — 早大教授 經濟學博士 服部文四郎
- 日本の關稅問題 — 經濟學博士 太田正孝
- 日本の金融市場 — 高橋龜吉
- 日本の財政 — 法學博士 小川郷太郎
- 日本の財政整理 — 野村證券調査部長 勝田貞次

40
現代日本經濟の研究(下)
- 日本の農業問題 — 九大教授 澤村康
- 日本經濟の行詰り — 高橋龜吉
- 支那問題の經濟的意義 — 大倉高商教授 經濟學博士 木村増太郎
- 日本の製糸經濟 — 上田蠶糸專門學校教授 農學博士 早川直瀬
- 日本の殖民地經濟 — 農學博士 東郷實
- 日本の山林 — 林學博士 本多靜六

番號	書名	著者
	日本の畜産 日本の企業聯合	早大教授 出井盛之
41	金融政策の將來	（交渉中）
42	金解禁を中心としたる我國經濟及金融	三菱・行政顧問 山室宗文
43	世界及日本經濟圖表	東大助教授 有澤廣巳 九大助教授 高橋正雄
44	經濟行政法	京大教授 法學博士 佐佐木惣一
45	經濟法令集	東大教授 田中耕太郎
	附錄	
46	經濟學辭典（上）	
47	經濟學辭典（下） 附・總索引	

本全集こそ何ものにも優る
裝身具である。

改造社版の『經濟學全集』に網羅されたる知識は、今や世界人たる常識として、此等の知識の用意なくしては、最早や世に處することが困難であらう。されば、階級の如何、職業の如何を問はず、何人も先づ、改造社版『經濟學全集』を備えよ。此の全集こそ、新時代人のためには、何物にも優る裝身具であらねばならぬ。

而して、單に一般經濟學を修めるさへ、大學に於ては三年を要する。況んや新興の經濟學と實踐方面の有らゆる知識を併せ體系的に修得するに、三年有半の日月は、斷じて我慢するにあらざれば完全な「經濟人」「社會人」とはなり得ぬ。我社の出版良心は、或る片方の經濟學のみを編纂することは、現代經濟及社會の動きを無視するものであるから、斷乎として權威ある新興經濟學を對立せしめたのである。

改造社版の『經濟學全集』を手にして、何人もその超營利的、超ジャーナリスチックたるに一驚するであらう。此の全集こそ、正しく我社の出版良心の端的なる表現でなくて、何であらうか。

「經濟學全集」の内容說明

理論經濟學

確乎たる理論的基礎なくして經濟學はない。理論經濟學は、鬱蒼たる全體系の根幹であり、宏壯なる全建築の土臺である。經濟學全集の優劣、否な存在價値それ自體が、先づかかつてその理論經濟學の如何にあるといつてよい。

この見地からして、本全集は特に理論經濟學のために尨大な十一卷を割いてゐる。讀者諸君は先づ、日本經濟學界の耆宿にして實に世界的權威たる福田、河上兩博士の原論に就いて經濟學そのものゝ意義を學び、生産、交換、分配、消費の基本現象を本質的に究められねばならぬ。もつて經濟學の基礎研究を確立されねばならぬ。職を賭して學に忠なる河上博士が、茲に始めて公けにされる「經濟學大綱」こそは、大學における博士三十年の研鑽の最後的結晶として、絕大の確信をもつて自ら世に問はれんとするものである。

原論によつて大綱を把握された讀者諸君は、その研究を深めるために不可缺な武器を、最尖銳な高田博士の「經濟學方法論」に求めねばならぬ。この武器は、中山助教授の最新研究「數理經濟學方法論」によつていよ／＼磨ぎすまされる。

いまや讀者諸君の經濟學は、哲學によつて裏づけられねばならぬ。「經濟哲學」の恒藤教授と三木教授は我國が有する經濟哲學の双璧である。この兩俊英が轡を並べるのは河上福田の並び立てるにも髣髴してをる。更に高垣博士の「經濟心理學」に至つては、經濟學基礎研究の全然新しい分野として、讀者諸君の研究的視野を開拓者の歡びで充たさずにはおかない。

理論經濟學の各論

理論經濟學の各論は、以上の土臺に立つて燦然たる上部建築を支へる大理石柱のかず／＼である。これをめぐつて讀者諸君は、貨幣、銀行、市場、物價、企業、所得、獨占、恐慌、及び人口に關する諸現象を究め、法則を會得する。

現代の經濟生活の不可思議な血液である貨幣は、何故に、また如何に流通するか。また何故にたゞの紙片が黃金の代りをするか。信用とは何ぞ。銀行が營む機能とその意義は？

中央銀行、普通銀行、及び信託のそれ／＼の業務と役割は何か。だが、商品市場と證券市場――なかんづくその精髓たる取引所は、いかに構成せられ、いかなる動きをするか。投機は？　また外國貿易の特殊問題は？

商品の價格を決定し、物價の騰落を生ぜしめる要因は何々か。更にまた物價運動の一般傾向はどうか。企業はいかなる要素をもつて成立し、いかなる組織形態を有ち、またおのおのゝ長短は如何。カルテル、シンヂケート、トラスト、コンツェルンの作用と力とは？　競爭から獨占への進化は？　だが、企業を通じて各人の手に渡る所得、――勞賃、俸給、利潤、利子、地代はいかにして決定せられ、各所得の變化はいかに全經濟に反作用するか。そも〳〵景氣不景氣はいかにして生じ、いかに交替し、變動するか。しかしてその過程において常に恐慌の爆發を見るのは何故か。恐慌は避け得るものか。得るならばいかにして？　最後に、人口と經濟の相互關係は如何。マルサスの理論はいかに修正されねばならぬか。

およそそれらの根本問題に對する的確なる解答が積み重ねられて始めて、わが理論經濟學は完璧となる。茲にその權威ある解答者として讀者の前に立たれるところの、田中、內池、坂西、高城、大熊、小島、小林、和田、藤井の諸教授こそは、たゞに各研究分野を獨歩する一粒選りの專攻學者であるといふだけでなく、實にまた全學界の精銳として、珠玉として、誇りとして、日に〳〵新らたなる研究の源泉をなす諸士である。

マルクス派理論經濟學

だが、現代の經濟學徒は、その思想傾向のいかんを問はず、もはやマルクス經濟學の理解なくして經濟學を語らんとするものではない。しかるにマルクス經濟學の特質は、一般經濟學が資本主義經濟の調和を說くのに對して、その內在矛盾を強調することにある。從つてまた、一般經濟學は資本主義經濟の永遠性を認めるのに、マルクス經濟學はその必然的崩壞を豫言する。かゝる尖銳な理論的對立の結果として、マルクス派經濟學はおのづから、資本家階級と對峙する無產階級の理論的武器となつてゐる。かやうに、その社會的意義が重大となればなるほど、經濟學界の注意の焦點も勢ひマルクス派經濟學に向けられて來た。最近のわが經濟學界における最も緊張した論爭は殆どすべてマルクスの理論を中心に行はれたことは、讀者諸君の熟知せられる通りである。

經濟學全集にして若し眞に現代の知識的要求を充たす全集たらんと欲するならば、必然にマルクス派經濟學を含まなくてはならぬ。そして、一切の困難と戰つて研究を深めつゝある獻身的マルクス學者そのものゝ眞摯なる研究を收めねばならぬ。

讀者諸君は、この最高の進歩的立場をとる所の本全集においてのみ河上、猪俣、大塚、大森、向坂、宇野、有澤その他すべての最も卓越せる諸權威の蘊蓄が、さしも難解なるマルクスの理論を平明そのものと化してゐるのを見出して驚くであらう。

「マルクス經濟學の基礎理論」は斯學の第一人者として中外

の均しく識認する河上博士の最高力作である。この一著は本全集をして九鼎大呂の如く重からしむるもので、マルクス派經濟學の根幹を說いて彪著たるマルクス派の理論を闡明す。大森氏の**「唯物史觀」**また本全集のみの異彩である。大森氏と學と熱とは世既に定評がある。而してこれに依つて讀者諸君は、不朽の大典**「資本論」**の獨自の體系について之れを隅々までも咀嚼しつくす準備全く成るに到るのである。

有名なる**商品の分析と價値の理論**にはじまる此の研究は、進んで搾取の根本現象を白日の下に曝す剩餘價値論と利潤論に入り、轉じてかの價値を生む價値――資本――の種々相、轉形、流通の諸過程を跡づけ、こゝに資本主義生產の基本的方則が確立される。この根本的方則が、資本家的自由競爭の價格經濟の下にいかにモディファイされるかを究明するものは、實に**マルクスの研究の妙所**にしてまた激烈な論爭の的となつたところの、**平均利潤率の理論**である。續いて、直接に勞働を搾取するところの最も代表的な資本たる產業資本と並んで、商業資本や貨幣資本がいかにして利潤の分前にあづかるかを學べば、商業利潤、利子、企業家利得の性質もまたおのづから明白となる。しからば、資本家と共に不勞所得階級たる地主が受取る地代はいかにして生ずるか。この問題に答へんとして、リカードを批判しつゝ、絕對地代の概念をうち樹てて、剩餘價値一元のマルクス學說を完からしめてゐるのは**地代論**である。

だが、すべての道が羅馬に通じたやうに、これらすべての分析と究明と法則とその發展とは、マルクスの一大結論に合流してその深さをば底知れぬものにする。曰く、「資本の蓄積と矛盾の展開」――それは周期的に次第に激化して破局的なものとなり、資本の集積と集中とが獨占にまで進む過程である。そしてそれと共に過剩資本と過剩人口とが不可避的に增大し、勞働者の窮乏化と共に階級鬪爭はますます尖銳となる過程である。

各產業部門の經濟學

一方、一般經濟學の線に沿うての研究は、その根本原理をひつさげて產業生活のあらゆる分野に進み入る。そして**農業**、**林業**、**畜業**、**水產**の如き謂はゆる原始產業をはじめ、近代產業の精髓たる**鑛業**、及び**工業**の各部門におけるそれぞれの經濟を支配する特殊の法則を探究し、それぞれの經濟に獨特なる具體的諸問題に科學的解決を與へようとする。生產から消費に至る財貨の動きを賣買によつて促進する**商業**、同じ動きを機械と動力によつて促進する**陸運海運**、更にすべての分野の一切の企業に對して活動のエネルギーを供給し調節する**金融**――これらの發達した現代經濟の重要部門に至つては、ますます精緻なる研究の對象でなければならぬ。その燦然たる成果をもつて飾られる本全集の諸巻が最も興味ある部分をなすのは當然である。茲にいよいよ讀者諸君の經濟學は

實生活と融合し、諸君自身の日常當面の問題を解く鍵鑰を諸君の座右に備へつける。

農業經濟學の**河田博士**、水產經濟學の**山本博士**、**鑛**業經濟學の**早川博士**、工業經濟の**林博士**、交通經濟の**小島博士**は、それぞれに並びなき第一人者として、玆に讃辭を贅せんには餘りにも著名である。更に、**吉田教授**が山林經濟を、**小島教授**が鑛業經濟を、**小林教授**が商業經濟を、**中川元鐵道次官**が鐵道を、最後に**松崎教授**が金融經濟を講ぜられる時、此の間然する所なき學と人との結びつきを見て何人が向學の熱意に燃えぬであらう。

經濟政策、社會政策

國民生活の最高見地から、經濟の各部門を指導し統制して國家的利害に從はしめんとする要望と努力は、**經濟政策學**を生み出した。いまや「產業立國」の一路を邁進せんとする現代日本は、その當面焦眉の諸問題を、斯學の教ふる所に從つて解決すべき必要に迫られてゐる。この政策學において、經濟は政治と交錯し、公民意識あるすべての人々の最も緊張したる注意と攻究とを要求する。

本全集に收められる經濟政策學は、大家中の大家と仰がれる**氣賀**、**小島**の兩博士はもとより、**中島**、**竹內**、**高島**、**上原**の諸教授の如き、新銳をもつて斯界に鳴る諸學者が、快心の作と自薦せられる玉篇のみ收めたばかりでなく、まさに政策學の最高權威**河津博士**の一般經濟政策論を得たことによつて獨自の光彩を放つものである。

だが、以上によつて資本主義國家の經濟政策に通曉せられたる讀者諸君は、進んで「**ソヴエート經濟政策**」を檢討しなければならぬ。これぞ、人類史上に劃時代的な「實驗」であるといはれるところの社會主義社會の建設の途上にある勞農政府の政策として、世界的關心の焦點をなすものである。

一方、戰後歐洲の資本主義諸國において、**無產階級の勢力を背景**に、異常な注意をあつめつゝ進展してゐるものは、資本主義經濟そのものゝ內に社會主義の要求を取入れんとする「**社會化**」の運動である。この運動は、何等かの形において早晚わが日本をも襲はずにはをらない。この嶄新にして至要なる問題の徹底的系統的研究は、博く深き政策學の造詣が志士的情操で點睛された最進步的な學風の唯一の代表者**那須博士**によつて始めて完成された。本全集は、博士の新著「社會化諸政策」の燦然たる一卷を加へたことにより、いよいよ他の追隨を許さない。

しかるにまた、社會問題の緊張すること今日の如く甚しきはなき我國においては、「**社會政策**」の研究こそが焦眉の急であるのは餘りにも自明である。そしてこの科目の擔當者としては、學理と實際の兩面に卓越せる**藤井悌**、**波多野鼎**兩氏にも勝る何人があらうか。社會政策の原理の究明に加へて、その施設に關する詳論を收めたことがすでに本全集の一大特色で

あるといふのに、更に「勞働組合論」「消費組合論」の如き特殊題目については特にマルクス學派の見解をも明示するために本邦唯一の權威山川均氏、波多野鼎氏の力作を加へ、最後に田中九一氏の「ソヴエート社會政策」を取入れてもつて體系的な完成に達してゐる。

財政學

體系的完成といふ點では、本全集の財政學もまた驚異である。財政學プロパアはこれを原理と各論とに分けて整然たらしめ、添ふるに財政史、財政學史、財政政策論、地方財政論、及びソヴエート財政及稅制制度の研究をもつてし、およそ求むる知識の一片として得られざるはなき財政學の大殿堂をうち建ててゐる。

加ふるに、此の殿堂に講ずる教師達を見よ。神戸博士の「租稅論」は、博士あつて租稅論ありといはれるほどのそれである。汐見博士の「公債論」は、戰時及び戰後の最新現象の考察に基づける劃期的な研究として他の追隨を許さない。そして「歲出論」の小川博士、「歲入總論」の三田村教授、「官業論」の靑木教授、「歲計豫算論」の西野氏、會計監督の河本氏は、學究としての造詣の深さにおいて、また國家財政の實際に精通せることにおいて、おの〳〵の研究分野に匹儔を見ないではないか。「財政學原理」を講ずる阿部博士は、斯學の原理的研究の世界的水準を高めたる學者として令名並びない。博士は更に、その蘊蓄を傾けて「財政學史」及び「財政政策論」を講ぜられる。圓熟せる小林博士の「財政史」と本邦唯一の研究者田中氏による「地方財政論」とは、わが財政學の殿堂のみが藏する獨自の文獻でなければならぬ。

一國の經濟的發展と共に社會問題が深刻となればなるほど、從つて社會政策の重要性が增せば增すほど、その具體的な方策と施設とは財政の問題として現はれてくる。一方では免稅點の引下げ、消費稅の減廢、所得の累進的課稅、相續稅の引上げ、資本課稅の新設、國稅の地方移讓の諸問題、他方では失業救濟、勞働保險、教育費の國庫負擔、自作農保護の諸問題が、ます〳〵眞劍な爭點として國民の前に現はれるであらう。財政學の知識なくして之等の問題の解決は期し難い。否な、その理解さへも不可能である。

この點から見ても、本全集が特に「ソヴエート財政及稅制制度」の雄篇を收めてゐるのは最も意義あることでなければならぬ。

經濟學史

讀者諸君が以上において見られたる如く、現代に花咲き實を結ぶ絢爛たる經濟學は、もとより一朝にして成つたものではない。わが經濟學は、いかにして今ある如き科學的體系にまで生成したか、その史的發展を跡づける時にはじめて經濟學の理解は完きものとなる。

「**經濟學の始祖**」といへば、何人もアダム・スミスを想ふであらう。だが、スミスの思想ほど、その先人に負ふ所大なるはないとも言はれる。近世の初期は實に、多くの天才的な經濟思想家を輩出せしめた。しかも、彼等の思想のすくなからざる部分がすでに、遠くギリシアの哲人等によつて說かれてゐた。

古代、中世から近世の初期に至る經濟思想史を講ぜられる**高橋教授**は、遠くヘブライの文獻にまで遡つて經濟思想の胚芽を求め、プラトー、アリストテレスの體系を闡明し、降つて**中世**を支配したタマス・アキナその他の經濟思想の變遷を辿り、近代の黎明期に生じた思想的激變、及びそこに擡頭し來れる**重商主義**の經濟思想がいかに科學としての經濟學の先驅をなしたかを究明してあます處がない。之れをうけて**小泉教授**は、一方では**重農學派**、他方ではペテイ、ステュアート、ハツチエソン等の影響の下に不朽の大著「國富論」を書いたアダム・スミスの體系を分析し、スミスからリカアード、ミルへと流れる「**正統學派經濟學**」の發展を詳論される。

正統學派を、十八世紀末から十九世紀中葉にかけての經濟學の主流とすれば、之に對して批判的立場をとる二つの潮流が殆どそれと平行して流れた。一つはシスモンデ、サン・シモン等からカール・マルクスに至る「**社會主義學派**」の流れであり、他は、ロッシエルからヒルデブラント、クニースを經てシュモーラーに至る「**歷史學派**」の流れである。前者の史的發展は小泉教授、後者のこれは高橋教授の追跡し、闡せられるものである。高橋教授は最後に、ワルラス、ジエボンス、ゴツセン、クラーク及びカール・メンガアーによつて創設せられ、サツクス、ウイザー、ボエム・バヴエルクによつて發展せしめられた「**限界學派**」の經濟學說を講ぜられ、これをもつて**經濟學史は完結**される。限界學派は、社會主義學派及び歷史學派を批判しつゝ、若干の修正をもつて**正統派經濟學を復興**するものであり、限界學派の學說こそは、現代の一般經濟學の**理論的體系を基礎**づけるものである。

讀者諸君は、この興味深き經濟學史の攻究につゞいて、現代經濟學の諸潮流を代表的諸學者の學說について學ばれねばならぬ。例へばマーシアル、ピグー、フイツシヤー、フエーター、ホブソン、ヴエブレン、ジード、カツセル、シユンペーター、ゾンバルトの如き。この研究のために、**小泉教授**は英米の、**增井教授**は佛蘭西の、**加田教授**は獨墺の學界について講ぜられる。

經濟學史の權威としての高橋、小泉兩教授は、定評中の定評がある。その該博な文獻的知識、的確なる理論的把握、平明流暢な講述の筆がすでに我が學界の異彩であるのに、最近の**獨墺學界に**精通する**加田教授**と新進の**增井教授**を加へて更に**瀧本博士**の「**日本經濟思想史**」――この世界に誇るべき獨立獨歩の研究――を有するところの、本全集の經濟學史及び現代經濟學說研究は、まさに學界の偉觀でなければならぬ。

マルクス剰餘價値學説史とマルクス以後の發展

「剰餘價値學説史」は、謂はゞマルクスの書いた經濟學史である。それが研究は、單にマルクス經濟學の理解のために絶對不可缺であるばかりではなく、一般經濟學の立場に立つ經濟學史の**批判的研究者**に此上もなき武器を供する。至難の業とされる此の剰餘價値學説史の研究も、マルクス學の最高權威にして且一般經濟學に通曉される**森戸、久留間**兩氏の懇切な著述によりてやすやすと讀者諸君のものとなるのである。

マルクスがうち樹てた根本原理に基づき、マルクス以後今日に至る新しき經濟現象を理論づけたる、マルクス經濟學の發展としては、先づ第一に、ヒルフアデングによつて展開せられ、レーニンによつて完成されたところの、**「金融資本と帝國主義」**の理論がある。信用が發達し、銀行が優越し、資本の集積集中によつて獨占の段階に達するに至つた**現代の資本主義の分析究明**すなはちそれである。次いでは農業に關し、カウツキー、リープクネヒト、レーニンが展開した「農業理論」があり、また資本主義から社會主義への過渡段階を理論づけたブハーリンの「**轉形期經濟學**」がある。更にまた、現代のブルヂョア經濟學の研究方法、價値及び利潤理論に對する**徹底的な批判**がある。

最後に讀者諸君は、現代の歐米諸國における代表的マルキ**ストの學説**につき、マルキシズムの全潮流を會得せられねばならぬ。

本全集のこの部門もまた、**猪俣、向坂、河西、山川、大森、山田、林、岡田、**の諸氏の如き第一流のマルキストの筆によつて**輝いてゐる。**

經濟史

經濟生活の歴史的發達の研究は、經濟學の重要分科の一であると同時に、**また甚だ趣に富める部分である。本全集は、玆でもまた斯學專攻の諸權威を網羅し、**たゞに西洋並に東洋の古代中世及び近代の一般的發達のみならず、英、獨、佛、露、米の如き主要諸國の經濟的發達を各國別に詳述して完全無缺を期した。更に我が日本に特に重きを置き、**本庄博士の日本社會經濟史**をはじめ、**小野博士の日本農業史、瀧本博士の日本商業史及び貨幣史、土屋助教授の日本財政史**の如き獨自の研究を悉く收めたるに加へて、**高橋氏の明治大正經濟史**その他最近の經濟的發達の諸相を究めた多くの名篇を加へた。

これらと並んで、本全集の地位を高むることいよいよ大なるものは、**山川、石濱、河野、猪俣氏等、マルクス派經濟學者**の筆になる**「唯物史觀經濟史」**である。玆に、資本主義以前の經濟的發展と、資本主義經濟それ自身の發展と、更にロシアにおける社會主義經濟の發展の全相が、飛潮として紙面に躍る。なほ[illegible]

る猪俣氏の大著「**日本資本主義經濟史**」は、我國におけるマルキシズムの發展のランドマアクとして國際的意義をさへもつであらう。

統計學

社會現象の法則性を、その數學的表現のうちに求めんとする**統計學**は、經濟學の一分科といふよりは寧ろその**姉妹科學**として極めて最重要である。いまや經濟現象の科學的研究がいかに統計に依存すること大なるかを見ても思ひ半ばに過ぐるであらう。斯學の最新知識**有澤助教授**が講ずるところの「**理論統計學總論**」をはじめ、**小倉博士**の「**數理統計論**」、**森統計官**の「**人口統計**」、**竹下氏**の「**社會統計**」、**藤本博士**の「**經濟統計**」、**小林教授**の「**金融統計**」は、一として學界の珠玉ならざるはない。一見無味なる數字の科學をも、達人の筆あつて津津たる興味の新泉と化するのである。

經營經濟學、商業學、

企業はいかに經營すべきか、——これは實際家の聰明によつて**具體的に解決**せらねばならぬ問題である。だが、「**經營經濟學**」は、問題解決の一般的基準を與へる。今日、**戰術學**を學ばずしてよき戰術家はあり得ないやうに、經營經濟學の知識なくして科學的經營は望まれぬ。それほど、近代企業の經營は大規模となり、複雜となつてゐる。しかして此の最新科學の貴重なる知識は、**[illegible]**以外にこれを求むべくもあるまいのである。

經濟の一部門たる商業は、その起源が極めて古いばかりでなく、あらゆる近代企業が、營む活動の共通領域として近來特に顯著なる發達を遂げ、且つさまざまな、それ自身の機關をつくり出してゐる。從つて商業にあつては、その細目までが學問的研究の對象となり、「**商業學**」の名の下に包括される一群の科學の發達を見た。完全を期する本全集は、商業學においても最も誇るべき執筆者と學問的體系を有つてゐる。

向井教授の「**商業總論**」、**內池教授**の「**賣買及市場組織論**」、**上田教授**の「**企業形態論**」、**坂口氏**の「**商品學**」、**吉田太田兩教授**の「**計算學**」、「**簿記學**」と、ただ數へ上げただけでも、內容の整備と優越は明かである。しかるにまた、商業機關の研究としては、**取引所**、**外國爲替**、**倉庫**、**信託**、**保險**にわたり、各研究の絕對權威たる**向井教授**、**吳教授**、**內池教授**、**森博士**、の力篇を收め、最後に、**ブロックホイス氏**の「**商業實務**」**野村博士**の「**商業史**」を以て飾られてゐるのである。

世界經濟と經濟地理

世界經濟は各大學に於ても正科となつたのみならず、近時は此方面の研究が尤も熾烈だ。我財界も總て世界的影響に動かさるるは勿論である。斯界新鋭の第一人者**作田氏**が浩瀚を傾けて**世界貿易**に筆陣を張り**松崎氏**が**世界金融**を說くは適材

適所。又、經濟史が經濟事實を縦に、時間的に見てゐるのに對し經濟地理は經濟事實を横に空間的に、地理的に究明する。食料、原料工業品その他一切の貨物が如何なる條件のもとに何處に生産さるるかの研究は絶對必要である。**黒正、小田内**兩教授の學界における地位は萬人周知のところである。

特殊研究、現代日本經濟研究、並びに辭典、圖表、

以上によりてすでに讀者諸君は、此の經濟學全集がいかに廣博完備の一大文獻であり、經濟學のいかなる分科、いかなる分枝をも包括網 して眞に「全集」の名に背かざるものであることを知られたであらう。だが、本全集は、單に經濟學の全集として**完全無缺**なることをもつて滿足せず、かゝる全集が**日本文化に貢獻し得る極大限の內容**を併せ收めんとした。これ、本全集が以上に加へて更に「**特殊研究**」、「**現代日本經濟の研究**」及び「**經濟學辭典**」を有する所以である。

「特殊研究」の部には、經濟學の一分科といふほどでなくても、すでに其方向へ發達しつゝあるもの、もしくは多かれ少なかれ系統ある經濟的知識乃至は研究として讀者諸君の當面の必要であり興味であるであらうものを收めた。**渡邊博士**の獨自の研究「**都市經濟論**」や、**松宮氏**の「**廣告研究**」や、**細貝氏**の「**經濟記事解說**」や、**鈴木氏**の「**最近國際資本戰**」などが、いかに讀者諸君の研究的視野を廣め、深めるかは、多くを語らずとも明かであらう。

「**現代日本經濟の研究**」は、實は、廣汎な經濟學研究全體の總しめくゝりであるといはねばならぬ。何故といつて、いかなる理論も、法則も、學說も、史實も、現代日本經濟そのものの研究に役立たせなければ畢竟死物ではないか。茲に見る所あつて本全集は、此の部分のために特に尨大なる二卷を割き、現代日本の經濟、財政、金融、特殊産業、關稅、原料、人口、植民地等に關する現勢の闡明、問題の解決を明かにするところの二十題目を選定し、**河津、大河內、太田、服部、小川、木村、早川、東鄉、本多、岩佐**の諸博士をはじめ、**澤村教授**、並びに**勝田、坂口、鈴木、高橋**の諸氏に請ひ、此上もない權威的な研究を收めたものである。

最後に、――これもまた尨然たる一卷より成る**經濟學辭典**は、本全集を繙く讀者諸君の坐右離れざる忠僕であるであらう。何故なら、この辭典こそ經濟と經濟學とに關する一切の言辭の意義を解明して懇切周到を極め、本全集のどの一頁をもやすく〜と讀破させずには置かないから。だが、諸君は間もなく、諸君の忠實が學界の偉人であることを見出すであらう。何故なら、この辭典こそ現代權威的知識の集大成であり、超人的努力の體現である。これに加へるに精密無比なる**世界及日本の經濟圖表**を一卷とつた。その擔當者は斯界の新銳**有澤、高橋の兩助教授**で共に信頼すべき少壯學徒である。而して茲に特筆大書すべき一卷は我實業界の[illegible]と稱せら

るる三菱銀行取締役山室宗文氏の「**金解禁を中心としたる我國の經濟及金融**」の加はつたことである。斯界の情僞を知悉せる著者快心のこの一卷は**實際社會に甚大の好影響**を與ふることを確信する。

經濟行政法と經濟法令集

經濟關係の複雜化につれ**經濟法規の研究**は忽諸に附することが出來ない。殊に資本勞働、兩階級の鬪爭は日を逐ふて尖銳化して來る。現在までの所謂資本主義法規の解釋の方法やすべての方面に於て新たなる形式と解釋とが必然視せられて來た。のみならず勞働組合法、小作法、銀行法、會社法等萬般の法令が日を逐ふて改廢されつつある狀態だ。我全集は**經濟法令集**の一冊に經濟關係の總ての法規を蒐錄し、それを獨創的に組織してすべての經濟事象を誤謬なく誰でも運用出來るやうにした。その編纂者である**田中教授**は、東大教授で唯一無二の適任者だ。又、**經濟行政法**を擔當する京大法學部長**佐々木惣一博士**は福田、河上氏が經濟界の兩大立物であるが如く**法學界の第一人者**として誰でも許してをる。この一集も博士獨特の創意に富むものである。この一書の出來によつてすべての諸經濟行政に於てどれほどの世界的寄與を爲すか學界では興趣の的となりつつある。

（完）

一般經濟學
マルクス經濟學の駢立

一般經濟學とマルクス主義經濟學は、現代を解釋する二つの武器である。今や我等は、此の兩樣の知識を併せ有するにあらざれば、世界の如何なる現象も之を解することが出來ないのだ。我社が此處に本全集計劃の力點を置き、雄大にして精緻なる大組織を成し遂げた。而して唯に質に於て優れるのみならず、量に於ても亦普通全集の二倍を有する。量と質とを兼有し、而かも廉價なる斯くの如き全集が世界の何處に在るか。識者が擧つて本全集を稱讚し、世界に比類のない全集と許さるるは當然である。本全集こそ、世界が有する唯一の經濟學全集でなくて何である？

我等は本全集計畫に獨創的の新體系を樹立した。ただ、ありふれた單行本のつなぎ合せを斷乎峻拒して全集本來の性質と任務とに適進する。誰が何といつても此以上の全集は現代に於て出來得ないのである。

『經濟學全集』に對する 白熱的賞讃の聲を聽け!!

規模・内容・代價、どの點に於ても世界最初の企て

猪俣津南雄

英米には、經濟學辭典の相當によいものがあり、經濟學の叢書もないではない。獨墺では、コンラードの辭典などは浩瀚なもので廣く行はれてをり、叢書もよく揃つたものがある。佛蘭西にも代表的な叢書がある。しかし、いづれも『經濟學全集』と稱すべきものではない。

今度改造社で刊行するものは、規模においても内容においても、『經濟學全集』と呼んで差支ないものと思はれる。その點で、他に類がない。また、價の安い點でも全く同様である。どうしてかういふものが眞つ先きに我が日本において出版されるのか、一寸説明に苦しむほどの現象である。いづれにせよ、世界で最初の企てである。眞に實質のあるものに出來あがらせたいものである。

吾々のやうに、ブルヂョア經濟學に對して批判的立場に立つ者にとつては、かやうに包括的、權威的な經濟文獻の出ることが特殊の意味において至極便利であり、またよろこばしい。吾々は、よく批判する前に先づ十分に批判の對象を理解しなくてはならぬ。また、ブルヂョア經濟學者の研究が謂ゆる權威あるものであればあるほど、まさにその權威によつて最も容易にブルヂョア經濟學そのものの無力を立證することが出來る。更にまた、吾々の經濟學を、やがて建設の武器たらしめるためには、現代のブルヂョア經濟の機構を隅々までも知りつくして置かねばならぬ。

だが、この全集は、ひとりブルヂョア經濟學のみならず、マルクス派のプロレタリア經濟學をも剩すところなく收めてゐる。そのことが、この經濟學全集の獨自の特色であり、強所であり、且つ最大の社會的意義であると信ずる。

何よりも五大特色を認む

向坂逸郎

此の經濟學全集は色々の點で興味を惹く。

第一に、それは殆んど總ての重要なる經濟學的問題を包括する事であらう。

第二に、それはそれ等の問題の取扱方の上に於て、現代の社會的二大階級を反影する二つの理論的潮流を理解し得る樣な體系を有して居る事であらう。

第三に、それ〴〵の問題に就いて、多くは、現代日本に於て可能な權威が執筆される事に依つて、此の全集が現代日本の最高の經濟學的レベルに達するの期待であらう。

第四に、それ〴〵の問題に就いてのそれ〴〵の理論が如何に實踐されつゝあるかを知る上に於て、多くの實際家的方面よりの執筆に盡せぬ興味がかけられるであらう。

第五に、それは二冊の經濟學辭書を有する事であつて、それは專門家、素人、理論家、實際家の期望して止まぬ所であらう。等々。

最少なる失費を以つて最大なる效果を收め得る欣び

高橋誠一郎

私は、この度、改造社によつて「經濟學全集」の刊行を計畫せられたことを、衷心から欣ぶものである。

私どもは、是れまで甚だ不經濟なる方法によつて、經濟學を學んで來た。

私どもの先輩や、私どもが慶應義塾の學窓に在つて經濟學を學んだ頃には、重要なる課目は殆んど皆な、ドロッパースとか、ヴイツカースと云ふ外人教授の擔任する所であつた。堀江歸一、氣賀勘重、名取和作等の留學生諸君が歸朝せられ、又、福田德三博士が來塾せられて後も、なほヴイツカース先生の如きは一人で「經濟史」「經濟學史」「商業政策」「社會問題」などの重要講座を悉く擔任して居られた。私どもは只管、日々のノートを整理することに追はれてゐた。如何なる課目に就いても、擧げられる參考書は悉く外國書であつた。邦文の書典に據つて、經濟學を研究することなどは、殆んど思ひもかけぬことであつた。私どもは教へられた西洋の參考書を、字引と首ツ引でボツ〳〵讀んで見たのであるが、唯だ徒らに勞のみ多くして、効果は極めて少なかつた。邦人教授も多く外國の名著を採つて教科書にあてゝ居られた。當時の慶應義塾の學生は、氣賀博士からフツクス、ゾンバアルト、シユモラー、福田博士からマーシヤル、セリグマン、堀江博士からバステーブル、名取教授からクラークなどの講義を聽いた。固より是れ等の講義は概して進行遲々たるものであつた。私どもの研究は唯だ外國書の譯讀であつた。それは洵

に失ふ所多くして、得る所の少ないものであつた。

爾來、二十年、我が國の經濟學は著しく進歩した。年々、幾多の優良なる經濟書は邦文を以つて出版せられた。私の如き、獨創力なき者は、今猶ほ、泰西の名著をとつて、之れを講述しつゝあるのであるが、既に幾多の碩學に自ら資料を蒐集し選擇し、自ら體系を立て、優秀なる講義を行つて居られる。而して今に於いて經濟學を學ぶ者は、外國書の原文に參する以前に於いて、先づ邦書に據つて充分の知識を收め得るの大利益がある。

而して今又、改造社の企圖によつて、浩瀚なる經濟學の全般に亙り、精選せられ、系統立てられたる知識の集團を、極めて僅小なる努力を以つて、極めて低廉なる費用を以つて取得し得るに至つたことは、洵に經濟學徒に取つて甚大なる幸福でなければならぬ。經濟學徒は、經濟的本則に從つて、最少なる失費を以つて、最大なる効果を收め得るの喜びを有す可きである。

私は一方に於いて、私が此の大計畫に參加し得たることを大なる光榮とすると共に、他方に於いて、淺學菲才、諸大家諸君の間に伍して、よく其の任務を遂行し得るの自信を有せざることを深く愧ずるものである。

經濟知識の綜合を、其の深みと廣さとに於て一層進歩させ得る

二木保幾

現代のやうに經濟生活が複雜を極めて來ては、其の機構や傾向を知らなくては、我等の日常生活上の殆ど如何なる計畫的行動も十分に其の目的を達し難いと同時に、此の機構や傾向の全般に精通することは益々困難になつて來た。然かも此の困難を克服することは到底一人の學者の企て及ぶ所ではなくして、多數の學者や經驗ある者の研究や體驗の綜合的成果のみ獨り之を成し得るのである。私は此の意味に於て改造社の『經濟學全集』刊行の擧に社會的意義を認める。無論多くの研究者の考察や經驗を綜合的成果の形態に於て社會に供給することは、全集としての性質上全く出來ない所であるが、然し此の『經濟學全集』に依りて經濟生活に關する綜合的知識の涵養に必要なる學的材料が供せられ、之に依りて讀者は經濟知識の綜合を、其の深みと廣さとに於て、一層進歩させることが出來るであらう。

相場師以外には最も閑却され易い新聞紙上の「商況面」にこそ、資本主義經濟組織の姿が比較的明瞭に現れてゐることを知る者は、假令自分は相場師でなくても、また本來は無味乾燥と感じても、社會經濟生活の動きを見極めんと欲する限り、努めて此の一面をも精讀するであらう。それと同じく眞に現代經濟生活の全般を把握したいと思ふ者は、此の『全集』のうちで自分が興味を覺えない部分でも、其れをも一讀するの

必要を認めるに違ひない。或はまた此の『全集』が、讀者各自の興味本位から云へば各自夫れ〳〵に面白くない部分でも、「折角買つたから」といふ感情から一讀される契機となり、斯くして社會に讀書を强制すると云つた樣な機能をも、或る程度まで果たすであらう。而して此の强制は出版者には望ましいことであらうが、また讀者にも必ず有益であり、社會的にも其れだけ知識の普及に貢献するものであることを私は信じて疑はない。

將來に於ける發展の出立點

坂西由藏

この『經濟學全集』により我國經濟學界の諸分野に於ける代表的勞作が網羅集成されることゝなれば、そは誠に日本に於て過去數十年間に行はれた經濟學研究の總勘定とも見らるべく、從つて將來に於けるその發展の出立點を成すものとして意義甚だ大なるを覺えます。

經濟知識の民衆化は急務中の急務

神戸正雄

經濟生活は萬人の營む所であり、經濟智識は萬人の有たなければならぬものである。隨つて經濟智識の民衆化は急務中の急務でなければならぬ。改造社は曩きに[illegible]を刊行して文學書の民衆化を實現し、以て世人を裨益したが、今亦之を經濟書にも及ぼした。そして同社の執筆を依頼した人達は各方面の權威者であつて、此書の價値は實に大きい。斯くて同社は、「最良き物を最安く」といふ經濟の要諦を此經濟書により て實證して居る。

世界的な經濟學全集の大成

山川均

私がこの全集によつて與へられた印象は、第一には、その內容項目を一見して、あらゆる部門と題目とが、文字通りに、剩ますところなく網羅し盡されてゐること、かつこれが、能ふかぎりの整然たる體系に統一されてゐることである。私は全世界いづれの國語でも、經濟學の全領域を蔽ふこれだけ包容的な全集のあることを聞知せぬ。

第二には、特に私共の立場から、經濟學の全領域中に、マルキシズムの經濟學の占める分野が、適當に認められてゐることである。ことにマルキシズムの經濟學の研究者に取つては、これを一般經濟學の背景のうちに織り込んだものと見せられるといふ點で、この全集は未曾有なものだと云ふことができる。これは逆さまに、一般經濟學の研究者についても言ひ得られる。

第三には、一般經濟學の方面でも、マルキシズム經濟學の方面でも、おの〱の〃門と題目について望み得られる最高の權威者を網羅してゐることである。私はこれらの專門的な諸權威の尊い協力によつて、この全集が、世界的なものとして大成せられることを熱望し、かつ豫期するものである。

我國社會科學の學的最高峯

阿部賢一

現代民衆にとつて最も緊要なことは、社會一般の現象を科學的に認識し、それを行動に移すことでなければならぬ。これでなければこの行詰つて息苦しい時代を打開して生命に溢れ歡喜に滿ちた社會を見ることは到底出來ない。

神秘の學理の簾を卷き上げて實體を覗よ。存在と價値とを混想して自縄自縛、自からも救ふべからざる迷へる羊群たらしむる勿れ、と私は云ひたいのである。

それには生活一般に關して統一のある智識と理論をまづ第一の要件とするのであつて、この點から觀て改造社計劃の經濟學全集は渴ける民衆の求學心を最も豐かに滿たし得るものの一つであらうと思ふ。そして全集がその名に背かずして論及する範圍が廣く、經濟學の各方面を洩らさない事を努力してゐるのは其特色の一として推稱し得る。此の計劃を大成すれば世界大戰後獨逸學界の最大收穫物であるGDSにも比すべきものが出來上るだらうと思ひ、又之を樂しみにしてゐる。

最近自然科學に於ける發達は實に著しいものがあるが、之に比して社會科學の方面、特に經濟學はどうであらう。社會そのもの〻動きに果して副ふてゐるだらうか、どうか。社會の進化は不斷に進化的な科學を要求しつ〻ある。それで吾々は單なる舊來の智識の羅列や反覆を望まない。正に當代社會そのもの〻熱望する底の經濟學を望んでゐるのである。而してこの內容について觀れば經濟學全集はこの民衆の熱望をかなり豐富に滿たし得るものと信ずるのである。

算盤の上では恐らく冒險に近いこの種の企ても大衆の參加によつて可能となるであらう。私は正直に云つてこの昭和の文化的大收穫の完成の爲に大衆の支持を望みたいと思ふ。それはたゞに一出版社の問題ではなしに我國社會學一般の——出來るならば學的最高峰を出現さしたいからである。

他の如何なる全集も斷じて企及し得ざる偉大にして精緻な計畫

大森義太郎

現代における經濟學の重要については、既に多くの言葉を費すの必要を見ないであらう。現代のあらゆる現象の窮極的な理解が經濟學に來たねばならないことは、このことをもつ

とも科學的に表現するマルクシズムの立場をしばらくおくとしても、日常の事實そのものが何人にも否や應なしに教えるところではないか！　さうした經濟學は、今日、大學の講壇に閉じ込めらるべきではない。解放されて、あらゆる場所とあらゆる人に渡されねばならない。

しかしながら、かうした企ては、いふまでもなく、大事業である。決して誰れにでもできるといふ種類のものでない。マルクス＝エンゲルス全集の刊行なる至難の事業を試みて、既に着々と見事な成果をあげつゝある『改造社』が、いま又、この企て――『經濟學全集』――に着手することは、至當ではあるが、何人もの喜びでなければならぬ。

わたしは『改造社』の『經濟學全集』においては、特に二つの點に感心する。各部門に對して、あらゆる大學とまた實際家をたづねて、もつとも權威ある人を据ゑたことはその第一である。第二は、そこにおけるマルクス經濟學の領域の光彩陸離たることである。けだし今日においてマルクス經濟學を無視して經濟學を語るがごとき、畢竟、痴人の狂想にとゞまる。改造社版『經濟學全集』におけるマルクス經濟學は、體系の整々一絲亂れざる點において、筆者に精鋭を聚めたる點において、凡そ他のいかなる經濟學全集も斷じて企及し得ないところである。

最後にわたし一個の興味からいへば――だが、それはわたし一個ではなからう――改造社の全集が最初に河上、福田博士の經濟原理的著作を掲げたことである、[illegible]ばしば論壇に相見えた戰士だといふ卑俗な興味は別として、それは二つの陣營の最高峰を並べ置いて、讀者に供するものである。わたし自身も實に鶴首してその發刊の日を待つ。

我國經濟學者の權威の總動員

河津暹

本『全集』は吾國經濟學者の權威を總動員してゐるやうな容である。

この精密にして周到なるプランを此等の人々によつて完成されたる時は、歐米諸國に於ける經濟學書と比しても、決して劣ることはないであらう。

最近に於ける經濟理論の總ては之れに網羅され、經濟政策其の他あらゆる諸部門に渉つて悉くこれを聚集大成しあることは、實に吾々にとつても意義深きことである。

この全卷が完全に統制された曉には――そしてそれは今までの歷史によつて充分に『改造社』に期待され得ることであるが――他の經濟學書を手にする必要すらあるまいと考へられる。

誠にこれは吾々一學究の徒ばかりでなく、吾國文化の爲にも喜ぶべき企てといはねばならぬ。

經濟學全集こそは日本國の糧である

武藤山治

今回改造社で經濟學全集刊行の擧ありと聞き、私は非常に有益なる企として喜びに堪へない次第である。

吾々日本國民に最も缺乏せるものは經濟觀念である。明治維新の初に當り大久保利通公が當時の人々に經濟知識を與へるため英國より經濟學者を招聘したことがある。所が英國の經濟學者が招聘期間滿了して歸國するに際し、述懷した所を聞くに、日本國民は總ての點に於て優秀なる國民であるが、經濟觀念を與へることには遺憾ながら成功し得なかつたといつたといふことである。これは如何にも尤なることで吾々日本國民としては大に鑑みねばならぬことである。

吾々日本國民が政治や倫理道德等の知識は充分に有しながら、經濟的意識に於て缺くる所以は、德川三百年の間に於て吾々は知らず〳〵の間に經濟的觀念を殆んど失ふに至つたためである。それは當時士なるものは經濟の學問をいやしみ士分の教育には經濟の事を教ふべからずと定められて居つたためである。從つて當時の學者の中で經濟の事を教へた學者は至つて少く、又當時の學生も之を輕んじて居つた。その頃江戸に物徂來といふ有名な學者があつて、專ら實經濟を主として門下生を教へて居つた。當時信州より一人の青年が徂來先生の門を叩き其門下生たらんことを賴んだとき、先生は之を座敷に招き入れ、御前の國で米が一升何程するかと問はれた。この青年は四書五經を暗んじ、如何なる先生の難問にも卽座に答えんと用意して居つたところ、意外なる先生の質問に遭ひて、之に答ふることが出來なかつた。そこで徂來は之を戒めて學問は空理空論のみを究むるものでなくて、必ず實經濟に觸れるものでなくてはならぬと青年を戒め、門下生たることを拒まれた。此青年は之に發奮して後に經濟の教を說く所の有名なる學者室鳩巢となつたといふ話がある。かういふ次第で長き間吾々の祖先は經濟を輕んじて居たため、今日に至つても經濟觀念が最も缺けて居る。故に我が國民の經濟意識を强める所の『經濟學全集の發行』は、私の特に其の有益なる企として贊意を表する次第である。

經濟科大學を凌駕す

島村一三

改造社の『經濟學全集』の全計畫を新聞で初めて知つたときの私の驚きは非常なものであつた。それはそのモツトーとする如く機構尨大、且つ精緻にして完璧な計畫で、此のやうな出版は西歐にもない筈である。私は一貧學生であるが、此の計畫が實現された上は、もはや高い月謝を拂つて大學に通ふ必要はなくなるであらう。實質的に於ては確に經濟學科大學を凌駕してゐると云ひ得る。



噂の發生

菊池寛

作家の木村は、この二三年間、身邊に關するいろ〳〵な噂になやまされ切つてゐた。その多くが、女性についての噂だつた。その中には、身に覺えのある噂もあつたが、十中の八九まで、荒唐無稽な、當人が初て聞くやうな噂だつた。彼は、誰かこの世の中に、彼に悪意を持つ人間がゐて、次ぎ〳〵にさう云ふ彼を傷ける噂を製造してゐるとしか思へなかつた。殊に、一番彼を悩やましたのは、S子との噂だつた。それについでに、女流作家のT女史との噂だつた。

S子が、初て彼を訪ねて來たのは、一昨年の正月だつた。

「〇〇大學の野村です。」

と、取次のものに云つた若い女性が彼女だつた。

木村は、教養のある女性には、興味も好意も持つてゐたので、直ぐに會つた。

彼女は、特徴のある大きい目をした色の浅黒い、どこか新鮮な感じのする女性だつた。めいせんのそろひの着物と羽織に、袴をつけた姿が、いかにも女學生らしく、洒として好もしかつた。彼女は、少しはにかむやうな話し振りだつたが、そのくせ自分の云

ひたいことは、何でも話した。四月に卒業するのだが、木村のやつてゐる雑誌の編輯記者に雇つてくれと云ふ依頼だつた。

「わたくし、Mさんには二三度、お目にかゝつたことがございますの。だから、Mさんに紹介状を頂かうと思ひましたの。でも、Mさんは、わたくしの事なんか、もうお忘れになつてゐるかも知れませんわ。」

Mとは、木村とごく親しい友人だつた。

木村は、ありあまる位、人を使つてゐたし、その中には女性も二三人ゐたので、殆ど新しい人を迎へる餘地はなかつたが、しかしから云ふ教養のある若い女性は、捨てがたい氣がしたので、四月までには何とか考へて置かうと返事した。

その後、一週間位立つてから、S子は手紙をよこした。「今度、伺ふときには、花を持つて行きたいと思ひますが、先生は花をお好きですか」と、書いてあつた。木村は、花などはちつとも、好きでなかつたが、しかし若い女性から花を貰ふことは、氣持のいゝことに違ひなかつたので、「花は好きではないが、花を貰ふことはわるくない」と、云ふ返事をした。

彼女は、間もなく白いうすやうの紙で覆ひをした花束を持つて、再度訪ねて來た。

「わたくし、こんな話し込んでしまつて、お邪魔ぢやありませんから。」

彼女は、二十分ばかりになると、もうそんな心遣ひをしながら、一時間近くも話して歸つた。再度の訪問で、彼女がいかにも物分りのいい文藝的にも理解のある、よい意味でモダーンな女性であることが分つた。

木村は、四月が來れば、何か彼女のために仕事を見つけてやらうと思つてゐた。

二月から三月へかけて、一月半ばかり彼女はやつて來なかつた。三月の終頃に、彼女は突然訪ねて來た。

「わたくし、あんな御願ひしてありましたけれども、この頃毎晩熱が出ますの。それで、お醫者に見て貰ひましたら、少し胸が惡くなつてゐると申しますの、そしてあまり烈しい仕事はしない方がいゝと申しますの。ですから、雑誌編輯など云ふことは、とても駄目ぢやないかと思ひますわ。」

木村は、この若い美しい女性がまだ二十を越したばかりで、胸をわるくしてゐるかと思ふと、一寸心が暗くなつてしまつた。

「ぢや、どこか轉地でもするのですか。」

「そんなことも、しようとは思つてゐませんけれども、」

「僕のところの雜誌編輯なんて、ちつとも烈しい仕事ぢやないんだけれど。」

「でも、身體がよわいと、充分お手傳ひが出來ないと思ひますわ。でも、何か片手間に出來るお仕事がありましたら、させていたゞきますわ。」

木村は、ある編輯物があつたので、二三人の人にさせてゐたが、その方の仕事を彼女にもやらせることにした。そして、一週間に二度宛、木村のところへ顏出しをすればいゝことにした。

S子は、同じ編輯物を手傳つてゐたN子と、すぐ親しくなつて、N子と打合はせて同じ日に出社することにしてゐた。

木村は、N子から間接に、S子の生活を聞いてゐた、彼女が病氣であるに拘らず、ちつとも養生しないで、「わたしは、どうせ一年位したら死ぬんですから」、と口ぐせのやうに云つてゐることをきいて、心を痛めた。

彼女が、どうしてそんな棄鉢な氣持になつてゐるかと云ふことが、すぐ分つた。それは、五月の終頃だつたが、木村がある女性を主とした聽衆の講演會で、戀愛に就ての講演をした。それを、S子は、N子や社の事務をやつてゐるT子と三人で、聽きに行つた。木村の戀愛論は、戀愛についてのあらゆるロマンスやイリウジョンを叩き壞したりアリスチツクな戀愛論だつた。

その講演會のあつたあくる日、木村はN子に會つた。N子は、S子よりは半年ばかり前から、木村の仕事をしてゐた。女子專門學校を出てゐたが、英語がよく出來る聰明な美しい人だつた。

N子は、笑ひながら云つた。

「先生の昨日の講演は、私達みんな反對でしたのよ。S子さんたら、先生が何かおつしやるたびに、ノウ〳〵と小聲で云つて首を振つていらしつたわ。」

と、云つた。木村は、苦笑した。S子やN子のやうな高い教養を持つた女性にも、戀愛は何等かのロマンスなしには考へられないのだと思つた。

「さうかね。貴女方でもさうかな。」

「S子さんは、ダンテとベアトリチエの例を引いて、盛んに精神的戀愛を主張していらつしつたわ。」

「さう。さうかな。」

「それから、妾とS子さんと二人ぎりになつて、いろ〳〵戀愛の話をしましたの。そしたら、S子さんは、戀愛の相手はどうしても年の行つた人でないと物足りないとおつしやいますの。さうして、實際奧さんのある年とつた方を思つていらつしやるんですつて、しかも作家の

木村は、Mのさう云ふ態度を、肯定しないわけには行かなかつたが、何だか少し冷たいものを感じた。Mが、もう少しS子に温い氣持を持ちつゞけてやつたら、S子はもつと幸福であり得るのぢやないかと思つた。

木村は、Mのさうした態度を見ると、Mに頼んでS子に養生をするやうに忠告すると云つたやうな、センチメンタルな事は、云ひ出せなくなつた。彼は、話をそれぎりに打ち切つてしまつた。

木村は、その後も一二度、機會があるごとにS子に忠告した。S子は、その頃夕方になると毎晩八度近い日熱がつゞいてゐるらしかつた。白粉氣のちつともない顔には、氣のせいか、だん／＼憔悴の影が深くなつて來るやうな氣がした。木村は、漸進的な自殺が目の前で行はれてゐるやうな氣がして、氣持がわるかつた。

丁度、そのとき新進作家の黒川が、S子の救主として現はれた。黒川は、その年の正月に愛妻を無くして、田舎の温泉場でぶら／＼してゐたが、其處を引き上げて、木村のやつてゐる雜誌社へ來て、寝起きしてゐた。

黒川は、S子に初對面のとき、いきなり云つた。

「貴女は胸がわるいでせう。僕は、胸がわるい人はすぐ分るんです。」

S子は、黒川の親切な言葉が、可なり氣に入つたらしかつた。

「京都にいゝ注射をする醫者があるさうですよ。きつと癒るさうよ、あなた行きませんか。一人で行くのが、いやだつたら、僕が一しよに行つてあげますよ。」

黒川は、そのつぎの日に、そんなことまで云つてゐた。

二人が、戀愛關係にまで進むには、幾日もかゝらなかつた。

黒川の前の妻は、やはり胸の病ひで死んでゐた。黒川が、その病妻をどんなに愛しんだことは、彼の小説に依つて、若い女性達を動してゐた。黒川はS子に、

「僕は、病人の看病は上手ですよ。あなたも、寝込んだら僕が、看病してあげませう。」

と、云つたと、N子から聞いた。

黒川は、純朴で、信頼すべき男だつたから、S子のためには、願つてもないやうな愛人でかつ看病者であると、木村は思つた。S子が、そのために養生する氣になり、健康になつてくれたら、どんなにいゝことかも分らなかつた。たゞ、木村が心配したことは黒川があまり健康でもないのに病妻をさん／＼介抱した揚句に、また胸のわるい愛人を擁くことに依つて、彼自身が健康を損じはしないかと云ふことだつた。しかし、それも黒川自身が自分で選ぶことなのだから仕方がない

ども思つた。

すると、それから間もなく、社で宿つてゐる黒川と、同じ蚊帳の中で、S子が寢たと云ふことを、木村は耳にした。

その晩、S子も社で宿つて行くと云つて、黒川の寢てゐる次ぎの部屋で社にゐる女事務員と二人寢てゐたのであるが、そして寢ながら黒川と襖ごしに話してゐたのであるがS子は突然

「わたし、そこへ行つてもいゝかしら。」と云つた。

「どうぞ。」

と、黒川が云ふと、S子は何の躊躇もなく黒川の蚊帳の中へは入つて行つた。しかも、それは女事務員のT子が、まだ起きてゐる時だつたと云ふのだつた。

木村は、S子の大膽な振舞にあきれたが、じかしそこに何物にもこだはらない女性の新時代が存在してゐるやうな氣がした。それに、黒川はいつでも結婚するであらうと思つたから、彼等のどんな行爲も非難する氣になれなかつた。

この戀愛で、S子も再生したと欣ばずにはゐられなかつた。

間もなく、黒川は社を出て、一軒の家を借りた。S子も、むろん今までの下宿を引き拂つて、同じ家へ引き移つた。二人は、そこで完全に同棲生活を始めたのだつた。

木村は、そんなことをする前に、早く結婚式を擧ぐればいゝと思つてゐた。しかし、黒川が信頼出來る以上そんな形式はどちらでもいゝと思つてゐた。

すると、一月ばかりして、ある日突然S子の手紙を木村は受けとつた。

わたくしは、Kと別れました。今後彼は、偶然妾と會ふ機會をさへ避けると思ひます。

S子

と、書いてあつた。

木村は、凡てが判らなかつた。たゞいつか、S子が

「黒川さんたら、前の奥さんをほんとうに愛してゐたのでせうかしら。妾、あんな方をほんとうに愛せるなんて隨分をかしいと思ふわ。」

と、自分に云つたのを思ひました。S子は、自分の愛人から過去の戀愛をさへ抹殺しようとするのかと思つて、S子の氣持が少し不愉快だつた。S子は、現在の黒川の愛だけに滿足せず、黒川の過去の戀情まで自分のものにしてしまはなければ氣のすまない、利己的な女ではないかと考へたりした。

しかし、それだけが、こんな急激な決裂の原因であるとは考へられなかつた。

S子も、黒川もその當座、木村の所へ寄りつかなかつた。彼は、二人の決裂の事情を、黒川の友人の村木に訊いてゐた。

「一體、どうしたんだい。何で、喧嘩したんだらう。」

「さあ。僕等にもはつきり、分らないが、結局S子さんが、身體を許さないからでせう。」

「そんな事はないだらう。もう、とつくから一所にねてゐたのぢやないのか。」

「それは、さうなんでせう。でも、關係はないさうですよ。」

「そんな事が、あるかしら。」

「それが、さうなんです。だから、黒川が、ぢり〳〵してしまつたんでせう。」

木村には、S子のやり方が、どうにも分らなかつた。同棲しながら身體をゆるさない位なら、なぜ同棲なんかしたのだらうと、思つた。

「それぢや、全然意味がないぢやないか。」

「全くですな。」

さう云つて、木村も苦笑した。

「S子さんは、そんなこと知らないのかしら。」

「接吻以上のことは、分らないんでせう。何でも、男と女とか、へんな事をするなんて、我には[illegible]られない。殊に[illegible]、へんな[illegible]

をするなんて、馬鹿々々しくて、考へられないと、黒川に云

ですよ。」

「一月も、一しよにゐて、それぢや黒川が、ぢり〳〵したのも[illegible]ね。」

それを聞くと、木村は、むしろ黒川に同情した。それにしても、S子のやり方は、どうにも考へられなかつた。それは處女の性慾に對する潔癖だけだとは思へなかつた彼女は、恐るべき戀愛理想主義者なんだらう。彼女は、戀愛から凡て性慾的なものを拒否してゐたわけなのだ。彼女が、最初大膽に黒川の蚊帳の中には入つて行つたのも、相愛する男女間には、接吻以上のものが、存在することを、否定してゐればこそだと思つた。だから、彼女にとつて、愛人と一しよに寢ることは、公明正大なことだつたのかも知れない。

然し、木村はS子の態度を、心の中で非難せずにはゐられなかつた。あまりに夢想家すぎると思つた。また、それほどプラトニックなら、なぜ同棲などするのかと思つた。そんな態度で、同棲されたら、男の方はやり切れないと思つた。殊に、黒川はどこか超然とした所があつて、性慾的に露骨な要求などする男でなかつた。

それだけ、黒川が默々として一月餘も辛抱したことを考へ、黒川に

接吻[illegible]ずに[illegible]

[illegible]日に、自殺するとき[illegible]の中に、一しよに死なうと思へば死ね

ら、た[illegible]女男が木村に狙はれたと云ふ意味が出[illegible]
は到底考へられなかつた。たゞ、森田の對女性のゴシ[illegible]

「勿論ですとも、先生。」

S子は、赤くなつて抗議した。S子はやがて、

「妾、いつ死んでもいゝと思つてゐましたけれども、これぢや一寸死ねませんわね。そんな時の用意に。」

と、苦笑しながら、歸つて行つた。

木村はいやな噂が立つまゝに、S子その人さへ疎ましい氣になつたが、しかし女性の中で、一番非性慾的な彼女が、木村のさう云ふ噂の相手を勤めてゐるかと思ふと、おかしくもあれば可愛いさうでもあつた。

むろん、その事は新聞には出なかつた。また出るべきものでもなかつた。しかし、その後一年位は、その噂は尾を曳いて、彼にいろいろな災害を及ぼさずにはゐなかつた。

もう、一つのT女史との噂も、可なり根強い噂だつた。三四年來、木村の身につきまとつてゐた。一體どこからどんな風に、そんな風な噂が起つたのか木村には見當がつかなかつた。

木村が、新聞記者をしてゐたとき、T女史は、初めて處女作を發表した。そのとき、木村は記者として訪問したことがある。そのために、木村はT女史に好意を持つてゐたことは、たしかである。

だが、その後、T女史の良人が、死んだとき、木村はもう文壇に出てゐたが、その良人とも知合であつたので、特別に、悔みの手紙を出した。ところが、その手紙に女史は返事をくれなかつた。木村は、何かの手紙が、相手の心を傷けたのではないかと思ひ、またさうでないのに返事をくれないのは、失禮だと思つたので、少し氣まづい氣がした。

その後、ある婦人雜誌の合評會で、幾年振かでT女史に會つた。彼は、何だかT女史の猫撫で聲が、作り聲のやうに、きこえて、ちつとも好感が持てなかつた。だが、そんな會合で、二三度會つてゐる内に、決してそれが、作り聲でなく、また決して氣取つてゐるのでないことが分つたので、彼はまた好感を持つやうになつた。

あるとき、女史は單行本の出版のことで、木村に相談旁々助力を求めて來た。そんなことは、女性に對する禮儀だと思つて、欣んで助力した。その後も、文壇的な會合で、年に一二度顔を合はすだけだつた。それだのに、木村とT女史との噂は、いつの間にか、文壇のゴシップの重な一つになつてゐるのだつた。

そのうち、木村の助力したT女史の單行本の出版記念會をすることになつた。木村も、むろん發起人の一人でテーブルスピーチをやつた。その會が、果てゝ後、木村の友人のKや、その本を出版した雜誌社のY氏など三四人である料亭で酒を飲んでゐた。すると友人のKが

「君は、T女史と親しいと思つてゐたが、今日の會で窺がはれた

よ。僻しければ、發起人になつて、あゝのめゝ〜テーブルスピーチなどは出來ないからね。」

と、云つた。木村は、頼みに思ふ友人のKまでが、そんなゴシップを信じてゐるかと思ふと、ゴシップの魔力は、金をも溶かすと思つた。

「馬鹿なこと云つちや困るよ。君まで、そんなことを疑つてゐたのか。」

「うむ、君とT女史とは丁度似合ひだから。」

「馬鹿馬鹿しい！Yさん、あなたもそんなこと思つてゐましたか。」

木村は、救ひを求めるつもりで、Y氏に訊いてみた。すると、Y氏も、

「私も、さう思つてゐました。」と、答へた。木村は、助からないと思つた。

その後も、彼はさう云ふ噂が、づーと續いてゐることを何かの機會に知つた。噂と云ふものは、一度流布されると容易に消失するものではなかつた。その噂を初て、聞く人にはそれは、新しい刺激になるのだから。木村が、何等かの意味で、世人の興味をつないでゐる限りは、木村に關する噂も、また消失するものではなかつた。

だが、木村とT女史との噂は、木村の友人森口の自殺を機會に、今度はまた奇怪な形を取つてしまつた。

森口は、自殺するとき遺書の中に、一しよに死なうと思へば死ねる女があつたと書き殘してあつた。新聞記者は、一齊にその女が誰であるかを、知らうとして狂奔したらしい。しかし、戀愛や情事が多少あつたにしろ、さう云ふことを秘するに巧みであつた森口の事だしそれに、本人が死んでゐるのだから誰が逆立したつて分るわけのものではなかつた。

だが、さう云ふ狂奔の飛沫が、木村の身に及んで來ようとは、夢にも思ひ及ばなかつた。その飛沫と云ふのは、森口は、木村とT女史を爭つて、破れたため死んだと云ふ噂だつた。

さう云ふ噂が立つてゐることを木村が、耳にしたときは、木村の知人の二三人は、

「あゝその事なら、僕の所へ新聞記者が來ましたよ。しかも、森口さんのお葬式から歸つて來ると待つてゐましたよ。」

とか、

「その事でY新聞の記者は、わざ〳〵房州までT女史に會ひに行つたさうですよ」

とも云つた。

森口の遺書の中の、一しよに死んでくれる女があつたと云ふことから、なぜT女史を木村に奪はれたと云ふ意味が出て來るのか、木村には到底考へられなかつた。たゞ、森口の對女性のゴシップを根掘り葉

掘り探してゐる中に、例の創作的天才のゴシツプモンガーが、T女史を木村に奪はれたと云ふやうな奇拔な思ひ付をやつたのに違ひなかつた。

木村は、自分自身T女史と、二人ぎりで歩いたことさへなかつた。まして森口が、公會の席以外でT女史と會つたといふことさへ考へられなかつた。

「そんなこと云つて、森口は個人的にTさんと會つたことがあるのかい」

と、木村は、森口ともごく親しい友人に訊いて見た。

「それは、あるさうですよ。Tさんの本の會に森口さんが、出席したのでそのお禮に來たさうですよ。」

「だが、僕は森口は、T女史のやうなタイプの女を好きだと信じられないよ。」

「ほんとうですね。」

その友達はさう云つて苦笑したが、木村は凡てが、滅茶苦茶なやうな氣がした。何の條理も根據もない所から、濛々と立ち込める妖氣が、自分を襲ふ淫雨となつて不快に降りかゝつて來るやうな氣がした。しかも自分でどんなに不當、不滿に思つても辯解の餘地も機會もないのだつた。

森口の清麗な遺書の一句でも、正當に理解してくれゝば、友人と間に、そんな不快な愛慾鬪爭があつたかどうかは、日輪を指す如く、ハッキリ判りさうなものだつた。それが、ゴシップになると一切出鱈目になつて理屈も道理も無くなつてしまふのだつた。

一體、誰がさう云ふことを考へ始めるのか、それは到底訊ねるべくもなかつた。そんな噂をしてゐる人の背後には、茫漠たる人間の連りがあり、そのはるか彼方に、噂の出所があるのだつた。いや、實際そんな決定的な出所などは、無いのに違ひなかつた。文壇人を、一人一人、虱つぶしに訊いて行つてもそんな噂を始めたと云ふ人はないに違ひなかつた。しかし、大空の中の星雲が、こり凝まつて天體を作るやうに、ゴシップの小さい細片が友を呼び類を蒐めて、だん／＼大きくなり、遂には有力な新聞社を動かし、猛然として木村に殺到して來るとしか思へなかつた。

木村は、その噂を耳にして、憤つて見ても結局どうにもなるものでなかつた。彼は、いら立つて來る心を抑へてぢつと時の經過を待つてゐる外はなかつた。彼の友人の間を驅け廻つてゐたゴシップの使徒達は、森口が死んでから、十日目位にやつと、木村の前に現はれた。それは、木村とは特別の關係のある○新聞の記者だつた。

「あなたと、森口さんとがT女史を爭つたと云ふ事を御存じですか。」

「知つてゐるとも。」

「どうお考へになります。」

「馬鹿馬鹿しくて、辯解する氣にもなれないね。」

「しかし××では、明後日あたり書くらしいですよ。

××と云ふのは、都下でも屈指の新聞だつた。

「何を根據にしてそんな事をかくか。僕は書くわけはないと思ふ。」

「何でも、世間では森口さんの貴君宛の遺書の中にその事を精しくかいてあると云つてゐるんですよ。どうです、貴君の方で、先手を打つて、その遺書を僕の方で御發表になつたら、さうすると貴君のお疑ひも、すつかり晴れるわけですな。」

その頃、森口の遺書の發表について、各新聞社の間に競爭があり、少しでも違つた遺書を發表しようとして、お互にあせつてゐるときだつた。木村は、この記者が木村をゴシップで脅迫して、木村の遺書を自分の新聞で發表させようとする露骨な意志を、ハッキリと感ぜずにはゐられなかつた。彼は、名状しがたい怒りで胸がわくわくした。森口の木村宛の遺書は、何の秘密もないものだつたが一體遺書なるものは私書中の私書であると思つたから、木村は新聞などに發表すべき性質のものでないと初から思つてゐた。

「馬鹿なことを云つちや困るよ。そんな出鱈目な噂を否定するために遺書なんか發表しないよ。」

「それでないと、世間はいつまでも貴君を疑ひますよ。」

木村は、むらむらして來て、相手を撲りつけたいやうな氣持になつた。そんな荒唐な出鱈目な噂を打ち消すために、なぜ友人の神聖な遺書の發表を強いられるのか。彼は、怒りのために全身を賭しても、ゴシップモンガーと戰ひたかつた。しかし、自分の前に坐つてゐる新聞の記者は、その手先の、また手先のまた手先の、殆ど何百人目かの手先であつた。彼が、戰ひたい怨敵は、はるか彼方の雲の中の安全地帶にゐるのだつた。いな居ないかも知れないのだつた。

むろん、T女史との噂も新聞には出なかつた。たゞ、無責任な雜誌などが、彼を傷ける露骨な目的で、書きたてた。さう云ふものを相手にすることはゴロツキと喧嘩するやうなものだつた。彼は隱忍した。

さう云ふ奇怪な噂が立つことは、木村の不徳の致すところもあつた。木村は、むろん李下に冠を正さないと云つたやうな方正の君子ではなかつた。李下に冠を正すことも、ないではなかつた。たゞ、彼は他人の植ゑつけた李上の實を盜んだり、むやみに枝を折つたりするやうな不德不義はしないつもりだつた。

しかし、噂の發生する機會と原因とは[illegible]

い。

彼は、その年の暮に關西へ旅行したことがある。發車前十分頃に、寢台車に乘り込むと、もう澤山の人が乘つてゐた。ふと、氣がつくと、自分と筋向ひの寢台に×××社の婦人記者のUさんが乘つてゐた。三十に近い人だが、美しい人だつた。

「どちらへ。」

「社の大會が名古屋にありますので、その準備に參ります。」

木村は、Uさんと割合懇意だつたので、いろ〱な話をしてゐた。すると、發車が、九時過ぎの列車だつたから、ボーイは發車前から、せつせと寢臺を作つてゐた。やがて、Uさんの所へも來て

「寢臺を作りますから」と、云つた。Uさんは、席を逐はれて立ち上つた。木村はそれを見ると、

「此方へおかけになりませんか」と云つた。木村は、寢臺の一區劃へ一人で坐つてゐたのである。

「ぢや、失禮させていたゞきますわ。」

と云つて、Uさんは氣輕に木村の横へ來て坐つた。

車内は、可なり混雜してゐた。ふいに、木村はその中で挨拶された。

「木村先生ですか。どちらへ。」

「一寸關西へ。」

それは、高橋と云ふ出版屋の主人だつた。

木村は、Uさんが横にゐるので、つまらないところを見られたと思つた。しかし、この人が一しよに乘つて行くのだつたら×××社のUさんだと云へば、すぐ誤解を解いてくれるだらうと思つたので、

「あなたは、どこまでです。」と訊いた。

「いや私は見送りなのです。たしか、この寢台車に乘つた筈なのですが、ぢや失禮します。」

と云つてその人は、あわたゞしく奧の方へ、は入つて行つた。

木村は、あゝまたゴシップだなと思つた。しかし、ゴタ〱してゐる發車前の寢臺車の中で、疑つてゐないかも知れない相手に、殊更らしく辯解するわけにも行かなかつた。そんな馬鹿氣たことが出來るわけもなかつた。しかし、この出版屋の主人が、その目擊した事實を話せば、どんなゴシップの種にでもなるのだつた。

名古屋で降りるUさんは、寢台には入る前、

「ぢや、明朝は早いから、お目にかゝりませんから」

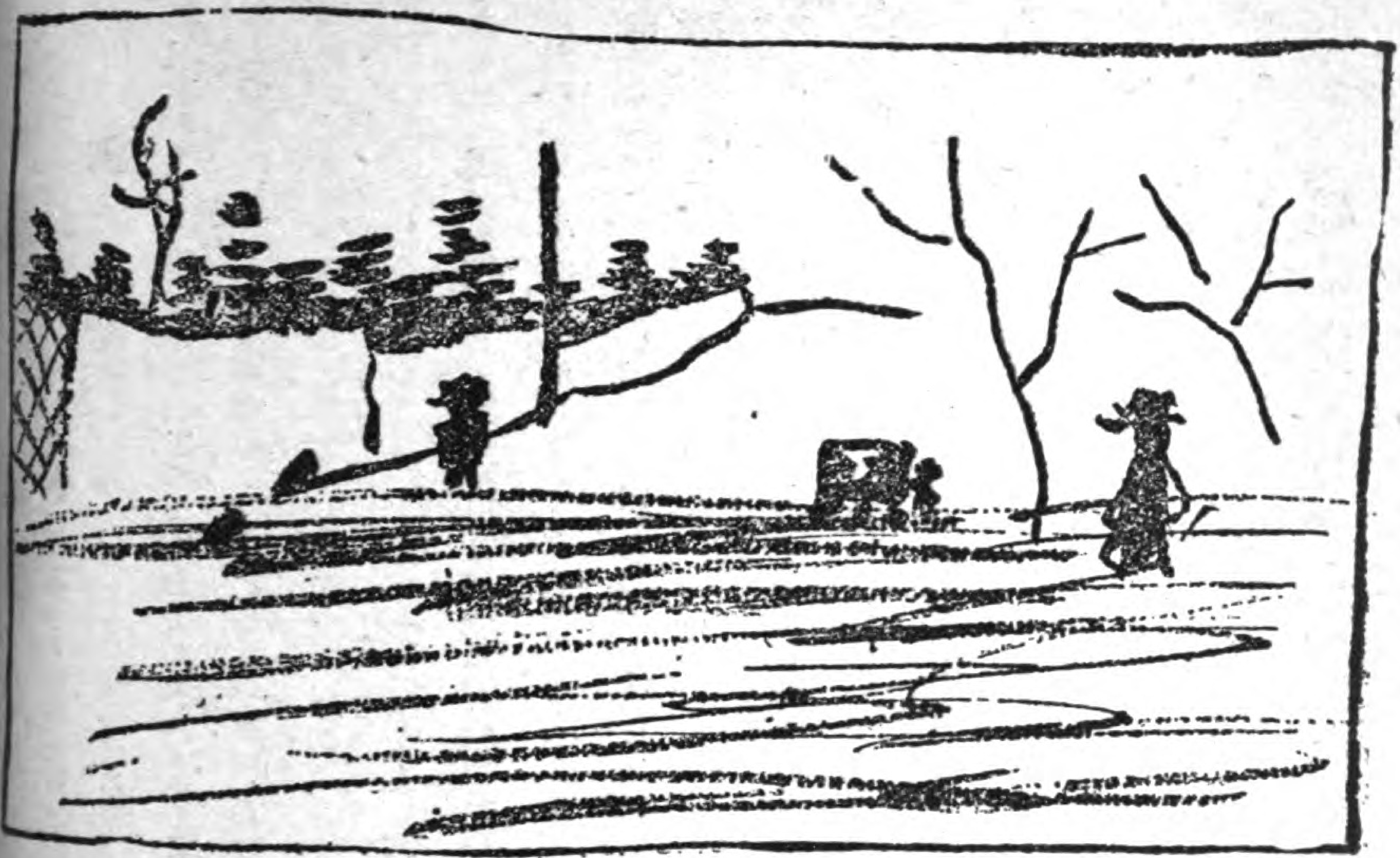
と挨拶した。

その事があつてから、三月位經つてからだつた。彼の友人の一人が云つた。

「××劇の連中に會つたら云つてやりましたよ。座長に[illegible]小説家と云ふものは、あんなにいゝ女が出來るものかしら。東海道の汽車の中で、木村さんが素破らしい女と一しよに乘つてゐた、そしてその女は、木村さんの横で始終だまつて本をよんでゐるのを見た。しかもその本が何だと思ふ、「ニイチエの研究」と云ふ本たんだよ。そして木村さんが、京都で降りるとだまつて後からついて行つたよ。小說家は羨しいな。」と云つてゐるさうですが、本當ですか」と、聞いた。

さう云へば、木村は××劇の篠田と、一しよの汽車に乘り合はしたことがあつた。そのときにUさんと話してゐるところを見られたのかも知れなかつた。しかし、Uさんならば、名古屋で曉の裡に、降りた筈だつた。

木村の横に坐つてゐて、始終「ニイチエの研究」を讀んでゐたと云ふ、俳優が感心するほどのいゝ女は木村には一向見當がつかなかつた。そんな女性が乘り合せてゐたのなら、木村も左右を顧みて、一目見て置けばよかつたと思つた。



柳屋

木下杢太郎

人物

柳屋甚兵衞。
其妻。
二男巳之吉。
その娵。
お才（甚兵衞が長男丑之介の娵）。
宗庵　お才の父。
妙光寺日遠（甚兵衞の弟）。
兵助（柳屋の下男）。
その他賓客。

舞臺に現はれざる人物

丑之助（法名同宿コスメ）。
牛兵衞（南蠻寺の下男）。
その他伴天連。

時

天正二年（西暦千五百七十四年）初夏。

處

京都下京「柳屋の町」なる柳屋の奥庭。右手にはやや高き土の牆。正面には間つづきの座敷。左手には木戸。其他木立、敷石、泉水など程よき設にてあるべし。

第一景

主人。兵助。

主人。これは此家の主、柳屋甚兵衛です。今日は次男めの祝言の披露に客など申受けてござるに、隣の南蠻寺が朝から一段と烈しう鐘を撞き鳴らし、さもさもこちを嘲弄いたすげに見えて、いまいましい事でござる。あの南蠻寺の坊主どもには日頃恨がござれば、何か一つ復讐を致いてくれうと存じて、ちつと席を外いてまゐつたが、とんと好い才覺も浮び申さない。召使ふ者を呼び出いて、一つ談合致いて見よう。兵助居るかやい

兵助。さても頼うだお方の、せはしないことでござる。明けても兵助、暮れても兵助。やい、兵助、賓客が揃はぬによつて呼うでまゐれ。やい、兵助、門前の見物がうるさいによつて追ひ立てい。兵助、兵助と、[illegible]に心得ておりやらいな

主人。兵助居るかやい。

兵助。何とせうぞ。聞かぬふりをせうか。

主人。兵助居るかやい。

兵助。ちらと見られたさうな。返事をせではなるまい。——はあ。

主人。あるか。

兵助。お前に。

主人。汝を呼び出いたは別の事でもない。隣の南蠻寺の坊主どもの憎い餓鬼なことは汝も好う知つておりやらう。今日はあの寺の同宿とかいふ者に住み込うだ長男の丑之介に見せしめに、次男巳之吉が婚禮をば殊の外に華々しう取り行うたが、それと知つてか、隣の南蠻寺でも今日は一段と烈しう鐘を撞き鳴らしておりやる。こちが謡を唱へばあちではけたたましい笛を吹き、こちが小唄唄うて舞へば、あちでも一齊にうとまし經など念ずる。餘り腹が立つ間、何か一つあたを致いてくれうと思うが、好い思案は無いか。

兵助。さればその事でござる。わたくしもいまいましうてなりませぬ。何がさて、頼うだお方に好い思案がござらぬに、わたくしらに好い思案があらう筈はござりませぬ。

主人。いつも垣根越しに口論致いても埒が開かぬ。今日は、こちには腹をよる程をかしうて、あちには骨身にこたへる程な悪戯をしてくれうと思ふがどうぢや。

兵助。あの寺の伴天連どもは名たたるしたたか者でござれば、一通りの事ではかなひ申すまじい。

主人。えいえい、汝までも伴天連どもの贔屓をすると見える。憎い奴ぢや。

兵助。免いて下されい、免いて下されい。——あゝ好い事がござりました。

主人。何ぢや。

兵助。何がさて、妙光寺の和尚さまは一番の智慧者でござれば、相談をかけられたが好からうと存じまする。

主人。それも左様ぢやの。それなら呼うで来ておくりやれ。

兵助。畏まつてござる。(兵助退場。)

第二景

りやるらう。何ぢや、とんび、おんねす、あぶらげぢや。これはをかしな事を聴くぞ。どみの、でうすのさらつぼう。あの奇しい題目を聴くと、胸がむかむかと致いてくる。

第三景

主人。兵助。妙光寺。

妙光寺。兄ぢや人が呼ばせられたは何事でござるぞ。

主人。好うこそ来てくれさしませた。酒中をわざわざ御呼び申したは、如何にも慮外な儀でござるが、聊か仔細があることでござる。わごれうも好う知つての通り、南蛮寺の伴天連どもが、われ等が丑之助を取り込うだによつて、今日は丑之助に見せびらかいてくれうとて、次郎めの婚禮も殊の外に華々しう取り行うたが、それと知つてか、隣の寺でも、今日は一段と烈しう鐘を撞き鳴らし、こちが謡を唱へば、あちではけたたましう笛を吹き、こちが小唄唄うて舞へば、あちでも一斉にうとましい經など念ずる。あのてでんらうだんごろ、とんび、おんねす、あぶらげなどと申すお經は、もはや十年餘りも聴いて耳に慣れておりやるが、今日はまた殊の外に氣に障つてならぬ。餘り腹が立つ間、何か一つあたを致いてくれうと存ずる

懸者おやらいふによつて、好い工夫もあらうかと、お呼び申したのでござるよ。

妙光寺。いやいやその儀でござるか。あの南蠻寺の伴天連どもは實、横着な天狗どもでござる。丑之助めも、折角引き受け申したによつては、何とか致いて改心せしめうと存じ、あれが身の宗庵殿とも談合いたし、いろいろに苦辛致いてござるが、結局あのやうの仕末で、何とも申しわけがござらぬ。愚僧も南蠻寺の天狗どもには恐がござれば、今日は一つ人中で恥をかかしてやりませう。いや好い事がござる。

主人。何でござるぞ。

妙光寺。これより皆々打揃うて押しかけ行き、知る限りの悪態をつき、村井殿へ訴訟いたすきつかけを求めて來るが一段と好うござらう。

主人。いつもは男どもが垣ごしに口論いたすが、とんと埒が開き申さぬ。それがしもこちから押しかけ往つて罵りくれうと考へたが、兵助が申すに、隣の伴天連どもは名たたるしたたか者でござれば、一通りの事ではかなひ申すまじいといへば、何分にも用心致さずばなるまい。

兵助。この中も一向宗の和尚殿が宗論に負けて、すごすごと追ひ立てられておりやつたと申せば、輕忽にはまゐりますまい。

妙光寺。なに、一向宗の者しも[illegible]説伏[illegible]おやよう

兵助。また楽野の東堂さまはいつの間にか說き伏せられて今では吉利支丹になつたといふ噂でござる。

妙光寺。その噂は愚僧も聞いたが、あれはもはや老ばれてあつたおやに。

兵助。いかさま、妙光寺さまがお出であらば、伴天連どもも歯がたたう申すまい。

妙光寺。いやいや、愚僧は出家の身で、[illegible]あつたとたれ[illegible]殿の[illegible]のほども恥しい。愚僧は[illegible]に[illegible]あひた、兄ぢや人が御出馬めされい。

主人。それがしは長年隣に住んで伴天連どもの惡態もよう識つておりやれば、思ひ切つた罵詈も出來まいほどに、今日はわごれうの御出馬を願はう。

妙光寺。何はさて賓客たちを呼うで、とくと相談いたさずばなるまい。

主人。たかなか。それが一段と好からう。兵助、またうたに行つて、賓客たちをここに請じてくりやれ。

兵助。畏まつてござる。（退場。）

第四景

主人。お聴きやれ、てでんらうだんごう、てでんらうだんごうと唱へておりやる。何の事でおりやらうぞ。

妙光寺。おんあびらうんけんそばかすと云つたやうなことでござらう。

第五景

甚兵衞の妻、長男丑之介の娵、娵の父宗庵、次男巳之吉、その新婦、其他五六の人々或は座敷の方より、或は庭傳ひに登場。兵助及び前景の人々。

主人。方々は好うこそわせられた。酒宴の半ばを御妨げ申したは、眞突慮外の儀でござるが、是れも一つの醉興ぢやとおぼしてお聴き下されませい。今日は伜巳之吉の祝言の儀も事なう濟み、われ等夫婦もこよない滿足でござる。それにつけても思ひ出すは、長男丑之介の事でござる。幼い時からかよわい性であるによつて、われ等も殊の外に手を盡して育て上げてござるに、いつの間にか南蠻寺の伴天連どもになじみ、漸く執心の樣態ある間、十五歳の折兄の女を貰ひ受けて夫婦に致いてござる。娵は眉目形も美しいばかりでなく、心出家も致つて殊勝で、兩人も仲好い樣子ぢやにより、われ等も大に安堵しておりやつた所、彼が十七歳の折、思ひもかけず、ひそかに[illegible]いたし、その[illegible]から[illegible]れて堺に在つた伴天連どもの許に匿[illegible]れ申した。聞けばその折邪宗の灌頂をも受けたとでござる。

主人妻。それも皆疊屋半兵衞めが手引でござるよ。

主人。半兵衞めも憎い奴でおりやる。今も南蠻寺に住み込うでおりやる。倅めをば、人を堺に遣はして、やつとの事で取り戻してまゐつたが、それよりは家の生業も致さで、朝夕一間に閉ぢこもつておりやつた。或朝そつとその間を窺き見ると、怪しい畫像の前で禮拜しておりやる。餘り腹が立つ間、その珠數を奪ひ取つて火中いたし、足蹴打擲いたいたが、一向に性根が直らぬげに見えたによつて、尼が崎なる妙光寺に遣はし、ここな日遠殿に教化を頼うだことでござる。

妙光寺。丑之介は愚僧にとつて甥でござれば、一年が程寺に留め置き、こなたに見える舅宗庵殿と心を合はせ、いろいろと折檻教訓いたいてござるが、毫も效がござらなんだ。

宗庵。兎角近頃は時勢が惡うござるよ。わかい者が何やかと理窟を言うて、年寄をば頭から馬鹿にしておりやる。おのが家の商賣は打ち捨てて、町内の事 講中の事ばかりに肩を入るる。兎角新しいものが好きで、どこの乞食とも分らぬ異國の坊主などに迷うてござる。

客。不思議な世でござる。われ等壯き折は 女子少人にこそ迷へ、佛法、宗門などには隙はなかつたことでござるに。

主人。いやいや、[illegible]

身でござれば、早う家督を譲りたう存じてあつたに、いかにも遊戯な事でござる。大事な件の事でござれば、先祖より傳はつたる家屋敷は格別、それがし一代で興した身代は何に使はうとも苦しうない。又家の生業がいやならば何なりと好うだ商を致せ。そなたの嫁は眉目形も美しく、心も殊勝である間、あちこちで望むを、たつてそなたに請ひ受けたに、それをも捨て、親をも遺して、邪宗の坊主の許に走るは沒義道な事ぢやと、いろいろに言ひすかし申したが、毫も改心の様態が見えないのみか、六十兩の金子をさらつて、堺へ逃げゆき申した。あとで聞けば同宿とかいふ役僧になつたとでござる。宿のものもこよない腹立で、わが子ながら鋸で首引かるるが見たいと口癖に申してござる。そのうち物の二年も經つたかと存ずるが、御承知の通り、都の騒動も治まり、又伴天連どもが都に舞ひ上り、處もおりやらうに、一軒置いた隣に大きな寺を建て、ここな庭からは隣合せになつておりやる間、日に夜にうとましい唱歌、看經の聲が聞えて、そのいまいましい事は、何とも申し上げやうのおりないことでござる。

客。いかにも今日一段にさわがしいやうでおりやるよ。

主人。その通りでござる。されば丑之介への見せしめに、次男巳之吉には、京中を捜いて、美い嫁を求めてござる。分に過ぎたる衣裳調

度も、それ故ぢやと御勘氣お下さりませい。

妙光寺。柳屋はけちぢやといふ評判ぢや。たまの客人も料はおりやるまい。

客。いやいや、それは御世辭でござらう。今日の御振舞には一同こよなう滿足いたいてござる。

主人。それと知つてか、隣の寺でも、今日は朝より一段と烈しう鐘を撞き鳴らし、こちが謡を唱へば、あちではけたたましう笛吹き、こちが小唄うて舞へば、あちでも一齊にうとましい經など念ずる。餘り腹が立つによつて、一つあたを致いてやらうと存じ、妙光寺殿にも相談いたいた所、これより皆々寺に押しかけ行き、人中で恥かかすが好からうと申さるる。

客。それは一段と面白い思ひ付でござる。いざこれより押しかけてまゐりませう。

宗庵。あの寺の伴天連は名たたるしたたか者でござれば、一通りの事ではかならまい。

客の二。この中も一向宗の和尚殿が宗論に負けて、すごすごと追ひ立てられておりやつたげな。

妙光寺。なに一向宗の者どもは皆腑甲斐ない賣僧どもなれば、そのやうの事もござらう。

客の三。また紫野の東堂さまはいつの間にか説き伏せられて、今では吉利支丹になつたといふ噂でござる。あれはもはや還俗しておりやつた

妙光寺。その噂は愚僧も聞いたが、者ぢや。

客。いかにも、妙光寺さまがお出あらば伴天連どもも歯が立ち申すまい。

妙光寺。いやいや愚僧は出家の身で、喧嘩沙汰があつたとなれば、世間の褒貶のほどもうるさい。愚僧はここに在つて籌を帷幄の中に運らさう間、兄ぢや人が御出馬めされたがようござらう。

主人。それがしは長年隣に住んで伴天連どもの顔も好う識つておりやれば、思ひ切た罵詈も出來まいによつて、わごれうに御出馬願はう。

妙光寺。戰陣の間でも打手の大將と軍師とは別な者でござる。愚僧が出馬いたいては後詰に事闕いて堂々の陣が張れ申すまい。愚僧は後詰に控へてござれば、思ひ切つて一戰いたされませ。

客。それも尤もでござるなう。

妙光寺。宗庵殿がわきに控へてござれば心配なら行かしませ。

宗庵。それがしは如何な役をいたすでござるぞ。

妙光寺。されば愚僧が殿の陣取を書き申さう。まづ兄ぢや人を[illegible]大將ぶかやうに花嫁花婿を引連れ、伴天連どもにも丑之介にも引合はせ。

客。花嫁花婿を見たらば丑之介どのも羨ましう思はう。

妙光寺。そこがこちの附け目でござる。その時お才どのはわざと恨ましげな顔をなされませ。

お才。それは迷惑な事でござります。

妙光寺。しばらくの間の狂言でござれば、たつて我慢致されい。されば宗庵殿はお才殿を指さいて、當はお才も此度良緣あつて他に緣に遣はさうと存ずれば、向後はそちとは緣もゆかりもない。合點かと聞かしませ。

お才。これはまた滅相なことでござります。

妙光寺。いやいや、一時の狂言ぢやよ。これにて緣が戻ればこの上もないことでおりやる。

客。丑之介殿もこたびはとくと思案せう。

妙光寺。兄ぢや人には、これにて丑之介も柳屋とは緣が切れたによつて、向後は親でもない、子でもない。それでもよいかと聞かしませ。

客。いつもは親父殿があまうござつたれば丑之介殿も頭に乘り申したが、先程は殿の[illegible]ござらう。

妙光寺。なほも丑之介が躊躇しやつたら、いつぞや用立つた六十兩の金子を當座に返しめされと申されい。

客。それには丑之介殿も當惑めされう。

妙光寺。丑之介がとかうに思案するを見て、伴天連が助太刀に出やう。そこがこちの軍略でござる。赤子の死骸を嘗め、牛の血を啜る伴天連は、狼に齋く坊主でおりやらう。人の子をそそのかして金を儲ませる天狗どもは、村井殿に訴訟してまたまた京を追ふまでぢやなどと、いろいろに惡態申されい。

客。その時はわれ等の胸もわつさりとすがすがしうなるでおりやらう。

主人。てでんらうだんごうの狼と言うてくれう。

妙光寺。なほ後々の事までは今からではえ思ひ浮び申さぬ。その場その場に、愚僧がこの猫の蔭から助言いたしませう。先づ往つて來さしませ。

主人。それなら往くことにせうか。方々も合點でおりやるか。

人々。合點でござる。御同道致いませう。

人々巳之吉夫婦を先に立て、行列を作つて左手の木戸口から出て行く。

主人。それがしが音頭を取らう間、方々も高聲に唱られい。てでんらうだんごう。

人々。てでんらうだんごう。

主人。とんびおんねすあぶらげ。

人々。とんびおんねすあぶらげ。

主人。どみのでうすのさらつぼう。

人々。どみのでうすのさらつぼう。

人々退場。

第六景

妙光寺、兵助。

妙光寺。何と兵助、巧な謀でおりやらう。

兵助。今日は心がわつさりと致すでござりませう。

妙光寺。汝は梯子を持つてまゐれ。

兵助。畏まつてござる。(退場。)

第七景

妙光寺。兵助。

兵助(梯子を持ち來る。)

妙光寺。そこな猫にかけませ。

兵助。はあ。
妙光寺。見えるか。
兵助。見えまする。
妙光寺。どのやうにおりやるぞ。
兵助。疊屋の半兵衛奴がひとり庭に居りまする。
妙光寺。伴天連は居らぬか。
兵助。伴天連どもは奧の方にて勤行を致いて居りまする。
妙光寺。丑之介は居らぬか。
兵助。居りまする。
妙光寺。何して居るぞ。
兵助。弔香爐のやうなものを打ち振つて居りまする
妙光寺。さすがに今日は心が落付かぬによつて行など致いておりやる
やらう。皆の衆はまだ見えぬか。
兵助（驚）。ござりました。
妙光寺。見えたか。
兵助。見えました。
妙光寺。皆々勇んでおりやるか。
兵助。花婿花嫁どのを先に立てて、嚴しい服裝を整へて勇ましうはひ
つてまゐられました。

妙光寺。して如何いたいたぞ。
兵助。頼うだお方が物もう、案内もうと申されました。
妙光寺。誰ぞ出てまゐつたか。
兵助。誰も出てまゐりませぬ。疊屋の半兵衛めが、物もう案内もうと
は誰でおりやると出てまゐりました。
妙光寺。兄ぢや人は何と申されたぞ。
兵助。頼うだお方が、これは隣に住居いたす柳屋甚兵衛でござる。こ
のたび次男巳之吉に嫁を取り、家督を相續いたさせたによつて、披
露に罷り出でた。伴天連にも丑之介にもさう申し入れられいと申さ
れました。
妙光寺。して、如何いたいたぞ。
兵助。疊屋半兵衛が申すに、伴天連どのも、同宿コスメ殿も只今勤
行の最中ぢやによつて、あとにてさう御言傳申さうとでござりま
する。
妙光寺。ふむ、少し間が惡いぞ。
兵助。頼うだお方は、伴天連も丑之介も勤行の最中でおりやらうが、
たつて申さねばならぬ仔細がある間、是非取次めされいと申されま
する。
妙光寺。して如何いたしたぞ。

兵助。半兵衛がとかう申すにより拵うたお方は大きに立腹いたされ、赤子の死骸を食み、牛の血を啜ふ狼のやうなていいいいでんらうだんこうめとわめかれました

妙光寺。その段はまだな筈ぢやに。

兵助。半兵衛が申すに、牛の血を啜るといふ噂は紅い血ではなうて白い乳の間違でおりやる。赤子の死骸を食むなどといふことは有う筈はおりやらぬとでござりまする。

妙先寺。少し順が狂ふたげな。して兄ぢや人は何と申されたぞ。

兵助。白からうが紅からうが、血は血ぢや。六十兩を當座に返しめされいと申されまする。

妙光寺。兄ぢや人は頓狂な事でござるの。金子の事を半兵衛に言うたとて何になるものぞ。

兵助。宗庵さまが口を添へられました。血を乳ぢやと言ひ白められうとも、この中は門前に犬の骨が捨ててあつたからには、犬の肉をも食むに相違有るまいと、好い所に氣が付き申された。

妙光寺　……如何いたいたぞ。

兵助。（大聲に呼ぶ）。やれやれ、おのれ疊屋の半兵衛め、聊爾な事を言ふまいぞ。

妙光寺。しつしつ、そこから高聲に呼うではなるまいぞ。何とした事ぢや。

兵助。疊屋の半兵衛めが、あの犬の骨は兵助めが、人を陥れうと投げて置いたぢやなどと言ひ居りまする。

妙光寺。兄ぢや人に、半兵衛など相手にせず、始めよりやり直しに致しませいと合圖せい。

兵助。（小聲に）。半兵衛など相手にせず、始よりやり直しに致しませ。

隣にててゞんらうだんこうといふ聲高く響き來る。

主人の聲。これは隣に住居いたす柳屋甚兵衛でござる。このたび次男巳之吉に嫁を取り、家督を相續いたさせたによつて、披露に罷り出でた。てゞんらうだんこう。

これから後南禪寺に於ける人々の問答所々はつきりと聞えて來るが全部は解し難い。

妙光寺。申しおりやるな。

兵助。さすがに伴天連も勤行をやめて出てまゐつてござる。

妙光寺。丑之介も出てまゐつたか。

兵助。丑之介どのも出てまゐりました。

妙光寺。兄ぢや人は豫め定めて置いた通りに申さるゝか。

兵助。拵うた方は定めた通りに申されまする。言葉の好う分るウルガン伴天連が、それはお目出たうござると申されました。

妙光寺。丑之介はさも羨ましげな顔をしておりやるらう。

兵助。さう申せば、さも羨ましげな顔をしておりやりまする。

妙光寺。段々とこちの思ふ壺にはまつたぞ。宗庵殿も申さるるか。

兵助。申されまする。お才も此度良縁あつて他に嫁に遣さうと存ずるが、さすれば向後はそちとは縁もゆかりもない、合點かと申されました。

（[illegible]）——

妙光寺。丑之介はさすがにびつくり致いたらう。

兵助。さう申せば、びつくり致いたやうにも、また致さないやうにも見えまする。

妙光寺。何とあるぞ。

兵助。丑之介殿は、それは忝けないことでござる。わたくしも日頃それればかりが氣懸でござつたに、此度良縁あつて他家へとつがれるとあれば何よりの事でござると申さるる。

——（間）

妙光寺。憎いやつぢや。兄ぢや人は、向後は親でもない、子でもない、それでも好いかと聞かれたか。

兵助。その通りにおしやりました。

妙光寺。丑之介は合點ぢやと申したか。

兵助。合點ぢやとおしやりました。

妙光寺。さてこそ[illegible]六十兩、六十兩と[illegible]顔に[illegible]。

兵助。六十兩、六十兩。

妙光寺。兄ぢや人は如何申されたぞ。

兵助。頼うだお方が申さるるには、就いてはいつぞや用立てた六十兩の金子を當座に返しめされい。

妙光寺。丑之介は當惑しつらう。

兵助。丑之介殿が申さるるには、家の父親が因業な商してまうけた金なれば、エグレシヤに喜捨いたいたらば、その科を償はうと思うで、金を持つてわせ申したが、昔イタリヤ國のサン・フランシスコ樣といふ聖人は、親の金なれども、一旦エグレシヤに喜捨した金をまた返されたと聞いて、まだそのままにしておりやるによつて、只今返却いたしませうと奥に入られました。

妙光寺。間の惡いことぢやの。

兵助。丑之介殿が奥から金の嚢を持つて出でられ、頼うたお方に返されました。これにて世のつながりからも離れて心もわつさりとしたれば、一層信心いたさうと申さるる。

妙光寺。ふてぶてしい奴ぢやの。

兵助。この世の契りははかないものでござる。さらば父樣、兄ぢや人、またお才殿、弱殿と挨拶せらるる。……あいや、あいや、飛ん

妙光寺。何ぢや。何ぢや。

兵助。お才殿が狂氣のやうになつて、そらごとぢや、そらごとぢや、みんなそらごとぢやと喚かれまする。

妙光寺。何としたことぢや。

兵助。わたくしがわきにまゐるなどと云ふ事はみんなそらごとでござります。それは皆叔父の妙光寺樣が仕組んだ狂言でござりますと申さるる。

妙光寺。えい、えい。

兵助。その上あの犬の骨は兵助が投げたものでござりまするなどと口走られる。

妙光寺。困つたことになつたぞ。それぢやによつて、女子と小人は近づけ難しと申すのぢや。

兵助。お才殿が、方樣がわたしをお厭ひやるなら、わたしも吉利支丹になつて尼寺に往きませうと申して、あれ、あれ、あの通りに、髮を切られてござる。

妙光寺。えいえい、いよいよ困つた事になつたぞ。

兵助。疊屋の半兵衞が好い氣になつて罵つて居りまする。尼ヶ崎の妙光寺の日遠といふ坊主は腹黑い坊主ぢや程に、好からぬ事も企まう。赤子の死骸をおのが寺から掘り出いてエグレシヤの門に投げ入れたは、あの[illegible]

妙光寺。えいえい、憎い奴な。好し、好し、かうも申されい。疊屋の半兵衞は片居で、眉毛も落ち、おのが女房にも愛想盡かされたによつて、伴天連に取り入つて寺に住みかうだとな。

兵助。疊屋の半兵衞は片居で眉毛も落ち、おのが女房にも愛想盡かされたによつて、伴天連に取り入つて寺に住み込うだ。

妙光寺。如何いたいたぞ。

兵助。半兵衞めがどうやら和尚さまの御聲を聞き分けたげに見えまする。

半兵衞の聲。おのれは町内でも馬鹿の兵助で通つた男ぢやに、今日は何かとしやべり居るは、後に妙光寺の腹黑が憑いてゐる故であらう。あの坊主は誰知らぬ者のない破戒僧ぢや。

妙光寺。何ぢやと。兵助、そこ退きやれ。自らが出て懲してくれうず。(梯子を登る。)やい、片居の半兵衞め。千兵衞萬兵衞有る中に、片居の半兵衞とはおのれが事ぢや。眉毛の鍋炭を落してこい。

半兵衞の聲。破戒僧が首出いたぞ。

妙光寺。やい。おのれでは埒明かぬ。ピレラでもウルガンでも呼うでこい。我邦の神佛を譏る外道どもは、ブラックリストに載せて、村井殿に訴訟してくれるぞ。

牛兵衛の聲。村井殿はそのやうの訴訟は取り上げ申さない。織田殿の御許しが出て建てたエグレシヤぢやによつて、下京の衆が村井殿に讒訴した時も、お取り上げがなかつたぢや。

妙光寺。それなら赤い邪宗ぢやと言うて和田殿に申し上げう。

牛兵衛の聲。和田殿なら一層だめぢや。このエグレシヤの御許しも和田殿の肝入ぢや。

妙光寺。それなら織田殿に直訴せう。

牛兵衛。直訴が出來るなら直訴して見やれ。女犯の科が顯はれて汝が首が繋るまい。

妙光寺。何と。

牛兵衛の聲。女犯の科で首を切られた法華坊主が幾人あるか汝も知つて居らう。

妙光寺。たわけた事を申すか。

牛兵衛の聲。何のたわけであらう。たつてたわけと言はば、汝の科の證據をあげうか。

妙光寺。あのやうな下司と口論したら身の恥であらう。（梯子を下る）。

中にて牛兵衛の哄笑する聲。

第八景

左手の木戸口の外に捕の人々のがやがやと喚き乍ら歸り來る聲する。

妙光寺。事面倒になつたぞ。兄ぢや人が恨まう程にここにおりやらぬが好からう（退場。）

兵助。和尚さま、お待ち下さりませ。（退場）。

第九景

巳之吉夫婦を先に、泣き叫ぶお才、當惑げな宗庵、怒る甚兵衛など、捕の人々秩序なく左手より歸り來る。

お才。恨めし事でござりまする。

主人妻。そなたは餘りにも思ひ切つたことかな。

宗庵。困つたことぢや。

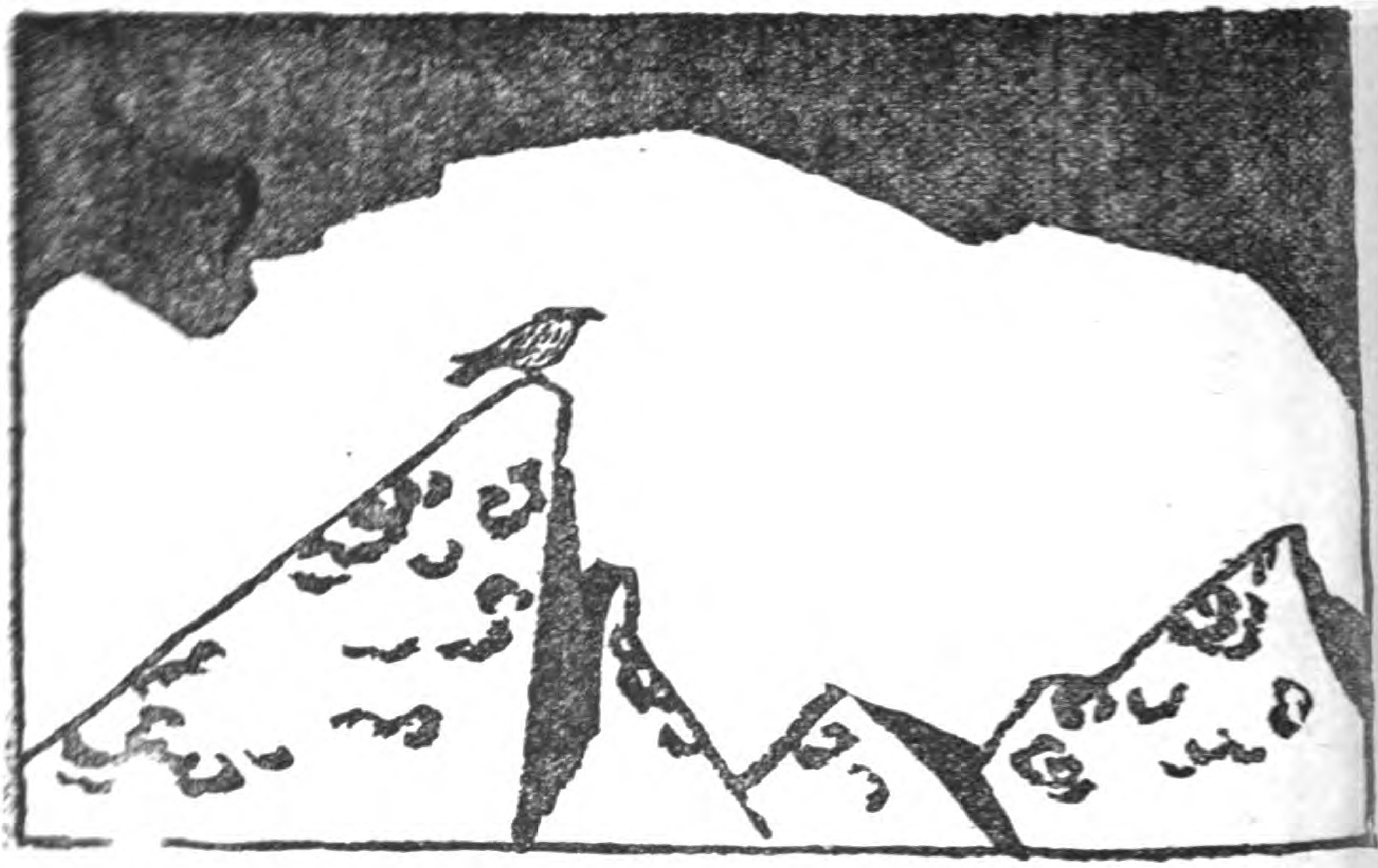
主人。妙光寺はどこ許に往つたぞ。兵助は居ぬか。兵助は居ぬか。

客。後詰は如何いたいたぞ。後詰は如何いたいたぞ。

幕

註

是れは合理的なる舞臺装置を以てせる狂言の試作である。詞は現代の關西語を用ゐたかつたのであるが、今急にはさうする便宜がなかつたから、假に不便なる狂言風の言葉を借りた。筋は大體史實に據つた。（獨逸語譯本ルイシュ・フロイシュ「日本史」四五二—四五三頁參照）



殴る

平林たい子

(一)

日露戦争が始まらうとする頃であつた。

十月がすぎると藁の上に雪が降つた。白樺の幹は目立たなくなつた。こまかい枝から霙の様な雪がさら〳〵辷り落ちた。空一面灰色の雪が落ちて来た。地面に近くなると霙の様に白くなつて落ちた。屋根の庇は重くなつたせき板の隙間からきらゝの様に光つて吹き込んだ。

重くなつた屋根の下にしめつた炬燵があつた。爪に黒い垢をためて、馬鈴薯のこほるのを心配しながら冬を越さなければならなかつた。

藁の髯の被つた雪靴は軒下に脱ぎ飛ばしてあつた。大きなのが四ツ小さなのが六つあつた。一つは雪の中にたほれ一つは籾殻の山の上にほうつてあつた。その上によくつた雪がさら〳〵積つた。

父は頭のてつぺんまでよく禿げて酒を呑んだ。赤土の崖の様に赤い皮膚が額まで落ちてゐた。松造と言つた。冷い縁側に坐つて脊を曲げた。雪の中へうすい手洟を飛

した。子供の方へ首を廻し、黒目をよせて睨んだ。それにはこちらを見るなといふ意味があつた。子供等はいぢけて、乾飯を頰ばつて膝をよぢつた。三人ともさういふわざを知つてゐた。炬燵の中で爪の伸びた足がふれ合つた。

夏納屋の前の蓆で乾して保存しておいた乾飯は鷄の糞の香がした。もみぢの様な鷄の足がはこんだ泥もまぢつてゐた。泥は、黒砂糖をまぜて噛む時には判別出來なかつた。

父は右手で椽の下の薬をがさがさ分けた。鉈で薪と一緒に切りとつた指は一と節足りない所から爪が出てゐた。それが鳶口の様に伸びてゐた。

そこにもこまかい雪が吹きよせてゐた。それを分けると、手製の酒の甕の蓋が破れる。

白い靄の様な息を鼻毛の中から吐いた。隠しておいた酒甕を椽の上まで引摺り上げた。酒は買へば高いものだ。米を糀屋で甘酒をつくると言つて糀と取り換へて來れば手數だけでうまい酒が出來る。役人に見つかる、そんな事は千度に一度もきいた事がない事だ。雪がふれば米の飯より必要な酒だ。

子供らは、學校から持つて歸つた本の表紙に鉛筆で悪戯書をして、炬燵形紙の上に乾飯をぼろぼろこぼした。父は細い鉈の刃をとつて炬燵の側まで持つて來た。また立つて行つて雪の中に水の様な手洟を飛ば

した。

子供らは黒砂糖がなくなつて我にかへつた時またいつもの事が始つてゐるのに氣がついた。雪やけの鳶口の様な爪のある手が母の耳のところに打ち下された。つゞけて皮膚の上で、皮の厚い父の掌の思ひきり乾いた音がした。つゞけて音がした。

母の細い腰には芯の出た腰紐が食ひ込んでゐた。母は狹い背を頸く動かして松造の膝を避けた。表情を忘れた顏で赤土の崖のやうな父の顏を見てゐる樣であつた。錆びたランプの吊鍵を見てゐる樣でもあつた。父は醉つた目を母の下瞼のところに据えた。そして女が自分などを問題にせずに鷄小屋の屋根に落ちる雪の音に耳を澄してゐる樣に思つた、そして團扇の樣にひろげてゐた掌を握つた。そしてなぐつた。古い木槌で堤の杭を打ち込む時のピーンと來ろ手應へがなかつた。それが物足りなかつた。母が倒れると子供は泣き出した。黒砂糖のついた口で哭いた。父は口のかけた湯呑を子供の方へ投げた。酒になつてふやけた糀が蛆の樣に散つた。子供は炬燵を出て更に大聲で泣いた。しかし、一番末の四才の女の子は泣かなかつた。低い小屏を盖くばさんだ二つの目で、下から斷念をこめて父の顏の笑を見上げて

ゐた。そして何かのはずみにいきなり父の足へ噛みついた。

父の松造ははじめて手が恐しく冷くなつてゐた事に氣がついた。そして湯呑を拾ひあげて酒を汲み出した。雪はさら／＼降つてゐた。子供らの泣く聲は家の中にこもつた。二人の男の子が泣きやんだ頃に末の女の子は急に仆れる樣に泣き出した。

二人の男の子は父を恐れた。皆が家の中にあつまつてすごす冬が早く過ぎればいゝと思つた。土間では一日中手洟と俵を編む藁の音がした。子供は手洟の音の聞えない裏口の方の戸口で、遊んだ。味噌桶のかげで、緣から雪の中へ黄色な細い小便をして面白がつた。あたゝかい小便は雪を黄色に染めて深い穴を穿つた。

末の女の子は火のついた樣な赤い髪をもつれさせてゐた。小鼻が殆んど平な顔をしてゐた。横から見ると二つの上瞼だけが平な顔のおもてに腫れ上つてゐた。二人の兄に並んでまじ／＼と父の顔を見ながらよく飯を食つた。茶碗を抱く胸がてか／＼光つて來た。父も何となしにこの髪の赤い子の目が氣になる樣であつた。この子はたしかに父を恐れてゐなかつた。それが何となく氣に食はなかつた。

新聞にはいよ／＼戰爭が始らうとしてゐる事が出た。軍艦の寫眞も出た。村には新聞をとつてゐる家は幾軒もなかつた。しかし軍港にあるもの丶所へは足止めが來た。そして村人は戰爭を知つた。

雪がとけはじめるとあはたゞしく田の畔に草が生へる。盛りあがつてとけた畔は崩れた。畔にはいぢけたはこべがはみついて生へた。家の中の生活は、畔まで運ばれて行つた。青い弱々しいはこべの莖は少し伸びて行つては根をおろした。そしてまた伸びて行つた。

母は子供を歩ませるのをもどかしく思ひ、男の兵兒帶で背負つて行つた。女の子は赤い髪で腐つた藁の香のする泥をいぢつた。松造は畔で、母を毆つた。手を振上げる時には、堤や堰の所に人が働いてゐる事も忘れてしまつた。蔵口の樣な爪のある手で鎌をといでゐる母をなぐつた。かわいた泥がぼろぼろ落ちた。女の子はどうして母が泣かないのだらうかと思つた。母は黒い暈のある目でうすく笑つた。そして落ちた櫛を拾つてさした。

女の子は土の塊を拾つて、いきなり父の方へ投げた。土は方角ちがひの、母が鎌をといでゐる水たまりの中へ落ちた。父は赤い額の下にある目でぢつと女の子を見た。そして田の草の中へ手洟を飛ばした。

むら／＼と胸にこみ上げて來る怒りを待受けてゐる樣であつた。やがて父の顔がみちて來た怒りの爲にぼんやり擴つた樣に思つた。父は近づいて來て拳を振上げた。それが打下された。それきりあとはどうなつたかわからなかつた。

―二段

―くる

白い梨の花が散ると麦の花が咲いた。皺のある葉がかくれに、星の様な花が白くぽつと咲いた。長い梅雨がやつて來た。家には金が少しもなかつた。賣る米もなかつた。子供等は紙が買つて貰へずに新聞紙を切つて習字帳をつくつた。その新聞紙さへ家にはなかつた。父は少し酸くなつた酒を呑んだ。蛆の様に粕の浮いたのを呑んだ。酒の甕の蓋を藁で掩ふことも面倒になつて來た。蓋には白い黴が生へた。母は田の水を見に行つて濡れてかへつて來た。父はそれを待受けてゐた様に何かぶつ／＼言つた。そして着換へやうとしてぬれた着物を脱いだ所を二つつゞけて毆つた。白い皮膚の下がぱつと赤くなつた。

戰爭は激しくなつて來た。一人行き二人行き日の丸の旗で送られて汽車に乘つて行つた。それが自分達の暮し向とどういふ關係があるか、それは誰にもわからなかつた。しかし、幾人か戰地へ送つてある若者の生命の事を考へるとやはり勝つて貰はなければこまると思つた。戰地から來る手紙には一つもいゝ事は書いてなかつた、腹いつぱい餅が食ひたいとか、脚氣で足が立たないとかこんな事が書いてあつた。新聞に出て來る様な勇しいものでない事だけが皆にわかつた。

八月に入つても雨がふつた。栗の實は長い棘のついたまゝ落ちて來た。稲の穂はあぶなげな白い粉を吹いた。それが花であつた。しかし、一粒かわいた畑が炒る様な晴にじと／＼雨が降つた。九月に入つても雨がふつた。子供等の傘は紙が破れた。軒からは瀧の様に雨垂が落ちた。屋根板のくさる迄がまちつて溜つてゐる様であつた、草はかんざしの足の様にたゞすう／＼伸びた。

そして先のところにぽつと痩せた穗を出した。鎌を入れる附近一帶は大阪屋といふ町の酒造問屋の持地であつた。刈取つてからに前に小作料低減の下檢分をして貰ふことを協議した。消防小頭を文句を言つたとてそれは聞入れられるものではなかつた。老人は新しい蓑やつてゐる男と顔きゝの老人とが行くことになつた。松造の家の前にぬかつたを着た。小頭は冬のマントを被つて行つた。輕い穗が雨空を向いてツン新道があつた。道の両側が稲田であつた。泥を蹴つて行つた。ツン伸びてゐた。二人は興奮してそれを指した。夕暮になつても二人は戻らなかつた。新道の稲田の上に霧がおりて一時雨はやんだ。そして暗くなつた。

夜になつて二人の酔拂ひが村に戻つて來た。マントには泥がついてゐた。老人は道々いたづらに拔いた穗を指に卷きつけてよろけた。公會堂ではランプの下は油煙のかげたけうす暗かつた。そこに皆集つて待つてゐた。二人は肝腎の報告を忘れて頻りに遊廓を覗いた話などを始めた。そしてその間には台所へ立つて行つて舌を鳴らして冷杯で水を呑んだ。便所へ立つて行つた。雨戸と桶を外れて庭へ小便の注ぐ音と

がした。結局用向は果たされなかつた。少しの酒でうまく買收されて歸つて來たのであつた。

父の松造は翌朝庭でその話をきいた。そして無口な彼が今度は自分が行かうと言つた。母は父の顏を見た。その心がいかにも見えすいた。父はこまかい女の氣持などには氣附かずに瓜棚の下へ手洟をかんだ。瓜の掌の樣な葉には茶色の星が現れた。それが雨毎にひろがつて來た。下つた瓜の先からしよぼ〱雫が落ちた。いゝ黄色な酒がごくごくと桝で呑みたいだけ呑める、それが父の行きたい第一の理由に違なかつた。それは買收されに行く樣なものであつた。頭の赤い禿はいやしく光つて見えた。穗が輕くつて皆靑息してゐる時に、酒が呑みたさに行く夫、その交渉は不調にきまつてゐる。しかし母はいつものとほりだまつてゐた。狡しい父に母のだまつてゐる氣持が映つた。いきなり節の高い腕が重爐をもつて母の背に飛んで來た。家の中では子供たちが何か奪ひ合つて喧嘩をしてゐた。

地主は見に來なかつた。黄色に變るべき筈の靑い稻は灰色になつた。根元はくさり出した。取入れが始つた。若い男を戰地にとられて手のない家では桂庵から旅の者を傭つて來た。雨の晴れ間に、都會風に派手な印半天が稻叢の間で鮮な紺に見えた。

母は女の子を負つて水の藥罐をさげて行つた。父は砥石を腰にさげて子供を叱つた。

歸りには父は新しい藁を一束さげて來た。新しい籾は黄色な、細く裂いた羊毛の樣な毛を生やしてゐた。甕の底を覗き込むと溫度のある酵母の香が頰にさわつて來る。彼は薄暗くなつたあたりを、嗅ぐやうに顏を突出して見廻した。納屋のかげに、笠を冠つた男が立つて見てゐた樣に思つた。いきなり甕と反對の方へ背を向けて、煙草入を腰から拔かうとした。が、煙草入は向ふの緣へ忘れて來た。恐る〱振向くと未だ立つてゐる。同じ姿勢であつた。松造は近よつて行つて見た。それは、自分がかけておいた土もつこであつた。甕には新しい藁がかぶつた。丈の短い灰色の藁であつた。

米は小作料にも足りなかつた。唐箕であほると輕い籾が皆外の俵の口へ踊りだした。糯活の塚の上はしいなで山になつた。

十月が來ると初雪が降つた。大きい雪が碎けながら落ちて來て地面で消えた。白樺の剝げかけた白い幹は目立たなくなつた。雪がやむと斬り込む樣に蓼科おろしが吹きまくつた。町へ小遣錢だけの米を賣りに出る日和がなかつた。父は緣に立つて新道を卷いて行く坎の行衛を見てゐた。そして土の上に手洟を飛ばした。

（二）

そして醜い女の子は自分がぎん子と呼ばれる女であつた事に気付いた。

父に打たれる腰の細い母を見ながら成長した。目と目の間はますます平になり、二つの目頭の間は遠く離れた。耳の下の顎骨は岩の様に突出して来た。恐しくなかつた父が恐しくなつて来た。男は女を打つ為にうまれ、女は男に打たれる為に生れて来るものかと思つた。世の中が、博多の帯の様な二つの鮮な縦縞に織り分けられてゐるのを見た。明い糸に織り込まれた人間たちは、家の中にゐてにこ〳〵と目尻で笑つて小作料の米をはかりにかけた。目方の足りない俵は上り框に立つて筵の方へ事もなげにほうり投げた。そして膝についた藁塵を氣にして細い指で拂つた。女は男の後にゐて次々に赤飯の膳を運んで來さへすればよかつた。頬の皮膚の表面だけに薄い皺をよせて笑つた。縁の下に股引を履いて立つてゐるのが黒い糸に織り込まれた人間どもであつた。それに冷い風の様な微笑を送ればよかつた。言ふまでもなく自分達はその黒い糸で織られた縞の一部であつた。それは日向と日かげの様な關係でもあつた。それは地主と小作人であつた。どこまでも並行して行く縞であらうか、と少女は考へたのであつた。大抵の日かげにゐる様な憂鬱を知つた。學校へ行つては暗い廊下で鉛筆を拾つた。そして家へ歸つて來ると目の離れた弟に與へて遊んだ。

ある年には堤が[illegible]一緒に、蓼科山の谷から白い斑入の石ころが流れて來た。一面花崗岩の磧であつた。水に浸つて黴くさい米は納屋の暗がりに積んでおいた。黒いこほろぎが叺の下で鳴いた。そこへ差押へが來た。小作料が出せないのは一軒だけではなかつた。村中一せいに來た。競賣の日どりがきまつた。

霜は夜があける前に白く冴えて地面におりた。明月夜の頃であつた。公會堂の庭の柳の殘り葉は夜どほしばら〳〵と散つた。公魚の様に細長い葉であつた。梢で風にかわいてばら〳〵と落ちて來た。裏の桑畑にも吹きよせて來た。桑の枝は三本づつ藁で結ばれて朝風を梳いて立つてゐた。執達吏役場の者は自轉車に乘つてやつて來た。自轉車は珍しかつた。村は新道にそつて勾配の強い屋根を被つてゐた。父の松造は縁側にかゝつてゐる長股引をはいた。母は炬燵に背をふせて咳き込んだ。

米を買ひに來た馬方は馬をひいて村の道を行つた。あかい立髪を垂れた駄馬は冷い空氣の中に毛の生へた耳を立てた。乾いた地面に落ちた馬の糞は少し砕けた。いきが立昇つた。母は去年うまれた男の子を背負つて公會堂へ行つた。ぎん子も足袋を穿いてついて行つた。米の値を呼ぶ聲が起つた。それに應じる聲が

あつた。

母は妨害する語に負つてゐる子供の尻をつねつた。柔い弟の尻をつねる母の指をぎん子は下から見上げた。人々は振向いた。髪の亂れた女の背に泣いてゐる男の子を見ると人々は少し腹を立てた。そして執達吏の呼吸の方へ注意を戻した。が、さらに男の子は母につねられて喚いた。執達吏は咽喉に絡んだ啖を拂つた。

ぎん子は必死になつて競賣を妨害してゐる母の額を見た。二筋の縞が走つた。米を取上げられた自分達は、今鮮に眞黒な糸で織込まれた黒い縞であつた。

だが、それは、どこまでも並行して行く縞であらうかと少女はまた考へたのであつた。そして、ぎん子は、横合から弟の柔い尻を歯を喰ひしばつてつねつた。

母は、妨害の姑息だつた事を恥ぢて足の裏の汚い子を負つて行つた。

米を積んだ馬は辷つた。高い金額の取引で氣の荒くなつた馬方は馬を綱で毆つた。馬は稍慣れない米の重味で動けなかつた。なぐられる毎に悲しげに小便を出した。しゆつ〱と悲し氣に落した。

ぎん子は弟の紫のあざのある柔い尻が赤黒く腫れたであらう事を思つた。そして涙を流した。

苺の様な乳首がふと熱くなる事があつた。そして、痒くなつた。[illegible]くなつた。そこが桃の花の様に赤くなつた。腫れて來た。着物の下で蕊が出來て來た。それを何となくもてあました。若い男とすれ違ふとほのかな毛織物の様な香を覺える年頃になつた。しかし、男は女を打つ語に生れて來てゐるのだ。

白い雲の多い七月になつた。長い栗の花がぽたり〱と落ちて來て、母はまた孕つた。

太くなつた腰には腰紐が食込まなかつた。

瓜畑の父の手洟の飛んでゐる所に濁つた唾を吐いた。子供等は兄にならつて新聞紙を庖丁で切つて習字帳をとぢた。米は騰つたが百姓は苦しかつた。騰つた米の値段は土用浪の様なものであつた。どこかに打突かつて高い物價になつて打戻つて來た。

栗の花は高い梢から白い尾の様に抜けて落ちて來た。動かないむし〱する空氣の中で、生氣のない人間の顔だけが白つぽく目立つ様な七月であつた。

山の際で鐵砲が鳴つた。赭土の山腹にこだましてうすい空氣の中を横に響いて行つた。梨畑の中を股引の足で走つて行く男があつた。女達も牝鷄の様に臀を振つて走つた。踏切小屋のトタン屋根の上のあたりで白い煙があがつた。煙が散つてから山にこだまする鐵砲の音

一駁

一くる

がしたら。

米騒動がこの山間の小驛にも入り込んで來たのであつた。線路で礫を掘つてゐた工夫の一團りが驛から米を載せて來た馬力を遮つた。高い米代に苦しみ裸で働いてゐた工夫らが憤つて米問屋の馬力の米に鶴嘴を打込んだのであつた。塵埃燒却場附近で暮しを立てゝゐた人達も走つて來た。俵を引摺りおろした。馬ははね上つて大きい歯をむき出した。新聞記事で脅えてゐた米問屋の若主人がすはと土藏の二階にかけておいた獵銃を外して射つたのであつた。米が買へないのは何人かの命にかゝはる問題であつた。二臺の馬力の米の收益は具體的にはうら盆の、或る丸ぽちやな土地の藝者の配り物に錦紗の帛紗が添ふか添はないかの結果しかもたらさない問題であつた。それなのに彼はうろたへて土藏の二階から鐵砲をうつた。彈はうどん屋の軒の提灯に飛び込んだ。黄色な、大提灯が波に乘つたやうに搖れた。馬は輕くなつた車を引いて跳り上つた。俵に突刺した鶴嘴の穴から米がこぼれた。玄米は砂の樣な音をたてゝさらさらこぼれ落ちた。女等は、うろたへながらも人に踏みにぢられない前にその米を拾ふことを忘れる事は出來なかつた。ぎん子も埃と一緒に掌で前掛に掬ひ込んだ。だが、ぢきに馬鹿々々しく悲しくなつた。鳩の樣に頭數の多い自分等の家族にこの前掛に包み得るだけの米が幾日あるものかと考へた。あの僅數だけの米を拾つたとて一[…]

にはやはりもと通りの缺乏へ、磁石の針が北と南へ落付きたが[…]戻つて行くだけだ、と考へた。

保線事務所構内のバラックから線路工夫等が子供達を家に殘して引いて行かれた。町も村も靜かになつた。栗の花は白い尾の樣に梢から拔けて落ちて來た。塵埃燒却場附近に住む屑拾ひ一家の主人たちもあとから引かれて行つた。裸で下水の樋を埋めてゐた土工等もそのあとから引かれて行つた。米問屋の土藏は青い西空に向けて扉をあけた。貯藏米に風を通す爲に、厚い唇の樣な扉を外に向けてあけた。靜かな初夏の空氣を吸ひ込んだ。磨いた獵銃が二階にかけてあるのが見えた。土藏の脇の空地には驛から馬力で新しい材木が運ばれて來た。線路わきの草地へ米屋に懲りた米問屋が製糸工場を建てるとのことであつた。しかし、夕暮には米も馬力でとゞいて來た。

おくれて驅けつけた軍隊は狭い町の眞中へ砲車を据ゑて、、の爲に演習をはじめた。白い煙が散つてから山にこだまする銃聲が聞えた。村外れの畔できくと何かはつと胸が轟いた。そして次には憂鬱になつた。やはり以前とほりの苦しい百姓であつた。深い井戸の底に落ちて手のとゞかない青空をのぞむ樣な佗しい百姓であつた。兵隊は汗と埃の香を撒つて村の方までやつて來た。

すべてが以前とほりの軌道にはまり込んだ。そしてのろ〳〵黝いた。畔ではこべの蔓に米の様な花が咲いた。伸びて行つては根をおろした。母は澤つた唾を吐きながら父に毆られた。泥のついた藁口の様な指を拳の中に握り込んで父は母をなぐつた。

ぎん子は、稲荷の森の下をとほつて新しく出來た製絲工場へ通つた。無數の不幸な娘が、細い歌に合はせて、枠をくる〳〵繰つてゐた。絹糸をつくり出す自分等が絹で織つた着物をきることが出來ずに、木綿の袖口をびしよ〳〵に濡らして糸をとつた。ぎん子も袖口をぬらして糸をとつた。三十圓の前借は五圓だけ母の産婆の禮になり二十圓は借金の戻しに消えた。殘りの五圓のうちから新しいランプの笠を買つて來た。はぜくりかへつた新しい笠のランプの下に、六疊の古疊があつた。六疊の眞中ごろに油壺のかげが薄暗く丸く落ちた。工場から宵に戻ると切れた疊の上で丸いかげが搖れた。ランプを動かして立上つた父は縁側で豚を嚙みながら甕の酒を呑んだ。硬化した咽喉笛を酒の過ぎる音がごくりと聞えた。

油壺の影は膿くさい母の産褥の上までゆれて行つてゆれて戻る。いつそ東京へ行かうかしらん、疊を見つめながらぎん子はふとさう考へた。ぎん子は新聞をかりて來てつゞき物を母によんできかした。しかし自分はつゞき物などに興味はなかつた。都會には勇敢な勞働爭議などがある。すべて都會の人間の生活は、率直で勇氣がある。新聞を讀んで家の中を見廻し、ぎん子はさう思つた。しかし、それは誰にも打明けられない事であつた。よし、春になつたらどうかして東京へ行かうと考へた。

十月が過ぎると藁の上に雪がふつた。こまかい鹽の様な雪が、白樺の枝からさら〳〵辷り落ちた。そして三月がやつて來ると鹽の様な雪は重い大きな淡雪に變つた。鶏は藁を足で掻いて靑く縮まつた草の芽をつゝいた。ぎん子は森の下を工場へ通ひながら雪のとけるのを待つた。地主のある所には小作人が必ずあつた。資本家のある都會には必ず勞働者があつた。そして、それはやはり日向と日蔭の關係であり、白い糸と黒い糸とに織り込まれた帯の鮮な縞目であつた。貧乏人のある所には必ず貧乏人の運動が起り得る。──しかし、十八才にしかならなかつたぎん子は東京へ行かなければ明い生活はあり得られないと考へた。

（三）

埃で赤く黯んだ東京の街を布の様に皮膚にふれて來る春風が吹いた。風が過ぎると空氣はぬる湯の様に澱んだ。澱んだ空氣の中を電車は埃をのせて走つて行つた。そして走つて來た。自動車は辷る様に坂

を上つた。人の傍を通る時には割れる様なラッパの音を吹き流した。轍は埃をまき起した。埃は風にまぢつて布の様に皮膚にふれて來た。

帶を低く締めたぎん子は自動電話を離れた。手拭をつかんで襟のあたりを拭き、風呂敷包を持ちかへた。交換手募集、見習期間短し、初任給二十一圓、判任官登用の途あり。自働電話に立てかけた板にはさう書いてあつた。白ペンキは銀色に輝いた。蝸牛の様に一字一字を辿つて行き足許の自働電話の日かげに目を落すと休まるのを感じた。初任給二十一圓！判任官とは裁判所の役の名前の筈だが、と彼女は考へて電車にのつた。しかし何となく不安であつた。宿屋は何處だらうか、と見廻した所に交番があつた。彼女は無斷で家を出て來たのであつた。

——根掘り工事の男等は水道口で鼻を鳴らして水を呑んだ。呑み終ると赤い背中を見せて再び穴の中に飛び降りた。コンクリードミキサーはセメントと砂利をまぜて雷の様に鳴つて廻つた。穴を掘りながら頭の上に聞くと他のすべての音は抹殺された。空氣には、他の音が入つて來る餘地がなかつた。耳の中を眞黒に塗られた氣持であつた。それは、無音の眞空にゐるのと同じであつた。光るシャベルで土をすくひ、頭の上にほうり投げた。落ちて來るシャベルの先の光るのを見た。土を掬つた。頭の上にほうり投げた。——聽覺をつぶされた土工達は自分の手足をばら／＼た機械に感じた。渇を覺える時にだけ、前の舗道を走る自動車のラッパを遠い潮鳴りの様に聞いた。目に土塊の入つた時にだけ高いビルデングの上の青空を感じた。窓の中の交換手の女を感じた。女は青い顏で黑い胸掛電話機をかけてゐた。青い顏だな、と思ふ瞬間に、またもとのばら／＼な機械に戻つた。コンクリートミキサーだけが音もなく廻轉してゐる様に見えた。それ程雷の様に破いて廻つた。

目立つて背の低い土工の磯吉は三十を過ぎてゐた。土を投げに頭を上げた時に、彼はふと穴の上で女の瞳に突當つた。土を掬つて再び目を上げた時には彼は女の兩顎が耳の下に岩の様に突出してゐるのを見た。ぎん子は赤くなつて中央電話局への道をきいた。彼は聞えずに聞きかへした。目頭の遠い二つの目が瞬いた。彼は吃つてその建物を指した。彼は鷄冠の様に赤くなつた。彼ははじめて穴の上で蹣つてゐた女の着物の見すぼらしかつた事に氣付いた。女は田舍者に違ひなかつた。ミキサーの廻轉を雷の様に煩く感じた。既にその時には女は禮を言つて歩き出した。彼はいつまでも自分の異常に短い背丈を感じ、雷の様な廻轉を煩く思つた。

ぎん子は足袋に埃をのせて出て來た。目のまわりに睡眠不足の黑い枠があつた。近づいて來て彼の顏を認めると、赤くなつて黑い枠が郡

えた。彼は女が去つたあとから印半天を肩にかけて起つて行つた。女が、横切る電車を待つてゐた時に彼は追付いた。半日の勞働を放棄したことを彼は悔いはしなかつた。……

翌朝下谷萬年町の淺草の森に面した駄菓子屋の窓は三十分だけ遲くあいた。女は壁に向いて軍隊手布をたたみ男は背中に女を意識して、ズボンを履き終へた。そして體を女の方へ向けるのに硬ばつた。ぎん子と磯吉とは既に夫婦であつた。世の中のすべての結婚の習慣と手續とを嘲つて夫婦になつた。窓は目の下の飯屋の煤烟をゆるい呼吸で吸ひ込んだ。手布の手垢と一緒に男の衣類の蒸れた香を吐き出した。鐵工場の鋲を打つ音と電車の響とを吸ひ込んで來た。ぎん子は頭を掻きながら、耳かきのついたかんざしを一本買はうと思つた。そんな氣持になつた。ついでに男の足袋を買つて來やうと思つた。昨日は十日も前の事の樣であつた。汽車にゆられた一昨日は一ケ月も前の事のやうであつた。男は女を打つために生れて來てゐるそれは、幾重にも靑い山脈にかこまれた、山の中の人間どもにしかあてはまらない理窟だつたと思つた。一夜で膚が白くなつた樣に思つた。

生活が始つた。窓に新しい茶色の七輪を出し赤い澁打扇であほつた。柔い櫟炭は下の方から華かな火花をあげた。十錢で買つて來る焚付けの袋には「火の母」と書いてあつた。火の母とはよく言つたものだ。……自分も母になるのかしらと考へた。もうなつてゐはしないかと考へた。濡れた手で「火の母」の袋を持ち白い布巾を持つと毒々しい赤がついて來る。

磯吉は五日の日給をためて袴の生地を買つて來た。それを、階下の女房が近所で仕立てさして來た。腰に結びつけて見て、小さい手鏡の足をひらいた。一部分づつ體をうつして見た。氣がさして少し笑つた。田舍では袴をはいた女が通れば、家の中から駈け出して見たものだ。小鼻が平で二つの目頭の遠いのが少し氣になつた。

布の樣に皮膚に觸れて來る春の風が吹きまくつた。ぎん子は袴をはいて電話局へ通つた。男は土工の亭主を知られては可愛さうだと思つた。そして電車が止り切らぬうちに飛降りて作業場へ消えた。コンクリートミキサーは雷の樣に廻轉した。女は窓の中で胸掛電話機を掛ける事を習つた。通話器具の名稱を覺えた。接續を要求して來る信號ランプをパイロットランプと言つた。「パイロット」と覺えるために三日かゝつた。呼び出す事をオーダーすると言つた。田舍のオダといふ言葉ですぐ覺えた。交換手達は電池くさい。交換台の前で脣の先で喋つた。交代が來ると高い白天井の下で休んだ。

休憩室まで來るとコンクリートミキサーの響がとどいて來た。それは病院の樣な光景であつた。しかも肺病院の樣な光景であつた。女達

殿)——

はなるべく聽を動かされぬ樣にして電池の香を忘れ樣とした。張り切つた皮膚が艶を失つて鮎の死魚の樣であつた。

電話局長は歐米視察を終へて戻つて來た。電氣時計を買つて來た。交代室に休息してゐる者を集めた。プラチナの鎖をさし渡して歐洲に大流行の電氣時計を交換台の上に据えることを話した。親時計が一つで、無數の子時計の針を動かす。それを親燕が子燕の巣へ餌を運んで來る樣に愛らしいものゝ如く話した。彼女達は自分のかゝはらない事からになると頻に足を横坐りにした。そして動かした。春さきになると、交換台の下には白いうどんげが咲いて脚氣の氣味があつた。脚氣のないものでも板の間へ坐るのはひどかつた。聞き手の聽が動いて注意が亂れたと見ると、時計の正確な事を言つて恩をきせる樣に言つた。だが、そこには、自分の通話の爲に電話交換をやつてゐる女は一人もゐなかつた。

——(る

彼等が彼等の利益の爲にやらせる電話交換の爲にいゝ時計をおく事は、彼等の勝手であつた。それは少しも交換手と關係ない問題であつた。局長は少してれてネクタイにさわつた。新しく局長になられた方へ一言訓辭を、と言つた。婦人參政權とか何とか世間で宜しい事を言ふか、諸君は男子と同等に、立派に仕事にたづさはつて居られる。諸君は[illegible]で立派に働いて居つゐる。これこそ實質的な婦人參政權だ、

と彼は言つた。それは自動車の中から[illegible]救はれ難い女等た。しかしそれでも交換手の白い顏は散漫に動いた。

だ！と腹の中で舌打つた。

歸りには彼女は夫の仕事場の前をとほつた。袴の裾と足袋との間に白く少し足が見える。それが、女學生とちがつた感であつた。どうしても交換手の感であつた。女學生と見せる爲に靴をはいてゐる女もあつた。小足に歩けば見破られさうな氣がした。大足にぎゆつ〳〵と歩いた。しかし、聽話器の金具を頭へはめたあとが、浪の樣に吃髮についてゐた。そこに電話局があるといふ事は天下周知の事であつた。そこから出て來たと思はれたくない爲に次の停留場まで歩いて乘る女もあつた。講談本だけ風呂敷に包んで、「現代」といふのだけを高向らしく手に持つた。そこまで歩くと乘換の女學生が澤山立つてゐた。逃げ込む樣にその群に入つてもやはり彼女達と違ふ所のある事を自分で感じた。袴の紐の締め方をかへてみた。髮の結ひ方をかへてみた。やはり、麥にまぎれて生へる雜草の鬼麥の樣に何となく違ふところがあつた。

三ケ月たつた。田舍では、白い栗の花が拔けて落ちて來る頃であつた。東京では高い邸の塀の中に白木蓮が咲いた。電話局への出勤の道は白くかわいて來た。間借りの窓の下に白い[illegible]がヒラ〳〵[illegible]の樣に

掲げられる四月であつた。白い雲が月島の海の方へ流れた。彼女は依然として見習であつた。白い制服をきて胸掛電話機をかけ、指の腹で信號キイを向ふに押した。赤いランプが呼んで來る。青いランプが終話を信號する。赤いランプは消えたかと思ふとすぐ次を呼んでついて來た。仕事は完全に一人前だつた。初任給二十一圓は拜命してからの事であつた。見習期間は手當として十三圓しか貰へなかつた。電車賃が五圓かゝつた。下駄や足袋やクリーム代に六圓はかゝつた。殘りの内一圓は共濟會積立金で、あとの一圓は休息時間の餡パン代にも足りなかつた。ぎん子は一人で長い間考へ、夜店で假名つきのパンフレットを買つて來た。それには働く者と資本家との關係が親切に書いてあつた。長い間の疑問がそれで解けた様に思つた。うれしかつた。更に今一册買つて來た。更にわかつて來た様に思つた。

交代室には制服と脫ぎかへた着物の戸棚があつた。二人の主事補が紫の主事補章を肩から下げて、出勤簿を整理し餡パンを賣つた。交代室監督といふ名儀で露骨に戸棚の着物の番をした。

ぎん子は交代室をさけて便所の鏡の前に立つた。勤務中の女は便所へ行く顔をして鏡の前に來た。聽話機を頭から外し髮についた痕を手でなほした。鏡を覗き込んで懷から紙白粉を出した。ぎん子は傍へ寄つて行つた。そして見習期間の長い事を話しかけた。女は鏡の中でぎん子の顔を見、強く背いた。が、申し合はせた昇給願をでも出さうぢやないのと言ふとだまつてしまつた。鏡に顔を近づけ唇を尖らし口紅を塗つた。さういふ女が多かつた。

が失望しなかつた。新聞通話は午後三時で終つた。相場の電話も午後四時には終つた。赤いランプは消えて犹の様に並んだ。ぎん子は、觸角の様なプラグをとり記錄臺を呼んだ。そこに退屈さうに鉛筆を削つてゐる見習に赤い信號を送つた。相手もプラグをとり應じた。背を曲げて監督臺の方を見た。こちらを向いていたずらさうに笑つた。ぎん子は、胸掛電話機の椀の様な口に唇をよせて、見習期間の長いことを言つた。相手もさうだと答へた。何とかしやうぢやないかと言つた。蟻の様な聲が答へた。それに滿足して監督を氣にしてプラグを拔いた。が、やはり話は監督臺に通じたのであつた。監督臺は、そこに坐つてプラグをさしさへすれば、すべての交換手の話が聞きとれる裝置になつてゐた。そこで男の加入者との冗話を取締り、交換手同志の雜談をきいた。紫の主事補章を肩に下げた庇髮の女は腰に手をまいて草履を引摺つて來た。歩きながら口をあけて欠伸をした。その口を歪めて庇髮の中を掻いて寄つて來た。夜勤に廻された。

朝、勤務を終へて寢不足の目で埃の階段に袴の裾を引摺つて降りた。もはやコンクリート ミキサーが雷の様に廻る時間であつた。

厨房の漏斗に砂利のただれ込む音が憂鬱であつた。脇の下ではニユームの辨當箱の中で箸が鳴つた。夕暮、埃の町を電車に乘つて來た。建物の角を曲ると男らはセメン袋をかついで行つた。鐵片の落下を防ぐ金網の下を背を曲げて通つた。疲れて、破れた半天を着てゐるのが夫であつた。一番背が低かつた。

夫婦は月と太陽の樣に食ひちがつた。「朝二階へ戻つて來ると、皿の上にパットの吸殼があつた。白粉の箱をいぢつてみたあとがあつた。白い粉が疊にこぼれてゐた。夫の香を探して歩いた。男は一日休んで夜働く工事場を探しに行つた。が下駄の鼻緒を切り蟇口を落してかへつて來た。淺草の森に花火があがり、夕暮であつた。男は裸になつて打扇を探した。凹凸な疊の上を歩いた。袴をはいてゐる女に打扇のありかをきいた。夫のかへりを待つて出勤時刻におくれた女が二言三言答へた。いきなり駈けて行つて裸で女を毆つた。

女は顏をよぢつた。腰の細かつた母を思出した。背の低い男にむかつて行かうとしたがふとやめた。

夫婦は月と太陽の樣に食ひちがつた生活をつゞけた。二人が顏を合はせるにはどちらかゞ休まねばならなかつた。九月になつた。街路樹の葉はひらき切り、澄んだ風がさわさわと終日吹つて行つた。彼女は[illegible]り見習であつた。十三圓のうちから休んだ日數だけの金額が少かつた。幾度かよんで手垢がついたパンフレットを人にすゝめた。晩で讀んで來る樣な人間は大抵話がわかつた。そして長い見習期間に不平を持ち、仲間を誘ふ事に同意した。が便所の鏡の前に長く立つてゐる樣な女には望がなかつた。「えゝありがと」と言ひ洗面流しの緣に置いて刷毛を使つた。そして戻りには白粉だけを帯にはさんで、それを置忘れて行つた。これが、主事補の手を經て苦い感情で彼女に戻つて來た。或る日に突然解雇された。「私儀家庭の都合により……」と書かされ、一圓紙幣を十三枚受取つた。

戸棚を片附けてゐると主事補が何氣なく寄つて來た。電話局では解雇される者は今まで盜癖者ときまつてゐた。交代の女達も何となく引掛つて來る視線を寢ながら投げて來た。朝であつた。女ははぜの佃煮を買つて袴の裾をもつて二階へのぼつて行つた。男は一升壜の尻を持上げて茶碗に冷酒を注いだ。茶碗に溢れた酒は疊に流れた。男は醉つて皮膚の毛孔があいた。顏をあげて晩に歸つて來ない女房はいらないと舌を卷いて言つた。小さい赤い目を、女の顏に据ゑておけない程醉つてゐた。女は袴のまゝ立つて解雇されて來た事が言へなかつた。男の小さい瞳が拳を振上げて狼の樣に向つて來た。女は父を思出してゐた。臉に淚が湧いて來て男の膝の疊に佃煮を投げた。そして目をつぶつて蹴りかゝつた。男の背中のやけた皮膚は脈が浮いて骨が

密着する感があつた。

女は十三錢で朝顏の鉢を買ひ、淺草で男の着物を買つた。九月が末になるとトタン屋根の上に露がおりた、月は埃の多い空を大きくトタン屋根の上に昇つた。のぼりながら小さくなつた。朝顏の蔓はねぢれて夜のうちに筆の樣に尖つた。朝になると紫のラッパの樣なひ弱い花が開き、晝にはしぼんで夕暮には落ちた。男は殘暑の空の下の勞働で脂肪を出し切つた。藁の樣になつて歸つて來た。窓に腰をかけて掌で膝を撫でゝ頬に酒を吞みたがつた。撫でる掌も膝も乾いてしやりしやり鳴つてゐる樣に女は思つた。一日休むと一日食へない。生活だけが齒車の樣に正確に室の中を廻轉した。女は、北と南を指したがる磁石を思出さずには居られなかつた。

布團に入ると男はすぐ眠つた。晝の疲れで溶けてしまひさうに眠つた。が、女は疊を鳴らして、幾度か寢返つた。

女は電話局へ出掛けて行つた。小使に呼んで貰つて下駄箱のかげで話した。若い交換手は何處かに沁み込んだ、電池の香を撒きながら、振返つては角の廊下を氣にした。そこが主事室になつてゐた。貴女の馘首を皆怒つてゐる。そして不平組がふへたと少女は言つて胸掛電話機を振り、相手の肩に手をかけた。ぎん子は滿足して工事場の脇を歸つた。夕空に鐵筋を打つ音が響いた。男は家へ戻ると頬に酒を吞みたがつた。黴の生へた一升罎を押入れから出して蠅が落ちてゐるので氣を惡くした、蠅は濡れて黑く淀んでゐた。

朝、男は女が下で七輪に焚つけを燃してゐる間に手拭をつかんで出て行つた。茶碗を並べてゐると梯子段を踏み外す音がした。男は醉つて昇つて來た。飯前の朝酒が腸にこたへて、材木の樣な音を立てゝ寢轉つた。女が二言三言言つた。男は大きな聲を出してねたまゝ財布を投げた。手膏のついた空の財布は疊の上に紙の樣に落ちた。

男は體を起して目をあいた。いきなり毆りかゝつて來た。打下した手を振り上げ下した。女は男の人さし指が一節足りない所から切れてゐる樣に思つた。そこから鳶口の樣に曲つた爪が白く出てゐる樣に思つた。そして自分の體は、しなやかな秤の錘の樣であつた。腰紐が腰に食ひ込んでそこが痛い樣に思つた。

女は飛び出した。淺草の人混みを輕く歩き、宮城前まで電車にのつた。そこから電話局まで歩いた。並木を搖つて秋の風が吹いた。

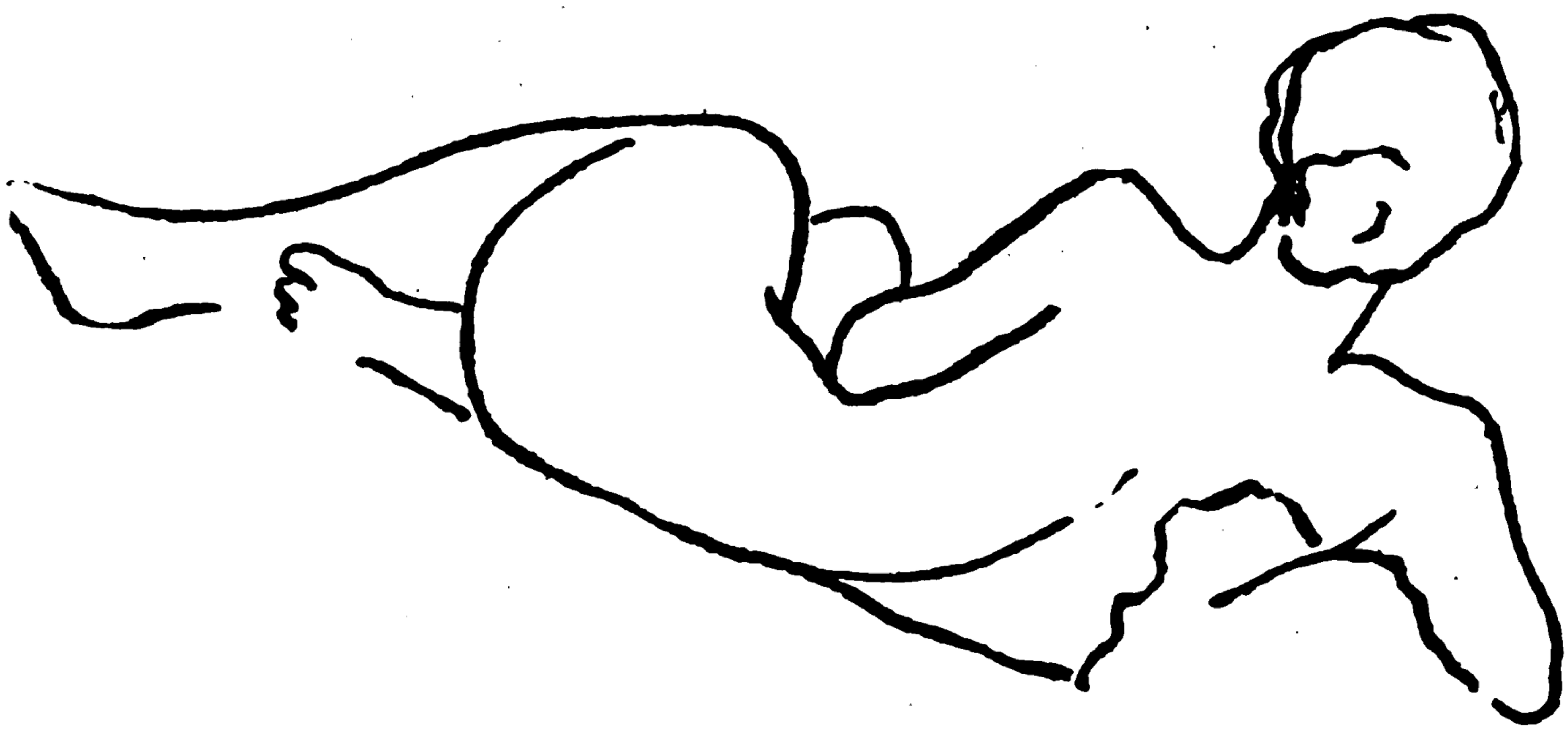
工事場の足場の下には裸の男達が集つてゐた。女は遠くから磯吉の顏を探した。男等の肩までの背丈の男を探した。そこに夫のゐない事をたしかめ、うつろになつて近寄つて行つた。鐵骨を機械で打込む音が頭の上に響いた。近寄ると男等の輪の眞中に詰襟の現場監督がゐるた。男は指の節を動かしどなつてゐるのであつた。そしてその前に頭

を垂れてどなられてゐるのは夫であつた。現場監督は青い設計圖をポケットからはみ出させてゐた。手に時尺を持つて半ズボンの上に被せた靴下の片足を傍の材木の上に踏みかけてゐるのであつた。現場監督は腹の底から押出す聲でどなつた。そして時尺で夫の横顔を毆つた。頭監督は更に夫を見下して時尺を持たない方の掌で横に毆つた。それは人間の卑屈な姿であつた。ぎん子はいきなり人を分け入つて、監督に一と聲浴せかけた。人の足をふんで行き卑屈な夫の代りに監督の胸ぼたんの所に自分でもわからない怒聲を吐きかけた。監督はたじろいた。

瞬間であつた。

監督の方へ向いて卑屈に固つてゐた夫の顏が、女の方へ向いて赤メリヤの様にパッと擴つた。夫は何かどなつた。夫は拳を振りあげて女の上に振り下した。

それは見慣れた拳であつた。それが力いつぱいに振り下された。女はセメントの濡れてゐる地面に投げつけられた。聲をあげて泣いた。噎れる様に泣き出した。鐵骨を打ち込む音が頭の上の空にひゞいた。呆れて立つてゐる監督の前で夫は妻を毆つた。



卍（まんじ）

谷崎潤一郎

その八

でも京都の事件の時分は結婚して間もないことで、まだ處女時代の純眞さを持つてゐましたから、今よりはうぶで、氣が小さうて、夫に濟まんと云ふ心持ちが強いでしたけど、その手紙にもありますやうに今度はさつぱりそんな氣持ちになりませなんだ。わたしかつて、ほんま云うたら夫の知らん間にたんと苦勞をしましたので、だんだん擦れて、ずるうなつてたのですが、夫にはそれが分らんと、いまだに子供や子供やと思うてゐます。わたしは最初はそれが口惜しいてなりませんでしたが、口惜しがるとなほ馬鹿にされるので、ようし、向が子供だと思てるのなら、何處までもさう思はせて、油斷さしてやれ、と、次第にそんな氣になりました。うはべはいかにもやんちやを裝うて、都合の惡い時はだだをこねたり甘へたりして、お腹の中では、ふん、人を子供や思てええ氣になつてる、あんたこそお人好しのぼんぼんやないか。あんたみたいな人欺すぐらゐぢツきやわ、と、嘲弄するやうになつて、しまひにはそれが面白うてなんかと云ふと直ぐに泣いたり怒鳴つたりして、自分ながら末恐ろしいなるほど芝居するのが上手になつてしも

て、……先生なんかこんなことはよう分つてをられますでせうけど、ほんまに人間の心理と云ふものは境遇によつてえらいえらい變りやうをするもんでございますねえ。前でしたら時に依つてははつと思うて、ああ、こんな事するんやなかつたと、後悔する氣になりましたのに、今ではそんな氣が起ると反抗的に抑へつけて、なんぢや意氣地のない、これぐらゐのこと恐がつてゐてどないすると、自分で自分の臆病をあざわらふやうになるなんて、……それに、夫に内證でほかの男を愛したら惡いやろけど、女が女を戀ひするねんよつてかめへん。同性の間でなんぼ親しなつたかて夫がそれをとやかく云ふ權利はあれへんと、いつもそんな理窟をつけて自分の心を欺いてゐました。その實わたしの光子さんを思ふ程度は、京都の人を思うたのより十倍も二十倍も、……百倍も二百倍も熱烈だつたのですけど、……

わたしがそない大膽になつたもう一つの理由は、夫は學生時代からそれはもうお話にならんキチン屋のガリガリ屋で、それを父から見込まれましたくらゐなのですから、ほんとに常識一點張りの、ちよつとでも變つたことや普通のことと違うてることは分らん人なので、わたしと光子さんとの間柄なんかも、なかなか感づかんやらう、やつぱりただの仲好しやと思てるやらうと、たかをくくつてゐましたのです。始めは夫もそんなことがあるやらうとは夢にも想像してませんでしたが、そのうちにだんだん、なん[illegible]なりましたのでせう。そらその筈で、前には學校の歸りがけに[illegible]所へ寄つて夫を誘ひましたのに、近頃ではひとりで先へ歸つてしまふ。そして三日に一度ぐらゐはきつと光子さんがやつて來なさつて、二人で長いこと、、に這入つてゐる。モデルに使ふねんとは云うてるけど、何してんのか、何日たつても繪は出來上らんし、おかしい思ふのはあたりまへなのです。「なあ、光ちやん、此の頃あの人ぼんやり氣イつき出して來たよつて、用心せんとあかんねん。今日はあこがあんたとこ行くわなあ」云うて、わたしの方から光子さんの家へ出かけることもありましたけど、……はあ、學校でイヤな噂があつたのは市會議員の中傷や云ふことが分りましたので、光子さんのお母さんはちよつとも私を疑うてなされしませなんだ。わたしも信用を落したらいかん思て、訪ねるたんびにお母さんの機嫌を取つてましたので、「柿内の奥さん、奥さん」云うて、「ええ友達が出來てよろしおすなあ」云うてなさつた。さうですよつて、毎日ほど遊びに行つても電話をかけても差し支へあれしませんでしたけど、……お母さんの外に弟さんもゐなさるし、その手紙にある梅と云ふお附きの女子衆もゐますし、いろいろハタの眼があるもんですよつて、わたしの家のやうな[illegible]には行きません。「あてとこはやつぱりあかんなあ」折角お母ちやんが姉ちやんを

信用してはんのに、また下手なことしてしもたら厄介やさかい」云うて、「さうさう、寶塚の新温泉どうやろ？」と、光子さんが云ひ出しなさつて、二人で向へ行つて家族風呂へ這入りながら、「姉ちやんずるいわ、あての裸ばつかり見せてくれ見せてくれ云うて、自分のんちつとも見せへん癖に。そやけど今日こそ見られるよつて嬉しいわ、ここは家族風呂があるさかい」「あてずるいことないねんけど、あんたがあんまり白いよつて恥かしいねん。あんた、こんな黒い體見ても愛想盡かさんといてなあ」云うたりしましたが、わたしほんとに、自分の肌を始めて光子さんに見せた時は、一緒に並ぶのがイヤな氣がしました。光子さんは色が飛び切り白いだけでなうて、體の釣り合ひがよう取れてて、姿がすらッとしてなさるので、それに比べると、何や急に自分の體が無細工に思はれて來て、……「姉ちやんかつて綺麗やないかいな、あてとちつとも變れへんもん」云はれますと、しまひにはそれを眞に受けて何とも思はんやうになりましたけど、……初めはわたし身がちぢむやうに感じました。

それであのう、その手紙の夫婦喧嘩のことですが、その前の日曜に夫と二人で苺狩りに行つたことが光子さんの手紙にありますでせう。その日は實は又寶塚へ行きたいなあ思てたところへ、「どうや、今日は天氣がええよつて鳴尾へ行つてめエへんか」云はれましたので、あひさこには夫の機嫌を取つといてやれ思へ[illegible]て、イヤ[illegible]ながら出かけたのですけど、魂は光子さんのとこへ飛んで行つてしもつて、ちよつとも興が乘りませなんだ。戀ひしさが募れば募るほど、なんやかやと話しかける夫がうるさうて、腹立たしいて、ろくさま返辭もせんと一日ふさぎ込んでましたよつて、その時からもう夫の方は一ぺん懲らしてやらんならんと考へてたらしいのです。けど例に依つてなんや浮かん顏をしてるだけで、喜怒哀樂をなかなか面へ表はさん人やもんですからわたしの方ではまさかそない怒らしたとは氣がつけしませなんだ。そして夕方歸つて來ると、留守に電話がかかつた云ふので口惜して口惜しして、夫や家の者たちにぷんぷん當り散らしました。すると明くる朝光子さんから恨みの手紙が來ましたよつて、すぐ電話で打ち合はして、阪急の梅田で落ち合うて、學校へ行かんと、そのまま寶塚へ行つてしもて、それから一週間ほどはずうッと一日も缺かさずに私の家や光子さんの家や寶塚で會うてゐたのです。さうさう、さうきのあの寫眞、それはちやうどその頃に揃ひの着物が出來ましたので、二人で記念に撮つたんですが、……そして、苺狩りに行つた日から五六日たつてからやつたか知らん、或る日、いつものやうに遊んでると、三時過ぎ頃に女子衆が慌てて段梯子を駈け上つて來て、「旦那さん歸つて來やはりましたでエ！」云ひますので、「えー、なんでや

ろこんな時分に!」と、えらいまごついてしもて、「光ちゃん、早よしいでわ!」云ひながら、私も、になつてましたので急いで、、、、、、二人ともけつたいな顔をして下へ降りて行つたことがありました。夫はその間に洋服をセルの單衣物に着かへてしもてまして、わたしたちを見た瞬間ちよつとイヤな顔をしましたが、すぐ平氣になつて、「今日は僕なんにも仕事がなかつたんで事務所を早退きして來てん、お前等も學校怠けててんなあ」云うて、「お茶でも入れて何ぞうまいお菓子ンでも出さんかいな、お客さんもあるし、……」と、それなり三人で無駄話をしながら、ええあんばいに何事もなう濟みましたけど、その時うつかり光子さんが私のことを「姉ちゃん」と云うてしもたのではつとしました。「あんた、あてのことを『姉ちゃん』云はんと『光ちゃん』云うてくれた方がええなあ、つい口癖になつてしもて誰の前でも出るよつて」と、わたししよつちゆう云うてましたんですけど、さう云ふといつも光子さんは氣を惡うして、「イヤや、イヤや、そんな水臭いことあるもんか、姉ちゃんはあてに『姉ちゃん』云はれるのん厭か?」云ひなさつて、「頼むさかい『姉ちゃん』云はして!あて、人のゐる時さつときつと氣イつけるよつて!」云うてなさつたんですが、とうとうそこで出てしまつたのです。そんで光子さんが默つてしまひなしてから、夫も私も非常に[illegible]まつたやうな工合でした。

それからその明くる日の夕方、晩御飯をたべたあとで、「僕、どうも此の頃のお前の素振りが腑に落ちんねんけど、何ぞ譯があるのんと違ふか」云うてふと思ひついたやうにききますので、「腑に落ちんてどう云ふ工合に? うち、自分で一向氣イつかんけど」云うてやりますと、「お前、あの光子云ふ兒とえらい仲ええやうやけど、一體あの兒をどないに思てんねん?」と云ふのです。「うち、光子さん大好きやわ、そやよつて仲好うしてんねんわ。」「好きは分つてる、どう云ふ意味で好きやねん?」「好き云ふことは感情やもん、感情に理由なんかあれへんわ。」——わたし、弱みを見せたらいかんと思て、故意に挑戰的に出てやりましたので、「さうお前みたいにぽんぽん云はんと、もつと落ち着いて分るやうに話したらええやないか」云うて、「好きにもいろいろの意味があるし、——學校でそんな噂があつたりしたんやさかい、——誤解を受けたら爲めにならん思ふよつて尋ねてんねん」云ひます。「第一そんなことが世間へ聞えてみいな、あの兒よりお前か責任があんでェ。お前の方が歳上やし、夫のある身やし、……そしたらあの兒の親たちに對しても申譯が立たんやないか。お前だけやない、——僕かつて默つてそれを見てゐた云はれたら、後日になつてどないにも云ひやうがない。」わたしに夫の云ふことが一一胸にこたへましたけ[illegible]

どくど云うてんのん。うち、そんな、友達のことまで何や彼や干渉されるのん嫌ひやわ。あんたはあんたで好きな友達持つたらええし、うちはうちで勝手にさしといて欲しいわ。うちかつて自分の責任ぐらゐ知つてまッせエ」云うてやりました。「ふん、そら、普通の意味の友達やつたら僕は決して干渉せエへん。そやけど、毎日のやうに學校休んだり、夫の眼エをかすめたり、こそッと人の居ん所へ閉ち籠つたりするやうなんは、健全な交際やとは認められん。」「へえ、あんた、をかしいこと云ふねんなあ。そんなけつたいな想像するなんて、あんたこそ下等やないか。」「もしほんとに僕の方が下等やつたら、そらなんぼでも詫まる。僕は成るべく僕の想像が中らんやうに祈つてる。けど、お前は僕を下等や云ふ前に自分の良心に訴へてみる必要はないのんか。自分にちつとも疚しいとこないと云へるのんか。」「なんで又今日そんな事を云ひ出したん？　うちは光子さんの顔が好きやさかい、それが元で友達になつた云ふことは、あんたかつて知つてるやないか。あんた自分で、そんな綺麗な人やつたら會はしてくれ會はしてくれ云うたやないか。誰かつて綺麗な人が好きになるのは當り前やし、女同士の間やつたら美術品を愛するのと同じやのに、それを不健全云ふなら、あんたの方がもつともつと不健全やわ。」「そやかつて、美術品を愛するんやつたら何も二人だけで閉ち籠らんと、僕の居る前でもええ筈やが、……いつでも僕が默つて聞いてると、お前等姉妹に[illegible]してるのんどう云ふ譯や？　それに第一、きやうだいでもないのんに『姉ちやん』やの『妹』やの云ふのんから、僕は氣に入らん。そんな呼びかたしてたら誰かつて淸い交際や思エへんでエ。」「あほらしい！　あんた女學生間のことちよつとも知らんねんなあ。誰でもみんな仲のええもん同士やつたら、『姉ちやん』や『妹』や云ふのん珍しいことあれへんわ。そんなこと不思議がんのんあんたぐらゐなもんやわ。」その晩は夫もなかなか負けてませんでした。いつもやつたら私が少しだだを捏ねると、「しやうのない奴ッちやなあ」云うて、程々にあきらめてしまひますのんに、イヤにねちねちと追窮して、結局何のために、、に籠るのんか、それを云へと云ふんです。そら、此なひだは、、にゐたけど、さういつでもいつでも居るのんと違ふ」云ひましても、「うそついてもあかん、僕ちやあんと淸に聞いてるねん」云うて、繪を畫くためでないのは分つてる、一體何をしてるのか、はつきり說明してみい云ひます。「そんなこと說明の限りやない。繪エ畫く云うても本職の繪かきがモデルを使て製作すんのんと違ふねんもん、どうせ遊び半分やよつて、そないきつちりと眞面目くさつてばつかりもゐられへん。」「そんなら、、を使はんかつて、下の部屋で遊んだらええやないか。」「使ても惡い、ことあれへんやんか。——あんた、一ぺん繪かきのア

トリエへ行つて繪ェ畫くとこ見てて御覽、本職の人かつて製作するのんにそないむづかしい顏ばつかりしてせッせとしてるもんあれへんわ。——休み休み氣分の動くのを待つやうにして畫かんと、ええもん出來へんよつてなあ。」「お前、そんなえらさうな口きいて、いつぞ一ぺんは繪ェ出來上るつもりかいな。」「出來る出來んはうち問題にしてエへん。光子さん云うたら顏ばつかりやなうて、そらもう體がふるひ着きたいやうに綺麗やさかい、觀音樣のポーズしてもろてそれをじいツと眺めてると、繪ェ畫かんかつて何時間でも見飽きせエへん。」「あの兒はそないして、何時間でもお前に肌を見られてて平氣なんか?」「そらそやわ。女が女に見せるねんもん羞かしいことあれへんし、誰かて自分の肌褒められて惡い氣せエへんやんかいな。」「なんぼ女同士やかて晝日中若い女が裸になつて遊んだりして、お前等まるで氣違ひ沙汰やな。」「うちあんたのやうにコンヴエンションに囚はれてエへんよつてなあ。——あんた、映畫女優の裸體見てつくづく美しなあと感じたことあれへんか?うちやつたらそんな時、ええ景色を見るのんと同じやうにうつとりとして何ちうことなしに幸福な、生きがひある感じがして來て、しまひには淚が出て來んねん。『美』の感覺のない人に說明したかて分れへんやろけど。」「そんなことが『美』の感覺と何の關係があるもんか、そら變態性慾や。」「近代人は誰かてちよつとづつ變態的なんやねんもん、あんたこそ頭が古いねん」「

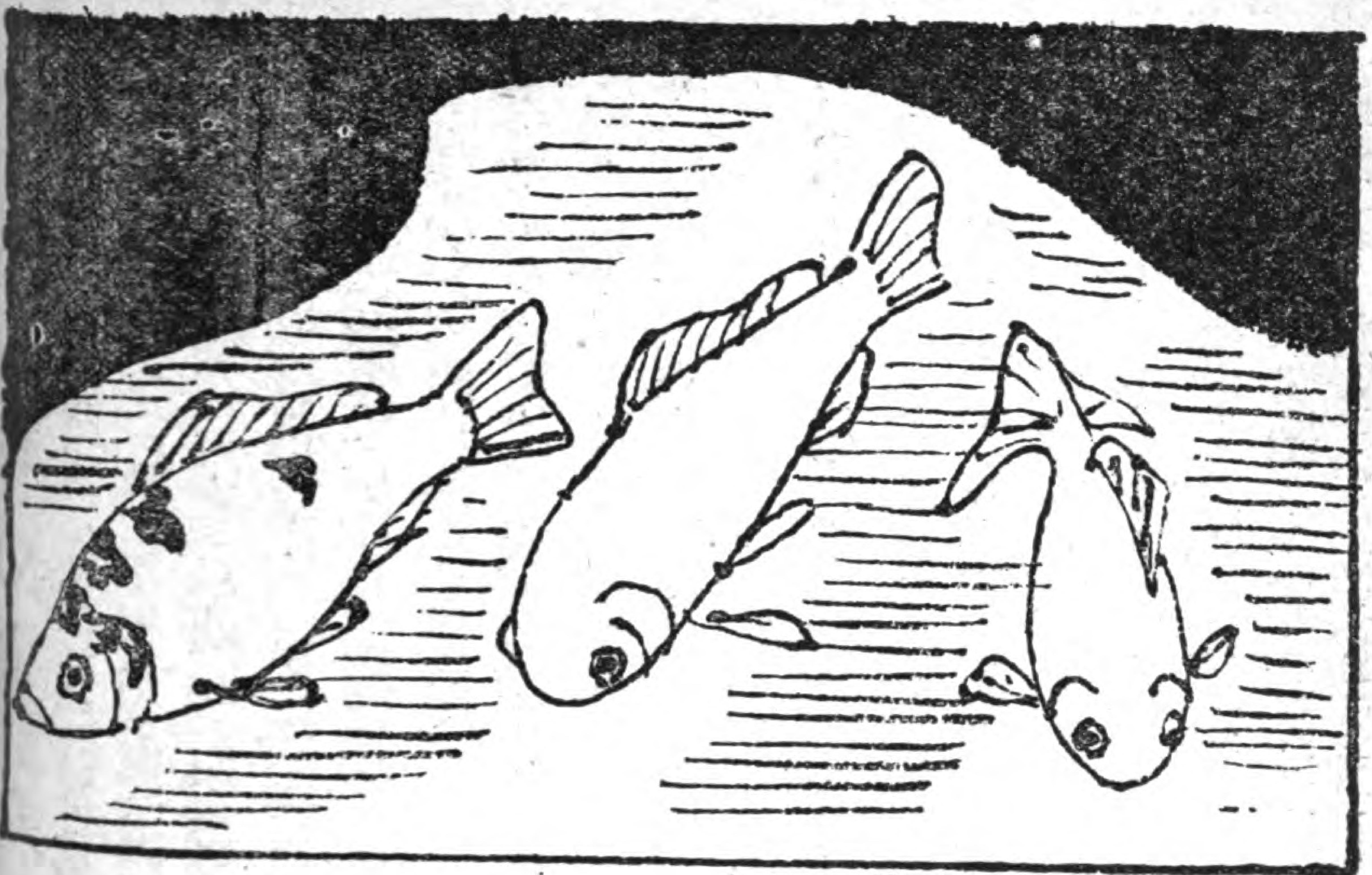
お前は年中しやらむない戀愛小說ばつかり讀んでるよつて、文學中毒を起してんねん。お前の理想はナオミのやうなヴンパイアになることか?」「うるさいなあ、ほんまに」云うて、私が取り合はんと横を向いてしまふと、「一體あの光子云ふ兒も眞面目なお孃さんやとは受け取られへん。なんぼお前がすすめた云うたかて夫婦の、、へ這入る云ふ法あるもんか。少し常識のあるもんやつたら、人の家庭へ、闖入して平和を破壞するやうなことする譯があれへん。あらきつと性質ええことない兒やで。あんなもんと附き合うてたらお前も今に迷惑するでエ。」——自分のことよか好きな人のこと云はれた方がどないに口惜しいか知れんもんで、此の光子さんの惡口が出ると思はず識らずむかッとしました。「何やのん、あんた!あんた何の權利があつてうちが大好きや云ふ人のこと兎や角云ふのん?光子さんほど姿と性質のぴちツと合うた人、世界ちゆう搜したかて又とあれへん。あんな心の淸い人、人間やあれへん、觀音樣と同じこッちや。惡口云うたら勿體なうて罰あたるわ!」「それ見い!そんなこと云ふのんが正氣の沙汰やあれへん!氣違ひの云ひ草や。」「あんたこそ人間の化石や。」「お前、いつの間にや立派な不良少女になつてしもてんねんなあ。」「どうせうち不良やよつてなあ。——そんなこと昔から分つてんのに、何でそんな

もんと結婚しなはつてん？　あんた、うちのお父さんに洋行費出して貰ひたうてうちを貰ひなはつたん？　きつとさうだつしやろ！」なんぼ人のええ夫でもこんだけ云うたら見る見る額に青筋を立てて、「なんやと、もう一ぺん云うてみい！」と、珍しことに大聲で怒鳴りました。

「ふん、何べんでも云うたげるわ！　あんたは男らしいもない、お金が欲しいてうちと結婚してんやろ！　卑怯もん！　意氣地なし！」とたんに夫がむくッと据わり直したと思たら、なんやシューッと白い物が飛んで、カチッと後ろの壁に當りました。夢中で首をちぢめたので私は何ともありませなんだが、灰皿を取つて投げ付けたのです。夫が假りにも私に對して手を擧げるなんぞ云ふことは今迄一ぺんもなかつたんで、かつと興奮してしもて、「あんたうちがそないにまで憎いのんか！　うちの體にカスリ傷でもさしたらお父さんに云うたげるさかい、それ承知やつたら叩くなと殺すなと勝手にしなさい！　さあ殺して欲し！　殺して云うたら！」夫は「馬鹿！」と云うたなり、半狂亂に泣きわめいてゐる私の姿を呆れて眺めてるだけでした。

夫も私もそれなり口をききませんで、明くる日一日睨み合ひをつゞけて、晩に寢室へ這入ります時もやつぱり默つたままでしたが、夜中ごろに夫がぐるりと向き直つて、肩へ手をかけて、私の體を自分の方へ向け變へようとしますので、される通りにしながら眠つたふりをしてますと、「ゆうべは僕もちよつと云ひ過ぎた。そやけどそれもお前を愛してる結果や云ふことはお前も分つてるやろう。僕は態度が無愛想やよつて冷淡なやうに見えるけど、心は冷淡と違ふつもりや。僕に悪いとこあつたら出來るだけ改めるやうにするさかい、お前も僕の意志を尊重してんか。僕は決して外の事には干渉せん、ただあの光子云ふ兒とは今後交際せんといてくれ。何卒それだけ約束してくれ。」「イヤや」と私は、眼をつぶつたまま強う首を振りました。「それがイヤやつたら交際するだけは仕方ないよつて、せめてあの兒を此の、、へ入れたり、二人だけで何處やかし行かんやうにしてくれ。そんで此れからは家を出るにも歸るにも僕と一緒にするやうにしてくれ。」「イヤや―」と私は又首を振りました。「うち、自分のすること束縛されるのイヤやねん、絶對自由にしてほしいわ。」さう云うて私は夫の方へ背中を向けてしまひました。

（つづく）



海の上

里見弴

一

一日さんがい眞黒になつてたかの知れた漁をするより、田舍訛まるだしでも、お愛想のひとつも云へる口をもつた輩なら、見掛取りに、時には相應の稼ぎにもなるのだらう、小坪へんの怠漁師どもが、あちこちに屯し、どかりと砂濱に尻を据ゑたなりで、通りかゝりの都人士に、釣や見突、鎌倉江の島あたりまでの遊覽と、それぐ誘ひの言葉をかけてゐる。それが、以前辻待の俥夫の「旦那々々！」などゝ聲をかけたより、迥に圖圖しさの度が強いので、直輔は、つひに一度目を向けてやつたこともなかつたのだが、六月の初旬、年に幾度と數へるほどの朝風のうらゝかさに、氣も輕く、つれのない散歩をそのまゝ、海の上まで乘り出して見る氣になつた。汀に折り返す波も、ちつと風立つた日の湖くらゐのもので、五分ほども延びた不精髭にだいぶ白いのゝ見える爺一人の手に、樂々と水へ滑り出して行つた。三突四突で竿を置き、櫓ちんにいいしめりをくれながら、

「旦那、不動樣の往復で五十錢だがね、――有名な親子不斷……」

「なに、見物はいゝんだよ」
「はア。おや灘がいゝからちつと鯊でも突くべえかね？」
「うーん」
どうせ素人に出來さうもないことを、たゞ見てゐるだけでは、と氣が乘らなかつた。「そこらひと廻りして貰ふだけでもいゝんだ」
「旦那、釣はどうだね？」
「釣れるのかい？」
「道具はへえつてろけれど、相憎餌を切したから……」
「そイぢア仕樣がないぢアないか」
「なに、だいぶ白子引きが出てるから、いゝ餌があんべえと思ふだがね」
……」
四五人乘り込んで、手捲の車にガタ〳〵と綱を引きよせてゐる舟の方を見やつて、
「あゝ、あれ白子をとつてるのかい。一體、白子で何が釣れるんだい？」
「まア、鯵や鯖ッ子なんぞだね」
「鱚ででも出來るかしら」
「なアに、ぞうさもねえだよ」
子供の時分、夏休みといへば大抵鎌倉で過ごした直輔だが、飯粒かなんかつけた餌を、[illegible]に[illegible]り込むくらゐの、ほんの[illegible]のやうなことよりほか、釣の味はまつたく憶えがなかつた。それだけに、かういふ思ひがけない機會に、ちよつとやつてみたい氣もして來た。
「餌は、あの舟へ行けばわけてくれるんだね？」
「あゝ、五十錢も買つて貰やア一ン日釣つてもあまるくらゐでさア」
「ぢアやつてみるから、餌を買つてくれないか」
「へえ」
艫をふり〳〵白子引きの方へ近よつて行つた。角の丸い微浪に、兩舷でも擽られてゐるやうな、クル〳〵、コロ〳〵といふ忍び笑が、舟底の方から聞えて來る。直輔は煙草に火をつけ、海の上の空氣と一緒に深く吸ひ込んだ。底重が彩けてゐるほどではなくとも、水平線上の空の涯は薄紅く霞んで、飽まで明るいながらも、六月の日の光は、とろり〳〵と懶げだつた。いきなり、切つて取つたやうにまるで風のあてない海面に乘り入れたりしたが、そこでは猶さら、あたり一面錆色の鈍い光に包まれて、薄黃色くあぶくの漂つてゐるのも陰氣くさかつた。直輔には、それ等がすべて新鮮な感觸で來た。話し相手はなくとも、少しの退屈も感じなかつた。
餌を買つて、またやゝ暫く沖へ漕ぎだしたところで碇を入れ、どか

り胡座を組んむと、漁師は、箱のなかを引ッ掻き廻して、あれこれと暢氣らしく道具を調べはじめた。そんなものも肇て見る直輔は、まづ客のために用意されたのには手も觸れずに、漁師が餌をつけて擲り込むまで待つてゐた。見眞似と二言三言の說明で、呼吸はわからずと、も、餌のかけ方、糸をおろして置く深さなどひと通りのことはわかつた。釣と云へば、竿を使ふものとばかり思つてゐたのに、これは指の先に糸をかけて、そこへ傳つて來る響で喰ひを知るやり方だつた。

ほどよく漁師は、三寸ばかりの小さなやつだけれど、二本の鉤へいちどきに二尾の鯵を釣りあげた。それを見ると直輔は、なんの手答もあつたわけではないのだけれど、ひよつと喰ひついてゐさうな氣もして、慌たゞしく引きあげてみたが、片一方の餌がなくなつてゐただけで、無論魚はかゝつてゐなかつた。漁師ばかりに、四五尾の小鯵が釣りあげられた頃だつた。

「どうだ、ちつたアかゝたアあるか」

といふ錆聲が、遠くから水の上を渡つて來た。見ると、こつちと同じくらゐの年頃の漁師が、ゆるやかに櫓を操りながら、同じほどの小舟をよせて來てゐた。十二三の男の子が、生意氣に鉢卷なとして、[illegible]の間に鯵を抱いてゐるのも見えた。

「[illegible]、いまの來たは[illegible]かたアよ」

「ふーん」

暫くして、「そんでも、かゝたくれえあるか」

「じんたアちつとぐれえ喰ひさうだアよ」

「ふーん。なんでも、昨日の晩方アちつとはいゝのが出たせえかなア」

そんな、直輔にはわけのわからないことを云ひながら、なほ近くによせて來て、暫くあたりを見廻してゐたが、やがてそつちでも小僧に碇をおろさせ、チヤポンと道具を擲り込んだ。

いかにしても長閑だつた。春さき、山懐の田畑などを、欠を催すやうな長閑さで眺めたことはあるが、凪の日の海の上にも、全くそれと同じものがあるのを、直輔は、もの珍しく感じた。十町あまりの海を渡つて、どこからともなく陸のもの音の聞えて來るのも、心を靜にした。いつどこで讀んだ文句か、「桑麻鷄犬相聞ゆること數里」といふのが、ふと思ひ出されたりした。

ピリ〳〵と指先へ響くものがあつた。

「來たツ！」

直輔は[illegible]、[illegible]糸をたぐり込んだから、水底に[illegible]いてゐると、[illegible]銀色に光る小[illegible]うなものが、ヒラ〳〵と躍り、

[illegible]

「ほう。かゝつてる、かゝつてる！」

爺も笑ひ聲で、「ぴしに手をかけて、ヒョイと、輕く……。さう〳〵！」

そんな風に、そばから加勢してくれた時には、小魚はもう舟の胴の間に、ピチ〳〵と跳ねかへつてゐた。やらないうちは、獲物を鉤からはづすのが、ちよつと氣味わるさうに思へたが、嬉しまぎれにいきなりぎゆつと掴んでゐた。

三尾四尾とだん〳〵に調子もわかり、直輔は面白くて面白くてたまらなかつた。

「これアどうして、旦那ア はじめてつてこたアねえでせう」

そんな風に油をかけられたほど、あとからあとからと釣れて來た。漁師と比べても、五と三くらゐの割合にはいつた。然しこれは、よほど間がよかつたので、その後もそんな喰ひに出逢つたことはめつたになかつたが、午をだいぶ過ぎて、空腹に堪えられなくなり、いや〳〵ながら引きあげて來た時には、獲物の數も八十に近かつた。——これが病みつきで、直輔は、二日にあげず出かけるほどの釣好きになつて了つた。

凝性だけに上達も早かつた。初めは、つい舷の方を向いて坐るために、引きあげた糸で膝は濡れるし、胸につかえてひと引きにさう長い糸はあげられなかつたのを、漁師の眞似をして、舷を横に座を占めてみると、たぐる手が自由なばかりでなく、濡れた糸も具合よく舷の間に楕圓を描いて、めつたにこんがらかるやうなこともなくなつた。だん〳〵喰ひに合せるこつも嚥み込めて來たし、魚の習癖をも聞き知ることが出來た。鯵は行儀のいゝ魚で、腹のすいてゐない時には、どれほど群つてゐる眞中に餌をおろしてやつても決して食はない。おまけに二食主義とみえて、朝早くと晩方が一番よく釣れる。——そんなことも知つた。最初の日、何を云つてゐるのかさつぱりわけのわからなかつた漁師の釣に關するテクニカル・タームもいつとはなしに憶え込んで了つた。かたのあるなしとは、喰ひのあるなしを云ひ、じんたとは當歳か二歳の子魚の謂で、はがいゝとか悪いとか云ふのは、魚の大さを意味するものとわかつた。そんな具合に、だん〳〵巧者になるにつれて、いよ〳〵興味はますばかりだつた。わざ〳〵東京へ出かけて行つて、道具もひと通り以上に揃へて來た。

思ひがけない遊びを憶えたおかげで、けれども、この夏は、本職の繪の方はとかく怠がちになつた。日中の喰ひの悪い間に、と思つて、油繪の道具を積み込んで行つたこともあるが、海上からのしまりのない眺めはどうにもものにならなかつた。たまでかめからしやくひあげたばかりの鯵を一尾、丁寧に寫生したのも、寧ろこの魚を詳しく見て置きたいやうな氣持に支配されて了つて、繪としての出來榮は大して

よくなかつた。二頭を追ふもの一頭を得ず、——そんな言葉を苦笑ひのうちに胸に浮べて、いつそ潔く漁師になりすました氣で、帆で間に合せた日よけの影に、屈託のない午睡を貪つたりした。尤もその頃には、もういゝ加減半玄人の氣で、前に賴んで置いて、朝の白々明から出かけることにしてゐたから、午ごろになると眠くもあつた。よく漁師と二人で、何時間といふものを、海の上にぐつすり寢込んで了つた。

この道樂は、とは云へ、決してさう安上りといふわけにはいかなかつた。もと〳〵商賣をそつちのけに、客を釣りに出てゐるやうな氣性の漁師たちのことだから、どれもこれも慾張りばかり揃つてゐて、直輔のやうな常連に對しても、大して割引きもしずに、一時間いくらで賃銀を請求した。それとて無論大した金額ではないのだけれど、舟の上で一緒に晝寢をしてゐる時間に對してまで金を拂はせられるのかと思ふと、——殊に不漁の時などは腹が立つた。大漁なら大漁で、機嫌のいゝところへつけ込んで、暗に酒手でもほしさうな口を利くし、どの道あんまり愉快な相手ではなかつた。折よくそこへ、近所の川添に別莊をもつてゐる知人から、あと半分の夏を、山の方へ行つて過ごさうと思ふから、うちのボートを遠慮なく使つてくれ給へとの話があつたので、いよ〳〵漁師を離れて、一本立でやつてみる氣になつた。まートは、二人乘りの、ほんの一間かそこらのものだつたけれど、それ相應の帆も張れるやうになつてゐたし、逗子の海なら間違もなささうだつた。それに、この頃では、素人が一番困る漁場まですつかり覺えこんで了つたので、いつかは一本立の漁をしてみたい氣が可なり強く起つてゐた。鯵のよるいゝわまは大抵きまつてゐた。榮螺根、黃金根、松井だし、沖の松井だし、など、名づけられてゐるそれ等のいゝわまの上に舟をとめるには、それ〴〵の方法があつた。それは、二つの方角で、二つの點を結び、その延長線の交はるところを見出せばいゝわけで、例へば、赤瓦の洋館の後へ、××山の禿を被せるやうにし、一方には、袴腰と呼ばれる島の上へ、□□の松並木を乘せる具合に見通せば、そこがほゞ○○根の中央にあたる、といつた風な、至極簡單だけれど間違のないやり方だつた。よしんばそれを知らないでも、玄人が釣つてゐるそばへ行つて碇をおろせばいゝわけだが、凝性な直輔は、いつの間にか、さういふ位置の測定法まで、訊くともなし漁師たちの口から引き出して置いたので、是非ともそれを、自分の眼と腕とで、實地に試してみたかつた。

前の晩に買はせて置いた白子を始め釣道具一切、ひるの辨當、水筒などを、兩肩や兩手に提げて、つい庭先からボートに乘り移れるやうな知人のうちへ出かけたのは、[illegible]

はなれて行く頃だつた。なま温い朝靄が、睫に來て玉をなした。―
―四十に近い直輔も、まるで遠足に出かける小學生の心持だつた。
別莊番の爺さんは、丁度井戸端に出て、ゴロ〳〵ゴロと咽を鳴しながら、うがひをつかつてゐるところだつた。
「お早う！　ボートを貸して貰ひに來ましたよ」
「大さうまたお早いんですな」
それにはたゞ笑ひ顔で答へて、
「オールと、序に帆も出して貰ひませうかね」
「へえ、唯今」
すぐそばの物置小屋にはいつて、そんなものを擔ぎ出して來てくれたが、石段の下に、乘り捨てられたまゝのボートの、露に濡れそびれてゐるのを見ると、
「あゝ、これアいけない。昨夜ひきあげときやアよござんしたね」
「なアに、平氣ですよ」
「まア、お待ちなさい。いま布團を持つて來てあげますから」
云ひながら、別莊番がボートのなかに抛り込んだオールが、ゴトゴトン、ゴンと、へんに甲高く響くと、靜まり返つた川面に、對岸の松並木の影が搖れて、ゆるやかな波紋が擴つて行つた。
「いゝんですよ。布團なんぞ要りませんよ」
「なに、舟で使ふのが、―惡いのが出來てるんですから、ちよつとお待ちなさいましよ」
「さうですか。ぢやア……」
下駄のまゝ飛び移つて、荷物をそれ〴〵の場所に始末してゐるところへ、席に結いつけられるやうに紐のついた布團を二枚もつて來てくれた。
「どうもお世話樣」
「いゝえ。……お一人で大丈夫なんですか」
「なに、この凪ですもの」
「然し、あんまり沖へお出なさらない方がようございますね」
「えゝ、大丈夫！……かうつと、もう忘れものはなかつたかな。……あゝ、碇は？」
「艫ンとこへはいつてる筈ですが……」
「あゝ、あつた〳〵。ぢア、行つて來ます」
舫を解いて、舟へ抛り込みながら、
「行つてらつしやい。どうぞ澤山お土産を……」
その、人のいゝ笑顔に送られて、直輔はオールを操りだした。
海の上には、いつかもう靄もはれて、小坪の鼻が赫々と朝日に輝り映えてゐた。朝を喜ぶ小鳥のやうに、魚もまた水を打つて、戲れ跳

——海の上——

あがつた。面倒をして、わざ〲帆を張るほどの風もないので、直輔は、樂なピッチで漕ぎ續けて行つた。

わりに近いのと、位置の測定法を一番はつきり憶えてゐたのとで、最初まづ榮螺根に碇をおろした。見渡したところ、鰺舟らしいものがまだ一艘も出てゐないのも、何か子供ッぽい得意の種だつた。

糸を入れる間もなく、クンクンとへんなあたりがあつたので、あげてみると、虎斑のある小さな河豚で、水を離れやうといふ間際に、その鋭利な前歯で天蠶を噛み切つて逃げて行つて了つた。

(いきなり鉤をもつてかれるなんぞは、こいつは今日は、あんまりいゝこたアないかも知れないぞ)

そんな風に考へながら、道具箱から新しい鉤を取り出してつけかへた。

町の方から、冴々と六時のボーが聞えて來た。チヤポンとびしを擲り込んで置いて、直輔は、腕時計を見、龍頭を捲いた。遙の沖には、乘い、さうだか鯛でもやつてゐるらしい漁船が、點々と撒かれてゐたが、乘つてゐる者までは見えなかつた。それで氣がついて、陸の方を振り向いてみたが、これだけ廣い眼界のうちに、人間の姿とては、たゞの一つも見出せなかつた。そのくせ、逗子の濱邊から葉山街道へかけての人家は、朦朧のなかに靜かに竝ら點んでゐた。そこに住んでゐるべき管の人が一人殘らず死に絶え、沖の漁船にも生きた人間は乘つてゐないものとしたら、——ふと、そんな空想が、風のやうにあたまを掠めすぎた。心細かつた。一艘でも鰺舟が出たら、そのそばに並んで釣らう、と思つた。一人なら、氣の散りやうがないから、釣に專念できるだらう、といふ考へは、全く裏切られて、氣がついてみると、先刻から、何かにかあたまばかり働かせてゐて、糸の手元はお留守になりがちだつた。それに、河豚に鉤を取られたあと、まるで喰ひもなかつた。引きあげて餌を調べたが、兩方ともちやんとついてゐた。

(四五日前にも、松井びしの方がよかつたんだから、いつそあすこまで出てみるかな)

そこまで行けば、つい鼻の先に小坪の漁師町が見えるわけだつた。が、碇をあげて、また四五町ばかり漕いで行くのは、ちよいと億劫な氣もした。それに、目路のかぎり、人間の動く姿を見ないといふ寂しさ、心細さには、何かしら一種の魅力もあつた。

……コロ〲、クル〲と舟底を鳴らしてゝ漣が立つて來た。肌を撫でられるやうな陸軟風だつた……。

……だしぬけに、直輔には久しく忘れられてゐた生々しい慾情が目覺めて來た。おまけにそれは、女の肉體などを空想する遑なしに、いきなり飢しい自慰の慾望に捉へられるやうな、奇態な性のものだつた。

……けれども直輔は、格別驚歎かなかつた。その依つて來たるところは、すぐ思ひあたつてゐたから……。

……矢張り繪を描いてゐる友達で、細君との間も至極圓滿だし、少しもさういふ方面の不自由など感じてゐる筈のない男が、或る時たつた一人で乙女峠を越えやうとして、急にもつと高く登つてみたくなり、あれから峰づたひに、なんと云ふ山か、兎に角近くにはこれより上はないといふところまで行きつき、一方には仙石原、姥湖、一方には御殿場の村々を見おろし、一望つくるところのないやうな景色に恍惚としてゐるうち、急に不思議な亢奮が來てどうにもおさまりがつかず、初めは手を振り踏鞴をふんで、咽も張り裂けんばかりの大聲に口から出放題をがなり立てゝゐたが、それでもまだ何かしらもの足らない氣持から、不意に靑草の上へ大の字にふんぞり返ると、果しも知らない蒼穹を仰ぎ見つゝ、遂に少年の日の、、、、、、、、たが、實に愉絶、快絶、あとにも先にもこれほど健全な、、は覺えがない、——とかう、赤らめでもすることか、大得意で話して聞かされたことがある。當時の直輔自身には、その經驗こそなかつたけれど、いかにもそれはさうありさうなことゝ、まざ〱とした實感だけは映つて來て、思はず腹を擁えて大笑ひに笑ひ轉げたやうなわけだつたが、今も、すぐその話が思ひだされたためか、最初の經驗としての驚きは感じられなかつた。

けれども、その、山での誘惑を思ふにつけ、樵も獵夫も煩さない、四方八方から望み得る海上にありながら、たゞ一つの眼さへ向けられてゐないといふ不思議な感じは、一層刺戟の度を強めて來た。一方は高さで、これはうち開いた廣さで、謂はゞ公明正大とも云へる情慾が、むら〱と湧き募つて來るのを、いかんともせんすべがなかつた。

……沖には點々たる漁船だつた。陸上にはたち並んだ家々だつた。空には、——飛行機はよぎらずとも、八百萬の神々の眼が輝き光つてゐると考へられないこともなかつたが……。兎も角、大自然の懷で、やんちや小僧のやうに、うんと仕たいざんまいが振舞ひたかつた。

……經驗に教へられて、激しい日光の直射に備へるため、成可く地の厚いワイシヤツを着、洋袴もわざと古い冬物を用ゐてゐたが、そんなうるさいものは、何もかも引きちぎつて了ひたかつた。生れたまゝの素ッ裸になつて……。

慌たゞしく直輔は糸をたぐり込んだ。それから、もう一度、ぐるりと四方を見廻すと、シヤツをかなぐり捨て、洋袴をぬいだ。そのまゝ暫くは、仁王立に突つ立つてゐたが、舵手の腰かけに飛び移ると、いきなりザブンと海へ身をおどらせた。ボートが、おい、おどかすな

い、とでも云ひたげに、揺れながらすうッと前に出た。ポカリと頭を浮べた直輔は、これが四年前の肺病患者かと思はれるやうな逞しい腕で、あざやかに水を切り切り、そのあとを追つた。

二

冷やつこ、胡瓜もみ、鯵の生干、海老の鬼殻、そのあとへ茄子の丸揚が運ばれて來た。

「これア、なか〳〵大した御馳走だ」

直輔は、手酌で杯を滿しながら、客と婆やとにかねて云つた。

「へゝゝゝ」

婆やは相格を崩して、「相憎なんにもございませんで……」

「なんて、普段はもつと澤山ありさうなことを云つてからに……」

「婆やさん、どうぞもうほんとに構はないで頂戴よ」

去年の丁度いま時分から、十一月末までこゝに住んでゐて、時々繪を見て貰ひに來てゐた佳子が、おつき合ひに飲まされた一二杯の酒で、今風に紅の濃い頬を一層赤く、横坐りの絹靴下の足頸を引きよせながら、「久振りで婆やさんのお手料理を頂いて、なんだか懐しい氣がするわ」

「どうしたてんだい、兩方でお世辭の云ひッくらをしてるぢやないか」

「あら、先生、あたしお世辭なんか云ふやうな女ぢアありませんわ」

「知つてるよ。それがたまに云ふから滑稽だつてえのさ」

「まア、滑稽だなんて……」

笑ひながら、婆やは腰を擡げかけたが、「お銚子、まだございますか」

「さうだな、もう一本だけつけて貰はうかな。……堀さん、君、ほしかつたら構はず先に飯にしてくれたまいよ」

「いゝえ、まだいゝわ」

「ぢア、そろ〳〵もうフライにかゝりましてもようございませうか」

「何だ、まだ出るのか？」

「御飯のおかずに鯵のフライを差上げやうかと思ひまして……」

「また鯵か。鯵攻だな」

「でも、旦那樣、置いて、悪くして了ひましても……」

「いゝよ〳〵。自業自得だ。仕方がない喰つてやるよ」

婆やが立つて行つたあとに、

「何が、先生、自業自得なんです？」

「いゝえね、この頃は鯵で夢中なんだよ。鯵なんぞまるつきり出來やアしない」

「そイぢア、先刻のも先生が釣つていらしつた鯵なんですか―

「さうさ」

「うそゥ！　一緒にいらつしやるだけで、漁師が釣るんでせう？　さうよ、きつとさうだわ」

「冗談いつちやいけない。嘘だと思ふなら、……あゝ、明日つれてつて上げよう。どうだい、一緒に行かないか」

「だつて、あたし、今夜はどうしても歸らなくつちア」

「どうしてさ、泊つてつたらいゝぢアないか」

「だつて、あたし、ちよいと日歸りのつもりで出て來たのに、鎌倉のお友達ンとこで、二晩も引きとめられちまつて……」

「そんなこと、こつちの知つたこつちやアないやね。あれッきり、半年以上、端書一本よこしもしないで、だしぬけにヒョッコリやつて來たと思やア、すぐ歸るなんて……」

「あら、先生、歸るとすぐお禮狀もあげたし、お年始狀だつて出してますわ」

「そんなこたアまアどうでもいゝが、一體、君ア、……今どうしてるんだい？」

「どうもしてやしないわ」

「愛人といふやうなものでも出來て、それと同棲してるつて云ふやうなわけなのかい？」

「そんなわけでもないわ―

「そイで、姉さんとこに一緒にゐるんでもないんだね？」

「いろんなめんど臭いことばかり云つて、うるさくつて仕樣がないから、こつちからさつさとおんでちまつたの」

「姉さんの御亭主に、へんな目つきでもして見せたんぢアないのかい？」

「いやだわ！　誰があんな……」

「そイで、今ゐるところは？」

「去年こゝに來てた時みたいに、またもや部屋借りの身の上。でもね、いやですから、お友達と二人で、自炊でもいゝから一軒うちをもたうかなんて云つてるんですけど……」

「自炊？　それア男の云草だよ。女が炊くべきものを、男自ら炊くといふ意味ぢアないか」

「あら、さうなの？」

「どうだかよかア知らないがね……。そイで、そのお友達つてそのが、つまり君の愛人なんだね？」

「驚いた！　見かけによらない、先生、なかくやきもちやきね」

やゝ鼻白みながらも、

「やきもちより好奇心だよ。一體、世に謂ふモガなるものが……」

「いやなの！　あたしなんぞ、ちつとも、モダンぢアないわよ」

「さうかね、ソイぢアなんだらう」

「あたしなんぞ、これでもうとても古い方よ」

「ふーん、君にして尙且古いとなると、僕等にやアとても想像もつかない」

「それアさうよ。ほんとうのモダン・ガールなんてものは、それアとても凄いもんよ」

そこに、婆やが銚子を持つてはいつて來た。

「いかゞです、堀さん、お先に御飯を差上げませうか」

「いゝわ。それよりね、婆やさん、二階の先生のお部屋に、あたし煙草を置き忘れて來ちやつたのよ。赤いこのくらゐな箱……」

「へえ、取つて參りませう」

「敷島でよけれアこゝにある。……おい、婆や！　序に二階の灰落も持つといで！」

「出來ないけど、一遍お酌しませうか」

「いや、結構！　しよつちう手酌でばかりやりつけてるから、却つてこの方がいゝんだ」

それには答へずに、ボイルのワン・ピースからむきだしの兩腕を深く組み違へ、肩のつけ根のあたりを輕く叩きながら、

「ヒリヒリしてたまんないわ」

「ずゐぶん赤いね。肥り加減と云ひ、なんだか蛸の足みたいな感じだな。……いつから、君、そんな洋服なんてものを着だしたんだい？」

「似合はない？」

「似合ふよ。だけど、先みたいに、和服で斷髮の方が、不調和から來る面白味があつて、僕ア好きだな。洋服ぢアあんまりあたり前すぎるよ」

婆やがはいつて來て、

「これでございませう？」

「えゝ、それ」

「もうすつかり空ツぽでございましたよ」

「あいた！　さうお」

「安もんでよけれア、慥か兩切もあつたたらうよ」

「えゝ、結構！　頂戴な」

「飛行機の繪のついたの、——あれでよろしいんですか」

「エヤシツプ？　えゝ、結構よ」

茶簞笥の抽斗から出して來たのを[illegible]とつくに[illegible]イからね、胸にお

ひやが一杯頂きたいのよ」
「水はあんまりよくないよ。……婆や、なんかサイダーみたいもん取つてなかつたのかい？」
「いゝえ、だいじよぶ！　水の方がいゝの。しよつちう飲みつけてるから……」
「だつて水道の水たア違ふぜ」
「でもだいじよぶよ。そイで、もしあつたら氷を入れて來てね？」
「はい、畏りました。なに、少し鹽氣があるだけで、こゝら近所ぢアうちの井戸が一番よろしいんですから……。あつちこつち方々から貰ひに參るくらゐなんですから……」
それが來ると、ゴク〳〵咽を鳴してひと息に飲み乾して了つたが、
「あゝおいしかつた！　もう一つお代りして頂戴な」
「えらいもんだなア！」
「何が？」
「まるで勢が違ふよ。……一體、君ア、いくつになつたんだつけかね。二かい？」
「二十三」
「成程ねえ。考へてみれアひと廻り以上違ふんだからなア」
「でも、先生、去年より却つて若くおなりなすつてよ」
「そんな馬鹿なこたアないが、肥つたこたア肥つたらう？」
「だけど、ずゐぶん……」
そこでクス〳〵笑ひだした。
「何だよ、ずゐぶんどうだつてんだよ」
「ずゐぶん、黒いことも黒いわね」
「黒いだらう？」
と、自分で自分の手頸を見ながら、「何しろ、海にはいつて、三四日でかあツと焦きつけたのと違つて、六月以來ぢり〳〵ぢり〳〵やつたんだからね」
「なんで？……あゝ、さう！　釣？」
「ねえ、行かうよ、明日一緒に！　それア實に面白いから。まア、騙されたと思つて一ン日つき合つてみたまい」
「だつて、あたし、釣なんて一度もやつてみたことないのよ。あんまり面白いもんでもなささうぢやないの」
「ところが！　始めは僕だつてさうなんだよ。こゝイ來てからもう足かけ六年にもなるけれど、ついに一度釣なんてやつてみようとも思つたこたアなかつたんだよ。それが、なんの氣もなしにヒヨイと一遍出かけたやつが、忽ち病みつきでね。何しろ、その生れて始めてといふ日に、小一日で八十尾から釣れたんだからね。一度やつたら、誰だつてこ

の味ア忘れられないよ」

「先生一人で八十尾？」

「それア漁師と二人でだけど、それだつて、そのうち三十尾は僕の釣つた分だからね。……悪いこたア云はない、まア一遍やつてみたまい！」

「だつて、むづかしいんでせう？」

「だからさ、始めての時に……」

「釣もいゝけど、蚯蚓をつかまなくつちアならないのが……」

「ところがそれが素人考へで、大違ひなんだ。白子だよ。よしんばそのまゝ食つたつてちつとも差支ないんだから綺麗なもんさ。知つてるだらう、白子……？」

「さう、蚯蚓ぢアないの。でも、どつちみち明日は駄目よ。また近いうちに出直して來ますから、そん時につれてつて頂くわ」

「なんだい、いゝぢアないか。どうせ日歸りのつもりで出かけて來といて、二晩も三晩も泊つてくやうな暢氣な身の上なんなら、それが四晩、五晩になつたところで、ちつとも差支ないわけぢアないか。ぐづぐづ云はないで泊つてきたまいよ」

「少しお醉ひなすつたのね、先生」

「醉つたつて醉はなくつたつて駄目だよ、なんてつたつて歸しやアしないよ」

「いやアよ、そんなむちやくちや仰有つたつて。……何時でせうね、この次の汽車は？」

「この次にもなんにも、もう汽車なんかありやアしないよ」

「嘘ばつかり！　まだ……」

と、柱時計を見あげたが、「あら、もうこんなになるかしら。これ、出鱈目ぢアない？」

直輔も振り向いて、

「九時ちよつと前かい？　もうそれアそんなもんさ。だから、今夜はもうとても歸れやしないよ」

「だいじよぶよ。たしか十時何分つて終列車があつたと思ふわ。……兎も角あたし御飯にして頂かう」

と、腰を擡げかけるのへ、

「まア待ちたまい。今すぐ來るよ。なんだかぢやア〱いはせてるやうだから、フライでも出來るんだらう」

「もうおかずは澤山。あたしお櫃を貸りて來るわ」

勝手を知つた臺所の方へ、さつさと出かけて行くのを、直輔は、盃をあてがつた脣で、ニヤリ〱薄笑ひながら見送つてゐた。

すぐそつちからは、[illegible]だこに、何か云ひ爭ふ聲が聞えて來た。聲

く飯でも食べて行くやうな客がなかつた折だけに、人懐しく、婆やまでが一緒になつて引きとめてゐるらしい氣勢だつた。そのくせ、去年こつちにゐた頃には、二日も續けて遊びに來ると、すぐにもう老女らしいやきもちから、「ほんとに堀さんもいゝけど……」あゝのかうのと難癖をつけたりして、どつちかと云へば嫌つてゐる風だつたのだが、そこがお天氣者のことで、うつて變つた今日の優待ぶりなど、いかにも婆やらしく可笑しかつた。

「えゝ、でもね、明日ちよいと東京に用事もあるし、どうしても今夜ぢうには歸らなくつちアならないのよ」

そんなことを云ひながら、お櫃を擁え込んだ佳子を先に、婆やはフライの皿を二つ廣蓋に載せて一緒にはいつて來た。

「おい、そいつはね、ソースは普通のよりマギーがいゝぜ」

「はい、唯今。……堀さん、お歸ンなさるんでございますつてねえ」

「噓だよ。歸りやアしないよ」

「いゝえ。今夜だけはほんとに歸らなくつちやア困るの。またきつと近いうちに伺ひますわ。繪もね、二三枚見て頂きたいのがあるんですから」

「へえ、そイでも感心に、まだ時々は繪を描いてるんだね？」

「それアさうよ」

婆やがよそつて出した茶碗をうけとりながら、「先生、お先に頂きますわ」

「どうぞ〳〵。……然し、ほんとにいゝ氣持だぜ、朝はやアく、まだお天道様が出ないうちに……」

そこまで云ひかけて、急に立ちあがると、緣先の張出しへガタ〳〵と飛んで出たが、月のない空を見あげて、「だいじよぶ！　この陽氣なら明日も大漁だ。行かうよ、是非行かう！　ねえ、君！」

「一體、舟はどつから出るんですの？」

「すぐ近くだよ。富士見橋のそばの別莊にボートがあるんだ。そいつを貸りてね……」

「あら？　そイぢア漁師は……？」

「漁師なんぞ要るもんかね。僕自身が立派な漁師だもの」

「いや〳〵！　そイぢやもうなほさら御免だわ！」

「どうしてさ」

「どうしてつて、そんなけんのんなの可厭だわ。漁師がついてくんなら兎も角、……ねえ、婆やさん！」

「えゝ、わたくしもね、それア初めはずゐぶん心配して……」

「うるさいよ！……それアね、よその海だつたら知らないこと、こゝの邸なんてものは、どだい海の部にもはいらないくらゐなんだから

ね。まるで潮も同然なんだからね。ひつくり返してくれつて頼まれたつて……」

「それアさうね」

と、さらに氣のない調子でうけて置いて、給仕の婆やの方へ、「もうお仕舞。……いゝえ、ほんと。こちらに伺つて遠慮なんぞするもんですかね。お茶頂戴」

「さア、そイぢア俺もそろ〳〵飯にするかな」

縁近くに電燈を引きよせ、張出しに席を移して西瓜を食べてゐる頃には、佳子の歸心も、どうやらあやふやになつて來てゐた。なんのかのと事毎に頑張るくせに、結局人の云ひなりになつて、うやむやに初めの主張を撤回して了ふこの女の性分を、ちやアんと嚥み込んでゐる直輔などは、圖々しくもとゞのつまりを見通して、落つき拂つたものだつた。

「婆や、そこがひと通り片づいたらね、風呂の加減を見ておあげよ。そイで、なんか女物のゆかたがあつたらう？ そんなものをそつくり湯殿に揃えといて……」

「あら？ いつの間にかたうとう泊ることになつちまつたの？」

けろりとした顏つきで、あべこべにそれをひとに訊いてゐるのが、思はず直輔を噴きださせた。

「なアに？ なに笑ふのよ」

さう云ひながらも、西瓜の汁に濡れた手を、口のはたにあてがつて、自分でもくツくと笑つてゐた。

湯に行つたあとで、直輔は、豫備に買つて置いた糸や天蠶やびしを持ち出して來て、もうひとかけ新しい道具の拵えにかゝつたが、ともすれば、朝日に照り輝く茫々とした海上に、ぽつんと浮んだボートのなかの様が、空想の目の前に浮んで來て仕様がなかつた。青空の下で、壁も帳も遮さず、廣袤數十里といふ密室！ これは、空想だけでも、愉快を通り越して、寧ろ壯嚴な氣がするくらゐ素晴しいものだつた。

（ほんと云やア、こんなものどうでもいゝんだ）

物事に丹念な直輔が、その氣持から、風車の速さで、糸巻に糸を捲き取つてゐた。

「有難う。さつぱりしましたわ」

「明日もそれで行くといゝや。あんな、兩腕むきだしになつてるやうなもんぢア、とても暑くつてやり切れやアしないよ」

「だつて、着物がないんですとさ」

「着物なんざ要りやアしないよ」

「でも、不思議ねえ、どうしてお家にこんな着物があるんです？」

「それアもう、のべつ女客があるからね」

「あゝきたない！　ぢアぬごうかしら。——なアんて……」

「さうかい、帯がないつてかい？……なんかあつた筈だがなア」

「よござんすよ、要りませんわ」

「そイでね、婆やの護謨の前掛を貸りて行くんだ。でないと、あげた糸で膝の上がぐちよ濡ンなるからね。……君の道具、拵えといてやつたよ」

ぽんと抛り出したのを取あげ、興味なげに打ち返して見ながら、

「あたしもやるの？」

「それアさうさ。行つたからにやア、ぼかアんとしてたつて仕様がないぢアないか。……あゝ、さう／＼、それから綿木の海水帽をひとつ買はしといてあげよう。おい！　婆や！　婆や！」

「でも、あたし、釣はよすわ」

「なぜさ」

「あんまり船イなんぞ乘つたことないんですもの」

「だいじよぶさ！　自動車の半分も揺れやアしないよ」

そこへ來た婆やに、明日の辨當のこと、買物のこと、帯を探すことなど云ひつけてから、

「あゝ、ひよッとすると、帽子も園枝のがあつたかも知れないね。納戸を見てごらん」

「さうでございますね。えゝ、たぶんございましたでせうよ」

「あれば、今時分から買ひに出ないでもすむんだから……」

「いえ、それア、山田屋までですからぞうさもありやしませんけれど……。さア、おみ帯はどうでしたらうか。たぶんお持ち歸りになりやアしなかつたかと思ふんですけど……」

「まア、見てごらん」

立つて行つたあとに、佳子は、すまし込んで團扇をつかひながら、

「園枝さんてどなた？」

「園枝かい？　園枝つてのはね、とてもそれア大した美人でね……」

「よござんすよ、あとで婆やさんに訊くから」

「姪だよ。上の兄貴ンとこの長女だよ。この夏ぢう、弟たちを引きつれちやア、時々遊びにやつて來てたんだよ」

「あゝ、さう。おいくつにおなンなさるの？」

「知らない。……それでももう十八九にやアなるかな？」

「それにしては、この着物ちつとじみだわねえ」

「さつき僕のことをなんとか云つたけれど、君だつてなか／＼やきもちやきぢアないか」

「呆れた！　男つて、ずゐぶんみんな自惚の强いもんね」

「それァさうさ。だから、今夜だつて、君とひとつ蚊帳のなかに寝ようと思つてるんだぜ」

「えゝ、いゝわ。あたし、そんなこと平氣よ」

心中、たじ〱と來たが、

「よし！ そイぢア……」

「いゝ按配にございました」

婆やが、雁皮紙織の一重帯と、何か物の間にでも挾つてゐたと見えて、ひどく山のひしやげた海水帽とを、そこへ持つて來て置いた。

「それから、堀さんのお床どこにのべませうかしら」

「さうだね……」

目をやつたが、佳子は、蛙の音の騒がしい庭の方へ顔を向けてゐた。もう一つの蚊帳も八疊釣だつたね。……そイぢア、矢つ張りお客間がいゝだらうね」

「ぢア、あたし、お二階でたつた一人ツきりなの？」

「僕もこのごろ書齋で寝てるから、すぐ隣にゐるよ」

三

壁も帳も遮さない廣々した海の上だつた。この日も晴れて、潮は明るかつた。

けれども、直輔には、あの不思議な、密室の丸窗が、全くその姿を現はして來なかつた。それなしに、また戀なしに、若い女の肉體を、三尺とは離れない舵手席に、白々と正面から眺めてゐた。それは、子供が、宵に枕頭に置いて寝る「おめざ」として、、、、、、、、二倍にも三倍にもしなければならない筈のものだつたのに……。

(こんなわけつてない！ こんなわからない話つてない！)

殘るところは意志の力だつた。迷ひに迷つた擧句、たうとうそれだけで、、、。ちよつとした身動きにも、すぐにぐらつく小舟の上で、、、、、、、、、、、、、、、、、、、、

、、、、、、、、、、、、、、、。

「痛い、痛い！ 痛いつたら、先生！ 肩だけは御免……」

「あゝ、さう〱。……だからさ、、、、、、、、、、、、、、、……」

「、、！ 、、、、、、、！ 、、、、、、、！ 、、、、、、、、、、、！」

直輔も、日の光はまぶしく、心は暗かつたが、と云つて、、、、、、、、、、、、。

佳子は、何よりもたゞ舟のぐら〱するのが可怕かつた。それで夢中だつた。

「先生エ」

と、尻あがりに呼んで、廣い鍔で兩の頬を覆ふて顎に結んだ海水帽の蔭に、ぢッと瞳を据ゑると、「、、、、、、、、、。、、、、、、、、、！」

「…………」

、、で答へるよりほかに、云ふべき言葉を知らなかつた。

「、、、、、！　、、！　、、、！」

直輔は、自分でも、全く云はれる通りだと思つた。

「ほんとに貴方つてをかしな人ね！」

佳子は、、、、、、、、、、大聲に叫んだ。「そんなら、なぜ、……なぜあたし昨夜……、……なぜ貴方、昨夜、、、、なんぞしてたの？」

「だからさ」

直輔は、この廣袤數十里の密室に聲をひそめて、「だから君こそをかしいぢやないか。……昨夜は、現に君の、、、……」

「ですから、何も、こんな、あぶない、、、、、、……」

「だいじよぶだよ！　ひつくり返つたらお目にかゝる！」

「おアね、、、……、きつと、、、、、、、、、、、……。、、、、、、、、、、……」

直輔は、急に馬鹿々々しくなつて來た。どうしてこんな馬鹿々々しさのなかに自分自身を陷れたのか、我が身ながら腹が立つた。――離れて、舳の席に移り、女には背を向けて腰をおろした。そこで、氣を落ちつけて、この愚劣極る場面を誘ひ起して來た源の、その愚しさを索らうとした。

友達には山の上で、自分には海の上で、急に湧き起つて來た亢奮が、たつた一人を、堅い條件としてゐたことに氣がついた。二人となれば、そこはもうたゞの山、たゞの海だつた。こんな、初めッからわかりきつたことを、どうして忘れてゐたらう

（四十近くもなつて、俺もよつぽど間拔だなア！）

この發見は、然し直輔にとつて、さう苦々しい味のものではなかつた。今日の失敗は失敗として、友達を山上に踊らせ、自分を海中に潜らせた力を思ふと、女の憤と憎みとを擔つても、なほかつ餘りある喜びとユモアに、微笑がおのづと脣にのぼつて來た。

（しかたがない。堀には、ひとあやまりにあやまつちまふんだ）

直輔は、もう一度艫の方を向いて腰かけなほした……。

編輯だより

◇數十年連續せる東京市政の醜狀を思ふとき今回だけは徹底的に苛責なく司直の手によりて處罰さるることを切望する。ただし呑舟の魚を逸したり、政府黨に手加減なぞせないやうに願つておく。

◇十月號の本誌に附錄せる「彦根屏風」は約百日の日數を費し、十八色の彩色を以つて殆んど原版そのままを現はすことが出來た。市價百萬圓と稱せらるるこの名物屏風もこの精巧な附錄を通じて讀者諸君が味賞さるることの出來るのは嬉しい限りだ。この附錄のみで時價五圓以上の價値がある。この附錄をつけるとにつき鏑木淸方畫伯の厚意に負ふところが多かつた、厚く感謝する。なほ彦根屏風だけ、御希望の方には筒入送料共壹圓で頒ちます。

◇菊池寬氏は久かたぶりに力作「噂の發生」を寄稿した。又ベルビユツスのゴールキイ訪問記も珍しい寄稿である。

◇非常なる自信を以つて本社より發行する「經濟學全集」は「日本文學全集」豫約募集當時の如く申込者の感激狀山推し、初版、再版賣切の狀盛を現出した。全世界にこれ程の大機構の全集なく、また一般經濟學、新興經濟學を對立せしめての全集も世界で嚆矢。

◇そして本全集第一回發表當時未定であつた第十卷はマルクス經濟學の權威櫛田民藏氏、第三十二卷は日本統計學の最高權威高野岩三郎博士、又別に少壯財政學の權威大內兵衞氏が參加に決定した。これで本全集は世界第一の完璧な全集として新日本の誇の一に數へる名物となつた。民衆は必ずこの全集を備付けることに依つて經濟難突破、生活安定への彼岸へ達し得るであらふ。

◇マーシアル「經濟學原理」も本月で立派に完了。飜譯に於て、頒布狀態に於て會員諸氏の滿足を得ることが出來たのは嬉しい。

◇マルクス、エンゲルス全集第三回配本は少々遲れたが廿七日頃には配本ができる。第四回配本は定期に配本が出來る筈である。

◇土岐哀果、金田一京助氏監輯、吉田孤羊氏編輯として近く「石川啄木」全集が本社より刊行される。原稿は新稿多く從來の全集の二倍ほどの內容がある。倘書翰歌詩等で未發表のものあらば本社吉田宛で御知らせを乞ふ。

◇ゴールギイ全集も近く本社より發行する。

◇本誌九、十兩月號は特別號でしたが、次號から普通號（定價五十錢）に復します。

改造定價

冊數	定價	郵稅
壹冊	五拾錢	參錢
半ヶ年	參圓	郵稅不要
壹ヶ年	六圓	郵稅不要

註文の注意

▲御註文は凡て前金に申受く前金切の時は發送を停止す

▲增大號其他定價變更に依る前金拂込不足の時は御拂込を待つて雜誌を發送す

▲外國よりの御註文は郵稅實費を申受く

▲見本御請求の向は振替又は郵劵にて定價通り御拂込ありたし但し郵劵代用は一割增の事

▲御拂込は振替によるゝを最も便利とす

昭和三年九月十八日　印刷納本
昭和三年十月一日　發行

（八拾錢）
（郵稅四錢）

東京市芝區愛宕下町四ノ六
編輯兼發行人　山本三生
東京市牛込區市谷加賀町一ノ一二
印刷所　秀英舍

發行所
東京芝區愛宕下町四ノ六
改造社
振替東京八四〇二
電話芝(43)一一三一・一一三二・一一三三・一一三四